大沢谷内北遺跡（おおさわやちきた）　第３次調査

－（仮称）国道 403 号小須戸田上バイパス整備工事に伴う
大沢谷内北遺跡第 3 次発掘調査報告書－

２０１０

新 潟 市 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は新潟県新潟市秋葉区横川浜 88 番 1 他に所在する大沢谷内北（おおさわやちきた）遺跡の発掘調査記録である。

2　調査は（仮称）国道 403 号小須戸田上バイパスの整備工事に伴い、新潟市教育委員会（以下、「市教委」という）が調査主体となり、新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター（以下、「市埋蔵文化財センター」という）が補助執行した。

3　平成 19 年度に発掘調査、平成 20 年度から 21 年度に整理作業・報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。

4　出土遺物および発掘調査・整理作業に係る記録類は、一括して市埋蔵文化財センターが保管・管理している。

5　本書の作成は前山精明（市埋蔵文化財センター）・折井敦・伊比博和（株式会社シン技術コンサル）が行い、細野高伯（株式会社シン技術コンサル）の協力を得た。編集は前山・伊比が担当した。

6　自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に分析・執筆を委託し、前山が編集した。

7　杭の年輪年代学的解析を木村勝彦氏・法位光輝氏（福島大学共生システム理工学部）・荒川隆史氏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）に依頼し、玉稿を賜った。

8　執筆は第Ⅳ章３節を折井・伊比、第Ⅴ章２節Ａ（胎土分類を除く）、第Ⅶ章１節・２節Ａ～Ｂ３）を伊比、第Ⅵ章２節～４節をパリノ・サーヴェイ株式会社、第Ⅵ章５節を木村・法位・荒川、これ以外を前山が行った。

9　遺構計測表の作成と遺構図版・遺構写真図版のレイアウトは折井・伊比、遺物観察表の作成と遺物実測図版・写真図版レイアウトは伊比が行った。

10　上層遺跡出土の漆器皿について、春日真実氏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）から御教示を頂いた。

11　第Ⅴ章および第Ⅶ章の執筆にあたり、上野原遺跡の土器を田村浩司氏（三条市市民部生涯学習課）、川船河遺跡の土器を伊藤秀和氏（加茂市教育委員会）、矢津遺跡の土器を宮尾亨氏（新潟県立歴史博物館）の御好意によって実見させていただく機会をえた。

12　本書で用いた写真は、遺跡写真は細野高伯・青木利文（株式会社シン技術コンサル）が撮影し、遺物写真のうち土器・石器は小池利光（株式会社シン技術コンサル）、木製品は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）と前山が撮影した。竪櫛のＸ線写真は財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターに撮影を依頼した。ただし、写真図版１は米軍（国土地理院）、写真図版２は株式会社オリスが撮影したものを使用した。

13　本書は、整理過程において調査所見との齟齬が認められたため、調査所見に再検討を加えた構成となっている。その結果、現地説明会（平成 19 年 11 月 11 日）、新潟県考古学会連絡紙第 75 号（平成 20 年１月 31 日）、平成 19 年度新潟市遺跡発掘調査速報会（平成 20 年２月 23 日）、同年度新潟市文化財年報、第 16 回新潟県遺跡発掘調査報告会（平成 21 年９月６日）、発掘が語る新潟の歴史 2009（平成 22 年１月 30 日）とは異なる遺構の認識が導き出されていることを御断りさせていただく。

14　遺構図のトレースと遺物実測図のトレースの一部、各種図版作成・編集に関しては、株式会社シン技術コンサルがデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。

15　調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。
（所属・敬称略、五十音順）　甘粕　健・荒川隆史・石川智紀・石川日出志・伊藤秀和・小熊博史・春日真実・勝山百合・金子拓男・北村　亮・小島純一・小林達雄・沢田　敦・鈴木俊成・関　雅之・高橋　保・高橋保雄・高濱信行・田中耕作・田村浩司・辻本崇夫・寺﨑裕助・中島栄一・久田正弘・藤巻正信・前原　豊・増子正三・宮尾　亨・宮田志保・渡邊裕之
加茂市民俗資料館・三条市市民部生涯学習課・新潟県教育庁文化行政課・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・
新潟県立歴史博物館

凡　　例

1　本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。

2　本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏７度 44 分である。掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。

3　本書で示す標高値はすべて水準よりも 0.265m 高い値となっている。詳細は第Ⅲ章第２節Ａ項３）に記した。

4　本文中の注は各章の末尾に記した。引用･参考文献は著者と発行年（西暦）を〔　〕中に示し、巻末に一括して掲載した。

5　遺構番号は現場で付したものを用いた。番号は遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。

6　下層遺構（縄文時代）個別実測図版（図版 18 ～ 33）の掲載順は基本的にグリッド順、北東方向からとした。ただし土坑の分布にはまとまりが認められるため図版８・９に提示した土坑群に関しては、１K-9・10F グリッド、1K-9・10G グリッド（図版８）、1K-9H・I グリッド、1K-10H・I グリッド（図版９）の単位で掲載している。本文及び遺構計測表の記載順、遺構写真図版の掲載順（写真図版６～ 26）も同じである。

7　遺構個別実測図の縮尺は基本的に 40 分の１である。それ以外については個々に示してある。

8　遺構図版に挿入している遺物実測図の縮尺は任意である。

9　遺物実測図版と遺物写真図版の縮尺は同一である。

10　土層の土色観察は『新版　標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局 1967〕を用いて、その記号を本書に掲載した。

11　遺物の注記は調査年度「07」、大沢谷内北遺跡の略記号を「OSYK」とし、出土地点や層位を続けて記した。

12　遺物番号は種別（土器・石器・木製品）ごとに通し番号とし、本文及び観察表・写真図版の番号は同一番号とした。

13　遺構個別図版の断面図もしくはエレベーション図に表示した遺物点は、すべて投影によるものである。

目　次

第Ⅰ章　序　　章

第１節　遺 跡 概 観 ……1
第２節　発掘調査に至る経緯 ……1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境……2
A　新 津 丘 陵 ……2
B　山 麓 低 地 ……4
第２節　周辺の遺跡……5
A　周辺の縄文時代遺跡……5
B　新津丘陵周辺における縄文時代の沖積地遺跡……7
C　越後平野周辺の縄文時代晩期中葉遺跡 ……8
D　弥生時代以降の遺跡……11
第３節　歴史的環境……13
A　生 業 活 動 ……13
B　石 器 組 成 ……13
C　石材の流通……15

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　試掘・確認調査 ……16
A　第１次調査……16
B　第２次調査……16
第２節　発掘調査（第３次調査）……16
A　調 査 方 法 ……16
1）現　　況……16　　2）グリッドの設定 ……16
3）遺跡の標高値について ……18　　4）地区の呼称 ……18
5）調 査 方 法 ……18
B　調 査 経 過 ……19
C　調 査 体 制 ……20
第３節　整理作業……21
A　整 理 方 法 ……21
1）遺　　物……21　　2）遺　　構……21
B　整 理 経 過 ……21
C　整 理 体 制 ……22

第Ⅳ章　遺　　跡

第１節　概　　要……23

第２節　微地形と層序……24
第３節　遺　　構……26
A　遺構の概要……26
B　遺 構 各 説……27
1）下層（縄文時代）の遺構……27
土坑（SK）……27　焼土遺構（SX）……49
土 器 集 中……49　堅果類集中……50
杭（Pit）……50
2）上層の遺構……52
土坑（SK）……52　井戸（SE）……53
杭（Pit）……53

第Ⅴ章　遺　　物

第１節　概　　要……54
第２節　下層出土の遺物……55
A　縄 文 土 器……55
1）概　　要……55　2）記述の方法と観察表……55
3）分　　類……56　4）出土土器各説……60
B　石器と搬入礫……72
1）石　　鏃……72　2）石鏃未成品……73
3）剥　　片……73　4）磨石・敲石類……73
5）石　　皿……74　6）自　然　礫……74
7）破　損　礫……75
C　漆　　器……76
D　木製品と加工木……77
1）櫂……77　2）割　　材……77
3）伐　採　木……78　4）杭……78
E　大型可食種子……79
1）ク　ル　ミ……79　2）ク　　リ……82
3）ヒ　　シ……82　4）ハ　　ス……83
第３節　上層出土の遺物……83
A　漆　　器……83
B　杭……83
C　石　　器……83
1）石　　鏃……83　2）磨石・敲石類……83

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　微細動植物遺体……84
第２節　放射性炭素年代測定……86
A　分 析 試 料……86
B　分 析 方 法……86

C 結　　果……87
D 考　　察……88
第３節　堆積環境の復元……88
A 分析試料……88
B 分析方法……89
C 結　　果……89
D 考　　察……92
第４節　古植生の復元……93
A 分析試料……93
B 分析方法……93
1）花粉分析……93　2）植物珪酸体分析……93
3）種実同定……94
C 結　　果……94
1）花粉分析……94　2）植物珪酸体分析……94
3）種実同定……94
D 考　　察……95
1）周辺古植生……95　2）種　　実……97
第５節　木材資源の利用（樹種同定）……98
A 分析試料……98
B 分析方法……98
C 結　　果……98
D 考　　察……99
第６節　石材の利用……101
A 分析試料……101
B 分析方法……101
1）黒曜石成分分析……101　2）石器と搬入礫……102
C 結　　果……102
1）黒　曜　石……102　2）石器と搬入礫……102
D 考　　察……103
1）黒曜石の原産地推定……103　2）石器類および搬入礫の由来……103
第７節　杭の年輪年代学的解析……105
A 方　　法……105
1）試料の切断……105　2）年輪の計測……105
3）年輪幅の計測……105　4）計測データの検証と個体間の年代関係の推定……105
5）伐採季節の推定……105
B 結　　果……106
1）年輪計測試料の概要……106　2）成長パタン……106
3）年輪データの検証結果……106　4）トネリコ属杭間の年代関係……106
5）伐採季節の推定……106
C 考　　察……108

1）成長と生育環境 …… 108　　2）年輪年代 …… 108
3）伐採季節 …… 108

第Ⅶ章　総　　括

第１節　下層の遺構について …… 110
A　土坑（SK）群に関する検討 …… 110
1）杭（Pit）と遺物の分布状況からの考察 …… 110
2）土器接合・同一個体関係からの考察 …… 112
B　杭（Pit） …… 113
C　焼土遺構（SX） …… 113
D　土器集中 …… 115
E　遺構の機能について …… 115
第２節　縄文土器について …… 115
A　編年的位置づけ …… 115
B　粗製深鉢の分析 …… 118
1）類別組成 …… 118　　2）地文について …… 120
3）周辺遺跡との比較と粗製深鉢の変遷について …… 120
4）胎土について …… 121
第３節　石器群の位置づけ …… 123
A　石器組成 …… 123
1）A 群石器 …… 123　　2）B 群石器 …… 124
3）C 群石器 …… 124
B　剥片石器の位置づけ …… 125
第４節　食料残渣から見た生業活動 …… 125
A　動物食の利用 …… 125
B　植物食の利用 …… 126
第５節　樹木利用 …… 126
第６節　縄文時代の大沢谷内北遺跡 …… 128
引用・参考文献 …… 131
別　　表 …… 137
報告書抄録・奥付 …… 巻末

挿図目次

第１図　大沢谷内北遺跡周辺の地形分類図（1/100,000） …… 3
第２図　遺跡周辺の地形と層序（1/50,000） …… 4
第３図　大沢谷内北遺跡周辺の縄文時代遺跡分布図（1/100,000） …… 6
第４図　越後平野周辺における縄文時代晩期中葉の遺跡分布図（1/500,000） …… 9
第５図　大沢谷内北遺跡周辺の弥生時代以降の遺跡分布図（1/20,000） …… 12
第６図　越後平野周辺における縄文時代の石器と食料残渣 …… 14
第７図　大沢谷内北遺跡試掘調査結果概要（1/2,500・1/4,500） …… 17
第８図　杭・土坑の分布と遺物の分布（1/800） … 26

第 9 図　大沢谷内北遺跡縄文土器分類図①…… 58
第 10 図　大沢谷内北遺跡縄文土器分類図②…… 59
第 11 図　晩期遺跡の石鏃サイズ…… 73
第 12 図　杭分類模式図…… 79
第 13 図　下層出土の可食種子…… 80
第 14 図　クルミと微細炭化物の分布…… 81
第 15 図　クルミの長幅分布図…… 82
第 16 図　越後平野周辺におけるクルミサイズの変遷…… 82
第 17 図　土壌サンプル採取地と検出資料…… 85
第 18 図　浅鉢・鉢における炭化物付着状況…… 88
第 19 図　珪藻化石…… 90
第 20 図　主要珪藻化石群集の層位分布…… 90
第 21 図　花粉化石…… 94
第 22 図　花粉化石群集の層位分布…… 94
第 23 図　植物珪酸体…… 96
第 24 図　植物珪酸体含量…… 96
第 25 図　種実遺体…… 97
第 26 図　木材…… 100
第 27 図　炭化材…… 100
第 28 図　Fe-Rb 判別図 …… 102
第 29 図　Sr-Zr 判別図…… 102
第 30 図　搬入礫の石材組成…… 103
第 31 図　搬入礫の起源地質別組成…… 103
第 32 図　新潟県の地質概略図…… 104
第 33 図　大沢谷内北遺跡出土杭の成長曲線…… 107
第 34 図　相対的な年代関係が決められたトネリコ属 2 個体の年輪幅変動パタン …… 107
第35図　大沢谷内北遺跡出土杭の表層部分木材切片 …… 109
第 36 図　再検討する土坑群の範囲 …… 110
第 37 図　杭列の配置と遺物分布状況…… 114
第 38 図　大沢谷内北遺跡土器器種組成・粗製深鉢類別組成・地文組成比率図…… 119
第 39 図　越後平野周辺における縄文時代晩期中葉遺跡出土土器の胎土構成と川砂組成‥ 121
第 40 図　東日本における縄文時代晩期遺跡の石皿、磨石・敲石類数量比…… 124
第 41 図　出土樹木・炭化材の樹種と花粉構成‥ 127
第 42 図　阿賀野川河畔から見た越後平野…… 130

表　目　次

第 1 表　下層出土石器・搬入礫層位別一覧…… 72
第 2 表　下層出土クルミ一覧…… 80
第 3 表　土壌水洗抽出資料一覧…… 84
第 4 表　放射性炭素年代測定結果…… 87
第 5 表　暦年較正結果…… 87
第 6 表　花粉分析結果…… 95
第 7 表　植物珪酸体含量…… 96
第 8 表　種実同定結果…… 98
第 9 表　樹種同定結果 …… 99
第 10 表　炭化材の樹種同定結果…… 99
第 11 表　黒曜石元素分析及び元素分析結果…… 102
第 12 表　種別石材組成…… 103
第 13 表　計測対象とした杭の概要…… 107
第 14 表　枯死季節の検討結果…… 109
第 15 表　越後平野周辺における縄文時代晩期遺跡出土の石器…… 123

別 表 目 次

別表 1　遺構計測表…… 137
別表 2　縄文土器観察表…… 144
別表 3　石器・礫観察表…… 148
別表 4　木製品・漆製品観察表…… 148

図 版 目 次

図版 1　周辺の旧地形図（1/50,000）
図版 2　グリッド設定図①（1/10,000）
図版 3　グリッド設定図②（1/4,000）
図版 4　グリッド設定図③（1/600）

図版５　遺構全体図・地区名称　（1/400）
図版６　遺構平面分割図１（1/100）
図版７　遺構平面分割図２（1/100）
図版８　遺構平面分割図３（1/100）
図版９　遺構平面分割図４（1/100）
図版 10　遺構平面分割図５（1/100）
図版 11　遺構平面分割図６（1/100）
図版 12　遺構平面分割図７（1/100）
図版 13　遺構平面分割図８（1/100）
図版 14　基本土層分布図（1/350）
図版 15　基本層序図１（1/40）
図版 16　基本層序図２（1/40）
図版 17　基本層序図３（1/40）
図版 18　遺構個別実測図１　土坑（１）（1/40）
図版 19　遺構個別実測図２　土坑（２）（1/40）
図版 20　遺構個別実測図３　土坑（３）（1/40）
図版 21　遺構個別実測図４　土坑（４）（1/40）
図版 22　遺構個別実測図５　土坑（５）（1/40）
図版 23　遺構個別実測図６　土坑（６）（1/40）
図版 24　遺構個別実測図７　土坑（７）（1/40）
図版 25　遺構個別実測図８　土坑（８）（1/40）
図版 26　遺構個別実測図９　土坑（９）（1/40）
図版 27　遺構個別実測図 10　土坑（10）（1/40）
図版 28　遺構個別実測図 11　土坑（11）（1/40）
図版 29　遺構個別実測図 12　土坑（12）（1/40）
図版 30　遺構個別実測図 13　土坑（13）（1/40）
図版 31　遺構個別実測図 14　土坑（14）･焼土遺構･土器集中（１）（1/40）
図版 32　遺構個別実測図 15　土器集中（２）･杭（１）（1/40）
図版 33　遺構個別実測図 16　杭（２）（1/40）
図版 34　上層遺構全体図　（1/200,1/800）
図版 35　上層遺構個別実測図　土坑･井戸･杭（1/40）
図版 36　縄文土器出土分布図（1/400）
図版 37　石器・礫出土分布図（1/400）
図版 38　木製品・漆製品出土分布図（1/400）
図版 39　遺構内出土土器接合・同一個体関係図①
図版 40　遺構内出土土器接合・同一個体関係図②
図版 41　上位包含層（Ⅴc・Ⅴd・Ⅵa1 層）出土土器接合・同一個体関係図
図版 42　下位包含層（Ⅵa2・Ⅵa3・Ⅵb’・Ⅵb層）出土土器接合・同一個体関係図
図版 43　杭の分布と遺物の平面・垂直分布状況図
図版 44　垂直分布からみた土器出土状況と接合・同一個体関係図
図版 45　出土遺物実測図１　縄文土器（１）
図版 46　出土遺物実測図２　縄文土器（２）
図版 47　出土遺物実測図３　縄文土器（３）
図版 48　出土遺物実測図４　縄文土器（４）
図版 49　出土遺物実測図５　縄文土器（５）
図版 50　出土遺物実測図６　縄文土器（６）
図版 51　出土遺物実測図７　縄文土器（７）
図版 52　出土遺物実測図８　縄文土器（８）
図版 53　出土遺物実測図９　縄文土器（９）
図版 54　出土遺物実測図 10　縄文土器（10）
図版 55　出土遺物実測図 11　縄文土器（11）
図版 56　出土遺物実測図 12　縄文土器（12）
図版 57　出土遺物実測図 13　縄文土器（13）
図版 58　出土遺物実測図 14　縄文土器（14）
図版 59　出土遺物実測図 15　縄文土器（15）
図版 60　出土遺物実測図 16　縄文土器（16）
図版 61　出土遺物実測図 17　縄文土器（17）
図版 62　出土遺物実測図 18　縄文土器（18）
図版 63　出土遺物実測図 19　縄文土器（19）
図版 64　出土遺物実測図 20　石器・礫（１）
図版 65　出土遺物実測図 21　石器・礫（２）
図版 66　出土遺物実測図 22　石器・礫（３）
図版 67　出土遺物実測図 23　石器・礫（４）
図版 68　出土遺物実測図 24　石器・礫（５）
図版 69　出土遺物実測図 25　石器・礫（６）
図版 70　出土遺物実測図 26　漆製品（１）・木製品（１）
図版 71　出土遺物実測図 27　木製品（２）
図版 72　出土遺物実測図 28　木製品（３）
図版 73　出土遺物実測図 29　木製品（４）
図版 74　出土遺物実測図 30　木製品（５）
図版 75　出土遺物実測図 31　木製品（６）
図版 76　出土遺物実測図 32　木製品（７）
図版 77　出土遺物実測図 33　木製品（８）
図版 78　出土遺物実測図 34　木製品（９）・漆製品（２）

写真図版目次

写真図版１　大沢谷内北遺跡周辺空中写真１
写真図版２　大沢谷内北遺跡周辺空中写真２
　　大沢谷内北遺跡周辺空中写真３
写真図版３　大沢谷内北遺跡全景空中写真１
　　大沢谷内北遺跡全景空中写真２
写真図版４　大沢谷内北遺跡全景空中写真３
　　杭の配置と土坑群集部
写真図版５　基本層序１区拡張区・１区・３区
写真図版６　SK45・48・50・52・53・154・
　　157・253（１）
写真図版７　SK57（１）・61（１）・73・129・
　　199・253（２）、Pit236（１）
写真図版８　SK57（２）・61（２）・63 ～ 65・
　　76（１）・149・150
写真図版９　SK71・90・167・205・207･242
写真図版 10　SK62・70・76（２）・126・245
写真図版 11　SK102・201・202・211（１）・317
写真図版 12　SK13・14・103・118・121・278
写真図版 13　SK15・151・152
写真図版 14　SK29・153・287・288・301・311
写真図版 15　SK256・258・289・290
写真図版 16　SK176・225・257・286
写真図版 17　SK170・190（１）・267・272
写真図版 18　SK190（２）・191・221（１）・227
写真図版 19　SK4（１）・182・193・221（２）
写真図版 20　SK4（２）・293・295
写真図版 21　SX5・123・124、竪櫛・櫂・壺形土器
　　出土状況
写真図版 22　１区北東部遺物出土状況、土器集中 79
　　（１）・80・97・111
写真図版 23　土器集中 79（２）・81・112、Pit144
　　・145・316・319・320
写真図版 24　Pit186・187・188・189・194・
　　298・306・313
写真図版25　SK211（２）･299、Pit163･195･212
　　・236（２）･252・284・300・322
写真図版 26　SK297、Pit148・292・294・296・
　　305・314・315・323
写真図版 27　SK1001・1003・1006、SE1004・
　　1005、Pit1007・1011
写真図版 28　縄文土器（１）
写真図版 29　縄文土器（２）
写真図版 30　縄文土器（３）
写真図版 31　縄文土器（４）
写真図版 32　縄文土器（５）
写真図版 33　縄文土器（６）
写真図版 34　縄文土器（７）
写真図版 35　縄文土器（８）
写真図版 36　縄文土器（９）
写真図版 37　縄文土器（10）
写真図版 38　縄文土器（11）
写真図版 39　縄文土器（12）
写真図版 40　縄文土器（13）
写真図版 41　縄文土器（14）
写真図版 42　縄文土器胎土
写真図版 43　石器・礫（１）
写真図版 44　石器・礫（２）
写真図版 45　石器・礫（３）
写真図版 46　石器・礫（４）
写真図版 47　石器・礫（５）
写真図版 48　漆製品（１）（X 線写真）・木製品（１）
写真図版 49　木製品（２）
写真図版 50　木製品（３）
写真図版 51　木製品（４）
写真図版 52　木製品（５）
写真図版 53　木製品（６）
写真図版 54　木製品（７）・漆製品（２）

第Ⅰ章　序　　章

第１節　遺　跡　概　観

大沢谷内北遺跡は、新潟市の東端付近、秋葉区横川浜地内にある。新津丘陵の山裾から西約１km の沖積地に所在し、地表面での標高は３m ほどを測るにすぎない。付近一帯は低湿な環境にあり、周辺には「大日潟」とよばれる潟が近世まで存在した。遺跡はこの潟底堆積物にあたる未分解有機物層（いわゆるガツボ層）の下位から平成 16 年に発見された。同層最下部の粘土層に中世遺跡（上層）、その下部に堆積する粘土層やシルト層に縄文時代晩期中葉終末段階の遺跡（下層）が形成されており、遺構と遺物の両面において中心は後者にある。

南方 100m たらずに隣接する大沢谷内遺跡では、北部（１～４区）に縄文時代晩期中葉後半、南部（５・６区）に縄文時代晩期終末の遺跡が営まれる〔前山 2010〕。本遺跡と概ね補完的な関係にあり、同一遺跡群と考えるのが妥当である。

第２節　発掘調査に至る経緯

（仮称）国道 403 号線小須戸・田上バイパス（以下「小須戸バイパス」とする）の整備工事計画にともない、中蒲原郡小須戸町横川浜地内から天ヶ沢地内に至る２km あまりの区間の用地取得が平成 13 年～ 15 年に行なわれた。予定地は新津丘陵から西約１km の沖積低地に位置し、丘陵と平行する幅員 50m ほどの直線区間である。

上記予定地の周辺には、周知の遺跡として大沢谷内遺跡があり、小須戸町教育委員会による小規模な発掘調査が昭和 63 年から平成元年にかけて行なわれていた。小須戸バイパス建設予定地の東 500m に併走する広域農道の建設に伴うもので、奈良時代から平安時代にかけての集落跡の一部が確認された調査である〔川上 1989〕。

平成 16 年 11 月 29 日から翌 17 年１月６日にかけて、小須戸町教育委員会は新潟県教育委員会の指導のもとに小須戸バイパス建設予定地全域を対象とした試掘・確認調査を実施した。計 99 箇所のトレンチを設定し、遺跡の範囲や埋没深度を確認したものである。調査面積は 2,136㎡におよぶ。この調査では 24 箇所のトレンチで遺構や遺物が確認され、南部に位置する大沢谷内遺跡の発掘調査が必要と判断された。一方、大沢谷内遺跡の北に隣接する２箇所のトレンチでも中世とみられる遺構と少量の縄文土器が発見され、平成 17 年には大沢谷内北遺跡として新たに登録された。しかし、この時点においては遺構や遺物の密度が低いことから、工事立会によって対応すべき遺跡である、との所見が示されていた（第一次調査）。

平成 17 年３月の市町村合併に伴い、調査の主体は新潟市教育委員会に移行した。上記の結果を受けて市埋蔵文化財センターは、平成 17 年８月７日に大沢谷内遺跡の発掘調査に着手した。当初遺跡は古代から中世の集落跡と見られていたが、縄文時代の遺物が下層から出土することが判明し、隣接する大沢谷内北遺跡のより詳細な把握を要する状況となった。そのため、同年 10 月 17 日・18 日に７箇所のトレンチを設定し再調査を実施したところ、遺存状態が良好な土器が出土し（第７図）、遺構が存在する可能性もあるところから発掘調査が必要と判断されるに至った（第二次調査）。

その後、工事を主管する新潟市土木部東部地域土木事務所との協議の結果、遺跡の広がりが推定される 2,040㎡で本調査を行うことが合意された。それを受けて新潟市教育委員会では、文化財保護法第 99 条による発掘調査の通知を平成 19 年５月 29 日付け新歴第 5039 号の６にて新潟県教育委員会に提出し、同年６月に大沢谷内北遺跡の発掘調査に着手することになった（本発掘調査）。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

越後平野の東縁に連なる東山丘陵の山裾から西約 1km の沖積地に大沢谷内北遺跡はある。遺跡の前面には広大な平野が広がり、日本海からは直線にして 19km 内陸に位置する。遺跡付近の現在の年平均気温は 13℃弱。冬～春には丘陵の西縁に沿って吹く南南西の風、夏～秋には東南東の風が卓越する。１日あたりの降水量は、梅雨や台風に伴い集中豪雨が発生する６月～８月にピークを記録する。冬季の積雪量が１m を越えることはほとんどなく、新潟県内では小雪地帯にあたる。本遺跡中心半径 10km 圏内の地形を第１図に示す。この範囲の地形は丘陵・山地と低地に大別でき、占有面積の割合は前者２対後者８である。

A　新　津　丘　陵

大沢谷内北遺跡の背後に連なる山地帯は、東山丘陵の北端部に位置する。このうち北端から加茂川までの南北 16km の間を一般には新津丘陵と呼び、その大半が本遺跡中心半径 10km 圏内に含まれる。丘陵幅は南部で６～ 7km を測るが、中央部に位置する菩提寺山付近で幅を狭め、それ以北は４km ほどとなる。

新津丘陵の地形は、金比羅山（139m）を境に南北で特徴を異にする。南部では中～大起伏山地からなる「護摩堂山地」が展開し、加茂川までの間に標高 200m 以上の峰が点在する。新津丘陵中央部の菩提寺山（248m）・高立山（276m）・護摩堂山（268m）、北部の猿毛岳（326m）が代表的なものである。なかでも中央三峰の山並みは遠隔地からの眺望に優れ、越後平野のランドマークとも言える景観を備えている（第 42 図）。これに対し、金比羅山以北は標高 100m 以下で起伏に乏しい地形が展開する。その高さは北北東へ向かって次第に低くなり、丘陵北端の秋葉山では 70 ～ 80m ほどになる。

山裾には、「新津丘陵・護摩堂山地縁辺台地」と呼ばれる段丘が形成される。沖積面との比高 40m ～ 50m の高位段丘、30m ～ 35m の中位段丘、20m ～ 25m の下位段丘に区分され、越後平野に面した西麓側から北端部を中心に分布する。いずれも規模は小さく、連続性に欠ける点が特徴である。新津丘陵は川や沢の浸食により多くの谷を形成している。しかし、制約された面積から大規模な河川は存在しておらず、山裾扇状地も形成されていない。

後述のように、本遺跡から出土した礫石器や搬入礫の中には、新津丘陵東麓に流れる早出川の河床から採取したと考えられるものが少なからず含まれている。新津丘陵にはいくつかの峠道があり、石材の搬入ルートを考えるうえで留意すべきものがある。本遺跡に近い矢代田地区では、かつて東麓の橋田地区との間に緊密な婚姻関係が結ばれていた。往来には金比羅山北方を通る「仏路越え」が利用され、その道程は 4km あまりであった〔斉藤・山名 1983〕。第１図中の破線は、明治 44（1911）年測図に示された「仏路越え」である。

新津丘陵は石油の産出地として知られる。所々の山中で草水（石油）の出る所を発見した真柄仁兵衛が、慶長 18（1613）年に新発田藩に採掘のための普請を願出て許可を受けており〔佐藤 1983〕、その口上書に天ヶ沢の地名も記されている。本遺跡の東 1.5km たらずの山裾部において現在でも原油の湧出を見ることができる。後述のように、南に隣接する大沢谷内遺跡３～４区からは、多数の天然アスファルト塊が出土している。アスファルトは原油の揮発性成分が失われ固形化したもので、至近距離にある石油産出地から採取した可能性がきわめて高い。

円は大沢谷内北遺跡中心半径５km・10 km　破線は「仏路越え」ルート

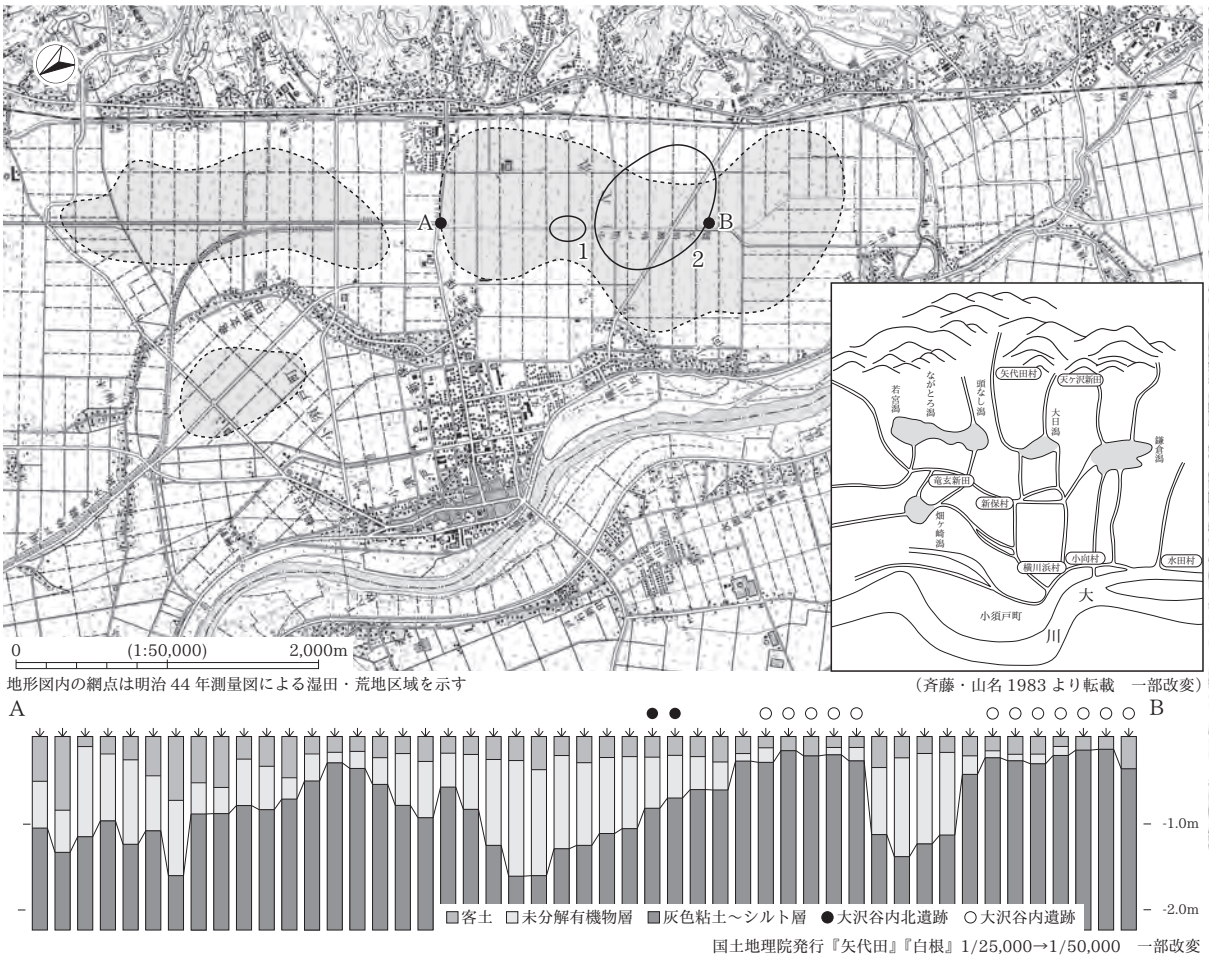
新潟県『土地分類基本調査　新潟・新津』1975・1979 より作成

第１図　大沢谷内北遺跡周辺の地形分類図

B 山 麓 低 地

本遺跡中心半径 10km 圏内には多くの水系が存在する。主要な河川としては、新津丘陵西麓の信濃川・中ノ口川、東麓の能代川があり、北端には阿賀野川、東北部には早出川、南端には加茂川の一部が含まれる。これら河川の流域には、「信濃川左岸・中ノ口川低地」、「信濃川右岸・能代川最下流低地」、「阿賀野川低地」、「早出川・能代川低地」が形成され、大沢谷内北遺跡は「信濃川右岸・能代川最下流低地」の一角に位置する。越後平野における現在の地表面は、ヴュルム氷期に存在した「古白根湖」の周辺を中心に沈降している。そのため標高５m ラインが新津丘陵西麓線の間近までおよび、本遺跡付近の標高は３m を測るにすぎない。西約１km に流れる信濃川は、歴史的に見ると流路を大きく変化させている。ヴュルム氷期には弥彦・角田山麓の東麓に「古信濃川」が流れ〔小林巌ほか 2002〕、縄文時代中期には西蒲区西側地内に河口が存在したと推定されている〔卜部・高濱 2002〕。その後流路が二つに分かれ、近世初期には現在地付近に「信濃東川」が流れていた〔鈴木郁 1989〕。

新津丘陵西麓の沖積地には、数多くの潟がかつて存在した。第２図右は、本遺跡周辺を描いた元禄年間（1680 ～ 1709 年）の絵図（新発田市立図書館蔵、以下「元禄絵図」とする）を簡略化したもので〔斎藤・山名 1983〕、新津丘陵と信濃川にはさまれた区域に潟が点在する様子がうかがえる。同図に示した網点は明治 44 年測量図に表記された湿田・湿地の範囲を表したものである。両図を比較すれば明らかなように、「元禄絵図」に描かれる「畑ヶ崎潟」・「若宮潟」・「ながとろ潟」・「頭なし潟」・「大日潟」・「鎌倉潟」が湿田・荒地の範囲に概ね反映されており、かつての潟の広がりをおおよそ知ることができる。図版１には、図幅内に分布する沖積地内の縄文時代遺跡をプロットした。本遺跡は、元禄絵図に「長さ百三十間 横四十三間 深さ二尺」と記された「大日潟」のエリア内に位置し、他の遺跡についても近世当時の微高地の広がりと必ずしも対応しないことがわかる。



地形図内の網点は明治 44 年測量図による湿田・荒地区域を示す

（斎藤・山名 1983 より転載　一部改変）

国土地理院発行『矢代田』『白根』1/25,000→1/50,000　一部改変

第２図　遺跡周辺の地形と層序（１：大沢谷内北遺跡・２：大沢谷内遺跡）

第２図下は小須戸バイパス建設予定地において全長２km あまりの間で実施した試掘・確認調査時の層序を模式的に示したものである。大沢谷内北遺跡および大沢谷内遺跡で得られた発掘所見によれば、表土下に堆積する未分解有機物層（いわゆるガツボ層）は、主として中世以降の堆積層であることが判明している。同層下面の地形が縄文時代当時の状況を正しく反映しているかどうかは不明であるが、いずれにしても越後平野の埋没地形が起伏に富んだ複雑な様相を呈する状況が理解できる。

第２節　周 辺 の 遺 跡

A　周辺の縄文時代遺跡

本遺跡中心半径 10km 圏内に分布する縄文時代遺跡を第３図に示す。この範囲は新潟市秋葉区・同市南区・中蒲原郡田上町・五泉市・加茂市にまたがり、現時点において 58 箇所の縄文時代遺跡が知られている。後述のように、区域内には沖積地に所在する遺跡が数多く確認されているが、それらは深層に埋没して発見が容易でない場合が多い。新津丘陵では、遺跡立地に適した山裾部で宅地化が進行するとともに、丘陵高所の大半が山林で覆われている。したがって、このエリアにおける遺跡分布のあり方を考える場合、未発見遺跡が少なからず存在すると予想されることを念頭に置く必要がある。

本遺跡中心半径 10km 圏内の遺跡を立地に基づき区分すると、Ⅰ：越後平野に面した新津丘陵西麓、Ⅱ：能代川ぞいの新津丘陵北麓～東麓、Ⅲ：標高 100m 以上の山地、Ⅳ：沖積地、に大別できる。遺跡数の内訳は、Ⅰが 23 箇所（39.7％）、Ⅱが 18 箇所（31.0％）、Ⅲが５箇所（8.6％）、Ⅳが 12 箇所（20.7％）を数え、全体の 79.3 パーセントが丘陵・台地・山地上、20.7％が低地に立地する。

Ⅰ・Ⅱについては、さらに次のような細分が可能である。前者はⅠａ：丘陵裾部や台地上（10 箇所）、Ⅰｂ：開析谷に面した丘陵奥部（８箇所）、Ⅰｃ：標高 40m ～ 70m 台の高所（５箇所）、後者はⅡａ：能代川に面した丘陵裾部や台地上（13 箇所）、Ⅱｂ：開析谷に面した丘陵奥部（５箇所）に分けられる。

58 遺跡の中で、所属時期がある程度明らかなものは本遺跡を含め 37 箇所ある。大別６期区分ごとにみた遺跡数は、草創期：１・早期：０・前期：６・中期：19・後期：23・晩期：11 となる。信濃川中流域などの内陸部に顕著な中期遺跡への偏在化はみられず、後期～晩期遺跡の割合が相対的に高い点に特徴がある。遺跡数の増減や立地・規模に基づきエリア内における遺跡群の変遷を概観すると、次のような段階が設定できる。

Ⅰ期：草創期・前期前葉

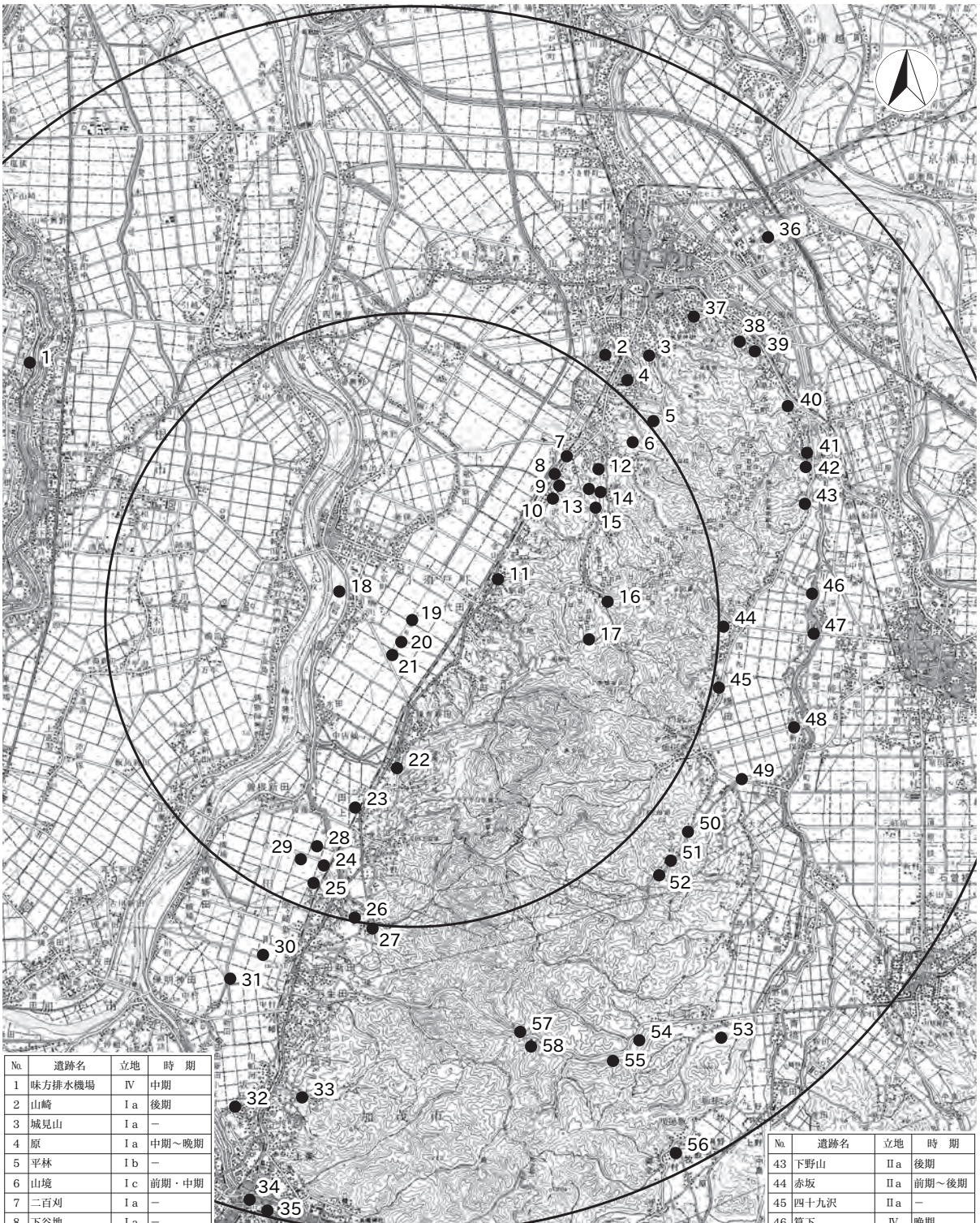
丘陵裾部や低位台地に小規模遺跡１～３箇所が点在する段階である。草創期の愛宕澤遺跡（Ⅱａ）〔立木ほか 2004〕と前期前葉の田上町古屋敷遺跡（Ⅰａ）〔中島ほか 1976〕・居村Ｅ遺跡（Ⅰｂ）〔渡邊朋ほか 1997〕で発掘調査が行われ、愛宕澤遺跡で局部磨製石斧など石斧６点を主体とする遺物分布ブロック、古屋敷遺跡・居村Ｅ遺跡では少量の土器が確認された。前期前葉の遺跡が低域部に集中する現象は、越後平野周辺における一般的な特徴と考えられる。

Ⅱ期：前期終末

遺跡数は４箇所にとどまるが、前期終末になると丘陵高所や山地上に分布域が拡大する。草水町２丁目窯跡遺跡（Ⅱａ）の発掘調査に際し、比較的まとまった量の土器や石器が出土した。遺跡立地に見られる同様の動きは、角田山麓や阿賀野川以北の新発田市域〔田中ほか 2003〕・村上市域〔田辺 2008〕でも確認されている。

Ⅲ期：中期前葉～後期前葉

中期前葉に至り遺跡数が増加し、丘陵裾部や低位台地に遺物多出遺跡が現れるようになる。山地上の遺跡がひき続き存在するとともに、沖積地に遺跡が出現する点がこの時期の大きな特徴である。田上町古屋敷遺跡（Ⅰａ）〔中島ほか 1976〕・加茂市陣ヶ峰北遺跡（Ⅰａ）〔伊藤 1997〕・居村Ｅ遺跡（Ⅰｂ）〔渡邊朋ほか 1997〕・加茂市役所遺跡（Ⅰｂ）〔伊藤 1995〕・古津八幡山遺跡（Ⅰｃ）〔渡邊・立木ほか 2001〕・平遺跡（Ⅱａ）〔川上 1982〕・五泉市巳ノ明遺跡（Ⅳ）



No.	遺跡名	立地	時　期
1	味方排水機場	Ⅳ	中期
2	山崎	Ⅰa	後期
3	城見山	Ⅰa	－
4	原	Ⅰa	中期～晩期
5	平林	Ⅰb	－
6	山境	Ⅰc	前期・中期
7	二百刈	Ⅰa	－
8	下谷地	Ⅰa	－
9	烏撃場	Ⅰa	中期・後期
10	神田	Ⅰa	－
11	三沢原	Ⅰa	前期
12	高矢A	Ⅰb	後期
13	古津八幡山	Ⅰc	後期
14	埋葬地	Ⅰb	－
15	居村E	Ⅰb	前期・後期
16	十ヶ沢	Ⅰb	後期
17	坪ヶ入	Ⅲ	－
18	横川浜堤外地	Ⅳ	中期
19	大沢谷内北	Ⅳ	晩期
20	大沢谷内1～4区	Ⅳ	晩期

No.	遺跡名	立地	時　期
21	大沢谷内5・6区	Ⅳ	晩期
22	五社神社	Ⅰa	後期
23	向屋敷	Ⅰa	－
24	古屋敷	Ⅰa	前期・中期
25	新川	Ⅰa	－
26	塚野	Ⅰb	中期～晩期
27	川の下	Ⅰb	後期
28	糖吐	Ⅳ	－
29	三波	Ⅳ	－
30	半ノ木	Ⅳ	－
31	保明浦	Ⅳ	晩期

No.	遺跡名	立地	時　期
32	陣ヶ峰北	Ⅰa	中期・後期
33	川船河	Ⅰb	中期～晩期
34	加茂市役所	Ⅰb	中期・後期
35	遊覧場	Ⅰb	－
36	大野中	Ⅳ	中期・後期
37	秋葉	Ⅱa	中期～晩期
38	草水町2丁目窯跡	Ⅱa	前期
39	愛宕澤	Ⅱa	草創期
40	居平	Ⅱa	－
41	平	Ⅱa	中期・後期
42	小実山	Ⅱa	中期～晩期

No.	遺跡名	立地	時　期
43	下野山	Ⅱa	後期
44	赤坂	Ⅱa	前期～後期
45	四十九沢	Ⅱa	－
46	筧下	Ⅳ	晩期
47	巳ノ明・新田	Ⅳ	中期～晩期
48	五百地	Ⅳ	－
49	南谷地西	Ⅱa	－
50	八幡	Ⅱb	－
51	八幡手	Ⅱb	後期
52	宮古	Ⅱb	中期
53	羽場山	Ⅱb	－
54	刈羽	Ⅱb	－
55	カイガ沢	Ⅱb	－
56	牧	Ⅱa	中期～晩期
57	大沢峠	Ⅲ	中期
58	大沢洞穴	Ⅲ	後期

円は大沢谷内北遺跡中心半径５km・10 km

国土地理院発行『新津』『加茂』1/50,000→1/100,000　一部改変

第３図　大沢谷内北遺跡周辺の縄文時代遺跡分布図

〔山崎・草間・田村・金内ほか2004〕・五泉市新田遺跡（Ⅳ）〔山崎・草間・田村・土2004〕で発掘調査が行われており、台地上の平遺跡から後期前葉の竪穴住居1軒、低地の巳ノ明遺跡からはそれと同時期の住居址状遺構が確認された。

細別時期ごとにみた遺跡数は、後期前葉にピークを記録する。本エリアと同様の増減パターンを認める空間は、中越から下越南部の海岸・平野部と佐渡を中心に分布する〔前山1994〕。

Ⅳ期：後期中葉～晩期前葉

後期中葉になると遺跡数は減少に転じ、遺物量も激減する。以後晩期前葉までの遺跡は丘陵裾部や台地上に3箇所、沖積地に1箇所存在するだけとなる。

田上町川船河遺跡はこの時期の拠点集落とみられる唯一の遺跡で、後期後葉地区4,300㎡を対象とした平成4年の発掘調査で長方形プランからなる掘立柱建物9軒が確認された〔伊藤1996〕。

Ⅴ期：晩期中葉～後葉

晩期前葉から継続的に利用される遺跡は、台地上の川船河遺跡に限定され、この段階に至り沖積地の遺跡が目立って増加するようになる。現在までに発掘調査が行なわれた本段階の遺跡としては大沢谷内北遺跡・大沢谷内遺跡・筧下遺跡・巳ノ明遺跡・保明浦遺跡の5遺跡があり、いずれも沖積地に立地するケースである。

B　新津丘陵周辺における縄文時代の沖積地遺跡

新潟市域において所属時期がある程度明らかな縄文時代の低地遺跡は6箇所を数える。このうち5箇所までが本遺跡中心半径10km圏内に含まれる。東山丘陵周辺の低地遺跡を検討した小熊博史によれば、沖積地内に形成された微高地上に立地または深層に埋没する遺跡は、平成14年の時点で16箇所確認されている。うち7箇所が見附市～旧栄町域、6箇所が加茂市～旧小須戸町域に集中しており、新津丘陵の西麓低地は中心的な分布域の一角をなしている〔小熊2002〕。現在までに次の5箇所で発掘もしくは試掘・確認調査が行われている。

大野中遺跡：新潟市秋葉区新津東町（第3図№36）

新津丘陵の北端から1km北にあり、阿賀野川と能代川にはさまれた沖積地に立地する。平成20年に行なわれた第2次調査で地表面下2mほどの灰色粘土層から中期前葉・中期中葉・後期前葉の土器が少量出土した。現時点では、新潟市秋葉区（旧小須戸）横川浜堤外地遺跡〔中島1983〕や見附市細田遺跡〔安藤1996〕とともに、東山丘陵最古の低地遺跡となる。

巳ノ明遺跡・新田遺跡：五泉市大字丸太（第3図№47）

新津丘陵東麓の山裾から東約1kmの早出川・能代川低地北部に位置する。能代川の改修に伴い、巳ノ明遺跡〔山崎・草間・田村・金内ほか2004〕の3,700㎡、新田遺跡〔山崎・草間・田村・土2004〕の4,870㎡を対象とした発掘調査が平成14年に行われた。両遺跡は隣接し、前者が後期前葉後半、後者が後期前葉前半を主体とする。ともに標高8m台の微高地上に立地し、前者から平地式とみられる住居状遺構4棟、後者から小規模な自然流路と埋設土器1基が確認された。

石器および土製品としては、前者から石鏃14点・切目石錘1点・土錘1点・磨石敲石類9点・中型磨製石斧11点、後者から礫石錘7点・磨石敲石類7点・石皿3点・小型磨製石斧1点、石棒2点が出土した。調査面積に較べ数量が限られ、なおかつ地区ごとに欠落用具を認める点に特徴がある。

両地区では花粉が良好に残っており、前者でハンノキ・トネリコ・コナラ属、後者でコナラ・クリ属などが検出された。食料残渣はほとんど出土しておらず、少量のクルミが前者から確認された程度である。

筧下遺跡：五泉市大字山崎（第3図№46）

巳ノ明・新田遺跡の北900mに位置する古代主体の遺跡である。能代川の改修に伴い平成14年に実施した9,856㎡の発掘調査に際し、晩期中葉後半～後葉の土器が微量に出土した〔山崎・鈴木ほか2004〕。

大沢谷内遺跡：新潟市秋葉区横川浜・天ヶ沢（第3図№20・21）

大沢谷内北遺跡の南 100m ほどに隣接する縄文時代晩期の遺跡であり、大規模な谷を挟んで北部の１～４区と南部の５・６区に分けられる。小須戸バイパスの整備に伴い市埋蔵文化財センターが平成 17 年から発掘調査を実施しており、１～４区の約 8,000㎡の発掘調査については平成 21 年に終了した。南部の発掘調査は平成 21 年に着手し、次年度以降も継続する予定である。

１～４区は南北 200m ほどの広がりをもつ。調査区の南部に標高 3.3m を測る緩やかな尾根が走り、その南に急斜な谷があり北に緩斜面が広がる。遺跡は晩期中葉の大洞 C1 式期～ C2 式期前半にかけて形成されており、尾根上から竪穴住居８軒、北側緩斜面から小規模な亀甲形建物３棟以上や 40 基ほどの焼土遺構（屋外炉）が確認された。多数の土坑も分布し、この中には磨石・石皿・自然礫を埋納した「デポ」が 10 基ほど存在する。集落規模に較べ土器の出土量は僅少である。石器には石鏃・磨石敲石類・石皿・磨製石斧・石錐・砥石・石刀などがあり、量的には磨石敲石類が大多数を占める。しかし、食料残渣にトチは確認されておらず、ヒシの実が目につく程度である。この時期の集落で多用される石鏃が 30 点に満たず、石核・剥片類の量も極めて乏しいこと、さらには磨製石斧や石錐が 10 点以下の出土にとどまる点も特徴といえる。その一方で、不整形な板状をなした天然アスファルト塊が大量に出土しており、交易品としてこの集落内に集積されたものと考えられる。

５区以南は、南北に連なる微高地上に立地する。遺構や遺物の分布密度は低いもようで、現時点において土坑数基と晩期終末の土器や石核・剥片類が少量確認されているだけである。

保明浦遺跡：中蒲原郡田上町羽生田（第３図№ 31）

新津丘陵の裾から西約１km、加茂川の北約 1.5km の沖積地にあり、現在の地表面は５m を測る。平成４年から 13 年にかけて、一辺 100m ほどの範囲内において総面積 7,000㎡あまりの発掘調査が行なわれた〔田畑 1993・1994・1996・2003・2004〕。遺跡は地表面下１m ほどから確認された。遺構は墓を含む多数の土坑やピット・溝からなり、晩期後葉を中心とする多量の土器や石器類・土偶などが出土した。主として墓域とみられるが、周囲に居住域が存在する可能性も指摘されている〔小熊 2002a〕。

C　越後平野周辺の縄文時代晩期中葉遺跡

大沢谷内北遺跡中心半径 10km 圏内における同時期の縄文時代遺跡としては、南 8.5km の台地上にある川船河遺跡、南９km の沖積地にある保明浦遺跡、新津丘陵東麓の沖積地にある筧下遺跡があげられる。このうち拠点集落の可能性がある遺跡としては川船河遺跡があげられるが、本時期の中心地区が調査されておらず、詳細は不明である。他の２箇所については、少量の遺物がえられているにすぎない。範囲を拡大し、越後平野周辺における晩期中葉遺跡を第４図に示した。以下では本遺跡中心半径 25km 圏内をゾーンⅠ、圏外北部をゾーンⅡ、圏外南部をゾーンⅢとし、各空間の特徴ならびに主要遺跡を概観する。

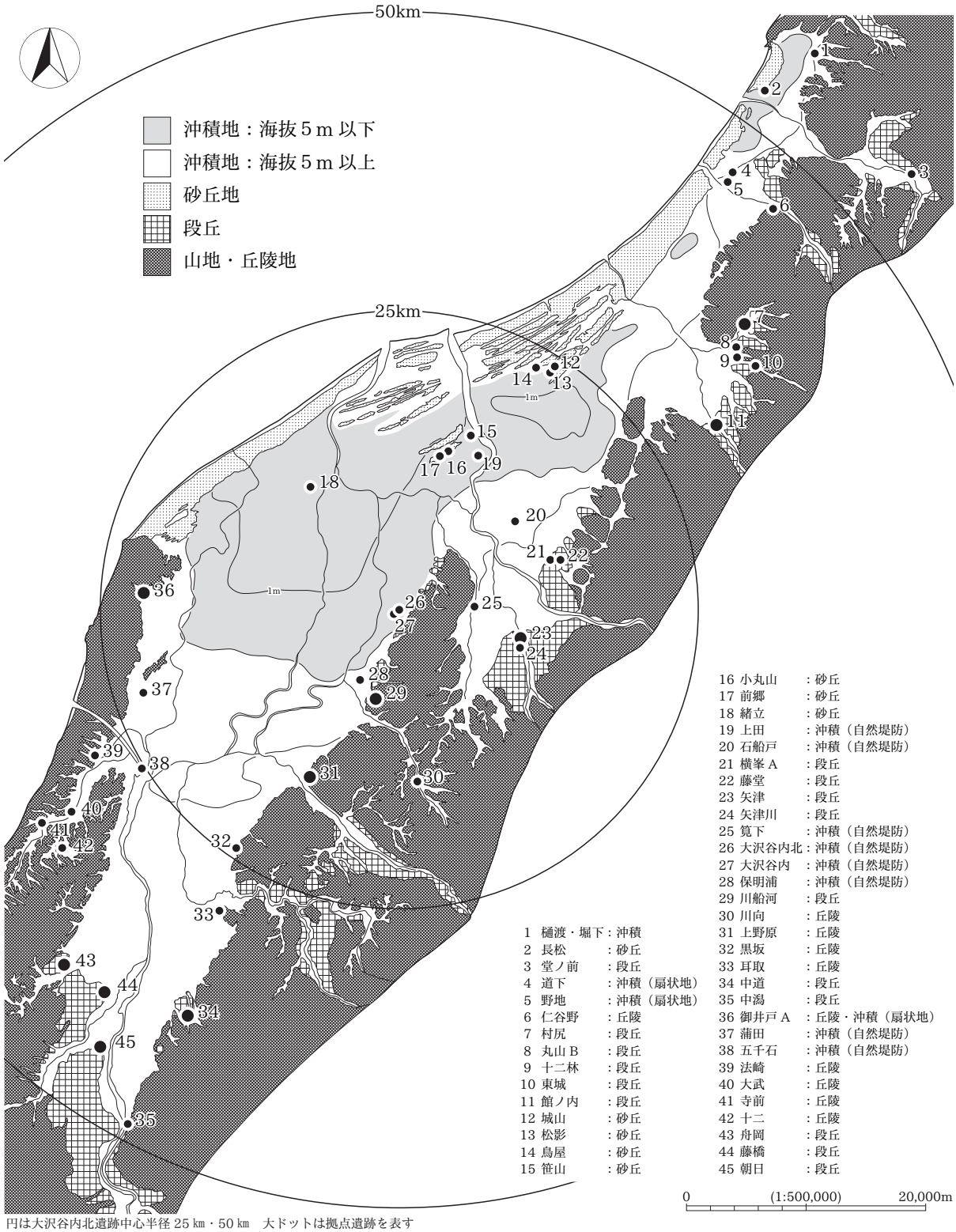
ゾーンⅠ

本遺跡を含め 23 箇所分布する。立地別の内訳は、沖積地９箇所、丘陵・台地７箇所、砂丘７箇所である。砂丘地上の遺跡はすべてが標高５m 以下の沖積地に近接しており、それらを合わせた低地遺跡の数は全体の三分の二に達する。標高５m 以下の沖積地に立地する遺跡としては、大沢谷内北遺跡と大沢谷内遺跡のほかに阿賀野川下流左岸の新潟市江南区上田遺跡（№ 19）〔酒井 2000〕がある。上田遺跡は既に削平された微高地上に立地するところから、本遺跡は現時点において越後平野の最も深層に埋没した晩期中葉の遺跡とみなされる。

本ゾーンでは、拠点的な性格が想定できる次の４遺跡が分布し、本遺跡との何らかの関連性も考慮する必要がある。

矢津遺跡：五泉市（旧村松町）矢津（№ 23）

本遺跡の 11km 東にあり、阿賀野川の支流早出川に面した低位段丘の縁辺部に立地する。遺跡の中心部と推定される 1,200㎡で 1960 年代に土壌改良工事が行なわれ、大量の遺物が出土した〔中島・藤塚・金子 1980、中島・荒川・渡邊 2009〕。土器は後期後葉から晩期終末に至るまでの諸段階の資料からなる。石器と土製品の詳細は不



円は大沢谷内北遺跡中心半径 25 ㎞・50 ㎞　大ドットは拠点遺跡を表す

第４図　越後平野周辺における縄文時代晩期中葉の遺跡分布図

明であるが、当地の拠点集落で保有する用具を網羅する内容となっている。

上野原遺跡：三条市上野原（№ 31）

本遺跡の南 20km に位置し、五十嵐川が間近に迫る東山丘陵上に立地する。昭和 40 年～ 42 年に 95㎡を対象とした学術調査が行なわれ、径約 15m の大型円形竪穴住居と石囲炉が確認された〔上原・中島ほか 1966、中島 1981〕。上野原式土器の標識遺跡として知られ、多量の晩期中葉土器が出土している。石器では石鏃が卓越する。

工具類には磨製石斧や石錐が安定的に存在し、この時期の典型的な組成内容をもつ。制約された調査面積にもかかわらず、石剣・石冠・岩版・土偶などの特殊遺物も多数出土した。

御井戸Ａ遺跡：新潟市西蒲区福井（№36）

越後平野をはさんで西 23km にある。角田山の東南麓に形成された台地の縁辺部と台地下の扇状地にかけて立地し、遺跡の広がりは一辺 150m ほどと推定される。平成６年に低地区域 350㎡を調査し、竪穴住居３軒と木柱群を確認した〔前山 1996a〕。平成 14 年には、遺跡の性格究明を目的とした確認調査を台地区域 140㎡、低地区域 210㎡で行い、前者から掘立柱建物と考えられる大型柱穴群、後者から総数 1,100 個におよぶクルミ集積などを確認した〔前山・相田 2003〕。晩期中葉の土器は東北南部・阿賀北地域からの搬入品や北陸系土器を含む。石器は石鏃が卓越し、石剣・石冠なども比較的多い。ヒスイを素材とした自給的な玉作りを行なう点も特徴的である。

蒲田遺跡：西蒲原郡弥彦村村山（№37）

御井戸Ａ遺跡の南８km ほどにあり、弥彦山の麓から東約 1.6km の沖積地に位置する。平成８年の確認調査をつうじ標高６m ほどを測る埋没微高地（自然堤防）上の 250m × 150m の範囲に広がる遺跡であることが判明した〔前山 2000〕。晩期中葉前半から終末までの土器が出土している。数量的には後葉を主体とするが、中葉の中心地区が未調査区域に存在する可能性もある。石器では石鏃が卓越し、多量の石核・剥片類を伴う。このほか、石棒・石冠などの特殊遺物や玉類・アスファルト塊も存在する。

ゾーンⅡ

阿賀野川以北の 25km ～ 50km 圏内で現在知られる晩期中葉の遺跡は 10 箇所ほどである。段丘・丘陵上８箇所と沖積地２箇所からなり、後者は標高 10m 以上の扇状地に立地する。エリア内の拠点集落としては、台地上に立地する村尻遺跡（№７）と館ノ内遺跡（№11）がある。ともに多種にわたる遺物を伴う長期継続集落で、磨製石斧の製作遺跡としても知られる。村尻遺跡からは晩期の石囲炉や地床炉 10 基ほどが確認された〔関・田中ほか 1982〕。館ノ内遺跡からは未だ晩期中葉の遺構は確認されていないが、鳥屋１式期（後葉初期）の竪穴住居や掘立柱建物柱穴群の周囲から上野原式期（晩期中葉終末）の土器が多数出土していることから、この時期の遺構が付近に存在するものと推定されている〔田中・鶴巻 1992〕。

本ゾーンにおける沖積地内の晩期遺跡については、中葉に前後する段階に留意すべき事例がある。胎内川の右岸に位置する野地・道下・昼塚の３遺跡はいずれも晩期前葉を主と遺跡であるが、遺構と遺物の両面においてそれぞれ異なる特徴をもつ。野地遺跡（№５）〔渡邊裕ほか 2009〕では大型掘立柱建物が存在し、豊富な遺物を伴う点においても拠点集落の様相を呈する。これに対し、道下遺跡（№４）〔折井ほか 2007〕は 10 軒の竪穴住居からなり基本的な生活用具が備わるが、遺物量が絶対的に乏しい。昼塚遺跡〔折井ほか 2006〕では小型掘立柱建物と土坑群が確認された。遺物量が乏しいとともに、石器の中に占める磨石・敲石類の割合がきわめて高く、各遺跡の性格や遺跡間の関連性についていくつかの解釈が示されている〔渡邊裕 2009〕。

一方、晩期終末の青田遺跡〔荒川ほか 2004〕では 58 棟の掘立柱建物群が確認され、多種にわたる石器や木製品が出土した。この遺跡の居住形態については、利用樹木や石器組成のあり方から通年的な利用に懐疑的な見方があり、いまだ結論をえるには至っていない。

ゾーンⅢ

信濃川中流域周辺の遺跡は 10 箇所ほどを数え、西山丘陵の島崎川流域と信濃川本流付近の２ブロックに分けられる。本ゾーンでは沖積地の微高地上（自然堤防）に立地する遺跡は知られておらず、作業空間や廃棄ゾーンとして低地を利用するケースがみられるのみである。

島崎川流域では、未だ拠点集落とみられる遺跡は確認されていない。これにかわって本エリアでは、特定作業のために利用されたと考えられる寺前遺跡（№41）〔高橋ほか 2008〕がある。この遺跡では丘陵下に流れる自然流路から２箇所の「木組遺構」が確認され、堅果類の水晒し場と推定されている。出土遺物には大きな偏りがあり、

土器では粗製深鉢、石器では磨石・敲石類が卓越する。

信濃川の本流付近には現在６遺跡が確認されている。このうち右岸の中道遺跡（№34）〔駒形・鳥居ほか1998〕および左岸に位置する舟岡遺跡（№43）〔中村ほか1988〕・藤橋遺跡（№44）〔長岡市1992〕・朝日遺跡（№45）〔中村ほか1965〕の４遺跡が拠点集落と考えられる。中道遺跡は東山丘陵西麓に形成された扇状地に立地する。規模を異にした円形竪穴住居が９軒確認され、うち８軒が調査区の東部に集中する。中･後期の集落と重複するため、この時期の石器組成は明らかでない。左岸に位置する３遺跡のなかで、遺構や遺物の内容がある程度明らかなケースは藤橋遺跡に限られる。晩期遺跡の広がりは東西 300m・南北 350m あまりにおよぶ。調査範囲が制約されるため晩期中葉集落の全体像は明らかでないが、大型掘立柱建物を主体とするようである。玉類が多数出土しており、集落内での製作を示す未成品も確認されている。

D　弥生時代以降の遺跡

第Ⅳ章・第Ⅴ章で述べるように、大沢谷内北遺跡では未分解有機物層（いわゆるガツボ層）の直下に堆積した粘土層から中世の遺構や弥生時代以降に属す可能性がある石器や搬入礫などが確認された。本項では、何らかの関連性が想定される周辺の遺跡について、範囲を近隣区域に限定して概観する。

第５図は、大沢谷内北遺跡を含む南北 2.6km・東西 3.2km の範囲内に現在登録される弥生時代以降の遺跡を示したものである。エリア内に分布する遺跡は 14 箇所を数える。時代別の内訳は、弥生１・古墳１・飛鳥１・奈良３・平安４・中世８となり、奈良時代以降の遺跡数が多い傾向にある。

14 遺跡のなかでこれまで発掘調査が行われているのは本遺跡（№３）と大沢谷内遺跡（№４）のみである。その他の遺跡は断片的な情報が得られているのみで、具体的な位置づけが困難なケースが多い。そのため以下では、大沢谷内遺跡で行われた発掘調査の成果を中心に各時代の特徴を述べる。大沢谷内遺跡において現在までに実施された発掘調査は、広域農道の建設に伴い小須戸町教育委員会が実施した平成元年の調査〔川上1989〕、小須戸バイパス整備工事に伴い平成 17 年から新潟市埋蔵文化財センターが実施している１区～６区の調査〔前山2009など〕からなる。後者については正式報告書が刊行されておらず、未確定な内容を含む点を明記しておく。

弥生時代

大沢谷内遺跡の３区・４区から弥生時代中期・後期に属す少量の土器と「榎田型」磨製石斧１点、平成元年の調査で弥生時代後期の土器１点が出土した。現在までのところこの時代の遺構は確認されておらず、出土遺物も断片的である。しかし「榎田型」磨製石斧は新潟県内でも類例が乏しく、弥生時代後期の土器の中には近隣の古津八幡山遺跡〔渡邊朋ほか2001〕で設定された「八幡山式土器」が存在する。ともに遺跡の性格を考えるうえで重要な資料であり、未調査区域にこの時期の拠点的な集落が存在することも予想される。

古墳時代

大沢谷内遺跡の５区から古墳時代前期～中期の土器が僅かに出土しているのみである。上記のエリア内において最も遺物量が乏しいのがこの時代であり、その位置づけは今後の調査の進展を待って検討する必要がある。

飛鳥時代～奈良時代

大沢谷内遺跡の３区・４区において飛鳥時代から奈良時代前半にかけての遺構と遺物が確認されている。調査区は東西に走る大規模な埋没谷の北岸に位置する。遺構は掘立柱建物・井戸・溝などからなり、谷の北に広がる微高地の南北 40m ほどの範囲に分布する。現時点で把握される掘立柱建物は５棟にとどまるが、配列が不明な柱根が多数存在することから、10 棟以上の建物が存在した可能性が高い。５棟はいずれも南北に長軸をもつことが特徴的である。井戸の中には、幅 1m ほどの丸木舟を再利用したものがある。

遺物の大半は谷の北側斜面から出土した。遺構が分布する微高地が、「鎌倉潟」や「大日潟」などの干拓に伴い削平されていることも一因と考えられる。谷の斜面から出土した遺物は、須恵器を中心とした７世紀代の土器類・有孔土製円盤・未成品をふくむ各種木製品・鉄鏃・刀子・被熱礫などからなる。このなかには「九々」を

記した木簡１点や舟形木製品などの祭祀用具が多数含まれる。微高地からは、７世紀～８世紀代の土器類・円面硯・神功開寶・横櫛・鋤・紡錘車・羽口・砥石などが出土した。

以上のような遺構や遺物は、この遺跡に備わる官的な性格を明示している。各種の手工業生産に関わる遺物の存在は、森林資源の利用に適した立地的な特性によるものである。越後平野の周辺ではこれまで飛鳥時代に属す良好な資料が得られておらず、当時の社会情勢を考えるうえできわめて重要な遺跡と位置づけられる。

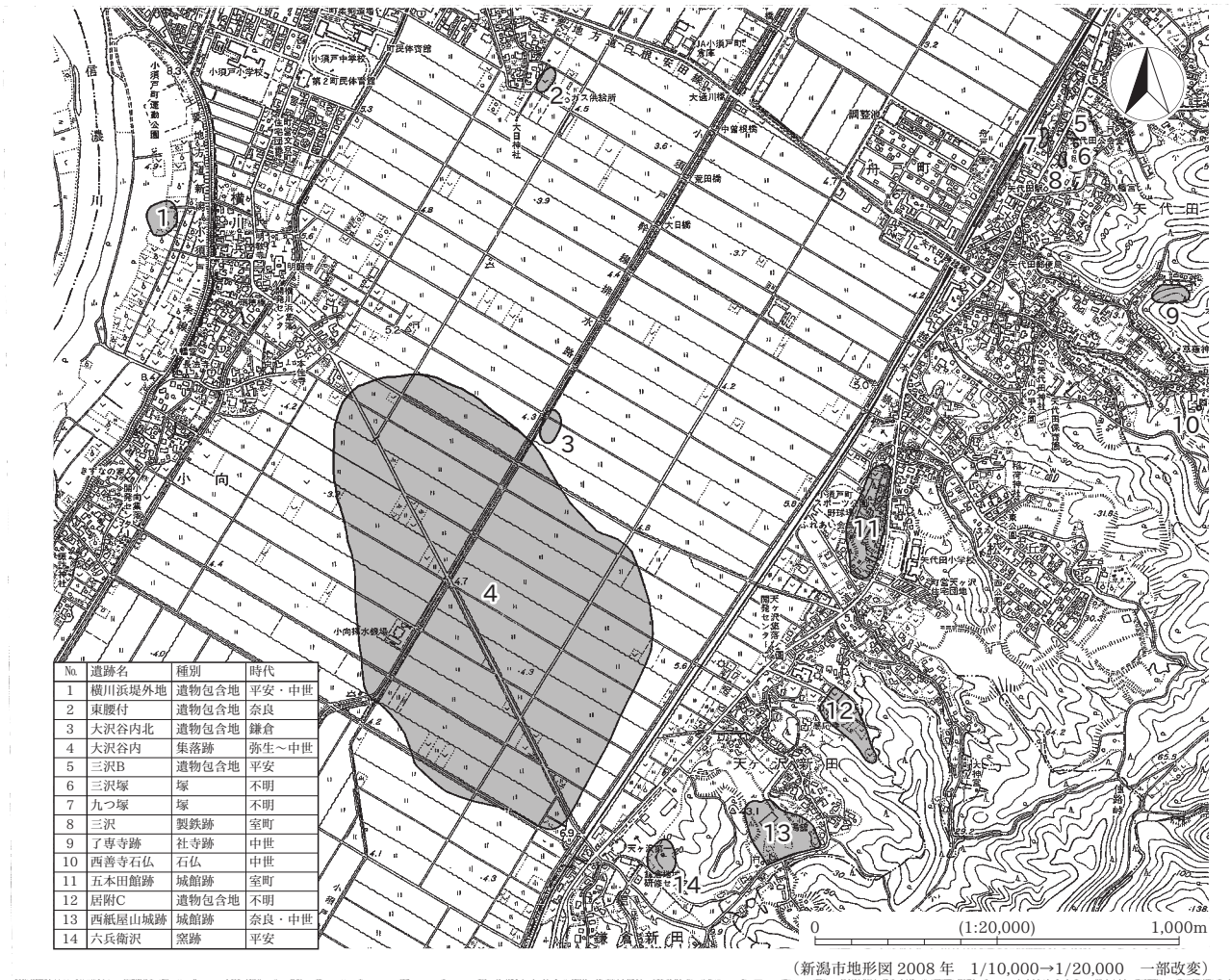
平安時代

大沢谷内遺跡の平成元年調査区および１区～３区から柱穴・柱根などの各種遺構や比較的まとまった量の土器類が確認されている。土器類の主体は９世紀代の須恵器と土師器である。このほか、大沢谷内遺跡の背後には平安時代の須恵器窯跡とされる六兵衛沢遺跡がある。遺物がほとんど現存しておらず、所属時期を含めた詳細な内容は明らかでない。

中世

大沢谷内遺跡１区～４区と谷南岸の５区から中世の遺構・遺物が確認されている。明確な建物跡はいまだ発見されておらず、遺構の主体は素掘りの井戸である。遺物の量は多くないが、13 世紀～ 15 世紀代の珠洲焼を中心とした土器類・漆器椀・鍬・下駄・箸・砥石などの多様な内容からなる。漆器椀には優品が含まれ、富裕者層の居住をうかがわせる。

遺跡の周辺には、護摩堂山城に代表される城館、社寺跡の了専寺跡、製鉄跡の三沢遺跡などの中世遺跡が多数分布しており、大沢谷内遺跡との何らかの関連性も考慮される。



No.	遺跡名	種別	時代
1	横川浜堤外地	遺物包含地	平安・中世
2	東腰付	遺物包含地	奈良
3	大沢谷内北	遺物包含地	鎌倉
4	大沢谷内	集落跡	弥生～中世
5	三沢B	遺物包含地	平安
6	三沢塚	塚	不明
7	九つ塚	塚	不明
8	三沢	製鉄跡	室町
9	了専寺跡	社寺跡	中世
10	西善寺石仏	石仏	中世
11	五本田館跡	城館跡	室町
12	居附C	遺物包含地	不明
13	西紙屋山城跡	城館跡	奈良・中世
14	六兵衛沢	窯跡	平安

（新潟市地形図 2008 年　1/10,000→1/20,000　一部改変）

第５図　大沢谷内北遺跡周辺の弥生時代以降の遺跡分布図

第3節　歴 史 的 環 境

大沢谷内北遺跡の主体を占める縄文時代晩期段階の位置づけにあたり、少なからず重要な意味をもつと考えられる生業活動・石器組成・石材流通のあり方について、越後平野周辺における本遺跡成立期までの流れをたどる。

A　生　業　活　動

越後平野周辺において定住的な居住形態へ移行するのは、縄文時代の前期前葉である。当時の越後平野は砂丘列の形成によって海水が遮断され、信濃川の旧河口付近に汽水域（ラグーン）、その内陸に湿地や氾濫原が展開していた〔卜部・高濱 2002〕。この時期を代表する新潟市域の遺跡としては、布目遺跡〔小熊 1994〕と新谷遺跡〔前山 1994〕があげられる。前者は砂丘地上、後者は角田山東南麓に形成された小規模な扇状地上に立地し、ともに水辺に接近した場所に営まれる。

新谷遺跡と至近距離にある前期後葉の干納遺跡〔前山 2005〕と豊原遺跡〔小野ほか 1988〕の前期終末層準からは多量の食料残渣が出土し、定住集落成立期の生業を理解するうえで良質な情報を提供した。両遺跡から出土した動物遺体は、ニホンジカと淡水産魚類を主体とし、干納からはシジミを主とした貝類も出土した。淡水魚の主体はイトヨとコイ科で、サケも多量に出土した。植物性食料残渣としては、クリ・クルミ・ドングリ類・ヒシの実が出土しており、干納遺跡では水生植物ヒシの実が量的主体をなしていた。総じてこの段階では水辺資源の依存割合が高く、水域環境への適応をもとに定住化がはかられたことをうかがわせる。

中期の生業活動を理解できる良好な情報は得られていないが、角田山麓の大沢遺跡〔前山・藤田 1990〕では中期前葉の捨場からドングリ・クリ・クルミとともにヒシの実が出土しており、引き続き水辺資源の利用が行なわれていたことを物語る。この時期の植物食利用を知る上で長岡市中道遺跡の竪穴住居内から出土した炭化トチは重要である。中期中葉の住居の一角から 700 個体ほどが乾燥貯蔵時の状況をとどめて出土したもので、トチの利用が遅くともこの時期まで遡ることを物語る〔駒形・鳥居ほか 1998〕。

後期以降は食料残渣の出土例が増加する。哺乳動物が良好に残る遺跡としては、後期前葉の長岡市根立遺跡〔金子 1988〕、後期後半の燕市幕島遺跡〔富岡 2004〕、後期前半の胎内市江添遺跡〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2005〕があり、いずれもイノシシが狩猟対象に加わるようになる。こうした状況は晩期にも受けつがれ、後期後葉～晩期前葉の胎内市野地遺跡〔樋泉 2009〕、晩期後半の新潟市西蒲区御井戸 A 遺跡などでは、タヌキ・キツネ・ウサギなどの小型哺乳類やカモなどの鳥類が付随する。魚骨の出土例も増加し、後期後葉～晩期前葉の胎内市道端遺跡〔富岡 2003〕・道下遺跡〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2007〕・野地遺跡や晩期中葉の西蒲区御井戸 A 遺跡でサケの椎骨が確認されている。このほか野地遺跡と御井戸 A 遺跡ではコイ科、御井戸 A 遺跡ではイトヨが多数出土した。植物遺体が良好に保存される遺跡としては、後期前葉の長岡市根立遺跡〔斎藤 1988〕、後期前半の胎内市江添遺跡、後期後葉～晩期前葉の胎内市野地遺跡〔坂上 2009〕、晩期中葉の西蒲区御井戸 A 遺跡があげられる。いずれの場合もトチとクルミが主要構成種をなしている。ヒシの実の出土はこの段階までの阿賀野川以北で確認されておらず、晩期終末の新発田市青田遺跡〔吉川 2004〕で少量の出土を認めるにすぎない。これに対し、晩期終末の御井戸 A 遺跡〔前山 1996b〕や弥生時代前・中期の新潟市江南区西郷遺跡〔金原 2009〕からはまとまった量の種実が出土し、阿賀野川以北と異なる状況を示している。

B　石　器　組　成

本遺跡を中心とした半径 50km 圏内を A：阿賀野川以北、B：越後平野中央部、C：越後平野東方内陸部、D：信濃川中流域に区分し、前期から晩期までの石器組成を第 6 図上に示す。とりあげた用具は、食料の調達・加工に関わる 4 種の石器（石鏃・錘具・打製石斧・磨石敲石類）と工具的な 5 種の石器（磨製石斧・石匙・石篦・板状石器・石錐）

石器組成の地域性

A 群石器

エリア A

No.	遺跡	石鏃	石錐	打製石斧	磨石・敲石類
1	二軒茶屋（前期）	●	■	●	■
2	狐森 B（中期）	■	●	■	■
3	野地（後期）	■			■
4	館ノ内 D（晩期）	■	●	●	■
	%	40	60	20	60

エリア B

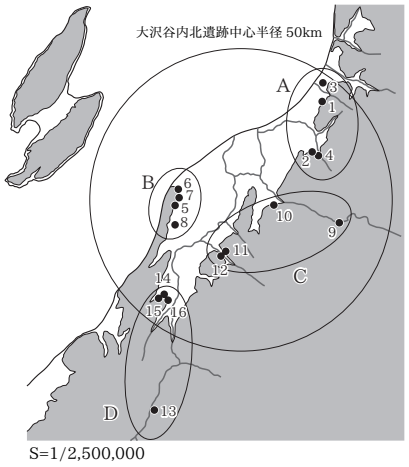
No.	遺跡	石鏃	石錐	打製石斧	磨石・敲石類
5	新谷（前期）	●	■	●	■
6	大沢（中期）	■	■	●	■
7	上ノ原（後期）	■	■	●	■
8	蒲田（晩期）	■	●		■
	%	60	40		40

エリア C

No.	遺跡	石鏃	石錐	打製石斧	磨石・敲石類
9	北野（前期）	●	■	●	■
10	大蔵（中期）	●	■	●	■
11	芹沢（後期）	■	■	●	■
12	藤平（晩期）	■	●	●	■
	%	80	40	20	40

エリア D

No.	遺跡	石鏃	石錐	打製石斧	磨石・敲石類
13	赤羽根（前期）	●		■	■
14	馬高（中期）	■		■	■
15	三十稲場（後期）	■	■	●	■
16	藤橋（晩期）	■	●	●	■
	%	40	20	40	40



S=1/2,500,000

B 群石器

エリア A

No.	遺跡	磨製石斧	石匙	石篦	石錐
1	二軒茶屋（前期）	■	■	●	●
2	狐森 B（中期）	■	■	■	■
3	野地（後期）	■	■	●	■
4	館ノ内 D（晩期）	■	■		■
	%	10	10	10	10

エリア B

No.	遺跡	磨製石斧	石匙	石篦	石錐
5	新谷（前期）	■	●		●
6	大沢（中期）	■	■		●
7	上ノ原（後期）	■	■		■
8	蒲田（晩期）	■	●		■
	%	10	10		10

エリア C

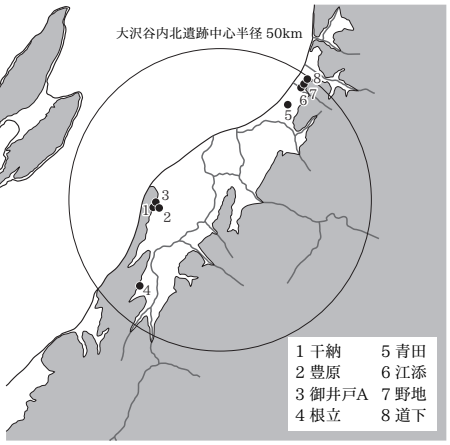
No.	遺跡	磨製石斧	石匙	石篦	石錐
9	北野（前期）	■	■	■	■
10	大蔵（中期）	■			●
11	芹沢（後期）	■	■		●
12	藤平（晩期）	■	■		
	%	10	10	10	10

エリア D

No.	遺跡	磨製石斧	石匙	石篦	石錐	板状石器
13	赤羽根（前期）	■	●			
14	馬高（中期）	■	●		●	●
15	三十稲場（後期）	■	●		●	■
16	藤橋（晩期）	■	●		■	■
	%	20			10	10

（出現率の●は、２％未満を表す）

越後平野周辺における縄文時代遺跡出土の食料残渣



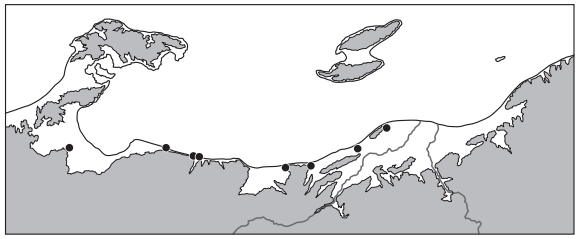
S=1/2,500,000

種別	遺跡	干納（前期）	豊原（前期）	根立（後期）	江添（後期）	野地（後・晩期）	道下（晩期）	青田（晩期）	御井戸A（晩期）
哺乳類	シカ	●	●	○	○	●	—	○	●
	イノシシ	—	—	○	○	●	○	—	●
	その他	○	—	○	○	○	—	—	○
鳥類	カモ	○	○	—	○	○	—	○	○
爬虫類	ヘビ	—	—	—	—	○	—	○	○
両生類	カエル	—	—	—	—	○	—	—	—
淡水産魚類	サケ	●	●	—	●	●	○	○	●
	コイ・フナ	●	●	—	—	●	○	○	●
	ウグイ	—	—	—	●		—	○	—
	アユ	—	—	—	—	●	—	—	—
	イトヨ	●	●	—	—	—	—	—	●
海水産魚類	サメ	—	○	—	—	○	—	—	○
	タイ	○	○	—	—	●	○	○	○
	スズキ	○	—	—	—	—	—	—	○
	イワシ	—	—	—	—	○	—	—	○
	ハゼ	—	—	—	—	—	○	—	—
堅果類	トチ	—	—	●	○	★	—	★	★
	ドングリ	○	—	—	—	○	○	○	★
	クリ	○	○	—	●	★	—	★	○
	クルミ	●	○	★	○	★	○	★	★
	ヒシ	★	○	—	—	—	—	○	○

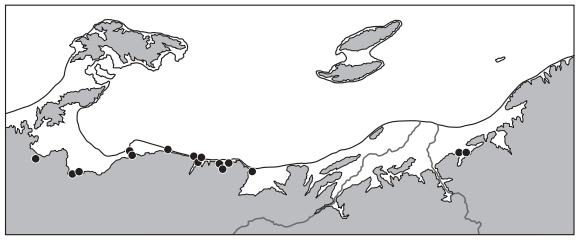
（多量：★・●・○：少量）

磨製石斧製作遺跡の分布

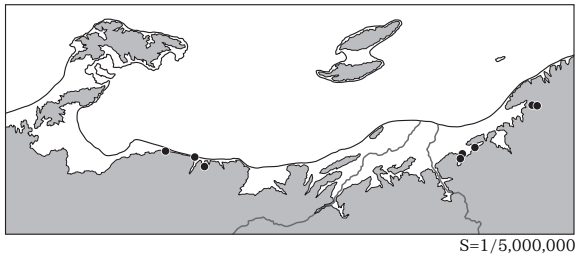
前期



中期



後期・晩期


S=1/5,000,000

第６図　越後平野周辺における縄文時代の石器と食料残渣

で、前者をＡ群・後者をＢ群とする。Ａ群石器はそれら４種の合計数、Ｂ群石器は９種の総点数を基数として割合を求めた。提示した組成は、いずれのエリアも各時期で代表的な内容をもった１遺跡に限定している。

Ａ群石器は時間と空間の両面において変異が著しく、石鏃・石錘・打製石斧の増減を軸に出現率が上下する。前期の段階では、礫石錘を多量に伴う遺跡が信濃川中流域を除く各所に分布する。これに対し、信濃川の中流域では関東・中部高地で多用される打製石斧が前期後葉から増加し、以後中期までの間に異なる組成空間を形成する。中期に入り、海岸・平野部では石錘が減少する。これに代わって阿賀野川以北では磨石・敲石類、越後平野中央部では石鏃主体の組成へと変化し、その状況は晩期まで受け継がれる。後期に入ると、信濃川中流域に石錘多出遺跡が現れ、その範囲は再び拡大する。しかし晩期に至ると石錘は大幅に減少し、石鏃もしくは磨石・敲石類主体の組成が全域にわたり普遍化するようになる。

Ｂ群石器においても、時間的な変化や分布空間の異なりを示す用具が見られる。石匙・石篦は東北日本で多用された用具で、阿賀野川以北やその上流域の前・中期遺跡で出現率が高い。中期以降の信濃川中流域でしだいに増加する板状石器は、渋海川流域で局地的に発達した用具である。これに対し、磨製石斧の出現率に空間的な差異はなく、次第に率を上昇させる傾向が明瞭に読みとれる。

以上のように、本遺跡を含む越後平野の中央部は、関東・中部高地的な組成エリアの北限と東北日本的な組成エリアの南限に挟まれた緩衝地帯にあたる。石器組成には明確な特徴があり、磨石・敲石類を定量保有しつつ、中期以降石鏃を多用する空間であり続けた。

Ｃ　石材の流通

沖積地に立地する縄文時代遺跡は、当時存在した広大な内水面と密接な関わりをもって成立した可能性が高い。以下に示すような石器石材や製品、土器の混和剤として使用された石材の動きは、内水面を利用した流通網の存在を示唆する事例となる。

越後平野周辺で利用された剥片石器の石材のなかで、新発田市板山産黒曜石の広がりは、県内産石材の流通実態を示す最も確実な資料である。板山産黒曜石の利用は縄文時代早期に溯る〔土橋 1998〕。３cm にも満たない原石サイズのためか流通範囲は広くなく、大多数が阿賀野川以北の近隣地帯に供給されていた。阿賀野川以南における出土例としては、越後平野の中央部に位置する角田山麓の４遺跡〔金山ほか 1995〕と信濃川中流域の長岡市域３遺跡〔藁科 2002〕がある。前者は前期終末～晩期、後者は中期～後期に属し、各遺跡で利用される黒曜石の中に占める板山産石材の割合は、中期以降しだいに上昇する傾向にある。

新潟県内では、前期前葉以来磨製石斧の製作が活発に行なわれた。前期前葉から中期前葉までの段階では、西頸城産の蛇紋岩などを用いた自給的な石斧製作が米山南麓から新潟市域に至る海岸部で行われ、新潟市域では前期前葉～中期前葉の西蒲区新谷遺跡〔前山 1994〕・南赤坂遺跡〔前山ほか 2002〕・豊原遺跡〔小野ほか 1988〕・江南区砂崩遺跡〔酒井 1990〕などでまとまった量の製作工程資料が出土している。中期に入ると、西頸城での製作量が増大するとともに、阿賀野川以北の新発田市域で地元の石材を利用した石斧製作が始まる。阿賀野川以北の石斧製作は後期以降村上市域まで拡大し、西頸城と並ぶ石斧生産地へと発展する。一方、中越～下越の海岸部では、中期前葉を最後に石斧製作が途絶え、以後はもっぱら西頸城や阿賀北産石斧の供給をうけるようになる。また、阿賀野川以北で製作された石斧は中型もしは大型品で、同地において石斧製作が活発化する後期・晩期においても西頸城産の小型石斧が県北の石斧生産集落にも供給されていた。前述のように、越後平野周辺の磨製石斧は時間の経過とともに増加する傾向にあり、全国的にも有数の石斧流通環境が形成された。

角田山麓の新谷遺跡（前期前葉）では、磨石・敲石類や礫石錘の石材として阿賀野川もしくは県北産とみられる花崗岩が５％程度使用されていた。新谷遺跡の土器には花崗岩に由来すると考えられる雲母・石英・長石が多量に含まれており、土器の混和材とし花崗岩が流通していた可能性も指摘される。土器製作時における各種鉱物の利用はその後も続き、内水面ルートによる安定的な花崗岩の供給が晩期終末まで行なわれていたと考えられる。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

第１節　試掘・確認調査

A　第 1 次 調 査

小須戸バイパスの整備計画に伴い小須戸町教育委員会が主体となって行ったもので、本遺跡の存在が明らかになった調査である。実施にあたっては、新潟県教育庁文化行政課の指導のもと、同課および白根市教育委員会から調査員が派遣された。調査は平成 16 年 11 月 29 日から 12 月 10 日までの間と平成 17 年 1 月 6 日の実質 11 日間にわたり実施し、幅員 50m、全長 2km あまりにわたる本線区間内に任意にトレンチを設定して、人力および重機（バックホー）によって掘削・精査を行なった。

このうち大沢谷内北遺跡の発見につながった調査地点は、51T と 53T である（第７図）。２地点における層序は、①上部粘土層（水田耕作土および灰色～灰褐色粘土）、②未分解有機物層（いわゆるガツボ層）、③下部粘土・シルト層、④砂層に大別される。確認された遺構と遺物は複数層にまたがりをもつ。53T の下部粘土層上面からは最大幅 80cm・深さ 20cm の皿状土坑１基が検出された。覆土は未分解有機物層で、遺構確認面からは弥生時代後期の可能性がある土器片１点が出土した。両トレンチの下部粘土･シルト層では縄文時代の遺物も確認され、51T から縄文時代晩期の土器片１点、53T から礫２点が出土した。

B　第 2 次 調 査

第１次調査で縄文時代の遺物が出土した 51T・53T 周辺での遺構および遺物の有無を確認するため、平成 17 年 10 月 17 日と 18 日に実施した調査である。同年の市町村合併に伴い市教委が調査主体となり、市埋蔵文化財センターが補助執行した。

調査は 51T・53T の周辺に設定した７箇所のトレンチで行われた。その結果、51T の北に接して設けた 100T の下部粘土層上位から保存状態が良好な縄文時代晩期中葉の土器がまとまって出土した（第７図）。遺構の確認には至らなかったが、法線内の西部を中心とした遺物包含層の広がりや、遺構の存在が予想されることから、本調査が必要と判断されるに至った。

第２節　発　掘　調　査（第３次調査）

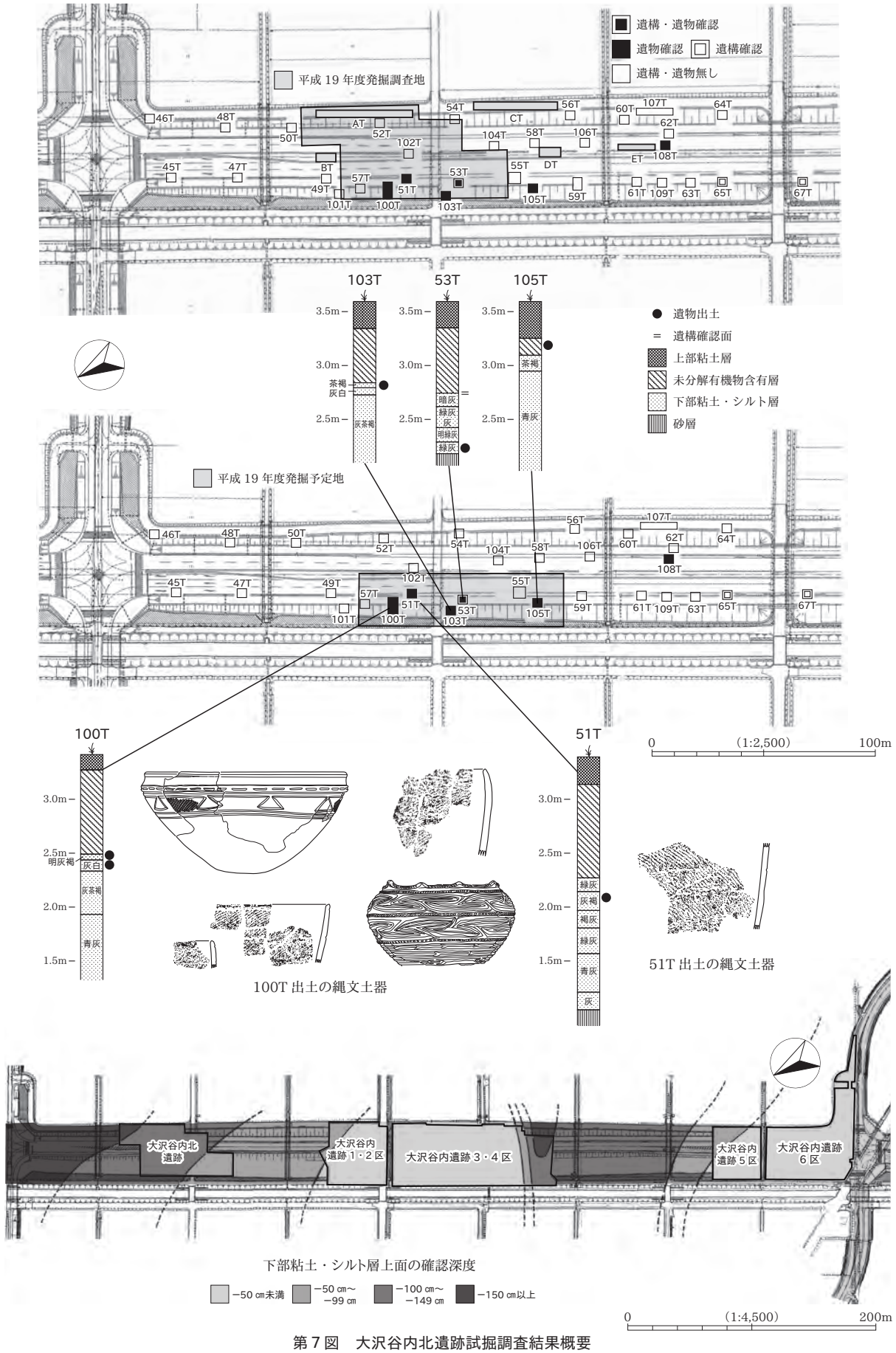
A　調　査　方　法

１）現　　況

周辺一帯は近世以後水田として利用されていたが、道路用地として取得後は荒地であった。

２）グリッドの設定（図版２～５）

試掘・確認調査によって確認された大沢谷内北遺跡と大沢谷内遺跡を一つの遺跡群として捉える観点から、両遺跡の全域を網羅してグリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては、北西隅のＸ座標 193700.000 Ｙ座標 50200.000（世界測地系、国土地理院平面直角座標第８系）を基点とし１A 杭とした。通常は基点に対し 10m の方眼を組みそれを大グリッドとしてきたが、本地域は対象面積が広大であるため 100m 方眼の大大グリッドを設定した。大大グリッドの名称は 1A 杭を基点として東西方向をＡ～Ｏのアルファベット、南北方向を１～19 のアラビア数字で表し、10m 方眼の大グリッドは１K-9G、2K-3H のように枝番を付して標記した。これをさ



第 7 図　大沢谷内北遺跡試掘調査結果概要

らに２m 方眼の 25 の小グリッドに分割し、「1K-9G15」のように呼称した。グリッドの名称については図版２～５に示すとおりである。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区内における３点の座標は次の通りである。1K-9G1（X座標：193620.000、Y座標：51260.000、緯度 37° 44’ 36.4282”、経度 139° 4’ 53.9247”）、1K-10I1（X座標：193610.000、Y座標：51280.000、緯度 37° 44’ 36.0998”、緯度 139° 4’ 54.7418”）、2K-3E1（X座標：193580.000、Y座標：51240.000、緯度 37° 44’ 35.1348”、経度 139° 4’ 53.1003”）。座標北は真北に対し０度 21 分 22 秒東偏し、磁北は真北に対し７度 44 分西偏する。

３）遺跡の標高値について

大沢谷内北遺跡の標高値は、平成 17 年度より実施してきた隣接する大沢谷内遺跡の測量成果に基づいたものを使用した。これは平成８年に一般国道改築に伴い実施された水準測量で求められた県道白根安田線に架かる大通川橋に設置されている「基 - ９」の標高値Ｈ＝ 5.314m を基準としたものである。

平成 20 年４月に直接水準測量により小須戸地内に国家水準点「二等水準点（960571A：小須戸中）」が設置されたのをうけ、平成 21 年度に水準測量を実施したところ継続使用してきた標高値に＋ 0.265m の差が認められた。そのため国家水準点から「基 - ９」までの点検測量を実施した結果、ほぼ同一の差が確認された。

「基 - ９」の標高値について国家水準点に基づくものか仮標高値で求められたものか、当時の国道に関連する測量成果簿が確認できず、また小須戸地域にはほかに水準点がないため現行の標高値と改測前標高値との差を確認することも出来なかった。

そのため本書の図版では調査時の標高値を用いたが、本来は 0.265m を減じる必要がある。

４）地 区 の 呼 称

調査区の中央には農道が通っており、協議の上この部分については稲刈以後に調査を実施することとなった。そのため、農道以北を１区、農道部分を２区、農道以南を３区と便宜的に呼称した（図版５右下）。

５）調　査　方　法

①調査区の設定（第７図上段）

第２次調査の結果をうけて設定された発掘調査区は、道路建設予定地の西半部に偏るものであった。第１次・第２次調査の報告によれば、遺跡付近は東に向かって緩やかに傾斜した地形をなしており、排水作業と連続的な層序記録を兼ねたトレンチを調査区東部に設ける必要があると判断した。これをＡトレンチとし掘削したところ、遺物の出土が確認された。そのため調査区周囲における遺跡の広がりと土層の堆積環境を再度確認すべく、Ｂ～Ｅトレンチを順次設定した。Ａトレンチ以外で遺物が出土しなかったため、最終調査区域を設定した。

②表土除去

第１次・第２次調査および周囲のトレンチ調査をつうじ、遺跡の形成レベルがⅢ層最下部以下にあることが判明したため、Ⅰ層からⅢ層下部までの間を遺物の出土等に注意しながら重機（バックホー）で除去した。

③包含層調査

表土除去の後、大グリッドに沿って上面幅 60cm のトレンチを全域に設け、層序の観察と遺構・遺物の探査を行なった。Ⅲ層下部で上層遺跡の調査を行なったのちⅣ層の掘削に着手し、Ｖｃ層・Ｖｄ層までの全域を手作業で掘り下げた。Ⅵ層については、Ⅴ層の掘削終了後、大グリッドを４分割するトレンチを全域に設定し、１区・２区の全域と３区北半部についてⅥａ層上半部までを手作業で掘り下げた。遺物がⅥｂ層までおよぶ１区東部については、Ⅶ層上面までの掘削を実施した。また、遺構の記録が終了した時点において、遺構の分布域についてもⅥａ層上半部まで掘り下げ、未確認遺構や遺物の探査にあたった。

④遺構調査

本遺跡下層の遺構は、色調が類似した粘土層に構築されていた。そのため上面での確認がきわめて難しく、炭化物の分布などを手がかりにサブトレンチを設け、断面観察によって遺構の認定を行なった。精査にあたっては、原則として掘り込み面５cm 付近までを作業員が掘削し、以後は調査員が注意をはらいながら完掘した。

⑤遺物の記録

Ⅲ層最下部以下に包含される各種人工遺物・搬入礫・大型種実・自然木の出土位置の記録を行なった。このほか、微細木炭のおおまかな分布状況を把握するため、Ⅴ層の掘削が終了したのちⅥ層上面での出土位置の記録を全域にわたり行なった。これらの作業は測量業者に委託し、トータルステーションによって記録した。

⑥遺物の取り上げ

土器・石器・搬入礫・大型種実と各種木製品・自然木に二大別し、それぞれ別個の通し番号を付けた。

⑦微細遺物の採取

本遺跡では低湿な土壌環境におかれることから、植物遺体が良好に遺存していた。それらの中には手作業による発見が困難な微細種子や破片化した食料残渣などを含むことから、遺物包含層と遺構覆土の一部を回収し、土壌水洗によって抽出にあたった。

⑧層序記録

発掘調査区周囲の壁面、周辺に設けたトレンチ壁面、調査区内の大グリッドに沿って設定したトレンチ壁面、遺構調査時のサブトレンチ壁面の層序図作成を測量業者に委託した。このうち遺構調査に伴うサブトレンチの層序は手作業で計測したが、その他については写真実測を行い、現場において図面チェックにあたった。

⑨遺構平断面図・遺物微細図の作成

遺構断面図は 1/20 で作成し、平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて取得したデータを基にキャドで作成した。遺物微細図は手取りと測量業者による写真測量を併用して作成した原図を、調査員が修正・加筆した。

⑩写真撮影

層序・遺構・遺物出土状況などの写真撮影にあたっては、35mm リバーサルフィルム・35mm モノクロフィルム・デジタルカメラを使用した。このうち特に重要と判断されるものについては６×７版リバーサルフィルムを使用し、必要に応じて俯瞰撮影を行った。

全長 10m 以上におよぶ壁面層序については、35mm フィルムとデジタルカメラによって主要部分を撮影し、層序図作成のためのデジタル写真を全体的な撮影記録とした。

B　調　査　経　過

本発掘調査は市埋蔵文化財センターの担当職員１名と民間調査会社（株式会社シン技術コンサル）の調査員２名が専従する体制で平成 19 年６月８日に着手した。作業初日は、調査区東部に層序記録と排水を兼ねたＡトレンチを設け、北部から掘削を開始した。ところが、当初調査範囲外であったＡトレンチ内から多数の縄文土器が出土し、遺跡範囲の見直しを迫られることになった。以後６月 20 日から７月 10 日にかけてＢ～Ｅトレンチを周囲に設け、遺跡の大まかな範囲を確定させた。

７月 11 日までに１区および３区の表土掘削を終了し、13 日からは本格的な発掘調査に着手した。以後９月末までの間は１区の下層と３区の上層・下層調査を併行して実施した。

３区上層の調査は、７月 13 日～ 23 日に大グリッドに沿ってⅢ層内でのトレンチ掘削を行なった後、Ⅴｃ層上面までの面的調査に着手した。９月 11 日にローリングタワーから全体写真を撮影し、主要な調査を終了した。

下層の調査は７月 23 日から８月１日までの間に１区でのトレンチ掘削を行ない、終了後南西部からⅤｄ層までの包含層調査を開始した。以後１区の包含層調査は８月 31 日までの間に行ない、８月７日から 21 日までの間に北西部の６グリッドを対象とした微細遺物検出用土壌採取を行なった。包含層調査と併行し、８月 19 日からはⅥ層上面での遺構探査を開始し、９月 14 日に１区全体の調査をひとまず終了した。９月３日からは３区内のトレンチをⅦ層まで下げるとともに、同月 11 日から 27 日までの間に下層遺構の調査と記録を行なった。下層調査の進行に伴い１区北部の未調査区まで遺物包含層が広がることが判明したため、９月３日から 21 日まで

順次拡張作業を進めた。拡張終了後の９月 25 日には、同地区内でのトレンチ掘削を行なった。

稲刈り後の 10 月１日からは、調査員１名を増員し２区の調査に着手した。表土掘削後にトレンチを設け、10 月４日から６日までに上層の面調査を行った。２区においても調査区東側へ遺物包含層が広がることが明らかになったため、10 月 19 日から 11 月６日までの間に拡張作業を行い、発掘調査区の全体面積が確定した。Ｂ～Ｅトレンチを含めた最終的な発掘調査面積は、上端が 3,038.9㎡、下端が 2,825.9㎡である。

１区下層の遺構調査は 10 月に入り本格化し、10 月５日から記録作業に入った。調査の進展に伴い、調査区中央に土坑群が帯状に分布する状況が明らかになり、10 月１日からは１区、同月 11 日からは２区の遺構空白エリアに５ｍ間隔のトレンチを入れ遺構確認を進めた。11 月 19 日には現地説明会を開催し、雨天ではあったが 120 名あまりの参加者があった。これに先立ち 11 月 17 日には第１回目の空中写真撮影を行なった。

11 月 22 日からは遺構調査と併行し１区東側の面下げを開始し、範囲を順次拡大しながらⅦ層上面まで掘削した。下層調査が進むなかで、直径 20cm 未満の木柱もしくは杭が１区から２区にかけて分布することが明らかになってきた。掘立柱建物の柱根の可能性があることから周囲の木柱探査を 11 月 26 日から開始し、Ⅵ層上面から 10cm を目安とした面下げ作業を１区・２区の全域および３区北半部を対象に行なった。12 月 13 日には２回目の空中写真撮影を行ない、12 月 18 日に主要遺構の記録作業を終了した。翌 19 日には遺構密集域周辺の面下げを行ない、実質的な調査を終えた。12 月 20 日に１区内２箇所で深掘りを行い、Ⅶ層以下の層序確認を行なった。以後は木柱の取上げ、壁面の剥ぎ取り、壁面層序の記録、自然科学分析用土壌サンプルの採取などを行ない、12 月 28 日に現地調査を完了した。

なお、微細遺物の回収を目的とした土壌水洗を９月５日～ 11 月 18 日の間に現地で行なった。

Ｃ　調　査　体　制

【第１次調査】

調　査　主　体	小須戸町教育委員会（教育長：吉田恒夫）
調　査　指　導	新潟県教育庁文化行政課　埋蔵文化財係長　北村亮
調　査　担　当	石川智紀・春日真実（新潟県教育庁文化行政課主任調査員）
調　査　員	潮田憲幸（白根市教育委員会生涯学習課主事）
事　務　局	小須戸町教育委員会教育課（課長：五十田美智子・係長：丸山賢）

【第２次調査】

調　査　主　体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所　管　課	新潟市総務局国際文化部歴史文化課（課長：渡邊ユキ子・課長補佐兼文化財係長：倉地一則）
事　務　局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：手島勇平）
調　査　担　当	潮田憲幸（新潟市埋蔵文化財センター主事）

【本調査（第３次調査）】

調　査　主　体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所　管　課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：山田一雄・埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事　務　局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調　査　担　当	前山精明（新潟市埋蔵文化財センター副主幹　）
調　査　員	折井敦・青木利文・細野高伯（株式会社シン技術コンサル）
整 理 補 助 員	青池光子・小野里江梨子・佐々木陽子・佐藤則子・関根里江（新潟市短期臨時職員）

第3節　整　理　作　業

A　整　理　方　法

1）遺　　物

①遺物の洗浄・註記

整理補助員が作業にあたった。遺物の註記方法としては､発掘調査年度「07」･大沢谷内北遺跡の記号「OSYK」遺構出土遺物の場合遺構名・取上げナンバー・出土層位、の順に記入した。

②微細遺物の抽出・集計

整理補助員が抽出・集計した。

③土器の接合・復原

整理補助員が行なった。本遺跡出土の土器は概して保存状態が良好であるが、接着剤による接合だけでは不十分な個体が多数を占めた。そのため原則的に石膏を補填剤として使用し、撮影条件を考慮して補填箇所の着色を行った。復元作業は、胎土観察などを配慮し、展示に適した最小限の個体にとどめた。

④遺物の実測・トレース

土器・礫石器・搬入礫・木製品については、素図の作成を整理補助員が行なったのち、前山が製図した。剥片石器の実測・トレース、礫石器・搬入礫・木製品のトレースは、前山が行なった。杭に関する素図作成と土器に関するトレースは、主として株式会社シン技術コンサルが行った。

⑤遺物写真撮影

保存処理以前の漆製品（竪櫛）・木製品（櫂）と剥片石器については佐藤俊英氏（ビッグヘッド)、図版に掲載したその他の土器・石器・搬入礫・木製品については株式会社シン技術コンサルが撮影した。大型可食種子・貝類・保存処理後の竪櫛は、前山の撮影による。

2）遺　　構

①遺構の検討・修正

調査段階において群集して検出された下層の土坑について遺構覆土や遺物の接合状況などから検討を行った。その結果、立ち上がりの不明瞭な土坑について覆土の分層が自然堆積土と連続していたり、遺物も包含層出土的な接合をするものが多く見受けられた。そのため再度遺構の認定について検討を行い、基準外のものについては修正を行った。詳細な検討・結果については第Ⅶ章第１節に記した。

②図面の作成

平面図の作成にあたっては、測量業者に委託しトータルステーションを用いて取得したデータをキャドにより作成した遺構平面図と１/20 の手取り断面図との校正作業を行った。各図面およびトレース図の作成は、校正した図面をもとに株式会社シン技術コンサルがデジタルで処理を行った。

B　整　理　経　過

平成 19 年度から 21 年度までの３年間に基礎的な整理から報告書作成に至る作業を行なった。

平成 19 年度は、発掘調査と併行して遺物の洗浄・註記を行ない、現地調査終了後の１月から３月にかけて、記録類の基礎整理および土器の接合、土壌水洗をつうじて採取した微細遺物の抽出を行った。自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、土壌分析・樹種同定を実施した。

平成 20 年度は、土器・石器類・木製品の実測作業と土器の復原を行い、遺構に関する図版作成・一覧表作成・本文執筆を行った。

平成 21 年度は前山と伊比が主として報告書作成作業にあたり、遺構・遺物の検討および遺物実測図のトレー

ス、図版作成、原稿執筆、報告書の編集作業を行なった。各種図版のデジタルトレース・主要遺物の写真撮影などは株式会社シン技術コンサルが行った。また、自然科学分析の追加調査として、^{14}C 年代測定・種実同定・石器の産地推定および肉眼鑑定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、あわせて杭の年輪解析を木村勝彦氏（福島大学）に依頼した。

C　整　理　体　制

【平成 19 年度】

調　査　主　体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所　　管　　課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：山田一雄・埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事　　務　　局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調　査　担　当	前山精明（新潟市埋蔵文化財センター副主幹）
調　　査　　員	折井敦・青木利文（株式会社シン技術コンサル）
整 理 補 助 員	青池光子・小野里江梨子・佐々木陽子・佐藤則子・関根里江（新潟市短期臨時職員）

【平成 20 年度】

調　査　主　体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所　　管　　課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：山田一雄・埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事　　務　　局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調　査　担　当	前山精明（新潟市埋蔵文化財センター副主幹）
調　　査　　員	折井敦（株式会社シン技術コンサル）
整 理 補 助 員	小柳和香・熊野敦子・関根里江・田村由実子・土橋益美・森岡綾子（新潟市短期臨時職員）

【平成 21 年度】

調　査　主　体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
所　　管　　課	新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課（課長：倉地一則・課長補佐：頓所洋一・埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事　　務　　局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調　査　担　当	前山精明（新潟市埋蔵文化財センター副主幹）
調　　査　　員	伊比博和（株式会社シン技術コンサル）

第Ⅳ章　遺　　跡

第１節　概　　要

本遺跡は近世まで存在した「大日潟」のエリア内に位置する。現在の地表面は、標高値 3.5m ～ 3.3m の平坦な地形をなす。発掘調査は国道法線内の全長（南北）90.45m・幅（東西）42.00m を対象とし、総面積 3038.9㎡にわたり実施した。調査区内の堆積土は、表土層から基盤層に至るまで７層に大別できる。Ⅵ層上面でみた調査区内の地形は北東へ向かって緩やかに傾斜し、南部と北部の高低差は 1.7m におよぶ。Ⅰ層･Ⅱ層は「大日潟」の干拓土、Ⅲ層は潟底堆積物にあたり、調査区全域に堆積する。Ⅳ層以下は分布域が一様でなく、Ｖｃ層がほぼ全域に、Ⅵａ層が標高の高い南半部、Ⅳ層～Ｖｂ層・Ｖｄ層・Ⅵｂ層は標高の低い北東部に分布する。

本遺跡では、中世・縄文時代の遺跡が層位を異にして形成されている。上層遺跡はⅢ層最下部に堆積した有機物混じりの粘土層（Ⅲｄ層）に形成される。確認された遺構は、井戸２基・土坑４基・杭４基からなり、いずれも調査区南部の高域エリアに分布することが特徴である。遺物包含層は存在しておらず、土坑の覆土上部から 13 世紀代と推定される漆器皿１点が出土したにとどまった。

下層遺跡は、地表面下 0.8m ～ 1.4m のＶｃ層からⅥｂ層までの間を形成層準とする。各層からは縄文時代晩期中葉の土器が比較的まとまって出土した。土器に明確な層位差はなく、ごく短期間に利用された遺跡と考えられる。空間的に見た遺跡の中心は調査区の中央部にあり、遺構・遺物の密集域が幅 20m ほどの帯をなして東西に連なる。その広がりは法線外の西部や東部に及び、全体範囲を明らかにすることはできなかった。

下層遺跡が形成されたＶｃ層～Ⅵｂ層は、いずれも低湿地堆積物の特徴をもつ。中でもⅥｂ層は湿性に富んでおり、植物性遺物や自然木が良好に遺存していた。Ⅴ層とⅥ層の土質には明瞭な違いがある。Ｖｃ層は土壌化した粘土層で、Ｖｄ層を境に離水化が進んだことをうかがわせる。

Ｖｃ層～Ｖｄ層の堆積期間内における遺構は、３基の焼土遺構に限定される。この遺構が位置する調査区西部ではⅥ層最上部にシルト層（Ⅵａ1 層）が堆積するが、同層内での明確な遺構は確認できなかった。下層遺跡における遺構の大半はシルト層下のⅥａ2 層を確認面とする。確認された遺構は、調査区西部を中心に群集する 239 基の土坑群と 30 本の杭からなる。低湿な環境下におかれ、居住条件が良好と言えない立地条件のなかでは、きわめて高い遺構密度と言えるものである。このうち土坑群については、現地調査終了後の整理過程においていくつかの問題点が明らかになった。遺構認定の妥当性に関わる重要な問題であり、以下にそれを要約する。

本遺跡下層の遺構調査は、Ⅵａ層が明瞭に分層できる高域部から着手した。しかし、土坑の立ち上がりが不鮮明なケースが少なからず存在するとともに、遺構覆土の分層線が周囲の自然堆積層と連続する傾向がみられた。これらの中には自然堆積層の起伏を遺構と誤認したものが含まれるおそれも否定できない。

一方、高域部に分布するⅥａ3 層は、調査区東部にいたりⅥｂ層へと移行する。東部の低域部では、Ⅵｂ層の層理構造が複雑化し、遺構調査の難易度はきわめて高いものがあった。

Ⅵａ層とⅥｂ層からは遺構外からも遺物が出土した。この中には、遺構覆土に包含される土器と接合したケースが見られる。遺構内外における遺物の接合関係については、第Ⅴ章第２節で詳細を述べる。

以上のように、本遺跡下層において発掘調査時点で把握した遺構の中には、何らかの疑義が生ずるものが存在する。しかし、現時点において遺構認定の妥当性を厳密に判断することは難しく、本章第３節では現地調査時の観察所見を提示した。

第２節　微地形と層序

発掘調査着手以前の調査区は、きわめて平坦な地形をなしていた。調査区中央の２区を境に小さな段差を認めるのみで、地表面の標高値は南部で 3.5m 前後、北部で 3.3m 前後を測る。これに対し、遺跡形成当時の地形は東に向かって緩やかに傾斜しており、南北での高低差は最大 70cm ほどにおよぶ。地表面から基盤層に至るまでの層序はⅠ層からⅦ層に大別できる。堆積環境の空間的な異なりから各層の分布域は一様でなく、調査区壁面およびトレンチでの層序記録をもとに作成した概略範囲を図版 14 に示した。各層位の堆積関係は、同図内の模式図のとおりである。図版 15 ～ 17 に主要壁面における堆積層序を示す。図版 15・16 の柱状図は１m 間隔で作成したものである。発掘調査区は全域が軟弱な土壌環境におかれていたが、噴砂などの明瞭な地震痕跡は確認できなかった。

第Ⅰ層

調査区全域を覆う水田耕作土である。しまりに欠ける粘土層で、Ⅱａ層の微細粒子を多量に含む。色調は灰褐色（Hue7.5YR5/ 2）を基本とする。調査区北部で 40cm ほどの厚さをもつが、平均的な層厚は 15cm 前後である。

第Ⅱ層

Ⅰ層とⅢ層の間に堆積した粘土層を本層とする。「大日潟」の干拓土にあたり、調査区全域に分布する。層厚 40cm 前後を測り、以下の２層に区分できる。

Ⅱａ層　青灰色（Hue 5B4/1）ないしは灰褐色（Hue7.5YR4/2）の色調をもち、やや硬質な粘土である。淡黄色～灰白色の微細粒子やⅡｂ層の小ブロックを比較的多く含む。

Ⅱｂ層　にぶい黄橙色（Hue10YR 7/2）の色調をもった未分解有機物混入粘土である。層厚は 10cm ～ 15cm ほどである。微細な未分解有機物が厚さ 1mm ほどのラミナを形成し、５mm 前後の間層をはさみながら最大 20 層あまりにわたり堆積する。干拓初期の段階に土砂が潟端から流入し、潟底に沈殿した堆積土と見られる。

第Ⅲ層

未分解有機物を多量に含むいわゆる「ガツボ層」で、「大日潟」の潟底堆積物にあたる。上面レベルは３区南端で 3.1m 台、１区拡張区北部で 2.6m 前後、下面レベルは３区南端で 2.6m 台、１区拡張区北部で 2.2m 前後を測る。本層は次の４層に大別でき、いずれも調査区全域に分布する。

Ⅲａ層　最上部に堆積する黒褐色（Hue7.5YR 2/2）粘土である。上部 5cm ほどは有機物の分解が進行した粘土層をなすが、下部に向かって有機物の含有量を増していく。

Ⅲｂ層　樹枝やイネ科植物の葉、径 20cm ～ 30cm 台の流木を多く含む有機物層である。色調は灰褐色（Hue7.5YR 4/2）を基本とし、Ⅲ層の中では有機物の分解度が最も低い。本層は、南部に向かうにつれて層厚を減じていく。層の中ほどには厚さ 2cm ほどの灰褐色粘土層が調査区全域にわたり概ね連続的に堆積する。軟質な粘土層で、調査時には火山灰の可能性も考慮されたが、その後の分析によって外部からの流入土であることが判明した。

Ⅲｃ層　有機物の分解が比較的進んだ粘質有機物層である。黒褐色（Hue7.5YR 2/2）を呈し、Ⅲ層のなかでは最も暗い色調をもつ。樹枝はさほど多く含まれておらず、微細な有機物が主体をなす。Ⅲｂ層とは対照的に南部へ向かい層厚を増していく。

Ⅲｄ層　微細な有機物を少量含む灰褐色(Hue7.5YR 4/2)粘土層で、最下部では有機物の分解が進み粘土化する。調査区の南部では後述のⅣ層～Ⅴｃ層の上に不整合な状態で堆積し、Ⅳ層～Ⅴｃ層の微細粒子を含むところもある。本層では中世に構築された遺構が存在する。遺構外から同時期の遺物は確認できなかったが、齧歯類によって集積されたクルミが存在しており、本遺跡の中では最も乾燥化が進んだ層準と考えられる。

第Ⅳ層

にぶい黄褐色（Hue10YR 7/2）の色調をもった軟質粘土層である。最大 10cm ほどの薄層として存在し、F 列以東の標高 2.5m 以下に分布する。1 区拡張区の 2.3m 域付近では最上部と最下部に微細な未分解有機物を含む。

第Ⅴ層

Ⅲ d 層もしくはⅣ層の直下からⅥ層上面までの堆積土を本層とする。二枚の黒色粘土層（Ⅴ a 層・Ⅴ c 層）とその間層（Ⅴ b 層）および最下部の未分解有機物含有層（Ⅴ d 層）に大別できる。

Ⅴ a 層　5 cm 前後の層厚をもつ軟質な黒色（Hue10YR 2/1）粘土である。Ⅳ層と似た分布をもち、F 列以東の低域部に堆積する。1 区拡張区ではⅣ層最下部と同様の微細な未分解有機物が上部に含まれる。

Ⅴ b 層　黄灰色（Hue2.5Y 6/1）ないしは灰白色（Hue2.5Y 7/1）の色調をもった軟質粘土である。最大 10cm ほどの層厚を有す。Ⅴ a 層よりいくぶん広い範囲に堆積するが、標高 2.4m 域より上部では層厚を減じ、2 区～3 区西部では欠落区域が存在する。一方、1 区拡張区では、下半部に灰白色粘土の薄層がラミナをなして介在する。

Ⅴ c 層　層厚 5cm 前後を測り、Ⅴ a 層とほぼ同様の色調および土質をもった黒色軟質粘土である。本層は縄文時代晩期の遺物包含層最上部にあたり、Ⅴ層の中では調査区のほぼ全域にわたり分布する唯一の層準でもある。調査区南部の高域部でやや淡色化するほかは土質に違いはなく、きわめて安定的な特徴をもった堆積層と言える。

Ⅴ d 層　本遺跡における主要な遺物包含層準で、低域部のⅤ c 層直下に 5 cm ほどの層厚をもって堆積する。植根および草本種子を中心とした微細有機物や淡水産二枚貝の殻皮を多量に含み、Ⅴ c 層に較べいくぶん明るい黒褐色（Hue10YR 3/1）の色調をもつ。調査区の東部から北部の低域部では、淡色粘土のラミナ 3 ～ 5 枚を含む厚さ 3 cm 前後の灰褐色（Hue10YR 4/2）有機物含有粘土が本層直下に堆積しており、Ⅴ d’ 層としておく。

第Ⅵ層

Ⅴ層下からⅦ層までの間をⅥ層とする。本層は、未分解有機物を含む下部Ⅵ b 層とこれが欠落する上部Ⅵ a 層に大別され、後者については最上部のシルト層（Ⅵ a1 層）、シルト下の粘土層（Ⅵ a2 層）、その下部に堆積する酸化有機物含有層（Ⅵ a3 層）、Ⅶ層直上に堆積する粘土層（Ⅵ a4 層）に分けられる。Ⅵ a1 層～Ⅵ a3 層・Ⅵ b 層は遺物包含層で、調査時においてはⅥ層上面を遺構確認面とした。図版 14 に示す等高線はⅥ層上面の地形であり、調査区内の地形は東に向かって緩やかに傾斜する。微地形を見ると、2.2m ラインが 1 区中央部で東へ張り出し、その東延長部から調査区北端にかけて標高 2 m 以下の入江が広がることがわかる。

Ⅵ a1 層　Ⅴ d 層およびⅤ c 層直下に堆積する灰白色（Hue10YR 8/1）シルト層である。最大厚は 20cm 弱で、標高 2.2m 台の張出部以西と 1 区北西部の限られた範囲に分布する。Ⅴ d 層とは主たる分布域を異にするが、1 K-10G 区においてⅤ d 層が層厚を減じながら本層へと移行することから、堆積時期が一部重複するものと考えられる。

Ⅵ a2 層　軟質で含有物が乏しい明オリーブ灰色（Hue 5 GY 7/1）～オリーブ灰色（Hue 5 GY 6/1）粘土層である。最大厚は 30cm ほどを測り、下部へ向かって暗色化する。標高 2.3m 域以下の低域部では層内に未分解有機物を含むⅥ b 層へと移行することから、本層の分布域は調査区の西半部に限られる。

Ⅵ a3 層　有機物の分解･酸化に由来する黒色軟質微細粒子を含む粘土層である。Ⅵ a2 層より暗色化し、オリーブ灰（Hue 5 GY 6/1）の色調をもつ。黒色微粒子の含有量は下部ほど多く、灰褐色粘土を介在させながらラミナ状に堆積するところもある。Ⅵ b 層とは対照的に、分布域は調査区南西部に限定される。

Ⅵ a4 層　Ⅵ a 層を特徴づける黒色微粒子が分解・消失した青灰色（Hue 5 B 6/1）粘土層である。標高 2.4m 以上のⅦ層直上に堆積し、分布域は調査区南西部に限られる。

Ⅵ b 層　樹木･種子などの未分解有機物や淡水産二枚貝が良好な状態で遺存する軟質粘土層である。標高 2.5m 以下に分布する典型的な水成堆積層で、北部では水生植物のヒシの実などが多量に含まれる。層内にラミナはほとんど形成されておらず、未分解有機物が攪拌状態で堆積する。色調は灰黄色（Hue2.5Y 7/2）を基本とする。本層に含まれる未分解有機物は上部において含有量が少ない傾向にあり、分層が可能な箇所については上部をⅥ

b’層とした。

第Ⅶ層

本遺跡の基盤層である。青灰色（Hue 5B 6/1）粘土層で、Ⅵａ４層に較べ明色かつ鮮やかな色調をもつ。調査区南西部では、最上部に１～２mmの厚さをもった暗青色粘土がやや不連続な状態で堆積する。

第３節　遺　　構（図版５～35、写真図版１～27）

A　遺構の概要

遺構の説明は縄文時代（下層）の遺構（土坑SK、焼土遺構SX、土器集中、堅果類集中、杭Pit）、上層検出の遺構（土坑SK、井戸SE、杭Pit）の順に記し、遺構個別実測図版の掲載順と対応させている。

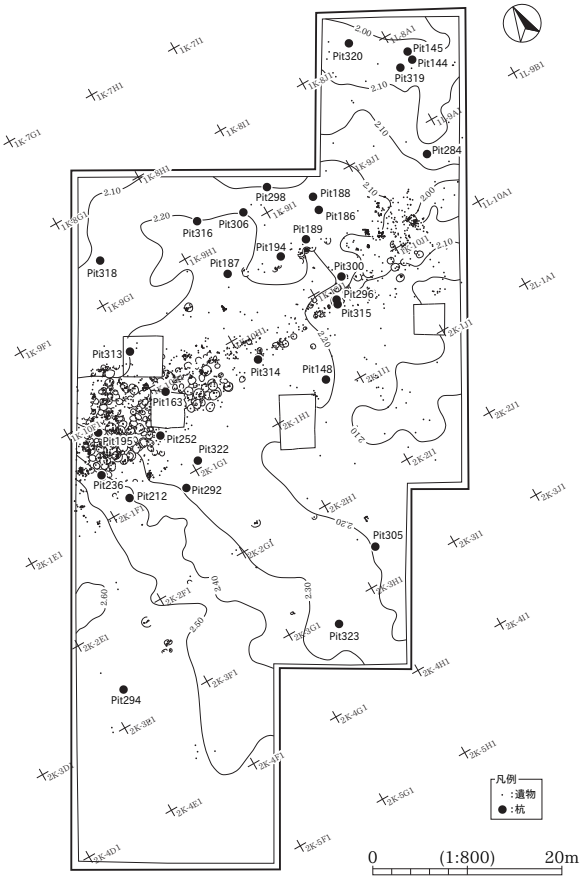
遺構番号は上層遺構・下層遺構ごとに、遺構の種別に関係なく検出順に通し番号を付した。ただし、検出段階に遺構番号を付した掘り込みで、調査の結果、撹乱と判断されたものはその番号を欠番とした。また、下層遺構・上層遺構の区別をするために上層遺構は1001番から付してある。

遺構の形態分類・覆土の堆積状況については和泉A遺跡での分類〔加藤・荒川1999〕を参考にしている。本遺跡検出遺構の平面形状は円形・楕円形・長楕円形・不整円形・不整楕円形・隅丸方形に分類でき、断面形状は半円状・弧状・台形状・袋状・箱状・階段状である。覆土堆積状況は単層、レンズ状、水平、斜位、水平レンズ状堆積に分類した。

遺構図には出土遺物をドットで表示した。断面図もしくはエレベーション図の表示は投影法による。

以下に本遺跡で主体となる縄文時代の遺構の概略を記す。

土坑（SK）　土坑の検出層位は遺物包含層であるシルト質層を除去したⅥa2層もしくはⅥb’層上面である。土坑の分布は１区西側1K-9F･10Fグリッドと1K-10Gグリッド北側に最も集中し、重複が著しい。そこから1K-9･10H～Jグリッドの１区東側に向かうにつれて分布状況は希薄となるが帯状に連なる。遺物の出土状況と合わせると（第８図）、土坑の分布と相関していることがよくわかる。この帯状分布域から南にはずれた2K-2ライングリッドにも少数であるが分布している。個々の土坑の特徴としては平面形が円・楕円形のものが大半であり、多くは断面形状が弧状・半円状・台形状からなる。深度は非常に浅く10～20cmにおさまり、下層の未分解有機物含有層であるⅥb層上面までのものがほとんどである。覆土の堆積形状は単層のものが最も多くほぼ５割を占め、複数層の場合は水平堆積が大半である。覆土の内容物では、微粒から径10mmくらいまでの炭化物を微量から少量含むものが多い。



第８図　杭・土坑の分布と遺物の分布

焼土遺構（SX）　周辺に柱穴が存在せず、堆積状況から住居の炉とは考えにくいものを焼土遺構とした。焼土遺構の検出層位は遺物包含層であるⅥa1層中であり、土坑とは検出層位が異なる。1K-9･10F･Gグリッドの交点付近に位置し、３基が重複・近接している状況で検出された。SX5の周囲には土器片が散在していた。本遺跡

内での焼土遺構はこの地点のみであり、遺物分布域、土坑・杭の分布域と重なる位置にあるためこれらとの関連性が予想される。

土器集中　遺物包含層中で土器が密に分布し、下部に土坑が存在しないものを土器集中とし、6箇所認定した。土器の集中箇所は他にも存在するが土器集中には共通点が認められ、土器片の大半が内面を上向きにし、それらが積み重ねられており、廃棄行為の中にさらなる意図的な行為が認められるものである。土器が単体の場合もあれば、数個体の土器片が積み重ねられた場合もある。

堅果類集中　調査区内全域にクルミが散在していたが、1箇所だけ集中している箇所が確認された。核はいずれも割れておらず、人為的な利用痕跡は認められない状況である。

杭（Pit）　先端に加工痕が見られる木材で、地山に打ち込まれている。木材の太さは直径10～15cmくらいのものが多い。現存する長さは最も短いものが22cm、最も長いものが160cmとばらつきが大きい。直立するものはほとんどなく、横倒しに近いものもある。分布状況は土坑・遺物の帯状分布域と重なり、さらにその北側にも広がる。調査区南側にも散在する（第8図）。遺物密集域と杭の分布域の中心が重なることから、両者に何らかの関連性が予想される。杭の性格については第Ⅶ章第1節に記した。

B　遺　構　各　説

1）下層（縄文時代）の遺構

土坑（SK）

SK113（図版8・18）　1K-9F13グリッドに位置する。Ⅵa2層上面で検出した。平面形は推定円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は推定直径約0.40m、深さ0.20mである。覆土は水平2層、上層が暗灰黄色粘土、下層は炭化物を微量含む黒褐色粘土であり、分層線が自然堆積層と連続する。出土遺物はない。

SK75（図版8・18）　1K-9F14グリッドに位置する。SK114と近接する。Ⅵa2層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸0.56m、短軸0.54m、深さ0.12mである。覆土は単層、炭化物を微量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK74（図版8・18）　1K-9F19・20グリッドに位置する。北側のほぼ半分が第2次調査トレンチにより切られる。Ⅵa2層で検出した。平面形は残存する南側の形状から円形とした。断面形は弧状である。規模は推定直径約0.6m、深さ0.16mである。覆土はレンズ状2層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK114（図版8・18）　1K-9F19グリッドに位置する。Ⅵa2層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸1.06m、短軸0.92m、深さ0.16mである。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK91（図版8・18）　1K-9F19グリッドに位置する。SK246を切る。Ⅵa2層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸0.98m、短軸0.74m、深さ0.16mである。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK92（図版8・18）　1K-9F18・19・23・24グリッドに位置する。SK246を切り、SK93と接する。Ⅵa2層上面で検出した。平面形は円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径0.58m、深さ0.12mである。覆土は水平2層、上・下層とも暗灰黄色粘土で、下層はやや暗い。出土遺物はない。

SK246（図版8・18）　1K-9F19・24グリッドに位置する。SK91・92に切られる。Ⅵa2層上面で検出した。平面形は残存部分の形状から楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸0.58m、短軸推定0.50m、深さ0.14mである。覆土は水平2層、上・下層とも暗灰黄色粘土で、下層は炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK93（図版8・18）　1K-9F18・23グリッドに位置する。SK115に切られ、SK92と接する。Ⅵa2層上面

で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.80m、短軸 0.54m、深さ 0.14m である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色粘土、下層は炭化物を少量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK115（図版８･18）　1K-9F18･23 グリッドに位置する。SK93 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径 0.47m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上・下層とも暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK218（図版８・18）　1K-9F19・24 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は推定円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.30m、深さ 0.16m である。覆土は単層、黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK116（図版８･18）　1K-9F17･18･22･23 グリッドに位置する。SK137 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。西側約３分の１が調査区外周の排水トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.82m、深さ 0.20m である。覆土はレンズ状２層、上・下層とも黄灰色粘土で下層は炭化物を微量含むが、分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK137（図版８・18）　1K-9F23 グリッドに位置する。SK116 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は円形、断面形は弧状である。規模は直径 0.57m、深さ 0.20m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK117（図版８･18）　1K-9F22 グリッドに位置する。西側を排水トレンチで切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さが約 0.20m の半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は水平２層であるが、分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK119（図版８・18）　1K-9F22 グリッドに位置し、SK120 を切る。西側を排水トレンチで切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は残存部分の形状から楕円形としたが規模は不明である。断面形は深さ約 0.16m の弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黄灰色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK120（図版８・18）　1K-9F22 グリッドに位置し、SK119 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形､断面形は半円状であるが､立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸 0.55m､短軸 0.38m､深さ 0.19m である。覆土はレンズ状２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK251（図版８・18）　1K-9F22 グリッドに位置する。北側の半分以上が排水トレンチで切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さが 0.20m の半円状である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK36（図版８・18）　1K-9F21・22、10F １・２グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。西側が排水トレンチ、南側が遺構確認トレンチでそれぞれ切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.14m の弧状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK37（図版８・18）　1K-9F22、10F2 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径推定 0.54m、深さ 0.18m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK38（図版８・18）　1K-9F23、10F3 グリッドに位置し、SK40・143 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。南側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は弧状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径推定 0.60m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄

色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土である。覆土上位・中位から各１点土器片が出土した。

SK40（図版８・18） 1K-9F23、10F3 グリッドに位置し、SK38 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。残存部分での断面形は深さが 0.15m の弧状である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。分層線と自然堆積層が連続している。出土遺物はない。

SK122（図版８・18） 1K-9F22・23 グリッドに位置し、SK139・143・146 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径 0.62m、深さ 0.17m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK143（図版８・18） 1K-9F23、10F3 グリッドに位置し、SK38・122 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は残存部分の形状から楕円形と推測するが、規模は不明である。断面形は深さ 0.15m の半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。覆土は単層、暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK146（図版８・18） 1K-9F22・23、10F2・3 グリッドに位置し、SK122 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径推定 0.60m、深さ 0.14m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK147（図版８・18） 1K-9F22、10F2 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径推定 0.51m、深さ 0.17m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK138（図版８・19） 1K-9F23 グリッドに位置し、SK139・140 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸 0.80m、短軸 0.58m、深さ 0.19m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘土、下層は炭化物を微量含む黄灰色粘土であるが、分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK139（図版８・19） 1K-9F23 グリッドに位置する。SK122・138 に切られ、SK38 と近接する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸 0.80m、短軸 0.60m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、いずれも炭化物を微量含む暗灰黄色粘土であるが、分層線が SK138 の分層線と連続している。出土遺物はない。

SK131（図版８・19） 1K-9F24 グリッドに位置し、SK132・141・219 に切られ、SK140 と近接する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.94m、短軸 0.86m、深さ 0.10m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK132（図版８・19） 1K-9F24 グリッドに位置し、SK131 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.57m、短軸 0.44m、深さ 0.13m である。覆土は水平２層で、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘土、下層は黒褐色粘土であるが、分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK140（図版８・19） 1K-9F23 グリッドに位置し、SK138・219 に切られ、SK139 と近接する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.72m、短軸 0.64m、深さ 0.10m である。覆土はレンズ状２層で、上層が炭化物を少量含む暗灰黄色粘土、下層は炭化物を微量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK219（図版８・19） 1K-9F23・24 グリッドに位置し、SK131・140 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は円形、断面形台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.58m、短軸 0.44m、深さ 0.13m である。覆土は単層、板状の木炭および炭化物を少量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK141（図版8・19）　1K-9F24 グリッドに位置し、SK131・142 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸 0.72m、短軸 0.65m、深さ 0.16m である。覆土は水平3層、上層が黄灰色粘土、中層が炭化物を微量含む黄灰色粘土、下層は暗灰黄色粘土である。分層線と自然堆積層が連続している。覆土下位から土器片1点が出土した。

SK130（図版8・19）　1K-9F24 グリッドに位置する。SK133 と近接するが、サブトレンチのため新旧関係等は不明である。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.37m、深さ 0.11m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK133（図版8・19）　1K-9F24・25 グリッドに位置する。SK130 と近接するが、サブトレンチのため新旧関係等は不明である。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸推定で 0.80m、短軸 0.70m、深さ 0.13m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。覆土中から深鉢体部片（P1）が出土した。

SK134（図版8・19）　1K-9F25 グリッドに位置し、SK223 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 1.18m、短軸 0.92m、深さ 0.16m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK135（図版8・19）　1K-9F24、10F4 グリッドに位置し、SK142 に切られ、SK136 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さが 0.13m の弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK136（図版8・19）　1K-9F24、10F4 グリッドに位置し、SK135 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出でした。南側が遺構確認トレンチで切られるが、平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.22m、深さ 0.16m である。覆土は水平2層、上・下層とも黄灰色粘土で、下層は炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK142（図版8・19）　1K-9F24、10F4 グリッドに位置し、SK135 を切り、SK141 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さ 0.15m の台形状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。覆土は水平2層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘土、下層は暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK223（図版8・19）　1K-9F25、10F5 グリッドに位置し、SK134 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さが 0.12m の弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は水平2層で、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK49（図版8・19）　1K-10F1 グリッドに位置し、SK59 を切る。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.74m、短軸 0.54m、深さ 0.16m である。覆土は水平2層で、上層が炭化物を少量含む黄灰色粘土、下層は黒褐色粘土であるが、分層線が自然堆積層と連続する。出土遺物はない。

SK59（図版8・19）　1K-10F1・2 グリッドに位置し、SK49・58 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は台形状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸推定 0.49m、短軸 0.41m、深さ 0.17m である。覆土は水平2層、上・下層とも黄灰色粘土で、上層は炭化物を微量含む。分層線が自然堆積層と連続する。出土遺物はない。

SK58（図版8・20）　1K-10F2 グリッドに位置し、SK59 を切り、SK184 に切られる。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.73m、短軸推定 0.48m、深さ 0.14m である。覆土は単層、

炭化物を少量含む黄灰色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK184（図版８・20） 1K-10F2 グリッドに位置し、SK58 を切る。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られ、残存部分が少なく平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.20m の半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。覆土は水平２層、上・下層とも暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を少量ないし微量含む。出土遺物はない。

SK32（図版８・20） 1K-10F2 グリッドに位置し、SK39 を切り、SK51 に切られる。Ⅵ a2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.87m、短軸 0.64m、深さ 0.20m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。分層線と自然堆積層が連続している。覆土下位から３点土器片が出土した。

SK39（図版８・20） 1K-10F2 グリッドに位置する。SK32・33 及び Pit195 に切られ、SK58 と近接する。Ⅵ a2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.60m、短軸 0.46m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黄灰色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。出土遺物はない。

SK51（図版８･20） 1K-10F2 グリッドに位置する。SK32 を切り、SK58 が近接する。Ⅵ a2 層上面で検出した。平面形は長楕円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.60m、短軸 0.39m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土である。分層線と自然堆積層が連続している。出土遺物はない。

SK33（図版８・20） 1K-10F2 グリッドに位置する。SK34・39 を切る。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸不明、短軸推定 0.42m、深さ 0.18m である。覆土はレンズ状２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は上層より暗い黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK34（図版８・20） 1K-10F2・3 グリッドに位置する。SK33 に切られる。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さが 0.19m の弧状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK60（図版８･20） 1K-10F3 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。残存部分での断面形は深さ 0.20m の半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黄灰色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK154（図版８・20、写真図版６） 1K-10F3 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。サブトレンチにより SK157 との新旧関係等は不明である。また北側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.22m の弧状であるが立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK157（図版８・20、写真図版６） 1K-10F3・4 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。サブトレンチにより SK154 との新旧関係等は不明である。また北側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.18m の台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。覆土下位から深鉢の体部片（P2）が出土した。

SK206（図版８・20） 1K-10F4・5 グリッドに位置する。SK210 を切る。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られ平面形・規模は不明である。断面形は深さが 0.12m の弧状である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量ないし少量含む。出土遺物はない。

SK210（図版８・20） 1K-10F4 グリッドに位置する。SK206 に切られる。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が

遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さが 0.13m の弧状である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK70（図版８・20、写真図版 10） 1K-10F5 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。残存部分での断面形は深さ 0.19m の半円状と考えるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK127（図版８・20） 1K-10F5 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.21m の半円状である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK44（図版８･20） 1K-10F6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK46 を切り、SK54 と接する。西側が排水トレンチで切られるため平面形・規模は不明である。残存部分での断面形は深さ 0.12m の弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土はレンズ状２層、上下層とも炭化物を少量ないし微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK46（図版８・20） 1K-10F6 グリッドに位置する。SK52 を切り、SK44 に切られる。SK47 との切合い関係は不明である。Ⅵ a2 層上面で検出した。西側の半分以上が排水トレンチで切られるため平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.15m の弧状である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。覆土中位にて土器片（P4）が出土した。SK52 と接合関係にある。

SK47（図版８・20） 1K-10F1・6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK48・52 を切り、SK214 に切られる。また SK53 と接する。SK46 との切合い関係は不明である。平面形は隅丸方形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸不明、短軸 0.64m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘土、下層は黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK48（図版８・20、写真図版６） 1K-10F1・6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK47 に切られ、SK53 と接する。西側の一部が排水トレンチに切られるが、平面形は残存部分の形状から不整円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は直径 0.68m ほどと推定され、深さは 0.16m である。覆土は水平２層、上・下層とも黒褐色粘土で、上層は炭化物を微量含む。出土遺物はない。

SK214（図版８・20） 1K-10F6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK47 を切る。遺構北側をトレンチで切られ全体形は不明であるが、残存部から平面形は円形と推測した。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.45m、深さ 0.15m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK52（図版８・20、写真図版６） 1K-10F6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK46・47・53 に切られる。平面形は残存部分の形状から不整円形とした。断面形は弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.88m、深さ 0.18m である。覆土は水平３層、上層は炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルト、中・下層は黒褐色粘土である。分層線が自然堆積層と連続している。覆土上位～中位にかけて土器片がまとまって出土した。このまとまりは P4･5 の２個体であり、ほかに P3 が出土した。P4 は SK46 出土土器と、P3 は上位包含層、P5 は下位包含層出土土器と接合関係にある。また覆土下位からクルミ１点が出土した。

SK54（図版８･20） 1K-10F6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK45 に切られ、SK44 と接する。平面形は楕円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.76m、短軸 0.66m、深さ 0.19m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK53（図版８・20、写真図版６） 1K-10F6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK52 を切り、SK47・48 と接する。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は半円状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸 0.62m、短軸推定 0.48m、深さ 0.19m である。覆土はレンズ状２層、上層が炭化物

を微量含む暗灰黄色粘土、下層は炭化物を少量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK82（図版８・20）　1K-10F1・2・6・7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形と推測した。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.46m、短軸不明、深さ 0.19m である。覆土はレンズ状２層、上層が黄灰色粘土、下層は炭化物を少量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK50（図版８・21、写真図版６）　1K-10F7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK209 に切られ、SK83 と接する。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.95m、短軸 0.72m、深さ 0.16m である。覆土はレンズ状２層で、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層が黒褐色粘土である。底面から深鉢口縁部片（P6）が出土した。

SK83（図版８･21）　1K-10F6･7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK235 を切り、SK55 に切られ、SK50 と接する。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸推定 0.86m、短軸 0.68m、深さ 0.18m である。覆土は単層の黒褐色粘土で炭化物を少量含む。覆土下位から深鉢の口縁部片（P7）が出土した。

SK209（図版８・21）　1K-10F2・7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK50 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.52m、短軸 0.43m、深さ 0.18m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK45（図版８・21、写真図版６）　1K-10F6・7・11・12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK54・253 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.94m、短軸 0.75m、深さ 0.17m である。覆土は単層で、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土から深鉢体部片（P8）が出土した。P8 は SK55 出土の P11 と同一個体である。

SK235（図版８・21）　1K-10F7 グリッドに位置する。SK55・83 に切られ、SK253 を切る。平面形は残存部分の形状から不整楕円形と推測した。断面形は深さが 0.19m の弧状である。覆土は単層の黒褐色粘土で炭化物を少量含む。底面付近から接合する石皿片２点（S16）が出土した。

SK56（図版８・21）　1K-10F7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK50・55 と近接する。平面形は隅丸方形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.75m、短軸 0.58m、深さ 0.10m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を少量含む黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK26（図版８・21）　1K-10F12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK215・253 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.68m、短軸 0.56m、深さ 0.12m である。覆土は水平２層で、上･下層はともに暗灰黄色粘土であるが上層は炭化物を少量含む。分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK55（図版８・21）　1K-10F7・12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK83・215・235・253 を切り、SK73 に切られる。平面形は円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 1.38m、短軸 1.35m、深さ 0.13m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘土、下層は黒褐色粘土である。上層は炭化物を少量、下層は炭化物を微量含む。覆土中位から土器片８点が出土し、うち深鉢２個体の土器片（P11･12）を図示した。P12 は SK45 出土土器片（P8）と同一個体である。

SK253（図版８・21、写真図版６・７）　1K-10F7・12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK26・45・55・215・235 に切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は浅い弧状である。規模は長軸推定 0.72m、短軸不明、深さ 0.10m である。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘土である。覆土下位から深鉢２個体の破片（P9･10）が出土した。P10 は下層Ⅵb’層出土土器片と接合している。

SK215（図版８・21）　1K-10F7・12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK253 を切り、SK26･55・73 に切られる。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形である。断面形は深さが 0.15m の弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土下位から土器片３点が出土した。SK73 出土の P13 と同一個体片である。

SK73（図版８・21、写真図版７） 1K-10F12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK55・198・215 を切る。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 1.02m、短軸 0.80m、深さ 0.12m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土である。覆土から土器片 36 点が出土した。すべて同一個体の深鉢（P13）であり、SK215 からも同一個体片が出土している。

SK198（図版８・21） 1K-10F12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK85 を切り、SK73 に切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は浅い弧状である。規模は直径約 0.98m、深さ 0.12m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK43（図版８・21） 1K-10F11 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.60m、短軸 0.54m、深さ 0.12m である。覆土は単層、炭化物を少量含む灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK23（図版８・21） 1K-10F11 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.66m、短軸 0.62m、深さ 0.12m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を少量含む暗灰黄色粘土、下層は黒褐色粘土である。覆土下位から土器片１点が出土した。

SK129（図版８・21、写真図版７） 1K-10F11・12・16 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK199 を切る。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.83m、短軸 0.60m、深さ 0.13m である。覆土はレンズ状２層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土である。覆土から P14･15 が出土した。P15 の主体は重複する SK199 にある。

SK199（図版８・21、写真図版７） 1K-10F11 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。Pit236 の上位にあり、SK129 に切られる。平面形は楕円形、断面形は非常に浅い弧状である。規模は長軸 0.98m、短軸 0.56m、深さ 0.06m である。覆土は単層、炭化物を少量含む灰色粘質シルトである。覆土中から土器片 23 点（P15）が出土した。深鉢 1/2 個体分であり、SK129 と接合関係にある。また覆土中からクルミ１点が出土した。

SK57（図版８･22、写真図版７･８） 1K-10F3･8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK61･234 を切る。平面形は円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.54m、短軸 0.50m、深さ 0.23m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土分層線が重複する SK234 の分層線と連続している。覆土の中～下位から土器片 12 点が出土した。そのうち P22 ～ 24 の深鉢３個体の破片を図示した。P22 は SK65 から主体的に出土している。

SK61（図版８･22、写真図版７･８） 1K-10F2･3･8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK234 を切り、SK57 に切られる。平面形は円形、断面形は台形状である。規模は長軸 1.16m、短軸 0.96m、深さ 0.22m である。覆土は水平３層、上層が炭化物を少量含む黄灰色粘質シルト、中・下層は炭化物を少量ないし微量含む黒褐色粘土である。覆土下位から P16 ～ 19 が出土した。P19 は SK151 と接合関係にある。

SK234（図版８・22） 1K-10F2・3・7・8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK57・61 に切られる。平面形は残存部分の形状から長楕円形とした。断面形は台形状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸推定 0.69m、短軸 0.43m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土分層線が重複する SK57 の分層線と連続している。出土遺物はない。

SK63（図版８･22、写真図版８） 1K-10F8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK64･244 を切り、SK62・76 に切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.74m、短軸推定 0.54m、深さ 0.20m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土から深鉢の体部片（P35）が出土した。

SK64（図版８・22、写真図版８） 1K-10F8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK244 を切り、SK63・65・167 に切られる。平面形は楕円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸推定 0.83m、短軸 0.55m、深さ 0.20m である。覆土は水平３層、上層が暗灰黄色粘質シルト、中・

下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土から深鉢（P28）と黒曜石の剥片 1 点（S5）が出土した。P28 は SK167 から主体的に出土しており、SK65、下層Ⅵ a3 層からも出土している。

SK65（図版 8・22、写真図版 8） 1K-10F3・8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK64・237 を切り、SK61 と接する。平面形は円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭な部分がある。規模は長軸 1.06m、短軸 1.04m、深さ 0.21m である。覆土は水平 2 層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土上位から 3 点・中位から 5 点・下位から 26 点土器片が出土した。うち深鉢 6 個体（P22・25 ～ 29）を図示した。P22 は SK57 から同一個体が出土しており、P28 は SK164 から主体的に出土しており SK64 からも同一個体片が出土している。P29 は SK150 と下層Ⅵ a3 層から同一個体が出土している。

SK66（図版 8 ・22） 1K-10F3 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK238・239 との重複が推測されるものの、サブトレンチにより新旧関係は不明である。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形と推測した。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸不明、短軸推定 0.44m、深さ 0.18m である。覆土は水平 2 層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を微量ないし少量含む。覆土上位から深鉢体部片 1 点（P33）が出土した。

SK67（図版 8・22） 1K-10F9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK179 を切り、SK166 と接する。平面形は円形で、断面形は半円状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸 0.37m、短軸 0.33m、深さ 0.18m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK69（図版 8・22） 1K-10F4・9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK165 を切り、SK89 に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長軸推定 0.79m、短軸 0.62m、深さ 0.17m である。覆土は水平 2 層、上層が炭化物を少量含む黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を多量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK89（図版 8・22） 1K-10F4・9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK69 を切る。平面形は長楕円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.78m、短軸 0.50m、深さ 0.18m である。覆土は水平 2 層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。深鉢体部片 1 点（P36）が出土した。

SK165（図版 8 ・22） 1K-10F9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層検出である。SK166 を切り、SK69・150 に切られる。平面形は楕円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.80m、短軸 0.58m、深さ 0.20m である。覆土は水平 2 層、上層が炭化物を少量含む黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む黒褐色粘土である。覆土上位から土器片 1 点が出土した。

SK166（図版 8 ・22） 1K-10F9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK165 に大きく切られ、SK67 と接する。平面形は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さ 0.14m の弧状である。覆土は単層、黄灰色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK179（図版 8 ・22） 1K-10F8・9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK67・167 に切られ、SK150 と近接する。平面形は不整円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.85m、短軸は 0.72m、深さ 0.17m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘質シルトである。覆土下位から土器片 3 点が出土した。

SK150（図版 8・22、写真図版 8） 1K-10F9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK165 を切り、SK149 と接する。平面形は不整円形である。断面形は西側の一部が袋状にオーバーハングしており、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 1.12m、短軸 0.94m、深さ 0.22m である。覆土は水平 3 層、上層が黄灰色粘質シルト、中・下層は黒褐色粘土である。各層とも炭化物を少量ないし微量含む。覆土上位から深鉢体部片（P30）・底部片（P31）、下位から深鉢口縁～体部片（P32）・体部片（P29）が出土した。P29 は SK65 と下層Ⅵ a3 層から同一個体片が出土し、P32 は SK15 から同一個体が出土している。

SK167（図版 8・22、写真図版 9） 1K-10F8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK62・64・

179 を切る。平面形は楕円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.32m、短軸 0.30m、深さ 0.23m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土下位から深鉢の口縁～体部片（P28）が出土した。P28 は SK64･65 からも出土している。

SK237（図版８・22） 1K-10F3・4・8・9 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK65 に切られ、SK239 を切る。平面形は不整円形である。断面形は台形状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸 0.90m、短軸 0.77m、深さ 0.24m である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色粘土、下層は炭化物を微量含む黄灰色粘土である。覆土中位から深鉢体部片（P34）が出土した。

SK238（図版８・22） 1K-10F3・4 グリッドに位置する。Ⅵa2 層検出である。SK239 を切る。SK66 とは切り合いが推測されるものの、サブトレンチにより不明である。平面形は円形、断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.43m、深さ 0.20m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK239（図版８･22） 1K-10F3･4 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK237･238 に切られる。平面形は楕円形と推測したが規模は不明である。断面形は深さ 0.22m の台形状である。覆土は水平２層、上・下層とも黄灰色粘土で、いずれも炭化物を少量ないし微量含む。出土遺物はない。

SK243（図版８･22） 1K-10F7･8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK244 を切る。平面形は楕円形、断面形は浅い台形状である。規模は長軸 0.51m、短軸 0.43m、深さ 0.11m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK244（図版８・22） 1K-10F8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK63・64・243 に切られる。平面形は残存部分の形状から円形、断面形は半円状である。規模は直径 0.45m、深さ 0.14m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK72（図版８・23） 1K-10F4 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径 0.60m、深さ 0.18m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は褐灰色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土下位から土器片１点が出土した。

SK71（図版８・23、写真図版９） 1K-10F5 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK242 を切り、SK126 接する。平面形は楕円形である。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.71m、短軸 0.58m、深さ 0.21m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量ないし少量含む。分層線が自然堆積層と連続している。覆土中位から深鉢２点（P39･40）が出土した。P39 は SK90･164 からも出土している。

SK90（図版８・23、写真図版９） 1K-10F5 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK126 と接するもしくは切り合いが推測されるものの、サブトレンチにより不明である。平面形は残存部分の形状から円形もしくは楕円形と推測する。断面形は浅い半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.54m、短軸不明、深さ 0.15m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を多量含む暗灰黄色粘土であり、分層線と自然堆積層が連続している。覆土下位から土器片（P39）が出土し、SK71･164 と接合している。

SK205（図版８・23、写真図版９） 1K-10F10 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。南東側が第２次調査トレンチに切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部は明瞭でない。規模は長軸不明、短軸推定 0.35m、深さ 0.17m である。覆土は水平２層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黄灰色粘土である。覆土分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK207（図版８・23、写真図版９） 1K-10F4・5 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK242 を切り、SK164 に切られる。平面形は楕円形、断面形は弧状である。長軸 0.68m、短軸 0.56m、深さ 0.18m である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。覆土下

位から浅鉢（P38）と深鉢の体部片（P37）が出土した。P38 の底部は下層Ⅵ b’層から出土している。

SK242（図版 8・23、写真図版 9） 1K-10F5 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK71・207 に切られる。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.61m、短軸推定 0.42m、深さ 0.17m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK164（図版 8・23） 1K-10F4・5・9・10 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK207 を切る。平面形は楕円形、断面形は底面が狭い台形状である。規模は長軸 0.57m、短軸 0.40m、深さ 0.22m である。覆土はレンズ状 2 層、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を少量含む黒褐色粘土である。覆土分層線と自然堆積層が連続している。覆土下位から深鉢片 1 点（P39）が出土し、SK71・90 と接合している。

SK126（図版 8・23、写真図版 10） 1K-10F5 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK90 との重複が推測されるが、サブトレンチにより不明である。また南東側のほぼ半分が第 2 次調査トレンチにより切られるため、平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.23m の弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。覆土下位から深鉢体部片 2 点が出土し、P41 を図示した。

SK245（図版 8・23、写真図版 10） 1K-10F5 グリッドに位置する。SK126 と近接する。南東側は第 2 次調査トレンチに切られ遺存しない。平面形・規模は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さが 0.22m の台形状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土中位から土器片 2 点が出土した。

SK241（図版 8・23） 1K-10F9・10 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.58m、短軸 0.47m、深さ 0.17m である。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘土である。覆土下位から深鉢の体部片 1 点（P42）が出土した。

SK196（図版 8・23） 1K-10F9・10 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。南東側は第 2 次調査トレンチにより切られ遺存しない。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は弧状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.65m、深さ 0.16m である。覆土は水平 2 層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を微量ないし少量含む。覆土分層線が自然堆積層と連続している。覆土下位から土器片 1 点が出土した。

SK197（図版 8・23） 1K-10F10 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。南東側が第 2 次調整トレンチにより切られ遺存しない。平面形・規模は残存部分が少ないため不明である。断面形は深さ 0.12m の浅い弧状である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK62（図版 8・23、写真図版 10） 1K-10F8・13 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK63・180 を切り、SK76・167 に切られる。平面形は不整円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.90m、短軸 0.72m、深さ 0.28m である。覆土は水平 3 層、上層が黄灰色粘質シルト、中・下層が黒褐色粘土である。上・中層は炭化物を微量含む。覆土下位から深鉢体部片 6 点（P43）が、また中位からクルミ 1 点が出土した。P43 は重複する SK76 からも出土している。

SK76（図版 8・23、写真図版 8・10） 1K-10F8・13 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK62・63 を切る。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 1.13m、短軸 0.95m、深さ 0.11m である。覆土は単層、黄灰色粘質シルトで炭化物を微量ないし少量含む。覆土下位から深鉢体部片（P43）が出土した。P43 は重複する SK62 からも出土している。

SK180（図版 8・23） 1K-10F8・13 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK233 を切り、SK62・84 に切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形としたが規模は不明である。断面形は深さ 0.12m の弧状である。覆土は単層の黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK233（図版 8・23） 1K-10F8・9・13・14 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層上面で検出した。SK180 に切られる。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.63m、短軸 0.52m、深さ 0.19m である。覆土はレンズ状 2 層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量ないし少量含む。出土遺物はない。

SK86（図版８・23） 1K-10F14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK203･291 を切り、SK149 に切られる。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.84m、短軸 0.73m、深さ 0.14m である。覆土は水平２層、上層が黒褐色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を少量ないし微量含む。覆土上位から３点、下位から２点土器片が出土した。

SK149（図版８･23、写真図版８） 1K-10F9･14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK86 を切り、SK150 と接する。平面形は長楕円形である。断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.62m、短軸 0.40m、深さ 0.21m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む黒褐色粘土である。覆土中位からクルミ１点が出土した。

SK203（図版８・24） 1K-10F14・15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK204・291 を切り、SK86 に切られる。また Pit252 と近接する。平面形は楕円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.69m、短軸 0.46m、深さ 0.17m である。覆土は水平３層、上層が灰オリーブ色シルト、中層は暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土であり、中・下層は炭化物を微量含む。覆土分層線が自然堆積層と連続している。覆土下位から深鉢体部片１点（P44）が出土した。

SK204（図版８・24） 1K-10F10・15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK291 を切り、SK203 に切られる。北側が第２次調査トレンチにより切られる。平面形は残存部分の形状から長楕円形、断面形は半円状である。規模は長軸不明、短軸 0.56m、深さ 0.18m である。覆土はレンズ状２層、上層が灰オリーブ色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。覆土上位から土器片１点が出土した。

SK291（図版８・24） 1K-10F9・10・14・15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK86・203・204 に切られる。平面形・規模は西側が遺構確認トレンチで切られ不明である。断面形は深さ 0.15m の弧状である。覆土は単層、炭化物を少量含む灰オリーブ色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK85（図版８・24） 1K-10F12・13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK200・216 を切り、SK198 に切られる。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 1.10m、短軸 0.72m、深さ 0.08m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土下位から深鉢の体部片（P45）が出土した。

SK95（図版８・24） 1K-10F13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK200・222 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.41m、短軸推定 0.21m、深さ 0.09m である。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘質シルトである。覆土中から深鉢体部片（P46）が出土し、上層Ⅵa1 層からも同一個体が出土している。

SK200（図版８・24） 1K-10F13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK222 を切り、SK85・95 に切られる。平面形は楕円形と推測した。断面形は台形状である。規模は長軸不明、短軸 0.72m、深さ 0.16m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を少量含む黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘質土である。出土遺物はない。

SK84（図版８・24） 1K-10F13・14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK180・181 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.98m、短軸 0.80m、深さ 0.17m である。南側の一部がオーバーハングする。覆土は水平３層、上層が暗灰黄色粘質シルト、中層が黄灰色粘土、下層は黒褐色粘土である。覆土分層線が自然堆積層と連続している。出土遺物はない。

SK88（図版８・24） 1K-10F14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK181 を切り、SK87 に切られる。平面形は不整円形、断面形は階段状となる。規模は長軸 1.05m、短軸 0.93m、深さ 0.22m である。覆土は水平３層、上層が暗灰黄色粘質シルト、中層が黄灰色粘質シルト、下層は黒褐色粘土である。覆土分層線が自然堆積層と連続する部分がある。覆土中から深鉢の体部片（P48）が出土した。

SK181（図版８・24） 1K-10F13・14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK84・88 に大きく切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推測したが規模は不明である。断面形は深さが 0.13m の弧状

である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む黄灰色粘土である。覆土分層線が重複する SK84 の分層線と連続する。覆土下位から深鉢の口縁部片（P47）が出土した。

SK222（図版８・24） 1K-10F13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK95・200 に切られ、SK84 と近接する。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 1.02m、短軸推定 0.60m、深さ 0.10m である。覆土は単層で炭化物を微量含む黄灰色粘土である。出土遺物はない。

SK87（図版８・24） 1K-10F14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK88・128 を切る。平面形は不整円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.75m、短軸 0.66m、深さ 0.22m である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は黒褐色粘土で、いずれも炭化物を微量含む。覆土中位から土器片４点が出土した。

SK128（図版８･24） 1K-10F14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK87 に切られ、SK201 を切る。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.77m、短軸 0.56m、深さ 0.13m である。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘質シルトである。覆土下位から深鉢の体部片（P49･50）とクルミ１点が出土した。

SK201（図版８･24、写真図版 11） 1K-10F19 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK128 に切られる。平面形は円形と推測したが規模は不明である。断面形は深さ 0.14m の弧状である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘質シルトである。覆土中位から深鉢の体部片（P52）が出土した。

SK202（図版８・24、写真図版 11） 1K-10F19・20 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は円形、断面形は半円状である。規模は直径約 0.54m、深さ 0.15m である。覆土はレンズ状２層、上層が暗灰黄色シルト、下層は暗灰黄色粘質シルトである。覆土中位から深鉢の口縁～体部片（P51）が出土し、下層Ⅵa3 層からも出土している。

SK175（図版８・24） 1K-10F17・18・22 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分から円形か楕円形と推測したが規模は不明である。断面形は深さ 0.17m の半円状であるが、立ち上がり上半が不明瞭である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK280（図版８・24） 1K-10F16・21 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は円形か楕円形と推測したが規模は不明。断面形は深さが 0.19m の半円状である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK211（図版８・24、写真図版 11・25） 1K-10F22 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。Pit212 と近接する。東側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は円形か楕円形と推測するが規模は不明である。断面形は深さ 0.07m の浅い弧状である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土である。覆土中位から深鉢の体部片（P53）が出土した。

SK317（図版８・25、写真図版 11） 1K-9G14・15 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.91m、短軸 0.82m、深さ 0.17m である。覆土は単層、炭化物を微量含む灰黄褐色粘質シルトである。覆土中位から深鉢 1/2 個体分の口縁～体部片（P55）が出土した。

SK104（図版８・25） 1K-9G22 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。北西側のほぼ半分は第２次調査トレンチにより切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推定した。断面形は深さが約 0.08m の弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。遺物の出土はない。

SK105（図版８・25） 1K-9G21・22 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。北西側が第２次調査トレンチにより切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推定した。断面形は弧状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.62m、深さ 0.17m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK110（図版８・25） 1K-9G17・22 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。北西側が第２次調査トレンチにより切られる。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形と推測した。断面形は半円状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.44m、深さ 0.14m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺

物はない。

SK98（図版８・25）　1K-9G21 グリッドに位置する。Ⅵa2・Ⅵb’層で検出した。SK99 を切る。北東側は第２次調査トレンチにより切られる。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形と推測した。断面形は半円状であるが、立ち上がり上半は不明瞭である。規模は長軸不明、短軸推定 0.50m、深さ 0.16m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。覆土上位から土器片１点が出土した。

SK99（図版８・25）　1K-9G21 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面検出である。SK98・100 に切られる。西側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は台形状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸推定 0.52m、短軸推定 0.44m、深さ 0.21m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。覆土上位から深鉢の口縁～体部片（P54）が出土し、上層Ⅴc 層出土土器と接合している。

SK100（図版８・25）　1K-9G21、10G1 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。SK99 を切り、SK101 に切られる。南側・西側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.52m、深さ 0.12m である。覆土は単層、暗灰黄色粘質シルトである。覆土中から土器片１点が出土した。

SK101（図版８・25）　1K-9G21、10G1 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。SK100 を切る。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.66m、深さ 0.10m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK102（図版８・25、写真図版 11）　1K-9G22、10G2 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は長軸不明、短軸 0.62m、深さ 0.10m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗オリーブ褐色粘土である。覆土中から４個体の深鉢土器片（P56 ～ 59）が出土した。P56･57 は上層Ⅴd 出土土器片と、P58 は上層Ⅴc･Ⅴd･Ⅵa1 層出土土器片と接合している。

SK103（図版８・25、写真図版 12）　1K-9G22、10G2 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から不整円形とした。断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.60m、短軸推定 0.48m、深さ 0.09m である。覆土は単層、暗灰黄色粘質シルトである。覆土中から深鉢体部片（P60･61）が出土した。

SK118（図版８・25、写真図版 12）　1K-9G23 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。西側が遺構確認トレンチにより切られるが、残存部位から平面形は円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.45m、深さ 0.09m である。覆土は単層、暗灰黄色粘土である。覆土上位～中位にかけて４個体の深鉢土器片（P62 ～ 65）が出土した。

SK248（図版８・25）　1K-9G23、10G3 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から隅丸方形と推測した。断面形は台形状である。規模は長軸推定 0.78m、短軸推定 0.70m、深さ 0.15m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK107（図版８・25）　1K-9G23・24、10G3・4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は台形状である。規模は直径推定 0.62m、深さ 0.12m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK249（図版８・25）　1K-9G24、10G4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.40m、深さ 0.06m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK250（図版８・25）　1K-9G24、10G4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.44m、深さ 0.09m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK263（図版８・25）　1K-10G1 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。北側と西側が遺構確認トレンチで切られ、南西側は第２次調査トレンチにより切られるため平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.11m の弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK16（図版８･25）　1K-10G2 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は円形か楕円形と推測した。断面形は弧状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.66m、深さ 0.13m である。覆土は単層、暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK265（図版８･25）　1K-10G2 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形と推測した。断面形は弧状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.51m、深さ 0.11m である。覆土は単層、炭化物を微量含む灰黄褐色粘土である。出土遺物はない。

SK282（図版８・25）　1K-10G2・3 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分が少ないが円形か楕円形と推測した。断面形は台形状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.70m、深さ 0.17m である。覆土は単層、炭化物を微量含む灰黄褐色粘土である。出土遺物はない。

SK20（図版８･25）　1K-10G3･4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。SK22 との重複が推測されるものの、サブトレンチにより新旧関係等は不明である。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形・規模は不明である。断面形は深さが 0.15m の弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK22（図版８・25）　1K-10G3 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。SK20 と接するもしくは切り合いが推測されるものの、サブトレンチにより不明である。北側が遺構確認トレンチで切られるため平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.15m の弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK121（図版８･25、写真図版 12）　1K-10G4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。SK278 に切られる。北側が遺構確認トレンチで切られるが、平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.80m、深さ 0.08m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。覆土中から深鉢の口縁～体部片（P66）と底部片（P67）が出土し、それぞれ上層Ⅴd･Ⅵa1 層出土土器片と接合している。

SK278（図版８・25、写真図版 12）　1K-10G4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。SK121 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。規模は長軸推定 0.52m、短軸推定 0.36m、深さ 0.10m である。出土遺物はない。

SK279（図版８・25）　1K-10G4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は半円状である。規模は長軸推定 0.46m、短軸推定 0.42m、深さ 0.15m である。覆土は単層、暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK155（図版８・26）　1K-10G2 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.62m、短軸 0.48m、深さ 0.12m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土上位から小礫１点、中位から深鉢の口縁部片（P68）が出土した。

SK307（図版８・26）　1K-10G2・7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK13 との重複が推測されるがサブトレンチにより新旧関係等は不明である。平面形は円形と推測した。断面形は弧状である。規模は直径推定 0.51m、深さ 0.11m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土中から深鉢体部片（P69）が出土し、下層Ⅵb’層出土土器片と接合している。

SK13（図版８・26、写真図版 12）　1K-10G2 に位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK307 との重複が推測されるが、サブトレンチにより新旧関係等は不明である。平面形は円形と推測した。断面形は弧状である。規模

は長軸推定 0.52m、短軸 0.46m、深さ 0.11m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK14（図版 8・26、写真図版 12） 1K-10G2・7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK270・303･304 を切る。平面形は円形、断面形は弧状である。規模は直径 0.87m、深さ 0.15m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土上位から礫 1 点（S40）、また下位から深鉢口縁部片（P70）が出土した。

SK303（図版 8・26） 1K-10G7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK14・304 に切られる。西側が第 2 次調整トレンチにより遺存しない。平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.27m の半円状である。覆土は水平 2 層、上･下層とも暗灰黄色粘土で、下層は炭化物を微量含む。覆土下位から深鉢の体～底部片（P71）が出土した。重複している SK304 と下層Ⅵa3 層から同一個体が出土している。

SK304（図版 8・26） 1K-10G7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK303 を切り、SK14 に切られる。平面形は楕円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸不明、短軸 0.54m、深さ 0.17m である。覆土は水平 2 層、上・下層とも暗灰黄色粘土であり下層は炭化物を微量含む。覆土分層線と自然堆積層が連続している。覆土下位から深鉢体～底部片（P71）が出土した。重複する SK303 と下層Ⅵa3 層からも出土している。

SK270（図版 8・26） 1K-10G2・3・7・8 グリッドに位置する。Ⅵa2 層上面で検出した。SK308 を切り、SK14・31 に切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸推定 0.53m、短軸 0.48m、深さ 0.16m である。覆土は水平 2 層、上・下層とも暗灰黄色粘土で、上層は炭化物を微量含み、覆土分層線と自然堆積層が連続している。出土遺物はない。

SK31（図版 8・26） 1K-10G2・3 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。SK269・270 を切り、SK308 と接する。平面形は隅丸方形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.82m、短軸 0.70m、深さ 0.16m である。覆土は水平 2 層、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘質シルト、下層が炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土中から小礫 1 点が出土した。

SK269（図版 8・26） 1K-10G3 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。SK31 に切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測したが規模は不明である。断面形は深さ 0.06m の浅い弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK308（図版 8・26） 1K-10G3・8 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。SK270 に切られ、SK31 と接する。平面形は円形、断面形は弧状である。規模は長軸推定 0.53m、短軸 0.46m、深さ 0.05m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。覆土上位から石皿片 1 点（S19）が出土した。

SK276（図版 8・26） 1K-10G3・8 グリッドに位置する。Ⅵb’層上面で検出した。SK151 に切られる。平面形は不整楕円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.76m、短軸 0.58m、深さ 0.20m である。覆土は単層、暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK151（図版 8・26、写真図版 13） 1K-10G3・4 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK276 を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状であるが、立ち上がり上部は不明瞭である。規模は長軸 1.13m、短軸 1.00m、深さ 0.16m である。覆土は水平 2 層、上層が黄灰色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む暗灰黄色粘土であり、覆土分層線と自然堆積層が連続している。覆土上位から 2 個体の深鉢土器片（P20･21）が出土し、下位から深鉢底部（P19）が出土した。P19 は SK61 と接合関係にある。

SK27（図版 8･26） 1K-10G4 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.54m、短軸 0.46m、深さ 0.09m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK28（図版 8・26） 1K-10G9 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状で

ある。規模は長軸 0.53m、短軸 0.42m、深さ 0.14m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土上位から土器片 1 点と礫 1 点が出土した。

SK15（図版 8・26、写真図版 13） 1K-10G7・12 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK310 に切られ、SK309 と近接する。小型の袋状を呈し、平面形は不整楕円形である。規模は長軸 0.76m、短軸 0.68m、深さ 0.35m である。覆土は水平 2 層、上層が炭化物を少量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は灰黄褐色粘土である。覆土下位から深鉢の口縁～体部片（P32）が出土した。P32 は SK150 からも出土している。

SK152（図版 8・27、写真図版 13） 1K-10G7・8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK30・156・309・310 を切る。平面形は円形、断面形は台形状である。規模は長軸 1.16m、短軸 1.12m、深さ 0.32m である。覆土は 6 層に分層されたが 3 層に大別でき、上層が暗灰黄色粘質シルト、中層が暗灰黄色粘土、下層は暗オリーブ褐色粘土である。覆土分層線と自然堆積層が連続している部分が目立つ。覆土から土器片 15 点（P73～76）が北から南に落ち込んでいる状況で出土した。P74 は SK19・161・162 から、P75 は SK106 から、P76 は SK30・310、下層Ⅵ b’層からも出土している。

SK156（図版 8・27） 1K-10G8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK19・152 に切られる。平面形は不整円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.86m、短軸 0.80m、深さ 0.34m である。覆土は水平 2 層、上・下層とも炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土下位から深鉢口縁部片（P77・78）が出土した。

SK310（図版 8・27） 1K-10G7・12 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK15・30・309 を切り、SK152 に切られる。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 1.02m、短軸 0.83m、深さ 0.22m である。覆土は水平 2 層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む灰黄褐色粘土である。覆土上位から土器片（P76）が出土した。P76 は重複する SK30・152 からも出土している。

SK30（図版 8・27） 1K-10G7・8・12・13 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK152・310 に切られ、SK309 との新旧関係は不明である。平面形は楕円形、断面形は台形状であり、底面中央に直径が 25cm 前後、深さが 4cm 程度のほぼ円形の凹みがある。規模は長軸不明、短軸推定 0.58m、深さ 0.30m である。覆土は水平 2 層、上層が灰黄褐色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む灰黄褐色粘土である。覆土下位から土器片（P76）が出土した。P76 は重複する SK152・310 からも出土している。

SK162（図版 8・27） 1K-10G8・13 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK18 に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長軸推定 0.92m、短軸推定 0.77m、深さ 0.26m である。覆土は水平 2 層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は灰黄褐色粘土で、いずれも炭化物を少量含む。覆土分層線が自然堆積層と連続する。覆土中から土器片（P74）が出土した。

SK18（図版 8・27） 1K-10G8・9・13・14 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK106・162 を切る。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長軸 1.10m、短軸 0.90m、深さ 0.24m である。覆土は水平 3 層、上層が暗灰黄色粘質シルト、中・下層はともに暗灰黄色粘土である。中層は炭化物を微量含む。覆土分層線が自然堆積層と連続する部分がある。覆土中位から礫 1 点（S32）が出土した。

SK106（図版 8・27） 1K-10G8・9・13・14 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK18・19 に切られる。平面形は残存部分の形状から不整円形とした。断面形は台形状である。規模は長軸推定 1.03m、短軸推定 0.97m、深さ 0.30m である。覆土は水平 3 層、上層が暗灰黄色粘質シルト、中層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘土、下層は黒褐色粘土であり、覆土分層線が重複遺構・自然堆積層と連続している。覆土下位から土器片 3 点（P75）が出土した。P75 は SK152 からも出土している。

SK19（図版 8・27） 1K-10G8・9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK106・156・277 を切る。平面形は円形、断面形は半円状である。規模は長軸 0.96m、短軸 0.86m、深さ 0.30m である。覆土は水平 3 層、上・中層がともに暗灰黄色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘土であり、上層は炭化物を微量含む。覆土分層線が重複遺構と連続している。覆土上位から礫 1 点（S54）、下位から土器片（P74）が出土した。

SK277（図版8・27）　1K-10G8・9 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK19 に切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は台形状である。規模は長軸推定 0.84m、短軸不明、深さ 0.28m である。覆土は水平3層、上層が暗灰黄色粘質シルト、中層が炭化物を少量含む暗灰黄色粘土、下層は灰黄褐色粘土である。覆土分層線が重複遺構・自然堆積層と連続している。覆土中位～下位にかけて土器片3点が出土した。

SK309（図版8・27）　1K-10G7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK152・310 に切られ、SK30 との新旧関係は不明である。平面形は残存部分の形状から不整円形と推測した。断面形は弧状である。規模は長軸不明、短軸推定 0.52m、深さ 0.18m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。覆土中から土器片（P72）が出土した。

SK161（図版8・27）　1K-10G13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK18・30 と近接する。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.96m、短軸 0.82m、深さ 0.25m である。覆土は水平2層、上・下層とも炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土中から土器片（P74）が出土した。

SK153（図版8・27、写真図版 14）　1K-10G9 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK311 を切り、SK312 とは重複が推測されるものの、サブトレンチにより新旧関係等は不明である。平面形は円形と推測した。断面形は浅い弧状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は直径推定 0.46m、深さ 0.09m である。覆土は単層、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。出土遺物はない。

SK311（図版8・27、写真図版 14）　1K-10G9 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK29・301 を切り、SK153 に切られる。平面形は楕円形、断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.64m、短軸 0.46m、深さ 0.22m である。覆土はレンズ状3層、上・中層がいずれも炭化物を微量含む黄灰色粘質シルト、下層は灰黄褐色粘土である。出土遺物はない。

SK29（図版8・27、写真図版 14）　1K-10G9・14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK301 を切り、SK311 に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.94m、短軸 0.72m、深さ 0.34m である。覆土は水平2層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は黄灰色粘質シルトである。覆土下位から深鉢口縁～体部片（P79）が出土した。P79 は重複する SK301 からも出土している。

SK301（図版8・27、写真図版 14）　1K-10G9・14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK29・311 に切られる。平面形は不整円形であり、西側が若干オーバーハングしている。規模は長軸 1.00m、短軸 0.86m、深さ 0.28m である。覆土は単層、炭化物を微量含む黄灰色粘土である。覆土下位から深鉢口縁～体部片（P79）が出土した。P79 は重複する SK29 からも出土している。

SK312（図版8・27）　1K-10G9 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK153 と切り合いが推測されるものの、サブトレンチにより新旧関係等は不明である。平面形は円形と推測した。断面形は弧状である。規模は直径推定 0.46m、深さ 0.12m である。覆土は単層、炭化物が混じる暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK302（図版8・28）　1K-10G10・15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は不整円形であり、南東側に中段状の緩傾斜部分がある。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸 0.67m、短軸 0.55m、深さ 0.24m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土下位から土器片1点（P80）が出土した。

SK287（図版9・28、写真図版 14）　1K-9H13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK288 を切る。東側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は弧状である。規模は直径推定 0.74m、深さ 0.14m である。覆土は斜位2層、上層が灰黄褐色粘質シルト、下層は炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土下位から土器片1点（P81）が出土した。

SK288（図版9・28、写真図版 14）　1K-9H8・13 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK287 に切られる。東側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推測したが規模は不明である。断面形は深さ 0.17m の弧状である。覆土は単層、オリーブ褐色粘土である。覆土下位から土器片1点（P82）が出

土した。

SK289（図版９・28、写真図版 15）　1K-9H15 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。北側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は弧状である。規模は直径推定 0.40m、深さ 0.14m である。覆土は水平２層、上・下層とも灰黄褐色粘質シルトで、上層は炭化物を微量含む。覆土中位から土器片１点（P83）が出土した。P83 は隣接する SK290 からも出土している。

SK290（図版９・28、写真図版 15）　1K-9H14 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。北側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から不整円形、断面形は浅い弧状である。規模は直径推定 0.50m、深さ 0.08m である。覆土は単層、炭化物を少量含む灰黄褐色粘質シルトである。覆土上位から深鉢口縁～体部片（P83）が出土した。P83 は隣接する SK289 と接合関係にある。

SK254（図版９・28）　1K-9I11・16 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。西側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は半円状である。規模は直径推定 0.58m、深さ 0.24m である。覆土は水平２層、上層が炭化物を微量含む灰黄褐色粘質シルト、下層は暗褐色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK255（図版９・28）　1K-9I11 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK257 に切られる。北側と西側が遺構確認トレンチで切られ、残存部分が少ないため平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.16m の台形状である。覆土は水平２層、上層が暗灰黄色粘質シルト、下層は暗オリーブ色粘質シルトである。出土遺物はない。

SK256（図版９・28、写真図版 15）　1K-9I11・12 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK258 を切る。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は弧状である。規模は直径推定 0.77m、深さ 0.18m である。覆土は斜位５層で上部をⅤｃ層が覆っている。上層（１層）が黒褐色粘土、中層（２・３層）が黒褐色・暗灰褐色粘質シルト、下層（４層）が炭化物を微量含む暗オリーブ褐色粘質シルト、最下層（５層）は黒褐色粘質シルトである。覆土中位から深鉢体～底部片（P84）が出土した。

SK258（図版９・28、写真図版 15）　1K-9I11 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK256・257 に切られる。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測したが規模は不明。断面形は深さが 0.10m の弧状である。覆土は単層、炭化物を少量含む灰黄褐色粘質シルトである。覆土中位～下位にかけて深鉢 3/4 個体分（P85）が出土した。

SK257（図版９・28、写真図版 16）　1K-9I11 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK255・258 を切る。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は弧状である。規模は直径推定 0.78m、深さ 0.14m である。覆土は単層、炭化物を微量含むオリーブ褐色粘質シルトである。覆土中位～下位にかけて２個体の深鉢体部片（P86・87）が出土した。

SK225（図版９・28、写真図版 16）　1K-9I12・13・17・18 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から不整楕円形と推測した。断面形は弧状である。規模は長軸不明、短軸 0.70m、深さ 0.18m である。覆土は水平レンズ状５層、１・２層が黄灰色・暗灰黄色粘土、３層が灰白色粘質シルト、４・５層は炭化物を微量含む黄灰色粘土・黒褐色粘土である。覆土下位から深鉢口縁～体部片（P88）が出土した。

SK286（図版８・28、写真図版 16）　1K-10H1 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.56m、短軸 0.54m、深さ 0.12m である。覆土は斜位４層で、１層の灰黄褐色粘質シルトが各層を覆う。２・３層が灰黄褐色・にぶい黄褐色粘質シルトである。４層は暗褐色粘質シルトである。覆土上位から深鉢体部片（P89）が出土した。

SK176（図版８・28、写真図版 16）　1K-10H6・7 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。長軸 0.66m、短軸 0.53m、深さ 0.11m である。覆土は単層、暗灰黄色粘質シルトである。覆土上位から土器片８点（P90 ～ 92）が出土した。P90 はⅤｄ層から主体的に出土し、P92 は SK178 と接合

関係にある。

SK272（図版９・28、写真図版 17）　1K-10H7・8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。直径推定 0.70m、短軸 0.56m、深さ 0.15m である。覆土は水平２層、上層が灰黄褐色粘質シルト、下層は暗褐色粘質シルトである。覆土上位から土器片５点が出土した。

SK177（図版９・28）　1K-10H8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK281 に切られる。平面不整楕円形の小型袋状土坑とした。開口部残存値は直径 0.10m、底面長軸推定 0.70m、短軸 0.58m、深さ 0.26m である。覆土は５層に分けたが、開口部（上層）と袋部（下層）の上下２層に大別される。開口部（１層）が灰黄褐色粘質シルトである。袋部（２～５層）は暗褐色・黒褐色・暗オリーブ褐色粘質シルトに分けられ、微量の炭化物が見られる。覆土下位から土器片１点とクルミ１点が出土した。

SK281（図版９・28）　1K-10H8 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK177 を切る。平面形は円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.72m、短軸 0.64m、深さ 0.12m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土上位から土器片１点が出土した。

SK267（図版９・28、写真図版 17）　1K-10H8・9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は隅丸方形で、断面形は半円状である。規模は長軸 0.64m、短軸 0.59m、深さ 0.15m である。覆土はレンズ状２層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルト、下層は炭化物を少量含むオリーブ褐色粘質シルトである。覆土下位から小形土器（P93）が出土した。

SK266（図版９・28）　1K-10H9 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.38m、短軸推定 0.32m、深さ 0.16m である。覆土は単層、炭化物を微量含む灰黄褐色粘質シルトである。覆土上位から土器片（P94）が出土した。

SK268（図版９・29）　1K-10H14 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は円形、断面形は浅い弧状である。規模は直径 0.52m、深さ 0.07m である。覆土は単層、暗オリーブ褐色粘質シルトである。なお中央に根による撹乱が入り、撹乱部分から石皿片１点（S22）が出土した。

SK226（図版９・29）　1K-10H5 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は円形で、断面形は半円状である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.42m、深さ 0.19m である。覆土はレンズ状２層、上層がオリーブ褐色粘土、下層は灰黄褐色粘土である。覆土上位から深鉢口縁～体部片（P95）が出土した。

SK171（図版９・29）　1K-10H5、10I1 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。北側半分と東側が遺構確認トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.23m の半円状である。覆土はレンズ状５層、上層（１層）が暗灰黄色粘土、中層（２・３層）が灰黄褐色粘土・暗灰黄色粘土、下層（４・５層）は灰黄褐色粘土・黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK170（図版９・29、写真図版 17）　1K-10H5・10 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は円形で、断面形は台形状である。規模は長軸 0.44m、短軸 0.40m、深さ 0.24m である。覆土は斜位３層、上層がオリーブ褐色粘土、中層が暗灰黄色粘土、下層は暗灰黄色土ブロックを含む暗オリーブ褐色粘土である。覆土下位から深鉢口縁～体部片（P96）が出土した。

SK178（図版９・29）　1K-10H5、10I1 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK273 を切る。東側と北側の一部が遺構確認トレンチで切られ、残存部分が少なく平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.26m の半円状である。覆土は単層、炭化物を微量含む灰黄褐色粘質シルトである。覆土上位から土器片（P92）が出土した。P92 は SK176 と接合関係にある。

SK273（図版９・29）　1K-10H5・10、10I1・6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK283 を切り、SK178 に切られる。また東側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られるため残存部分が少なく平面形・規模は不明である。断面形は深さ 0.22m の半円状である。覆土はレンズ状３層、上層が炭化物を微量含む灰黄褐色粘質シルト、中・下層はいずれも炭化物を微量含む暗オリーブ褐色粘質シルトである。覆土上位から土器片２点

（P97･98）が出土した。P97 は重複する SK283 からも出土している。

SK283（図版 9・29） 1K-10H10 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。SK273 に切られ、SK170・178 と近接する。平面形は円形か楕円形であると推測するが規模は不明である。断面形は深さが 0.05m の浅い弧状である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘質シルトである。覆土上位から土器片 1 点（P97）が出土した。P97 は重複する SK273 からも出土している。

SK190（図版 9・29、写真図版 17・18） 1K-10I1・6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状である。規模は長軸 0.40m、短軸 0.25m、深さ 0.24m である。覆土は斜位 2 層、上層が灰黄褐色粘土、下層は炭化物を微量含む暗灰黄色粘土であり、覆土分層線が自然堆積層と連続している。覆土中位から土器片 15 点（P99･101）が出土した。P99 は SK191 と包含層Ⅴ d 層からも出土しており、P101 は SK221･227 からも出土している。

SK191（図版 9・29、写真図版 18） 1K-10I1・6 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 1.07m、短軸 0.80m、深さ 0.27m である。覆土はレンズ状 5 層であり、1 層を除く 2 ～ 5 層は、上層（2 層）が灰黄褐色粘土、中層（3・4 層）が黒褐色・灰黄褐色粘土、最下層（5 層）は暗灰黄色粘土である。覆土から土器片 5 点（P99･100･102）が出土した。P99 は SK190 と包含層Ⅴ d から、P100・102 は隣接する SK297 からも出土している。

SK297（図版 9・29、写真図版 26） 1K-10I2・7 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。Pit296 の下にある。平面形は円形で、断面形は不整な台形状である。規模は長軸 0.55m、短軸 0.50m、深さ 0.28m である。覆土は水平 2 層、上・下層とも灰オリーブ色粘質シルトである。覆土から土器片（P100･102）が出土した。これらは隣接する SK191 からも出土している。

SK227（図版 9・29、写真図版 18） 1K-10I2 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は台形状である。規模は直径推定 0.80m、深さ 0.17m である。覆土は単層､炭化物を微量含む灰黄褐色粘土である。覆土上位から深鉢口縁～体部片（P101）が出土した。P101 は SK190･221 からも出土している。

SK299（図版 9・29、写真図版 25） 1K-9I22、10I2 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。Pit300 と近接する。南側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形と推測した。断面形は半円状であるが、立ち上がりが不明瞭である。規模は長軸不明、短軸推定 0.53m、深さ 0.15m である。覆土は斜位 2 層、上層が黄灰色粘土、下層が炭化物を微量含む灰黄褐色粘質シルトである。覆土下位から土器片 1 点が出土した。

SK228（図版 9・29） 1K-10I2 グリッドに位置する。Ⅵ a2･Ⅵ b 層で検出した。平面形は楕円形で、断面形は浅い弧状である。規模は長軸 0.46m、短軸 0.36m、深さ 0.04m である。覆土は単層、黄灰色粘土である。覆土中から土器片 1 点が出土した。

SK192（図版 9･29） 1K-10I3 グリッドに位置する。Ⅵ b 層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形とした。断面形は弧状である。規模は長軸推定 0.84m、短軸 0.72m、深さ 0.14m である。覆土はレンズ状 3 層、上層が暗灰黄色粘土、中層が暗オリーブ褐色粘土、下層は暗灰黄色粘土である。覆土下位から土器片（P103）が出土した。

SK221（図版 9・29、写真図版 18・19） 1K-10I3・4 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は弧状である。平面規模は不明、深さは 0.26m である。覆土はレンズ状 3 層、上・中・下層とも暗灰黄色粘土で、下層は炭化物を微量含む。覆土中から深鉢口縁～体部片（P101）が出土した。P101 は SK190･227 からも出土している。

SK230（図版 9・30） 1K-9I25、9J21 グリッドに位置する。Ⅵ a2 層で検出した。東側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推測した。断面形は台形状である。規模は長軸推定 0.80m、

短軸 0.58m、深さ 0.22m である。覆土はレンズ状２層、上・下層とも暗灰黄色粘土である。覆土下位から深鉢口縁～体部片（P104）が出土した。

SK229（図版９・30） 1K-9J17・22 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は円形、断面形は浅い弧状である。規模は直径 0.89m、深さ 0.07m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土下位から深鉢 1/4 個体（P108）とクルミ１点が出土した。

SK182（図版９・30、写真図版 19） 1K-10I5 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は円形で、断面形は箱状であるが、北から西側にかけてオーバーハングしている。規模は直径 0.74m、深さ 0.15m である。覆土は３層、上層が黄灰色粘土、中・下層が暗オリーブ褐色粘土であり、覆土分層線と自然堆積土が連続する。覆土上位から土器片２点（P105）と礫１点（S13）が出土した。

SK183（図版９・30） 1K-10I5・10 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.92m、短軸 0.82m、深さ 0.22m である。覆土はレンズ状５層、上層が暗灰黄色粘土（１層）・黄灰色粘土（２層）、下層が暗灰黄色粘土（３層）・オリーブ褐色粘土（４層）、水平部分の最下層（５層）は黒褐色粘土である。覆土中位から土器片２点（P107）が出土した。P107 は SK193 から主体的に出土している。

SK220（図版９・30） 1K-10I5・10、10J1・6 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。東側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は台形状である。規模は直径推定 0.75m、深さ 0.22m である。覆土は水平レンズ４層、上層（１層）が黄灰色粘土、中層（２・３層）が暗灰黄色粘土、水平部分の下層（４層）は黒褐色粘土である。覆土下位から土器片１点と磨石類１点（S6）が出土した。

SK193（図版９･30、写真図版 19） 1K-10I10 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK183 と近接する。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。規模は長軸 0.90m、短軸 0.73m、深さ 0.30m である。覆土はレンズ状７層、上層（１・２層）が灰色・暗灰黄色粘土、中層（３・４層）が暗灰黄色・黒褐色粘土、下層（５～７層）はいずれも黒褐色粘土である。覆土中～下位にかけて深鉢 1/2 個体分（P107）が出土した。P107 は SK183 と下層Ⅵb からも出土している。また覆土中からクルミ１点が出土した。

SK231（図版９・30） 1K-10J1 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK232 を切る。平面形は円形、断面形は浅い弧状である。規模は直径 0.35m、深さ 0.07m である。覆土は単層、炭化物を微量含む黒褐色粘土である。出土遺物はない。

SK232（図版９・30） 1K-10J1・2・6・7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK231 に切られる。平面形は楕円形である。断面形は半円状である。規模は長軸 0.75m、短軸 0.68m、深さ 0.20m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土中から土器片１点（P96）が出土し、SK170 と接合関係にある。

SK247（図版 10・30） 2K-2E4 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。東側が遺構確認トレンチで大きく切られる。開口部と袋部がのこる小型袋状土坑である。平面形は円形と推測した。規模は開口部残存値長軸 0.01m、底面直径推定 0.90m、深さ 0.33m である。覆土は２層、上層が暗灰黄色粘土、下層は炭化物を少量含む黄灰色粘土である。覆土下位から土器片８点（P109）が出土した。P109 は SK １からも出土している。

SK3（図版 10・30） 2K-2E15 グリッドに位置する。SK ４の覆土中に構築された小型の土坑である。一部が調査区の排水トレンチで切られ、平面形・規模は不明である。断面形は深さが 0.08m の弧状である。覆土は単層、下位に炭化物を含む黄灰色粘土である。底面で土器を検出したが、分布状況から SK ４に属するものと判断した。

SK4（図版 10･30、写真図版 19･20） 2K-2E15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層検出である。SK ３に切られる。北東側の一部が調査区の排水トレンチで切られる。平面形は楕円形、断面形は弧状である。規模は長軸 0.85m、短軸 0.53m、深さ 0.06m である。覆土は水平２層、上層が SK ３より炭化物を多く含む黄灰色粘土、下層は薄い炭層である。炭層上面に２個体の土器片（P110･111）が面的に出土した。

SK1（図版 10・30） 2K-2E15 グリッドに位置する。SK ２と近接する。遺構確認トレンチ底面で検出した。

残存する深さは 0.09m であるが、構築面と考えるⅥa2 層上面からの深さは約 0.34m となる。トレンチの壁面に土坑の痕跡は認められないため、上端の直径は 0.60m 未満である。これらから平面形は円形、断面形は半円状と推測した。覆土は単層、炭化物をほとんど含まない灰色粘土である。検出面から土器片 1 点（P109）が出土した。

SK2（図版 10・30） 2K-2E14 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。SK 1 と近接する。遺構確認トレンチの壁面で検出した。平面形は楕円形と推測した。断面形は弧状である。規模は長軸 0.58m、短軸不明、深さ 0.08m である。覆土は単層、炭化物を少量含む黄灰色粘土である。覆土下位から土器片 1 点（P112）が出土した。

SK208（図版 10・30） 2K-1F22、2F2 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。南側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形と推測した。断面形は台形状である。規模は直径推定 0.46m、深さ 0.18m である。覆土は斜位 3 層、上層が炭化物を微量含む黄灰色粘土、中層が黄灰色粘土、下層は底面付近の炭化物を主体とする層である。出土遺物はない。

SK321（図版 10・30） 2K-1G17・22 グリッドに位置する。Ⅵb’層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から楕円形と推測した。断面形は台形状である。規模は長軸推定 1.00m、短軸不明、深さ 0.16m である。覆土は水平 2 層、上・下層とも暗灰黄色粘土であり、覆土分層線と自然堆積層が連続する。覆土下位から土器片 8 点（P113 ～ 115）が出土した。

SK293（図版 11・31、写真図版 20） 2K-2G5 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。北側が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形か楕円形と推測した。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸不明、短軸推定 0.55m、深さ 0.18m である。覆土は斜位 2 層、上層が炭化物を微量含む暗灰黄色粘土、下層は灰黄褐色粘土である。覆土中位から土器片 1 点（P116）が出土した。

SK295（図版 13・31、写真図版 20） 2K-2G16・21 グリッドに位置する。Ⅵa2 層検出である。北側の一部が遺構確認トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から円形とした。断面形は半円状であるが、立ち上がり上部が不明瞭である。規模は長軸推定 0.35m、短軸 0.30m、深さ 0.10m である。覆土は単層、炭化物を微量含む暗灰黄色粘土である。覆土中位から深鉢口縁～体部片 1 点（P117）が出土した。

焼土遺構（SX）

SX5（図版 8・31、写真図版 21） 1K-9F25 グリッドに位置する。Ⅵa1 層中の検出である。SX123･124 と近接する。焼土の広がりは長軸 0.32m、短軸 0.28m で、厚さは 0.02m ほどで薄い。ほぼ中央が根による撹乱で壊されている。二次被熱範囲は直径 0.40m の円形である。焼土周辺には深鉢 3 個体（P118 ～ 120）の土器片が散布していた。

SX123（図版 8・31、写真図版 21） 1K-9F25・10F5 グリッドに位置する。Ⅵa1 層中の検出である。SX124 を切る。南側のほぼ半分が遺構確認トレンチで切られる。焼土の広がりは長軸不明、短軸 0.15m、厚さは 0.02m と薄い。二次被熱範囲は直径 0.38m の円形と推測した。

SX124（図版 8・31、写真図版 21） 1K-9F25・10F5 グリッドに位置する。Ⅵa1 層中の検出である。SX123 に切られる。南側が遺構確認トレンチで切られる。焼土の広がりは長軸推定 0.34m、短軸 0.14m、厚さは 0.02m と薄い。二次被熱範囲は長軸 0.40m、短軸 0.25m の長楕円形と推測した。

土器集中

土器集中 97（図版 8・31、写真図版 22） 1K-10G3 グリッドに位置する。Ⅴd 層上面で検出した。土器片が 0.56 × 0.50m の範囲に 0.05m ほどの高さで積み重ねられた状態で出土した。土器片はすべて内面を上にして置かれていた。深鉢 1/3 個体分の土器片（P122）が出土した。

土器集中 111（図版 8・31、写真図版 22） 1K-9H16 グリッドに位置する。Ⅴd 層上面で検出した。土器片が 0.65 × 0.45m の範囲に重ねられた状態で出土した。土器片はすべて内面が上向きである。深鉢 1/3 個体分の土器片

（P121）が出土した。

土器集中 80（図版９･31､写真図版 22）　1K-9I24 グリッドに位置する。Ⅴｄ層上面で検出した。土器片が 0.45 × 0.40m の範囲に 0.07m ほどの高さで積み重ねられていた。土器片は大半が内面を上向きにしている。土器は全て同一個体の深鉢片（P123）であり、礫１点（S45）が共伴している。

土器集中 79（図版９･31･32､写真図版 22･23）　1K-9I19･20 グリッドに位置する。土器集中 80･81 と近接する。Ⅴｄ層上面で検出した。土器片が 0.92 × 0.60m の範囲に 0.08m ほどの高さに積み重ねられていた。６個体の土器片（P124 ～ 129）が集積され、最も下に P128 の深鉢体～底部片が置かれ、その上に深鉢（P125）の破片、さらに上に深鉢（P129）の破片が積み重ねられた状態である。浅鉢（P124）は最も集積している部分からは若干はずれて出土した。大半の土器が内面を上向きにした状態であった。P129 は土器集中 81 からも出土している。

土器集中 81（図版９･31･32、写真図版 23）　1K-9I20･25 グリッドに位置する。土器集中 79･80 と近接する。Ⅴｄ層上面で検出した。土器片が 0.90 × 0.73m の範囲で、若干散らばってはいるが積み重ねられた状態で出土した。この範囲から７個体の土器片（P129 ～ 135）が出土したが、異個体で集積する状況ではなく、各個体がそれぞれに積み重ねられている状態である。このうち P129 は土器集中 79 に主体があり、異個体で集積している。

土器集中 112（図版９･32､写真図版 23）　1K-10I8 グリッドに位置する。Ⅴｄ層上面で検出した。土器片が 1.12 × 0.72m の範囲で、一部積み重なった状態で出土した。深鉢（P136）1/4 個体分の土器片である。

堅果類集中

堅果類集中 324（図版 11・32）　2K-2H7 グリッドに位置する。Ⅵａ層中で検出した。0.55 × 0.40m の範囲にクルミ 15 点がまとまって出土した。いずれの核も完形であり打割痕などの人為的な利用痕跡は認められない。

杭（Pit）

Pit320（図版７・32、写真図版 23）　1K-7J24 グリッドに位置する。Ⅵｂ層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-121° -E で、鉛直に対し 23° 傾く。検出面からの打込み深度は 0.38m で、Ⅶ層中まで打ち込まれている。Ⅵｂ層以下が杭の打込みにより引き込まれている。

Pit319（図版７･32､写真図版 23）　1K-8J10 グリッドに位置する。Ⅵａ2 層で検出した。P144･145 と近接する。杭は丸材である。平面上での傾きは N-170° -W で､鉛直に対し 28° 傾く。検出面からの打込み深度は 0.66m で、Ⅶ層中まで打ち込まれている。Ⅵａ2 層以下が杭の打ち込みにより若干引き込まれている。

Pit145（図版７･32､写真図版 23）　1L-8A6 グリッドに位置する。Ⅵａ2 層で検出した。P144･319 と近接する。杭は丸材である。平面上での傾きは N-141° -W で、鉛直に対し 54° 傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.20m であり、Ⅶ層上面まで打ち込まれている。杭の打ち込みによる明瞭な引き込み痕はない。

Pit144（図版７･32､写真図版 23）　1L-8A6 グリッドに位置する。Ⅵａ2 層で検出した。P145･319 と近接する。杭は丸材である。平面上での傾きは N-73° -E であり､鉛直に対して 55° 傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.08m と浅く、打ち込みはⅥｂ層中までである。杭の打ち込みによる明瞭な引き込み痕はない。

Pit318（図版６・32）　1K-8G11・12 グリッドに位置する。Ⅵａ2 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-6° -W で、鉛直に対して 60° 傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.68m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥｂ層が引き込まれている。

Pit316（図版６・32、写真図版 23）　1K-8H17 グリッドに位置する。Ⅵａ2 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-130° -E で、鉛直に対し 36° 傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.40m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥａ2 層以下が若干引き込まれている。

Pit306（図版６・32、写真図版 24）　1K-8H24 グリッドに位置する。Ⅵａ2 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-115° -W であり、鉛直に対して 49° 傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.30m であり、Ⅶ層上面まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥａ2 層以下が若干引き込まれている。

Pit298（図版７・32、写真図版 24）　1K-8I16 グリッドに位置する。Ⅴc 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-138°-E であり、鉛直に対して 49°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.41m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。明瞭な引き込み痕は認められない。

Pit313（図版８・32、写真図版 24）　1K-9G11 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-180°であり、鉛直に対して 26°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.41m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭上部は有機分解が進み腐植分となっているが、Ⅵa2 層以下に打ち込みによる明瞭な引き込み痕が認められた。

Pit187（図版９・32、写真図版 24）　1K-9H7 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-10°-E であり、鉛直に対し６°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.80m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥa2 層以下が若干引き込まれている。

Pit194（図版９・33、写真図版 24）　1K-9H15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。杭は丸材である。平面上の傾きは N-44°-E であり、鉛直に対して 45°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.34m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。明瞭ではないが、杭の打ち込みによりⅥa2 層が若干引き込まれている。

Pit188（図版７・33、写真図版 24）　1K-9I3 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。杭（W24）は丸材である。平面上の傾きは N-70°-W であり、鉛直に対して約 30°傾く。検出面からの打ち込み深度は約 0.62m 深く、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みにより、Ⅵa2 層以下が若干引き込まれている。

Pit186（図版７･33、写真図版 24）　1K-9I8 グリッドに位置する。Ⅵb 層で検出した。Pit188 とやや近接する。杭（W21）は丸材である。平面上の傾きは N-5°-E であり、鉛直に対し約 19°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.96m と深く、Ⅶ層中まで打ち込まれていた。杭の打ち込みにより、Ⅵb 層以下が引き込まれている。

Pit189（図版９・33、写真図版 24）　1K-9I12 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。杭（W20）は丸材である。平面上での傾きは N-70°-W であり、鉛直に対して約 42°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.58m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥa2 層以下が若干引き込まれている。

Pit300（図版９・33、写真図版 25）　1K-9I22 グリッドに位置する。Ⅵa2 層で検出した。杭（W16）は丸材である。平面上での傾きは N-69°-W であり､鉛直に対し約 42°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.55m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥa2 層以下が引き込まれている。

Pit284（図版７・９・33、写真図版 25）　1K-9J9 グリッドに位置する。Ⅵa1 層で検出した。杭（W14）は丸材である。平面上での傾きは N-148°-W であり、鉛直に対して約 33°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.70m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥb 層以下が引き込まれている。

Pit195（図版８・33、写真図版 25）　1K-10F2 グリッドに位置する。Ⅵa1 層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-6°-W であり、鉛直に対して約 42°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.28m であり、Ⅵb 層中まで打ち込まれている。打ち込みによる引き込み痕は明瞭でない。

Pit236（図版８・33、写真図版７・25）　1K-10F11 グリッドに位置する。SK199 下からの検出である。検出層位はⅥa3 層である。杭は丸材。杭の平面上の傾きは N-4°-W であり、鉛直に対して約 35°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.35m であり､Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥb 層が引き込まれている。

Pit252（図版８･33、写真図版 25）　1K-10F15 グリッドに位置する。Ⅵa2 層中で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-61°-W であり、鉛直に対し約 23°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.88m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥb 層以下が若干引き込まれている。

Pit212（図版８･33、写真図版 25）　1K-10F22 グリッドに位置する。Ⅵa2 層中で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-1°-W であり、鉛直に対して約 32°傾く。検出面からの打ち込み深度は 0.44m であり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。杭の打ち込みによりⅥa3 層以下が明瞭に引き込まれている。

Pit163（図版８・33、写真図版 25）　1K-10G1 グリッドに位置する。Ⅵa1 層中で検出した。杭は丸材である。

杭表面の有機分解した腐植分が周囲の自然堆積層に溶脱している。杭の平面上での傾きはN-55°-Wであり、鉛直に対し約57°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.42mであり、基部はⅦ層中に達する。打ち込みによる引き込み痕が明瞭に認められた。

Pit322（図版８・33、写真図版25）　1K-10G21グリッドに位置する。Ⅵa2層で検出した。杭（W15）は丸材である。平面上での傾きはN-47°-Eであり、鉛直に対して約20°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.95mと深い。Ⅵa3層とⅥb層が打ち込みによる引き込まれている。

Pit314（図版８・33、写真図版26）　1K-10H6グリッドに位置する。Ⅵb層で検出した。SK176と近接する。杭（W23）は丸材である。平面上での傾きはN-133°-Eであり、鉛直に対して約30°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.36mであり、Ⅶ層上面まで打ち込まれている。Ⅵb層が打ち込みにより引き込まれている。

Pit148（図版９・33、写真図版26）　1K-10H24グリッドに位置する。Ⅵa2層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きはN-149°-Wであり、鉛直に対して約53°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.32mであり、Ⅶ層上面まで打ち込まれている。打ち込みによりⅥa2層以下が引き込まれている。

Pit296（図版９・33、写真図版26）　1K-10I1・2・7グリッドに位置する。Ⅵa2層検出である。SK297を切り、Pit315と近接する。杭（W19）は丸材である。平面上での傾きはN-137°-Eであり、鉛直に対して約59°傾いていた。引き込み痕等は認められず、打ち込まれたものか否かの判断はできない。

Pit315（図版９・33、写真図版26）　1K-10I6・7グリッドに位置する。Ⅵa2層検出である。Pit296と近接する。杭（W18）は丸材である。平面上での傾きはN-120°-Eであり、鉛直に対して約38°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.83mであり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。打ち込みによりⅥb層以下が引き込まれている。

Pit292（図版10・33、写真図版26）　2K-1F5グリッドに位置する。Ⅵa2層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きはN-32°-Wであり、鉛直に対して約10°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.24mであり、Ⅶ層上面まで打ち込まれている。打ち込みによる引き込み痕が若干認められる。

Pit294（図版10・12・33、写真図版26）　2K-2E16グリッドに位置する。Ⅵa2層で検出した。杭（W17）は丸材である。平面上での傾きはN-169°-Wであり、鉛直に対して約62°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.25mでありⅦ層中まで打ち込まれている。打ち込みによりⅥa2層以下が引き込まれている。

Pit323（図版13・33、写真図版26）　2K-3G3・8グリッドに位置する。Ⅵb層で検出した。杭は丸材である。平面上での傾きはN-154°-Wであり、鉛直に対して約42°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.43mであり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。打ち込みによりⅥb層以下が明瞭に引き込まれている。

Pit305（図版11・13・33、写真図版26）　2K-2H17グリッドに位置する。Ⅵa2層で検出した。杭（W22）は丸材である。平面上での傾きはN-０°であり、鉛直に対して約20°傾く。検出面からの打ち込み深度は0.72mであり、Ⅶ層中まで打ち込まれている。打ち込みによりⅥa2層以下が明瞭に引き込まれている。

２）上 層 の 遺 構

土坑（SK）

SK1001（図版34・35、写真図版27）　2K-3D19・20・24・25グリッドに位置する。Ⅴc層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は台形状である。規模は長軸1.30m、短軸1.20m、深さ0.52mである。覆土はレンズ状で８層に分層できるが、大きくは上・中・下層の３層である。１～３層が上層で黒色土、４層が中層で黒色土、５～８層が下層で黒色ないしはオリーブ黒色土である。いずれも植物遺体が主体である。覆土上位から漆器皿（図版78-25）が出土した。漆器皿の出土から本遺構の帰属時期は中世と考える。

SK1002（図版34・35）　2K-4E18グリッドに位置する。Ⅴc層上面で検出した。南側の一部が調査区外周の排水トレンチで切られる。平面形は残存部分の形状から不整円形、断面形は弧状である。規模は長軸1.30m、短軸推定1.15m、深さ0.16mである。覆土はレンズ状２層、上層が黒褐色粘土、下層が褐灰色粘土である。出土遺物はない。

SK1003（図版 34・35、写真図版 27）　2K-1E13・14・18 グリッドに位置する。第２次調査のトレンチ部分にあたり遺構上部が削られている。残存部分の形状は平面形が楕円形、断面形は底面に凹凸がある台形状とした。規模は長軸 0.85m、短軸推定 0.70m、深さ 0.27m である。覆土は第２次調査で完掘されているため不明である。出土遺物はない。

SK1006（図版 34・35、写真図版 27）　2K-1G6・7・11・12 グリッドに位置する。Ⅴａ層上面で検出した。複数の遺構が重なり合っている可能性もあるが、判然としないので一つの遺構とした。平面形は不整形、断面形は弧状である。規模は長軸推定 1.45m、短軸推定 0.95m、深さ 0.20m である。覆土は水平など 13 層に分けられる人為的埋土である。全体としては黒褐色粘土を主体に、黒色土と灰色土が混じる。出土遺物はない。

井戸（SE）

SE1004（図版 34・35、写真図版 27）　2K-1E17 グリッドに位置する。Ⅴｃ層上面で検出した。素掘りの井戸である。壁面の崩落は認められない。平面形は円形、断面形はＵ字状である。規模は長軸 0.88m、短軸 0.80m、深さ 1.06m である。覆土は人為的な埋土による水平堆積で、14 層に分けられる。上層から下層まで黒色ないしは黒褐色粘土で、植物遺体を含む層が多い。一方地山土ブロックを含む層は半々である。出土遺物はない。覆土が SK1001 と酷似するため、帰属時期は中世と推測する。

SE1005（図版 34・35、写真図版 27）　2K-1E22 グリッドに位置する。素掘りの井戸である。第２次調査のトレンチ部分にあたり遺構上部が少し削られている。また南側の上部が調査区外周の排水トレンチで切られる。平面形は不整円形、断面形は半円状である。規模は直径 1.40m、深さ 0.69m である。覆土は第２次調査で完掘されているため不明である。出土遺物はない。

杭（Pit）

Pit1007（図版 34・35、写真図版 27）　2K-3G1・6 グリッドに位置する。Ⅲｄ層で検出した。掘り方が認められず、自然堆積層が下に引き込まれていたことから打ち込み杭と判断した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-155°-W であり、鉛直に対して約 33°傾く。Ⅶ層中まで打ち込まれており、Ⅲｄ層以下の引き込み痕が明瞭である。

Pit1009（図版 34・35）　2K-3G15 グリッドに位置する。Ⅲｄ層で検出した。掘り方が認められず、自然堆積層が下に引き込まれていたことから打ち込み杭と判断した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-93°-E であり、鉛直に対して約 30°傾く。Ⅶ層上面まで打ち込まれており、Ⅴｃ層以下が引き込まれている。

Pit1010（図版 34・35）　2K-2G24 グリッドに位置する。Ⅵａ層上面で検出した。掘り方が認められず、自然堆積層が下に引き込まれていたことから打ち込み杭と判断した。杭は丸材である。平面上での傾きは N-60°-E であり、鉛直に対して約 32°傾く。Ⅶ層上面まで打ち込まれ、Ⅵａ層以下の引き込みが認められた。

Pit1011（図版 34・35、写真図版 27）　2K-1E12 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。掘り方は認められず、地山の引き込みも明瞭でない。杭は丸材である。平面上での傾きは N-18°-E であり、鉛直に対して約 55°傾く。

第Ⅴ章　遺　　物

第1節　概　　要

Ⅰ層からⅥb層の間で、縄文時代晩期から中世までの遺物が出土した。このうち所属時期がある程度明らかで、なおかつ明確な二次的移動が見られないのは、Ⅲd層（上層）とⅤc～Ⅵb層（下層）出土資料である。後者を第2節、前者を第3節で報告し、本節では各層における出土遺物の概要を層位別に概観する。

遺物量は、土器・石器・礫が遺物収納コンテナ（内法 54.5 × 33.6 × 10.0cm）で 61 箱である。このうち下層出土資料が土器 48 箱、石器・礫 12 箱、上層出土資料が 1 箱である。杭と加工木は、木製品収納コンテナ（内法 130 × 30 × 18cm）で下層 11 箱、上層 1 箱である。このほか、動･植物遺体が遺物収納コンテナで 12 箱ある。

Ⅰ層

調査区北部の 1 区拡張区北壁から玉髄製の剥片 1 点が出土した。このほか平成 16 年の確認調査時に、1 区西部から土師器 11 点・須恵器 2 点・中世陶器（珠洲焼）1 点・鉄滓 1 点・銭貨 1 点が表面採集されている。

南に隣接する大沢谷内遺跡の 1 区～4 区では、古代・中世を主体とした上層遺跡の遺物包含層が削平されるとともに、遺構覆土や後世の河跡などに縄文時代の遺物が混在していた。Ⅰ層内に存在するこれらの遺物は、大沢谷内遺跡に本来包含されていた可能性が高く、干拓土砂に含まれて拡散化したものと考える。

Ⅲ層

本層は「大日潟」の潟底堆積物にあたる。上層遺跡の調査に先立ち、大型重機によってⅢc層下面まで除去する過程で未利用のクルミが若干出土した。同様の状況は発掘区周囲の壁面でも確認された。

Ⅲd層（上層）からの出土遺物はきわめて乏しく、遺構に伴う資料としては漆器皿 1 点と杭 5 点に限られた。同層の遺構外からも土器は確認されておらず、石器 2 点・自然礫 5 点・クルミ 10 点が出土したにすぎない。クルミは未利用の状態にある。

Ⅳ層～Ⅴb層

縄文時代遺物の主要包含層準にあたるⅤc層以下と同一精度の調査を全域にわたり行ったが、人工的な遺物とみなされる明確な資料は確認できなかった。各層での取り上げ資料は、Ⅳ層から自然礫 2 点・破損礫 1 点・クルミ 11 点、Ⅴa層から破損礫 1 点・クルミ 7 点、Ⅴb層から自然礫 1 点・破損礫 1 点・クルミ 6 点である。クルミはいずれも完形品である。調査区全体に散漫に分布し、自然堆積とみなすべき状況を示していた。

Ⅴc層～Ⅵb層

本遺跡における中心的な遺物出土層準で、縄文時代晩期中葉の土器などがまとまって出土した。詳細は第 2 節に譲り、層位関係について明確にしておく。遺物は、包含層位としてⅤc・Ⅴd・Ⅵa1・Ⅵa2・Ⅵa3・Ⅵb層にまたがり、垂直分布にして平均約 30cm のレベル差をもって出土した。当該期の遺構検出面はⅥa2 層上面であり、これを境にⅤc層～Ⅵa1 層を上位包含層、以下を下位包含層とした。ただし下位包含層の遺物出土範囲は 1K-9・10 グリッドにほぼ限定される。また、各層は堆積環境の違いによって分布域が異なり、Ⅴc層・Ⅵa2 ～ 3 層・Ⅵb層が調査区のほぼ全域、Ⅴd層が標高 2.5m 以下の低域部、Ⅵa1 層が調査区西部の高域部にのみ堆積する。このうちⅥa1 層はⅤd層と分布域が一部重複し（図版 16：G-G’ライン西部）、なおかつ同一レベルにあることから、ほぼ同時期の堆積層とみなされる。検出された珪藻化石や土質の特徴に基づけば、堆積環境はⅥa2 層上面を境に離水化に転じたと考えられる。これをもって上部層と下部層に大別することが可能であり、包含遺物の層位的な検討にあたり、有意なラインとなる。

第２節　下層出土の遺物

Ⅴｃ層からⅥｂ層までの間で、縄文土器・石器・搬入礫・漆器・木製品が出土した。このほか草本植物を中心とした種子が多量に得られており、食料としての利用が可能な大型種実については本節でとりあげる。

Ａ　縄　文　土　器

１）概　　要

本発掘調査で出土した土器は、縄文時代晩期中葉の大洞 C2 式後半段階に属する土器群が主体となっている。取り上げた土器片総数は小片を含め 5,124 点を数える。文様判別可能な資料は極力抽出し、接合・復元の結果 266 点を掲載した。そのうち、口縁部残存個体は 145 点を数える。本遺跡出土土器群の特徴として統計的な分析結果は第Ⅶ章に示すが、相対的に有文土器が非常に少なく粗製土器の割合が高い。時期判別が可能な主文様を有する有文土器が限られた時間幅の中に収まり、且つ共伴する粗製土器の出土が多いことは粗製土器の分析を有益なものにする状況といえよう。以上のように本遺跡資料は当該期土器群の様相解明の一助となる良好な資料といえる。

土器の出土状況は遺構検出面より上位の包含層であるⅤｄ･Ⅵａ1 層と土坑からの出土が多く、ｌK-9 グリッドラインからｌK-10 グリッドラインにかけて東西方向に帯状に分布している（図版 36）。包含層出土の遺物分布域と遺構の密集域は相関している。また、調査終了間際に行った最終面下げ調査により、遺構検出面より下位の粘質土層であるⅥａ3・Ⅵｂ’・Ⅵｂ層からの出土も認められ、これらを「下位包含層出土遺物」とした。これらについても上位包含層・遺構出土遺物の分布域と重なる状況である。後述するが、遺構出土の遺物は上位・下位包含層出土遺物との接合・同一個体関係、重複遺構間での接合・同一個体関係が多く認められ、遺物の帰属が判然としないという特異な状況が認められている。この現象については第Ⅶ章で検討するが、本節においては調査の所見と整理における事実を記載する。

２）記述の方法と観察表

資料の掲載については従来通り遺構一括資料重視の視点から遺構出土の土器を第一義的に提示し、次いで包含層（上位・下位）の順で行う。そのため包含層出土であっても遺構との接合・同一個体関係が認められる場合は、遺構の範疇で提示している。実測図の掲載順序については遺構・遺物集中域の西から東、北から南の順に掲載しており、遺構出土土器は基本的に遺構個別図版（図版 18 ～ 32）の掲載順と同じである。包含層遺物についても西から東方向へ大グリッド順に掲載し、そのグリッドごとに後述の分類順に示してある。掲載資料の提示方法は実測図・写真で行い、個体の詳細な諸属性については観察表に記載した。

観察表の観察項目は、次のとおりである。報告№は、実測図番号で通し番号を付けた。本文中の番号、実測図番号、観察表報告№、写真図版の遺物番号は一致する。出土地点は、小グリッドまで記入した。遺構出土遺物は遺構名・層位の順に、遺構外出土の遺物は層位を記入した。器種・部位・分類については以下に記す。法量は器形の外寸を計測し、器高・口径・体部最大径・底径を cm 単位で記入した。欠損しているものについては、図上復元により法量が復元できる資料についてはその数値を（　）内に記入した。残存率は口径全体に対する残存部の割合である。

胎土の分類は次のとおりとした。本書掲載資料の中には海綿骨針を含むものが 14 点あり、本文中にこれを記載する。

Ⅰ類　磨耗した岩石や石英・長石粒子を何らかのかたちで含むもの。

Ⅰａ類　磨耗した石英・長石粒子や石英・長石破片を多量に含むもの。

Ⅰｂ類　磨耗あるいは破損した石英・長石が欠落もしくは少量にとどまるもの。

Ⅰｃ類　Ⅰｂ類に多量の凝灰岩や赤色粒子が加わるもの。

Ⅱ類　鉱物破片を多量に含みながら、磨耗した岩石や鉱物粒子が欠落するもの。

Ⅱａ類　石英や長石破片以外に目立った含有物がないもの。

Ⅱｂ類　石英・長石破片とともに凝灰岩の破片を多量に伴うもの。

Ⅱｃ類　雲母を多量に含むもの。

Ⅲ類　多量の凝灰岩粒子以外に目立った含有物がないもの。

Ⅲａ類　凝灰岩粒子以外の含有物が希薄なもの。

Ⅲｂ類　少量の石英・長石破片や雲母が伴うもの。

Ⅳ類　岩石破片もしくは赤色粒子を多量に含み、少量の石英・長石破片を伴うもの。

色調は外面の色調を『標準土色帖』〔2005 年版〕に基づいて記載した。コゲ・ススなどの付着物を避け、一次焼成による胎土色の観察に努めた。

付着物については、器面内外両面について観察した。主に「コゲ」・「ス ス」などの炭化物付着状況である。

地文の施文方法については原体の横位回転施文が大半のため、その場合は施文方向の記載は省き、それ以外の場合は地文原体の後に（縦位）・（斜位）などの施文方向を記載した。

３）分　　類（第９･10 図）

以下の記載ではまず器種ごとに大別し、次に器形や文様、施文方法、地文原体により細別する。本遺跡出土土器の器種は深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形で構成される。壺形以外の器種分類については口径と器高の関係から、器高 / 口径が概ね 0.8 以上のものを深鉢形、0.6 ～ 0.8 のものを鉢形、0.6 以下のものを浅鉢形とした〔荒川ほか 2004〕。ただし底部欠損資料で器高が不明なものが大半であるため、数値により判別可能な個体と同類のものは同器種と判断した。文様名称については先学研究・報告書〔中島 1981、石川 1988、鈴木加 1990・1991、田中・鶴巻 1992、渡邊朋 1992、渡邊朋・荒川 1999、渡邊裕 1998・2002･2004、滝沢・高橋ほか 2002、荒川 2009〕、縄文原体については山内清男〔1979〕に倣った。また、当該期の土器群には口縁端部の形態に多様性が認められるため、口縁部遺存資料については下記のとおり形態別に分類し、略号で記載した。

１）内削ぎ状に整形したもの。→「内削」　２）平坦に面取りしたもの→「面取」　３）先細りに整形したもの。指頭圧痕によるものが多い。→「先細」　４）口縁端部に粘土紐をのせ､外に突出するように摘み出したもの。→「突出」　５）丸く整形したもの→「丸」　６）肥厚するもの→「肥厚」　７）内面に沈線を巡らすもの。浅い凹線も含む。→「沈」

①浅鉢

全て有文精製土器であり、体部上半に文様帯をもつ。

１類　体部上半に沈線により区画された主文様帯を有し、横Ｃ字状または横長楕円状モチーフが磨消縄文により施されるもの（38･174･230）。口頸部、または頸部が無文となり直線的に開く器形である。

１ａ類　主文様を単沈線により描出するもの。主文様は単位文化していない（38･230）。

ｉ）口縁部が無文で端部が丸く整形されるもの（38）と、ii）口縁部に突起、口縁部と肩部に円形刺突列が施されるもの（230）がある。

１ｂ類　主文様のモチーフに沈線を沿わせ、モチーフ間を浅く彫去するもの（174）。
口縁部は無文で端部が丸く整形されている。

２類　体部上半に沈線により区画された主文様帯を有し、三角連繋沈線文、入組沈線文が施されるもの（139・141･142･231･232･233）。口頸部が無文で内に屈曲し、口縁部は肥厚する。肩部にメガネ状突帯がめぐる。

２ａ類　体部上半に縄文帯を有するもの（139･231）。

ｉ）磨消縄文による三角連繋文が施されるもの（139）と、ii）沈線による入組文または三角連繋文が施されるもの（231）がある。

２b 類　縄文帯を有さず、沈線により主文様が施されるもの（141・142・233）。
ⅰ）三角連繋文間が工字状に彫去されるもの（142）と、ⅱ）入組沈線文が施されるもの（233）がある。
３類　主文様が平行沈線文のみのもの（124）。
口頸部が無文で内に屈曲し、口縁部が肥厚する。肩部には円形刺突列が施された突帯がめぐる。

②鉢

１類　主文様に三角連繋沈線文が施されるもの（137）。体部が球形を呈す。
２類　主文様に平行沈線文と縦のスリットが施されるもの（138）。頸部が内に屈曲する。
３類　主文様に平行沈線文が施されるもの（261）。頸部が内に屈曲する。

③壺

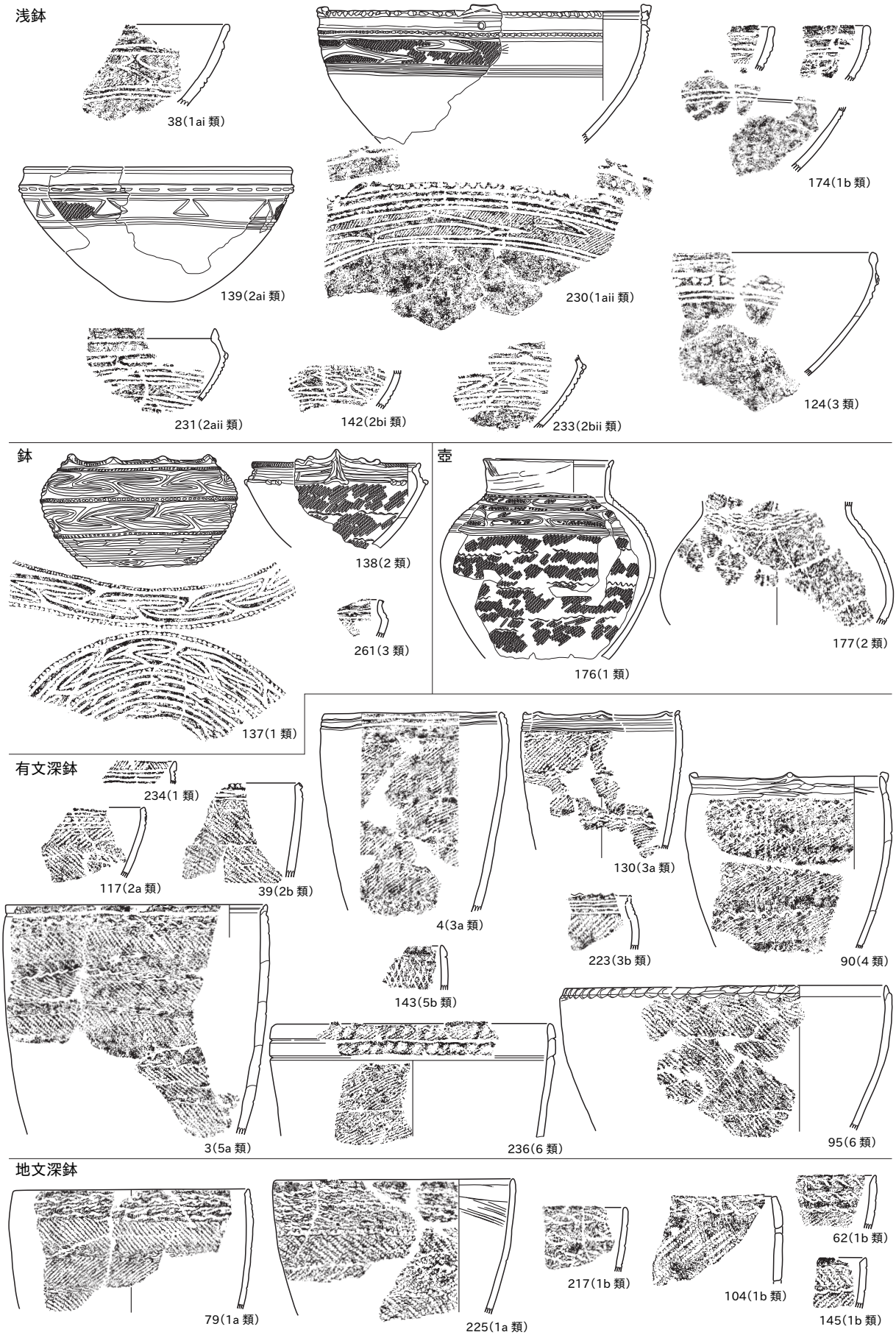
１類　体部上位に沈線により区画された主文様帯をもつもの（176）。浅鉢 1b 類と同様の手法により横長楕円形文が施される。
２類　地文のみのもの（177）。頸部に結節回転文帯が施される。

④有文深鉢

口縁部に沈線・刺突による文様が施されるものを一括し、地文のみの深鉢と分離した。
１類　口縁上端部に集合短沈線文、その下に平行沈線文帯が施されるもの（234）。磨き整形が施される。
２類　口縁部に数条の平行沈線文と刺突文による文様帯を有し、体部に縄文が施されるもの（22･39･117）。口縁部文様帯には磨き整形が施される。
２a 類　平行沈線文帯の二溝間に円形刺突列が施されるもの（117）。
口縁部が内湾する器形で上端部には刻文が施される。
２b 類　口縁部に平行沈線文帯を有し、上端部に刺突文が施されるもの（22･39）。
３類　口縁部に平行沈線文帯のみが施されるもの。口縁部文様帯には磨き整形が施される。
３a 類　内湾する口縁部に平行沈線文帯を有するもの（4･10･47･75･77･130･205･214）。
内湾する口縁部分と文様帯幅が一致する。口縁端部に山形の小突起が付くものもある（130）。
３b 類　内湾する口縁部に平行沈線文帯を有し、口縁上端部が外反し小波状となるもの（223）。
４類　無文の口縁部に幅広で浅い凹線が１条施され、口縁端部に小突起が付くもの（90）。口縁部には磨き整形が施される。
５類　口縁部にナデ調整による無文帯を有し、沈線文・刺突文が施されるもの。地文深鉢２・４類の口縁部無文帯に沈線文・刺突文が付加されたものである。
５a 類　無文帯上に沈線文が施されるもの（３・235・244）。
５b 類　無文帯下に刺突文が施されるもの（143）。
６類　口縁部に粘土紐接合痕と指頭圧痕をのこし、装飾効果を有しているもの（95・215・236）。
粘土紐接合部を沈線でなぞるものもある（215・236）。

⑤地文深鉢

地文のみが施されるものを一括した。
１類　口縁部に幅広の無文部を設け、そこに結節回転文帯が広く展開するもの。１段の結節回転文であっても無文部に幅広く施文されている場合はここに含めた。
１a 類　横Ｓ字状・Ｚ字状の結節回転文が多段施されるもの（12・32・51・66・72・79・100・121・126・133・144・178・216・224 ～ 226・262・241・254）。
１b 類　横８字状結節回転文、または緩く結節した原体を回転施文したもの（62･104･145･217）。
２類　口縁部無文帯下に１・２段の結節回転文が施され、体部は地文となるもの。
２a 類　原体結節部のみによる結節回転文が無文帯下に施されるもの（68・119・146 ～ 148・179・237・



第９図　大沢谷内北遺跡縄文土器分類図①（S=1/6）

第 10 図　大沢谷内北遺跡縄文土器分類図②（S=1/6）

253)。

２ｂ類　結節つき原体による斜縄文の結節回転文が無文帯下に施されるもの（5・15・26・28・63・64・73・83・118・125・131・132・136・149・180 ～ 182・218・247・248・264)。

３類　２類とは異なり幅広の無文帯を有さず、口縁端部直下に結節回転文が施されるもの（16・17・20・54・70・74・88・109・111・122・123・129・150・151・152・219・220・227・238・239・242)。大半が体部に用いられる結節つき原体の結節回転文によるものであり、口縁端部にわずかな無文部がのこる。

４類　口縁部に無文帯を有するが、その直下に結節回転文が施されずに地文となるもの（6・9・13・55・78・82・101・106・108・153 ～ 155・183・184・206・208・221・255・256)。

５類　口縁部は横位、体部は縦位に同一原体による地文が施されるもの（110・185・207)。施文法により口縁部文様帯を区分している。

６類　口縁部に幅広の無文帯や結節回転文を伴わず、且つ施文による文様帯区分もないもの（7・57・85・96・102・107・156・186 ～ 189・209・249・257・258・265)。

⑥小形深鉢

ケズリ調整痕が全面にのこるもの（93)。

⑦体部の破片資料

１類　沈線文を有するもの。有文深鉢２・３類に属する可能性がある。

２類　原体結節部のみの回転文が施されるもの。

３類　結節縄文が施されるもの。結節斜縄文、結節羽状縄文がある。

４類　結節を伴わないもの。斜縄文・羽状縄文・網目状撚糸文・撚糸文がある。

５類　無文のもの。ナデ調整が施される。

⑧底部の破片資料

底部外面は横ナデ調整が施され、無文となる。体部下位の地文には斜縄文・結節斜縄文・網目状撚糸文・縦位施文の撚糸文・集合沈線文がある。

４）出土土器各説

①土坑出土土器（図版 39・40、図版 45 ～ 54- 1 ～ 117、写真図版 28 ～ 35）

図版 39・40 に土器出土土坑とその接合・同一個体共有関係を示した。焼土遺構出土遺物と土器集中については土坑検出面よりも上位検出のため、上位包含層の項で示す。

概観すると、土器出土土坑は 1K-10 ラインから南に約 6m 幅の範囲に集中している。最も集中しているのが 1K-10F･10G グリッド内であり、重複・隣接土坑間との接合・同一個体関係が目立つ。逆に包含層遺物との接合・同一個体関係はやや距離を置くものも認められるが、土坑集中部の範囲内で収まっている。東側の 1K-10H ～ 10J グリッドでは 1K-10 ラインから南に約４m 幅内で土器出土土坑が帯状に散在している。土器の接合・同一個体関係を見ると、重複・隣接土坑間での関係も認められるが、距離を置いている土坑間での関係も認められ、東西方向で最大約 13m の距離が認められる（SK170 と SK232)。これら 1K-10 ライン沿いの土坑密集域南側、2K-1G・2E グリッドにも土坑が点在しているが、これらの土坑群については同一個体共有関係が SK200 と SK 1 において確認されたのみである。次に個々の事象について、出土土器の概説も加えながら土坑単位で見ていく。

なお、記載の順は遺構個別図版、土器実測図版の順と対応している。

SK133（図版 45、写真図版 28）

深鉢体部片（1）が出土している。縦位施文の網目状撚糸文 R が施された体部４類である。遺構脇の下位包含層（Ⅵｂ層）から同一個体が出土している。

SK157（図版 45、写真図版 28）

深鉢体部片（２）が出土している。羽状縄文が施された体部４類である。

SK46･52（図版 45、写真図版 28）

深鉢３点（３～５）が出土している。３は無文の口縁部に１条の沈線が施され、無文帯下に結節回転文、体部に結節斜縄文 RL が施された有文深鉢 5a 類であり、地文深鉢 2a 類の口縁部に沈線が付加されたものである。SK52 から出土し、約 17m 離れた 1K-9F17・24、9G24 グリッドの上位包含層（Ⅴd・Ⅵa1 層）出土土器と接合している。４は口縁部に平行沈線文が施された有文深鉢 3a 類である。重複している SK46･52 から出土し、接合している。５は口縁部に無文帯をもつ地文深鉢 2b 類である。SK52 から出土し、３の包含層出土地点と同地点の下位包含層（Ⅵb’層）から出土した土器片と接合している。

SK50（図版 45、写真図版 28）

深鉢口縁部片（６）が出土している。無文の口縁部で、体部には羽状縄文が施された地文深鉢４類である。

SK83（図版 45、写真図版 28）

深鉢口縁部片（７）が出土している。口縁部から地文の結節羽状縄文が施された地文深鉢６類である。

SK45（図版 45、写真図版 28）

深鉢体部片（８）が出土している。羽状縄文が施された深鉢体部４類である。

SK253（図版 45、写真図版 28）

深鉢２点（９･10）が出土している。９は口縁部が無文で体部に斜縄文 LR が施された地文深鉢４類、10 は口縁部に平行沈線文が施された有文深鉢 3a 類である。下位包含層（Ⅵb’層）からも同一個体が出土している。

SK55･73･215（図版 45、写真図版 28）

深鉢３点（11 ～ 13）が出土している。11 は SK55 出土の羽状縄文が施された深鉢体部４類である。８と同一個体の可能性がある。12 は口縁部無文帯に結節回転文が２段施される地文深鉢 1a 類である。体部には結節斜縄文Ｌが施される。重複する SK55･215 と、下位包含層（Ⅵa2 層）から出土している。13 は口縁部が無文帯で体部に斜縄文 LR が施される地文深鉢４類である。重複する SK73･215 と、下位包含層（Ⅵa2 層）から出土している。

SK129･199（図版 45・46、写真図版 28）

深鉢２点（14･15）が出土している。14 は SK129 出土で、結節斜縄文 LR が施された体部３類である。15 は重複する SK129･199 から出土している。口縁部に無文帯をもち、体部に結節斜縄文 LR が施された地文深鉢 2b 類である。胎土には海綿骨針を含む。

SK61･151（図版 46、写真図版 29）

深鉢６点（16 ～ 21）が出土している。SK61 と SK151 は東西方向に約 10m 離れて位置しているが、19 が両遺構より出土している。16 ～ 18 が SK61 出土、20･21 が SK151 出土である。16･17 は口縁部に結節回転文が施される地文深鉢３類、18 は結節斜縄文 RL が施された体部３類、19 は体～底部片で体部の地文は結節斜縄文 RL である。20 は口縁部に結節回転文が施される地文深鉢３類、21 は斜縄文 LR が縦位に施文された体部４類である。

SK15･57･64･65･150･167（図版 46・47、写真図版 29）

深鉢 11 点（22 ～ 32）が出土している。22 は隣接する SK57･65 から出土し、23･24 が SK57 出土、25 ～ 27 が SK65 出土、28 が重複関係にある SK64･65･167 と下位包含層（Ⅵa3 層）から出土し、29 は SK65 と約 1m 離れた SK150、下位包含層（Ⅵa3 層）から出土しており、30･31 は SK150 から、32 は東西方向に約５m 離れた SK15･150 から出土している。

22 は口縁部に平行沈線文帯、口縁上端部に刺突文が施された有文深鉢 2b 類である。口縁部は隆線の断面形が丸みを帯びるほどミガキ調整が施されている。口縁端部内面には浅い沈線がめぐる。23･30 は網目状撚糸文 R が縦位に施された体部４類。24･25 は結節斜縄文が施された体部３類。26 は口縁部に無文帯を有し、直下に

結節回転文が施される地文深鉢 2b 類。27 は斜縄文 LR が施された体部４類。28 は地文深鉢 2b 類で、口縁端部が外に摘み出されたように突出している。29 は０段多条の RL が斜位に回転施文された体部４類。31 は底部片。外面が横ナデ調整されている。32 は無文の口縁部に結節回転文が多段施された地文深鉢 1a 類で、体部には結節羽状縄文が施される。胎土には海綿骨針を多量含む。

SK66（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（33）が出土している。結節斜縄文 RL が縦位施文された体部３類である。

SK237（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（34）が出土している。結節斜縄文 LR が施された体部３類である。

SK63（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（35）が出土している。結節斜縄文 LR が施された体部３類である。

SK89（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（36）が出土している。直前段反撚 RR と結節回転文が施された体部３類である。

SK207（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（37）と浅鉢（38）が出土している。37 は結節羽状縄文が施された体部３類。38 は浅鉢 1a 類で、体部上半の主文様には未単位化の楕円文が磨消縄文により描かれている。口頸部は無文で口縁上端部が丸く整形される第ｉ種である。底部は遺構脇の下位包含層（Ⅵｂ’層）から出土している。底面器厚が体部より厚い成形である。

SK71･90･164（図版 47、写真図版 29）

深鉢２点（39･40）が出土している。39 は互いに隣接する SK71･90･164 から出土し接合している。口縁部に平行沈線文、上端部に刺突文が施された有文深鉢 2b 類である。口縁端部内面には浅い凹線がめぐる。口縁下には結節回転文が施されている。40 は SK71 出土で、結節斜縄文 RL が施された体部３類である。

SK126（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（41）が出土している。結節斜縄文 LR が施された体部３類である。

SK241（図版 47、写真図版 29）

深鉢体部片（42）が出土している。LR と直前段反撚 RR による羽状縄文が施された体部４類である。

SK62･76（図版 47、写真図版 29）

深鉢（43）が出土している。重複する SK62･76 から出土している。43 は口縁部が欠損するが、原体結節部のみの回転文が施される地文深鉢１a・２a 類の体部と考える。体部２類である。

SK203（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片（44）が出土している。結節斜縄文 RL が施される体部３類である。

SK85（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片（45）が出土している。網目状撚糸文 R が縦位に施文された体部４類である。

SK95（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片（46）が出土している。1K-10F6 グリッドの上位包含層（Ⅵa1 層）出土土器と接合している。結節羽状縄文が施された体部３類である。

SK181（図版 48、写真図版 30）

深鉢口縁部片（47）が出土している。口縁部に平行沈線文が施された有文深鉢 3a 類である。

SK88（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片（48）が出土している。結節羽状縄文が施された体部３類である。

SK128（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片２点（49･50）が出土している。49 は羽状縄文が施された体部４類、50 は結節斜縄文 RL が施さ

れた体部３類である。

SK202（図版 48、写真図版 30）

深鉢口縁～体部片（51）が出土している。遺構脇の下位包含層（Ⅵa3 層）出土土器と接合している。無文の口縁部に結節回転文が多段施された地文深鉢 1a 類である。

SK201（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片(52)が出土している。縦位施文のLRと横位施文のLRによる縦位羽状構成となっている。体部４類。

SK211（図版 48、写真図版 30）

深鉢体部片（53）が出土している。縦位施文の網目状撚糸文Ｒの間に、縦位施文の結節斜縄文 RL が施されている。体部３類。

SK99（図版 48、写真図版 30）

深鉢口縁～体部片（54）が出土している。西側に約 1m 離れた地点の上位包含層（Ⅴc層）出土土器と接合している。口縁端部のわずかな無文帯下に結節斜縄文 RL が施される地文深鉢３類である。

SK317（図版 48、写真図版 30）

深鉢（55）が出土している。口縁部の幅広い無文帯下に０段多条 LR による斜縄文が施された地文深鉢４類である。口縁部無文帯には横ナデ調整が施されている。

SK102（図版 48、写真図版 30）

深鉢４点（56 ～ 59）が出土している。56 は結節斜縄文 LR が施された体部３類。57 はやや小形の深鉢で、遺構脇の上位包含層（Ⅴd層）出土土器と接合関係にある。厚手で、斜縄文 LR のみが施された地文深鉢６類である。58･59 は深鉢の体部下位片である。58 はやや広範囲に散在しており、上位包含層（Ⅴc･Ⅴd･Ⅵa1 層）からも出土している。結節回転文と網目状撚糸文Ｒが施される体部２類である。59 は結節斜縄文 LR がやや斜位方向に施される体部３類である。

SK103（図版 49、写真図版 30）

深鉢２点（60･61）が出土している。60 は体部上位に沈線文が施されており、有文深鉢２・３類に属すると思われる。体部１類。61 は網目状撚糸文Ｒが縦位に施される体部４類である。

SK118（図版 49、写真図版 30）

深鉢４点（62 ～ 65）が出土している。62 は口縁部に幅広の無文部を設け、そこに原体を緩く結節した幅のある結節回転文を２段施した地文深鉢１b 類である。63･64 は口縁部に無文帯をもち、直下に結節つき原体の結節回転文が施される地文深鉢 2b 類である。63 の口縁部は指頭圧痕により先細りに成形されており、体部の原体は０段多条 LR である。65 は結節斜縄文Ｌが施される体部３類である。

SK121（図版 49、写真図版 30）

深鉢２点（66･67）が出土している。66 は遺構脇の上位包含層（Ⅴd層）出土土器と接合している。口縁部に結節回転文が多段に施される地文深鉢１a 類である。体部には羽状縄文が施される。67 は深鉢底部である。距離を隔てた 1K-9F25 グリッドの上位包含層（Ⅵa1 層）出土土器と接合している。

SK155（図版 49、写真図版 31）

深鉢口縁部片（68）が出土している。口縁部無文帯下に結節回転文が施される地文深鉢 2a 類である。

SK307（図版 49、写真図版 31）

深鉢体部片（69）が出土している。遺構脇の下位包含層（Ⅵb’層）からも出土し、接合している。撚糸文Ｒが斜位・横位に施文される体部４類である。胎土には海綿骨針を含む。

SK14（図版 49、写真図版 31）

深鉢口縁部片（70）が出土している。口縁端部の横ナデによる幅狭の無文部下に結節斜縄文 LR が施される地文深鉢３類である。

SK303･304（図版 49、写真図版 31）

深鉢体～底部片(71)が出土している。SK303･304 から西に約 12m 離れた 1K-10F6 グリッドの下位包含層(Ⅵa3 層）から同一個体が出土している。体部には結節斜縄文 LR が施され、底部の無文部との境に横８字状の結節回転文が施されている。

SK309（図版 49、写真図版 31）

深鉢口縁部片(72)が出土している。口縁部の幅広い無文部に結節回転文が多段施される地文深鉢 1a 類である。

SK19･30･106･152･161･162･310（図版 49、写真図版 31）

1K-10G7･8･9･12･13･14 グリッドに群集する土坑群である。SK152 を中心に接合・同一個体共有関係が認められる。深鉢４点（73 ～ 76）が出土している。73 は SK152 出土で、口縁部に無文帯を有し、直下に結節つき原体の結節回転文が施される地文深鉢 2b 類である。体部の地文には結節斜縄文 RL、結節斜縄文０段多条 RL、附加条第１種 RL+r による斜縄文が施されている。74 は SK19･152･161･162 から出土している。口縁端部直下に結節回転文が施される地文深鉢３類である。75 は SK106･152 から出土している。口縁部に平行沈線文帯が施された有文深鉢 3a 類である。平行沈線は半截竹管状工具の腹面にて施されており、隆線部の断面がやや丸みをもつ。体部の斜縄文は縦位・横位の羽状構成となっている。76 は SK30･152･310 と 1K-10G8 グリッドの下位包含層（Ⅵb’層）から出土している。結節斜縄文 LR が施された体部３類である。

SK156（図版 50、写真図版 31）

深鉢２点（77･78）が出土している。77 は遺構脇の下位包含層（Ⅵb’層）からも出土している。口縁部に平行沈線文帯が施される有文深鉢 3a 類である。口縁部文様帯は 75 と同様の成形・調整法による。胎土に雲母が多量に含まれているのが特徴的である。78 は口縁部に無文帯、体部に結節斜縄文が施される地文深鉢４類である。無文帯下には結節回転文が施されず、原体端部の回転圧痕が認められる。

SK29･301（図版 50、写真図版 31）

深鉢口縁～体部片（79）が出土している。重複している SK29･301 と、同地点の下位包含層（Ⅵb 層）からの出土である。口縁部に結節回転文が多段施文される地文深鉢 1a 類である。地文の結節羽状縄文には０段多条の RL･LR が用いられている。

SK302（図版 50、写真図版 31）

深鉢体部片（80）が出土している。０段多条の RL による結節斜縄文が施されている。体部３類。

SK287（図版 50、写真図版 31）

深鉢体部片（81）が出土している。結節斜縄文 LR と結節斜縄文 RL との間に無文部が存在する。体部３類。

SK288（図版 50、写真図版 31）

深鉢口縁部片（82）が出土している。口縁端部がやや外に突出する。無文帯下に斜縄文 LR が施される地文深鉢４類である。

SK289･290（図版 50、写真図版 31）

深鉢口縁～体部片（83）が出土している。隣接する SK289･290 と、同グリッドの下位包含層（Ⅵa2 層）からの出土である。口縁部に無文帯をもち、直下に結節斜縄文 LR が施される地文深鉢 2b 類である。口縁端部は内削ぎされ、外にやや突出する。胎土には海綿骨針を含む。

SK256（図版 50、写真図版 31）

深鉢体～底部片（84）が出土している。SK256 と約２m 西側の下位包含層（Ⅵb 層）からの出土である。体部には結節羽状縄文が施されている。SK258 出土の 85 と同一個体の可能性が高い。

SK258（図版 50、写真図版 31）

深鉢（85）が出土している。遺存率は 3/4 個体である。口縁端部から結節羽状縄文が施された地文深鉢６類である。体部中位には縦位のケズリ調整による擦痕が見られ、その上に地文が施されている。SK256 出土の 84

と同一個体の可能性が高い。

SK257（図版 51、写真図版 32）

深鉢２点（86･87）が出土している。86 は網目状撚糸文 R が施された体部４類である。縦位のケズリ調整による擦痕が見られ、その上に地文が施されている。下位包含層（Ⅵa2 層）からも出土している。87 は０段多条の LR と LR の結節斜縄文が交互に施文された体部３類である。

SK225（図版 51、写真図版 32）

深鉢口縁～体部片（88）が出土している。口縁部に無文部を有するが明確でないため、地文深鉢３類に分類した。結節斜縄文 LR が施されている。

SK286（図版 51、写真図版 32）

深鉢体部片（89）が出土している。結節斜縄文 LR が施される体部３類である。

SK176･178（図版 51、写真図版 32）

深鉢３点（90 ～ 92）が出土している。90 は SK176 と遺構脇の上位包含層（Ⅴd 層）から出土している。遺存率は 1/2 である。無文の口縁部には厚みのある山形突起が付され、口縁部と体部境には幅の広い浅い凹線がめぐる。突起は４単位であると考える。体部には結節斜縄文 LR が施されるが、体部下位では施文間に無文帯が入る。有文深鉢４類である。91･92 は結節斜縄文 LR が施された体部３類である。91 は SK176 出土、92 は SK176 と約 8m 東に離れた SK178 から出土している。

SK267（図版 51、写真図版 32）

小形深鉢（93）が出土している。ほぼ完形である。粗雑な成形で歪みがある。外面は縦位のケズリ調整による擦痕が全面にのこる。内面は横位のケズリ調整が施されている。

SK266（図版 52、写真図版 32）

深鉢体部片（94）が出土している。結節羽状縄文が施された体部３類である。

SK226（図版 52、写真図版 32）

深鉢口縁～体部片（95）が出土している。遺構周辺の上位包含層（Ⅴd 層）からも出土し接合している。口縁部外面に粘土紐の接合痕をのこし、その上から指頭圧痕を加えている。体部には０段多条 LR による斜縄文を縦位に施している。有文深鉢６類である。

SK170･232（図版 52、写真図版 32）

深鉢口縁～体部片（96）が出土している。SK170 と、約 12m 東に離れた SK232 から出土している。口縁端部直下から羽状縄文が施される地文深鉢６類である。

SK273･283（図版 52、写真図版 32・33）

深鉢２点（97･98）が出土している。97 は重複関係にある SK273･283 と、遺構脇の上位包含層（Ⅴd･Ⅵa1 層）からの出土である。結節羽状縄文が施された体部３類である。98 は SK273 出土である。体部下位の破片で、底部付近が丸みを帯びている。鉢類の可能性もある。網目状撚糸文 R が縦位に施された体部４類である。内面にはケズリ調整痕が顕著にのこる。

SK190･191･221･227･297（図版 52、写真図版 33）

浅鉢１点（99）、深鉢３点（100 ～ 102）が出土している。４基の土坑は東西に帯状分布し、これらの間で接合関係が認められた。99 は浅鉢の底部である。SK190･191 と周囲の上位包含層（Ⅴd 層）から出土している。ケズリ調整後、ミガキが施されている。38 や 139 の底部と異なり、底面の器厚が薄い。他の浅鉢体部片との接合関係は認められなかった。100 は口縁部に結節回転文が多段施文される地文深鉢 1a 類である。隣接した SK191･297 から出土している。101 は口縁部に無文帯を有し、体部に結節斜縄文 RL が施される地文深鉢４類である。口縁部の無文帯は地文を磨消して施されている。SK190･221･227 から出土している。102 は口縁端部直下から斜縄文 LR が施される地文深鉢６類である。SK191･297 からの出土である。

SK192（図版 52、写真図版 33）

深鉢体部片（103）が出土している。０段多条 LR による結節斜縄文が施された体部３類である。

SK230（図版 53、写真図版 33）

深鉢口縁～体部片（104）が出土している。口縁部に幅広の無文部を設け、そこに横８字状の結節回転文が施される地文深鉢 1b 類である。遺構付近の下位包含層（Ⅵｂ層）からも出土している。

SK182（図版 53、写真図版 33）

深鉢体部片（105）が出土している。結節斜縄文 LR が施された体部３類である。

SK183･193（図版 53、写真図版 33）

深鉢２点（106･107）が出土している。106 は SK183 出土で、口縁部に無文帯を有し、体部に斜縄文 LR が施される地文深鉢４類である。107 は隣接する SK183･193、遺構近くの下位包含層（Ⅵｂ層）から出土している。口縁端部直下から網目状撚糸文 R が横位施文された地文深鉢６類である。

SK229（図版 53、写真図版 33）

深鉢口縁～体部片（108）が出土している。遺存率は 1/4 個体である。口縁部に磨消による無文帯を有するが、一部には斜縄文が施されている。体部には結節羽状縄文が施されている。地文深鉢４類に分類した。

SK1･247（図版 53、写真図版 33）

深鉢口縁～体部片（109）が出土している。南北方向に約３m 離れて位置する SK 1･247 からの出土である。口縁端部にわずかな無文部を有し、直下に体部地文の結節回転文が施される地文深鉢３類である。口縁端部内面には指頭圧痕が顕著にのこる。

SK4（図版 53、写真図版 34）

深鉢２点（110･111）が出土している。110 は網目状撚糸文 R が口縁部には横位に、体部には縦位に施文され、同一原体であるが施文方向を変えることにより口縁部文様帯を描出している。地文深鉢５類。111 は口縁端部にわずかな無文部を有し、直下に結節回転文、体部に縦位施文の網目状撚糸文 R が施された地文深鉢３類である。

SK2（図版 54、写真図版 34）

深鉢体部片（112）が出土している。網目状撚糸文 R が縦位施文された体部４類である。

SK321（図版 54、写真図版 34）

深鉢体部片３点（113 ～ 115）が出土している。113 は網目状撚糸文 R が縦位施文された体部４類、114･115 は斜縄文 LR が施された体部４類である。115 は縦位施文となっている。113・115 の胎土には海綿骨針を多量に含む。

SK293（図版 54、写真図版 34）

深鉢体部片（116）が出土している。斜縄文 RL が施された体部４類である。

SK295（図版 54、写真図版 34）

深鉢口縁～体部片（117）が出土している。口縁部に平行沈線文帯と、その二溝間に刺突列、口縁上端部に刻目文が施される有文深鉢 2a 類である。体部には羽状縄文が施される。

②上位包含層出土土器（図版 41、図版 54 ～ 62、写真図版 34 ～ 40）

図版 41 に上位包含層（Ⅴc・Ⅴd・Ⅵa1 層）出土土器の分布と接合・同一個体共有関係を示した。焼土遺構・土器集中出土土器についても上位包含層出土土器と同レベルであるため本項で提示してある（個々の状況については第Ⅳ章第３節Ｂ１）、図版 31･32 参照）。まず上位包含層出土土器の分布を見ると（図版 41）、西側 1K-9F･10F グリッドに最も集中し、その東 1K-10G ～ I グリッドにかけて 10 ラインから南に幅約２～３m の範囲に帯状に分布、最も東の 1K-9I･9J グリッド境でまた密に分布している。視覚的にこの３箇所に分布のまとまりが把握できるため、1K-9F･10F グリッドの一群を A グループ、1K-10G ～ I グリッドにかけての帯状に分布する一群を B グループ、東側 1K-9I･9J グリッド境の集中域を C グループにグルーピングした。さらに A グループ内を見ると

1K-9F グリッド側と 10F グリッド側で分布や接合関係の偏りが認められるため、1K-9F グリッド側を「ブロック１」、1K-10F グリッド側を「ブロック２」と細分した。ブロック１は径約９m、ブロック２は径約６m の範囲で分布している。焼土遺構（SX）は A グループブロック１の範囲内に位置し、土器集中は C グループに最も集中している。以下に各グループの土器とその出土状況、接合・同一個体共有関係について分類ごとに記す。

A グループ出土土器

ブロック１（図版 41、図版 48・49・54・56 ～ 58、写真図版 30・34・36 ～ 38）

鉢（137・138）、浅鉢（139 ～ 142）、有文深鉢（143）、地文深鉢（54・118・119・144 ～ 156・183・187）、その他体部・底部片（58・67・120・157 ～ 173）が出土している。これらのうち、118 ～ 120 は焼土遺構 SX5 出土である。ブロック内を見ると異個体がまとまっている箇所が数箇所認められるため、それらのまとまりを廃棄の時点がより近いものと考え、小ブロック単位で捉えた。ａ～ｆまでの５箇所である。

鉢は１類（137）・２類（138）である。137 は第２次調査時に出土し、平面位置はブロック１の最北端である。体部上半で強く内湾する球形を呈し、短い口頸部が外傾する器形である。入組沈線文が基軸となり左右非対称の構図をとる三角連繋沈線文が施されている。体部の主文様帯が三段に分かれ、上二段が三角連繋沈線文、最下段が矢印状の入組沈線文となっている。文様帯間には沈線により挟まれた隆線上に右斜め上方向から刺突される円形刺突列が施される。口縁部には小突起が付され、内外面ともに三角形の彫去がなされている。口縁端部には斜めの刻みと、突起間には短沈線が施され、内面には一条の沈線がめぐる。体部上半の三角連繋沈線文は彫去の手法が用いられず沈線手法によるのみである。沈線・隆線の太さも一定幅ではなく、隆線の断面頂部は偏平ではない。器面には赤色・黒色処理が施され、良く磨かれている。体部上半の内外面にコゲが付着し、破断面にも一部見られる。138 は小ブロックｂ出土である。頸部が内に屈曲し、口縁部が外傾する器形で、頸部に３条の平行沈線と縦のスリットが施される。口縁部には１単位の A 字形突起が付され、突起頂部から肩部に隆帯が垂下し、肩部の B 突起と結合している。口縁端部には斜めの刻みが施され、内面には一条の沈線がめぐる。A 字形突起内面側は 137 と同様に三角形の彫去がなされる。体部には結節斜縄文 LR が施されている。口頸部にはミガキが施され、内面にはコゲの付着が目立つ。

浅鉢は 2a 類（139）・2b 類（141・142）、メガネ状突帯のみの 140 である。2a 類 139 は第２次調査トレンチ 100T 出土である。詳細な地点の記録はない。主文様の三角連繋沈線文が磨消縄文による第ｉ種である。炭化物の付着がなく全体的に良く磨かれているが、モチーフの描出が粗雑で胎土に混入物も多く、粗い。2b 類 141 は調査区西端出土で、B グループ出土の深鉢（３）の同一個体片と近接して出土した。体部上半の破片で、突帯下の平行沈線文と三角連繋沈線文の連繋部であると推測される。黒色処理が施され、しっかりと磨かれている。142 は小ブロックｂ出土である。左右対称の三角連繋沈線文が描かれ、三角形のモチーフ間が彫去されている第ｉ種である。三角形モチーフに沈線を沿わせ、さらにモチーフ間を彫去することにより隆線による描出となっているが、隆線幅が一定していない。140 は小ブロックｄ出土である。

有文深鉢は 5b 類（143）である。小ブロックｄ出土。口縁部の無文帯下に篦状工具による刺突文が施され、体部には網目状撚糸文 R が縦位施文される。

地文深鉢は 1a 類（144）・1b 類（145）・2a 類（119・146 ～ 148）・2b 類（118・149）・３類（54・150 ～ 152）・４類（153 ～ 155・183）・６類（156・187）である。1a 類 144 は第２次調査トレンチ 100T 出土である。口縁部の結節回転文帯下に結節斜縄文 LR が施される。1b 類 145 は小ブロックｂ北西側出土。口縁部の結節回転文は、原体を緩く結節したものを回転施文している。2a 類 119 は SX5 出土である。口縁部に明瞭な無文帯を有し、その下に結節回転文帯が施される。体部には結節羽状縄文が施される。146 は小ブロックａ出土である。口縁部無文帯下に結節回転文が施される口縁部片である。胎土に海綿骨針を含む。147 は小ブロックｄ出土である。体部には結節羽状縄文が施される。148 は小ブロックｅ出土である。地文の施文後に縦位のケズリを施し、擦痕をのこしている。2b 類 118 は SX5 出土である。口縁上端部がやや外に突出する。体部には結節斜縄文が施される。

胎土に海綿骨針を含む。149 は小ブロック d 出土である。３類 54 は SX5 北側出土で SK99 と接合関係にある。150 は小ブロック b 出土の口縁部片である。151 は第２次調査トレンチ 100T 出土であり小ブロック a 東側に位置する。口縁上端部にわずかな無文部を残し結節斜縄文 LR が施されている。152 も 100 T出土であるが詳細な地点の記録はない。地文施文後に口縁上端部の横ナデ整形を行い、わずかな無文部がのこる。４類 153 は小ブロック a 出土。斜縄文 LR が施される。154 はブロック 1 の小ブロック b と、C グループ東端からの出土である。撚糸文 R が縦位施文される。155 は小ブロック c 出土。撚糸文 R が縦位施文される。183 は小ブロック f 出土。結節羽状縄文が施される。６類 156 は第２次調査トレンチ 100T 出土。斜縄文 LR が施される。187 は小ブロック f 出土。結節斜縄文 RL が施される。

体部片は 1 類（120）・２類（58）・３類（157 ～ 164）・４類（165 ～ 167・169 ～ 171）、底部片は（67・168・172・173）が出土している。１類 120 は SX5 出土であり、結節斜縄文 LR が施される。２類 58 は小ブロック e と B グループの西側から出土し、さらに SK102 と接合関係にある。網目状撚糸文 R と結節回転文が施される。３類 157・158 は０段多条 RL による結節斜縄文が施される。157 が小ブロック b、158 は小ブロック a 西側出土である。159 は小ブロック a 出土であり、０段多条 LR による結節斜縄文が施される。160 は小ブロック b 出土で結節斜縄文 LR が施される。161 も小ブロック b 出土であり、結節斜縄文 RL が施される。162 は小ブロック b・d とブロック２の小ブロック g から出土している。結節斜縄文 LR が施される。163 はブロック 1 の南西隅出土で０段多条 RL と、LR による結節羽状縄文が施される。164 は小ブロック c 出土で、結節羽状縄文が施される。４類 165 は小ブロック a 西側出土で斜縄文 LR が施される。166・167 は撚糸文 R が縦位施文される。166 はブロック 1 の南西側、167 は小ブロック b 出土である。169 ～ 171 には網目状撚糸文 R が縦位施文される。169 が小ブロック c、170 がブロック 1 の南西側、171 は小ブロック b 出土である。

底部片 67 は小ブロック e 出土で SK121 と接合関係にある。168 は小ブロック d 出土である。斜位方向のケズリによる擦痕と、斜位の撚糸文 R を施すことにより縦位の網目文のような効果が出ている。172 は小ブロック e 出土で、結節斜縄文 LR が施される。173 は小ブロック b 出土である。

ブロック２（図版 41、図版 48・58 ～ 60、写真図版 30・37・38）

浅鉢（174・175）、壺（176・177）、地文深鉢（178 ～ 180・182・186・188・189）、その他体部・底部片（46・190 ～ 194・196・199 ～ 201・203・204）が出土している。出土状況を見ると異個体が集中している箇所が３箇所あり、小ブロック g ～ i とした。

浅鉢は 1b 類（174）と体部片（175）である。174 は小ブロック i 出土である。残存率が低いため主文様の全体形は把握できないが、小ブロック h 出土の壺（176）と同様な横長楕円形区画文になると考える。黒色処理とミガキが施される。胎土には海綿骨針を多量に含む。175 は小ブロック h 出土である。

壺は１類（176）と２類（177）である。本遺跡での壺の出土はこの地点からのみである。176 は小ブロック h で主体的に出土し、小ブロック g からも出土している。口頸部が直立し、体部上半が丸く張り出す短頸壺である。主文様の描出は横長楕円形区画文に沈線を沿わせ、単位文間を浅く彫去しており、174 の浅鉢と同じ手法である。描出は粗い。口頸部は無文で口縁部内面に沈線がめぐり、頸体境には円形刺突列が施される。主文様帯下には結節斜縄文 LR が施される。177 はブロック２の南東側出土である。体部中位が張り出す器形で、176 よりなで肩である。頸部無文で体部との境に結節回転文帯が施される。体部には結節斜縄文 LR が施される。

深鉢は地文深鉢のみであり、1a 類（178）・2a 類（179）・2b 類（180･182）・５類（185）・６類（186･188･189）である。1a 類 178 は小ブロック g 東側から出土している。結節回転文が多段施文された口縁部片である。地文構成は不明。胎土には海綿骨針を含む。2a 類 179 は小ブロック h 出土。口縁部の無文帯下に横８字状の結節回転文が多段施文されている。体部欠損のため地文は不明。2b 類 180 は小ブロック h 出土。結節羽状縄文が施される。182 は小ブロック g 出土。結節斜縄文 LR が施されているが欠損のため構成は不明。５類 185 は小ブロック h と小ブロック i 西側出土である。口縁部が内湾する器形で、結節斜縄文 L を口縁部に横位、体部には縦位

に施文し、口縁部を強調している。６類 186 は小ブロック h 出土である。口縁部がやや内湾し、口縁上端部が外傾する器形で、斜縄文 LR が施される。188 も小ブロック h 出土であり、０段多条の RL･LR による結節羽状縄文が施される。189 はブロック２の東端出土である。網目状撚糸文 R が施される。

体部片は体部３類（46・190 ～ 194・196）・４類（199 ～ 201・203）があり、底部片は 204 が出土している。地文は 46・190 ～ 193 が結節羽状縄文、194・196 が結節斜縄文 LR、199 が羽状縄文、200 が斜縄文 L と網目状撚糸文 R、201・203 が網目状撚糸文 R である。底部の 204 には斜縄文 LR が施されている。出土位置は 46・194・203 が小ブロック g、190･191 が小ブロック h、192・196・201 が小ブロック i、193 が小ブロック i 南側、199 がブロック２の東端、200 が小ブロック h と i の間、204 は小ブロック i とブロック２の南側から出土している。

ブロック外出土土器（図版 41、図版 58 ～ 60、写真図版 37・38）

地文深鉢 2b 類（181）・４類（184）、体部片３類（195・197）・４類（198・202）が出土している。

地文深鉢 2b 類 181 はブロック２南東側でまとまって出土した。口縁部無文帯下に結節斜縄文 L を施し、条の下半分を左斜め上方向に等間隔で磨消すことにより、L と擬似 RL による羽状効果を出している。特異な地文描出である。体部には無文帯が横ナデにより設けられている。４類 184 はブロック２東側から出土している。口縁部無文帯下に網目状撚糸文 R が縦位施文される。

体部３類 195 は第１次調査トレンチ 51T 出土である。結節斜縄文 RL が施される。197 はブロック２東側出土で、結節斜縄文 LR が施される。４類 198 は A グループ南端から出土している。斜縄文 LR が施される。202 はブロック２東側出土で、網目状撚糸文 R が施される。

B グループ出土土器（図版 41、図版 45・48・49・51・52・54・60、写真図版 28・30・32 ～ 34・38・39）

浅鉢（99･213）、有文深鉢（３･90･95･205･214･215）、地文深鉢（57･66･121･122･206 ～ 209･216 ～ 220・221）、その他体部・底部片（97･210 ～ 212･222）が出土している。

浅鉢は 213 の口縁部片と 99 の底部である。213 は内傾し肥厚する口縁部で、内面に沈線がめぐる。浅鉢２・３類の口縁部である。B グループの中央付近から出土している。99 はグループ東側から出土し SK190・191 と接合関係にある。

有文深鉢は 3a 類（205・214）・４類（90）・5a 類（３）・６類（95・215）である。3a 類 205 は結節斜縄文 LR が施される。214 は口縁部の平行沈線文帯下に結節回転文が施されている。地文は不明。４類 90 は SK176 と接合関係にある。5a 類３は SK52 と接合関係にあり、さらに A グループブロック１の西側から出土した浅鉢（141）､小ブロック b 内出土の鉢（138）と近接した地点からも出土している。６類 95 は SK226 と接合関係にある。215 は口縁部の小片であるが、粘土紐接合部を細く浅い沈線でなぞっている。指頭圧痕も認められる。

地文深鉢は 1a 類（66・121）・1b 類（217）・2a 類（216）・2b 類（218）・３類（122・219・220）・４類（206・208・221）・５類（207）・６類（57・209）である。1a 類 66 は SK121 と接合関係にある。121 は土器集中 111 出土である。口縁部の結節回転文帯下に横位・縦位構成の結節羽状縄文が施される。1b 類 217 は口縁部に横８字状の結節回転文が多段施文されている。2a 類 216 は口縁部片の結節回転文帯下に斜縄文 RL、体部片には結節斜縄文 LR が認められるため、体部の地文構成は羽状になると考える。2b 類 218 は口縁部無文帯下に結節斜縄文 LR が施される口縁部片である。３類 122 は土器集中 97 出土である。口縁端部にわずかな無文部をのこし、以下は結節斜縄文 LR が施される。219 はグループの東側と、グループからはずれた 2K-1 グリッドから出土している。結節斜縄文 LR が施され、施文後にナデ調整が施されており地文が一部消えている。220 は口縁端部にわずかな無文部をのこし、結節斜縄文 LR が施される。４類 206 は口縁部に無文部を設け、結節斜縄文 LR が縦位施文されている。208 は口縁部無文帯下に０段多条 RL と斜縄文 LR による結節羽状縄文が施されている。221 は無文の口縁部に小突起が付され、口縁端部は外反する。体部には網目状撚糸文 R が施される。５類 207 は A グループブロック１の小ブロック d からも出土している。口縁部には横、体部は縦に撚糸文 R を施

している。６類 57 は SK102 と接合関係にある。209 は口縁上端部が外に摘み出される。斜縄文 LR が施される。

体部片は３類（97・210・211）・４類（212）であり、底部片は 222 が出土している。97 は SK273・283 と接合関係にある。結節羽状縄文 LR・RL が施される。210 は結節斜縄文 LR、211 は結節斜縄文 RL が施され、４類 212 は網目状撚糸文 R が施される。

C グループ出土土器（図版 41、図版 55・56・61・62、写真図版 35・39・40）

本グループでは土器集中が西側に分布し、その東側、1K-9J グリッド南西側に分布が集中する箇所がある。この箇所をブロック３としてグループ化した。

C グループからは浅鉢（124・230 ～ 233）、有文深鉢（130・223・234 ～ 236）、地文深鉢（123・125・126・129・131・133・136・224 ～ 227・237 ～ 239・241・242）、その他体部・底部片（127・128・134・135・228・229・240・243）が出土している。

浅鉢は 1a 類（230）・2a 類（231）・2b 類（233）・２類体部片の 232・３類（124）である。1a 類 230 は土器集中 79 北東側、ブロック３北側出土であり、土器集中と出土レベルは同じである。破片左側が横長の楕円形区画となり、右側は単位文が未形成である。口縁部にボタン状の突起をもち、口縁部と肩部に円形刺突列が施された第ii種である。突起の内外面は三角形に浅く彫去され、口縁上端部と内面には沈線がめぐる。2a 類 231 はブロック３全体に散らばり、さらに B グループ西端からも出土している。メガネ状突帯下の沈線により区画された縄文帯に、沈線で主文様が描かれる第ii種である。モチーフの全体形は不明であるが、三角形内に沈線が引かれた三角連繋文の一部であると考える。231b の拓本からは、区画沈線下にも縄文が認められ、231 の主文様帯が２段となることがわかる。主文様帯には赤色塗彩が施されている。2b 類 233 はブロック３出土である。南奥地域の短頸壺の頸部に見られる入組文が主文様帯に施されるものである。この入組文の構図は A グループブロック１出土の鉢（137）と同じであり、全体形は非対称の三角連繋沈線文と考えられる。第ii種である。主文様帯には赤色塗彩がされている。３類 124 は土器集中 79 出土であり、固有の主文様がなく、円形刺突列が施された突帯と、1・２類で主文様帯を区切る平行沈線文のみが突帯下に施されている。胎土には海綿骨針を含む。

有文深鉢は１類（234）・3a 類（130）・3b 類（223）・5a 類（235）・６類（236）である。１類 234 はブロック３出土であり、口縁部に途中で傾きが変わる集合短沈線・平行沈線文帯が施されるやや小形の深鉢の口縁部片である。類似資料として、館ノ内遺跡Ｄ地点からは平行沈線文以下に主文様として三角連繋沈線文が施されたもの〔田中・鶴巻 1992; 第９図 31〕、鳥屋遺跡からは沈線文系工字文が施されたもの〔石川 1988; 第 14 図 77〕が出土しており、234 についても同様な主文様が施される可能性が考えられる。3a 類 130 は土器集中 81 出土である。口縁部に平行沈線文帯、端部に小突起が施される。沈線間の隆線部は磨きにより偏平に仕上げられている。突起部外面は三角形状に浅く彫去される。体部には結節斜縄文 LR が施される。3b 類 223 は C グループ西端からの出土である。先細りに成形された口縁上端部内面には沈線がめぐる。体部には斜縄文 LR が施される。5a 類 235 はブロック３を主体に出土し、さらに A グループの南端からも出土している。横ナデ整形された無文の口縁部に一条の沈線が施される。無文帯下には結節回転文帯が施される。地文深鉢 2a 類の口縁部に沈線文が付加されたものである。６類 236 はブロック３出土である。口縁部に２段の粘土紐接合痕をのこし、その上を沈線でなぞっている。下段の方が幅の広い沈線を施し、口縁部を体部と区画している。沈線間には指頭圧痕が施される。施文順序は粘土紐接合痕をのこした状態で口縁部から体部まで地文を施し、その後接合部に沈線、最後に指頭圧痕を加えている。体部には結節斜縄文 LR が施される。

地文深鉢は 1a 類（126・133・224 ～ 226・241）・2a 類（237）・2b 類（125・131・132・136）・３類（123・129・227・238・239・242）である。1a 類 126 は土器集中 79 出土である。口縁端部は内削ぎでやや外に突出し、口縁部には幅広く結節回転文帯が施される。体部の地文は結節羽状縄文である。133 は土器集中 81 出土である。口縁部に結節回転文帯が施され、体部には結節羽状縄文が施される。224 ～ 226 は C グループ西端からまとまって出土しており、いずれも口縁部に結節回転文帯、体部に結節羽状縄文が施される。口縁端部には幅狭の無文帯

をもつ。225・226 は胎土・施文とも同じであるが、器形が異なるため別個体として提示した。同一個体の器形の歪みの可能性もある。241 はブロック 3 出土で、口縁部のみの破片である。横ナデ整形された幅広の無文部に結節回転文が施されている。2a 類 237 はＣグループの北側にまとまって出土した。横ナデ整形による幅広い口縁部無文帯下に、原体を緩く結節したと考えられる結節回転文が施されている。口縁端部はやや肥厚し、稜ができる。体部には結節斜縄文が施される。2b 類 125 は土器集中 79 出土である。口縁部無文帯下に結節斜縄文の結節回転文が施される。131・132 は土器集中 81 出土である。131 には結節羽状縄文が施され、横位施文帯内で撚りの方向の異なる原体を用いることにより、横位と縦位の羽状構成となっている。136 は土器集中 112 出土である。口縁端部内面には凹線がめぐる。体部には結節斜縄文 RL が施される。３類 123 は土器集中 80 出土である。129 は土器集中 79・81 両方から出土している。内面のケズリ痕が顕著である。227 は土器集中 80 西側とＣグループの東側から出土している。地文は斜縄文であるが上段が L、下段が LR を用いて施文している。238・239・242 はブロック 3 出土である。238・239 は結節斜縄文 LR が施され、239 の口縁端部内面には凹線がめぐる。242 は口縁端部片であるが、結節回転文が施されるため本類とした。

体部片は２類（228）・３類（127・134・135・240）・４類（243）、底部片（128・229）である。２類 228 はＣグループ西側出土で、横８字状の結節回転文が多段施文される。３類 127 は土器集中 79 出土で結節羽状縄文が施される。134・135 は土器集中 81 出土で、134 は結節斜縄文Ｌが施されるが、斜縄文部がナデ消されている。135 は横位・縦位構成の結節羽状縄文が施される。240 はブロック 3 出土で横位・縦位構成の結節羽状縄文が施される。４類 243 はブロック 3 北側出土である。網目状撚糸文Ｒが横位・縦位施文されている。底部片 128 は土器集中 79 出土である。集合沈線が施される。229 はＣグループの西側に散布し、撚糸文Ｒが縦位施文される。

③下位包含層出土土器（図版 42、図版 62・63、写真図版 40・41）

図版 42 に下位包含層（Ⅶa2・Ⅵa3・Ⅵb’・Ⅵb 層）出土土器の分布と接合・同一個体共有関係を示した。下位包含層の分布は大きく２つのまとまりに分かれ、1K-10F・10G グリッドの一群と、1K-10I・J グリッド境付近に分布する一群である。前者をＤグループ、後者をＥグループとした。両グループ間での接合関係は認められない。土坑出土土器と接合・同一個体関係にある個体が多く、これらについては本項「①土坑出土土器」と記載が重複するためここでは詳述しない。

D グループ出土土器（図版 42、図版 45 ～ 50・62・63、写真図版）

浅鉢（38）、有文深鉢（10・77・244 ～ 246）、地文深鉢（５・12・13・28・51・79・247・248・249・253 ～ 257）、その他体部・底部片（１・29・69・71・76・250・251・252・259・260）が出土している。うち１・５・10・12・13・28・29・38・45・51・69・71・76・77・79 は土坑と接合・同一個体関係にある。

浅鉢は 1a 類（38）がある。底部が出土し、口縁～体部片が SK207 から出土している。

有文深鉢は 3a 類（10・77）・5a 類（244）であり、口縁部が欠損しているが、有文深鉢と考えられる沈線文が施される体部ｌ類（245・246）がある。3a 類 10 は SK253、77 は SK156 と接合関係にある。5a 類 244 は口縁部に２条の沈線が施される。口縁端部は外反し先細りに整形され、上端部に刻みが施される。地文深鉢４類の口縁部に沈線文・刻目文が付加されたものである。246 の体部には間隔の密な網目状撚糸文Ｒが縦位施文される。胎土には海綿骨針を含む。

地文深鉢は 1a 類（12・51・79・254）・2a 類（253）・2b 類（５・28・247・248）・４類（13・255・256）・６類（249・257）がある。1a 類 12 は SK55・215、51 は SK202、79 は SK29・301、2b 類 5 は SK52、28 は SK64・65・167、４類 13 は SK73・215 と接合関係にある。地文には 1a 類が結節斜縄文Ｌ（12・51）、０段多条 RL・LR による結節羽状縄文（79）、斜縄文 RL（254）が施され、2a 類は結節羽状縄文（253）、2b 類は結節羽状縄文（５）、結節斜縄文 LR（28･247）、結節斜縄文 RL（248）、４類は斜縄文 LR（13･255）、６類は結節斜縄文 LR（249）、斜縄文 LR（257）が施される。2b 類 247 の胎土には海綿骨針を多量に含む。

その他、体部片には体部３類の結節斜縄文 LR（76）・結節斜縄文 L（250）・結節羽状縄文（251）、体部４類の０段多条 RL による斜縄文（29）・縦位の網目状撚糸文 R（１・252）・撚糸文 R（69）が施されるものがあり、底部片には結節斜縄文 LR と結節回転文（71）・網目状撚糸文 R と斜縄文 RL（260）・無文の 259 がある。

Ｅグループ出土土器（図版 42、図版 53・63、写真図版 33・41）

鉢（261）、地文深鉢（107･262・264・265）、体部片（263・266）が出土している。107 は SK183・193 と接合関係にある。

鉢（261）は頸部が内に屈曲し口縁部が外反する器形で、頸部に平行沈線文、口縁上端部に刺突文が施される３類である。体部には斜縄文 LR が施される。

地文深鉢には 1a 類（262）･2b 類（264）･６類（107･265）があり、262 は結節回転文帯が施される口縁部片、264 は口縁部無文帯下に結節斜縄文 LR、107 は網目状撚糸文 R、265 は斜縄文 LR と網目状撚糸文 R が交互に施される。265 の体部には縦位の擦痕が認められ、その上に地文が施されている。内面にはケズリ痕が顕著に残る。

体部片ではナデ調整が施された無文の５類（263）と結節羽状縄文の施された３類（266）がある。

グループ外出土土器（図版 42、図版 50・51・63、写真図版 31・32・41）

D･E グループより北側から出土している。地文深鉢 2b 類（83）･6 類（258）､体部片 4 類（86）､体～底部片（84）がある。83 は SK289・290 と接合関係にある。地文には結節斜縄文 LR が施される。258 は斜縄文 RL が施された口縁部片である。86 は SK257 と接合関係にある。網目状撚糸文 R が施される。縦位の擦痕が認められ、その上から地文が施されている。84 は SK256 と接合関係にある。地文には結節羽状縄文が施され、SK258 出土の 85 と同一個体の可能性がある。

B　石器と搬入礫

狭義の石器としては、石鏃２点、石鏃未成品１点、磨石・敲石類６点、石皿９点が出土した。調査面積に較べ出土量がきわめて少なく、越後平野周辺における縄文時代晩期遺跡で一般的に出土する磨製石斧や石錐などを欠く点が大きな特徴である。この時期の集落で出土する石棒・石剣類や石冠も皆無である。剥片石器類の極端な乏しさに関連し、剥片の出土も僅か１点にとどまった。このほか、石器と認めがたい完形礫や破損礫が下層全体で 67 点出土した。いずれも搬入品とみなされる資料である。層位別にみた以上の出土点数を第１表に示す。

１）石　　鏃（図版 64-１・２、写真図版 43）

Ｖｄ層とⅥa1 層から１点ずつ出土した。ともに暗灰青色の珪質頁岩を使用し、基部に天然アスファルトが付着する資料である。

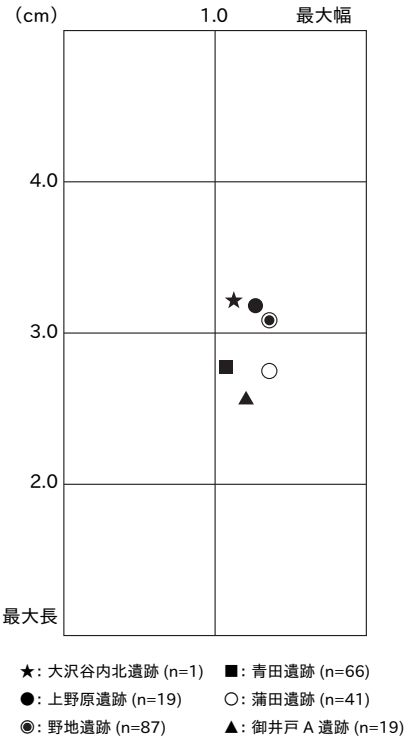
１はⅥa1 層から出土した。完全な形をとどめる凸基有茎石鏃で、長さ 3.27cm・幅 1.13cm・厚さ 0.72cm を測る。狭長な平面形と分厚い作りに特徴があり、いくぶんザラツキをもった石材を使用する。

２はＶｄ層出土の平基有茎石鏃で、先端と基部が右主面側からの衝撃によって欠損する。両側縁には、ドット表示箇所に不連続な鋸歯状加工が行なわれる。灰青色の縞を含んで光沢をおびる石材を使用している。

第１表　下層出土石器・搬入礫層位別一覧

	石鏃	石鏃未成品	剥片	磨石･敲石類	石皿	自然礫	破損礫	合計
Ⅴc層				1	1	1	8	11
Ⅴd層	1	1		1	1	6	19	29
Ⅵa1層	1			2	1	6	11	21
Ⅵa3層						1	1	2
Ⅵb’層					1	3		4
Ⅵb層				1	2	2	4	9
遺構内			1	1	3	4	1	10
合計	2	1	1	6	9	23	44	86

越後平野周辺における晩期の石鏃サイズには遺跡間で異なりがある。阿賀野川以北の胎内市野地遺跡〔加藤 2009〕と新発田市青田遺跡〔石丸 2004〕、弥彦・角田山麓の御井戸Ａ遺跡と弥彦村蒲田遺跡〔前山 2000〕、東山丘陵の三条市上野原遺跡〔中島 1981〕での長さと幅の平均値を第 11 図に示した。本遺跡で比較が可能な資料は１例のみであるが、青田遺跡（晩期後葉）や御井戸Ａ遺跡（晩期中葉）・蒲田遺跡（晩期後葉主体）の平均サイズを明らかに上回り、長さの数値が上野原遺跡（晩期中葉）や野地遺跡（晩期前葉）に近似している。



第 11 図　晩期遺跡の石鏃サイズ

鋸歯状縁をもった有茎石鏃は類例が乏しく、御井戸Ａ遺跡・蒲田遺跡・青田遺跡などで、微量の資料が確認できるに過ぎない。

２）石 鏃 未 成 品（図版 64- ４、写真図版 43）

Ｖｄ層から黒曜石製の凹基無茎石鏃が１点出土した。剥片作出時の剥離面を残す資料で、図示の左にポジ面、右にネガ面をもつ。全周にわたり入念な加工が行なわれるが、側縁がやや非対称形をなし、一側縁の先端付近に折断面を残すところから未成品と判断した。主面方向からの衝撃によって片側基部の先端を欠くが、完成時の形状がうかがえる資料である。最大幅は下半部にあり、全体的に細長い形状をなす。基部には大きな抉りが施され、最大幅に対する抉りの深度は 0.38 の比率を示す。本例は透明度が高く、雲状・縞状の晶子を含む黒曜石を使用する。肉眼的には長野県星ヶ塔産黒曜石に類似するが、理化学分析により北海道産石材と推定された（第Ⅵ章第６節）。

３）剥　　片（図版 64- ５、写真図版 43）

唯一の剥片で、黒曜石を使用する。SK64 から出土した。理化学分析により新発田市板山産石材と推定された（第Ⅵ章第６節）。円礫状原石の縁辺部にあたる資料で、図示の左が自然面、右が剥離面である。長さ 1.92cm、幅 2.14cm、厚さ 0.80cm を測り、極小クラスの石鏃素材となりうる大きさをもつ。剥片作出後加熱を受けており、剥離面全体が微細なクラックで覆われる。

４）磨 石 ・ 敲 石 類（図版 64- ６～ 12、写真図版 43）

片手で保持することが可能な礫の表面に人為的な磨耗痕や敲打痕が観察できる資料を磨石・敲石類とする。Ⅵa2・３層を除く各層と遺構内から計６点が出土した。使用痕の性状や使用部位により以下の４グループに分けられる。

１類（図版 64- ８）

平坦面に磨耗痕だけを認めるもので、狭義の「磨石」にあたる資料である。１点の出土にとどまる。８は円形をなした黒雲母花崗岩の表裏に磨耗痕をもつ。磨耗は進行しておらず、やや不整形な形状をとどめている。

２類（図版 64- ７）

円礫の両側面が弱い連続的な敲打によって面をなして平滑化したもの。黒雲母ホルンフェルスを使用した７が唯一の資料である。風化が進み不明瞭であるが、平面に磨耗痕をあわせもつ可能性がある。

３類（図版 64-11）

円礫の両面に連続的な敲打による深い凹と磨耗痕をもつ資料である。いわゆる「凹石」にあたり、流紋岩質凝灰岩を用いた 11 に限定される。風化が著しく磨耗は痕跡的である。下半部は左平面からの衝撃によって欠損する。

４類（図版 64- ６・９・10）

円礫の側面や先端に敲打痕をもつ資料で、「敲石」や「ハンマー」にあたるものである。該当する３例は、礫

の形状や使用部位に異なりがあり、６は角柱状をなした礫の先端から側面にかけて、９は断面円形の礫の側面２箇所、10 は不整形な礫の先端２箇所に敲打痕をもつ。使用石材は、泥質砂岩（６）･ホルンフェルス（９）･チャート（10）である。

５）石　　皿（図版 65-14 ～ 22、写真図版 43 ～ 45）

大型扁平礫の表面に磨耗痕をもつものである。本遺跡の石器類としては最多の９点が出土した。磨石・敲石類と同様に層位的な偏りはなく、Ⅵ a2 層を除く各層および遺構内から少量ずつ出土している。遺存状態としては、完形品４点、破損品５点からなり、両者の数が拮抗する。石皿の一般傾向からすれば、完存率がきわめて高いのが特徴である。機能面が緩やかに窪む１類と平坦もしくは緩やかな凸面をなした２類に大別できる。

１類（図版 65-15）

砂岩を使用する 15 が唯一の資料である。長さ 23.2cm･幅 13.4cm･厚さ 6cm ほどの長楕円形扁平礫を使用し、左面が長軸方向に緩やかに窪む。窪みの深さは、最大 8mm にとどまる。右面はなだらかな凸面をなし、右側に偏る状態で磨耗する。

２類（図版 65-14・16、16-17 ～ 21、67-22）

完存品３点（14・17・20）と破損品５点（16・18・19・21・22）からなる。石材は、輝石安山岩（18・19・21）、角閃石安山岩（20）、デイサイト（16・22）、砂岩（14）、角閃石黒雲母花崗岩（17）を使用する。

14 は長さ 26.4cm・幅 15.8cm・厚さ 6.6cm を測る。長楕円形をなした扁平礫の左面が磨耗によってきわめて平坦かつ平滑化した資料である。右面の磨耗は顕著でなく、中央部が緩やかに平坦化する。

17 は長さ 19.6cm・幅 18.0cm・厚さ 5.2cm の円盤状扁平礫を使用する。礫面が風化によって剥落するが、表裏で磨耗度が異なり、左面の広範囲にわたり磨耗痕が観察できる。

20 も円盤状扁平礫を使用する資料である。17 に較べ一回り小さく、長さ 15.2cm・幅 13.0cm・厚さ 4.4cm を測るのみである。表裏二面に磨耗度の違いはなく、平坦面全域にわたって磨耗痕を認める。このほか、両面の中央部に不連続で小さな敲打痕があり、左面の一部には線状の磨耗痕もあわせもつ。左面上端に残る剥離面は、磨耗後の衝撃によって生じた破損であるが、意図的なものか否かは明らかでない。

16 は左面中央からの衝撃によって二分割した資料が接合したもので、一側面の縁辺部も節理面で欠損する。右面中央に小さな段があり、この面だけに磨耗痕が観察できる。

18 は４分の１程度の破損資料である。破損面には先後関係が観察でき、上段掲載面の左上と下段上半が欠損したのち、上段左下および下端が欠損する。表裏２面が磨耗するが、磨耗度に大差はない。

19 は右面に強度の磨耗面をもつ。表裏二方向からの衝撃によって二分の一以下に破損しており、上端および下端は左平面、側面は右平面から破損する。被熱によって全体が赤化する。

21 も右面が強度に磨耗するとともに、側面から左面縁辺部にかけても面的な磨耗を認める。左面から破損面にかけて被熱による赤化や黒化が著しく、破損面の中ほどには黒化部が帯状にめぐる。破損部は左平面からの複数の衝撃によって生じたものである。

22 は不整形な礫の主として左面に磨耗痕をもつ。上端および側面の欠損部は、左平面からの複数回の衝撃によってやや鈍角的な角度で破損する。本例も被熱によっていくぶん赤化する。

６）自　然　礫（図版 64-13、68-36 ～ 38、69-39 ～ 54、写真図版 43・47）

搬入時の姿をとどめる資料と考えられる円礫が調査区全体で 23 点、総重量にして 13.25kg 出土した。層位および遺構別の出土数は、Ⅴｃ層１点・Ⅴｄ層６点・Ⅵ a1 層６点、Ⅵ a2 層１点、Ⅵ a3 層３点、Ⅵｂ層２点、遺構内４点で、Ⅴｄ層とⅥ a1 層に中心をもつ。

出土資料の石材は、泥岩５点・流紋岩４点・チャート４点・凝灰岩３点・デイサイト１点・輝石安山岩１点・砂岩４点・シルト岩１点である。このうち泥岩の中には、チャート質をなした資料が３点含まれる。形態・サイズにはバラエティーが見られ、以下のような５種に区分できる。このうち、実用的な石器の素材となりうるもの

は、敲石としての利用が可能な２類・３類のみである。

１類（図版 69-39）

片手で保持することが困難な大型礫で、長さ 19.0cm・幅 14.1cm・厚さ 11.4cm、4,278.0 ｇの 39 が唯一の資料である。チャートを石材とし、２類の 42 と接した状態で出土した。

２類（図版 68-36・37、69-40 ～ 43・47）

長さ 8.3cm ～ 12.5cm、幅 6.2cm ～ 11.2cm、厚さ 5.1cm ～ 8.5cm、重量 342.4g ～ 1,396.4g の間に分布するものである。不整形で分厚い形状をなした７点が該当する。このうち節理面から半分に割れた 36 については、表裏２面と節理面に微弱な磨耗痕も観察できる。しかし、全体にローリングを受けた形跡があり、人為的な欠損･磨耗と判断しがたいことから本類とした。37 は､風化が進み発掘時に破損した資料である。石材は砂岩(36･37)・角閃石輝石デイサイト（40)・流紋岩（41・47)・泥岩（42)・チャート（43）の５種を認める。

３類（図版 69-45・46）

細長い円礫をこれとする。チャート質泥岩を石材とする 45 と 46 が該当する。ともに表面に光沢を帯びた美麗な資料である。

４類（図版 64-13、68-38、69-44）

扁平な円礫を本類とする。３例に限定される。13 は端正な正円形をなし、表裏に弱い磨耗を認める。通常の磨石に較べきわめて扁平で､磨耗痕も微弱なため本類とした。38 は左下を欠損するが､発掘時には完存状態にあった。石材は、輝石安山岩（13)・砂岩（38)・流紋岩（44）である。

５類（図版 69-48 ～ 54）

最大長５cm 以下の小型円礫である。本遺跡の縄文土器の中には、細かな円礫を胎土内に混入する資料が多く存在する。破損後それらが遊離した場合自然礫との区別が困難になるため、胎土含有礫を明らかに上回る１cm 以上の資料を本類とみなした。全体で 10 点出土し、うち７点を示した。掲載資料の石材はチャート（48・52)・凝灰岩（49・51)・泥岩（50)・シルト岩（53)・流紋岩（54）で、他に凝灰岩・砂岩・泥岩が１点ずつある。49 や 53 を除けば表面が平滑で、美麗な資料が多い傾向にある。

７）破　損　礫（図版 67-23 ～ 30、68-31 ～ 35、写真図版 45 ～ 47）

剥片石器の石材となりえぬ搬入礫のうち、何らかの欠損を認める資料を破損礫として扱う。水洗選別によって抽出した微細な角礫については、土器の胎土混入礫との区分が困難なことから除外した。包含層および遺構精査の過程で出土した破損礫は合計 44 点、総重量にして 11.57kgである。層位・遺構別の内訳は、Ⅴｃ層８点・Ⅴｄ層 19 点・Ⅵａ1 層 11 点、Ⅵａ2 層１点、Ⅵｂ層４点・遺構内１点となり、Ⅴｄ層にいくぶん集中する傾向がある。

石材は多岐におよぶ。最も多いのは９点にのぼる砂岩である。５点を数える頁岩とデイサイトがこれに次いで多く、輝石安山岩・チャート・シルト岩・珪質頁岩・凝灰岩・泥岩・玄武岩・流紋岩・閃緑斑岩・閃緑岩・ホルンフェルスは１～３点の出土にとどまる。磨石・敲石類や石皿の使用石材と較べた場合、それらに欠落する頁岩が比較的多い点に異なりを認めるが、全体的には類似性の高い内容と言える。これに対し、自然礫の石材組成とは相違点が多い。破損礫で高い割合を示す頁岩・デイサイトが自然礫に乏しい一方で、自然礫で主体をなした泥岩・流紋岩が破損礫に乏しい、という対照的なあり方である。

破損状態が観察できる主要資料を図版 67・68 に示した。破損状態に基づき以下の１類～３類に大別する。１類の主要部分と２類・３類は、人為的に打ち割られた可能性が高いものである。

１類（図版 67-23・27・28・30、68-31）

単一の衝撃で欠損したものを本類とする。いずれも搬入時の形状がうかがえる資料である。

23･27･28 は、前述の自然礫４類にあたる中型の扁平礫である。凝灰岩（23)･輝石安山岩（27)･ホルンフェルス（28）を石材とし、いずれも先端付近からの衝撃で欠損する。23 下端部の欠損箇所は節理面で割れており、

右側破損面との先後関係が不明なため本類に含めた。

30 は長楕円形をなした分厚い大型礫で、自然礫３類の範疇に含まれる。シルト岩を石材とし、先端からの衝撃によって片面４分の３が欠損する。自然面は被熱によって剥落が著しい。

31 は盤状をなした大型礫で、厚さ 7.7cm を測る。自然礫１類にあたり、礫面が光沢を帯びた美麗な珪質頁岩を石材とする。きわめて平滑な左面中央からの一撃によって破損しており、打点とフィシャーが明瞭に観察できる。断面中央の節理を巻き込みながら破損するため、剥離面は階段状をなしている。

２類（図版 68-32・34）

単一箇所に複数回におよぶ衝撃が加わるものである。自然礫３類の大型個体にあたる 32 と下部が欠損する 34 の２例が該当する。石材は、前者が砂岩、後者が玄武岩である。

32 は、礫の先端に切り合い関係を認める複数の剥離面をもつ。４回以上の衝撃を受けた資料で、剥離面の最大幅は５cm ほどを測る。本例は、形態的に見て敲石に類似するが、前述の磨石･敲石類４類に較べ軟質な石材で、衝撃部分に敲石特有の「ツブレ」が確認できないことから破損礫の範疇に含めた。

34 の先端部には、７回以上の衝撃で生じた剥離面が表裏二面と片側側面に残る。剥離面は切り合い関係をもちながら整然と並ぶ。下端の破損面は、先端剥離の後に右側主面からの衝撃によって生じたものである。頂部が窪んで「礫石錘」の平面観に類似した資料であるが、剥離が側面にも及ぶ点に異なりがある。

３類（図版 67-24 ～ 26・29、68-33・35）

異方向からの衝撃によって、破損面に切り合いをもつ資料である。形状のうえで石核状と剥片状をなしたものに大別できる。

前者に該当するのは 24・29・33・35 で、砂岩（29・33）・閃緑斑岩（24）・輝石安山岩（35）を石材とする。35 は不整形で細長い角礫の上下二方向から衝撃が加わり、４分の１に分割化される。同一母岩とみられる小破片が他に１点ある。これ以外は、いずれも半割状態にある円礫の破損面に打撃が加わるものである。24・29 は破損面の両側から分割化され、29 は扁平な形状をなしている。33 は扁平礫が縦に再分割された縁辺部の資料である。

後者にあたる資料は 25 と 26 である。砂岩（25）と流紋岩（26）を石材とする。25 は片面に自然面を残す扁平な破損礫が、自然面からの打撃よって折断されたものである。自然面の上部には小剥離もみられる。26 は上下二方向からの衝撃によって生じた薄い破損礫の一側縁に３回ほどの小剥離が加わる。

C　漆　　器

全面に赤漆を施す竪櫛２点が９F・10F 区の遺物包含層から出土した。ともに歯材は失われるものの、棟部がほぼ完全に残る良好な資料である。小林正の分類〔小林 2001〕によれば「逆アーチ形」に該当するが、いくつかの点で差異が見られる。

結歯式竪櫛（図版 70- １・２、写真図版 48）

１は 1K-10F9 グリッドのＶｄ層から出土した。鮮やかな赤漆を施し、棟部全体がきわめて良好に遺存する資料である。両端が緩やかに外反する「逆アーチ状」の平面形をもつ。棟部の全長は 9.7cm。現存高は中央部の突起で 1.3cm、突起下で１cm 前後、端部で最大 1.4cm を測る。アーチの両端を結んだラインと内湾部との間隔は 1.4cm ある。

上面には装飾性に富んだ突起や隆帯が左右対称に配される。中央部の突起は、頂部が丸みをもった三角形をなす。その両サイドには、1.5cm ほどの間隔を置いて２条の縦位隆帯を配し、端部に付した１条の隆帯と連結させながら三角形隆帯を形作る。上面観は全体的には直線的な形状をなしているが、両端と隆帯連結部が肥厚する。幅は中央部で９mm、隆帯の連結部で１cm、両端の肥厚部で最大 1.3cm を測る。端部の側面は宝珠形をなす。その表面は緩やかに窪み、平滑に整形されている。

歯材はすべて失われているが、下部の破損面に 18 個の小孔が等間隔をもって観察できる。孔の形状は円もしくは不整楕円で、平均径は３mm ほどである。X 線写真によれば、歯材の痕跡が棟の上部まで達する様子がうかがえる。

２は 1K-9F13 のⅤｃ層から出土した。表面に施される赤漆は、いくぶんくすんで黒味を帯びる。棟の全長は 8.1cm。その形状は幅広く、現存部での計測値は 1.6 ～ 1.8cm を測る。頂部は平滑に作出されているが、両端には小さな突起が配される。端部の突起を結んだラインと内湾部との間隔は 1.1cm ある。棟部の形状は全体に扁平である。上面観では突起部、側面観では棟頂部に最大幅をもつものの、いずれも６～７mm の範囲内に含まれる。

棟部の表裏両面には、内部構造を示す連続的な凹凸が残される。保存処理後に鮮明に観察できるようになったことから、現況写真を写真図版 48 にあわせて提示した。平面および破損面を見ると、径１mm ほどの横糸が幅３mm 弱の等間隔をもってアーチ状に走り、その横糸に絡む緊縛痕が表裏両面にわたって観察できる。緊縛痕には、横糸に対し右上がりに絡むものと、「ハ」の字状をなすもの、の二種がある。部位別に見た両者のあり方には規則性があり、前者は上段図示面の最上部および、下段図示面の上から２列以下で確認できる。

下端の破損面には 13 個におよぶ歯材の痕跡が残る。形状は円もしくは不整楕円である。両端の孔は径４mm 前後を測り、突起上端が貫通する。内部に並ぶ 11 個の平均径は、３mm 前後である。

D　木製品と加工木

低湿な土壌環境に置かれた１区東部を中心に、木質遺物や自然木が多数出土した。発掘調査時に「樹木」として取上げた資料は、Ⅴｃ層２点・Ⅴｄ層 21 点・Ⅵa2 層 10 点・Ⅵｂ層 17 点土坑内４点で、Ⅵa2 層の３点とⅥｂ層の 13 点に人為的な加工痕が確認できた。加工痕をもつ樹木の内訳は、成品（櫂）１点、板・角柱材などの割材 13 点、伐採痕をもつ樹枝または幹２点である。このうち、割材４点、伐採木２点に被熱痕が見られた。このほか加工痕が確認できなかった樹木片の中でⅤｄ層の６点・Ⅵa2 層の１点・Ⅵｂ層の２点・土坑内の４点が被熱痕を有し、全体の中に占める被熱資料の割合は 35.2％にのぼる。

以上のほかに、調査区全体で合計 30 本の杭が出土した。本書では、保存状態が良好な加工木 10 点と杭 12 点を提示する。

１）櫂（図版 70- ３、写真図版 48）

本遺跡における唯一の木製品である。1K-10I3 グリッドのⅥｂ層から出土した。水かき部の先端２分の１ほどと基部の一部が欠損するものの、全体的な形状がある程度うかがえる。現存長は 72.7cm を測る。先端部の平面形は不明であるが、現存端部に最大幅をもつとすれば、全長１m ほどと推定できる。使用される樹木はヤマグワで、櫂の用材としてはイヌガヤと並び一般的なものである〔能代 1988〕。素材は、やや偏りをもった板目取りによる。均一な厚さをもってほぼ直線的な側面形をなすところから、狭長な板材を使用したと考えられる。

基部には左右対称形をなした精巧な彫刻が施される。基部は３つの部位から構成される。先端の「角状突起」、それに接して両サイドが突き出た「小型把手」、把手下に設けた二条の「肥厚部」である。把手と肥厚部は表裏を意識して作出され、裏面がともに平坦化している。基部から水かき部に到るグリップはいくぶん湾曲するが、入念なミガキによって平滑に整形される。断面はほぼ正円形をなす。直径は肥厚部直下で 2.2cm、先端側の４分の３で 2.8cm を測り、基部寄りが細身に作出される。

水かき部の両側縁は、緩やかにカーブしながら先端へと広がる。正面内部は平滑に削られ、上端に弱い稜が形成される。先端部に向かって薄手化し、下端での厚さは 0.5cm ～ 1.1cm を測る。抉りの深さは、下端部で 1.2cm である。本資料の破損面は綾が摩滅し丸みを帯びる。同様の磨耗痕が基部の破損面に見られないところから、先端部が欠損したのち土掘り具などとして再利用した痕跡と考えられる。

２）割　　材（図版 71- ４・５、図版 72- ６・７・９～ 11、図版 73-12、写真図版 49 ～ 51）

打ち割りによって、板状もしくは角柱状に作出された資料である。大型板材３点、小型板材３点、角柱状の割材５点、偏割材２点からなる。このうち６点について樹種同定を行ない、クリ３点、ヤマグワ２点、カエデ１点、という結果がえられた。

４は板材で、直径 40cm 前後のクリの樹表部を板目取りしたものである。全体に保存状態は良好と言いがたく、上下両端における加工のあり方は明らかでない

５は樹齢 70 年以上のクリを使用する。柾目取りによる端正な板材で、板を作出した後、左平面からの加工によって長方形に整形される。石斧加工痕が下端部に良好な状態で残っており、刃幅は最大５cm を測る。

７は板状をなした小型の割材で、偏割材を細かく分割した資料とみられる。上下両端に表裏異方向からの石斧加工痕をもつ。加工痕は切り合う部分が多く、本来的な刃幅は明らかでない。

６は遺存部長 40.0cm の角柱材。板目もしくは柾目取りの板材を分割した資料とみられる。

９～ 11 は顕著な被熱痕を伴う小型の板もしくは角柱材である。６に類似した木取りによる９は、上下両端が被熱によって失われる。10 は板目取りによる狭長な板材で、先端部から側面が被熱によって炭化する。11 も板目取りによる狭長な板材で、大型もしくは中型板を分割した可能性がある。片面先端が被熱によって炭化する。

12 は樹齢 20 年以上、直径 17cm ほどのヤマグワを使用する。芯を外した偏割材の両端を 29cm の長さに裁断したもので、幹側面の中央部にも幅 11cm 前後の平坦な削ぎとり面をもつ。図示上端の裁断面と幹側面に明瞭な石斧加工痕が観察でき、刃幅の大きさは最大４cm 弱を測る。このほか、幹中央の右寄りに、長さ 12cm・幅９cm・深さ３cm にわたる楕円形の窪みが存在し、この範囲にほぼ対応する形で顕著な被熱痕を認める。窪みの断面形は連続的なカーブを描く。本資料の具体的な性格は不明であるが、火の使用を伴う何らかの活動にあたり、作業台として使用された可能性がある。

３）伐　採　木（図版 72- ８、図版 73-13、写真図版 50・51）

幹の太さ６cm 台の樹木に磨製石斧による伐採痕をもつものである。図示の２例が確認された。ともに樹皮が除去され、一端に被熱痕をもつ資料である。

８は最大径 6.5cm を測り、樹齢 11 年ほどの大きく歪んだエノキを使用する。図示の下端が伐採面で、左側に３回にわたる伐採痕、その右隣に折り取り痕が観察できる。刃幅は最大３cm ほどを測る。これに接して樹枝の痕跡が見られるが、明瞭な伐採痕は確認できない。上端には顕著な被熱痕をもつ。

13 は幹の直径 6.4cm、樹齢 17 年ほどの幹から枝にかけての資料である。図示の下端に幹を伐採した際の石斧加工痕が残る。加工痕は狭長で、先端部が尖鋭な形状をなす。刃幅は最大４cm ほどにおよぶ。図の左に樹枝端部の正面観を示した。被熱によって上部が失われるが、３回程度の伐採痕が下半部に残される。

４）杭

丸木材を素材とし、先端部が概ね先鋭に作出された資料である。埋設部分だけが遺存しており、現存長は最長で 157cm、最短で 20cm を測る。最大径は 20cm ～６cm の範囲内にあり、15cm 以上が７例、10cm 以上 15cm 未満が９例、10cm 未満が 11 例を数える。使用される樹種は、トネリコとハンノキに限られる。いずれも樹枝を払っているが、樹皮を残すものが 13 例ある。先端部の加工はきわめて粗雑で、石斧加工痕が明瞭に観察できる資料は 15 の１例に限られる。主体をなすのは、幹と平行もしくは斜行する「引き裂き痕」および、幹に直交する「折り取り痕」である。本遺跡における杭先端の作出法は東京都東村山市下宅部遺跡（後期後葉）に類例があり〔秋元･倉石 2006〕、石斧加工痕の有無と上記２種の組み合わせから第 12 図のような区分が可能である。

１類（図版 75-17、図版 76-18・19、図版 77-20・21、図版 78-24、写真図版 52 ～ 54）

先端部に広い折り取り面をもち、加工部上端に鈍角的な裁断面、下端の片面にのみ引き裂き面を認める資料である。側面形は著しく左右非対称をなす。石斧によって部分的な伐り込みを施したのち、幹を前方に倒しながら根元側に引き裂き、その端部を折り取ったものと見られる。石斧加工痕と見られる裁断面は、幹に対し 45 度前後の角度をもつ。加工は浅く、幹の四分の一程度までにとどまる。このほか、径 16cm の Pit194、径 10cm の

Pit323 も本類に属し、径 16 ～ 7 cm 台の中型～小型杭に限定される。樹皮を残す資料は 18 の 1 例のみである。

２類（図版 74-14、図版 75-16、写真図版 52）

１類と同様の加工を行なったのち、先端の折り取り面から表面をさらに引き裂き、先端を尖らせたものである。二つの引き裂き面が表裏に分かれるもの（16）と 90 度のズレをもって接するもの（14）があり、側面形は左右非対称をなす。該当する２点はともに最大径 16cm 台で、本遺跡の中では大型杭にあたる。

３類（図版 78-22・23、写真図版 54）

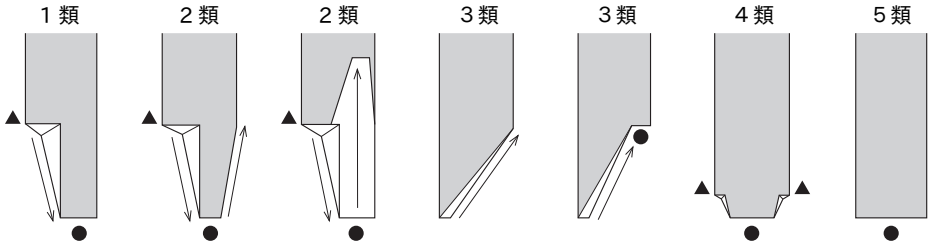
伐り込み痕が見出しがたく、先端方向からの引き裂き面をもつものを本類とする。幹に対して引き裂き面が斜行するため、端部がきわめて尖鋭な点も大きな特徴である。23 は最大径 15.6cm を測る。割面上端に見られる明瞭な段差は、折り取り痕である。22 の最大径は 7.8cm にとどまる。長さ 41cm あまりにおよぶ狭長な引き裂き面をもち、断面形は緩やかなカーブを描いて幹に接している。以上のほかに、本類に該当する資料が９例（Pit148・163・236・252・296・298・306・316・318）ある。最大径は 15cm 以上４例、10cm 以上 15cm 未満５例、10cm 未満２例と分散し、うち４例に樹皮が残る。

４類（図版 74-15、写真図版 52）

表裏二面に浅い伐りこみを入れたのち、中央の伐り残し箇所を折り取るものである。引き裂き痕を伴わず、加工面は先端付近に限定される。左右対称の側面形をもち、径 10.7cm の 15 が唯一の資料である。

５類

図示しなかったが、幹の端部に折面だけをもつものが４例（Pit144・145・319・320）ある。最大径 16cm ～６cm を測り、うち３例が 10cm に満たない。いずれも樹皮を残しており、樹枝が完全に除去されないものを含む点においても自然木との区別が困難な資料である。



（▲：石斧加工痕　矢印：引き裂き面　●：折り取り面）

第 12 図　杭分類模式図

E　大型可食種子

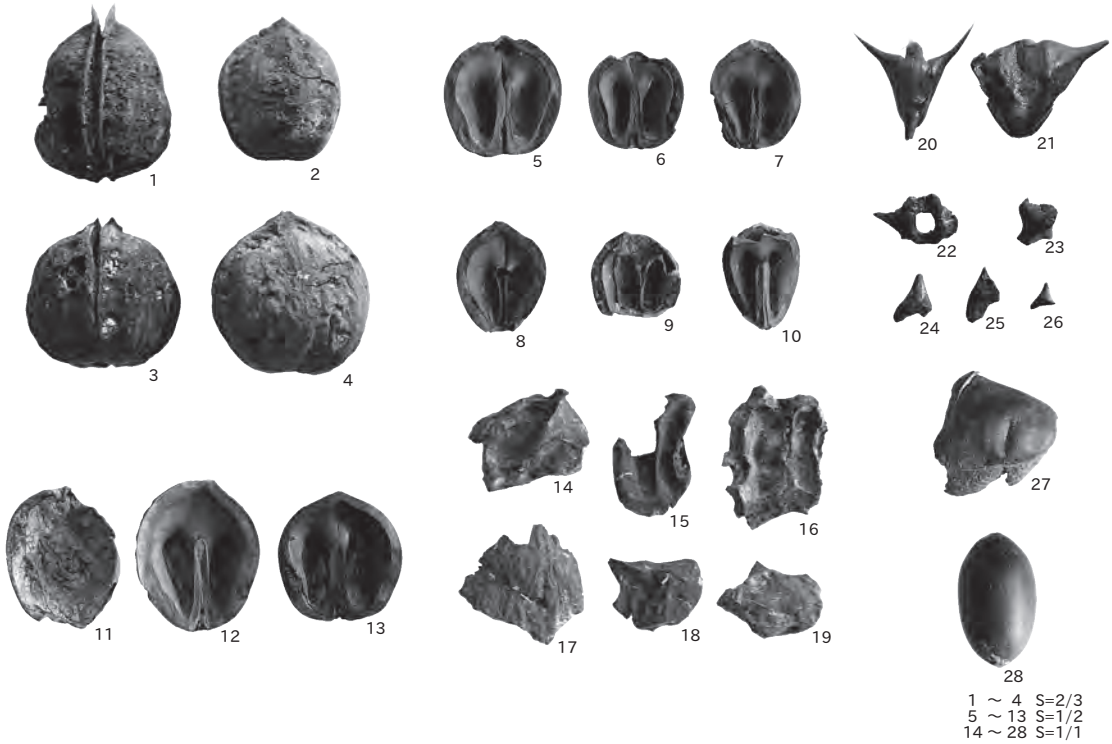
クルミ・クリと水生植物のヒシ・ハスが出土した。当地の縄文時代晩期集落で一般的に出土するトチの実およびドングリ類は確認できなかった。

１）ク　ル　ミ

出土資料の大半を占めるもので、すべての資料がオニグルミとみなされる。遺物包含層と遺構精査の過程で 78 個体が出土した。層位と遺構別の内訳は、Ⅴｃ層５個体、Ⅴｄ層 28 個体、Ⅵａ2 層 33 個体、Ⅵｂ層５個体、土坑内７個体である。このほか、１区東部の小グリッド６区画の遺物包含層（Ⅴｃ層・Ⅴｄ層）すべてと 10F・10G グリッドなどに分布する土坑 51 基の下部覆土および焼土遺構１基で土壌水洗を行なった結果、総計 70.2 ｇのクルミを採取した。水洗選別作業をつうじクルミが確認された頻度は、遺物包含層が 83％（５区画）、遺構覆土が 17％（土坑６基）である。

分布状況

量的な主体を占めるⅤｄ層とⅥａ2 層で見ると、Ⅴｄ層では散漫ながら１区９列･10 列を中心とした分布を示す。



第 13 図　下層出土の可食種子

第２表　下層出土クルミ一覧（水洗選別資料を除く）

	Ⅰa類	Ⅰb類	Ⅰc類	Ⅰd類	Ⅱa類	Ⅱb類	合計
Vc層	5						5
Vd層	9		5	7	2	5	28
VIa2層	21	6	4	1	1		33
VIb層	2	1	2				5
土　坑		1	6				7
合　計	37	8	17	8	3	5	78

VI a2 層ではその傾向を強めるが、西部で分布が稀薄である。覆土下部からクルミが出土した 6 基の土坑は、いずれも西部に位置しており、VI a2 層の空白域を埋めるような形で分布する。

包含層調査における 1 グリッドあたりの出土量は通常 1 点にとどまるが、南東部の 2K-2H7 グリッドからは東西 30cm・南北 50cm の範囲から未利用個体 15 点が出土し、本遺跡の中では突出した数値を示す。

水洗選別資料は、微細な炭化物が大半を占める。炭化クルミ 1 個体の重量を後述のⅡ a 類に基づき 3 g とみなした場合、最多出土をみた 1K-9H20 グリッドでの出土個体数は 13.7 と推定できる。以下、1K-9I21 グリッドで 5 個体の数値を示すほかは 4 グリッドで 1 個体以下の出土にとどまる。

遺存状態

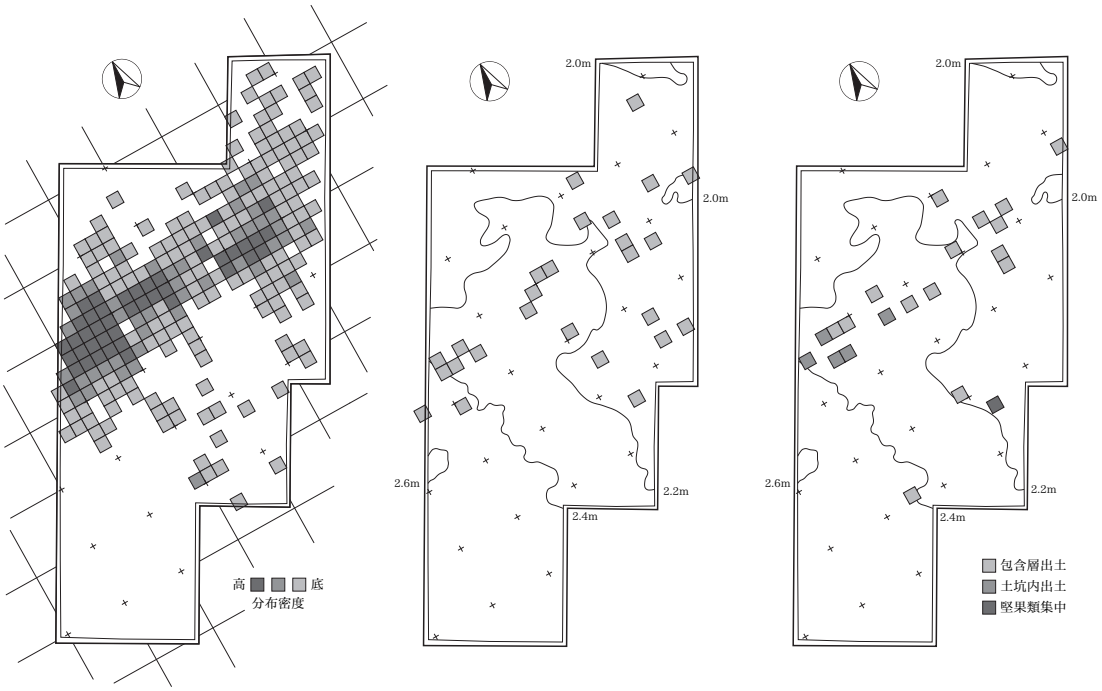
出土資料は、被熱の有無によって二大別でき、欠落個体をⅠ類、被熱個体をⅡ類とする。遺存状態により、以下のような細分が可能である。

Ⅰ a 類（第 13 図 1 ～ 4 ）

利用の形跡がない完形個体である。調査区全体で 37 個体出土した。齧歯類による食害を認める資料は、以下の各類を含め皆無である。土坑とVI a1・3 層以外の各層から出土しており、堅果類集中を含むVI a2 層出土資料が過半数を占める。

Ⅰ b 類（第 13 図 12）

縫合線にそって半分に割れたもので、自然発芽などの偶発的な要因によって生じた資料と考えられる。先端部に微細な欠損を認める資料もあるが、人為的な打割痕と断定しがたいことから本類に含めた。全体で 8 個体あり、うち 6 個体がVI a2 層から出土した。



Ⅴ層下面の炭化物分布密度　　Ⅴc 層・Ⅴd 層出土のクルミ分布　　Ⅵa 層・Ⅵb 層・土坑出土のクルミ分布

第 14 図　クルミと微細炭化物の分布

Ⅰ c 類（第 13 図 11）

破損状態にある資料のうち、核の内部が腐朽し、破損原因の判断ができないものを本類とする。17 個体あり、Ⅴ d 層・Ⅵ a2 層・Ⅵ b 層および土坑内から出土した。

Ⅰ d 類（第 13 図 5 ～ 10）

明瞭な敲打痕をもち、半割もしくは 4 分の 1 ほどに破損したものである。Ⅴ d 層から 7 個体、Ⅵ a2 層から 1 個体出土したにとどまる。破損状態にはバラエティーがあり、先端を欠くもの 4 点、基部を欠くもの 1 点、両者を欠くもの 1 点、4 分の 1 ほど 2 点からなる。未利用個体（Ⅰ a 類・Ⅰ b 類）とⅠ d 類の合計数 53 点の中に占める本類の割合は、15％ほどである。

Ⅱ a 類（第 13 図 13）

Ⅰ b 類が被熱したものである。Ⅴ d 層とⅥ a2 層から 3 個体出土したにすぎない。Ⅴ d 層出土の 2 点はともに全体が炭化し、Ⅵ a2 層の 1 点は先端だけが炭化する。

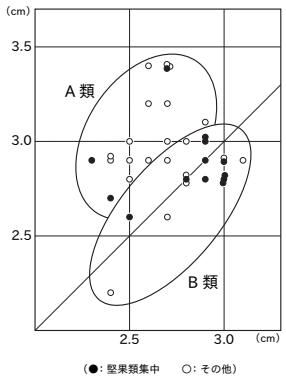
Ⅱ b 類（第 13 図 14 ～ 19）

被熱した破損個体で、いずれも微細な破片資料である。本類は採取方法によって資料数に大きな違いがあり、調査時の出土資料では 78 個体中 5 点（6.4％）にとどまるのに対し、水洗選別資料の 9 割ほどが本類によって占められる。

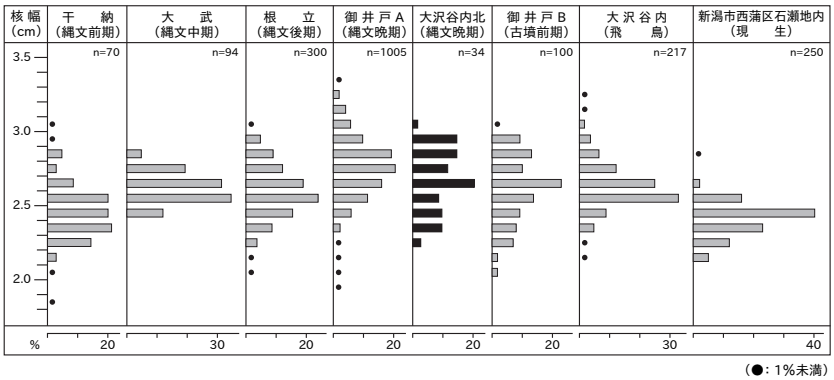
1 区東部の遺物包含層（Ⅴc 層・Ⅴd 層）6 グリッドでの水洗選別作業でえられたⅡ b 類の総重量は 59.8g である。前述の基準によれば 20 個体分に相当し、1 グリッドあたりの平均出土数は 3.3 個体と算出できる。

第 14 図左は、Ⅵ a 層上面における微細炭化物の分布状況をグリッド別に表したものである。Ⅴ d 層・Ⅵ a 層の包含層調査において出土したクルミの分布状況とおおむね重複的な広がりをみせており、Ⅱ b 類の分布総数を考えるうえで示唆的である。微細炭化物の分布密度が高い 9 列・10 列の全域 230 グリッド（920㎡）において炭化クルミが上記のような平均量をもって分布していたとすれば、調査区全体におけるⅡ b 類の総数は 760 個体ほどと推定できることになる。

核の形態とサイズ



第 15 図　クルミの長幅分布図



第 16 図　越後平野周辺におけるクルミサイズの変遷

核の形状とサイズが明らかな資料は、Ⅰａ類 23 点とⅠｂ類８点で、第 15 図に長・幅分布を示した。形状としては、長さ・幅・厚さの比率に基づき２つのグループに大別できる。A 類（第 13 図１・２）は、長さを最大値とする一般的な形態で、半数以下の 16 個体にとどまる。B 類（第 13 図３・４）は、３つの計測値が２mm 以内に収束し、全体的に球形をなしたものである。A 類を上回る 18 個体にのぼる。とりわけ、堅果類集中として扱った 15 点については、B 類の割合がきわめて高く、70％以上の占有率を示している。

越後平野周辺の縄文時代晩期において核の形態をめぐり比較資料となるのは、新潟市御井戸 A 遺跡から確認された晩期中葉の「クルミ集積」と胎内市野地遺跡における晩期前葉の「堅果類集中」である。前者は 1,100 個体あまりの未利用個体が径約 60cm･深さ 20cm の掘込内に密集していたもので、全体の４割強が B 類によって占められていた〔前山ほか 2003〕。後者では３箇所の「堅果類集中」から出土したクルミ 1,300 個体あまりの長･幅分布が示されている〔坂上 2009〕。本遺跡で区分した２グループ別の構成割合は明らかでないが、御井戸 A 遺跡や本遺跡と類似した分布状況を示しており、当地において B 類が普遍的に存在した可能性を強く示唆する。

第 16 図は、越後平野周辺の縄文時代前期から飛鳥時代までの遺跡でえられた資料と現生オニグルミにおける核の幅を時代順に示したものである。干納遺跡・根立遺跡・御井戸 B 遺跡・大沢谷内遺跡は遺物包含層からの出土資料、大武遺跡と御井戸 A 遺跡はピットや土坑内出土の貯蔵例である。提示資料には明瞭な特徴が見られる。縄文時代中期からクルミの大型化が始まり、晩期にピークを迎えた後、再び小型化へ向かう、という流れである。

本遺跡のクルミサイズは、資料数の乏しさもあって明瞭な正規分布をなしていない。しかし、2.6 ～ 2.9cm 台の範囲に主体をおく点で同時期の御井戸 A 遺跡と共通しており、縄文時代晩期におけるクルミサイズの大型化を示す一資料となる。

２）ク　　リ（第 13 図 27）

１区東部 SK177 の下部から果皮破片１点が出土した。保存状態は良好で、果皮の柱頭部から着点（座）中央付近にかけて縦方向に割れた資料である。現存幅は着点縁辺で 1.3cm、側面中央で 1.5cm を測る。上半部が内湾変形し着点付近も扁平化するため正確な長さは不明であるが、縦方向での果皮側面の実長は 2.1cm である。

新発田市青田遺跡（晩期終末）で出土したクリの計測値によれば、種実の長さは最大 4.13cm、最小 1.53cm とされる〔吉川 2004〕。現生野生種の平均的な長さは 2.1cm ～ 2.2cm 台とされており〔新美 2002・吉川 2009〕、本資料は青田遺跡の最小クラス、野生種の一般的なサイズにあたる。

３）ヒ　　シ（第 13 図 20 ～ 26）

１区東部 1K-9I21 グリッドのⅤｃ層～Ⅴｄ層および、１区西部の SK19・47・237 から破片化した炭化種実が出土した。いずれも土壌水洗をつうじて採取したものである。出土頻度は遺物包含層が 17%、土坑覆土が６％である。

出土した部位は、先端部の環状突起（22）・側面両端の刺針（24 ～ 26）などである。出土地別の内訳は、1K-9I21 グリッドから環状突起２点・刺針３点・部位不明３点、SK237 から環状突起１点、SK19・47 から

部位不明各１点である。最少個体数は 1K-9I21 グリッドが２個体、３基の土坑が１個体ずつとなる。前述のクルミと同様の方法で調査区全体個体数を求めると、遺物包含層１グリッドあたりの平均出土量は 0.33 個体となり、全体量は 76 個体と想定できる。

このほか、１区北部拡張区のⅥｂ層（標高 2m 付近）において完全な形をとどめるヒシ（21）およびヒメビシ（20）が多数出土した。付近に生育していた個体が自然堆積したものである。

４）ハ　　ス（第 13 図 28）

１区北部拡張区の 1K-8J17 グリッドⅥｂ層から１点出土した。完全な形をとどめる種実で、径 9.6mm・長さ 17mm を測る。上記のヒシ類と同様に、自然堆積した資料である。渡邊誠による 1975 年時点の集成によれば、縄文時代遺跡からのハスの出土は後・晩期に属す資料が千葉県・熊本県の２遺跡から確認されている〔渡邊 1975〕。

第３節　上層出土の遺物

A　漆　　器（図版 78-25、写真図版 54）

３区中央に位置するⅤｃ層上面検出の上層遺構 SK1001 の覆土上部から出土した小型皿１点に限定される。２分の１が遺存する無台皿で、底径 6.5cm・口径 9.0cm・器高 1.1cm を測る。底部は４mm 前後の均一な厚さをもつ。側面は、45°ほどの角度で直線的に立ち上がり、口縁部に向かうにつれて器厚を減じていく。

本例は横木取りの素材を粗く成形した後、ロクロにより整形された成品で、外面に素材成形時の加工痕とロクロ整形時の細かな線条痕を残す。ロクロ整形の後、底面以外の内外面に黒漆を施し、内面中央に赤漆を重ねている。13 世紀代に製作された資料と考えられる。

B　杭

４点出土した。いずれも保存状態が良好でなく、取り上げ後の劣化も著しいことから図示できなかった。すべて丸木材を使用しており、最大径は 18cm ～ 10cm を測る。Pit1009・1010 の２例には樹皮が残存していた。加工痕が観察できた資料は Pit1007 出土の１例に限られる。斜めに引き裂かれた先端部の一側面に階段状の削りを加えたもので、図版 35 および写真図版 27 はその側面観である。

C　石　　器

１）石　　鏃（図版 64- ３、写真図版 43）

３は、２区北西部の１K-10E20 グリッドから出土した。先端と基部が欠損する凹基有茎石鏃で、最大幅 1.22cm、厚さ 0.50cm を測る。側縁は直線的で、基部に小さな抉りを施す。全長３cm ほどと推定できる中型の成品で、入念な加工によって剥離面が平滑に調整される。欠損部の衝撃方向は先端と基部で異なりがあり、前者が側面、後者が左主面側からである。灰白色の岩体に青灰色の縞が嵌入した流紋岩を使用する。

縄文時代晩期終末から弥生時代中期までの石鏃形態の変遷が層位的に検討できた新潟市江南区西郷遺跡の知見によれば、弥生時代前期に入り凹基有茎鏃が増加する現象が確認されている〔土橋 2009〕。本遺跡に隣接する大沢谷内遺跡の１～４区では、弥生時代中期の櫛描文土器や「榎田型」磨製石斧〔土屋ほか 1999〕が上層から出土しており、本例の帰属時期が弥生時代に求められる可能性も考慮に値する。

２）磨石・敲石類（図版 64-12、写真図版 43）

12 は、２区東部の 2K-2G6 グリッドから出土した。全体に不整形な円礫の片面に、敲打で生じた凹（断面矢印範囲）をもつ。下半部は、左右両方向からの衝撃で欠損する。使用石材は輝石安山岩で、堆積環境によるためか、表面全体が黒味を帯びる。所属時期は明らかでない。

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　微細動植物遺体

本遺跡は沖積面下 1.5m 以上の深層に形成され、Ⅵ層上面の標高は 2.5m ～ 1.9m たらずである。そのため低湿な土壌環境に置かれ、通常の遺跡では遺存しない有機質遺物や動植物遺体が良好な状態で保存されていた。調査に際しては、遺跡に残る情報を最大限把握すべく、発掘土砂を多量に回収して水洗選別を行った。

篩選別を行なったのは、１区東部に位置する６グリッド分の遺物包含層（Ｖｃ層・Ｖｄ層）総てと１区西部に分布する下層遺跡土坑群の中から選択した 52 基の下部堆積土および焼土遺構１基である。第 17 図に土壌採取グリッドと遺構の位置を示す。採取土壌は土嚢袋にして包含層が 275 袋、遺構が 360 袋である。

水洗選別作業は発掘調査と並行して行なった。篩は５mm と１mm メッシュを併用し、両者を別個に取り上げ自然乾燥させたのち、室内で抽出作業にあたった。グリッド・遺構別にみた抽出資料の内訳を第３表に示す。

動物遺体（第 17 図下段）

本遺跡の立地条件からみて、魚類を中心とした動物遺体の検出を想定して抽出作業に当たった。しかし、骨類は微細な被熱資料すら確認することができず、淡水産の二枚貝とカワニナを見いだすにとどまった。

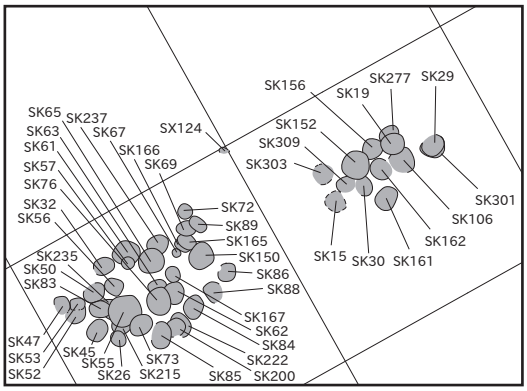
淡水産二枚貝は、カルシウム分が失われ表層の殻皮だけが残るものである。このほか、分解化した淡水産二枚貝とみられる軟質の白色微粒子が１区南西部のⅥａ層に含まれていた。種の特定がある程度可能な淡水産二枚貝は、１区東部のⅥｂ層から櫂に付着した状態で出土した完形品１個体（第 17 図下段）のみで、大きさ・形状からイシガイ目と同定できた。

篩選別資料から抽出された淡水産二枚貝は、表皮が細片化し薄皮の状態にあった（第 17 図下段）。計量が困難なため、第３表には相対的な多寡を示した。抽出資料は、１区東部の包含層６グリッドのすべてと土坑覆土の大多数から検出されているが、高域部の 1K-10F グリッドに位置する３基で欠落する点が大きな特徴である。

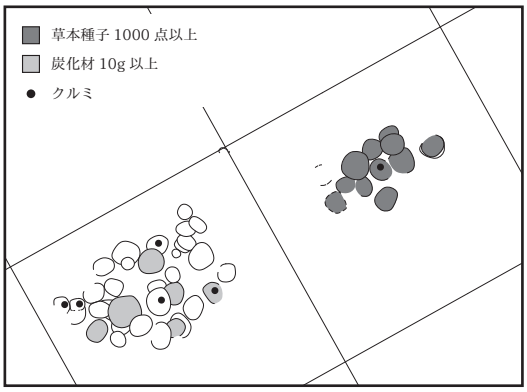
第３表　土壌水洗抽出資料一覧

試料名	グリッド	採取土量 (土嚢袋数)	草本種子 (個体数)	ヒシ重量(g)	木本種子 (個体数)	クルミ 重量(g) ( )は炭化破片	貝類 殻皮	炭化材 重量(g)
包含層①	1K-9H19	37	5,568	－	－	－	○	109.4
包含層②	1K-9H20	39	9,171	－	7	41.7(41.7)	●	32.4
包含層③	1K-9H23	33	7,956	－	22	3.0(1.2)	●	196.1
包含層④	1K-9H24	48	5,528	－	14	0.5(0.5)	●	160.7
包含層⑤	1K-9H25	67	9,095	－	117	1.4(1.4)	●	137.4
包含層⑥	1K-9I21	51	21,632	0.6	13	15.0(15.0)	●	337.0
SK15	1K-10G7･12	14	2,094	－	3	－	●	7.9
SK19	1K-10G8･9	7	1,543	0.1	8	－	●	2.9
SK25	1K-10F11･12	3	11	－	2	－	－	1.1
SK26	1K-10F12	7	39	－	1	－	－	2.1
SK29	1K-10G9･14	4	2,519	－	－	－	△	3.6
SK30	1K-10G8･13	9	1,716	－	9	－	●	6.9
SK32	1K-10F2	10	155	－	1	－	●	6.7
SK42	1K-10E15,10F11	2	12	－	－	－	－	1.0
SK45	1K-10F6	2	212	－	1	－	－	11.5
SK47	1K-10F6	10	67	0.1	－	1.4(1.4)	○	5.5
SK50	1K-10F7	4	21	－	－	－	○	1.5
SK52	1K-10F6	6	73	－	－	－	●	8.3
SK53	1K-10F6	2	13	－	－	0.9	－	0.9
SK55	1K-10F7	30	500	－	－	－	●	22.2
SK56	1K-10F7	2	331	－	－	－	△	1.1
SK57	1K-10F2	4	40	－	－	－	△	4.5
SK61	1K-10F3	8	195	－	－	－	●	5.6
SK62	1K-10F3･8	21	420	－	－	－	○	12.7
SK63	1K-10F8	2	51	－	－	－	○	4.1
SK65	1K-10F8	13	357	－	－	－	○	28.6
SK67	1K-10F9	2	118	－	－	－	△	3.4
SK69	1K-10F9･14	6	275	－	－	－	○	7.9
SK72	1K-10F4	2	314	－	－	－	●	0.7
SK73	1K-10F12	6	31	－	－	－	△	2.4
SK76	1K-10F8･13	3	169	－	－	1.0(1.0)	●	9.0
SK83	1K-10F7	6	102	－	－	－	○	7.1
SK84	1K-10F13	14	214	－	－	－	○	6.7
SK85	1K-10F12･13	4	62	－	－	－	●	2.3
SK86	1K-10F14	4	72	－	－	－	●	1.0
SK88	1K-10F14	16	593	－	－	1.2(1.2)	○	10.5
SK89	1K-10F4･9	4	277	－	－	－	△	5.0
SK106	1K-10G8･9･13･14	6	3,199	－	9	－	●	7.7
SK150	1K-10F9	6	177	－	4	－	○	3.5
SK152	1K-10G7･8	20	3,893	－	2	－	●	4.6
SK156	1K-10G8	10	2,118	－	4	－	－	3.8
SK161	1K-10G13	8	1,749	－	－	－	△	3.7
SK162	1K-10G13	8	1,469	－	－	1.7	○	1.6
SK165	1K-10F9	4	107	－	－	－	△	9.6
SK166	1K-10F9	2	120	－	－	－	●	1.7
SK167	1K-10F8	4	144	－	－	－	○	6.0
SK200	1K-10F13	16	584	－	4	－	○	10.4
SK215	1K-10F7	8	51	－	－	－	△	3.9
SK216	1K-10F12･13	6	30	－	－	－	△	1.8
SK222	1K-10F13	6	288	－	－	－	○	2.0
SK235	1K-10F7	5	59	－	－	－	△	2.9
SK237	1K-10F3･8	4	261	0.1	－	2.4	△	3.0
SK277	1K-10G8･9	6	1,947	－	－	－	○	1.9
SK289	1K-10G9	2	368	－	－	－	－	0.3
SK301	1K-10G9･14	2	3,193	－	3	－	○	3.1
SK303	1K-10G7	6	927	－	－	－	○	1.7
SK309	1K-10G7	2	2,368	－	－	－	○	4.6
SX124	1K-9F25	2	5	－	－	－	△	0.6

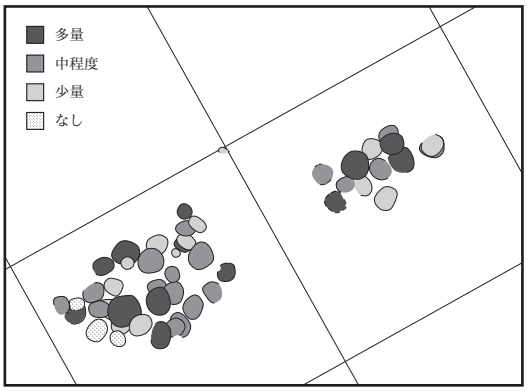
●:多量　○:中程度　△:少量



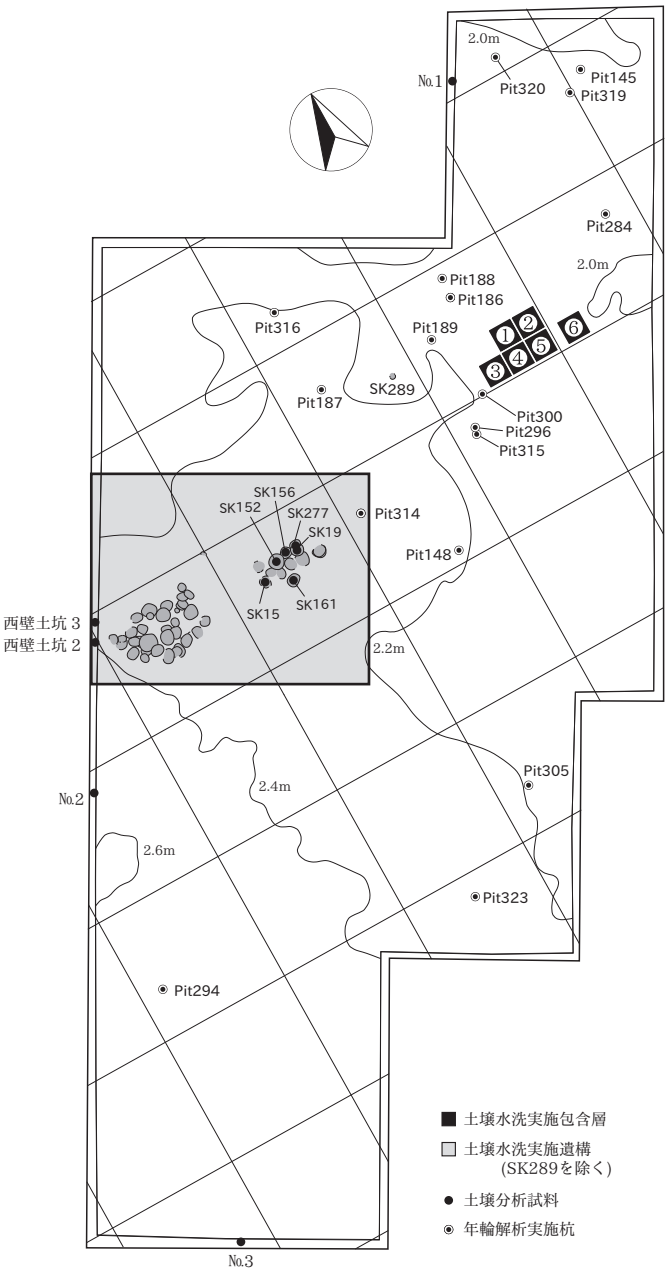
土壌水洗実施遺構

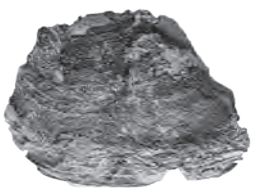


種子・炭化材の分布



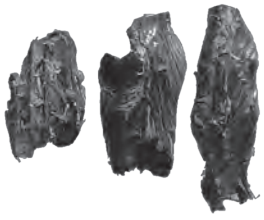
淡水産二枚貝空皮の分布





イシガイ目（S＝1/1）

カワニナ（S＝3/1）



淡水産二枚貝殻皮（S＝1/1）

第 17 図　土壌サンプル採取地と検出資料

カワニナ（第 17 図下段）は１点の出土にとどまる。１区東部に位置する 1K-9J25 グリッドの遺物包含層から抽出したもので、長さ８mm たらずの稚貝である。

種　　実

土壌水洗をつうじ、多量の種実がえられた。同定結果の詳細については本章第３節に譲り、大別種ごとに見た特徴のみを記す。

種実類の大多数を占めるのは、カヤツリグサ科を中心とした草本種子である。これらは、低域部へ向かうにつれて数が増加する傾向が顕著に見られる。東部包含層の６グリッドでそれぞれ 5,000 点以上、土坑群東側の７基において 1,000 点以上にのぼり、中でも標高２m ラインに位置する⑥（1K-9I21 グリッド）では 21,632 点におよぶ草本種子が検出された。水生草本種子は 12 種を数える。土坑群東部の８基および東部包含層から検出され、カヤツリグサ科と同様な分布状況を示している。

一方、木本類は数量が限定される。東側包含層ではアカメガシワを中心とした 10 点以上の種子が各グリッドから検出された。土坑覆土では種子量が総じて乏しく、草本類のような空間的な差異は見られなかった。

炭化物

東部包含層から炭化材 973g と炭化種子 60.4g、土坑覆土から炭化材 272.2g と炭化種子 3.9g が検出された。ともに土坑覆土からの出土量が乏しい点が特徴的である。土坑覆土から確認された炭化材と種子の量には空間的な偏りがあり、標高の高い西部において検出量が多い傾向にある。

第２節　放射性炭素年代測定

A　分　析　試　料

本遺跡の形成年代を考えるため、以下の４試料を対象に放射性炭素年代測定を行なった。

試料①　１区拡張区Ⅵｂ’層出土の自然木

下層遺跡における遺構確認面はⅥａ2 層上面である。しかし、その下位にあたるⅥｂ層からも遺物が出土しており、遺物包含層が複数面に及ぶ可能性も排除できない。Ⅵｂ層はきわめて低湿な土壌環境にあり、自然木が数多く遺存するところから、遺跡の上限年代を知る手がかりとして同層出土の自然木で年代測定を行う。

試料②　１区拡張区Ⅲ層最下部出土のオニグルミ

大沢谷内北遺跡およびその南に隣接する大沢谷内遺跡では、古代～中世遺跡の直上に湖沼の名残と考えられる未分解有機物層（いわゆるガツボ層）が堆積する。この層内には樹木や種実が多量に包含されているが、現地生の樹木に由来すると考えられるオニグルミの核１点を対象に年代測定を行い、上層遺跡の下限を知る手がりとする。

試料③　浅鉢形土器 1a 類付着炭化物

本遺跡の土器群には若干の時期幅があり、晩期中葉中段階に位置づけられる浅鉢形土器 1a 類は、最も古い特徴を備えている。このうち 230（図版 61）は遺物包含層であるⅤｄ層出土であるが、外面に炭化物が厚く付着しており（第 18 図）、使用年代の推定が可能な試料と考えられることから年代測定を行なう。

試料④　鉢形土器２類付着炭化物

138（図版 56）は、本遺跡から出土した土器の中で最も新しい様相をもつ資料の一つである。遺物包含層Ⅵａ1 層出土である。口縁部の内外面に炭化物が分厚く付着しており（第 18 図）、内面から採取した炭化物を分析試料とする。

B　分　析　方　法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分

を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC　Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta\ ^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

C　結　　果

同位体効果による補正を行なった。測定結果を第 4 表に、暦年較正結果を第 5 表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、1 区拡張区の西壁Ⅵ b’層出土の自然木（試料№①）が 2,740 ± 40BP、1 区拡張区西壁Ⅲ層最下部出土のクルミ（試料№②）が 1,630 ± 40BP、浅鉢№ 230 外面付着炭化物（試料№③）が 2,590 ± 30BP、鉢№ 138 内面付着炭化物（試料④）が 2,620 ± 30BP の値を示す。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02 のマニュアル

第４表　放射性炭素年代測定結果

試料№	種別	試料の質	備考	補正年代BP	$\delta^{13}C$(‰)	測定年代BP	Code №	測定機関番号
①	自然木	木材	Ⅵb'層	2,740± 40	-29.55±0.57	2,810± 30	9996-2	IAAA-82958
②	クルミ	種実	Ⅲ層	1,630± 40	-30.50±0.78	1,720± 40	9996-1	IAAA-82957
③	浅鉢No.230外面	土器付着炭化物	試料1	2,590± 30	-26.18±0.58	2,610± 30	10541-1	IAAA-90284
④	鉢No.138内面	土器付着炭化物	試料2a	2,620± 30	-24.68±0.49	2,620± 30	10541-2	IAAA-90285

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2）BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第５表　暦年較正結果

試料№	種別	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)													相対比	Code №
①	自然木(Ⅵb')	2,737± 37	σ	cal	BC	909	-	cal	BC	835	cal	BP	2,859	-	2,785	1.000	9996-2
			2σ	cal	BC	974	-	cal	BC	955	cal	BP	2,924	-	2,905	0.048	
				cal	BC	943	-	cal	BC	810	cal	BP	2,893	-	2,760	0.952	
②	クルミ(Ⅲ層)	1,627± 37	σ	cal	AD	386	-	cal	AD	441	cal	BP	1,564	-	1,509	0.608	9996-1
				cal	AD	484	-	cal	AD	532	cal	BP	1,466	-	1,418	0.392	
			2σ	cal	AD	344	-	cal	AD	538	cal	BP	1,606	-	1,412	1.000	
③	浅鉢No.230 外面	2,587± 32	σ	cal	BC	803	-	cal	BC	771	cal	BP	2,753	-	2,721	1.000	10541-1
			2σ	cal	BC	819	-	cal	BC	750	cal	BP	2,769	-	2,700	0.873	
				cal	BC	686	-	cal	BC	667	cal	BP	2,636	-	2,617	0.080	
				cal	BC	637	-	cal	BC	620	cal	BP	2,587	-	2,570	0.017	
				cal	BC	615	-	cal	BC	593	cal	BP	2,565	-	2,543	0.030	
④	鉢No.138 内面	2,621± 32	σ	cal	BC	814	-	cal	BC	789	cal	BP	2,764	-	2,739	1.000	10541-2
			2σ	cal	BC	836	-	cal	BC	767	cal	BP	2,786	-	2,717	1.000	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

にしたがい、１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表された値を記す。

測定誤差をσとして計算させた結果、Ⅵb’層出土の自然木（試料№①）はcalBC 909-835、Ⅲ層最下部出土のクルミ核（試料№②）はcalAD 386-532、浅鉢230（試料№③）はcalBC 803-771、鉢138（試料№④）calBC 814-789である。

試料№③　浅鉢230

試料№④　鉢138

第18図　浅鉢・鉢における炭化物付着状況

D　考　　察

放射性炭素年代測定を実施した結果、１区拡張区西壁のⅥb’層より出土した木材は約2,700年前、同じく１区拡張区西壁Ⅲ層下部より出土したクルミの核は約1,600年前の補正年代が得られた。土器器面に付着していた炭化物については、浅鉢230外面が2,590±30BP、鉢138内面が2,620±30BPであり、いずれも約2,600年前の補正年代が得られた。

まず堆積層の年代観についてであるが、クルミ核の出土したⅢ層の「ガツボ層」は周辺遺跡の事例から中世以降の堆積物と想定されているが、クルミ核より得られた年代値はそれより古い値であった。この点については古い時代の種実が二次堆積した可能性が考えられ、今後情報を蓄積し、改めて検討することが望まれる。浅鉢230と鉢138が出土したⅤc層～Ⅵa1層は遺物包含層であり、その測定年代が約2,600年前を示すことから、下位層のⅥb’層から出土した木材の測定年代約2,700年前という値は、Ⅵb’層の堆積年代を反映していると考えられる。

土器器面付着炭化物の測定結果については、谷口康浩によると関東・中部地方における縄文時代晩期の放射性炭素年代は約3,000yrBP以降とされることから〔谷口2001〕、今回の値は調和的である。ただし、土器型式のうえで浅鉢230は晩期中葉、鉢138が晩期中葉末～後葉とされているのに対し、二つの測定値に時期差はほとんど認められない。その理由は今のところ不明であるが、炭化物の由来や付着過程などによる可能性がある。

第３節　堆積環境の復元

A　分　析　試　料

発掘調査区における堆積環境の変遷を検討するため、珪藻分析を行なった。分析に供した試料はつぎのとおり。

①１区拡張区西壁の№１地点においてⅡa層からⅥb層までの間で連続的に採取した土壌の中から選択した10サンプル（Ⅲa層：試料番号１・Ⅲb層：試料番号３・Ⅲd層：試料番号４・Ⅳ層：試料番号５・Ⅴa層：試料番号６・

Ⅴb層：試料番号７・Ⅴc層：試料番号８・Ⅴd層：試料番号９、Ⅵa層：試料番号 10・Ⅵb層：試料番号 11)。

②２区西壁の№.２地点においてⅢ層上部からⅥa層までの間で連続的に採取した土壌の中から選択した４サンプル（Ⅲb層（試料番号１）・Ⅲd層（試料番号３）・Ⅴc層（試料番号４）・Ⅵa層（試料番号５））。

③３区南壁の№.３地点から採取したⅤc層サンプル（試料番号２）。

④１区土坑 SK15 の覆土から連続的に採取した５試料のうち、基底土にあたる２層下部サンプル（試料番号５）。

⑤１区土坑 SK152 の覆土から連続的に採取した５試料のうち、基底土にあたる３層下部サンプル(試料番号５)。

⑥１区土坑 SK156 の覆土から連続的に採取した５試料のうち、２層上部・３層上部・３層下部（基底土）の３サンプル（試料番号１・３・５）。

⑦１区土坑 SK161 の覆土から連続的に採取した４試料のうち、基底土にあたる２層下部サンプル(試料番号４)。

⑧１区西壁土坑№.２の覆土から連続的に採取した３サンプル（試料番号１～３）。

⑨１区西壁土坑№.３の覆土から連続的に採取した３サンプル（試料番号１～３）。

発掘調査区の中における各地点の地形的位置は、①が最低域部、②・⑧・⑨が遺構密集域高域部、④～⑦が遺構密集域低域部、③が最高域部にあたる。個々の位置および堆積層序・試料採取地は第 17 図のとおり。

B　分　析　方　法

試料を湿重で７g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか〔1998〕、Krammer〔1992〕、Krammer & Lange-Bertalot〔1986,1988,1991a,1991b〕、渡邊ほか〔2005〕、小林ほか〔2006〕、Witkowski et al.〔2000〕などを参照し、分類基準は、Round *et al.*（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢〔2000〕に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf〔1993〕を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe〔1974〕に従い、真塩性種（海水生種)、中塩性種（汽水生種)、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 3.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種（真塩性種）～汽水生種（中塩性種）については小杉〔1988〕、淡水生種（貧塩性種）については安藤〔1990〕、陸生珪藻については伊藤・堀内〔1991〕、汚濁耐性については渡邊ほか〔2005〕の環境指標種を参考とする。

C　結　　果

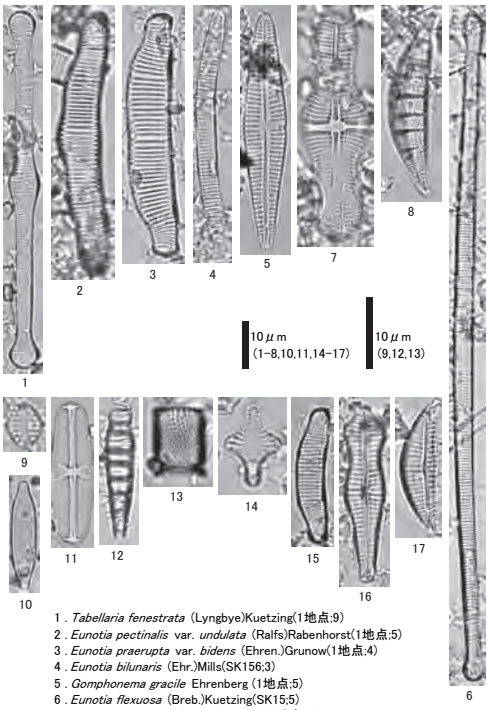
結果を第 20 図に示す。珪藻化石の産出頻度は№.１地点（１区拡張区西壁）の試料番号１・３、１区西壁土坑№.２の試料番号３が 16 個体以下と少なかったが、それ以外の 24 試料は堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、地点や試料によってばらつきが見られるが 70％前後の試料が多い。産出分類群数は、合計で 59 属 234 分類群である。以下、地点ごとに述べる。

No.１地点（１区拡張区西壁）

試料番号 11（Ⅵｂ層）は、産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると淡水域に生育する水生珪藻が全体の約 95％を占め優占する。主要種は、止水性で高層湿原指標種の *Fragilariforma virescens* が約 15％産出し、止水性で湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambigua*、好汚濁性種の *Staurosira venter*、沼沢湿地付着生種の Tabellaria fenestrata 等が認められる。

試料番号 10 ～ 8（Ⅵａ層～Ⅴｃ層）は、水生珪藻が優占し、産出種も近似している。主要種は、止水性で沼沢湿地付着生種の *Tabellaria fenestrata* が約 20％産出し、同じ生態性の *Gomphonema acuminatum*、*Eunotia flexuosa*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba*、*Eunotia minor* 等を伴う。

試料番号７～４（Ⅴｂ層～Ⅲｄ層）は、水生珪藻が約 60％と多産するが、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻Ｂ群も約 30％産出する。主要種は、陸生珪藻Ｂ群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約 30％産出し、同じ生態性の *Eunotia praerupta* を伴う。水生珪藻では、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia implicata*、*Eunotia minor*、*Eunotia pectinalis* var. *undulata*、止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema acuminatum*、流水性で中～下流性河川指標種の *Meridion constrictum* 等を伴う。

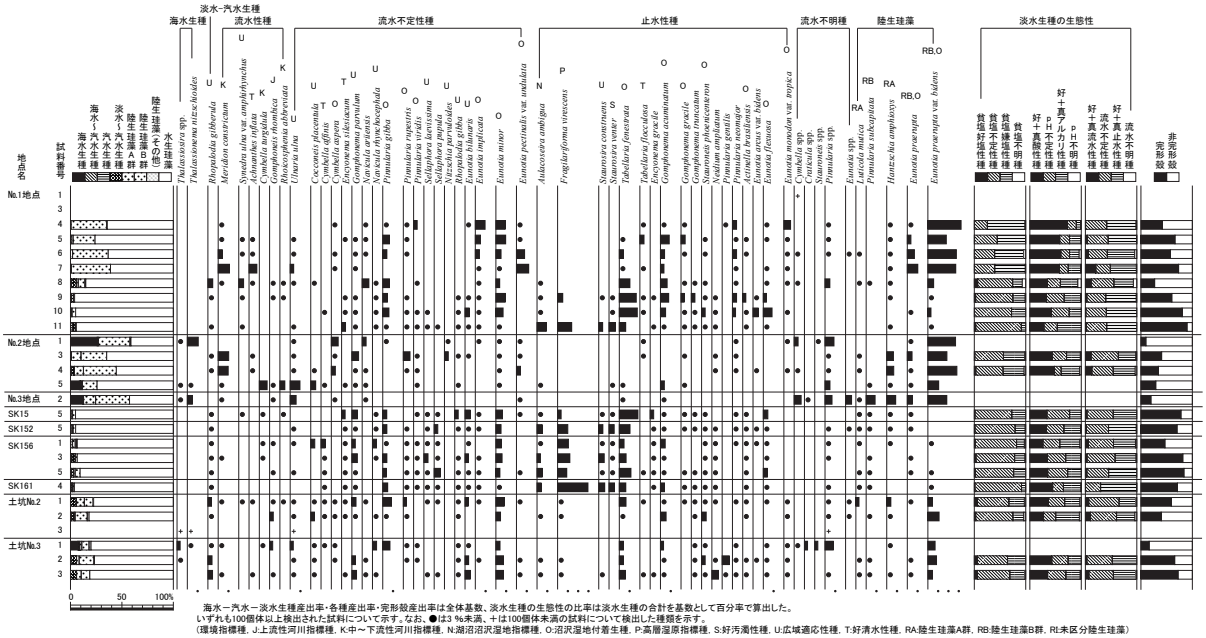


1．*Tabellaria fenestrata*（Lyngbye)Kuetzing(1地点;9)
2．*Eunotia pectinalis* var. *undulata*（Ralfs)Rabenhorst(1地点;5)
3．*Eunotia praerupta* var. *bidens*（Ehren.)Grunow(1地点;4)
4．*Eunotia bilunaris*（Ehr.)Mills(SK156;3)
5．*Gomphonema gracile* Ehrenberg（1地点;5)
6．*Eunotia flexuosa*（Breb.)Kuetzing(SK15;5)
7．*Achnanthes inflata*（Kuetz.)Grunow(1地点;6)
8．*Rhopalodia gibberula*（Ehr.)O.Muller(SK156;3)
9．*Staurosira venter*（Ehren.)H.Kobayasi(SK166;4)
10．*Fragilariforma virescens*（Ralfs)Williams & Round(SK152;5)
11．*Sellaphora pupula*（Kuetz.)Mereschkowsky（SK156;5)
12．*Meridion constrictum* Ralfs(1地点;5)
13．*Aulacoseira ambigua*（Grun.)Simonsen(1地点;11)
14．*Staurosira construens* Ehrenberg（SK166;4)
15．*Eunotia minor*（Kuetz.)Grunow(1地点;6)
16．*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg(1地点;5)
17．*Encyonema silesiacum*（Bleisch)D.G.Mann(SK166;4)

第 19 図　珪藻化石

No.２地点（２区西壁）

試料番号５（Ⅵａ層）は水生珪藻が約 70％と優占するが、陸生珪藻Ｂ群や海水生種も約 15％産出する。主要種は特に多産するものはない。



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3 %未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。
（環境指標種, J:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着生種, P:高層湿原指標種, S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻）

第 20 図　主要珪藻化石群集の層位分布

試料番号４（Ⅴｃ層）・３（Ⅲｄ層）は水生珪藻が約60％と多産するが、陸生珪藻Ｂ群も約30％産出する。主要種は、陸生珪藻Ｂ群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約30％産出し、耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* を伴う。水生珪藻では、流水性で中～下流性河川指標種の *Meridion constrictum* が約10％産出する。

試料番号１（Ⅲｂ層）は、産出種の大部分が壊れている。水生珪藻が約40％、海水生種が約30％、陸生珪藻Ｂ群が約30％産出する。主要種は、前試料と同様に陸生珪藻Ｂ群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約30％産出する。海水生種は、浮遊性の *Thalassionema nitzschioides* が約10％産出し、流水不定性で沼沢湿地付着生種の Cymbella aspera 等を伴う。

№３地点（３区南壁）

試料番号２（Ⅴｃ層）は、完形率約30％と化石の保存が悪い。水生珪藻と陸生珪藻（大部分は陸生珪藻Ｂ群）が約50％、水生珪藻が約40％、それに海水生種が約10％を占める。主要種は、陸生珪藻Ｂ群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約20％と多産し、同じく陸生珪藻Ｂ群の *Pinnularia subcapitata*、陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* がそれぞれ約10％産出する。水生珪藻では、流水不定性の *Ulnaria ulna*、海水生種では *Thalassionema nitzschioides* が産出する。

SK15

試料番号５は化石の保存が良く、水生珪藻が約95％と優占する。主要種は、止水性で沼沢湿地付着生種の Tabellaria fenestrata が約20％産出し、同じ生態性の *Eunotia flexuosa*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、*Pinnularia gibba*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、*Eunotia bilunaris* 等を伴う。

SK152

試料番号５は、化石の保存が良く、水生珪藻が約95％と優占する。主要種は、止水性で沼沢湿地付着生種の *Tabellaria fenestrata*、止水性で高層湿原指標種の *Fragilariforma virescens* がそれぞれ約10％産出する。これに次いで、止水性で湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambigua*、好汚濁性種の *Staurosira venter*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* 等が産出する。

SK156

試料番号５～１は、化石の保存が良く、水生珪藻が約90％と優占する。主要種も近似しており、止水性で高層湿原指標種の *Fragilariforma virescens* 約10％と比較的多く、次いで止水性で沼沢湿地付着生種の *Tabellaria fenestrata*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、*Pinnularia gibba*、止水性で湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambigua* 等が産出する。

SK161

試料番号４は、化石の保存が良く、水生珪藻が約95％と優占する。主要種は、止水性で高層湿原指標種の *Fragilariforma virescens* 約30％、止水性で沼沢湿地付着生種の *Tabellaria fenestrata*、好止水性の *Staurosira construens*、好汚濁性種の *Staurosira venter*、止水性で湖沼沼沢湿地指標種の *Aulacoseira ambigua*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba* 等が産出する。

１区西壁土坑№２

試料番号２は、化石の保存は良くないが、水生珪藻が約80％と優占する。主要種は、陸生珪藻Ｂ群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約10％産出し、止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema acuminatum*、*Stauroneis phoenicenteron*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* 等を伴う。

試料番号１は、試料番号２と水生珪藻の産出率や生態性が近似する。なお、化石の産出の少なかった試料番号３は、海水生種や淡水生種が散見される程度である。

１区西壁土坑№３

試料番号３と２は、化石の保存が良い。水生珪藻が約80％と優占し、陸生珪藻が約20％産出する。主要種は特に多産するものはない。

試料番号１は、化石の保存が悪い。特に多産するものはない。

D 考　　察

本遺跡が立地する場所は、新潟平野東縁に連なる新津丘陵の高立山山麓から西へ約 1km に位置しており、信濃川右岸の沖積地内に相当する。遺跡が形成された縄文時代晩期頃は、調査地点付近は起伏に富んだ地形をしていたことが発掘調査成果から明らかになっている。また、中世～近世には、未分解有機物層である「ガツボ層」が堆積しており、沼地の存在など本地域がもともと低湿な環境であったとされている。このような立地環境を踏まえて、以下のように堆積環境を考察する。

１区拡張区西壁（№１地点）のⅥｂ層（試料番号 11）は、高層湿原指標種、湖沼沼沢湿地指標種、沼沢湿地付着生種群が多産することから、湿原や湿地のような水域環境下で堆積したと考えられる。Ⅵａ層～Ｖｃ層（試料番号 10 ～ 8）も沼沢湿地付着生種群を多産する止水性種や流水不定性種が特徴であることから、沼沢地や沼地のようなある程度の水深のある水域環境下にあったと考えられ、その水質は酸性に傾いていた可能性がある。

Ｖｂ層～Ⅲｄ層（試料番号７～４）になると、沼沢湿地付着生種でもあり陸生珪藻Ｂ群でもある *Eunotia praerupta* var. *bidens* が優占する。耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群をあまり伴わなかったことから、本地点では水生珪藻として水域に生育した可能性が高い。またＶｃ層以深と比較すると、沼沢湿地付着生種群を多産する止水性種は少なくなるほか、中～下流性河川指標種も比較的多く認められる。Ｖ層が縄文時代晩期の遺物包含層であり、微高地上で多数の土坑が構築されていることなどを考慮すると、Ｖｂ層～Ⅲｄ層の堆積時は、基本的には湿地のような湿潤な水域環境であったと考えられるが、微高地上等では乾いた場所が出現するようになり、人々が利用できる状態になった可能性がある。なお、Ｖｂ層（試料番号７）では中～下流性河川指標種も比較的多く産出したことから、流水の影響がある湿地であったことが示唆され、旧信濃川の氾濫の影響と考えられる。

２区西壁（№２地点）は、全般的に化石の保存が悪かった。Ⅵａ層（試料番号５）は海水生種や中～下流性河川指標種とされる *Cymbella turgidula* が比較的多かったことから、河川の氾濫の影響を強く受ける様な環境であったと思われる。Ｖｃ層～Ⅲｂ層（試料番号４～１）にかけては、№１地点のＶｂ層～Ⅲｄ層に群集が近似しており、沼沢湿地付着生種とされた *Eunotia praerupta* var. *bidens* が多産する。ただし、Ｖｃ層、Ⅲｄ層（試料番号４・３）では中～下流性河川指標種の *Meridion constrictum* が多産すること、Ⅲｂ層（試料番号１）では明らかに二次堆積したと考えられる海水生種も多く産出することなどを考慮すると、基本的には湿地のような水域環境であり、しばしば旧信濃川の氾濫の影響を受けていたと推測される。

３区南壁（№３地点）のＶｃ層（試料番号２）も化石の保存が悪く、産出種も海水生種、陸生珪藻、水生珪藻など複数の生育環境を示す種類が混在することから、混合群集の特徴が認められる。よって、しばしば旧信濃川の氾濫の影響を受けるような、不安定な堆積環境であったと考えられる。

１区西部の土坑 SK15、SK152、SK156、SK161 覆土からは、産出割合は異なるものの高層湿原指標種の *Fragilariforma virescens* が多産し、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定生種や止水性種が多産する。よって、これらの覆土が堆積する頃は、湿原や湿地のような湿潤な環境で堆積した、あるいはその様な環境で堆積した土壌（たとえば、１区拡張西壁のⅥｂ層（№１地点 ;11）に群集組成が似ている）が遺構内に二次堆積したことが考えられる。

１区西壁土坑№３覆土の試料番号３・２でも、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種が多産する。よって、これらの試料が堆積する頃は、やはり沼沢や湿地のような湿潤な水域環境であったと考えられる。なお、試料番号１は、化石の保存が悪かったことから、覆土の大部分は他の場所から二次的に混入した異地性種を多く含んでいると考えられる。

同じく１区西壁の土坑№２の試料番号２・１は、特に多産するものはなかったが、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種が認められる。よって、氾濫の影響を受ける沼沢湿地のような環境で堆積したと考えられる。なお、化石の少なかった試料番号３は、化石の大部分が壊れていたことから、異地性種が混入するような

環境であったと考えられる。

以上の結果と、１区拡張区西壁（№１地点）および２区西壁（№２地点）で把握された堆積環境変遷過程を考慮すると、縄文時代晩期包含層を含むⅤ層堆積時には微高地上などが一時乾燥状態になり、焼土遺構や土器をはじめとする遺物が残されるような人間活動が展開されたが、その後再び旧信濃川の氾濫の影響を受ける沼沢湿地のような水域環境へ変化したため、微高地上でも従前のような活動ができなくなったことが想定される。

第４節　古植生の復元

Ａ　分　析　試　料

発掘調査区における古植生を検討するため、花粉分析・植物珪酸体分析・種実同定を行なった。

花粉分析を行なった試料は、１区拡張区西壁の№１地点・２区西壁の№２地点において連続的に採取した土壌サンプル、３区南壁№３地点から採取したＶｃ層土壌サンプル、および１区の土坑 SK19（試料番号５）と SK277（試料番号４）の基底土である。№１～３地点については、珪藻分析に供した 15 試料と同一のサンプルである。

植物珪酸体分析は、２区西壁№２地点（試料番号４）と３区南壁№３地点（試料番号２）のＶｃ層から採取した土壌を対象とした。

種実同定は、１区東部の遺物包含層６グリッドおよび１区の土坑 18 箇所（SK15･19･25･26･30･45･63･67･69･76･106･150･152･156･200･235･277･301）で得られた水洗選別資料の中から大形可食種子（オニグルミ・ヒシ）以外の種子を対象に実施した。微細草本種子については、出土量がきわめて多いため包含層６（１K-9J21）および SK152 出土資料に限定した。

Ｂ　分　析　方　法

１）花　粉　分　析

試料を約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行ない、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計測する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

２）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水･塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理･化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤〔2004〕の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 10 の位で四捨五入し、100 単位に丸める。100 個 /g 未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各地点の植物珪酸体含量を図示する。

３）種　実　同　定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川〔1994〕、中山ほか〔2000〕等との比較から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。包含層６（試料№９）と SK152（試料№ 28）は、カヤツリグサ科の果実を主体とする微小種実が多量確認されたため、カヤツリグサ科の抽出を 1000 個程度にとどめている。

C　結　　果

１）花　粉　分　析

結果を第６表、第 22 図に示す。木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめた。全体的に花粉化石の産出状況は良好で、保存状態も良い。

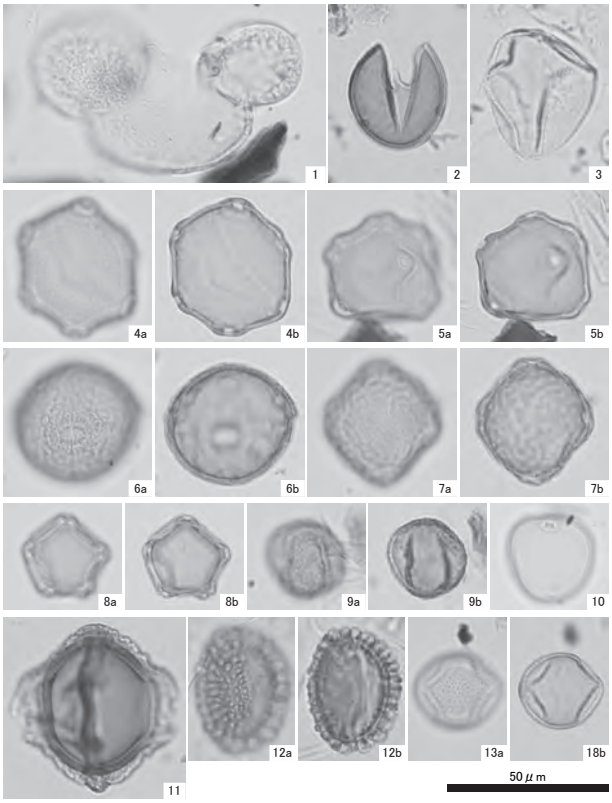
２）植物珪酸体分析

結果を第７表、第 24 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたものの保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

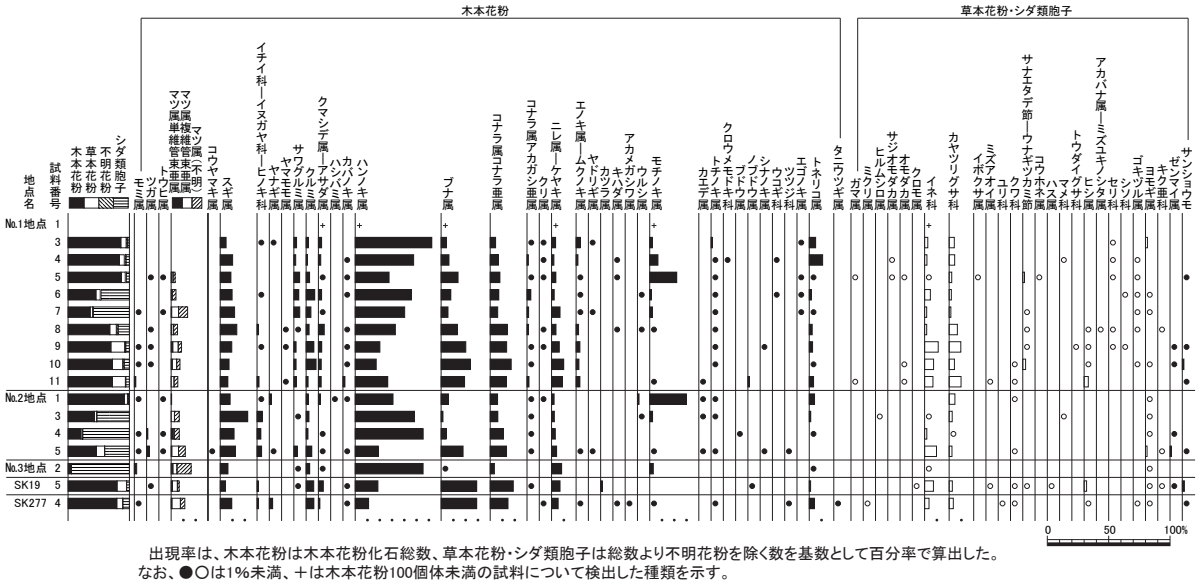
検出された植物珪酸体は、ヨシ属の産出が顕著に目立ち、クマザサ属を含むタケ亜科などが見られる。なお、イネ属などイネ科作物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

３）種　実　同　定

結果を第８表に示す。種実試料は、木本 15 分類群 （オニグルミ、ハンノキ属、クワ属、ホオノキ、コブシ - タムシバ、サルナシ近似種、アカメガシワ、イヌザンショ



第 21 図　花粉化石



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第 22 図　花粉化石群集の層位分布

第６表　花粉分析結果

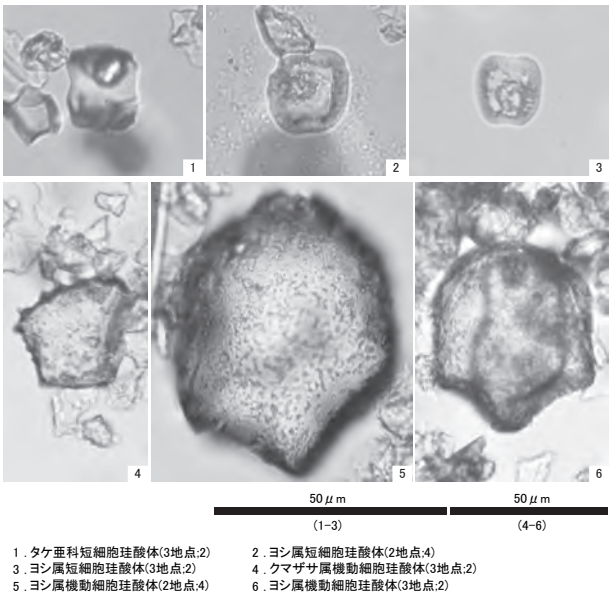
種類	№1地点										№2地点				№3地点	SK19	SK277
	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	3	4	5	2	5	4
木本花粉																	
モミ属	-	-	-	-	-	1	-	1	1	3	1	-	1	2	4	-	2
ツガ属	-	-	-	1	-	-	1	2	1	-	-	-	2	5	-	1	-
トウヒ属	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	-	-	-	1	1	1	1	3	2	-	-	-	3	1	3	3	2
マツ属複維管束亜属	-	-	-	3	1	13	4	10	8	6	-	7	2	12	7	11	23
マツ属（不明）	-	-	-	4	7	17	8	6	6	8	1	10	8	12	24	4	12
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
スギ属	-	13	27	22	22	27	34	21	16	16	19	58	22	27	13	12	31
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	1	-	-	1	-	3	2	-	4	2	11	6	8	-	3	4
ヤナギ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	1	-	-	9
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	-	6	4	12	9	11	2	4	4	5	-	1	-	6	2	2	-
クルミ属	-	5	3	7	16	9	6	14	18	4	4	6	3	10	6	17	21
クマシデ属－アサダ属	1	7	5	2	6	2	12	6	5	6	4	-	1	2	1	11	4
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	1	1	1	-	1	2	2	4	2	-	-	2	-	1	1
ハンノキ属	1	169	127	70	104	93	82	45	38	68	72	125	108	41	115	51	36
ブナ属	1	12	17	35	18	13	33	45	53	49	14	4	8	39	2	80	96
コナラ属コナラ亜属	-	12	18	20	16	14	35	30	38	34	14	16	21	29	7	52	48
コナラ属アカガシ亜属	-	1	3	2	7	3	3	1	1	4	2	1	1	2	-	1	-
クリ属	-	1	1	1	-	-	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-	1
ニレ属－ケヤキ属	1	9	5	9	5	16	9	14	22	23	5	6	6	9	17	19	18
エノキ属－ムクノキ属	-	9	4	2	2	1	5	7	5	8	-	-	-	1	-	-	1
ヤドリギ属	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カツラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
キハダ属	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウルシ属	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-
モチノキ属	2	6	18	56	3	5	1	-	-	1	70	6	-	2	6	-	2
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-	-	-
トチノキ属	-	3	1	1	1	1	1	1	1	-	2	2	-	1	-	-	1
クロウメモドキ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	-
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ウコギ科	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
エゴノキ属	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	-	14	29	2	4	1	6	6	1	9	10	3	1	-	1	3	14
タニウツギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉																	
ガマ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ミクリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒルムシロ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
クロモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
イネ科	1	8	6	2	23	11	6	35	22	24	-	4	17	46	1	25	15
カヤツリグサ科	-	13	14	6	9	9	24	30	13	34	12	15	7	11	-	9	14
イボクサ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3	-
ユリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	1	-	2	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	4	-	2	2	1	7	-	-	-	-	-	-	1	-
コウホネ属	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハス属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
マメ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属	-	-	-	-	-	-	1	3	3	12	-	-	-	-	-	7	2
アカバナ属－ミズユキノシタ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	1	1	1	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シソ科	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキヅル属	-	-	3	1	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	-	5	-	-	1	3	-	-	3	-	1	4	1	6	1	2	4
キク亜科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
不明花粉	-	8	9	4	5	5	10	6	7	2	3	2	1	1	-	1	2
シダ類胞子																	
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2	5	-	1	-
サンショウモ	-	-	-	1	-	-	-	2	4	1	-	-	-	2	-	6	1
他のシダ類胞子	2	9	18	15	232	380	69	16	22	20	5	325	705	185	3556	9	44
合　計																	
木本花粉	6	271	267	254	227	231	251	224	222	257	234	259	195	218	208	276	331
草本花粉	1	27	26	20	35	26	39	72	51	74	14	25	25	65	2	53	39
不明花粉	0	8	9	4	5	5	10	6	7	2	3	2	1	1	0	1	2
シダ類胞子	2	9	18	16	232	380	69	19	27	21	5	325	707	192	3556	16	45
総計（不明を除く）	9	307	311	290	494	637	359	315	300	352	253	609	927	475	3766	345	415

ウ、キハダ、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、ミズキ、エゴノキ、ニワトコ）487 個、草本 16 分類群（ヒルムシロ属、イヌビエ近似種、ミクリ属、ウキヤガラ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、タデ属、ジュンサイ、コウホネ属、オニバス、マツモ、ヒシ属？、ミツガシワ）2377 個 +20cc、計 2864 個 +20cc が検出された。包含層２～６（試料№４～８）で落葉小高木のアカメガシワが、包含層６（試料番号９）と SK152（試料番号 28）で湿生～中生草本のカヤツリグサ科が多量確認された。

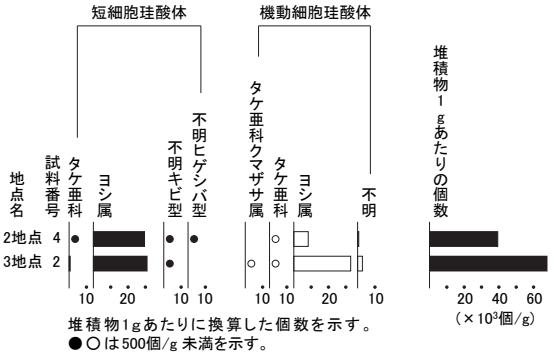
D　考　　察

1）周 辺 古 植 生

遺跡周辺の森林植生を反映する花粉群集についてみると、地点や層位により多産する種類に差が見られるものの、多産する群集はいずれの試料も類似している。１区拡張区西壁（№１地点）で連続的な分析結果が得られていることから、本地点を中心に植生変遷を検討する。



第 23 図　植物珪酸体



第 24 図　植物珪酸体含量

Ⅵｂ層～Ⅴｃ層

ハンノキ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属が多く産出し、マツ属・スギ属・クルミ属・クマシデ属 - アサダ属・ニレ属 - ケヤキ属・エノキ属 - ムクノキ属・トネリコ属等を伴う。このうち多産するブナ属・コナラ亜属は、冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素である。ハンノキ属は河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種類であり、ニレ属 - ケヤキ属をはじめサワグルミ属・クルミ属・クマシデ属 - アサダ属・コナラ亜属の一部・エノキ属 - ムクノキ属・トチノキ属・シナノキ属・トネリコ属等も同様の生育環境を示す。また、スギ属も湧水地等に林分を形成する種類である。以上のことから、当該期の周辺には、ハンノキ属を主体とする湿地林が存在し、低地や扇状地扇端部等にはマツ属やスギ属も林分を形成していた可能性がある。また、後背の丘陵や山地部には、ブナ属・コナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林が生育していたと考えられ、丘陵上や低地にはコナラ属アカガシ亜属等の常緑広葉樹も認められたと推測される。

第７表　植物珪酸体含量　(個/g)

種類	2地点 4	3地点 2
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	<100	600
ヨシ属	29,500	31,000
不明キビ型	300	300
不明ヒゲシバ型	200	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科クマザサ属	-	300
タケ亜科	300	300
ヨシ属	8,300	32,800
不明	700	2,800
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	30,100	31,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,300	36,200
総　計	39,400	68,000

1)含量は、10の位で四捨五入し、100単位に丸めている。
2)<100：100個/g未満。
3)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

草本類は少ないながらも、イネ科・カヤツリグサ科が産出する。これらには水湿地に生育する種類が含まれるほか、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ヒシ属・ゴキヅル属・サンショウモ等の水湿地生植物も検出される。このうちヒシ属は比較的水深のある場所に生育する種類であり、発掘調査所見でもⅥｂ層からヒシの種実が検出されている。この層準の堆積物については、珪藻分析の結果から沼沢地や沼地のような水域環境が想定されており、今回の花粉分析結果と調和的である。

Ⅴｂ層～Ⅲｂ層

Ⅴｂ層～Ⅲｂ層なると、群集組成は大きく変化しないものの、下位層で比較的多く検出されていたブナ属・コナラ亜属の割合が減少し、ハンノキ属が優占する。珪藻分析の結果では湿地的な水域環境が想定されており、ヒシ属も検出されなくなることを考慮すると、従前より水深の浅い湿地に堆積環境が変遷したことにより、至近にハンノキ湿地林が生育するようになったか、周辺での湿地拡大に伴いハンノキ湿地林が拡大した可能性がある。なお、Ⅳ層でモチノキ属が多産するのは、局地的要素を反映していると考えられ、Ⅳ層堆積時の調査区周辺に生

育した個体に由来すると想定される。

同様の変化は、２区西壁（№２地点）のⅥａ層（試料番号５）とⅤｃ層～Ⅲｂ層（試料番号４～１）でも認められ、３区南壁（№３地点試料番号２）でも保存状態が悪いながらもハンノキの多産する群集組成が得られている。植物珪酸体分析でも湿潤な場所に生育するヨシ属が多産することから、同様の植生を反映していると推測される。なお、クマザサ属は落葉広葉樹林の林床、タケ亜科は比較的乾いた場所に生育することから、これらが後背地の丘陵周辺に生育していた可能性がある。

土坑 SK19・277

１区の土坑 SK19、SK277 の覆土（試料番号５・４）では、ブナ属、コナラ亜属が多く産出し、マツ属、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属 - ケヤキ属等を伴う。珪藻分析結果から、土坑覆土は湿原や湿地のような湿潤な水域環境下で堆積した、あるいは１区拡張区西壁のⅥｂ層（№１地点；試料番号 11）のような湿潤な水域環境で堆積した土壌の二次堆積等が想定されている。これらの花粉化石群集は１区拡張区西壁のⅥｂ層に類似しており、特に草本類でクロモ属、ハス属、ヒシ属等、比較的水深のある水域環境を示す種類が検出されることから、一時乾燥化した微高地上でも再び水位が上昇した可能性がある。

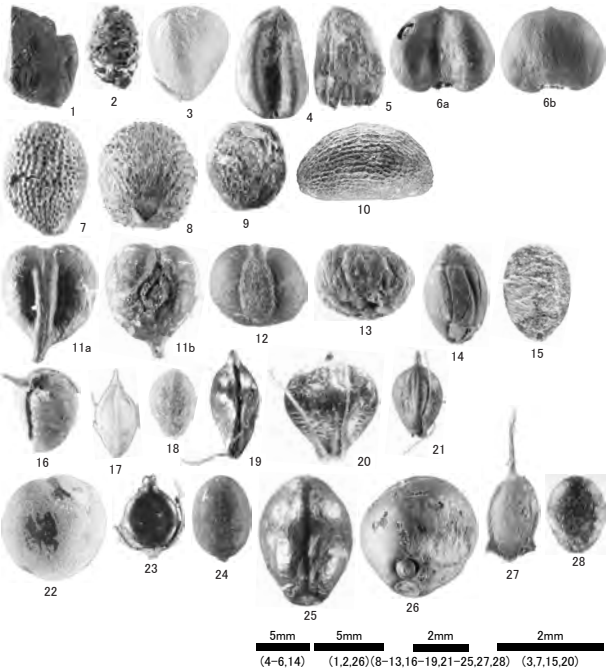
２）種　　実

縄文時代晩期の遺物包含層や土坑覆土から木本 15 分類群と草本 16 分類群の種実遺体が確認された。木本類は全て広葉樹で、ホオノキ・コブシ - タムシバ・キハダ・河畔林要素のオニグルミ・ハンノキ属、ミズキなどの高木や、伐採地や崩壊地･林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入するクワ属･アカメガシワ･イヌザンショウ･エゴノキ･ニワトコ等の中･低木類、サルナシ近似種･ブドウ属･ノブドウ･ブドウ科などの籐本類が確認された。これらの種実は、本遺跡の立地等を考慮すると、信濃川の河畔等に林分を形成した樹種や、その周縁、新津丘陵などに生育した樹種を反映していると推定される。

草本類は、沈水性の浮遊植物（根が水底に固定せずに浮遊する植物）のマツモ、沈水植物（根が水に固着して植物体全体が水中に沈む植物）または浮葉植物（根が水に固着して水面に浮葉を展開する植物）のヒルムシロ属、浮葉植物のジュンサイ・オニバス・ヒシ属、浮葉または抽水植物（根が水に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物）のコウホネ属、抽水植物のミクリ属・ウキヤガラ（近似種）・ホタルイ属の一部・カヤツリグサ科の一部・ジュンサイ・コウホネ属・オニバス・マツモ・ヒシ属？・ミツガシワが確認された。これらの水湿地生植物の種実は、土壌の由来となる低地の植生を反映すると考えられ、堆積の場は湿地で、やや水深がある場所が存在したことが推定される。

その他に確認されたカナムグラ・イヌビエ近似種・イヌタデ近似種・サナエタデ近似種・タデ属などのやや乾いた場所に生育する中生植物は、周囲に生育していた草本類に由来するものと考えられる。

なお、検出された分類群のうち、オニグルミは子葉が食用可能で、遺跡出土例も多い植物質食料である。クワ属・サルナシ（近似種）・ブドウ属は果実、



1．オニグルミ 核(試料No.30;包含層6)
2．ハンノキ属 雌花序(試料No.5;包含層3)
3．クワ属 核(試料No.28;SK152)
4．ホオノキ 種子(試料No.18;SK69)
5．ホオノキ 種子(試料No.18;SK69)
6．コブシータムシバ 種子(試料No.27;SK301)
7．サルナシ近似種 種子(試料No.9;包含層6)
8．アカメガシワ 種子(試料No.8;包含層6)
9．イヌザンショウ 種子(試料No.8;包含層6)
10．キハダ 種子(試料No.7;包含層5)
11．ブドウ属 種子(試料No.23;SK156)
12．ノブドウ 種子(試料No.22;SK152)
13．ミズキ 核(試料No.8;包含層6)
14．エゴノキ 種子(試料No.7;包含層5)
15．ニワトコ 核(試料No.28;SK152)
16．ヒルムシロ属 果実(試料No.5;包含層3)
17．イヌビエ近似種 果実(試料No.9;包含層6)
18．ミクリ属 果実(試料No.28;SK152)
19．ウキヤガラ近似種 果実(試料No.28;SK152)
20．ホタルイ属 果実(試料No.28;SK152)
21．カヤツリグサ科 果実(試料No.28;SK152)
22．カナムグラ 核(試料No.14;SK30)
23．サナエタデ近似種 果実(試料No.28;SK152)
24．ジュンサイ 種子(試料No.8;包含層6)
25．コウホネ属 種子(試料No.26;SK277)
26．オニバス 種子(試料No.11;SK19)
27．マツモ 果実(試料No.22;SK152)
28．ミツガシワ 種子(試料No.5;包含層3)

第 25 図　種実遺体

オニバスは胚乳が食用可能である。本分析で検出された種実に人為的な利用の痕跡は確認されなかったが、当時の食料などに利用されていた可能性がある。

第８表　種実同定結果

試料№				3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
分類群	部位	状態	種別	包含層1	包含層2	包含層3	包含層4	包含層5	包含層6		SK15	SK19	SK25	SK26	SK30	SK45	SK63	SK67	SK69	SK76	SK106	SK150	SK152	SK156	SK200	SK235	SK277	SK301	SK152		包含層6		備考
木本																																	
オニグルミ	核	破片				2																								1			
		破片	炭化		11																												
ハンノキ属	雌花序	完形				1																											
クワ属	核	完形																										1					
ホオノキ	種子	破片																	2													接合	
コブシータムシバ	種子	完形						2	1																		1	1					
		完形	食痕																									1					
		破片										5									2		1										
サルナシ近似種	種子	完形								1																		1					
アカメガシワ	種子	完形			3	44	4	46	60		1	2			1	1				1	2	1			1	1		1					
		破片			33	50	7	34	32	1					3					1	3	2	3	2	2		1						
		胚乳				21		23	6																1								
		破片				4		6	3																								
イヌザンショウ	種子	完形							2																								
キハダ	種子	完形						1																									
ブドウ属	種子	完形			1			1	2		2	1	2	1	1		1				2			2									
		破片				1	1								2						1	1											
ノブドウ	種子	破片																					1										
ブドウ科	種子	破片						1							1		2																
ミズキ	核	完形						1	6									1															
		破片						1																									
エゴノキ	種子	完形					1	1	1						1																		
		破片				1	1																										
ニワトコ	核	完形																											1				
草本																																	
ヒルムシロ属	果実	完形		1		15			1	2																							
イヌビエ近似種	果実	完形								1																							
ミクリ属	果実	完形							1																				2				
ウキヤガラ近似種	果実	完形								17																			178				
ホタルイ属	果実	完形								21																			203				
カヤツリグサ科A	果実	完形		2		1		3	1	1040																		1	600				
		破片			1		1	3		120													1										
カヤツリグサ科(A以外)	果実	完形								1																							
カヤツリグサ科A主体	果実	完形・破片								12cc																			8cc				
カナムグラ	核	完形													1																		
イヌタデ近似種	果実	完形								2																							
サナエタデ近似種	果実	完形																											17				
		破片																											21				
タデ属	果実	完形																						2					3				
ジュンサイ	種子	完形				3	1		5																		4						
コウホネ属	種子	完形				1			1																		1		1				
		破片																															
オニバス	種子	完形							1			3			1						1		1	1				1					
		破片	基部			1		1	4		1	1									5		2	1			2	6					
		破片				4	1	1	6		2	2			3						14		5	3				5					
マツモ	果実	完形				1		1							1						1		2										
		破片									1												2				1						
ヒシ属?	果実	破片				2																							1			嘴?	
ミツガシワ	種子	完形				2				1																			1				
		破片																					1										
貝類																																	
カワニナ																														1			
イシガイ目	殻皮																															1	
	殻皮を含む破片																													0.8g			

注)カヤツリグサ科A：1000個/約3cc

第５節　木材資源の利用（樹種同定）

A　分　析　試　料

木質試料は、木製品・加工材・自然木等 12 点と杭 28 点、およびⅤｄ層・Ⅵａ層から出土した炭化材 20 点である（第９・10 表）。

B　分　析　方　法

木材は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）･柾目（放射断面）･板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム･クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、３断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東〔1982〕、Wheeler 他〔1998〕、Richter 他〔2006〕を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林〔1991〕や伊東〔1995,1996,1997,1998,1999〕を参考にする。

C　結　　果

木製品・杭の樹種同定結果を第９表、炭化材の樹種同定結果を第 10 表に示す。木製品・杭は、全て広葉樹で６分類群（ハンノキ属ハンノキ亜属、クリ、エノキ属、ヤマグワ、カエデ属、トネリコ属）に同定された。一方、炭化材は、

針葉樹１分類群（モミ属）と広葉樹８分類群（ヤナギ属、ハンノキ属ハンノキ亜属、ブナ属、クリ、エノキ属、ヤマグワ、キハダ、エゴノキ属）に同定された。

D 考　　察

今回調査対象とした 28 点の杭材は、ハンノキ亜属の幹・枝材 17 点とトネリコ属 11 点であり、２種類が利用されていたと推定される。ハンノキ亜属とトネリコ属には、湿地林（ヤモダチ - ハンノキ林）を構成する種類が含まれている。本遺跡の立地環境、および花粉分析の結果でハンノキ亜属が多産しトネリコ属も連続的に見られること、さらに同時に同定試料とした自然木にハンノキ亜属の根材や幹・枝材が認められることを考慮すれば、周囲の低地にハンノキ亜属とトネリコ属を主体とする湿地林が見られ、そこから材を得ていたことが推定される。

第９表　樹種同定結果

地点名	試料番号	層位	取上番号	器種等	樹種	備考
	1	Ⅵb	No.1994(図版72-6)	角柱材	カエデ属	
	2	Ⅵb	No.1989	板材	クリ	
	3	Ⅵb	No.1938(図版71-5)	板材	クリ	
	4	Ⅵb	樹木8(図版72-10)	板材	ヤマグワ	先端炭化
	5	Ⅵa	樹木24	割材(板未製品?)	クリ	
	6	Ⅵb	No.1937(図版73-12)	偏割材	ヤマグワ	抉り部炭化
1地点	7	Ⅲ	W-1		トネリコ属	
	8	Ⅵb	樹木20(図版72-8)	伐採木	エノキ属	先端炭化
	9	Ⅵd	樹木39	自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属<根材>	
	10	Ⅵd	No.613	自然木	クリ	
	11	Ⅵd	樹木	自然木(枝?)	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
	12		№1670(図版70-3)	櫂	ヤマグワ	
Pit144				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit145				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit148				杭	トネリコ属	
Pit163				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit186			(図版77-21)	杭	トネリコ属	
Pit187				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit188			(図版78-24)	杭	トネリコ属	
Pit189			(図版77-20)	杭	トネリコ属	
Pit194				杭	トネリコ属	
Pit195				杭	トネリコ属	
Pit212				杭	トネリコ属	
Pit236				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit252				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit284			(図版74-14)	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit292				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit294			(図版75-17)	杭	トネリコ属	
Pit296			(図版76-19)	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit298				杭	トネリコ属	
Pit300			(図版75-16)	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit305			(図版78-22)	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit306				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit314			(図版78-23)	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit315			(図版76-18)	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit316				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit318				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit319				杭	ハンノキ属ハンノキ亜属<幹・枝材>	
Pit322			(図版74-15)	杭	トネリコ属	
Pit323				杭	トネリコ属	

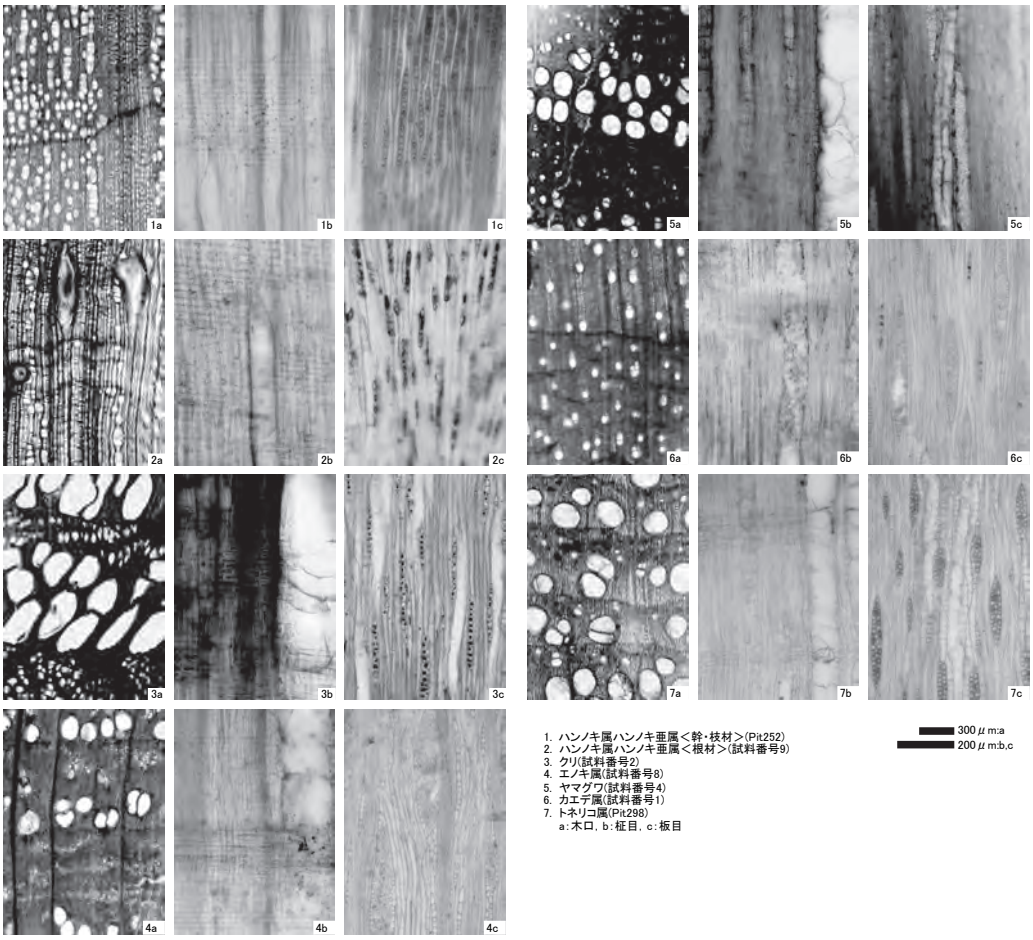
木製品では、櫂にヤマグワが認められた。ヤマグワは重硬で強度･耐久性が強く、加工はやや困難な部類に入る。新潟県内における縄文時代の櫂は、新発田市青田遺跡から出土した６点が針葉樹のスギ２点と広葉樹のクリ４点に同定された例がある〔鈴木ほか 2004〕。今回得られた結果は、材質から見ればクリの利用に似ており、櫂として強度の高い木材が選択されていたことが推定される。

第 10 表　炭化材の樹種同定結果

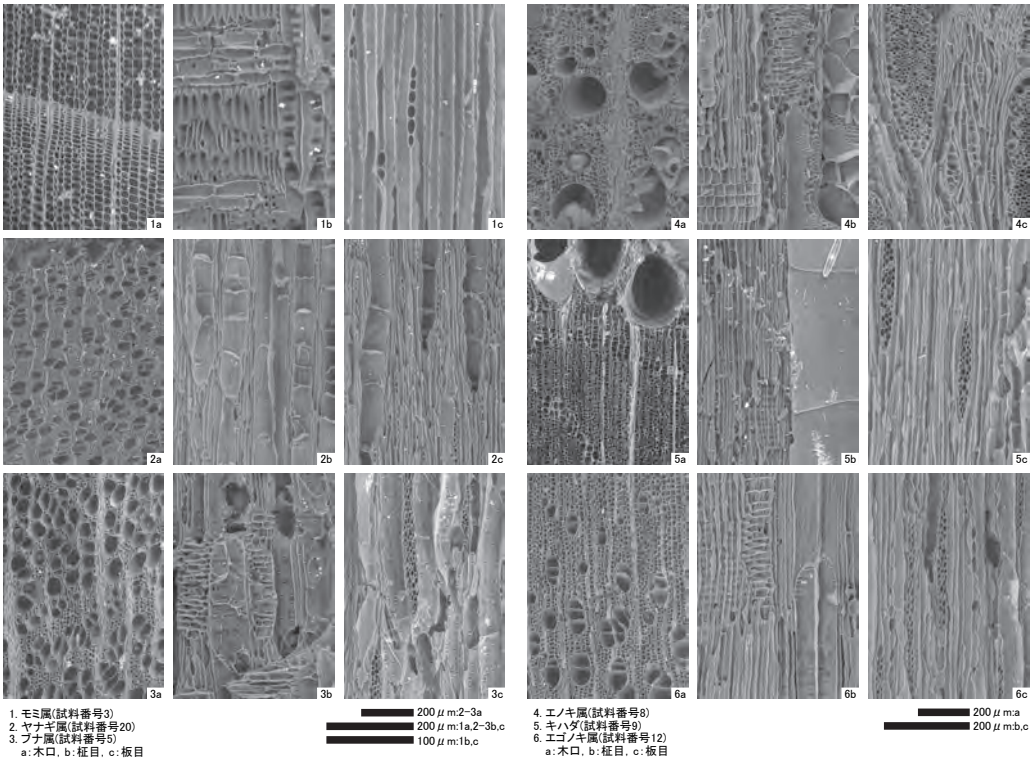
試料番号	位置	層位	取上番号	樹種
1	1K-9G24	Vd	No.683	エノキ属
2	1K-9I12	Vd	No.337	エゴノキ属
3	1K-9I15	Vd	No.476	モミ属
4	1K-9I20	Vd	No.478	クリ
5	1K-9I25	Vd	No.623	ブナ属
6	1K-9J11	Vd	No.414	ヤマグワ
7	1K-9J12	Vd	No.415	クリ
8	1K-9J16	Vd	No.426	エノキ属
9	1K-9J22	Vd	No.469	キハダ
10	1K-10G5	Vd	No.666	エノキ属
11	1K-10H5	Vd	No.1115	エゴノキ属
12	1K-10H7	Vd	No.571	エゴノキ属
13	1K-10I6	Vd	No.613	ハンノキ属ハンノキ亜属
14	1K-10J1	Vd	No.234	ヤマグワ
15	2K-1I1	Vd	No.543	エゴノキ属
16	2K-1I13	Vd	No.315	クリ
17	1K-10F4	VIa	No.222	クリ
18	1K-10E10	VIa	No.60	クリ
19	1K-10I7	VIa	No.1907	ヤマグワ
20	1K-10G13	VIa	No.1193	ヤナギ属

板・割材などの加工材は、クリとカエデ属と同定された。クリは重厚で、強度・耐朽性が高い材質を有している。カエデ属は比較的重硬で、強度が高い材質を有する。新潟県内の事例では、刈羽村刈羽大平遺跡の大型木槽〔パリノ・サーヴェイ株式会社 1985〕、新潟市西蒲区御井戸 A 遺跡の杭状木柱〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2003〕、新発田市青田遺跡の割材〔鈴木ほか 2004〕にカエデが確認された例がある。カエデ属には多くの種類が含まれており、川辺林や丘陵地内等に生育していたことが推定される。

炭化材は、調査区から多量に出土しており、燃料材などに利用されていたものである。針葉樹のモミ属、広葉樹のヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・ブナ属・クリ・エノキ属・ヤマグワ・キハダ・エゴノキ属が確認され、少なくとも９種類の木材が利用されていた。炭化材に認められた種類には、自然木や木製品と同一の種類も含まれており、周囲の沖積地あるいは丘陵地内に生育していた樹木などを利用したことが推定される。



第 26 図　木材



第 27 図　炭化材

第6節　石材の利用

A　分析試料

縄文時代晩期の主要包含層にあたるⅤc層・Ⅴd層とその下位Ⅵa層・Ⅵb層から出土した石器・剥片・搬入礫のすべてと、Ⅲd層出土の石器2点について種類を鑑定し、あわせて産地に関する検討を行なった。黒曜石については、新津丘陵産のパーライト（真珠岩）転石4点についても分析を実施し、比較試料とした。

B　分析方法

1）黒曜石成分分析

本調査では遺物保存の観点から、非破壊分析を前提とする。したがって、調査はセイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）を用いた非破壊分析法により、半定量的に化学組成を求める。なお、比較対比試料とする新津丘陵産のパーライト転石4点については、破壊分析による調査を実施した。

非破壊分析

セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）を用い、右の条件で測定を実施した。得られた蛍光X線スペクトルは、ファンダメンタルパラメーター法（FP法）による定量演算を実施し、化学組成を算出する。なお、定量演算の際には組成既知の黒曜石を標準試料として登録し、正確度の向上を図っている。

測定装置	SEA2120	
管球ターゲット元素	RH	
対象元素	Na～Ca	Sc～U
励起電圧(kV)	15	50
管電流(A)	自動設定	自動設定
測定時間(秒)	300	300
コリメータ	10.0mm	
フィルター	なし	
マイラー	OFF	
雰囲気	真空	

破壊分析（波長分散型蛍光X線装置［ガラスビード法］）

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ分析プログラム）を用い、以下の条件で測定を実施し、化学組成を求める。

試料調製　試料を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕した後、以下の条件でガラスビードを作成する。溶融装置は自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）を使用。溶剤及び希釈率は融剤（ホウ酸リチウム）5.000g: 試料0.500g。剥離剤はLiI（溶融中2回投入）。溶融温度は1200℃で約7分である。

測定条件　X線管；Cr（50Kv-50mA）、スペクトル；全元素Kα、分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge、検出器；F-PC,SC、計数時間；PeaK40sec,Back20secである。

Feと Rbによる黒曜石産地判別

黒曜石は、流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩～デイサイトの成因は多様であるが、その反面出発物質としてのマグマの生成過程および分化過程で化学組成の挙動が異なることが期待される。大沢ほか（1991）の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Rb（ルビジウム）、La（ランタン）、Ce（セリウム）、Eu（ユウロピウム）、Th（トリウム）、Sc（スカジウム）の変動が著しく、地域的な特性を示す微量成分元素として注目される。

そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判別の指標成分としてコンパティブル元素であるFeとインコンパティブル元素であるRbを選択し、産地ごとの2成分の領域を図示した黒曜石の産地判別図を作成する。本判別図は、当社保有の原産地黒曜石110試料のほか、これまでに当社で調査を実施した遺跡出土黒曜石（産地未確定も含む）など計500試料以上の黒曜石を基に、破壊調査により得られた化学組成を用いて作成した。作成した判別図は縦軸にRb（ppm）、横軸にFe（%）をとると指数関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる〔五十嵐ほか2001〕。なお、この図はFe（%）とRb（ppm）の値を採用しているため、酸化物の分析結果は換算して用いている。

２）石器と搬入礫

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材のより正確な岩石名は、薄片作製観察、Ｘ線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回は肉眼鑑定のみに留めるため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名であることに留意されたい。

Ｃ　結　　果

１）黒　曜　石

第 11 表に元素分析の結果、Fe-Rb 判別図を第 28 図、補完法である Sr-Zr 判別図を第 29 図に示す。図上における各産地の領域は、北海道および東北地方の産地領域を濃く示し、関東・中部地方の産地領域を薄く示してある。図中には、大沢谷内北遺跡から出土した黒曜石に加え、比較試料として供した新津丘陵産パーライト４点をプロットした。

第 28 図より、本遺跡出土の黒曜石製遺物は、新津丘陵産パーライトを用いたものでないことが確認できる。石鏃未成品（試料№ 33　図版 64- ４）は Fe-Rb 判別図と Sr-Zr 判別図においていずれも北海道に所在する置戸・十勝・赤井川の各産地領域近傍にプロットされる。剥片（試料№ 34　図版 64- ５）は Fe-Rb 判別図において長野県男女倉領域の近傍にプロットされるが、Sr-Zr 判別図では男女倉領域の近傍にはなく、東京都神津島・新潟県板山の領域近傍に位置する。

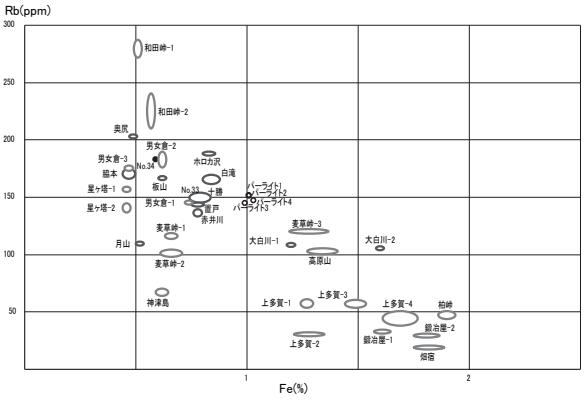
第 11 表　黒曜石元素分析及び元素分析結果

(非破壊EDX分析法)

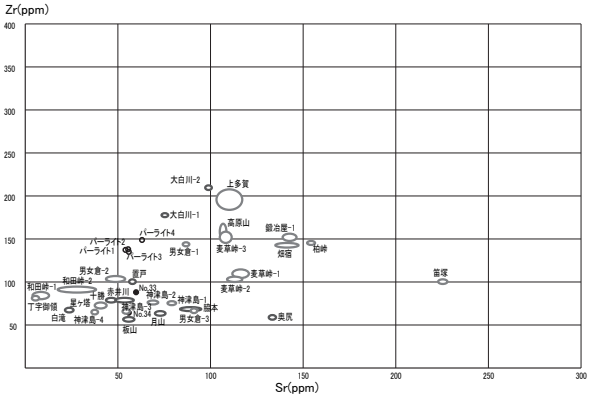
試料№	種別	SiO_2 %	TiO_2 %	Al_2O_3 %	Fe_2O_3 %	MnO %	MgO %	CaO %	Na_2O %	K_2O %	Rb %	Sr %	Zr %	Ba %	推定原産地	参考値 Fe %	参考値 Rb ppm
33	石鏃未製品(S4)黒曜石	77.80	0.09	13.28	1.12	0.03	0.26	0.71	3.19	3.40	0.0150	0.0060	0.0088	0.0968	置戸/十勝/赤井川	0.78	150
34	剥片(S5)黒曜石	75.74	0.08	13.91	0.84	0.08	0.40	0.49	2.60	5.75	0.0183	0.0056	0.0064	0.0752	不明	0.59	183

(ガラスビードーＦＰ法)

試料名	SiO_2 %	TiO_2 %	Al_2O_3 %	Fe_2O_3 %	MnO %	MgO %	CaO %	Na_2O %	K_2O %	P_2O_5 %	Rb ppm	Sr ppm	Zr ppm	Ba ppm	参考値 Fe %	参考値 Rb ppm
新津丘陵　パーライト転石1	76.77	0.10	12.64	1.44	0.03	0.05	0.95	3.84	4.18	0.01	152	54	137	672	1.01	152
新津丘陵　パーライト転石2	76.71	0.10	12.66	1.44	0.04	0.02	0.94	3.90	4.18	0.01	151	56	138	666	1.01	151
新津丘陵　パーライト転石3	76.85	0.10	12.56	1.42	0.04	0.04	0.96	3.86	4.18	0.00	145	56	134	664	0.99	145
新津丘陵　パーライト転石4	76.90	0.12	12.86	1.47	0.03	0.04	0.99	3.67	3.89	0.01	147	63	148	651	1.03	147



第 28 図　Fe-Rb 判別図



第 29 図　Sr-Zr 判別図

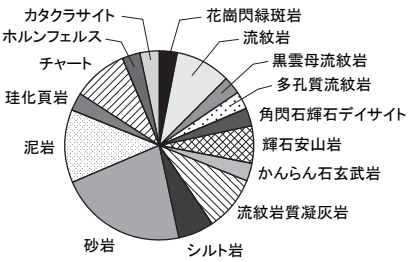
２）石器と搬入礫

今回分析を行った 54 点の種別の石材組成を第 12 表に示す。

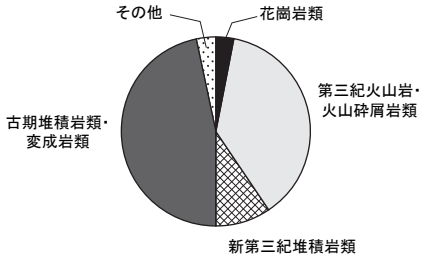
黒曜石以外の出土石材は、深成岩類の黒雲母花崗岩１点および角閃石黒雲母花崗岩１点、半深成岩類の花崗閃緑斑岩１点、火山岩類の流紋岩４点・黒雲母流紋岩１点・多孔質流紋岩１点・デイサイト２点・輝石安山岩６点・角閃石安山岩１点・角閃石輝石デイサイト１点・かんらん石玄武岩１点、火山砕屑岩類の流紋岩質凝灰岩４点、堆積岩類の砂岩９点・シルト岩２点・泥岩５点・珪質頁岩２点・珪化頁岩１点・チャート４点、変成岩類の黒雲もホルンフェルス２点、その他としてカタクラサイト１点から構成されている。

第 12 表　種別石材組成

種別 / 岩石名	石鏃	石鏃未製品	剥片	磨石	磨石・敲石	敲石	台石	搬入礫	合計
深成岩類									
黒雲母花崗岩				1					1
角閃石黒雲母花崗岩							1		1
半深成岩類									
花崗閃緑斑岩								1	1
火山岩類									
黒曜石		1	1						2
流紋岩	1							3	4
黒雲母流紋岩								1	1
多孔質流紋岩								1	1
デイサイト							2		2
輝石安山岩				1			3	2	6
角閃石安山岩							1		1
角閃石輝石デイサイト								1	1
かんらん石玄武岩								1	1
火山砕屑岩類									
流紋岩質凝灰岩					1			3	4
堆積岩類									
砂岩							2	7	9
泥質砂岩						1			1
シルト岩								2	2
泥岩						1		4	5
珪質頁岩	2								2
珪化頁岩								1	1
チャート						1		3	4
変成岩類									
黒雲母ホルンフェルス					1				1
ホルンフェルス						1		1	2
その他									
カタクラサイト								1	1
合計	3	1	1	2	2	4	9	32	54



第 30 図　搬入礫の石材組成



第 31 図　搬入礫の起源地質別組成

D　考　　察

1）黒曜石の原産地推定

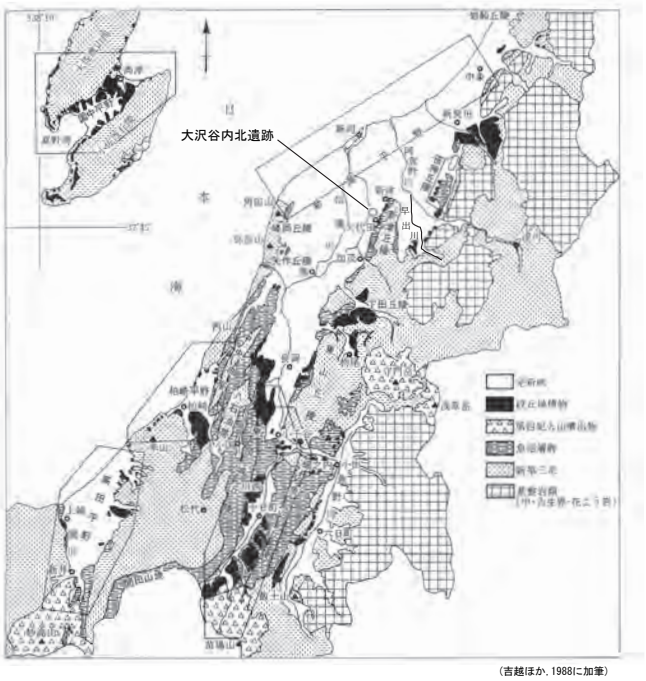
出土した 2 点の黒曜石製遺物のうち、石鏃未成品（試料№ 33）（図版 64- 4）は北海道に所在する置戸・十勝・赤井川の各産地領域近傍にプロットされることから、これら北海道の原産地に産した可能性があるが、現時点では原産地を特定することはできない。

一方、剥片（試料№ 34）（図版 64- 5）は Fe-Rb 判別図において長野県男女倉領域の近傍にプロットされるが、Sr-Zr 判別図では男女倉領域の近傍にはなく、東京都神津島・新潟県板山の領域近傍に位置する。Fe-Rb 判別図における本試料の周辺には新潟県板山も存在するため、両判別図から推定しうる原産地候補地としては新潟県板山である可能性が考えられる。同原産地は、大沢谷内北遺跡からも地理的に比較的近い位置にある。ただし、本判別図適用の際には分析精度の確保が前提となっているため、非破壊分析による半定量的な結果のみによる現時点での産地確定は難しい。

2）石器類および搬入礫の由来

新潟県の地質概略図を第 32 図に示す。本遺跡の西方には大河川の信濃川が流れ、その上流域の河床礫は石材の入手先となっている。信濃川・千曲川流域には、第四紀の火山岩を主体とした各種の地質が分布するため、河床礫は多様な岩種から構成されている。また、本遺跡の東側には、越後山脈の前縁に沿って北北東から南南西に新津丘陵が伸びている。同丘陵の中軸部は第三紀中新統の玄武岩・流紋岩、椎谷層の砂岩泥岩互層および西山層の泥岩から構成され、丘陵の両側に分布する下～中部更新統は、下位から魚沼層群中部累層に相当する兎谷砂層（細～中粒砂層）と上部累層に相当する矢代田層（砂層・砂シルト互相）に区分されている〔北陸地方土木地質図編纂委員会 1990〕。新津丘陵の東側には、阿賀野川支流の早出川が流れる。早出川流域には、足尾帯の堆積岩類、白亜紀後期～古第三紀の花崗岩類といった基盤岩類、火山岩類・火山砕屑岩類を主とする新第三紀系が分布する。

このような周辺の地質背景を踏まえ、石器類および搬入礫の由来について検討する。



（吉越ほか，1988に加筆）

第 32 図　新潟県の地質概略図

石鏃・石鏃未成品・剥片

前述の黒曜石のほかに流紋岩と珪質頁岩が使用されている。流紋岩は新津丘陵中軸部に分布するほか、阿賀野川、五十嵐川流域などにも広く分布する石材であり、近隣地域の石材が利用されたものと推定される。珪質頁岩は暗褐色を呈し、石鏃の材質としてはやや粗悪質であり、珪質頁岩の産地として有名な山形県や秋田県方面のものとは異なっている。その岩質は、中期中新世の七谷層に胚胎するものと類似することから、近隣の七谷層の分布域である加茂川流域や五十嵐川流域を産地の候補として考えることができる。

磨石および敲石

黒雲母花崗岩・輝石安山岩・流紋岩質凝灰岩・泥質砂岩・泥岩・チャート・黒雲母ホルンフェルス・およびホルンフェルスが使用されている。岩種が多様であることや、円磨状の形態を示す石材が用いられていることなどから、新津丘陵を構成する第四紀の堆積物中の礫などが用いられたものと推定される。しかし、泥質砂岩・泥岩・チャート・黒雲母ホルンフェルス・およびホルンフェルスは、早出川流域に広く分布する足尾帯の構成岩石と同様であることや、黒雲母花崗岩も早出川流域に広く分布していることなどを考慮すると、早出川の河床礫の礫種組成に近い組成とみることも可能である。このことは､磨石および敲石の石材に早出川の河床礫が少なからず利用されていたことが示唆される。

台石

台石には、角閃石黒雲母花崗岩、デイサイト、輝石安山岩、角閃石安山岩および砂岩が使用されている。角閃石黒雲母花崗岩は、各種の花崗岩類が広く分布する阿賀野川水系の地質に由来するものと推定される。特に、阿賀野川流域でも最も近い花崗岩体である､五頭山を構成する五頭花崗岩体の主岩相は角閃石黒雲母花崗岩であり、このような近隣の岩体に由来している可能性も考えられる。信濃川流域にも花崗岩体の分布は知られているが、本遺跡よりも東側の阿賀野川、加治川、荒川といった流域には各所に花崗岩体が分布することから、花崗岩は東方から持ち込まれた石材とみるのが妥当である。デイサイト、輝石安山岩および角閃石安山岩は、脱ガラス化や変質鉱物を有しており、新第三紀の火山岩類にみられる岩相を示している。新第三系の分布域である、近隣の新津丘陵や阿賀野川流域の地質に由来する石材が用いられているものと考えられる。砂岩は堅硬緻密質で、古期堆積岩類に由来する石材とみることができる。近隣の古期堆積岩類としては、早出川上流域に分布する足尾帯が知られており、このような地質に由来する石材が用いられたものと推定される。

搬入礫

花崗閃緑斑岩・流紋岩・黒雲母流紋岩・多孔質流紋岩・輝石安山岩・角閃石輝石デイサイト・かんらん石玄武岩・流紋岩質凝灰岩・砂岩・シルト岩・泥岩・珪化頁岩・チャート・カタクラサイトといった多様な石材から構成されている。搬入礫の主要な岩種は火山岩類および堆積岩類であるが、火山岩類は新第三系の火山岩類に見られる岩層を示し、堆積岩類の多くは足尾帯などの古期堆積岩類の岩相を示している。第四紀火山の分布面積が広い信濃川・千曲川水系の地質を考慮すると、信濃川の河床礫よりも阿賀野川や早出川方面から持ち込まれた礫の割合が多い可能性がある。さらに、砂岩・泥岩などの堆積岩類の大部分が足尾帯由来とみられるもので占められるという特徴も考慮すると、足尾帯が広く分布する早出川水系の礫に由来するものが比較的多く含まれている可

能性がある。ただし、より詳細な由来については、信濃川・阿賀野川・早出川における河床礫の礫種との比較が必要と考えられ、今後の課題としておきたい。

第７節　杭の年輪年代学的解析

大沢谷内北遺跡出土杭について、年代関係の解析および、伐採季節の推定を目的に年輪年代学的解析をおこなった。分析対象とする試料は大沢谷内北遺跡の遺物保管庫において選定した。出土杭は小径のものが遺跡内に散在していて、建物などの構造物として明確に結ばれているものはない。このため、選定にあたっては比較的直径が大きく年輪数も多そうなもの、季節判定のために必要な最外年輪が残存していそうなものを出土位置を考慮に入れずに選んだ。試料は合わせて 17 点である。

A　方　　法

１）試 料 の 切 断

選定された杭は製材所に依頼し、バンドソーで木口面が出るように２つに切断した。切断箇所は底面の加工痕のある場所は避けながら、できるだけ樹皮や樹皮直下の材が保存されているところを選んだ。２つに切断した杭のうち上部の加工痕のない方を年輪計測用試料として福島大学に持ち帰った。

２）年 輪 の 計 測

切断試料は電動サンダー（リョウビ SU-6300A）を用いて木口面を水流下で研磨した。サンドペーパーは３M 水とぎペーパーシート（粒度 400A）を使用した。木口面の年輪が明瞭に見えるまで研磨した後、フラットベッドスキャナ（EPSON ES10000G）に乗せ、ガラス面と試料の間を水で満たして 1200dpi ないしは 2400dpi の解像度で画像を取り込んだ。

ハンノキについては、上記の手順で得られた反射光画像では年輪の識別が困難なものが多かった。このため、試料木口面からカミソリを用いて表層から中心までを含むように放射方向に長い切片を複数に分けて切り出し、透過原稿ユニットを装備したスキャナ（EPSON GT9800F）のガラス面に並べて 3200dpi の解像度で透過光で画像を取り込んだ。

３）年 輪 幅 の 計 測

年輪幅は自作の年輪幅計測ソフトを用いて樹皮側から中心に向かって１ピクセル精度（1200dpi の時で約 0.02mm）で１年輪ごとに計測した。年輪界が不明瞭な場合は適宜実体顕微鏡で試料表面を確認した。年輪幅は１個体につき、放射方向に任意に設定した２～４方向の測線に沿って計測した。

４）計測データの検証と個体間の年代関係の推定

年輪計測では年輪の欠損（不連続年輪）や偽年輪、単純な計測ミスなどのエラーがしばしばおこるため、同一個体内の測線間でクロスデーティングによる年輪幅変動パタンのマッチングをおこない、年輪の計測が正しくできているかどうかの検証をおこなった。問題が見つかった場合は試料に戻り、切断面上で年輪をたどるなどしてエラーの特定、訂正をおこなった。検証の後に複数測線のデータを平均して個体平均パタンを作成した。

個体内で年輪の計測に問題がなく、上記の平均パタンを作成できた個体を対象として樹種毎に全ての組み合わせで個体間の年輪パタンの照合をおこなった。照合にはクロスデーティングソフト（Kimura 1995）を用いた。年輪データの標準化には５年移動平均法（Baillie 1982）を用い、パタンの合致は t 値（Baillie and Pilcher 1973）が最低でも 3.5 を越えることを目安とした。

５）伐採季節の推定

杭に樹皮もしくは樹皮直下の材組織が残存していれば、組織の形成状況からおおまかな伐採（枯死）季節を推定することができる。このため、杭断面の外周部からカミソリを用いて薄い切片を切り出し、これを顕微鏡で観

察することで季節推定をおこなった。季節性の判定は、下記の４段階として記録した。

A: 早材ないしは大道管が形成開始　春

B: 早材がある程度できるないしは大道管が形成完了　初夏

C: 晩材が形成途中　夏

D: 晩材の形成が完了　秋～早春

なお、成長が遅く、年輪が詰まっていて上記の判定が困難な場合は適宜 AB, BC などの記号の組み合わせで記録した。

B　結　　果

１）年輪計測試料の概要

第 13 表に年輪計測を実施した杭の概要を示した。樹種はトネリコ属６個体、ハンノキ属 11 個体で、どちらも直径 6cm - 12cm 程度の個体からなり、平均直径でもそれぞれ 10.1cm, 9.7cm である。年輪数はトネリコ属が 22-49 年、ハンノキ属が 23-53 年で、平均ではややトネリコ属の方が樹齢が大きい。平均年輪幅はどちらも 1.3-1.4mm 程度で成長速度はかなり遅いと言える。

２）成 長 パ タ ン

第 33 図に全個体の半径成長曲線を示した。ハンノキ属では初期成長の速い個体が数個体あり、定着初期に光条件などの環境が好適であったことを示しているが、全体的に成長は頭打ちになる傾向がある。また、ハンノキ属は成長の変動が顕著で成長曲線が 5-10 年程度の短い周期で大きくゆらいでいる。トネリコ属では成長の変動はあるもののそれほど顕著ではなく、ハンノキよりも長い周期での変動を示す。

３）年輪データの検証結果

年輪データを年輪年代学的解析に用いるためには、偽年輪や年輪の欠損などの読み間違いがないことが極めて重要な必要条件である。このため、同一個体に対しておこなった２～４方向の複数の測線の計測データの間でクロスデーティングを行い、年輪計測の正しさを検証した。

その結果、トネリコ属については個体内の測線間で十分に高い相関があり、年輪の判別が正確にできているだけでなく、個体間での年代関係を検討する材料として有効なことがわかった。それに対して、ハンノキ属では測線間の相関は低く、切断面で年輪界をたどっても年輪であるかどうかを判別できないものがしばしば出現した。従って、ハンノキ属については年輪年代的な解析はできず、以下ではトネリコ属の試料を用いた年輪年代の検討を示す。なお、第 13 表に示したハンノキ属の年輪情報は偽年輪や欠損により若干のずれはあるものの、樹齢や成長速度の検討には十分な精度を持っていると考えられる。

４）トネリコ属杭間の年代関係

計測した年輪幅データを用いて、トネリコ属杭６個体間の年代関係の検討をおこなった。解析の結果、Pit186 と Pit189 の２個体の間で高い相関が得られ、両者の表層の年輪年代のずれが０年であることが明らかになった。年輪パタンの合致性を示す相関係数 r は 0.67、合致の有意性を示す t 値(Baillie 1982)は 5.65 であり、年輪幅の変動パタンを示す図では低周波成分も良く同調しており、両者の年代関係は十分信頼できるものと考えられる（第 34 図)。また、後述するように両者とも最外年輪が残存しているため、同一年に枯死した（伐採された）ことが推定できた。なお、低周波成分の同調性から、両者は極めて類似した環境に生育していたか、同一個体である可能性も考えられる。他の組み合わせにおいては有意な相関をもつものは見いだせなかった。

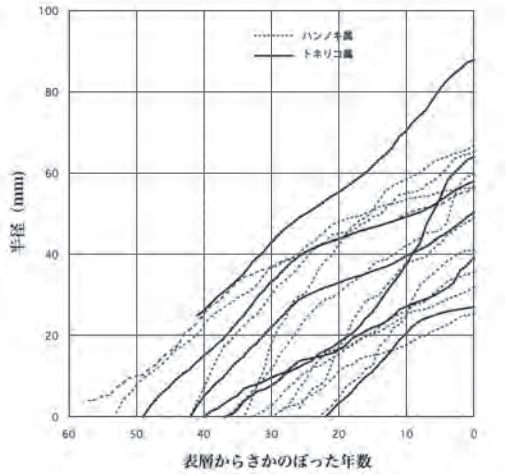
５）伐採季節の推定

個体表層の木材観察から得られた伐採季節の推定結果を第 14 表に、また、表層の切片の写真を第 35 図に示した。試料選定に際して、現場で最外層の保存の良いものを選んだが、表層年輪が詰まって季節判定ができないものが４点､表層の大部分が削れていて最外年輪が残存しているかどうか判定困難なものが４点あった。例えば、

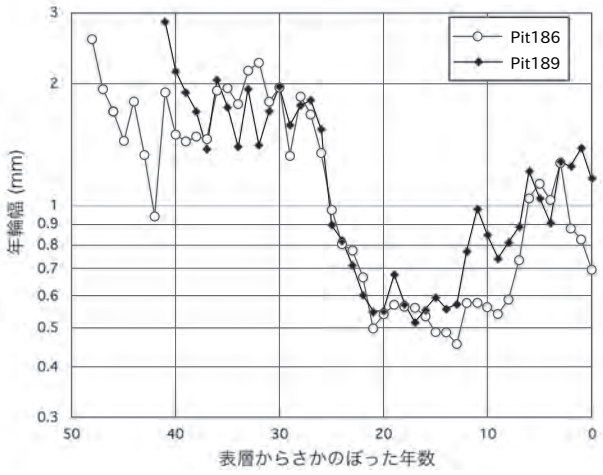
第 35 図のトネリコ属 Pit148 では一見極めて明瞭な年輪が形成されているようであるが、実際には枯死前に急速に成長が低下している。樹皮直下に極端に幅の狭い年輪が何層かあり、季節性の判定はほぼ不可能である。

枯死季節が判定できたものはトネリコ属の３個体、ハンノキ属の７個体である。トネリコ属の３個体の枯死季節は Pit186 が CD（夏～成長停止期）、Pit189 が D（成長停止期）、Pit323 が A（春先の道管形成開始期）と判定された。このうち前２者は年輪年代学的に最外年輪が同一年と判断できたものであり、Pit186 の表層の保存状態があまり良くないために判定が完全ではないが、どちらも同じ年の夏以降から翌年の春までの期間に伐採されたことになる。さらに、Pit189 は部分的に不明瞭ながら道管の形成らしきものがあるため、トネリコ属３個体は全て春先の成長開始期前後に伐採されている可能性もある。

ハンノキ属は年輪界が不明瞭なものがあり、また、年輪幅が極端に変動することがあるため、季節性判定の信頼性は低いが、年輪がほぼ完成しているか、完全に完成しているものと、春先の成長開始期のいずれかであり、中間的なものが少ないように見える。もしそうならば、ハンノキ属の伐採季節は秋（晩夏）～翌年の春先の期間が主体であったことになる。



第 33 図　大沢谷内北遺跡出土杭の成長曲線
（個体ごとに枯死年を０年として示す）



第 34 図　相対的な年代関係が決められたトネリコ属２個体の年輪幅変動パタン（同一年（０年）に枯死している）

第 13 表　計測対象とした杭の概要

No.	樹種	樹皮	表層	中心	直径 (mm)	年輪数	平均年輪幅 (mm)	コメント
Pit148	トネリコ	あり	あり	あり	120	37	1.73	
Pit186	トネリコ	なし	あり	あり	113	49	1.18	表層は一部のみ
Pit188	トネリコ	なし	なし	あり	60	22	1.23	表面つまり
Pit189	トネリコ	なし	あり	あり	100	42	1.20	表層は一部のみ
Pit294	トネリコ	なし	なし	あり	125	40以上	1.53	切断時に大きく３つに分裂　表層なし
Pit323	トネリコ	なし	あり	あり	90	40	0.98	
トネリコ平均					101	38	1.31	
Pit145	ハンノキ	あり	あり	あり	55	30	0.85	色素多く切片不鮮明
Pit187	ハンノキ	あり	あり	あり	109	25	1.81	色素多く切片不鮮明
Pit284	ハンノキ	あり	あり	あり	160	53	1.05	色素多く切片不鮮明
Pit296	ハンノキ	なし	あり	あり	115	37	1.61	表面痛み
Pit300	ハンノキ	あり	あり	あり	132	42	1.55	色素多く切片不鮮明
Pit305	ハンノキ	なし	あり	あり	72	34	1.96	表面痛み
Pit314	ハンノキ	なし	なし	あり	92	23	1.79	
Pit315	ハンノキ	あり	あり	あり	70	29	1.20	
Pit316	ハンノキ	あり	あり	あり	95		0.91	色素多く切片不鮮明
Pit319	ハンノキ	あり	あり	あり	67	33	0.98	色素多く切片不鮮明
Pit320	ハンノキ	あり	あり	あり	94			計測困難
ハンノキ平均					96	34	1.37	

C　考　　察

１）成長と生育環境

大沢谷内北遺跡出土杭はトネリコ属、ハンノキ属ともに直径 10cm 前後で小型のものが多いが、年輪数で見ると 30-40 年程あり、平均年輪幅はどちらも 1.3-1.4mm 程度と、遅い成長を示した。これは青田遺跡出土木柱（木村・益子 未発表）のトネリコ属の平均年輪幅 2.3mm と比べてかなり遅い。さらに、ハンノキ属は一般に成長が速く、通常同所的に生育している場合はトネリコ属よりも年輪幅が広いが、本遺跡出土杭ではほぼ同じ成長速度を示した。時間的な成長の推移を見ると、ほとんどの個体で成長パタンに大きな変動が認められ、生育環境に大きな揺らぎがあったことが示唆された。ハンノキ、トネリコが生育する場所は通常湿性の立地であることを考えると、水位が大きく変動する環境が成長の遅さとゆらぎをもたらした可能性がある。しかし、年輪年代学的に個体間の年代関係を決めることができなかったため、共通の時間軸上に成長の好適な時期、不適な時期が同調してあらわれるかどうかを検討することはできなかった。

２）年　輪　年　代

トネリコ属は年輪の計測自体に問題はないが、年輪数が平均 40 年程度と、年輪年代的解析には不十分であった。今後近接した同年代の遺跡等から出土するトネリコ属との年代関係が得られる可能性はあるが、現状で得られる年輪年代学的な情報は２本の柱が同じ年に伐採されたという推定にとどまる。

ハンノキ属については散孔材で年輪が不明瞭なだけでなく、極端な年輪幅変動を示すこともあって、正確な年輪計測ができなかった。しかし、北海道の霧多布湿原のハンノキの年輪を調べた Haraguchi ら（1999）は、ハンノキのクロスデーティングが良好にできたことを報告している。同一樹種でも生育立地や気候条件によって年輪年代学的解析の適否は変わることが知られているため、ハンノキを含めた全ての樹種を解析対象として検討する必要はあるだろう。

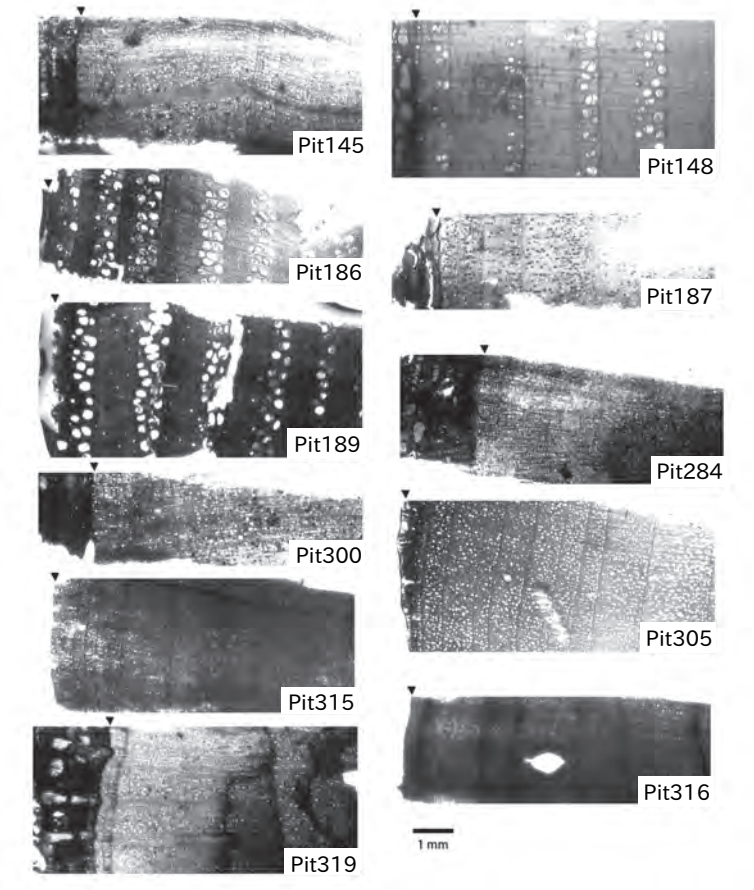
３）伐　採　季　節

本遺跡ではトネリコ属、ハンノキ属ともに枯死季節は成長停止期を挟む秋～春であり、春～夏の成長途上の時期はあまり伐採がおこなわれなかった可能性がある。ただし、解析対象にした試料はいずれも年輪幅がかなり狭く、季節性の判定は容易ではなかった。また、たとえ年輪幅が広く、成長期間の生育段階の判別が容易であったとしても、木材組織からの季節性の判定では、成長が完全に停止する秋から翌年の芽出し前の早春までの半年以上の期間のうちいつであるかは原理的に区別ができない。従って、年輪幅が狭くて判別にバラツキが出ることを考え合わせると、実際には伐採がほとんど春先だけにおこなわれていたというような可能性も捨てきれない。

本稿は、平成 21 年度～ 24 年度科学研究費補助金 基盤研究（B）21320151「縄文時代の集落形成と森林利用に関する考古学・年輪年代学・民俗学的研究」（研究代表者：木村勝彦）の成果を含む。

第 14 表　枯死季節の検討結果

No.	樹種	樹皮	表層	季節	表層の状態
Pit145	ハンノキ	あり	あり	C	かなり完成　夏
Pit148	トネリコ	あり	あり	不明	最外年輪はやや狭いだけに見えるが、切片で見ると数年分詰まりか？季節不明
Pit186	トネリコ	なし	あり？	CD	ほぼ完成　夏-成長停止期
Pit187	ハンノキ	あり	あり	C?	怪しいが　夏
Pit188	トネリコ	なし	なし	不明	表層詰まり無理
Pit189	トネリコ	なし	あり？	DA	最外層完成　ただし翌年の道管らしきものがc方向にあり
Pit284	ハンノキ	あり	あり	不明	表層詰まり困難
Pit294	トネリコ	なし	なし	不明	最外年輪の判定困難
Pit296	ハンノキ	なし	あり？	不明	最外年輪の判定困難
Pit300	ハンノキ	あり	あり	A	春先　樹皮直下に早材形成
Pit305	ハンノキ	なし	あり？	不明	最後表層急に詰まり
Pit314	ハンノキ	なし	なし	不明	最外年輪の判定困難
Pit315	ハンノキ	あり	あり	C	ほぼ完成　夏
Pit316	ハンノキ	あり	あり	A	成長開始
Pit319	ハンノキ	あり	あり	D	完成　成長停止期
Pit320	ハンノキ	あり	あり	A	詰まり　　成長開始
Pit323	トネリコ	なし	あり	A	道管形成開始



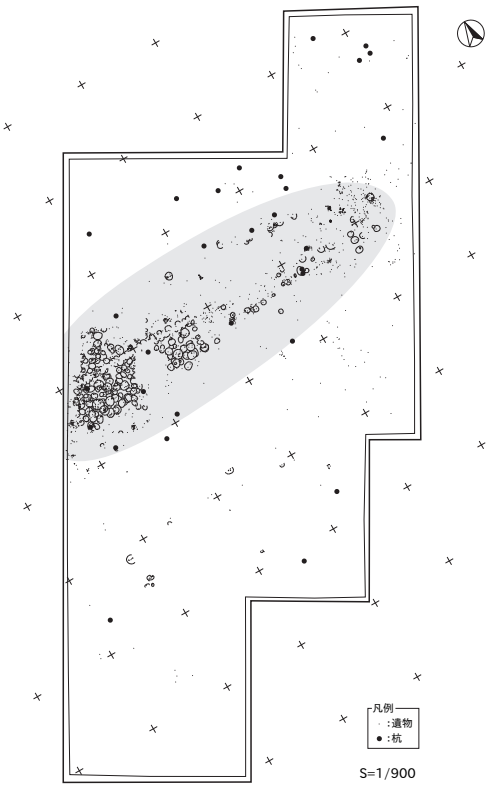
第 35 図　大沢谷内北遺跡出土杭の表層部分木材切片（三角は樹皮直下部分を示す）

第Ⅶ章　総　　括

第１節　下層の遺構について

A　土坑（SK）群に関する検討（図版 43・44）

大沢谷内北遺跡下層で確認された遺構は、土坑 239 基、杭 30 本、焼土遺構 3 基、土器集中 6 箇所、堅果類集中 1 箇所であり、検出層位と出土遺物の様相から全て縄文時代晩期の後半に属することが確認された。このうち土坑は遺跡全面に分布するのではなく、調査区西側 1K-9F･10F グリッドと 1K-10G グリッド北側に最も集中して重複が著しく、そこから調査区東側 1K-9･10H ～ J グリッドに向かうにつれて帯状に連なりながら分布は希薄となる。また土坑の分布は遺物の分布と相関している（図版 36 ～ 38）。



第 36 図　再検討する土坑群の範囲

遺物の出土状況については第Ⅴ章にて述べたが、重複遺構間での著しい接合関係、遺構出土遺物と下位包含層出土遺物との接合関係など、遺物の埋没過程と遺構の新旧関係の復元が困難な状況が認められる。また、第Ⅵ章自然科学分析における珪藻分析の結果からは、土坑群の掘り込み面であるⅥ a2 層は河川の氾濫を強く受けるような環境であり、土坑をパックする包含層段階においてやや離水状態になることが復元されており、大半の土坑が水平堆積という堆積状況からは自然埋没過程が推測されるが、これだけの重複現象にある土坑群が湿地のような水域下において構築され、開口したまま廃絶されるという状況は理解し難い。さらには、これら土坑の土層断面は上部の立ち上がりが不明瞭であり、覆土の分層線が周囲の自然堆積土と連続する、または重複している遺構間においても同様な土質が同様な堆積状況を示すという傾向も認められ、遺構の認定に不安定要素を残している。

このように調査時の所見をもとに整理した結果、様々な事象間に齟齬が生じてしまうため、右図の範囲の土坑群について再検討を行うこととした。

１）杭（Pit）と遺物の分布状況からの考察（図版 43）

上述の土器の接合関係・分布状況から、遺物の帯状分布域について垂直分布図を作成し（図版 43）、さらに杭（Pit）についても土坑群と遺物の分布域に集中する傾向にあるため同図に示し、これらの関連性について分析した。

まず垂直分布図のライン設定についてであるが、A ～ K ラインについては遺物の帯状分布ラインに直交するかたちで、杭を通して設定した。L ラインは遺物の帯状分布ラインの長軸方向で、遺物分布の中心を通して設定した。各垂直分布図に反映させた遺物は、A ～ K ラインについては各ラインを中心に約 2 ～ 3 m 範囲の遺物であり、L ラインについては帯状分布域の大半を含めた。なお、遺物出土の上下を明瞭にするために垂直分布図の標高幅を 6 倍に設定してある。そのため縦横比が実際とは異なることを御了承いただきたい。また各図には水平線が入っているが、これは単に標高値の目安として設けたものであり、2.200m にラインをいれてある。

A ライン

Pit236 と Pit195 を通したラインである。最も西側にあたる。垂直分布を見ると遺物が帯状に上・下位２層に分かれており、Pit 間で下位の遺物がレンズ状に落ち込み、上位はその上に北側に傾斜しながら直線的に分布している。遺物の標高が最も高いラインである。

B ライン

Pit212 と Pit318 を通したラインである。垂直分布を見ると、A ライン同様上・下位２層に分かれ、下位遺物がレンズ状に落込み、上位は水平に堆積している。

C ライン

B ラインで通した Pit212 と、Pit313 を通したラインである。Pit 間で遺物がレンズ状に落ち込んでいる。やや明瞭ではないが上・下位に分かれているように見える。

D ライン

C ラインで通した Pit313 と南側の Pit292、Pit252、B ラインで通した北側の Pit318 を通したラインである。内側の Pit252 と Pit313 の間で遺物がレンズ状に落ち込む。

E ライン

調査区最も南に位置する Pit294 と、D ラインで通した Pit252、Pit163 と北側の Pit316 を通したラインである。Pit252 と Pit163 の間で遺物がレンズ状に最も落ち込む。

F ライン

Pit314 と Pit187 を通したラインである。平面の遺物分布帯の幅が狭くなる位置にあたる。Pit314 付近で遺物が若干落ち込むのが分かる。Pit187 南の遺物が集中する部分は土器集中 111 である。

G ライン

Pit148 と Pit194 を通したラインで遺物の分布幅は狭い。Pit 間中央に集中しているが明瞭な落込みは認められない。

H ライン

隣接する Pit296･315 と Pit189 を通したラインであり、垂直分布図には Pit300 を投影してある。Pit296･315 と Pit300 の間で最も落込み、Pit189 付近でも遺物の落込みが認められる。Pit189 付近の落込みは SK257･258 にあたる。

I ライン

H ラインで通した Pit296･315 と、Pit300 を通したラインである。Pit 間で遺物がレンズ状に落込み、Pit300 以北は水平に分布している。

J ライン

杭を通していないが木製品の櫂（図版 70- 3）出土状況の観察も兼ねて設定した。櫂の出土は遺物分布の最深部にあたり、北側は上位で水平に分布している。土器集中 79 ～ 81 である。

K ライン

最東端のラインである。Pit284 と、北側に集中して位置する Pit144･145･319 を通したラインである。上記のいずれのラインも遺物分布域をはさみ南北に杭が対峙しているため、当ラインについても南側の調査区外に対応する杭が存在する可能性が高い。垂直分布を見ると、Pit284 南側で遺物が落ち込むのがわかる。

このように A ～ K ラインの観察からは、いずれも杭間、特に内側の杭間で遺物が最も落ち込むことが判明した。次に L ラインについて見るが、当ラインは A ～ K ラインで最も遺物が落ち込む部分を通る。

L ライン

1K-10 グリッドラインとほぼ重なるため、調査時の基本層序記録を元に垂直分布図には遺構検出面のラインと、Ⅵｂ層上面のラインを入れた。この図からは遺物は全体的に西から東に緩やかに下降しており、調査区の

傾斜と一致していることが読み取れる。やや微視的に見ると、Pit163 と Pit314 の間で出土位置が浅くなっていき、Pit314 と Pit296･300･315 の間ではそのまま浅い位置での出土となり、それ以東ではまた深い位置での出土が認められるようになる。これはⅥｂ層ラインの流れとほぼ一致しており、地形を反映しているものと言えよう。下位包含層出土土器接合・同一個体関係図（図版 42）で示した D グループは Pit314 以西、E グループは Pit296･300･315 以東のⅥ a3･ Ⅵ b’・Ⅵ b 出土の土器にあたる。また、Pit300 東側の遺物出土最深部で櫂が出土している。

以上のように A ～ E ラインでは遺物が上・下位に分かれ下位の遺物がレンズ状に落込み、上位の遺物はその上に水平に分布している。E ～ F ラインの間で遺物の出土レベルは浅くなり、F ～ G ライン間では高い位置で幅狭く分布する。そして H ライン以降再び遺物が落ち込みはじめるという状況が復元された。さらに L ラインで見るかぎり、遺物の出土状況は地形の凹凸を反映しており、それと直交する南北方向の各ラインでの遺物の落込み状況についても各層一様にレンズ状に落ち込む状況からは地形の窪みを反映している可能性が高いと考えられる。

２）土器接合・同一個体関係からの考察（図版 44）

図版 44 は、出土土器の接合関係・同一個体関係を垂直分布にて示した図である。接合・同一個体関係を表示するために、図版 43 の垂直分布図よりも立面幅を狭めて表示した。南北方向の a ～ l ラインは各ラインを中心に両隣のラインとの中間距離までを立面幅としている。帯状分布域の全ての土器を網羅している。東西方向の A ラインはラインを中心に 4m の範囲の土器を表示してある。A ラインには図版 43 の L ラインと同様に遺構検出面とⅥｂ層上面のラインを表示し、南北方向の各ラインには遺構検出面のラインを表示した。

a ライン

遺構検出面より上位での出土が多い。大半が上位包含層に属する。71 が下位包含層出土である。この 71 は A ラインでみると e ライン付近からも出土している。e ライン付近の土器片は SK303･304 出土であるが、下位の遺物分布域に属している。３～５は SK52 出土であり、上位からの落込みが認められ、土坑または何らかの窪みの可能性が高い。175･176･180･185･186･188･190･191 は調査時には遺構として認定していないが、出土状況から土坑か何らかの窪地に一括廃棄された状況が窺える。

b ～ d ライン

遺構検出ラインを境に、分布が上下に明瞭に分かれており、下位の分布がレンズ状に帯状を呈して落ち込む様子が窺える。遺構検出面より下位出土の土器は大半が遺構出土である。c ラインの 22・28・29 は全て SK65 を中心に重複・隣接する遺構間において接合・同一個体関係にあるが、レンズ状に落ち込む下位の帯状分布内での関係であり、27 についても SK65 出土であるが、立面図を見る限りでは上位の土器群に所属している。同様のことが d ラインの 30 ～ 32 でも言え、SK150 出土であるが、30･31 は上位に属し、32 は下位に属する。また 32 は約５m 離れた SK15 と同一個体関係にあり、e ラインにおいても下位の分布に属している。個々の遺構出土の遺物と解釈するよりは浅い窪みの下位堆積土帰属の遺物と捉えた方が、より整合性が高い状況を示している。

e･f ライン

b ～ d ライン同様、土器の分布は上・下位で見られるが明瞭に分かれず、垂直方向での接合・同一個体関係も認められる。e ラインでは SK307 出土の 69、f ラインでは SK151 出土の 21 である。土坑の可能性がある。両ラインで表示される 75 は SK106･152 出土であるが、いずれも下位の分布であり自然地形堆積土出土の可能性がある。74 も両ラインで表示され、SK19･152･161･162 出土であるが下位での接合関係となっている。76 についても SK30･152･310 出土であるが両ラインで下位出土である。自然堆積土出土の可能性が高い。f ライン北寄りの 55 は他の土器の分布範囲から外れているがまとまった分布を示している。SK317 出土であり土坑の可能性が高い。

g～iライン

Aラインを見ると、Ⅵb層が高くなり検出面との間層が狭くなる範囲である。検出面より下位出土の土器が少なくなっており、地形を反映している出土状況を示している。iラインの北側出土の83は土坑か浅い窪地であろう。SK289･290と下位包含層出土である。

jライン

jラインより東になると再び下位に分布するようになる。100･101は上下に分布幅があり、土坑の可能性がある。101はkライン付近でも上下に分布しており、土坑としての解釈が妥当であろう。jラインの北側寄りでは84～87があり、まとまって上下に分布している。土坑の可能性が高い。

k･lライン

kラインでは上述した101以外は遺構検出ラインを境に明瞭に上下に分かれて分布している。lラインについても遺構検出面ラインが浅く窪み、そこに上位包含層土器が集中し、下位の土器は幅広くレンズ状に分布している。kラインでは下位に分布する263･265は下位包含層出土であり、それ以外は遺構出土である。107はSK188･193と下位包含層出土土器が接合関係にあるが、全て下位の分布域に属しており、他の遺構出土土器も同様であることから自然堆積土出土の可能性が高いと考える。lラインにおいても96･108は遺構出土であるが、他の下位包含層出土土器と同じ分布域にあり、さらに96についてはAラインを見ると下位での接合関係を示しており、自然堆積土出土の可能性が高い。

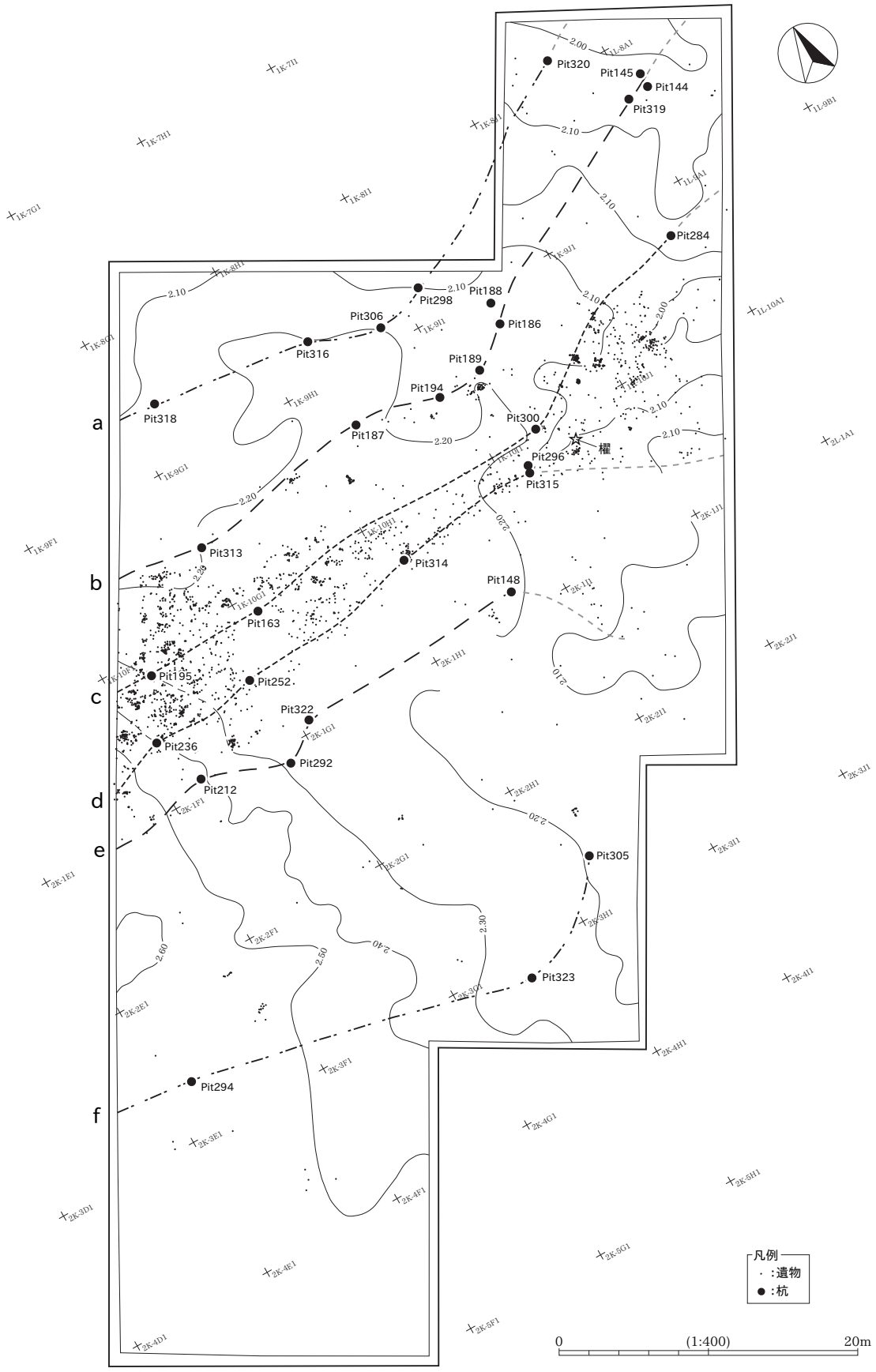
以上のように土坑群集部の遺物の出土状況から検討を行った結果、遺物の東西方向での垂直分布状況は地形の凹凸を反映しており、南北方向での遺物のレンズ状に落ち込む状況は杭の配置との関係が認められ、接合・同一個体関係においては、上・下位に分かれる土器分布間での関係はほとんど認められず、それぞれの分布内で完結する状況が多く認められた。これらの状況からは下位に落ち込んで分布する遺物の大半は東西にのびる浅く窪んだ自然地形に廃棄された遺物であり、上位に分布する遺物はその窪みがある程度埋没した後に廃棄された遺物と解釈できる。図版15の土層柱状図E-E’ラインにおいてⅥa2～Ⅵa4層が落ち込む箇所が認められ、土坑群・遺物集中地点と一致する。調査時においてはこの浅く窪んだ地形の自然堆積土を土坑覆土として調査した可能性が少なからず存在する状況といえよう。

B　杭（Pit）（第37図）

前述のように遺物の出土状況と杭の配置には関連性が求められた。第37図では機能的に関連が予想される杭間を結び、当時の人々が意図したと想定される杭列の組合せを復元した（杭列a～f）。図版43では、第37図における杭列c･dとした杭の間において最も遺物の落ち込む状況が認められる。この両列を中心として他の杭間を結ぶと、杭列c･dの外側に杭列b･e、さらに外のa･fという3重の杭列が想定できる。特に杭列a･bを見ると、杭列cのラインとほぼ平行して配置されていることがわかる。そして、図版43の垂直分布で見られる上位に分布する遺物の出土範囲が、2重目の杭列b･e間の範囲内に収まっている。杭列dのPit296･315と杭列eのPit148以東には杭が発見されなかったが、遺物の出土状況と等高線のあり方から杭列は東方向に開口していると予想され、入江状を呈していると推測できる。杭の機能について明言することはできないが、本遺跡において重要な役割を担っていた遺構であることは確かであろう。

C　焼　土　遺　構（SX）

焼土遺構の検出層位は遺物包含層であるⅥa1層中であり、土坑検出面より上位での検出である。1K-9･10F･Gグリッドの交点付近に位置し、図版41の上位包含層Aグループブロック1の範囲に収まる。3基が重複・近接し1箇所に纏まっている状況で検出された。焼土厚はいずれも薄く、長期間連綿と利用されたという印象はない。遺跡内に食物残渣の集積はなく、焼骨などの動物遺体も検出されていない点から生産的機能を担っていた可



第 37 図　杭列の配置と遺物の分布状況

能性は低い。具体的な事象間からの確証はないが可能性として仮説を挙げるならば、焼土遺構が形成される段階は土坑群、または前述の検討から自然地形の窪みが埋没し、離水段階に入った環境下であり、遺物が廃棄された段階である。焼土遺構の属する上位包含層Ａグループブロック１は最も土器が集中して廃棄されている場であり、竪櫛も廃棄されているため、そのような遺物の廃絶に関わる役割を担っていた可能性も考え得るであろう。

Ｄ　土　器　集　中

土器集中は土器廃棄行為の痕跡であるが、土器を破壊し廃棄するのみでなく、さらなる付加行為を伴うものである。図版 31・32 に個別実測図を示したが、大半の土器片が内面を上向きにして積み重ねられており、特に土器集中 79・80 が顕著である。単独の個体の場合もあれば（土器集中 80･97･111･112）、数個体の土器片を積み重ねる場合もあり（土器集中 79･81）、礫（S45）を伴う場合もある（土器集中 80）。土器片を積み重ねるという出土状態は、県内遺跡では土坑の検出面脇、または土坑覆土の上位で認められ（新潟市鳥屋遺跡第３・58・60 号土坑、新発田市村尻遺跡 54 号土坑、館ノ内遺跡Ｄ地点 65a 号土坑、胎内市道下遺跡 SK3･32･184･211 など）、晩期前葉～後葉まで認められる。本遺跡においては土坑などの掘り込みを伴わないが、通常の廃棄行為に比べ、当時の人々の精神性がさらに付与された行為であると考える。

Ｅ　遺構の機能について

以上のように遺物の出土状況からは単独の土坑が群集するという状況よりも、東西方向にのびる浅く窪んだ地形が存在したとする解釈の方が矛盾点が少なく、自然科学分析からはある程度の水深がある水域下の環境が復元されている。東に開口する杭列の配置と、東に傾斜する地形から東側に湿地・沼沢地が広がっていた可能性が高く、杭列 c･d の Pit284･300･296･315 周辺が入江状となっており、西側が地形的に高くなることから沖積微高地への導入口としての役割を担った場所の可能性、さらに櫂の出土という点から当時の水上交通に関わる地点の可能性も考慮されよう。そこが離水して陸地化するにあたり焼土遺構が形成され、遺物の廃棄場となる。竪櫛の廃棄、土器集中の精神性を含んだ廃棄状態からは、生産とは異なる場としての重要な機能も有していたと考えられよう。

第２節　縄文土器について

本遺跡出土の縄文土器は全て晩期の後半に属し、県内の標識遺跡である上野原遺跡〔中島 1981〕・鳥屋遺跡〔石川 1988〕で認められる土器群である。第 38 図に本遺跡出土土器の器種別組成を示した。地文深鉢が突出しており（77.2％）、主文様を有する浅鉢・鉢・壺の出土が非常に少ない。当該期の集落遺跡である上野原遺跡〔中島前掲〕、御井戸Ａ遺跡〔前山ほか 2003〕、館ノ内遺跡Ｄ地点〔田中・鶴巻 1992〕は調査区が遺跡範囲の一部であるにも関わらず浅鉢・鉢類の有文精製、有文粗製が多出しており、居住施設が検出されていない本遺跡とは全く性格が異なることを、遺物の面においても示している。

以下では本遺跡出土の土器群について、出土状況を踏まえながら若干の考察を行う。

Ａ　編年的位置づけ

前述のように非常に少数ではあるが、時期判別が可能な主文様を有する浅鉢・鉢形土器を中心に若干の考察を試みる。細分時期の基準としては大洞 C2 式をⅠ～Ⅴ段階に細分した鈴木加津子氏の論考〔鈴木加 1990･1991〕を参考にした。

浅鉢 1a 類（38･230）は口頸部に無文帯を有し、体部上半の主文様帯には磨消縄文と単沈線により文様が描出される。その文様は単位文化の傾向を示しており、大洞 C2 式Ⅲ期（新）段階に比定される。

浅鉢 1b 類（174）と壺 1 類（176）の主文様は単位文化が発達したモチーフに沈線を沿わせ、その間を浅く彫去している。浅鉢 1a 類と同様、大洞 C2 式Ⅲ期（新）段階に比定されている。

浅鉢 2･3 類は大洞 C2 式Ⅳ・Ⅴ期に比定される。単位文の連続手法である三角連繋沈線文はⅤ期の指標〔鈴木加 1991pp.100〕とされているため、2a ｉ類（139）･2b ｉ類（141･142）はⅤ期に比定されよう。Ⅴ期（新）段階では磨消縄文からの脱却傾向が顕著になるという指摘があり、2a ｉ類はⅤ期（古）段階、2b ｉ類がⅤ期（新）段階ということになる。縄文帯を有する 2a ii類（231）はⅣ～Ⅴ期（古）段階と考えたい。また入組み沈線文の 2b ii類（233）は類似資料がⅤ期（新）段階に比定されている〔鈴木加前掲第 34 図 9〕。3 類は主文様が平行沈線文のみの「横線文帯」〔鈴木加前掲〕の範疇に入ると考えられるが、無文の肥厚する口縁部はⅣ期からの特徴を留めている。Ⅴ期（新）～直後段階と考えたい。

鉢 1 類（137）は浅鉢 2b ii類の入組み沈線文と同じ構図の沈線文が施されるが、隆線部によるモチーフ描出に重点が置かれ、左右非対称の三角連繋文となっている。口縁端部の刻文はⅤ期以降の特徴であり、Ⅴ期（新）～直後段階と考えたい。

鉢 2 類（138）は頸部に平行沈線文と縦スリットが施されている。当該期の短頸壺頸部に施されるモチーフである。Ⅴ期～直後段階に比定される。

以上のように本遺跡からは大洞 C2 式Ⅲ期（新）段階～Ⅴ期（新）段階、もしくはその直後段階に位置づけられる土器群が出土している。

次に上野原遺跡と鳥屋遺跡からの類似資料の出土傾向について見てみると、Ⅲ期（新）段階に比定した浅鉢 1a 類は、上野原遺跡において報文中には呈示されていないが、破片資料で少数出土している。同段階の浅鉢 1b 類・壺 1 類の文様描出法は上野原遺跡出土土器に認められる手法であるが、同遺跡で浅鉢形土器の主体を成すものは次段階の肩部にメガネ状突帯を有するタイプである。大洞 C2 式Ⅳ～Ⅴ期に比定した浅鉢形土器で縄文帯を有するタイプは上野原遺跡で主体を成し、鳥屋遺跡では少数である。鉢 1 類を含め三角連繋文が主文様に施されるものは上野原・鳥屋の両遺跡で認められるが、鳥屋遺跡出土のものには三角連繋文の三角形底辺の隆線部分が 3 本単位となり、三角形頂部がボタン状突起で連結する〔石川 1988 第 1 図 3〕もしくは三角形の各頂点が連結する〔同第 14 図 73〕特徴を有し、次段階の「上下交互白字文」〔鈴木加前掲〕への傾向を示している。

鉢 1 類と同器形のものは上野原遺跡に認められる〔中島 1981 第 30 図 51〕。この器形は館ノ内遺跡 D 地点〔田中･鶴巻 1992〕・元屋敷遺跡上段〔滝沢ほか 2002〕・寺前遺跡〔高橋ほか 2008〕でも認められ上野原～鳥屋 1a 式に特有な器形である。鉢 2 類の頸部文様は上野原遺跡出土の破片資料である短頸壺頸部に認められる〔中島前掲第 14 図 92〕。隆線部分が意識されないため、隆線上面は平坦に整形されていない。上野原遺跡出土の小形短頸壺〔中島前掲第 35 図 67〕は頸部に平行沈線文と縦スリットが施されている。粗雑な成形であるが、体部の文様は浅鉢 2b ii類の 233、鉢 1 類 137 と同じ構図の入組み沈線文が施されており、これらが時期的に近い関係にあることを示している。また、上野原遺跡においては、平行沈線から上下交互に抉りを入れ隆線部が平坦な「上下交互凸字文」〔鈴木前掲〕が施されるもの〔中島前掲第 23 図 23･ 第 32 図 56･58〕が住居址覆土中より出土しており、浮線文土器も散見されるため鳥屋式段階を含む複合遺跡と考えられるが、本遺跡ではこれらのタイプの出土は認められず、より上野原式の単純傾向が強いといえよう。

以上のように本遺跡出土土器は上野原式直前段階～上野原式段階に位置づけられる。

出土状況からの分析（図版 41・42・44）

土器の出土状況は第Ⅴ章において記したが、上記の細分時期を踏まえ再検討する。下位包含層からは浅鉢 1a 類 38 の 1 点のみが出土している。図版 44 の立面図 A ライン ･d ラインを見ると下位の遺物分布から出土しており、図版 42 の平面分布を見ると D グループに属している。他は全て上位包含層からの出土であり、図版 41 の接合・同一個体共有関係図を見ると A グループブロック 1 からⅤ期の浅鉢 2a ｉ類 139、2b ｉ類 141･142、Ⅴ期～直後段階の鉢 1 類 137･ 2 類 138 が出土しており、同グループブロック 2 からはⅢ期（新）段階の浅鉢

1b 類 174･壺 l 類 176 が出土している状況であり、A グループ内において北側と南側で型式学的に時期区分される。C グループブロック 3 からはⅣ～Ⅴ期（古）段階の浅鉢 2a ii 類 231、Ⅴ期（新）段階の浅鉢 2b ii 類 233 が出土しており、ブロック単位で見ると A グループブロック 2 → C グループブロック 3 → A グループブロック l の順に変遷するようである。

次に接合関係からブロック間の関係を見ると、A グループブロック l 出土の深鉢体部片 162 は小ブロック b･d から出土し、小ブロック b 内からはⅤ期の浅鉢 2b 類 142、Ⅴ期～直後段階の鉢 2 類 138 が出土している。図版 44 の立面図 b ラインを見ると、上位の遺物分布帯内出土で同一層位内であることがわかる。162 はブロック 2 内の小ブロック g からも出土しており、Ⅲ期（新）段階の壺 l 類 176 も出土している。図版 44 立面図 a ラインを見ると 162 と 176 が同一レベルで出土していることがわかる。このように 162 の接合関係を媒体として見た場合、ブロック l のⅤ期～直後段階の土器群と、ブロック 2 のⅢ期（新）段階の土器群の廃絶時期は非常に近い状況にあるといえる。

さらに C グループ出土の有文深鉢 5 類 235･地文深鉢 2a 類 237 を媒体としてブロック 3、その他 C グループ出土の有文精製土器の関係について見る。ここでは便宜的に 235 を媒体①、237 を媒体②とする。C グループ内においては、媒体① 235 はブロック 3 内でⅣ～Ⅴ期の浅鉢 231･233、ブロック外でⅢ期（新）段階の浅鉢 1a 類 230 付近から出土している。図版 44 の立面図 l ラインを見ると、北側で 230 と媒体① 235、媒体② 237 がほぼ同レベルでまとまっており、南側に遺物の分布が落ち込み、そこで媒体① 235 と浅鉢 231･233 が出土している。平面位置では媒体② 237 はⅤ期（新）～直後段階の浅鉢 3 類 124 が出土している土器集中 79 の西側でも出土しており、図版 44 の立面図 k ラインを見ると土器集中の下端レベルと同レベルの出土である。これは媒体②とした 237 の廃絶時期と 124 を含む土器集中 79 の形成時期が近いことを示している。媒体①・②を通して見たこれらの状況から、Ⅲ期（新）段階の浅鉢 1a 類 230 とⅣ～Ⅴ期の浅鉢 231･233、さらにはⅤ期（新）～直後段階と考えた浅鉢 3 類 124 までもが、近い時期に廃絶されたことが窺える。

媒体①とした 235 は A グループブロック l の南端からも出土しており、図版 44 立面図 A ラインと a ラインを見ると壺 l 類 176 や、上記で媒体とした 162 よりも高いレベルで出土している。このことは A グループブロック l 出土のⅤ期（新）段階～直後段階よりも C グループの一群（Ⅲ期（新）～Ⅴ期直後段階）の廃絶時期が新しいことを示しており、型式学的時期区分と一致しておらず、この状況はシルト質層中に廃絶された各型式段階の土器が、ほぼ時間差を有さずに廃絶された様相を示しているといえよう。

前述のように型式学的検討からはある程度の時期幅が認められ、下位包含層からは本遺跡で最も古く位置づけられるⅢ期（新）段階の浅鉢のみが出土しており、層位的には整合性がとれる。上位包含層からは下位と同段階のⅢ期（新）段階の土器群から時期幅を有しⅤ期（新）段階、もしくはその直後段階までの土器群が出土しており、その平面分布からはブロック単位で細分時期ごとに、ある程度まとまる傾向が認められた。しかし、接合・同一個体関係の状況をふまえると、各ブロック間に関係があり、それらの状況からは廃絶時期にはほぼ差がないことが確認された。層厚が 5 ～ 10cm 程の水性堆積によるシルト質土からの出土であるため、これらの型式学的細分時期の実際の時間幅はかなり限定されたものである可能性が高い。また上・下位包含層におけるⅢ期（新）段階土器群の出土状況は、下位の粘質土層が当該期間内に堆積したことを示している。

本遺跡出土の中で最も型式学的に古い特徴を有する浅鉢 230 と、最も新しい鉢 138 に付着した炭化物について放射性炭素年代測定を行ったが（第Ⅵ章第 2 節）、Ⅲ期（新）段階の浅鉢 230 は 2,590 ± 30BP であり較正年代が calBC803-771、Ⅴ期～直後段階の鉢 138 は 2,620 ± 30BP であり較正年代が calBC814-789 という結果が得られ、型式学的時期と理化学年代が逆転している。しかし両者とも約 2,600BP という同年代の値が得られ、上記の出土状況と、当該期の型式学的細分時期と実時間幅の関係を反映している結果といえる。

以上のように本遺跡で時期判別が可能な個体は、型式学的には大洞 C2 式Ⅲ期（新）段階～Ⅴ期直後段階、上野原式直前段階～上野原式段階に属するが、出土状況からは型式細分時期の明確な時間幅が窺えるような状況は

認められなかった。ただし平面分布にはグループごとに型式学的特徴のまとまりが認められ、晩期中葉後半の極めて限定された時間幅における様相を示しているといえよう。

次に有文深鉢のうち主文様部分に磨き調整が施される１～４類について見ると、１類 234 は上位包含層Ｃグループブロック３に属し、口縁部の集合短沈線は上野原～鳥屋１式に認められる施文である。2a 類 117 は調査区南側 2K-2G21 グリッドに単独で位置する SK295 出土である。上野原遺跡での出土が認められ〔中島前掲第 24 図 26〕当該期に位置づけられる。2b 類 22･39 は土坑出土であるが、図版 44 のｂ～ｄラインを見ると下位層の分布域に属している。22 のような平行沈線の多条化は新しい傾向であり上野原式直前～上野原式に比定できよう。平行沈線文帯のみが施される 3a･b 類は上位包含層と下位層の分布域から出土しており、当該期に比定されると考える。3a 類 130 と４類 90 については類似資料が緒立遺跡Ｂ地区の配石遺構から一括出土しており〔渡邊ま 1998〕、上野原式の浅鉢と共伴している。本遺跡の出土状況と矛盾せず、当該期の組成の一端を表しているといえよう。

Ｂ　粗製深鉢の分析

本項では地文深鉢の他に、地文深鉢２・４類の口縁部無文帯に沈線文・刺突文が施される有文深鉢５類と、口縁部に粘土紐接合痕をのこす、または沈線でなぞる有文深鉢６類もここに含め分析する。

１）類　別　組　成（第 38 図）

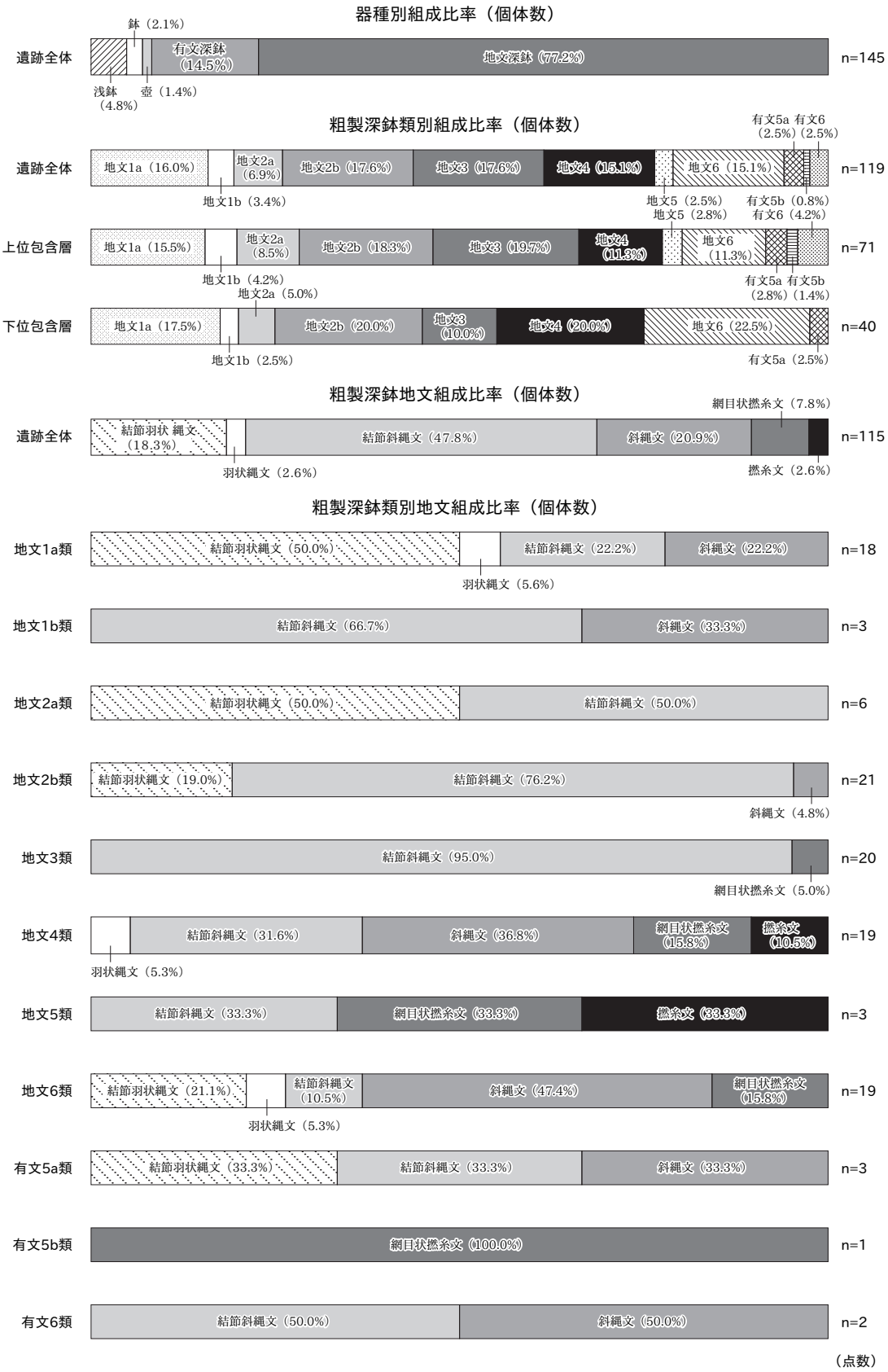
口縁部が残存し分類可能な個体数は 119 点であり、組成比率は有文深鉢５類が４点（3.3％）、有文深鉢６類は３点（2.5％）、地文深鉢１類は 23 点（19.4％）、うち 1a 類が 19 点（16.0％）、1b 類が４点（3.4％）、地文深鉢２類は 29 点（24.5％）、うち 2a 類が８点（6.9％）、2b 類が 21 点（17.6％）、地文深鉢３類は 21 点（17.6％）、地文深鉢４類は 18 点（15.1％）、地文深鉢５類は３点（2.5％）、地文深鉢６類は 18 点（15.1％）となり、本遺跡で最も多いのが口縁部の幅広無文帯下に結節回転文が施される地文深鉢２類であり、次いで口縁部に結節回転文帯が施される１類、次いで口縁部直下に結節回転文が施される３類、口縁部に無文帯をもつが直下に結節回転文が施されない４類の順である。このように、本遺跡出土の粗製深鉢は口縁部に結節回転文が施される、無文帯を有する、という点が大きな特徴である。

次に本遺跡の遺物出土状況は東西の帯状分布域において、上位出土と下位出土の二つの分布域に分かれることを前節において確認した。そこで次に上位分布と下位分布における類別組成比率を示す。対象となる土器は帯状分布域出土のもので上位・下位が明確な 111 点についてである。

まずⅢ期（新）段階の浅鉢（38）が出土した下位分布出土の粗製深鉢についてであるが、総点数 40 点であり、有文深鉢５・６類は 5a 類の１点（2.5％）のみ、地文深鉢１類は８点（20.0％）、うち 1a 類が７点（17.5％）、1b 類が１点（2.5％）、地文深鉢２類は 10 点（25.0％）、うち 2a 類が２点（5.0％）、2b 類が８点（20.0％）、地文深鉢３類は４点（10.0％）、地文深鉢４類は８点（20.0％）であり、地文深鉢５類は出土していない。地文深鉢６類は９点（22.5％）となり、地文深鉢２類が最も多く、次いで６類、１類、４類となる。

Ⅲ期（新）段階からⅤ期直後段階までの有文土器が出土した上位包含層の粗製深鉢は、総点数 71 点を数え、有文深鉢５類が３点（4.2％）、うち 5a 類が２点（2.8％）、5b 類が１点（1.4％）、有文深鉢６類が３点（4.2％）、地文深鉢１類は 14 点(19.7％)、うち 1a 類が 11 点(15.5％)で 1b 類が３点(4.2％)、地文深鉢２類は 19 点(26.8％)で、うち 2a 類が６点(8.5％)、2b 類が 13 点(18.3％)、地文深鉢３類が 14 点(19.7％)、地文深鉢４類が８点(11.3％)、地文深鉢５類が２点（2.8％）、６類が８点（11.3％）となり、地文深鉢２類が最も多く、次いで３類、１類、４・６類となる。

上位・下位出土の粗製深鉢を比較すると、上位出土の組成比率は全体の傾向とほぼ同じである。下位出土のものについても地文深鉢１～４類が高い割合を示す点では一致しており、本遺跡の特徴を示している。上位・下位出土土器群の相違点を挙げると、①地文深鉢５類が上位のみからの出土である点、②地文深鉢６類の比率が下位



第 38 図　大沢谷内北遺跡土器器種組成・粗製深鉢類別組成・地文組成比率図

では高く、上位では低い点、③有文深鉢５・６類の出土が上位にまとまる点、である。これらの点から、②からは口縁部の文様帯を意識する傾向が上位で増加していることが窺える。それを裏付けるように、①・③の口縁部を意識した施文がなされる地文深鉢５類や、さらに地文深鉢２・４類の口縁部無文帯に沈線を施す、口縁部文様を強調した有文深鉢５類、粘土紐接合痕をのこしさらに沈線でなぞる有文深鉢６類の出現という、下位から上位への変遷として口縁部強調施文の傾向が窺える。

２）地文について（第 38 図）

本遺跡出土の粗製深鉢に施される地文を見ると（第 38 図）、分類別可能で体部の地文構成が判別できる 115 点のうち、最も多用されるものが結節斜縄文（55 点 ·47.8%）であり、次いで斜縄文（24 点 ·20.9%）、結節羽状縄文（21 点 ·18.3%）、網目状撚糸文（９点 ·7.8%）、撚糸文（３点 ·2.6%）、羽状縄文（３点 ·2.6%）となっており、結節が多用されている。縄文の原体には LR、撚糸文には R が多用されている。

類別で見ると、地文深鉢 1a 類では結節羽状縄文が最も多く（９点 ·50.0%）、次いで結節斜縄文（４点 ·22.2%）·斜縄文（４点 ·22.2%）であり、1b 類では結節斜縄文（２点 ·66.7%）が多い。2a 類では結節羽状縄文（３点 ·50.0%）と結節斜縄文（３点 ·50.0%）が半々であり、2b 類は結節斜縄文が圧倒的に多い（16 点 ·76.2%）。３類も結節斜縄文が圧倒的であり（19 点 ·95.0%）、１点のみ縦位の網目状撚糸文が施される。４類の地文には突出しているものはないが、結節斜縄文（６点 ·31.6%）と斜縄文（７点 ·36.8%）が目立つ。５類は３点のみであり、結節斜縄文・網目状撚糸文・撚糸文が施される。６類は結節斜縄文（９点 ·47.4%）が突出している。有文５・６類は個体数が少ないが、結節を有する原体が目立つ。以上のうちで特徴的な点は、結節羽状縄文が地文深鉢１・２類に集中し、中でも 1a 類に突出している点である。結節斜縄文が 2b 類・３類に多用されるのは、分類上、口縁部無文帯下または口縁直下に結節つき原体による結節回転文が施されたものであるため、そのまま体部の地文に用いられている点で肯けるが、1a 類の結節回転文帯と体部の結節羽状縄文については意図的な対応関係が考慮されよう。

その他に、地文とは言い難いが器面に調整痕を顕著にのこすものがあり、縦位のケズリ調整痕が明瞭にのこる深鉢（85·93·118·148·168）がある。ケズリ調整を施した上に地文を施すものと、地文を施した上からケズリ調整を行うものの両者が存在し、地文を施さずにケズリ調整痕のみで地文の効果を出しているもの（93）も存在する。次段階の鳥屋式で盛行する条痕文の採用に関連があるかは不明である。

３）周辺遺跡との比較と粗製深鉢の変遷について

まず、本遺跡出土土器群と時期が重なり、県内における当該期の標識遺跡とされている三条市上野原遺跡の粗製深鉢の様相は、口縁部に結節回転文帯を有する本遺跡分類の地文深鉢１類・２類が主体的に出土しており、他の類もこれに加わるかたちで出土している。この地文深鉢１・２類多出の傾向は、上述のように本遺跡と一致している。本遺跡での出土が認められず、上野原遺跡において一定量の出土が確認されるタイプとしては、外に一段肥厚する口縁部に原体を横位施文し、下に結節回転文帯を施文する口縁部片が目立つ〔中島 1981 第９図６～ 13、第 17 図 20・21〕。このタイプは渡邊裕之氏の「保明浦タイプ」〔渡邊裕 1998〕に該当し、保明浦遺跡 SX2 で鳥屋１式土器と共伴しており〔田畑 1996〕、鳥屋１式に比定されている〔荒川 2009〕。本遺跡において保明浦タイプの出土が認められないことは、粗製土器の点からも本遺跡が鳥屋式直前段階の時期にあることを示している。また、保明浦タイプの肥厚口縁は口縁部に粘土紐を付け足して作出するものであり、成形手法としては口縁部に粘土紐接合痕を残す本遺跡有文深鉢６類と類似しており、結節回転文帯は地文深鉢１・２類の属性である。保明浦遺跡の類例を見ると、口縁部と体部の地文は同一であり、撚糸文・網目状撚糸文の場合は口縁部が横位、体部には縦位施文されており、この施文特徴は本遺跡地文深鉢５類と同様である。

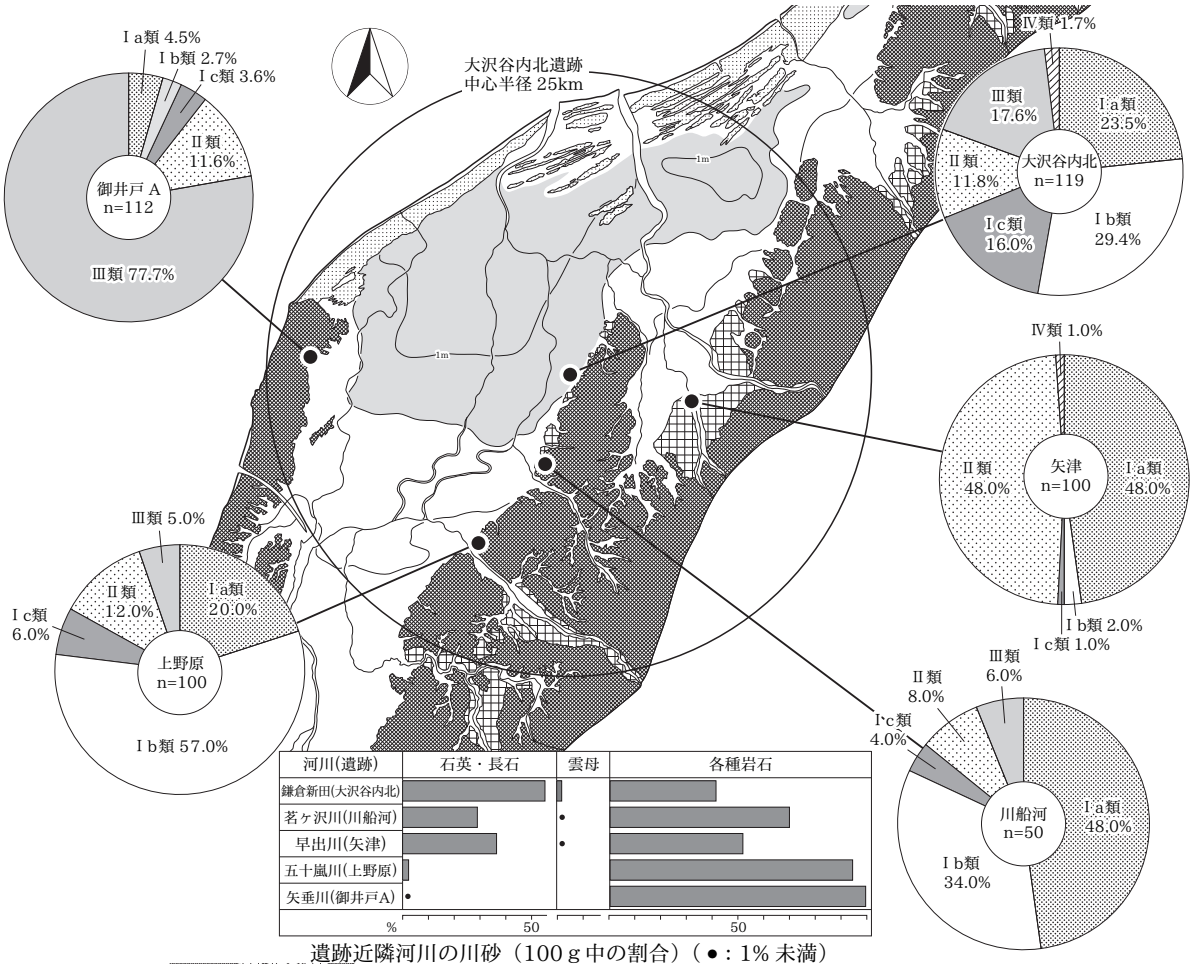
以上の点を考慮すると、保明浦タイプは上野原式段階の粗製深鉢の各属性が融合して成立し、鳥屋１式に盛行した可能性が考えられる。保明浦タイプの認められる遺跡は上野原遺跡・保明浦遺跡・谷津遺跡〔荒川前掲〕・鳥屋遺跡であり、これらの遺跡では本遺跡地文深鉢１・２類の、口縁部に結節回転文帯が施される粗製深鉢が認

められる。一方新発田市館ノ内遺跡Ｄ地点においては保明浦タイプの出土は認められず、本遺跡地文深鉢１・２類も認められない。このことは保明浦タイプ成立の背景に地文深鉢１・２類が関与していることを示すとともに、これらに地域性が存在することを示している。阿賀野川流域の鳥屋遺跡・矢津遺跡に存在し、それより以北の館ノ内遺跡に存在しない点から、この辺りが北の境界線と推測する。

４）胎土について

本遺跡における縄文土器の胎土はバラエティーに富んでおり、第Ⅴ章では肉眼的な観察をつうじ９種にわたる区分を行なった。本書に掲載した 266 個体の内訳は、Ⅰａ類 25.6%・Ⅰｂ類 30.5%・Ⅰｃ類 10.5%・Ⅱａ類 8.6%・Ⅱｂ類 1.5%・Ⅱｃ類 0.8%・Ⅲａ類 16.9%・Ⅲｂ類 4.5%・Ⅳ類 1.1%で、Ⅰａ類・Ⅰｂ類・Ⅲａ類を中心としながらも分散傾向を示す。本遺跡出土の土器胎土を特徴づける含有物は、磨耗した岩石・石英・長石粒子である。第Ⅴ章ではこれを含むグループをⅠ類とした。器種や文様に基づく分類別にⅠ類の出現率を求めると、浅鉢・鉢・壺類では 30.8%、有文深鉢では 42.9%、地文深鉢では 64.3%となり、いわゆる粗製土器に高い頻度で存在することがわかる。精製土器と粗製土器の間に認める含有率の異なりは、それらが本来生地に含まれておらず、混和剤として混入されたことを物語る。

比較資料として、本遺跡中心半径 25km 圏内に分布する同時期の拠点集落４箇所での胎土組成を第 39 図に示す。新潟県立歴史博物館所蔵の矢津遺跡採集土器（落合コレクション）、加茂市民俗資料館所蔵の川船河遺跡採集土器、三条市教育委員会所蔵の上野原遺跡出土土器、市埋蔵文化財センター所蔵の御井戸Ａ遺跡晩期中葉包含層出土土器をⅤ章で示した分類基準に基づき集計したものである。提示した数値は、本遺跡を含め地文深鉢に限



第 39 図　越後平野周辺における縄文時代晩期中葉遺跡出土土器の胎土構成と川砂組成

定した。

周辺４遺跡の中で所属時期が明確な資料は上野原遺跡と御井戸Ａ遺跡である。前者は無作為に抽出した口縁部資料 100 個体、後者は口縁部資料の全てにあたる 112 個体を集計対象とした。矢津遺跡と川船河遺跡については、遺跡の形成期間が長期におよぶことから所属時期の特定が困難であるが、前者は晩期に属す可能性が高い結節縄文および網目状撚糸文施文資料 100 個体、後者は晩期地区の採集品のほぼ全てにあたる 50 個体を観察した。

周辺４遺跡の土器胎土は特定種に偏る傾向が強く、矢津遺跡ではⅠａ類とⅡａ類、川船河遺跡ではⅠａ類、上野原遺跡ではⅠｂ類、御井戸Ａ遺跡ではⅢａ類がそれぞれ 50％弱～ 70％台の高率を示す。各遺跡において特定胎土が多数を占め、なおかつ卓越種が異なる要因として考えられるのは、混和材入手環境の違いである。以下では、本遺跡の土器胎土の位置づけにあたり行った予備的検討の概要を述べる。

御井戸Ａ遺跡を除く４遺跡では、Ⅰａ類やⅠｂ類が高率をもって出現する。これらの指標となる磨耗粒子の一般的な入手方法として考えられるのは河川の川砂を利用したケースであり、各遺跡における近隣河川の砂礫を採取して比較を試みた。採取地は、本遺跡の東 1.4km に位置する鎌倉新田地内の小渓谷、五泉市矢津地内の早出川（矢津遺跡付近）、田上町川船河地内の茗ヶ沢川（川船河遺跡付近）、三条市諏訪地内の五十嵐川（上野原遺跡付近）、新潟市西蒲区福井地内の矢垂川（御井戸Ａ遺跡付近）である。各地点のサンプルは、河床もしくは氾濫原から中型ポリ袋１袋分の砂礫を採取し、５mm･１mm メッシュ篩を使用して粒度別に分けた後１mm メッシュ篩に残った砂粒 100 ｇについて石英～長石・雲母・岩石に区分した。それぞれの重量に基づく組成率は第 39 図下段のとおりである。

５箇所の採取資料にはいくつかの特徴がある。新津丘陵西麓に位置する鎌倉新田地内の渓谷と茗ヶ沢川のサンプルは、付近の基盤層に含まれる砂礫が河川の侵食によって流入したものである。２地点の採取資料は磨耗度の高い鉱物・岩石粒子が大半を占めており、極度に磨耗が進んだ石英・長石が 30％～ 50％台の高率を示す。これと同様の石英・長石粒子は新津丘陵の基盤層に一般的に含まれており、その産状を菩提寺山西麓から茗ヶ沢付近に至る 10km の間の露頭で確認することができた。

早出川・五十嵐川・矢垂川から採取した資料は、上流域の岩相を反映している。磨耗した各種岩石は、矢垂川で稀なほかは各サンプルの中に多量に含まれる。早出川では、上流域に花崗岩が産出することから石英・長石粒子が 30％台の割合で存在する。しかし磨耗度は低く、シャープな稜をもった砂粒が主体を占めている。これに対し、五十嵐川と矢垂川では石英･長石がきわめて乏しく、含有率は前者で３％台、後者で１％未満にとどまる。両河川での卓越岩石は、前者が磨耗した泥岩、後者が破砕状態にある凝灰岩である。

周辺４遺跡での卓越胎土と近隣河川の川砂の間には、次のような関係が見られる。石英・長石の入手が容易な矢津遺跡と川船河遺跡では、早出川や茗ヶ沢川の川砂組成に類似したⅠａ類が 50％近い割合を示す。前者において高い比率を占めるⅡ類は、意図的に粉砕した可能性が高い石英・長石粒子を多量に含むグループである。早出川の川原にはその母岩となりうる花崗岩の転石が多数存在しており、地理的特性にちなんだ整合関係が見いだせる。石英・長石が乏しいⅠｂ類は、上野原遺跡で卓越する。御井戸Ａ遺跡では、凝灰岩以外の混入物が乏しいⅢ類が 75％もの高率を示す。ともに付近に流れる五十嵐川や矢垂川の川砂組成と調和したあり方と言えるものである。

以上のように、周辺４遺跡で主体を占める地文深鉢の胎土含有物は、いずれも各遺跡の近隣で採取できる川砂や転石の状況と類似しており、土器製作にあたりそれらを混和剤として利用した可能性を強く示唆している。これに対し本遺跡では、川船河遺跡と同様の川砂利用環境に置かれているにも関わらず、胎土組成は大きく異なる。近隣の川砂とは異なる特徴をもった混和剤が本遺跡の土器に多数含まれる要因については、二通りのケースが考えられる。砂粒ないしは調整済みの粘土を搬入しこの遺跡で土器製作を行なった可能性はその一つである。しかし、平成 19 年度の発掘調査区では土器製作の一指標となる焼成粘土塊や燃料材の確保に不可欠な磨製石斧が出

土しなかった。後述のように、出土した炭化材の多くは遺跡付近での入手が困難な樹種によって占められる。本遺跡では燃料材の伐採から分割・乾燥に至る一連の作業〔新井 1973〕が行われた可能性はきはめて低く、出土した土器の大半ないしすべてが他遺跡からの搬入品と考えざるをえない状況にある。

本遺跡中心半径 25km 圏内に分布する４箇所の拠点集落と本遺跡における胎土のあり方を土器の動きという観点からを比較すると、周辺遺跡との関連性を示唆する次のような特徴が見いだせる。各遺跡の土器を特徴づける４種の卓越胎土が本遺跡で 10％から 20％台の数値をもって共存する現象である。すなわち、Ⅰａ類は矢津遺跡と川船河遺跡、Ⅰｂ類は上野原遺跡、Ⅱａ類は矢津遺跡、Ⅲａ類は御井戸Ａ遺跡の指標となる胎土であり、本遺跡における各類の割合が周辺４遺跡の胎土を平均化した値に近似する点も注目に値する。これらが仮に各遺跡で製作された土器の搬入品であるとすれば、拠点集落における活動領域の広がりや本遺跡の利用形態を考えるうえで有益な情報をもたらすことになる。

今回試みた検討は、磨耗粒子の有無と石英～長石・雲母・凝灰岩の多寡を問題としており、各種岩石を加えた全体的な組成の把握には至っていない。今後はサンプル数を増やし、水系やエリアごとの混和剤利用環境をいっそう明確にするとともに、各遺跡におけるそれらと土器含有物との厳密な比較や、本遺跡と周辺遺跡間の土器胎土の異同を詳細に検討していくことによって上記のような見方の妥当性を検証する必要がある。さらには、より広範囲にわたる遺跡との比較検討も課題となる。

第３節　石器群の位置づけ

本遺跡から出土した石器類は、3,038㎡におよぶ調査面積に較べてきわめて僅少で、石鏃３点、同未成品１点、磨石・敲石類７点、石皿９点、剥片１点がすべてであった。このうち、Ⅲｄ層から出土した石鏃と磨石・敲石類１点ずつについては所属時期が下降する可能性があるため、これを除く資料をもとに石器群のあり方を考える。

Ａ　石　器　組　成

組成比の検討にあたり、石器群を三つのグループに区分しておく。主として食料の調達・加工に用いたＡ群石器、工具的な性格の強いＢ群石器、非実用的なＣ群石器、である。第 15 表に越後平野周辺に分布する主な縄文時代晩期遺跡の石器出土点数を示した。

１）Ａ　群　石　器

越後平野周辺の縄文時代晩期遺跡において一般的に存在するＡ群石器は、石鏃、磨石・敲石類、石皿の３種である。新潟県内における縄文時代晩期の石器群は、石鏃出土量の増加を大きな特徴とする〔鈴木俊 1998〕。そ

第 15 表　越後平野周辺における縄文時代晩期遺跡出土の石器

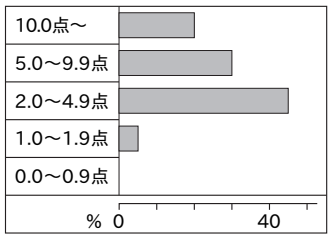
遺跡名（所在地）	所属時期	立地	A群石器					B群石器					C群石器					総数
			石鏃	石錐	打斧	磨石	石皿	磨斧	石匙	石錐	石篦	砥石	石棒	石剣	石冠	独鈷	玉類	
道　端（村上市）	前葉	沖積地	4			8	2	1	4									19
昼　塚（胎内市）	前葉	沖積地	7			35		8	2	1	1		1					55
道　下（胎内市）	前葉	沖積地	22			27	1	9	11	5	5	1					3	84
野　地（胎内市）	前葉	沖積地	86			63	5	5	7	15	1	15		2		1		200
青　田（新発田市）	後葉	沖積地	549		20	345	34	44	3	264	3	64		3	2	4	18	1353
村　尻（新発田市）	前葉～後葉	段丘	700			342	8	280	85	180	11	92	79	35	4	1	7	1824
館ノ内（新発田市）	中葉～後葉	段丘	86	1	1	120	45	39	6	9		4	1	3	2	1	1	319
鳥　屋（新潟市）	後葉	砂丘地	13			65	3	15	1	11	1	32		1	4		1	147
六野瀬（阿賀野市）	後葉	段丘	84			49	6	18	8	95		5						265
大沢谷内北（新潟市）	中葉	沖積地	2			6	9											17
上野原（三条市）	中葉	台地	131		2	23	1	18		1			2	1	5	15		200
藤　平（三条市）	後葉	段丘	79	2	5	8	2	14	8								1	118
長　畑（三条市）	後葉	沖積地	37			12	1	11	1	1			1				2	66
御井戸A（新潟市）	前葉～後葉	台地・沖積地	105			24	4	20	2	15			1	1	1		1	174
蒲　田（弥彦村）	中葉～後葉	沖積地	63	1		20	5	9	1	5		1	1	1			1	108
寺　前（出雲崎町）	中葉～後葉	沖積地	7			118	4	12		4		2	2		1			150
藤　橋（長岡市）	前葉	台地	103	4		47	18	37	1	18		26	19	2	1	1	1	278

の一方で、沖積地の遺跡では石鏃と磨石・敲石類の構成割合が台地・丘陵上の遺跡と異なる様相を見せている。台地・丘陵上の遺跡において石鏃主体型遺跡が大半を占めるのに対し、沖積地の遺跡で石鏃主体型遺跡（蒲田・長畑）・両者拮抗型遺跡（道下・野地）・磨石主体型遺跡（昼塚・寺前）が混在する現象である。本遺跡のＡ群石器は出土数が絶対的に少ないが、大まかな傾向としては磨石主体型をなしている。沖積地の遺跡に認める遺跡間変異については種々の要因を考える必要があるが、本遺跡に限って見れば石鏃出土量の極端な乏しさが大きく作用していることが確実である。

本遺跡で少数ながらも主体を占める磨石・敲石類と石皿の数量比には、看過しがたい特徴がある。６点を数える磨石・敲石類は、使用法のうえで植物質食料の加工に関わる１類～３類と工具的な敲石（ハンマー）にあたる４類に区分することができる。このうち石皿とセットの関係にあるのは前者の３点で、その数量は石皿の３分の１にすぎない。

東日本の縄文時代晩期において５点以上の石皿が出土した遺跡 50 箇所での磨石・敲石類と石皿の数量比を第 40 図に示した。石皿１点に対する磨石・敲石類の出土量は２点以上５点未満の場合が全体の 44％を占める。これに次いで５点以上 10 点未満が 30％を記録するが、本遺跡のような同量以下のケースは皆無である。

本遺跡における磨石･敲石類の少なさは、植物性食料残渣がきわめて乏しい状況と調和している。したがって、二種の用具にみられるアンバランスな関係は、石皿出土量が相対的に多いため、と考えるべきである。磨石・敲石類を凌ぐ量の石皿が本遺跡に残された理由については、食料加工具としての第一義的な性格とは異なる側面からの検討も必要であろう。各資料に残る使用痕が本遺跡内での諸作業の過程で生じたことを示す明確な証拠があるわけではない。搬入時点において現状の姿をなしていた可能性もあり、そうしたケースを想定した場合、９点の石皿には使用目的が判然としない搬入礫と同様の資料を含むことになる。石器組成が遺跡内での活動内容を正しく反映している保証はなく、実態との隔たりを考慮に入れた柔軟な解釈が求められる。



第 40 図　東日本における縄文時代晩期遺跡の石皿、磨石・敲石類数量比

２）Ｂ　群　石　器

本遺跡の石器群におけるもう一つの特徴は、Ｂ群石器の欠如にある。縄文時代中期以降の新潟県内では、西頸城と阿賀野川以北で磨製石斧の生産が行われたことから、時間の経過とともに各遺跡での石斧出現率が上昇する傾向にある（第６図）。そうした地理条件を背景に、越後平野の周辺は全国的にも有数の潤沢な石斧供給環境下に置かれていた。平成 19 年の発掘調査において磨製石斧が全く出土しなかった点は、当地の一般傾向に反したきわめて特異な事例と考えなくてはならない。

第Ⅴ章で述べたように、出土した杭の先端には微弱ながらも石斧加工痕が残されており、活動期間内において磨製石斧が使用されていたことをうかがわせる。この遺跡内での磨製石斧の欠落は、刃部に欠損が生じるほどの頻度で樹木の伐採や木材加工が行なわれていなかったことを意味しており、ある期間内での使用の後遺跡外に持ち出されたというのが実態であろう。

本遺跡が位置する阿賀野川以南では、剥片素材の切削具がさほど多くない。石匙やスクレイパーが欠落する点は、そうした地域性を考慮する必要がある。しかし、縄文時代晩期の越後平野周辺では石錐の出土量が目立って多く〔前山 2002〕、石錐の欠落理由を切削具と同様に考えることはできない。遺跡外に搬出された可能性も否定できないが、いずれにしても生産的な要素が稀薄なこの遺跡の性格を表わす特徴と言える。

３）Ｃ　群　石　器

石棒・石剣・石冠などの欠落もまた本遺跡の石器群を特徴づける。非実用的な用途をもったこれらの用具は晩期終末になると減少化が進み、欠落遺跡も見られるようになる〔前山 2002〕。ただし、本遺跡と同時期の拠点集落では依然として豊富な用具を伴うケースが知られており、南 15km に位置する三条市上野原遺跡では、100

㎡たらずの発掘範囲から 20 点以上ものＣ群石器が出土した〔中島 1981〕。このほか、越後平野の周辺ではヒスイなどを素材とした自給的な玉類製作が行われる事例が長岡市藤橋遺跡〔長岡市 1992〕や御井戸Ａ遺跡〔前山ほか 2003〕で確認されており、本遺跡との利用形態の違いを明示している。

Ｂ　剥片石器の位置づけ

前述のとおり、下層出土の剥片石器は、石鏃２点・石鏃未成品１点・剥片１点に限られる。使用石材の内訳は、石鏃が珪質頁岩、剥片と石鏃未成品が黒曜石である。２点の黒曜石については、前者が県内板山産、後者が北海道産石材と推定され、調査区内での石器製作を示す資料とはなりえなかった。

越後平野周辺における黒曜石の利用は、角田山麓の特定遺跡を除けば活発とは言いがたい。とりわけ晩期の利用量はきわめて少ない場合が一般的で、石鏃全体に占める割合は、５％～３％を記録する新発田市青田遺跡〔石丸 2004〕や新潟市鳥屋遺跡〔阿部 1988〕などを除けば１％未満もしくは皆無のケースが多い。本遺跡から出土した唯一の剥片と石鏃未成品がともに黒曜石を使用することは、異例の現象と考えなくてはならない。

石鏃未成品の形態も晩期遺跡の出土例としては特異である。越後平野周辺における石鏃形態の変遷を概観すると、後期中葉を境に無茎石鏃から有茎石鏃への転換がはかられ〔田中靖 1991〕、晩期に入ると有茎石鏃が大多数を占めるにいたる。こうしたなかで、晩期前葉に属す凹基無茎石鏃が胎内市道下遺跡〔大島 2007〕や同市野地遺跡〔加藤 2009〕で近年確認されている。しかし、両遺跡の出土例は基部の抉りが概して浅く、本例と同様の長・幅比、側縁形態、抉り加工の特徴を併せもつ資料は見られない。加えて、二遺跡の石鏃に黒曜石の利用例が皆無であることも本例との疎遠な関係を物語る。

越後平野周辺で現在までに知られる縄文時代の石鏃の中で、本例に最も近似するのは、あらゆる要素において中期前葉の資料である。本資料の石材産地は、理化学分析の結果北海道産の可能性が高いとされた（第Ⅵ章第６節）。しかし、肉眼的な観察に基づくかぎり長野県霧が峰（星ヶ塔）産黒曜石に酷似しており、微量元素に基づく産地領域が長野県男女倉に接近する点も懸念されるところである。越後平野の周辺で星ヶ塔産黒曜石が多用された弥彦・角田山麓において、利用のピークが前期終末から中期前葉に訪れる点〔金山ほか 1995〕も留意すべきである。いずれにしても、この石鏃は本遺跡と異なる時期の所産の可能性が高く、縄文人の多様な活動の一端を示す資料となる。

第４節　食料残渣から見た生業活動

Ａ　動物食の利用

近年、動物遺体が良好な状態で保存されるいくつかの事例が越後平野の低地遺跡から知られるようになってきた（第６図）。本遺跡においてもイシガイ・カワニナなどの貝類が比較的良好な状態で遺存することから、動物利用のあり方を示す何らかの資料が得られるものと期待した。しかし、土壌水洗をつうじた精査にも関わらず、獣骨や魚骨は微細な破片すら確認できなかった。

縄文時代晩期の遺跡からは、通常火熱を受けて硬化した獣骨が出土する。本遺跡の土器は煮沸機能をもった粗製深鉢が大多数を占め、主としてその使用時に生じた多量の炭化物が土器と重複的な分布を示していた。炭化物の中にはクルミやヒシの実も含まれており、遺跡内に獣骨が廃棄されていたとすれば、何らかの理由で被熱した可能性が高いと考えるのが自然であろう。前述のように、本調査区からは動物の解体処理に関わる切削具が全く出土しなかった。石鏃の出土量も極端に少なく、狩猟活動の形跡はきわめて微弱と言わざるをえない。

東日本の縄文時代遺跡では、晩期に至り錘具が激減する〔前山 2007〕。その一方で魚類の利用はひき続き行なわれ、越後平野周辺の低地遺跡においてもサケやコイ科・イトヨなどの魚骨が確認されるケースが増加している（第６図）。本遺跡は水辺に接近することから、漁撈に適した立地環境にある。しかし、今回の調査結果に基づく

限り、漁場として利用された可能性についても否定的な状況にある。

B　植物食の利用

低湿な土壌環境にある本遺跡は、植物遺体の保存に適した良好な条件を備え、調査区内からえられた種実類は、この遺跡における植物利用状況を反映した資料と考える。しかし、Ⅴc層～Ⅵb層から出土した種実の中で食料資源として利用されたことが確実な資料はクルミとクリに限定され、当地の晩期集落で一般的に利用されたトチの実は断片的な資料すら確認できなかった。

クルミは、包含層および遺構調査で78個体、水洗選別作業をつうじ75.2gえられた。後者の93％を占める微細炭化物は、被熱個体の完形重量に基づけば20個体ほどに相当する。本遺跡におけるクルミの評価にあたり、利用率の低さは重要である。発掘区全体の出土量が把握できる包含層・遺構調査資料に基づけば、打割個体の割合は15％にすぎない。ほぼ同時期の胎内市野地遺跡〔坂上2009〕や新発田市青田遺跡〔猪狩2004〕では、破損率が80％以上にも達し、本遺跡との格差は歴然としている。ちなみに微細な炭化破片の性格については、脂質に富んだ種実の特性を生かし燃料として使用した可能性も想定できる。これらが食料資源としてどの程度利用されていたかは不明であるが、自然半割個体の中に被熱資料が存在する点から見て、未利用クルミが少なからず含まれることは確実である。

本調査区におけるクルミの全体量が最大800個体ほどと想定できることを第Ⅴ章で指摘した。この数は、御井戸A遺跡の小規模な土坑内に集積された1,100個体のクルミ〔前山ほか2003〕にも及んでおらず、食料資源としての過大な評価は避けるべきである。調査区内の5箇所で行なった花粉分析によれば、クルミ属の花粉がいずれの地点においても安定的な数値をもって確認された（第22図）。遺跡形成当時、付近にクルミが生育していたことをうかがわせるとともに、未利用個体の多くが自然堆積物である可能性を強く示唆する分析結果と言える。

クリは人為的に引き裂かれた状態の果皮が1点出土したにすぎない。本遺跡の土壌内にはクリ属花粉が皆無に等しく、食料資源としての貢献度はきわめて低かったと考えざるをえない。食料として利用された可能性が指摘できるその他の種実としては、ヒシの実があげられる。静水域に生育し、夏季後半から秋季にかけて種実が利用できる水生植物である。本遺跡の低域部ではⅥb層に多量のヒシの実が自然堆積しており、種実が容易に採集できる環境下にあったと考えられる。これに対し、何らかの利用が考慮されるヒシの実は4個体ほどの炭化物に限られた。未利用個体が偶発的な要因によって被熱したおそれもあり、活発なヒシの実採集が行なわれた様子は認められない。

Ⅴ章においてクルミの形態・サイズに認める特徴を述べた。越後平野周辺のクルミサイズの変遷には次のような流れがある。縄文時代中期に入り大型化し、晩期にピークを記録した後、再び小型化に転じる現象である〔前山ほか2003〕。本遺跡ではサイズの計測が可能な個体数が限られるが、御井戸A遺跡の晩期中葉の資料と近似したあり方を示していた（第16図）。種実サイズにおける大型化の要因には、自然環境の変化、人為的な保護、両者の相互作用が考えられる。このうち問題となるのは、クリの種実における大型化〔吉川2004〕とも関連し、人為的な働きかけがどの程度行われていたかである。本遺跡から出土したクルミは、上記のように自然堆積個体が大半をしめる可能性が高い。遺跡の利用形態から見ても人為的な関与の程度は少なかったものと考えられ、クルミサイズの評価にあたり一つの示唆を与える資料となる。

第5節　樹　木　利　用

今回の調査では、調査区がおかれた低湿な環境から多種にわたる木質遺物の出土も期待された。しかし、まとまった量の資料としては30点を数える杭がえられただけで、このほか櫂1点、板材･角柱材などの加工木12点、伐採木2点が出土したにすぎない。一方、土壌内には植物花粉や自然木が良好な状態で保存されており、遺跡周

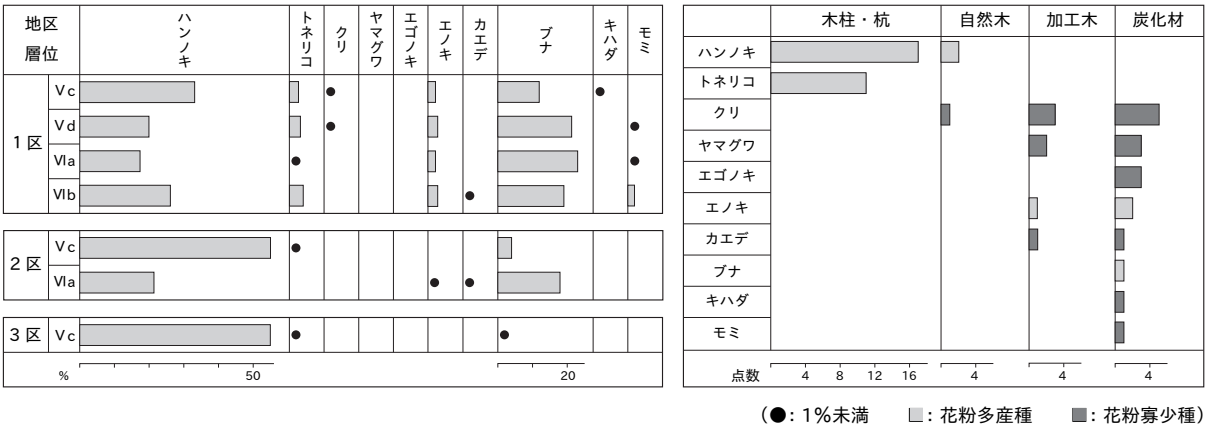
辺における当時の植生環境と利用樹木の関係を検討することができた。第 41 図には、杭・自然木・加工木・炭化材で利用が確認された樹木の内訳とそれらの花粉出現率を示した。

杭に使用された樹木は、ハンノキ属とトネリコ属の２種に限定される。両者は多量の花粉が土壌内に含まれるとともに、調査区内に堆積した自然木の中にも存在が確認されたところから、付近に生育した樹木を利用していたことが確実である。本遺跡の杭は、先端部の加工がきわめて粗雑な点を大きな特徴とする。明瞭な石斧加工痕はほとんど認められず、主として「引き裂き」や「折り取り」によって作出されていた。前述のように、本調査区において磨製石斧が欠落する点は、杭先端の加工法ときわめて整合性が高い現象と言える。

一方、板材・角柱材などの加工木ではクリが多用される傾向にあり、ヤマグワ・エノキ・カエデの利用も確認された。これらはハンノキやトネリコと異なり、花粉の出現率が極めて低いか皆無の樹種であることが特徴的である。出土した加工木には、杭とは対照的に明瞭な石斧加工痕が残される。石器の項で述べたように、本遺跡では木工具が一切出土しておらず、これらの加工が遺跡内で行なわれたこと示す明確な資料は得られなかった。あわせて行った炭化材の樹種同定によれば、加工木と同様にクリが最も多く、利用樹種の構成も類似することが明らかになった。加工木に較べて多様な樹種からなる点は、前者の同定資料数が少ないことによるものであろう。

ところで、本遺跡の加工木の中には被熱資料が多く含まれる。板材・角柱材や伐採木の端部などが強い加熱によって炭化したもので、それらが最終的に燃料材として利用されたことを物語る。被熱痕をもった加工木の出土はⅥｂ層に限定され、Ⅵａ層やＶｄ層では加工痕の判別が困難な被熱木片や炭化材が出土した。しかし、樹木の遺存条件には層位的な異なりがあり、Ｖｃ層やＶｄ層の堆積当時は離水化によって乾燥地化が進む時期にあたる。その点を考慮すれば、本来各層においても被熱した加工木が少なからず存在した可能性が高い。

以上のように、本遺跡から出土した樹木資料は、周辺植生や石器との関連性のうえで二つのグループに分けることができる。遺跡周辺植生や石器と整合性が高い杭、そして疎遠な関係にある加工木や炭化材、の別である。両グループで利用された樹木は、生育状況においても異なりが見られる。杭で行った年輪解析によれば、利用されるトネリコ属は新発田市青田遺跡の木柱（縄文時代晩期終末）に較べて成長が遅く、水位が変動する不安定な環境で生育していた可能性が指摘された。これに対し、板材の素材となったクリの木には直径 40cm ほどの大木や樹齢 70 年以上におよぶ老木が含まれており（図版 71- ４・５）、それらが発掘調査区近辺で生育していた可能性については否定的な状況にある。ここにあげたいくつかの点に基づけば、本遺跡から出土した被熱加工木は主として遺跡外で伐採・加工されたものとみなすのが妥当であり、さらには加工木の大半が燃料材としての利用を目的に搬入された可能性も指摘できる。



第 41 図　出土樹木・炭化材の樹種と花粉構成

第６節　縄文時代の大沢谷内北遺跡

大沢谷内北遺跡は、新津丘陵西麓の沖積地に近世まで存在した「大日潟」の湖底から発見された。越後平野における縄文時代遺跡の立地観は、旧紫雲寺潟の湖底に埋没した青田遺跡〔荒川ほか 2004〕の発見を契機に一変した。縄文時代以来の水辺の名残と考えられていた「潟」が後世の沈降によって生成したことが明らかとなり、平野部の深層に縄文時代遺跡が多数存在する可能性がにわかに高まってきたためである。本遺跡は、そうしたケースに当てはまる典型的な事例となる。

越後平野の低地に立地する縄文時代晩期の遺跡は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴う調査の進展につれて着実に増加し、青田遺跡の発掘調査以後も道端遺跡〔渡邊裕 2003〕・昼塚遺跡〔折井ほか 2005・2006〕・道下遺跡〔折井ほか 2007〕・野地遺跡〔渡邊裕ほか 2009〕で良好な事例が報告されている。一方阿賀野川以南では、三条市長畑遺跡〔本間ほか 1975〕・田上町保明浦遺跡〔田畑 1993・1996・2003・2004〕・弥彦村蒲田遺跡〔前山 2000〕で発掘調査や確認調査が行われているが、調査年次の早さや種々の理由から遺跡のあり方に不明確な部分を多く残している。本遺跡の発掘調査はこうした状況のなかで行われたもので、阿賀野川以南において沖積地下の縄文時代遺跡を広範囲にわたり精査する初の本格的調査となった。

平成 19 年の発掘調査地は、幅約 50m の国道法線内に限定された。縄文時代の遺構と遺物は、標高３m ほどの地表面より 80cm ～ 140cm ほどの深さから確認された。遺跡の形成層準は、Ⅴｃ層からⅥｂ層までの最大 30cm の間である。当時の地形は東に向かって緩やかに傾斜し、Ⅵ層上面での標高は南西部で 2.6m、北東部で 1.9m を測る。

合計 10 箇所で行った土壌分析によれば、包含層下部にあたるⅥｂ層からⅥａ層にかけては沼沢地や湿地の指標種となる珪藻化石が多量に含まれており、東部の低域部ではある程度の深さをもつ水域、西部の高域部では河川の氾濫の影響を強く受ける環境が展開していたと考えられる。土坑群の覆土下部で行った土壌水洗によれば、淡水産二枚貝の殻皮や水生植物の種子はいずれも東部の 1K-10G グリッドを中心に包含されており、いくぶん標高の高い 1K-10F グリッドで炭化物やクルミの出土量が増加する傾向にあった。包含層上部のⅤｃ層では土壌化した土質によって離水化傾向をうかがうことができる。しかし、東部に位置する 1K-9I グリッドでは水生草本種子や淡水産二枚貝の殻皮が多量に検出されており、湿性に富んだ環境が依然として展開していたことがうかがえる。花粉の主体を占める植物は、遺跡の形成期間をつうじてハンノキ属・ブナ属・コナラ属である。中でも湿潤な環境に適したハンノキ属の割合が高く、これを中心とした湿地林が存在したもようである。

遺構と遺物の多くは、調査区の中央を東西に横断する形で 20m ほどの幅をもちながら直線的に分布していた。標高２m にも満たない調査区東部では遺物密度が次第に低下するところから、遺跡の範囲限界に近いことをうかがわせる。これに対し、調査区西端は標高が高く、遺跡の広がりがさらに西部におよぶことが確実である。未調査区域に居住域が存在することも予想され、遺跡の全体像は現時点において不明といわざるをえない。

本章第２節で述べたように、出土した土器は型式学的にみて３段階ほどに分けられる。出土層位ならびに接合関係に基づく詳細な検討や付着炭化物からえられた ^{14}C 年代測定値を総合すれば、晩期中葉後半の「上野原式」の範疇で理解できる土器群とみなされる。出土した遺物は土器を除けば数量が乏しく、石器や木製品・加工木の種類も限られる。その内容には空間的な異同もほとんどなく、短期間における何らかの限られた活動の姿を純粋な形でとどめた遺跡であることをうかがわせる。

本発掘調査にあたり、最も重要な課題として位置づけたことがらは、この遺跡における形成要因の究明である。低湿な環境下におかれ、植物遺体が良好に遺存する条件を備えた本遺跡では、生業復元からのアプローチが有効な手段となると考えた。しかし得られた食料残渣は、土壌水洗をつうじて採取した微細資料も含め、少量のクルミとクリの果皮１点に限られた。本遺跡では低域部のⅥｂ層内に多量のヒシの実が自然堆積しており、ヒシの

実採集や淡水魚漁に適した環境にあったと考えられる。しかしながら、それらの利用を活発に行なった形跡は見られず、生業活動の痕跡自体が微弱なものであった。同様の状況は石器類にも表れており、この時期の集落で保有される基本的な生活用具の欠落や出土量の絶対的な乏しさが確認できた。

生産的な要素が稀薄な遺物様相に対し、発掘調査時に記録化した土坑数は 239 基におよぶ。後述のように、この遺跡では通年的に利用された可能性や貯蔵の動機を見出すことが困難である。そのため、多数の土坑を上記のような遺物様相と如何に関連づけて考えるか、という難題に直面することになった。本遺跡の土坑群は上部の立ち上がりが不明瞭なものが多く、覆土の分層線が周囲の自然堆積層と連続する傾向も見られた。遺構としての認定の妥当性に関わる重要な留意点であり、本章第 1 節では遺物の出土状態から詳細な再検討を行なった。その結果は前述のとおりである。多くの土坑が自然地形を遺構と誤認した疑いが強まり、上記のような遺物内容と整合性をもった解釈がこれによって可能になった。

越後平野でこれまで確認された縄文時代晩期の低地遺跡には、遺構や遺物のあり方からいくつかのタイプが存在する。①多様な遺物を豊富に保有し、堅牢な作りの掘立柱建物をもつ野地遺跡・蒲田遺跡、②多様な用具を保有しながら小型の掘立柱建物を中心とする青田遺跡、③竪穴住居が構築されるが、遺物量が乏しい道下遺跡、④土坑群と小型の掘立柱建物からなり、遺物量が乏しい昼塚遺跡、⑤居住施設を伴わず、少量の遺物と袋状土坑が確認された道端遺跡、⑥多量の遺物が出土し、墓域を形成する保明浦遺跡、などの諸類型である。

本調査区内では居住施設が存在しておらず、その点において道端遺跡と類似した特徴をもつ。しかし道端遺跡ではサケ科の椎骨や哺乳動物と見られる焼骨が出土しており〔富岡 2003〕、小数ながらも磨製石斧や石匙を伴う点（第 15 表）においても同一内容をもつとは言いがたい。本発掘調査は遺跡の全範囲を対象としたわけでなく、西部の未調査区に居住施設が存在することも予想される。本遺跡の評価についてはその点において不確定な要素を多分にもつが、以下では今回の発掘調査で得られた知見が遺跡全体の様相を概ね正しく反映していると仮定し、遺跡の性格について検討する。

調査区内から出土した遺物は、この遺跡の利用期間内に生じた生活廃棄物と使用目的や存在理由が判然としない竪櫛や搬入礫などに大別できる。前者の大半を占めるのは、縄文土器である。その量は、口縁部遺存個体に基づけば 145 個体を数える。器種別に見た構成割合は、煮沸機能をもった粗製深鉢が卓越し、82％もの高率を占める。越後平野周辺に分布する縄文時代晩期の拠点集落 3 箇所で行った集計によれば、口縁部資料に基づく地文深鉢の割合は、新潟市西蒲区御井戸 A 遺跡の晩期中葉地区で 39％（n＝287）、同遺跡の晩期後葉地区〔前山ほか 2003〕で 44％（n＝99）、弥彦村蒲田遺跡（晩期中葉～後葉）で 28％（n＝180）、上野原遺跡（晩期中葉）で 40％（n＝914）となり、本遺跡との格差は明白である。

調査区内からは微細な炭化物も多量に出土した。これらは土器と重複的な分布を見せることから、主として煮沸行為に伴う燃料材の残余であることが明らかである。これに対し、確認された焼土遺構は 3 基にとどまる。微弱な加熱で生じた小規模な焼土が 1 箇所に重複したものである。1 箇所あたりの使用期間が相対的に短く、明瞭な焼土の形成に至らなかったことがこの種の遺構の乏しさの理由であろうか。

焼土遺構の評価にも関連し、遺跡の利用季節に関する若干の知見が得られた。杭の年輪解析をつうじた枯死季節の推定によれば、3 本のトネリコ属は春先の成長開始期、7 本のハンノキ属は晩秋から春先までの間に枯死したと考えられ、これらすべてが春先に伐採された可能性も捨てきれない、という。木材の伐採季節には樹木の生態に応じた適季があり、晩秋から冬季（10 月～2 月）が「伐り旬」とされる〔栗島 2009〕。枯死季節が推定された 10 点の資料は長時間にわたる乾燥期間を要する木器素材でなく、伐採後に使用が可能な杭である。したがって、上記のような推定結果はこの遺跡での居住季節を反映した可能性が高いと考えてよかろう。前述のように、本遺跡では夏季後半から秋季に採集期間を迎えるヒシの実の利用がほとんど行われていない。この点は杭の伐採推定季節とも符合しており、本遺跡の利用形態を考えるうえでの重要な手がかりとなる。

土器胎土と樹木利用の項において、本遺跡で使用された土器や燃料材の多くが遺跡外から搬入されていた可能

性を指摘した。食料残渣の極端な乏しさからすれば、調理の対象物までが同時に持ち込まれた可能性も想定できる。本遺跡の利用にあたりこれらが外部から携行されたものであったとすれば、土器や燃料材などが消費された期間における活動実態が問題になる。使用目的や存在理由が判然としない遺物群の位置づけは、これに関わる重要な鍵となろう。

２点の竪櫛は入念な作りの優品で、東北地方南部から新潟県内にかけて類似タイプが分布する〔小林 2001〕。両者の製作地は不明であるが、図版 70- １の類例が新潟市御井戸Ａ遺跡出土の破片資料の中に複数存在しており、広域的に流通した製品である可能性を示唆する。「亀ヶ岡社会」において遠隔地から搬入された文物の多くは生産活動と直接的な関係のうすい奢侈品によって占められる〔林 1976〕。本遺跡の遺物の中できわめて異質な存在といえる竪櫛が、交易品として持ち込まれた可能性は十分考慮に値する。

縄文時代晩期の越後平野周辺で、黒曜石は利用量の乏しい石材である。その一方で、拠点的な集落では微量ながらも黒曜石が存在する。御井戸Ａ遺跡から出土した大量の剥片石器類の中から１点ずつ確認された北海道赤井川や長崎県淀姫産石材〔金山ほか 1995〕はその好例であるし、弥彦村蒲田遺跡では 450 点あまりの剥片類に混じり信州産石材が１点出土した。各遺跡に存在する微量の黒曜石は、実用的な側面から見ればさして意味をもたない資料と言える。しかし「我々の目からみれば無意味な交換や流通」に「縄紋社会のなかでの流通の特質」が存在した〔林 1994〕とすれば、本遺跡出土の黒曜石は交易品の条件に合致した重要な流通物資となる。

第Ⅵ章６節で既述のように、大沢谷内北遺跡に搬入された自然礫の多くは早出川水系から持ち込まれたものと見られる。これまで遺跡出土の搬入礫については明確な位置づけがなされていなかったが、先端に樹皮を巻いたヒョウタン形の異形礫が青田遺跡から出土したことから、非実用的な使用形態の一端が明らかになった〔石丸 2004〕。これを契機に異形礫の出土例は徐々に増加し、村上市アチヤ平遺跡〔長田 2002〕や元屋敷遺跡〔潮田 2002〕などの拠点集落で類例が報じられている。本遺跡から出土した自然礫の使用法は明らかでないが、極小サイズの自然礫５類（図版 69-48 ～ 54）などは実用的な用途を考えにくい資料である。この中には美麗な円礫が多く含まれており、黒曜石などの稀少石材と同様に扱われていた可能性がある。

本遺跡から出土した使途不明遺物には、交易活動に関わる可能性をもった上記のような資料が含まれる。本遺跡は求心的な物流機能をもった拠点集落とはその性格を根本的に異にする。この遺跡に存在する使途不明品の数々は、流通過程において当地に搬入された後、何らかの理由によって放置された交換物とみなすことによって合理的な説明が可能になるのではなかろうか。

本遺跡に認める交易キャンプ的な性格は、次のような点からもうかがうことができる。背後に位置する「高立山」の山並は、越後平野のランドマークにふさわしい景観をもつ（第 42 図）。櫂の出土は内水面交通との関わりを示唆する直接的な資料となる。本遺跡の杭列はそれとの密接な関連性が想定され、舟の繋留施設として機能した可能性もある。土器の胎土組成に基づく前述のような見方が妥当なものであるとすれば、この時期の越後平野周辺における交易活動の実態を考える上で重要な情報を提供することになろう。

第 42 図　阿賀野川河畔から見た越後平野（新潟市北区灰塚付近から撮影）

引用・参考文献

ア　秋元雅彦・倉石広太　2006 「４－３C ②木質遺物」『下宅部遺跡Ⅰ』東京都都市整備局西部住宅建設事務所・東村山市遺跡調査会・東村山市教育委員会

阿部　朝衛　1988 「第五章鳥屋遺跡の発掘調査（遺構外の遺物） 第三節石器と石製品」『豊栄市史　資料編１　考古編』 豊栄市

新井　司郎　1973 『縄文土器の技術』 中央公論美術出版

荒川　隆史　2001 「晩期遺構集成Ⅱ　新潟県」『日本考古学協会 2001 年度盛岡大会研究発表資料集　亀ヶ岡文化－集落とその実体－晩期遺構集成Ⅱ』日本考古学協会 2001 年度盛岡大会実行委員会

荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉・加藤　学ほか　2004 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川　隆史　2009 「新潟県矢津遺跡出土土器の再検討」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 10 号　新潟県立歴史博物館

安藤　正美　1996 「細田遺跡」『見附市内遺跡範囲確認調査報告書』 見附市埋蔵文化財調査報告書　第 11　見附市教育委員会

イ　家田順一郎　1986 『藤平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 下田村教育委員会

石川日出志　1988 「第五章鳥屋遺跡の発掘調査（遺構外の遺物） 第一節土器・第二節鳥屋式土器の構成」『豊栄市史資料編１　考古編』 豊栄市史

石川日出志・増子正三・渡邊裕之・鶴巻康志　1992 『六野瀬遺跡 1990 年調査報告書－立川ブラインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書－』新潟県安田町文化財調査報告 12　安田町教育委員会

石原正敏・菅沼亘　1996 「第二章十日町市の遺跡と遺物　第３節水沢の遺跡と遺物　赤羽根遺跡」『十日町市史　資料編２　考古』 十日町市

石丸　和正　2004 「第Ⅴ章遺物　３石器」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤秀和ほか 1995 『加茂市役所遺跡－旧加茂市役所庁舎解体撤去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 加茂市教育委員会

伊藤　秀和　1996 『川船河遺跡－新潟経営大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 田上町教育委員会

伊藤　秀和　1997 「平成８年遺跡発掘調査と出土遺物について」『民俗資料館だより』第４号　加茂市民俗資料館

猪狩　俊哉　2004 「第Ⅴ章遺物　８植物遺体」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

ウ　潮田　憲幸　2002 「第Ⅴ章遺物　５石器・石製品（36）自然礫」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ　元屋敷遺跡Ⅱ（上段)』 新潟県朝日村教育委員会・新潟県

卜部厚志・高濱信行　2002 「新潟平野・西蒲原地域における縄文時代中期の古地理」『新潟考古』第 13 号　新潟県考古学会

オ　大熊　　孝　1979 「信濃川治水の歴史」『アーバンクボタ』№.17　株式会社クボタ

大島　秀俊　2007 「第Ⅴ章遺物　２石器」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅡ　道下遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 174 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小熊　博史　1994 「Ⅱ考古資料　３遺跡と遺物　布目遺跡」『巻町史　資料編１　考古』 巻町

小熊　博史　2002a「沖積地の遺跡（５）東山丘陵」『新潟考古』第 13 号　新潟県考古学会

小熊　博史　2002b『馬高・三十稲場遺跡－史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ－』 長岡市教育委員会

小野昭・前山精明・小林巌雄・小池裕子・藤田英忠・島村忠淳　1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　巻町

長田　友也　2002 「第Ⅴ章遺構・遺物　６石器Ｂ’自然石」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡上段』 新潟県朝日村教育委員会・新潟県

折井　敦・小林晴生・金内　元ほか　2005 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅠ　昼塚遺跡Ⅰ・江添遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 147 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

折井　敦・大島秀俊・伊比博和ほか　2006 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸ　昼塚遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 167 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

折井　敦・大島秀俊・伊比博和ほか　2007 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅡ　道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 174 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

カ　加藤　学・荒川隆史　1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　和泉Ａ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団

加藤　　学　2009 「第Ⅴ章遺物　２石器・石製品」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅡ　野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 196 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日　真実　2001 「柏崎市鶴巻遺跡出土漆器の編年的位置」『新潟考古学談話会会報』第 23 集　新潟考古学談話会

金山喜昭・前山精明・鈴木正男　1995 「縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第 61 回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会

金子　浩昌　1988 「根立遺跡の獣骨」『根立遺跡調査報告書』 三島町教育委員会

金原美奈子　2009 「第Ⅳ章西郷遺跡の自然科学分析　１西郷遺跡における自然科学分析　Ｆ炭化種実同定」『西郷遺跡・大蔵遺跡－一般国道 49 号線亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ－』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 200 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

川上　貞雄　1982 『平遺跡緊急発掘調査報告書』 新津市教育委員会

川上　貞雄　1989 『大沢谷内遺跡発掘調査報告書』 小須戸町教育委員会

ク　栗島　義明　2007 「浅鉢製作と木製品の管理貯蔵」『環境史と人類』第１冊　明治大学学術フロンティア

コ　小林巌雄ほか 2002 『新潟県地盤図説明書』 社団法人新潟県地質調査行組合

小林　　正　2001 「縄文時代の結歯式竪櫛について－新潟県を中心に－」『新潟考古学談話会会報』第 23 号　新潟考古学談話会

駒形敏郎・鳥居美栄・小熊博史・広井　造　1998 『中道遺跡－農業基盤整備事業に伴う発掘調査－』長岡市教育委員会

サ　斉藤義信・山名正平　1983 「序章　小須戸町の自然」『小須戸町史』 小須戸町

斎藤　道春　1988 「根立遺跡大型植物遺体の処理『根立遺跡調査報告書』 三島町教育委員会

酒井　和男　1990 「原始・古代・中世編　第一章原始一．砂崩遺跡」『亀田の歴史　資料編』 亀田町

酒井　和男　2000 「原始・古代　第二章　考古資料　上田遺跡」『横越町史』資料編　横越町

坂上　有紀　2009 「第Ⅴ章遺物　８植物遺体」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅡ　野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 196 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

佐藤　賢次　1983 「第二章　近世農村の展開　第四節　天ケ沢草水の開発」『小須戸町史』 小須戸町

シ　實川　順一　2001 「第Ⅳ章遺物　３石器」『大蔵遺跡－大蔵遺跡学術調査報告書－』 五泉市文化財報告（６） 五泉市教育委員会

ス　鈴木　郁夫　1989 「第一編　自然」『新津市史　資料編第１巻　原始・古代・中世』 新津市

鈴木加津子　1990 「茨城県滝の上遺跡の縄紋式晩期中葉の土器－茨城県西部の２遺跡から見た南奥大洞 C2 式の変遷－」『利根川』11　利根川同人

鈴木加津子　1991 「安行文化の終焉（２）」『古代』第 91 号　早稲田大学考古学会

鈴木　俊成　1998 「新潟県の縄文時代石器組成－新潟県の縄文時代早期から晩期について－」『新潟考古学談話会会報』第 18 号　新潟考古学談話会

セ　関　雅之・田中耕作・阿部朝衛・石川日出志ほか　1982 『村尻遺跡Ⅰ』 新発田市教育委員会

タ　高橋　達夫　1985 「Ⅳ遺物　２石器・石製品」『藤橋遺跡－史跡整備事業に伴う発掘調査－』長岡市教育委員会

高橋　保・穴沢善功・前島　敏ほか　2008 『一般国道 116 号　出雲崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ　寺前遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 189 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋　保雄　2003 「第Ⅴ章遺物　３石器」『北野遺跡Ⅰ（下層）－磐越自動車道関係発掘調査報告書－』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 119 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗・高橋保雄ほか　2002 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸⅣ　元屋敷遺跡上段Ⅱ（上段）』朝日村文化財報告書第 22 集　新潟県朝日村教育委員会

田中耕作・鶴巻康志　1992 『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査－新潟県新発田市館ノ内遺跡Ｄ地点発掘調査報告書』新発田市埋蔵文化財調査報告第 14　新発田市教育委員会

田中耕作・鈴木暁・渡邊美穂子・伊藤喜代子　2003『二夕子沢Ａ遺跡発掘調査報告書』新発田市埋蔵文化財調査報告第 26　新発田市教育委員会

田中　耕作　2007「第Ⅲ章遺構と遺物　４石器」『狐森Ｂ遺跡発掘調査報告書－県営ほ場整備事業（加治川右岸地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』新発田市埋蔵文化財調査報告書第 34　新発田市教育委員会

田中　　靖　1991「第Ⅳ章遺物　Ｃ石器２）小結ａ信濃川中流域における縄文中期から後期の石鏃の変遷について」『城之腰遺跡－関越自動車道関係発掘調査報告書－』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 29 集　新潟県教育委員会

田辺　早苗　2008『上ノ山遺跡発掘調査報告書－岩石採取事業に伴う発掘調査－』神林村埋蔵文化財報告第 26 新潟県神林村教育委員会

田畑　　弘　1993『保明浦遺跡－新潟県営高生産性大区画ほ場整備事業〔田上郷地区〕埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』田上町埋蔵文化財調査報告書第３集　南蒲原郡田上町教育委員会

田畑　　弘　1994「第一編　原始・古代・中世の田上郷　第一章　原始時代の田上　第二節　縄文時代の田上二 . 田上町の遺跡　学術調査された保明浦遺跡」『田上町史』通史編　田上町

田畑　　弘　1996『保明浦遺跡Ⅱ－埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』田上町文化財調査報告書第８集　南蒲原郡田上町教育委員会

田畑　　弘　2003『保明浦遺跡Ⅲ－新潟県営高生産性大区画事業〔田上郷地区〕埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』田上町文化財調査報告書第 20 集　南蒲原郡田上町教育委員会

田畑　　弘　2004『保明浦遺跡Ⅳ－新潟県営湛水防除事業〔田上郷地区〕埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』田上町文化財調査報告書第 21 集　南蒲原郡田上町教育委員会

ツ　立木宏明・澤野慶子・早田　勉　2004『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

土屋　積・百瀬長秀・広田和穂ほか　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12　榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 37 集　(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

ト　土橋由理子　1998「新潟県における縄文時代の黒曜石利用について」『研究紀要』第２号　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

土橋由理子　2009「第Ⅲ章西郷遺跡　５下層の遺物Ｄ石器」『西郷遺跡・大蔵遺跡－一般国道 49 号線亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ－』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 200 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

富岡　直人　2003「第Ⅴ章自然科学分析　７動物遺存体」『道端遺跡Ⅱ－日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ－』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 127 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

富岡　直人　2004「第二章縄文時代　第二節主な遺跡３幕島遺跡　幕島遺跡出土の動植物遺体」『分水町史　資料編Ⅰ考古・古代・中世』分水町

ナ　長岡市　1992　「第三章縄文時代の遺跡と遺物　晩期　藤橋遺跡」『長岡市史　資料編１　考古』

中島栄一ほか　1976『古屋敷遺跡』田上町文化財調査報告書第２輯　田上町教育委員会

中島栄一・藤塚　明・金子正典　1980「矢津遺跡」『村松町史　資料編第一巻　考古・古代・中世』村松町史編さん委員会

中島　栄一　1981「Ⅲ　発掘調査された遺跡　二、上野原遺跡」『三条市史　資料編第一巻　考古・文化』三条市史編修委員会

中島　栄一　1983「第一編　古代・中世の郷土　第一章　郷土のあけぼの　第三節　町内における遺跡」『小須戸町史』小須戸町史編纂室

中島栄一・荒川貴史・渡邊裕之　2009『新潟県立歴史博物館研究概要』第 10 号　新潟県立歴史博物館

中村孝三郎・神林昭一・小林達雄・深井義春　1965『朝日遺跡調査報告書』越路町教育委員会

中村孝三郎・中島栄一　1975『芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書』下田村教育委員会

中村孝三郎ほか　1988『根立遺跡（第三次）発掘調査報告書』三島町教育委員会調査報告書第三冊　三島町教育委員会

中村孝三郎ほか　1988『舟岡遺跡発掘調査報告書』三島町教育委員会調査報告書第二冊　三島町教育委員会

ニ　新潟県　1975　『地形分類図　新津』

新潟県　1984　『地形分類図　加茂』

新美　倫子　2002　「縄文時代遺跡出土クリの再検討－大きさの問題を中心に－」『動物考古学』第 19 号　動物考古学研究会

ノ　能代　修一　1988　「４加工木にみる古代の木材利用　５運搬具　２櫂」『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣

ハ　林　　謙作　1976　「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会

林　　謙作　1994　「連載講座 縄紋時代史 20. 縄文人の領域（７）」『季刊考古学』第 46 号　雄山閣

パリノ･サーヴェイ株式会社　2005　「自然科学分析」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＩ　昼塚遺跡Ⅰ・江添遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 147 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2007　「自然科学分析」『道下遺跡』『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅡ　道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 174 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

ヒ　樋泉　岳二　2009　「第Ⅵ章自然科学分析　５動物・昆虫遺体　Ａ動物遺体」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅡ　野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 196 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

ホ　本間信昭・戸根与八郎・高橋陽子　1975　『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』埋蔵文化財緊急調査報告書第４　新潟県教育委員会

マ　前山　精明　1990　『大沢遺跡－縄文時代中期前葉を主とする集落跡の調査概要－』 巻町教育委員会

前山精明・藤田英忠　1990　「巻町大沢遺跡における縄文時代中期前葉集落の植物利用」『巻町史研究』Ⅵ　巻町

前山　精明　1994　「Ⅱ各時代の概観　２縄文時代・３遺跡と遺物　新谷遺跡・上ン原遺跡・御井戸遺跡」『巻町史資料編１　考古』 巻町

前山　精明　1996a「新潟県西蒲原郡巻町御井戸遺跡」『日本考古学年報』47（1994 年度版） 日本考古学協会

前山　精明　1996b「縄文時代晩期後葉集落の経済基盤」『遺跡と考古学の保護』 甘粕健先生退官記念論文集刊行会

前山　精明　2000　「第４章吉田町周辺の遺跡　第２節旧石器時代～古墳時代遺跡各説　蒲田遺跡」『吉田町史　資料編１　考古・古代・中世』 吉田町

前山　精明　2002　「青田遺跡の石器群」『川辺の縄文集落』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟潟県教育委員会

前山精明・相田泰臣　2002　『南赤坂遺跡－縄文時代前・中期と古墳時代前期を主とする集落跡の調査』 巻町教育委員会

前山精明・相田泰臣　2003　『御井戸遺跡Ⅰ－ 2002 年度確認調査の概要－』 巻町教育委員会

前山　精明　2005　「水辺の営み」『地域と文化の考古学Ⅰ』 六一書房

前山　精明　2007　「石器組成と生業」『縄文時代の考古学５　なりわい』 雄山閣

前山　精明　2009　「大沢谷内遺跡」『平成 20 年度　新潟市遺跡発掘調査報告会資料』 新潟市埋蔵文化財センター

前山　精明　2010　「大沢谷内遺跡」『平成 21 年度　新潟市遺跡発掘調査報告会資料』 新潟市埋蔵文化財センター

ミ　水澤幸一・三ツ井朋子・高橋　哲　2003　『二軒茶屋遺跡－主要地方道中条紫雲寺線改修工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ－』中条町埋蔵文化財報告書第 27 集　中条町教育委員会

ヤ　山崎　天・草間　裕・田村典雄・土　任隆　2004　『能代川関係発掘調査報告書Ⅲ　新田遺跡』 五泉市教育委員会・国際航業株式会社文化財事業部

山崎　天･鈴木　進･湯原勝美･土生朗治　2004　『能代川関係発掘調査報告書Ⅴ　筧下遺跡』 五泉市教育委員会･(有)山武考古学研究所

山崎　天・草間　裕・田村大器・金内　元・真壁鈴子　2004　『能代川関係発掘調査報告書Ⅶ　巳ノ明遺跡』 五泉市教育委員会・㈱野上建設興業

山内　清男　1979　『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

ヨ　吉川　純子　2004　「第Ⅱ章植物学的調査　２青田遺跡より産出した大型植物化石からみた古環境と植物利用」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

吉川　純子　2009　「縄文時代のクリ利用解明のためのクリ果実調査」『縄文時代のクリ利用に関する考古学・民俗学・年輪年代学的研究』平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金　基礎研究（Ｂ）研究成果報告書

ワ　渡邊　朋和　1992　「新潟県」『第５回縄文セミナー縄文晩期の諸問題』　縄文セミナーの会
渡邊朋和・小田由美子・上沼　茂　1997　『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－居村遺跡Ｅ・Ａ・Ｃ地点、大入遺跡Ａ地点』　新津市教育委員会
渡邊朋和・荒川隆史　1999　「第６項　晩期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
渡邊朋和・立木宏明・山田貴子・阿部泰之　2001　『八幡山遺跡発掘調査報告書』　新津市教育委員会
渡邊　裕之　1998　「新潟県における縄文晩期後半の粗製土器－鳥屋式土器の理解にむけて－」『新潟県考古学談話会会報』第 18 号　新潟考古学談話会
渡邊　裕之　2002　「朝日式土器」の再検討－延命寺ヶ原遺跡出土土器の検討をとおして－」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第３号　新潟県立歴史博物館
渡邊　裕之　2004　「新潟県における縄文晩期中葉の様相」『第 17 回縄文セミナー晩期中葉の再検討』　縄文セミナーの会
渡邊　裕之　2009　「新潟県北東部における縄文晩期前葉の土器群－野地遺跡出土土器の検討を中心に－」『新潟県の考古学Ⅱ』　新潟県考古学会
渡邊裕之・坂上有紀・加藤　学　2009　『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅡ　野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 196 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊　　誠　1975　『縄文時代の植物食』　雄山閣
渡邊ますみ　1998　「考古資料第二章第二節第二項緒立遺跡Ｂ地区」『黒崎町史資料編１　原始・古代・中世』黒崎町史編さん原始・古代・中世部会
藁科　哲男　2002　「自然科学編Ⅳ　馬高・三十稲場遺跡及び岩野原遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析」『馬高・三十稲場遺跡－史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ－』長岡市教育委員会

第Ⅵ章　引用・参考文献

ア　安藤　一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42,73-88.
新井　房夫　1962　「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10,1-79.
イ　五十嵐俊雄・斉藤紀行・中根秀二　2001　「Fe-Rb 法による黒曜石の産地推定」『PALYNO』№ 4,16-25.
石川　茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.
伊東　隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31　京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東　隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32　京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東　隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33　京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東　隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34　京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東　隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35　京都大学木質科学研究所 ,47-216.
伊藤良永・堀内誠示　1991　「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6,23-45.
オ　大沢眞澄（研究者代表）　1991　「黒曜石の化学組成 . 遺跡出土黒曜石石器の原産地推定の基礎として」『平成２年度科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書』69p.
小田　静夫　2001　「黒曜石石器の研究動向」『PALYNO』№ 4,3-15.
カ　柏崎市教育委員会　1985　「樹種鑑定結果について」『刈羽大平・小丸山　東京電力新潟原子力発電所建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告』　柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第 5,166-177.
木村勝彦・斉藤智治・中村俊夫　2004　「青田遺跡における柱根の年輪年代学的解析による建物群の年代関係の検討」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡』　新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 133 集 関連諸学科・写真図版編：165-176.
コ　小杉　正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27,1-20.
小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田啓五　2006　『小林弘珪藻図鑑』第１巻　㈱内田老鶴圃 ,531p.
近藤　錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48,46-64.
シ　島地　謙・伊東隆夫　1982　『図説木材組織』　地球社 ,176p.
ス　鈴木三男・小川とみ・能城修一　2004　「青田遺跡出土木材の樹種」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡　関連諸科学・写真図版編』　新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 ,53-70.
タ　谷口　康浩　2001　「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』77 巻 ,17-21.

ナ　中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 ,642p.

ハ　原口和夫・三友清史・小林　弘　1998 「埼玉の藻類　珪藻類」『埼玉県植物誌』 埼玉県教育委員会 ,527-600.

林　　昭三　1991 「日本産木材」『顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所 .

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003 「自然科学分析」『御井戸遺跡Ⅰ－ 2002 年度確認調査の概要』 巻町教育委員会 ,46-54.

ホ　北陸地方土木地質図編纂委員会　1990 『北陸地方土木地質図解説書』 国土開発技術研究センター , 799.

ヤ　柳沢　幸夫　2000 「Ⅱ -1-3-2-（5）計数・同定」『化石の研究法－採集から最新の解析法まで－』 化石研究会 , 共立出版株式会社 ,49-50.

ヨ　吉越正勝・荒川勝利・堀川秀夫・小林巌雄・神蔵勝明・斉藤道春・坂井陽一・渡邊　勇・米山団研グループ・米山正次・高田平野団研グループ・渡邊秀男・稲葉　明・渡邊剛忠　1988 「第四系－日本海沿岸地域」『日本の地質 4　中部地方Ⅰ』共立出版 ,123-142.

ワ　渡邊仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子　2005 『淡水珪藻生態図鑑』 内田老鶴圃 ,666p.

B　Baillie, M.G.L. and Pilcher J.R.　1973　A simple cross-dating program for tree-ring research. Tree-Ring Bull. 33 :7-14.

Baillie , M . G . L .　1982　Tree - Ring dating and archaeology .　The University of Chicago Press, 274pp.

H　Haraguchi, A., Shibasaki, M., Noda, M., Tomizawa, H. and Nishio F.　1999　Climatic factors influencing the tree-ring growth of Alnus japonica in Kiritapp mire, Northern Japan. Wetlands 19（1）: 100-105.

K　Kimura, K.　1995　A simple and visual cross-dating program for dendrochronology. Tree Rings - from the past to the future- Proceedings of the International Workshop on Asian and Pacific Dendrochronology, 255-257.

Krammer, K.　1992　PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECADIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1986　Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1988　Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1991a　Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.　1991b　Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.

L　Lowe, R.L　1974　Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005.Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

R　Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）　2006　針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.　1990　The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

W　Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998　広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.　2000　Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p.

V　Vos, P.C. & H. de Wolf　1993　Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.Hydrobiologica,269/270,285-296.

別表１　遺構計測表

凡　例

(1)　観察表の記載順は遺構の種別ごと、番号順であり、あわせて分割図版№・個別図版№・写真図版№を明記し、索引としての役割をもたせてある。
(2)　遺構の分類及び項目・切り合い関係等は、本文第Ⅳ章の記述に対応する。
(3)　規模の（ ）内数値は残存部からの推定値である。
(4)　重複関係の表示は、＞…切る・＜…切られる・＝…不明。

縄文時代の遺構

土坑（SK）

分割図版№	個別図版№	写真図版№	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	規模(m) 上端 短軸	規模(m) 下端 長軸	規模(m) 下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版№	備考
10	30		SK	1	2K-2E15	縄文晩期	Ⅵa2	N-12°-E	—	(0.31)	(0.21)	(0.20)	0.09	2.13	円形	半円状	1	単層		○	53	P109
10	30		SK	2	2K-2E14	縄文晩期	Ⅵa2	—	0.58	—	(0.48)	—	0.08	2.4	楕円形	弧状	1	単層		○	54	P112
10	30		SK	3	2K-2E15	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.08	2.41	—	弧状	1	単層	＞SK4	—		
10	30	19･20	SK	4	2K-2E15	縄文晩期	Ⅵa2	N-73°-W	0.85	0.53	0.73	0.43	0.06	2.38	楕円形	弧状	2	水平	＜SK3	○	53	P110･111
8	26	12	SK	13	1K-10G2	縄文晩期	Ⅵa2	N-45°-E	(0.52)	0.46	0.34	0.23	0.11	2.12	円形	弧状	1	単層	＝SK307	—		
8	26	12	SK	14	1K-10G2･7	縄文晩期	Ⅵa2	—	0.87	0.85	0.68	0.64	0.15	2.08	円形	弧状	1	単層	＞SK270･303･304	○	49･69	S40　P70
8	26		SK	15	1K-10G7･12	縄文晩期	Ⅵa2	N-5°-W	0.76	0.68	0.84	0.72	0.35	1.82	不整楕円形	袋状	2	—	＜SK310	○	47	P32
8	25	13	SK	16	1K-10G2	縄文晩期	Ⅵb'	—	—	(0.66)	(0.49)	—	0.13	2.03	円･楕円形	弧状	1	単層		—		
8	27		SK	18	1K-10G8･9･13･14	縄文晩期	Ⅵa2	N-90°	1.10	0.90	0.85	0.62	0.24	2.08	楕円形	台形状	3	水平	＞SK106･162	○	68	S32
8	27		SK	19	1K-10G8･9	縄文晩期	Ⅵa2	N-61°-W	0.96	0.86	0.68	0.54	0.30	2.00	円形	半円状	3	水平	＞SK106･156･277	○	49･69	S54　P74
8	25		SK	20	1K-10G3･4	縄文晩期	Ⅵb'	—	—	—	—	—	0.15	2.11	—	弧状	1	単層	＝SK22	—		
8	25		SK	22	1K-10G3	縄文晩期	Ⅵb'	—	—	—	—	—	0.15	2.10	—	弧状	1	単層	＝SK20	—		
8	21		SK	23	1K-10F11	縄文晩期	Ⅵa2	N-9°-W	0.66	0.62	0.60	0.42	0.12	2.19	楕円形	弧状	2	水平		○		
8	21		SK	26	1K-10F12	縄文晩期	Ⅵa2	N-12°-W	0.68	0.56	0.42	0.32	0.12	2.14	楕円形	弧状	2	水平	＞SK215･253	—		
8	26		SK	27	1K-10G4	縄文晩期	Ⅵb'	N-90°	0.54	0.46	0.35	0.28	0.09	2.13	楕円形	弧状	1	単層		—		
8	26		SK	28	1K-10G9	縄文晩期	Ⅵb'	N-89°-W	0.53	0.42	0.43	0.26	0.14	2.13	楕円形	弧状	1	単層		○		
8	27	14	SK	29	1K-10G9･14	縄文晩期	Ⅵa2	N-75°-E	0.94	0.72	0.65	0.48	0.34	2.00	楕円形	台形状	2	水平	＞SK301,＜SK311	○	50	P79
8	27		SK	30	1K-10G7･8･12･13	縄文晩期	Ⅵa2	N-18°-W	—	(0.58)	0.18	0.16	0.30	1.97	楕円形	台形状	2	水平	＜SK152･310,＝SK309	○	49	P76
8	26		SK	31	1K-10G2･3	縄文晩期	Ⅵb'	N-90°	0.82	0.70	0.63	0.54	0.16	2.12	隅丸方形	弧状	2	水平	＞SK269･270	○		
8	20		SK	32	1K-10F2	縄文晩期	Ⅵa2	N-79°-W	0.87	0.64	0.67	0.53	0.20	1.95	楕円形	弧状	2	水平	＜SK51,＞SK39	○		
8	20		SK	33	1K-10F2	縄文晩期	Ⅵa2	N-42°-E	—	(0.42)	—	(0.25)	0.18	2.00	楕円形	半円状	2	レンズ状	＞SK34･39	—		
8	20		SK	34	1K-10F2･3	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.19	1.98	—	弧状	2	レンズ状	＜SK33	—		
8	18		SK	36	1K-9F21･22,10F1･2	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.14	2.07	—	弧状	1	単層		—		
8	18		SK	37	1K-9F22,10F2	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.54)	—	(0.35)	0.18	2.07	円形	半円状	1	単層		—		
8	18		SK	38	1K-9F23,10F3	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.60)	—	(0.36)	0.16	2.06	円形	弧状	2	水平	＞SK40･143	○		
8	20		SK	39	1K-10F2	縄文晩期	Ⅵa2	N-86°-W	0.60	0.46	0.40	0.32	0.16	1.98	楕円形	台形状	2	水平	＜SK32･33,Pit195	—		
8	18		SK	40	1K-9F23,10F3	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.15	2.06	—	弧状	2	レンズ状	＜SK38	—		
8	21		SK	43	1K-10F11	縄文晩期	Ⅵa2	N-76°-E	0.60	0.54	0.40	0.36	0.12	2.17	円形	弧状	1	単層		—		
8	20		SK	44	1K-10F6	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.81)	—	(0.54)	0.12	2.12	—	弧状	2	レンズ状	＞SK46	—		
8	21	6	SK	45	1K-10F6･7･11･12	縄文晩期	Ⅵa2	N-55°-E	0.94	0.75	0.72	0.59	0.17	2.09	楕円形	弧状	1	単層	＞SK54･253	○	45	P8
8	20		SK	46	1K-10F6	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.15	2.13	—	弧状	2	レンズ状	＜SK44,＞SK52,＝SK47	○	45	P3
8	20		SK	47	1K-10F1･6	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	0.64	—	(0.50)	0.16	2.07	隅丸方形	台形状	2	水平	＜SK214,＞SK48･52,＝SK46	—		
8	20	6	SK	48	1K-10F1･6	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.68)	0.38	(0.37)	0.18	2.07	不整円形	台形状	2	水平	＜SK47	○		
8	19		SK	49	1K-10F1	縄文晩期	Ⅵa2	N-7°-W	0.74	0.54	0.52	0.31	0.16	2.08	楕円形	台形状	2	水平	＞SK59	—		
8	21	6	SK	50	1K-10F7	縄文晩期	Ⅵa2	N-78°-E	0.95	0.72	0.79	0.53	0.16	2.10	楕円形	弧状	2	レンズ状	＜SK209	○	45	P6
8	20		SK	51	1K-10F2	縄文晩期	Ⅵa2	N-22°-W	0.60	0.39	0.46	0.24	0.16	1.98	長楕円形	台形状	2	水平	＞SK32	—		
8	20	6	SK	52	1K-10F6	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.88)	—	(0.63)	0.18	2.12	不整円形	弧状	3	水平	＜SK46･47･53	○	45	P3～5
8	20	6	SK	53	1K-10F6	縄文晩期	Ⅵa2	N-75°-W	0.62	(0.48)	0.41	0.20	0.19	2.07	楕円形	半円状	2	レンズ状	＞SK52	—		
8	20		SK	54	1K-10F6	縄文晩期	Ⅵa2	N-27°-W	0.76	0.66	0.41	0.38	0.19	2.13	楕円形	台形状	1	単層	＜SK45	—		
8	21		SK	55	1K-10F7･12	縄文晩期	Ⅵa2	N-65°-E	1.38	1.35	1.13	1.05	0.13	2.10	円形	弧状	2	水平	＞SK83･215･235･253,＜SK73	○	45	P11･12
8	21		SK	56	1K-10F7	縄文晩期	Ⅵa2	N-34°-W	0.75	0.58	0.54	0.38	0.10	2.11	隅丸方形	弧状	2	水平		—		

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
8	22	7·8	SK	57	1K-10F3·8	縄文晩期	Ⅵa2	N-54°-W	0.54	0.50	0.43	0.36	0.23	2.04	円形	半円状	2	水平	＞SK61·234	○	46	P22～24
8	20		SK	58	1K-10F2	縄文晩期	Ⅵa2	N-72°-E	0.73	(0.48)	0.60	(0.34)	0.14	2.14	楕円形	弧状	1	単層	＜SK184,＞SK59	—		
8	19		SK	59	1K-10F1·2	縄文晩期	Ⅵa2	N-88°-W	(0.49)	0.41	(0.26)	0.25	0.17	2.06	不整円形	半円状	2	水平	＜SK49·58	○		
8	20		SK	60	1K-10F3	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	(0.52)	0.20	1.98	—	台形状	2	水平		—		
8·22	5	7·8	SK	61	1K-10F2·3·8	縄文晩期	Ⅵa2	N-69°-W	1.16	0.96	0.92	0.80	0.22	2.04	円形	台形状	3	水平	＜SK57,＞SK234	○	46	P16～19
8	23	10	SK	62	1K-10F8·13	縄文晩期	Ⅵa2	N-9°-E	0.90	0.72	0.76	0.52	0.28	2.06	不整円形	台形状	3	水平	＜SK76·167,＞SK63·180	○	47	P43
8	22	8	SK	63	1K-10F8	縄文晩期	Ⅵa2	N-79°-W	0.74	(0.54)	0.6	0.27	0.20	2.08	楕円形	台形状	2	水平	＜SK62·76,＞SK64·244	○	47	P35
8	22	8	SK	64	1K-10F8	縄文晩期	Ⅵa2	N-63°-W	(0.83)	0.55	0.65	0.42	0.20	2.08	楕円形	半円状	3	水平	＜SK63·65·167,＞SK244	○	46·64	P28,S5
8	22	8	SK	65	1K-10F3·8	縄文晩期	Ⅵa2	N-34°-E	1.06	1.04	0.92	0.88	0.21	2.07	円形	台形状	2	水平	＞SK64·237	○	46	P22·25～29
8	22		SK	66	1K-10F3	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.44)	—	(0.23)	0.18	2.07	円·楕円形	半円状	2	水平	＝SK238·239	○	47	P33
8	22		SK	67	1K-10F9	縄文晩期	Ⅵa2	N-16°-W	0.37	0.33	0.26	0.24	0.18	2.07	円形	半円状	1	単層	＞SK179	—		
8	22		SK	69	1K-10F4·9	縄文晩期	Ⅵa2	N-62°-W	(0.79)	0.62	—	0.42	0.17	2.04	楕円形	台形状	2	水平	＜SK89,＞SK165	—		
8	20	10	SK	70	1K-10F5	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.19	2.01	—	半円状	2	水平		—		
8	23	9	SK	71	1K-10F5	縄文晩期	Ⅵa2	N-74°-E	0.71	0.58	0.57	0.46	0.21	1.98	楕円形	半円状	2	水平	＞SK242	○	47	P39·40
8	23		SK	72	1K-10F4	縄文晩期	Ⅵa2	—	0.60	0.60	0.46	—	0.18	2.01	円形	半円状	2	水平		○		
8	21	7	SK	73	1K-10F12	縄文晩期	Ⅵa2	N-80°-E	1.02	0.80	0.82	0.62	0.12	2.12	楕円形	弧状	2	水平	＞SK55·198·215	○	45	P13
8	18		SK	74	1K-9F19·20	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.60)	—	(0.44)	0.16	2.02	円形	弧状	2	レンズ状		—		
8	18		SK	75	1K-9F14	縄文晩期	Ⅵa2	N-30°-W	0.56	0.54	0.34	0.28	0.12	2.02	不整円形	弧状	1	単層		○		
8	23	8·10	SK	76	1K-10F8·13	縄文晩期	Ⅵa2	N-14°-E	1.13	0.95	0.96	0.69	0.11	2.11	楕円形	弧状	2	水平	＞SK62·63	○	47	P43
8	20		SK	82	1K-10F1·2·6·7	縄文晩期	Ⅵa2	N-30°-E	0.46	—	0.26	(0.20)	0.19	2.04	楕円形	半円状	2	レンズ状		—		
8	21		SK	83	1K-10F6·7	縄文晩期	Ⅵa2	N-49°-W	(0.86)	0.68	(0.62)	0.40	0.18	2.08	楕円形	弧状	1	単層	＜SK55,＞SK235	○	45	P7
8	24		SK	84	1K-10F13·14	縄文晩期	Ⅵa2	N-36°-E	0.98	0.80	0.80	0.65	0.17	2.07	楕円形	弧状	3	水平	＞SK180·181	—		
8	24		SK	85	1K-10F12·13	縄文晩期	Ⅵa2	N-35°-E	1.10	0.72	0.95	0.60	0.08	2.15	楕円形	弧状	1	単層	＜SK198,＞SK200·216	○	48	P45
8	23		SK	86	1K-10F14	縄文晩期	Ⅵa2	N-85°-E	0.84	0.73	0.72	0.58	0.14	2.08	隅丸方形	弧状	2	水平	＜SK149,＞SK203·291	○		
8	24		SK	87	1K-10F14	縄文晩期	Ⅵa2	N-55°-W	0.75	0.66	0.56	0.5	0.22	2.07	不整円形	弧状	2	水平	＞SK88·128	○		
8	24		SK	88	1K-10F14	縄文晩期	Ⅵa2	N-38°-E	1.05	0.93	0.78	0.64	0.22	2.00	不整円形	階段状	3	水平	＜SK87,＞SK181	○	48	P48
8	22		SK	89	1K-10F4·9	縄文晩期	Ⅵa2	N-19°-W	0.78	0.50	0.73	0.38	0.18	2.02	長楕円形	台形状	2	水平	＞SK69	○	47	P36
8	23	9	SK	90	1K-10F5	縄文晩期	Ⅵa2	N-23°-E	0.54	—	0.46	(0.34)	0.15	1.99	円·楕円形	半円状	2	水平	＝SK126	○	47	P39
8	18		SK	91	1K-9F19	縄文晩期	Ⅵa2	N-84°-W	0.98	0.74	0.80	0.54	0.16	2.07	楕円形	弧状	1	単層	＞SK246	—		
8	18		SK	92	1K-9F18·19·23·24	縄文晩期	Ⅵa2	N-35°-W	0.58	0.50	0.39	0.36	0.12	2.08	円形	弧状	2	水平	＞SK246,＝SK93	—		
8	18		SK	93	1K-9F18·23	縄文晩期	Ⅵa2	N-52°-E	0.80	0.54	0.64	0.36	0.14	2.06	楕円形	弧状	2	レンズ状	＜SK115,＝SK92	○		
8	24		SK	95	1K-10F13	縄文晩期	Ⅵa2	N-71°-W	0.41	(0.21)	0.24	(0.14)	0.09	2.13	楕円形	弧状	1	単層	＞SK200·222	○	48	P46
8	25		SK	98	1K-9G21	縄文晩期	Ⅵa2·Ⅵb'	—	—	(0.50)	—	(0.36)	0.16	2.02	円·楕円形	半円状	1	単層	＞SK99	○		
8	25		SK	99	1K-9G21	縄文晩期	Ⅵb'	N-50°-E	(0.52)	(0.44)	(0.44)	0.32	0.21	1.97	円形	台形状	1	単層	＜SK98·100	○	48	P54
8	25		SK	100	1K-9G21,10G1	縄文晩期	Ⅵb'	—	(0.52)	(0.52)	—	0.42	0.12	2.08	円形	弧状	1	単層	＞SK99,＜SK101	○		
8	25		SK	101	1K-9G21,10G1	縄文晩期	Ⅵb'	N-34°-W	(0.66)	(0.66)	—	(0.58)	0.10	2.10	円形	弧状	1	単層	＞SK100	—		
8	25	11	SK	102	1K-9G22,10G2	縄文晩期	Ⅵb'	N-8°-E	—	0.62	—	0.50	0.10	2.12	楕円形	弧状	1	単層		○	48	P56～59
8	25	12	SK	103	1K-9G22,10G2	縄文晩期	Ⅵb'	N-65°-W	0.60	(0.48)	0.46	0.41	0.09	2.13	不整円形	弧状	1	単層		○	49	P60·61
8	25		SK	104	1K-9G22	縄文晩期	Ⅵb'	—	—	0.36	—	0.26	0.08	2.13	楕円形	弧状	1	単層		—		
8	25		SK	105	1K-9G21·22	縄文晩期	Ⅵb'	—	(0.62)	—	(0.38)	—	0.17	2.03	楕円形	弧状	1	単層		—		
8	27		SK	106	1K-10G8·9·13·14	縄文晩期	Ⅵa2	—	(1.03)	(0.97)	0.74	0.75	0.30	2.02	不整円形	台形状	3	水平	＜SK18·19	○	49	P75
8	25		SK	107	1K-9G23·24,10G3·4	縄文晩期	Ⅵb'	—	(0.62)	(0.62)	—	(0.35)	0.12	2.12	円形	台形状	1	単層		—		
8	25		SK	110	1K-9G17·22	縄文晩期	Ⅵb'	—	—	(0.44)	—	(0.22)	0.14	2.08	円·楕円形	半円状	1	単層		—		
8	18		SK	113	1K-9F13	縄文晩期	Ⅵa2	N-80°-W	—	(0.40)	—	(0.25)	0.20	1.95	円形	半円状	2	水平		—		
8	18		SK	114	1K-9F19	縄文晩期	Ⅵa2	N-84°-W	1.06	0.92	0.86	0.66	0.16	2.13	楕円形	弧状	1	単層		—		
8	18		SK	115	1K-9F18·23	縄文晩期	Ⅵa2	N-50°-W	0.47	0.46	0.28	0.26	0.16	2.04	円形	半円状	2	水平	＞SK93	—		
8	18		SK	116	1K-9F17·18·22·23	縄文晩期	Ⅵa2	N-50°-E	—	(0.82)	—	(0.44)	0.20	2.02	円形	弧状	2	レンズ状	＞SK137	○		
8	18		SK	117	1K-9F22	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	(0.41)	—	(0.18)	0.20	2.02	ー	半円状	2	水平		—		
8	25	12	SK	118	1K-9G23	縄文晩期	Ⅵb'	—	(0.45)	(0.45)	(0.32)	(0.26)	0.09	2.12	円形	弧状	1	単層		○		P62～65
8	18		SK	119	1K-9F22	縄文晩期	Ⅵa2	—	—	—	—	—	0.16	2.05	楕円形	弧状	2	水平	＞SK120	—		
8	18		SK	120	1K-9F22	縄文晩期	Ⅵa2	N-30°-E	0.55	0.38	0.38	0.25	0.19	2.04	楕円形	半円状	2	レンズ状	＜SK119	—		

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
8	25	12	SK	121	1K-10G4	縄文晩期	VIb'	—	(0.80)	(0.80)	—	—	0.08	2.15	円形	弧状	1	単層	＜SK278	○	49	P66･67
8	18		SK	122	1K-9F22･23	縄文晩期	VIa2	N-62°-E	0.62	0.56	0.37	0.36	0.17	2.04	円形	台形状	2	水平	＞SK139･143･146	—		
8	23	10	SK	126	1K-10F5	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.66)	—	(0.42)	0.23	2.01	—	弧状	1	単層	＝SK90	○	47	P41
8	20		SK	127	1K-10F5	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.53)	—	(0.12)	0.21	1.96	—	半円状	1	単層		—		
8	24		SK	128	1K-10F14	縄文晩期	VIa2	N-19°-W	0.77	0.56	0.6	0.35	0.13	2.14	楕円形	弧状	1	単層	＜SK87,＞SK201	○	48	P49･50
8	21	7	SK	129	1K-10F11･12･16	縄文晩期	VIa2･3	N-10°-W	0.83	0.60	0.70	0.43	0.13	2.17	楕円形	弧状	2	レンズ状	＞SK199	○	45･46	P14･15
8	19		SK	130	1K-9F24	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.37)	—	(0.20)	0.11	2.03	円形	半円状	1	単層	＝SK133	—		
8	19		SK	131	1K-9F24	縄文晩期	VIa2	N-22°-E	0.94	0.86	0.82	0.72	0.10	2.06	楕円形	弧状	1	単層	＜SK132･141･219	○		
8	19		SK	132	1K-9F24	縄文晩期	VIa2	N-27°-W	0.57	0.44	0.46	0.30	0.13	2.02	楕円形	弧状	2	水平	＞SK131	—		
8	19		SK	133	1K-9F24･25	縄文晩期	VIa2	N-6°-E	(0.80)	0.70	—	0.54	0.13	2.03	楕円形	弧状	1	単層	＝SK130	○	45	P1
8	19		SK	134	1K-9F25	縄文晩期	VIa2	N-5°-E	1.18	0.92	0.92	0.72	0.16	1.98	楕円形	台形状	1	単層	＞SK223	—		
8	19		SK	135	1K-9F24･10F4	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.13	2.04	—	弧状	1	単層	＞SK136,＜SK142	—		
8	19		SK	136	1K-9F24･10F4	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.22)	0.34	(0.27)	0.16	2.04	円形	弧状	2	水平	＜SK135	—		
8	18		SK	137	1K-9F23	縄文晩期	VIa2	N-22°-W	0.57	0.57	(0.37)	0.32	0.20	2.08	円形	弧状	1	単層	＜SK116	—		
8	19		SK	138	1K-9F23	縄文晩期	VIa2	N-64°-W	0.80	0.58	0.58	0.40	0.19	2.04	楕円形	半円状	2	水平	＞SK139･140	—		
8	19		SK	139	1K-9F23	縄文晩期	VIa2	N-46°-W	0.80	0.60	0.58	0.50	0.16	2.06	楕円形	弧状	2	水平	＜SK122･138	—		
8	19		SK	140	1K-9F23	縄文晩期	VIa2	N-30°-E	0.72	0.64	(0.48)	0.42	0.10	2.08	不整円形	弧状	2	レンズ状	＜SK138･219	—		
8	19		SK	141	1K-9F24	縄文晩期	VIa2	N-73°-W	0.72	0.65	0.50	0.45	0.16	1.99	不整円形	弧状	3	水平	＞SK131･142	○		
8	19		SK	142	1K-9F24･10F4	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	(0.37)	0.15	2.02	—	台形状	2	水平	＞SK135,＜SK141	—		
8	18		SK	143	1K-9F23,10F3	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.15	2.07	楕円形	半円状	1	単層	＜SK38･122	—		
8	18		SK	146	1K-9F22･23,10F2･3	縄文晩期	VIa2	—	—	0.60	—	—	0.14	2.08	円形	台形状	2	水平	＜SK122	—		
8	18		SK	147	1K-9F22,10F2	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.51)	—	(0.32)	0.17	2.06	円形	半円状	2	水平		—		
8	23	8	SK	149	1K-10F9･14	縄文晩期	VIa2	N-84°-W	0.62	0.40	0.50	0.28	0.21	0.28	長楕円形	台形状	2	水平	＞SK86	○		
8	22	8	SK	150	1K-10F9	縄文晩期	VIa2	N-42°-E	1.12	0.94	0.98	0.88	0.22	2.04	不整円形	袋状	3	水平	＞SK165	○	46･47	P29～32
8	26	13	SK	151	1K-10G3･4	縄文晩期	VIa2	N-62°-E	1.13	1.00	0.94	0.88	0.16	2.10	楕円形	弧状	2	水平	＞SK276	○	46	P19～21
8	27	13	SK	152	1K-10G7･8	縄文晩期	VIa2	N-39°-E	1.16	1.12	1.00	0.95	0.32	1.98	円形	台形状	6	—	＞SK30･156･309･310	○	49	P73～76
8	27	14	SK	153	1K-10G9	縄文晩期	VIa2	N-18°-E	0.46	(0.42)	0.32	(0.32)	0.09	2.24	円形	弧状	1	単層	＞SK311,＝SK312	—		
8	20	6	SK	154	1K-10F3	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	(0.55)	0.22	1.97	—	弧状	2	水平	＝SK157	—		
8	26		SK	155	1K-10G2	縄文晩期	VIa2	N-38°-E	0.62	0.48	0.45	0.29	0.12	2.11	楕円形	弧状	1	単層		○	49	P68
8	27		SK	156	1K-10G8	縄文晩期	VIa2	N-46°-E	0.86	0.80	0.62	0.58	0.34	1.96	不整円形	台形状	2	水平	＜SK19･152	○	50	P77･78
8	20	6	SK	157	1K-10F3･4	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.18	2.00	—	台形状	2	レンズ状	=SK154	○	45	P2
8	27		SK	161	1K-10G13	縄文晩期	VIa2	N-71°-E	0.96	0.82	0.78	0.62	0.25	2.02	楕円形	台形状	2	水平		○	49	P74
8	27		SK	162	1K-10G8･13	縄文晩期	VIa2	N-16°-W	(0.92)	(0.77)	(0.63)	(0.54)	0.26	2.04	楕円形	台形状	2	水平	＜SK18	○	49	P74
8	23		SK	164	1K-10F4･5･9･10	縄文晩期	VIa2	N-24°-W	0.57	0.40	—	0.10	0.22	1.97	楕円形	台形状	2	レンズ状	＞SK207	○	47	P39
8	22		SK	165	1K-10F9	縄文晩期	VIa2	N-20°-W	0.80	0.58	0.64	0.44	0.20	2.02	楕円形	半円状	2	水平	＜SK69･150,＞SK166	○		
8	22		SK	166	1K-10F9	縄文晩期	VIa2	—	(0.68)	—	(0.55)	—	0.14	2.08	—	弧状	1	単層	＜SK165	—		
8	22	9	SK	167	1K-10F8	縄文晩期	VIa2	N-15°-W	0.32	0.30	0.26	0.24	0.23	2.00	楕円形	半円状	2	水平	＞SK62･64･179	○	46	P28
9	29	17	SK	170	1K-10H5･10	縄文晩期	VIa2	N-90°	0.44	0.40	0.30	0.19	0.24	1.94	円形	台形状	3	斜位		○	52	P96
9	29		SK	171	1K-10H5,10I1	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	(0.33)	0.23	1.97	—	半円状	5	レンズ状		—		
8	24		SK	175	1K-10F17･18･22	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.48)	—	(0.32)	0.17	2.16	円･楕円形	半円状	1	単層		—		
8	28	16	SK	176	1K-10H6･7	縄文晩期	VIa2	N-43°-E	0.66	0.53	(0.32)	0.26	0.11	2.10	楕円形	弧状	1	単層		○	51	P90～92
9	28		SK	177	1K-10H8	縄文晩期	VIa2	—	—	0.10	(0.70)	0.58	0.26	1.98	不整楕円形	袋状	5	—	＜SK281	○		
9	28		SK	178	1K-10H5.10I1	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.26	1.94	—	半円状	1	単層	＞SK273	○		P92
8	22		SK	179	1K-10F8･9	縄文晩期	VIa2	N-23°-W	0.85	0.72	0.65	0.60	0.17	2.08	不整円形	台形状	1	単層	＜SK67･167	○		
8	23		SK	180	1K-10F8･13	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.60)	—	(0.34)	0.12	2.02	楕円形	弧状	1	単層	＜SK62･84,＞SK233	—		
8	24		SK	181	1K-10F13･14	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.70)	—	(0.54)	0.13	2.11	楕円形	弧状	2	水平	＜SK84･88	○	48	P47
9	30	19	SK	182	1K-10I5	縄文晩期	VIa2	—	0.74	0.74	0.62	—	0.15	1.88	円形	箱状	3	ー		○	53･64	P105　S13
9	30		SK	183	1K-10I5･10	縄文晩期	VIa2	N-64°-W	0.92	0.82	0.75	0.69	0.22	1.80	円形	弧状	5	レンズ状		○	53	P107
8	20		SK	184	1K-10F2	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.58)	—	(0.28)	0.20	2.10	—	半円状	2	水平	＞SK58	—		
9	29	17･18	SK	190	1K-10I1･6	縄文晩期	VIa2	N-23°-E	0.40	0.25	0.24	0.20	0.24	1.94	楕円形	台形状	2	斜位		○	52	P99･101
9	29	18	SK	191	1K-10I1･6	縄文晩期	VIa2	N-27°-E	1.07	0.80	0.84	0.65	0.27	1.96	楕円形	弧状	5	レンズ状		○	52	P99･100･102
9	29		SK	192	1K-10I3	縄文晩期	VIb	N-43°-W	(0.84)	0.72	(0.70)	0.56	0.14	1.94	楕円形	弧状	3	レンズ状		○	52	P103

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
9	30	19	SK	193	1K-10I10	縄文晩期	VIa2	N-66°-E	0.90	0.73	0.70	0.60	0.30	1.84	楕円形	台形状	7	レンズ状		○	53	P107
8	23		SK	196	1K-10F9·10	縄文晩期	VIa2	N-56°-W	—	(0.65)	—	(0.43)	0.16	2.00	楕円形	弧状	2	水平		○		
8	23		SK	197	1K-10F10	縄文晩期	VIa2	N-60°-W	—	(0.60)	—	(0.34)	0.12	2.02	—	弧状	1	単層		—		
8	21		SK	198	1K-10F12	縄文晩期	VIa2	—	(0.98)	(0.98)	(0.72)	—	0.12	2.12	円形	弧状	2	水平	＜SK73,＞SK85	—		
8	21	7	SK	199	1K-10F11	縄文晩期	VIa2	N-52°-E	0.98	0.56	0.84	0.58	0.06	2.26	楕円形	弧状	1	単層	＜SK129,＞Pit236	○	46	P15
8	24		SK	200	1K-10F13	縄文晩期	VIa2	N-75°-W	—	0.72	—	0.5	0.16	2.08	楕円形	台形状	2	水平	＜SK85·95,＞SK222	—		
8	24	11	SK	201	1K-10F19	縄文晩期	VIa2	N-20°-E	—	—	0.38	0.31	0.14	2.12	円形	弧状	1	単層	＜SK128	○	48	P52
8	24	11	SK	202	1K-10F19·20	縄文晩期	VIa2	N-25°-E	0.54	0.53	0.39	0.37	0.15	2.10	円形	半円状	2	レンズ状		○	48	P51
8	24		SK	203	1K-10F14·15	縄文晩期	VIa2	N-15°-E	0.69	0.46	0.37	0.3	0.17	2.08	楕円形	半円状	3	水平	＜SK86,＞SK204·291	○	48	P44
8	24		SK	204	1K-10F10·15	縄文晩期	VIa2	N-17°-E	—	0.56	(0.68)	0.32	0.18	2.05	長楕円形	半円状	2	レンズ状	＜SK203,＞SK291	○		
8	23	9	SK	205	1K-10F10	縄文晩期	VIa2	N-67°-W	—	(0.35)	—	(0.22)	0.17	1.99	楕円形	半円状	2	水平		—		
8	20		SK	206	1K-10F4·5	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.82)	—	(0.63)	0.12	2.05	—	弧状	2	水平	＞SK210	—		
8	23	9	SK	207	1K-10F4·5	縄文晩期	VIa2	N-7°-E	0.68	0.56	0.54	0.46	0.18	2.02	楕円形	弧状	2	レンズ状	＜SK164,＞SK242	○	47	P37·38
10	30		SK	208	2K-1F22,2F2	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.46)	—	(0.30)	0.18	2.31	円形	台形状	3	斜位		—		
8	21		SK	209	1K-10F2·7	縄文晩期	VIa2	N-66°-W	0.52	0.43	0.39	0.29	0.18	2.09	楕円形	弧状	1	単層	＞SK50	—		
8	20		SK	210	1K-10F4	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.13	2.00	—	弧状	1	単層	＜SK206	—		
8	24	11·25	SK	211	1K-10F22	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	0.37	0.07	2.29	円·楕円形	弧状	2	水平		○	48	P53
8	20		SK	214	1K-10F6	縄文晩期	VIa2	—	(0.45)	(0.45)	—	(0.32)	0.15	2.07	円形	半円状	1	単層	＞SK47	—		
8	21		SK	215	1K-10F7·12	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.74)	—	(0.44)	0.15	2.10	円·楕円形	弧状	1	単層	＜SK26·55·73,＞SK253	○	45	P13
8	18		SK	218	1K-9F19·24	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.30)	—	(0.13)	0.16	2.02	円形	半円状	1	単層		—		
8	19		SK	219	1K-9F23·24	縄文晩期	VIa2	N-35°-W	0.58	0.44	0.45	0.31	0.13	2.02	円形	台形状	1	単層	＞SK131·140	—		
9	30		SK	220	1K-10I5·10,10J1·6	縄文晩期	VIa2	N-30°-W	(0.75)	—	0.64	(0.44)	0.22	1.86	円形	台形状	4	水平レンズ		○	64	S6
9	29	18·19	SK	221	1K-10I3·4	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	(1.01)	0.26	1.92	円形	弧状	3	レンズ状		○	52	P101
8	24		SK	222	1K-10F13	縄文晩期	VIa2	N-8°-E	1.02	(0.60)	0.80	(0.46)	0.10	2.14	楕円形	弧状	1	単層	＜SK95·200	—		
8	19		SK	223	1K-9F25,10F5	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.12	2.02	—	弧状	2	水平	＜SK134	—		
9	28	16	SK	225	1K-9I12·13·17·18	縄文晩期	VIa2	—	—	0.70	—	(0.50)	0.18	1.96	不整楕円形	弧状	5	水平レンズ		○	51	P88
9	29		SK	226	1K-10H5	縄文晩期	VIa2	—	0.44	0.42	0.27	0.22	0.19	2.01	円形	半円状	2	レンズ状		○	52	P95
9	29	18	SK	227	1K-10I2	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.80)	—	(0.68)	0.17	2.00	円形	台形状	1	単層		○	52	P101
9	29		SK	228	1K-10I2	縄文晩期	VIa2·VIb	N-72°-E	0.46	0.36	0.42	0.29	0.04	2.02	楕円形	弧状	1	単層		○		
9	30		SK	229	1K-9J17·22	縄文晩期	VIa2	—	0.89	0.89	0.63	—	0.07	1.90	円形	弧状	1	単層		○	53	P108
9	30		SK	230	1K-9I25,9J21	縄文晩期	VIa2	N-60°-E	(0.80)	0.58	(0.60)	0.34	0.22	1.84	楕円形	台形状	2	レンズ状		○	53	P104
9	30		SK	231	1K-10J1	縄文晩期	VIa2	—	0.35	0.34	0.20	0.17	0.07	2.02	円形	弧状	1	単層	＞SK232	—		
9	30		SK	232	1K-10J1·2·6·7	縄文晩期	VIa2	N-79°-E	0.75	0.68	0.54	0.43	0.20	1.90	楕円形	半円状	1	単層	＜SK231	○	52	P96
8	23		SK	233	1K-10F8·9·13·14	縄文晩期	VIa2	N-13°-E	0.63	0.52	0.50	0.39	0.19	2.10	楕円形	弧状	2	レンズ状	＜SK180	—		
8	22		SK	234	1K-10F2·3·7·8	縄文晩期	VIa2	N-10°-W	(0.69)	0.43	0.44	(0.22)	0.16	2.10	長楕円形	台形状	2	水平	＜SK57·61	—		
8	21		SK	235	1K-10F7	縄文晩期	VIa2	—	—	—	0.78	0.62	0.19	2.08	不整楕円形	弧状	1	単層	＜SK55·83,＞SK253	○	65	S16
8	22		SK	237	1K-10F3·4·8·9	縄文晩期	VIa2	N-85°-W	0.90	0.77	0.72	0.50	0.24	2.02	不整円形	台形状	2	レンズ状	＜SK65,＞SK239	○	47	P34
8	22		SK	238	1K-10F3·4	縄文晩期	VIa2	N-75°-W	(0.43)	(0.43)	—	0.22	0.20	2.02	円形	台形状	2	水平	＞SK239,＝SK66	—		
8	22		SK	239	1K-10F3·4	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.22	2.02	楕円形	台形状	2	水平	＜SK237·238	—		
8	23		SK	241	1K-10F9·10	縄文晩期	VIa2	N-70°-E	0.58	0.47	0.45	0.32	0.17	2.05	楕円形	半円状	1	単層		○	47	P42
8	23	9	SK	242	1K-10F5	縄文晩期	VIa2	N-6°-W	0.61	(0.42)	0.42	0.28	0.17	2.04	楕円形	弧状	1	単層	＜SK71·207	—		
8	22		SK	243	1K-10F7·8	縄文晩期	VIa2	N-50°-W	0.51	0.43	0.36	0.28	0.11	2.12	楕円形	台形状	1	単層	＞SK244	—		
8	22		SK	244	1K-10F8	縄文晩期	VIa2	N-25°-E	0.45	(0.45)	0.32	0.26	0.14	2.09	円形	半円状	1	単層	＜SK63·64·243	—		
8	23	10	SK	245	1K-10F5	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.42)	—	(0.26)	0.22	2.00	—	台形状	1	—	＝SK90	○		
8	18		SK	246	1K-9F19·24	縄文晩期	VIa2	N-37°-W	0.58	(0.50)	0.42	0.36	0.14	2.07	楕円形	弧状	2	水平	＜SK91·92	—		
10	30		SK	247	2K-2E4	縄文晩期	VIa2	—	(0.01)	—	(0.90)	—	0.33	2.18	円形	袋状	2	—		○	53	P109
8	25		SK	248	1K-9G23,10G3	縄文晩期	VIb'	—	(0.78)	(0.70)	(0.60)	0.56	0.15	1.98	隅丸方形	台形状	1	単層		—		
8	25		SK	249	1K-9G24,10G4	縄文晩期	VIb'	—	(0.40)	(0.40)	—	(0.32)	0.06	2.16	円形	弧状	1	単層		—		
8	25		SK	250	1K-9G24,10G4	縄文晩期	VIb'	—	(0.44)	(0.44)	—	(0.30)	0.09	2.11	円形	弧状	1	単層		—		
8	18		SK	251	1K-9F22	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.62)	—	(0.42)	0.20	2.02	—	半円状	2	水平		—		
8	21	6·7	SK	253	1K-10F7·12	縄文晩期	VIa2	—	(0.72)	—	(0.56)	0.34	0.10	2.15	楕円形	弧状	1	単層	＜SK26·45·55·215·235	○	45	P9·10
9	28		SK	254	1K-9I11·16	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.58)	—	(0.46)	0.24	1.94	円形	半円状	2	水平		—		

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
9	28		SK	255	1K-9I11	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.16	2.00	—	台形状	2	水平	＜SK257	—		
9	28	15	SK	256	1K-9I11･12	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.77)	—	(0.56)	0.18	1.95	円形	弧状	5	斜位	＞SK258	○	50	P84
9	28	16	SK	257	1K-9I11	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.78)	—	(0.47)	0.14	2.06	円形	弧状	1	単層	＞SK255･258	○	51	P86･87
9	28	15	SK	258	1K-9I11	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.10	2.11	円形	弧状	1	単層	＜SK256･257	○	50	P85
8	25		SK	263	1K-10G1	縄文晩期	VIb'	—	—	—	—	—	0.11	2.11	—	弧状	1	単層		—		
8	25		SK	265	1K-10G2	縄文晩期	VIb'	—	—	(0.51)	(0.40)	—	0.11	2.18	円･楕円形	弧状	1	単層		—		
9	28		SK	266	1K-10H9	縄文晩期	VIa2	N-67°-W	0.38	(0.32)	0.24	(0.18)	0.16	1.96	楕円形	弧状	1	単層		○		P94
9	28	17	SK	267	1K-10H8･9	縄文晩期	VIa2	N-67°-W	0.64	0.59	0.37	0.24	0.15	2.11	隅丸方形	半円状	2	レンズ状		○	51	P93
9	29		SK	268	1K-10H14	縄文晩期	VIa2	—	0.52	0.52	0.36	—	0.07	2.05	円形	弧状	1	単層		○	67	S22
8	26		SK	269	1K-10G3	縄文晩期	VIb'	—	—	0.34	—	0.28	0.06	0.18	円形	弧状	1	単層	＜SK31	—		
8	26		SK	270	1K-10G2･3･7･8	縄文晩期	VIa2	N-73°-W	(0.53)	0.48	(0.43)	0.33	0.16	2.12	楕円形	半円状	2	水平	＜SK14･31,＞SK308	—		
9	28	17	SK	272	1K-10H7･8	縄文晩期	VIa2	N-59°-W	(0.70)	0.56	0.50	0.29	0.15	2.08	楕円形	弧状	2	水平		○		
9	29		SK	273	1K-10H5･10,10I1･6	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.22	1.96	—	半円状	3	レンズ状	＜SK178,＞SK283	○	52	P97･98
8	26		SK	276	1K-10G3･8	縄文晩期	VIb'	N-40°-E	0.76	0.58	0.52	0.40	0.20	2.04	不整楕円形	半円状	1	単層	＜SK151	—		
8	27		SK	277	1K-10G8･9	縄文晩期	VIa2	—	(0.84)	—	(0.65)	—	0.28	2.02	楕円形	台形状	3	水平	＜SK19	○		
8	25	12	SK	278	1K-10G4	縄文晩期	VIb'	N-32°-E	(0.52)	(0.36)	0.42	0.23	0.10	2.12	楕円形	弧状	1	単層	＞SK121	—		
8	25		SK	279	1K-10G4	縄文晩期	VIb'	—	(0.46)	(0.42)	0.32	(0.26)	0.15	2.07	円形	半円状	1	単層		—		
8	24		SK	280	1K-10F16･21	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.42)	—	(0.19)	0.19	2.33	円･楕円形	半円状	1	単層		—		
9	28		SK	281	1K-10H8	縄文晩期	VIa2	N-0°	0.72	0.64	0.50	0.41	0.12	2.16	円形	弧状	1	単層	＞SK177	○		
8	25		SK	282	1K-10G2･3	縄文晩期	VIb'	—	—	(0.70)	(0.54)	—	0.17	2.06	円･楕円形	台形状	1	単層		—		
9	29		SK	283	1K-10H10	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	(0.42)	0.05	2.12	円･楕円形	弧状	1	単層	＜SK273	○	52	P97
8	28	16	SK	286	1K-10H1	縄文晩期	VIa2	—	0.56	0.54	0.30	(0.29)	0.12	2.06	円形	弧状	4	斜位		○	51	P89
9	28	14	SK	287	1K-9H13	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.74)	—	(0.41)	0.14	2.07	円形	弧状	2	斜位	＞SK288	○	50	P81
9	28	14	SK	288	1K-9H8･13	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.17	2.04	楕円形	弧状	1	単層	＜SK287	○	50	P82
9	28	15	SK	289	1K-9H15	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.40)	—	(0.249	0.14	1.94	円形	弧状	2	水平		○	50	P83
9	28	15	SK	290	1K-9H14	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.50)	—	(0.36)	0.08	2.04	不整円形	弧状	1	単層		○	50	P83
8	24		SK	291	1K-10F9･10･14･15	縄文晩期	VIa2	—	—	—	—	—	0.15	2.08	—	弧状	1	単層	＜SK86･203･204	—		
11	31	20	SK	293	2K-2G5	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.55)	—	(0.33)	0.18	2.04	円･楕円形	半円状	2	斜位		○	54	P116
13	31	20	SK	295	2K-2G16･21	縄文晩期	VIa2	—	(0.35)	0.30	0.26	0.24	0.10	2.22	円形	半円状	1	単層		○	54	P117
9	29	26	SK	297	1K-10I2･7	縄文晩期	VIa2	N-55°-E	0.55	0.50	0.40	0.34	0.28	1.88	円形	台形状	2	水平	＜Pit296	○	52	P100･102
9	29	25	SK	299	1K-9I22,10I2	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.53)	—	(0.3)	0.15	2.03	円･楕円形	半円状	2	斜位		○		
8	27	14	SK	301	1K-10G9･14	縄文晩期	VIa2	N-66°-W	1.00	0.86	0.96	0.76	0.28	2.03	不整円形	袋状	1	単層	＜SK29･311	○	50	P79
8	28		SK	302	1K-10G10･15	縄文晩期	VIa2	N-63°-E	0.67	0.55	0.43	0.23	0.24	2.09	不整円形	半円状	1	単層		○	50	P80
8	26		SK	303	1K-10G7	縄文晩期	VIa2	—	—	0.82	—	0.58	0.27	2.00	ー	半円状	2	水平	＜SK14･304	○	49	P71
8	26		SK	304	1K-10G7	縄文晩期	VIa2	N-20°-E	—	0.54	—	0.35	0.17	2.10	楕円形	半円状	2	水平	＜SK14,＞SK303	○	49	P71
8	26		SK	307	1K-10G2･7	縄文晩期	VIa2	—	(0.51)	—	(0.34)	—	0.11	2.14	円形	弧状	1	単層	＝SK13	○	49	P69
8	26		SK	308	1K-10G3･8	縄文晩期	VIb'	N-78°-W	(0.53)	0.46	(0.40)	0.36	0.05	2.20	円形	弧状	1	単層	＜SK270	○	66	S19
8	27		SK	309	1K-10G7	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.52)	—	(0.27)	0.18	2.02	不整円形	弧状	1	単層	＜SK152･310,＝SK30	○	49	P72
8	27		SK	310	1K-10G7･12	縄文晩期	VIa2	N-36°-E	1.02	0.83	0.82	0.66	0.22	2.08	不整楕円形	弧状	2	水平	＞SK15･30･309,＜SK152	○	49	P76
8	27	14	SK	311	1K-10G9	縄文晩期	VIa2	N-37°-E	0.64	0.46	0.43	0.28	0.22	2.13	楕円形	半円状	3	レンズ状	＞SK29･301,＜SK153	—		
8	27		SK	312	1K-10G9	縄文晩期	VIa2	—	—	(0.46)	—	(0.34)	0.12	2.18	円形	弧状	1	単層	＝SK153	—		
8	25	11	SK	317	1K-9G14･15	縄文晩期	VIb'	N-43°-E	0.91	0.82	0.78	0.72	0.17	2.06	不整円形	台形状	1	単層		○	48	P55
10	30		SK	321	2K-1G17･22	縄文晩期	VIb'	—	(1.00)	—	(0.86)	—	0.16	2.10	楕円形	台形状	2	水平		○	54	P113～115

焼土遺構（SX）

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
8	31	21	SX	5	1K-9F25	縄文晩期	VIa1	—	0.40	0.40	—	—	0.02	2.15	円形	—	2	—		○	54	P118～120
8	31	21	SX	123	1K-9F25･10F5	縄文晩期	VIa1	—	(0.38)	(0.38)	—	—	0.02	2.14	円形	—	2	—	＞SX124	—		
8	31	21	SX	124	1K-9F25･10F5	縄文晩期	VIa1	—	(0.40)	(0.25)	—	—	0.02	2.10	長楕円形	—	2	—	＜SX123	—		

土器集中

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	規模(m) 上端 短軸	規模(m) 下端 長軸	規模(m) 下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
9	31·32	22·23	土器集中	79	1K-9I19·20	縄文晩期	Vd	N-35°-W	0.92	0.60	—	—	0.08	—	—	—	—	—		○	55	P124～129
9	31	22	土器集中	80	1K-9I24	縄文晩期	Vd	N-4°-W	0.45	0.40	—	—	0.07	—	—	—	—	—		○	54·69	P123 S45
9	31·32	23	土器集中	81	1K-9I20·25	縄文晩期	Vd	N-43°-W	0.90	0.73	—	—	0.07	—	—	—	—	—		○	55	P129～135
8	31	22	土器集中	97	1K-10G3	縄文晩期	Vd	N-23°-W	0.56	0.50	—	—	0.05	—	—	—	—	—		○	54	P122
8	31	22	土器集中	111	1K-9H16	縄文晩期	Vd	N-14°-W	0.65	0.45	—	—	—	—	—	—	—	—		○	54	P121
9	32	23	土器集中	112	1K-10I8	縄文晩期	Vd	N-67°-W	1.12	0.72	—	—	0.07	—	—	—	—	—		○	56	P136

堅果類集中

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	規模(m) 上端 短軸	規模(m) 下端 長軸	規模(m) 下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
11	32		堅果類集中	324	2K-2H7	縄文晩期	VIa	N-14°-E	0.55	0.40	—	—	—	—	—	—	—	—		○		クルミ15点

杭（Pit）

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	杭傾斜 角度	杭傾斜 方向	打込み深度(m)	底面座標(m)	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
7	32	23	Pit	144	1L-8A6	縄文晩期	VIa2	55°	N-73°-E	0.08	1.87		○		
7	32	23	Pit	145	1L-8A6	縄文晩期	VIa2	54°	N-141°-W	0.20	1.80		○		
9	33	26	Pit	148	1K-10H24	縄文晩期	VIa2	53°	N-149°-W	0.32	1.88		○		
8	33	25	Pit	163	1K-10G1	縄文晩期	VIa1	57°	N-55°-W	0.42	1.82		○		
7	33	24	Pit	186	1K-9I8	縄文晩期	VIb	19°	N-5°-E	0.96	1.28		○	77	W21
9	32	24	Pit	187	1K-9H7	縄文晩期	VIa2	6°	N-10°-E	0.80	1.40		○		
7	33	24	Pit	188	1K-9I3	縄文晩期	VIa2	30°	N-70°-W	0.62	1.53		○	78	W24
9	33	24	Pit	189	1K-9I11·12	縄文晩期	VIa2	42°	N-70°-W	0.58	1.64		○	77	W20
9	33	24	Pit	194	1K-9H15	縄文晩期	VIa2	45°	N-44°-E	0.34	1.84		○		
8	33	25	Pit	195	1K-10F2	縄文晩期	VIa1	42°	N-6°-W	0.28	2.00		○		
8	33	25	Pit	212	1K-10F22	縄文晩期	VIa2	32°	N-1°-W	0.44	1.96		○		
8	33	7·25	Pit	236	1K-10F11	縄文晩期	VIa3	35°	N-4°-W	0.35	1.88	＜SK199	○		
8	33	25	Pit	252	1K-10F15	縄文晩期	VIa2	23°	N-61°-W	0.88	1.32		○		
7·9	33	25	Pit	284	1K-9J9	縄文晩期	VIa1	33°	N-148°-W	0.70	1.36		○	74	W14
10	33	26	Pit	292	2K-1F5	縄文晩期	VIa2	10°	N-32°-W	0.24	2.04		○		
10·12	33	26	Pit	294	2K-2E16	縄文晩期	VIa2	62°	N-169°-W	0.25	2.16		○	75	W17
9	33	26	Pit	296	1K-10I1·2·7	縄文晩期	VIa2	59°	N-137°-E	—	1.78	＞SK297	○	76	W19
7	32	24	Pit	298	1K-8I16	縄文晩期	Vc	49°	N-138°-E	0.41	1.84		○		
9	33	25	Pit	300	1K-9I22	縄文晩期	VIa2	42°	N-69°-W	0.55	1.66		○	75	W16
11·13	33	26	Pit	305	2K-2H17	縄文晩期	VIa2	20°	N-0°	0.72	1.50		○	78	W22
6	32	24	Pit	306	1K-8H24	縄文晩期	VIa2	49°	N-115°-W	0.30	1.95		○		
8	32	24	Pit	313	1K-9G11	縄文晩期	VIa2	26°	N-180°	0.41	1.80		○		
8	33	26	Pit	314	1K-10H6	縄文晩期	VIb	30°	N-133°-E	0.36	1.82		○	78	W23
9	33	26	Pit	315	1K-10I6·7	縄文晩期	VIa2	38°	N-120°-E	0.83	1.28		○	76	W18
6	32	23	Pit	316	1K-8H17	縄文晩期	VIa2	36°	N-130°-E	0.40	1.82		○		
6	32		Pit	318	1K-8G11·12	縄文晩期	VIa2	60°	N-6°-W	0.68	1.57		○		
7	32	23	Pit	319	1K-8J10	縄文晩期	VIa2	28°	N-170°-W	0.66	1.45		○		
7	32	23	Pit	320	1K-7J24	縄文晩期	VIb	23°	N-121°-E	0.38	1.58		○		
8	33	25	Pit	322	1K-10G21	縄文晩期	VIa2	20°	N-47°-E	0.95	1.28		○	74	W15
13	33	26	Pit	323	2K-3G3·8	縄文晩期	VIb	42°	N-154°-W	0.43	1.76		○		

上層の遺構

土坑（SK）

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	規模(m) 上端 短軸	規模(m) 下端 長軸	規模(m) 下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
34	35	27	SK	1001	2K-3D19･20･24･25	中世	Vc	N-55°-E	1.30	1.20	1.00	0.88	0.52	2.12	不整円形	台形状	8	レンズ状		○	78	漆塗皿(W25)
34	35		SK	1002	2K-4E18	中世か	Vc	N-90°	1.30	(1.15)	1.15	(0.95)	0.16	2.44	不整円形	弧状	2	レンズ状		—		
34	35	27	SK	1003	2K-1E13･14･18	中世か	Vc	N-71°-E	0.85	(0.70)	0.70	0.58	0.27	2.32	楕円形	台形状	—	—		—		
34	35	27	SK	1006	2K-1G6･7･11･12	中世か	Va	—	(1.45)	(0.95)	1.40	0.80	0.20	2.16	不整形	弧状	13	水平		—		

井戸（SE）

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模(m) 上端 長軸	規模(m) 上端 短軸	規模(m) 下端 長軸	規模(m) 下端 短軸	深度	底面座標(m)	形態 平面	形態 断面	覆土	堆積状況	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
34	35	27	SE	1004	2K-1E17	中世か	Vc	N-10°-W	0.88	0.80	0.60	0.57	1.06	2.16	円形	U字状	14	水平		—		
34	35	27	SE	1005	2K-1E22	中世か	Vc	N-60°-W	1.40	1.40	0.63	0.52	0.69	1.88	不整円形	半円状	—	不明		—		

杭（Pit）

分割図版No.	個別図版No.	写真図版No.	遺構		グリッド	時代	確認面	杭傾斜 角度	杭傾斜 方向	打込み深度(m)	底面座標(m)	重複関係	遺物の有無	遺物図版No.	備考
34	35	27	Pit	1007	2K-3G1･6	中世	Ⅲd	33°	N-155°-W	0.44	1.76		○		
34	35		Pit	1009	2K-3G15	中世	Ⅲd	30°	N-93°-E	0.34	2.04		○		
34	35		Pit	1010	2K-2G24	中世	Ⅵa	32°	N-60°-E	0.42	2.02		○		
34	35	27	Pit	1011	2K-1E12	中世	Ⅳ	55°	N-18°-E	0.36	2.40		○		

別表2　縄文土器観察表

凡　例

出土位置の遺構とグリッド両者に記載のあるものは、遺構出土土器と包含層出土土器が接合関係にあることを示している。
出土土器の大半が大大グリッド1K出土のため、グリッド表記は大グリッドからとしてある。1Kグリッド以外のものは表記している。
口径・底径の（ ）内数値は復元値である。
胴部最大径は、口径よりも胴部に最大径を有するものの値である。
器高の（ ）内数値は、口縁部から8割程度遺存するものの残存値である。

図版No.	報告No.	出土位置		層位	器種	分類	遺存部位	法量(cm)				遺存率(/36)			胎土分類	色調	付着炭化物		口縁端部	文様・施文	備考
		遺構	ｸﾞﾘｯﾄﾞ					口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体			外面	内面	形態		
45	1	SK133	9F24	Ⅵb	深鉢	体4	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	スス	スス		網目状撚糸文(R)(縦位)	
45	2	SK157			深鉢	体4	体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/3)		コゲ		羽状縄文（RL・LR）	
45	3	SK52	9F17･24,9G24	Ⅴd,Ⅵa1	深鉢	有文5a	口～体	(27.9)			(24.6)				Ⅲa	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･スス		内削　沈線	口:無文帯　沈線文　体:結節回転文　結節斜縄文(RL＋結節)	口:ケズリ→横ナデ　内面:ケズリ
45	4	SK46･52			深鉢	有文3a	口～体	19.2			(21.6)				Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス	スス	丸	口:平行沈線文　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
45	5	SK52	9G24	Ⅵb'	深鉢	地文2b	口～体	(29.7)				12		12	Ⅲa	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス		突出	口:無文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR,RL＋結節・LR＋結節)	
45	6	SK50			深鉢	地文4	口～体								Ⅰc	にぶい黄橙(10YR7/2)				口:無文帯　羽状縄文(LR・RL)	
45	7	SK83			深鉢	地文6	口								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/3)				結節羽状縄文(LR・結節＋RL)	
45	8	SK45			深鉢	体4	体								Ⅲa	浅黄（2.5Y7/3)				羽状縄文（RL・LR）	内面:ケズリ
45	9	SK253			深鉢	地文4	口～体								Ⅰc	淡黄(2.5Y8/3)	スス	スス	先細	口:無文帯　体:斜縄文(LR)	口:横ナデ
45	10	SK253	10F11･12	Ⅵb'	深鉢	有文3a	口～体								Ⅲa	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･スス	スス		平行沈線文帯　結節斜縄文(LR＋結節)	
45	11	SK55			深鉢	体4	体								Ⅲa	にぶい黄橙（10YR7/2)	スス	スス		羽状縄文（RL・LR）	
45	12	SK55･215	10F12	Ⅵa2	深鉢	地文1a	口								Ⅰc	にぶい黄橙(10YR6/3)	コゲ			口:結節回転文帯　体:結節斜縄文(L)	
45	13	SK73･215	10F13	Ⅵa2	深鉢	地文4	口～体								Ⅳ	にぶい黄橙(10YR7/3)	コゲ			口：無文帯　体:斜縄文(LR)	
45	14	SK129			深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	スス	スス		結節斜縄文(LR＋結節)	
46	15	SK129･199			深鉢	地文2b	口～体	(23.7)		6.9	25.2	9		18	Ⅰc	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ･スス	スス	面取	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	補修孔あり　底:横ナデ
46	16	SK61			深鉢	地文3	口								Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ	スス	先細	結節斜縄文(RL＋結節)	
46	17	SK61			深鉢	地文3	口～体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/3)			先細	結節斜縄文(RL＋結節)	
46	18	SK61			深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄(2.5Y7/2)	スス			結節斜縄文(RL＋結節)	内面:ケズリ
46	19	SK61･151			深鉢	底	体～底			(9.3)			12	12	Ⅰa	にぶい黄橙(10YR6/3)				体:結節斜縄文(RL＋結節)　底:無文	底外面:横ナデ　底面:ケズリ
46	20	SK151			深鉢	地文3	口～体	(34.2)				9		9	Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)			先細	結節斜縄文(LR＋結節)	口端:横ナデ
46	21	SK151			深鉢	体4	体							9	Ⅲa	暗灰黄(2.5Y4/2)	コゲ･スス	コゲ･スス		斜縄文(LR)(縦位)	
46	22	SK57･65			深鉢	有文2b	口～体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	スス		沈	口端:刺突文　口:平行沈線文帯　体:結節斜縄文（LR＋結節）	口:ミガキ
46	23	SK57			深鉢	体4	体								Ⅱb	灰黄褐(10YR6/2)		スス		撚糸文(R)(縦位)	
46	24	SK57			深鉢	体3	体								Ⅰc	灰黄(2.5Y6/2)		スス		結節斜縄文(LR＋結節)	
46	25	SK65			深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ			結節斜縄文(RL＋結節)	
46	26	SK65			深鉢	地文2b	口～体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)	スス		内削	口:無文帯　結節回転文　体:斜縄文(LR)	
46	27	SK65			深鉢	体4	体								Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	スス	コゲ		斜縄文(LR)	
46	28	SK64･65･167	10F9	Ⅵa3	深鉢	地文2b	口～体	(24.6)				9		9	Ⅰc	黄灰(2.5Y5/1)	コゲ･スス	スス	突出	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
46	29	SK65･150	10F7	Ⅵa3	深鉢	体4	体								Ⅲb	黄灰(2.5Y4/1)	スス	スス		斜縄文(0段多条RL)(斜位)	
47	30	SK150			深鉢	体4	体								Ⅱa	にぶい黄橙(10YR7/3)	スス	スス		網目状撚糸文(R)(縦位)	
47	31	SK150			深鉢	底	底			(7.5)			9		Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)	スス			無文　底面:無文	外面:横ナデ
47	32	SK15･150			深鉢	地文1a	口～体	(19.5)			(18.9)				Ⅰa	灰白(2.5Y8/2)	スス	スス	沈	口:結節部回転文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	
47	33	SK66			深鉢	体3	体								Ⅰc	灰黄褐(10YR6/2)	スス			結節斜縄文(RL＋結節)(縦位)	
47	34	SK237			深鉢	体3	体								Ⅰc	灰黄褐(10YR6/2)		スス		結節斜縄文(LR＋結節)	
47	35	SK63			深鉢	体3	体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/2)	スス			結節斜縄文(LR＋結節)	
47	36	SK89			深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)				斜縄文(直前段反撚RR)　結節回転文	
47	37	SK207			深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	スス	コゲ･スス		結節羽状縄文(LR＋結節・反撚RR＋結節)	
47	38	SK207	10F4	Ⅵb'	浅鉢	1a i	口～底			10.0					Ⅲb	灰黄褐(10YR6/2)	スス		丸	口:狭:無文　体上:楕円状文(磨消縄文LR)　体下:無文	外面黒漆　破断面スス付着
47	39	SK71･90･164			深鉢	有文2b	口～体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)			沈	口:端:刺突文　口:平行沈線文　体:結節回転文　斜縄文(RL)	口:ミガキ
47	40	SK71			深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)		スス		結節斜縄文(RL＋結節)	
47	41	SK126			深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)		スス		結節斜縄文(LR＋結節)	
47	42	SK241			深鉢	体4	体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)				羽状縄文（LR・直前段反撚RR)	
47	43	SK62･76			深鉢	体2	体								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)				結節回転文　斜縄文(LR)	内面:ケズリ→ミガキ
48	44	SK203			深鉢	体3	体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/2)	スス			結節斜縄文(RL＋結節)	
48	45	SK85			深鉢	体4	体								Ⅲa	灰黄(2.5Y7/2)	スス			網目状撚糸文(R)（縦位）	
48	46	SK95	10F6	Ⅵa1	深鉢	体3	体								Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)		コゲ･スス		結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)	
48	47	SK181			深鉢	有文3a	口～体								Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)	スス	スス	内削	口:平行沈線文　体:斜縄文(RL)	口:ミガキ　破断面スス付着
48	48	SK88			深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ	スス		結節羽状縄文(結節＋RL・結節＋LR)	
48	49	SK128			深鉢	体4	体								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	スス	スス		羽状縄文(LR・RL)	
48	50	SK128			深鉢	体3	体								Ⅲa	灰黄褐(10YR6/2)	スス	スス		結節斜縄文(RL＋結節)	
48	51	SK202	10F19	Ⅵa3	深鉢	地文1a	口～体	34.2							Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)	スス	スス	内削	口:結節回転文帯　体:結節斜縄文(L＋結節)	
48	52	SK201			深鉢	体4	体								Ⅲa	褐灰(10YR4/1)		スス		羽状縄文(縦位LR・横位LR)	
48	53	SK211			深鉢	体3	体								Ⅲa	灰黄褐(10YR5/2)	スス	スス		網目状撚糸文(R)(縦位)　結節斜縄文(RL＋結節)（縦位）	
48	54	SK99	9F25	Ⅴc	深鉢	地文3	口～体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)	スス	スス	内削	口端:無文　結節斜縄文(RL＋結節)	
48	55	SK317			深鉢	地文4	口～体	24.3				18		18	Ⅰa	にぶい黄(2.5Y6/3)	コゲ･スス	スス	面取	口:無文帯　体:斜縄文(0段多条LR)	口:横ナデ
48	56	SK102			深鉢	体3	体								Ⅲa	黄灰(2.5Y5/1)	スス	スス		結節斜縄文(LR＋結節)	
48	57	SK102	9G22	Ⅴd	深鉢	地文6	口～底	(16.8)				7	18	12	Ⅲa	暗灰黄(2.5Y5/2)	スス	コゲ･スス	丸	斜縄文(LR)	
48	58	SK102	9F24･25,9G22,10G3	Ⅴc･Ⅴd･Ⅵa1	深鉢	体2	体							18	Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス			網目状撚糸文(R)　結節回転文	
48	59	SK102			深鉢	体3	体							9	Ⅰb	にぶい黄橙(10YR6/3)	スス			結節斜縄文(LR＋結節)(斜位)	
49	60	SK103			深鉢	体1	体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/2)	スス	スス		沈線文　結節羽状縄文(LR・0段多条RL＋結節)	
49	61	SK103			深鉢	体4	体								Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	スス			網目状撚糸文(R)(縦位)	
49	62	SK118			深鉢	地文1b	口～体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)		スス	内削	口:結節回転文　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
49	63	SK118			深鉢	地文2b	口～体	16.5							Ⅲa	浅黄(2.5Y7/3)	スス	スス	先細	口:無文帯　体:結節斜縄文(0段多条LR＋結節)	口:指頭圧痕　内面:ケズリ
49	64	SK118			深鉢	地文2b	口								Ⅰa	にぶい黄(2.5Y6/3)	スス		面取	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:横ナデ
49	65	SK118			深鉢	体3	体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)				結節斜縄文(L＋結節)	
49	66	SK121	10G4	Ⅴd	深鉢	地文1a	口～体								Ⅲb	浅黄(2.5Y7/3)	スス	スス	内削	口:結節回転文帯　体:羽状縄文(RL・LR)	
49	67	SK121	9F25	Ⅵa1	深鉢	底	底			10.2			27		Ⅰa	にぶい黄(2.5Y6/3)				無文　底面:無文	外面:横ナデ
49	68	SK155			深鉢	地文2a	口～体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/2)	スス	スス	内削	口:無文帯　結節回転文　体:結節斜縄文(RL＋結節)	内面:ケズリ
49	69	SK307	10G2	Ⅵb'	深鉢	体4	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y7/2)		スス		撚糸文(R)	
49	70	SK14			深鉢	地文3	口～体								Ⅰb	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス	スス	内削	口:端:無文　結節斜縄文(LR＋結節)	内面:ケズリ
49	71	SK303･304	10F6	Ⅵa3	深鉢	底	体～底			(5.4)			6	9	Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	スス	コゲ･スス		体:結節斜縄文(LR＋結節)　結節回転文　底:無文	底外面:横ナデ
49	72	SK309			深鉢	地文1a	口～体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス	コゲ･スス	面取	口:結節回転文帯　体:斜縄文(LR)	
49	73	SK152			深鉢	地文2b	口～体	(35.1)			(24.3)	6		6	Ⅰb	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス	スス	突出	口:無文帯　体:結節斜縄文(RL＋結節,0段多条RL＋結節),斜縄文(附加条第1種RL+r)	内面:ナデ

図版No.	報告No.	出土位置		層位	器種	分類	遺存部位	法量(cm)				遺存率(/36)			胎土分類	色調	付着炭化物		口縁端部	文様・施文	備考
		遺構	ｸﾞﾘｯﾄﾞ					口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体			外面	内面	形態		
49	74	SK19･152･161･162			深鉢	地文3	口～体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)			面取	結節斜縄文（RL＋結節）	
49	75	SK106･152			深鉢	有文3a	口～体	24.3							Ⅰa	浅黄(2.5Y7/4)	スス	スス	面取	口:平行沈線文帯　体:羽状縄文(LR・RL)	口:ミガキ
49	76	SK30･152･310	10G8	Vlb'	深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	スス	コゲ		結節斜縄文(LR＋結節)	
50	77	SK156	10G8	Vlb'	深鉢	有文3a	口～体				(14.7)				Ⅱc	灰黄(2.5Y7/2)	コゲ･スス	スス	内削	口:平行沈線文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
50	78	SK156			深鉢	地文4	口～体								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス	スス	内削	口:無文帯　体:結節斜縄文(RL＋結節)	
50	79	SK29･301	10G9	Vlb	深鉢	地文1a	口～体	25.5							Ⅰa	灰黄(2.5Y7/2)	スス		内削	口:結節回転文帯　体:結節羽状縄文(0段多条RL＋結節・0段多条LR＋結節)	
50	80	SK302			深鉢	体3	体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR6/3)				結節斜縄文(0段多条RL)	
50	81	SK287			深鉢	体3	体								Ⅰb	褐灰(10YR4/1)	コゲ	スス		結節斜縄文(LR＋結節)・（RL＋結節)	
50	82	SK288			深鉢	地文4	口								Ⅰb	灰黄褐(10YR4/2)	コゲ	スス	内削　突出	口：無文帯　体：斜縄文(LR)	
50	83	SK289･290	9H14	VIa2	深鉢	地文2b	口～体	(26.4)				9		9	Ⅱa	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス	スス	内削　突出	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
50	84	SK256	9I11	Vlb	深鉢	底	体～底			7.8			18	18	Ⅲa	にぶい黄(2.5Y6/3)	スス	コゲ･スス		結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)　底:無文	底外面:横ナデ　85と同一か
50	85	SK258			深鉢	地文6	口～体	36.9			(32.9)	27		27	Ⅲa	にぶい黄(2.5Y6/3)	コゲ･スス	コゲ･スス	丸	結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)　擦痕	縦ケズリ→地文　84と同一か
51	86	SK257	9I16	VIa2	深鉢	体4	体							6	Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)	スス	スス		網目状撚糸文(R)　擦痕	縦ケズリ→地文
51	87	SK257			深鉢	体3	体								Ⅲa	暗灰黄(2.5Y5/2)	コゲ･スス	コゲ･スス		結節斜縄文(0段多条LR＋結節)・（LR＋結節)	
51	88	SK225			深鉢	地文3	口～体	(35.1)				9		9	Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ･スス	スス	内削	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:横ナデ
51	89	SK286			深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ･スス	コゲ･スス		結節斜縄文(LR＋結節)	
51	90	SK176	10H6	Vd	深鉢	有文4	口～体	20.7	22.1		(18.5)				Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス	スス	先細	口:端:山形突起4　口:無文　凹線　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
51	91	SK176			深鉢	体3	体								Ⅱa	暗灰黄(2.5Y5/2)	コゲ			結節斜縄文(LR＋結節)	
51	92	SK176･178			深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)				結節斜縄文(LR＋結節)	
51	93	SK267			深鉢	小形	口～底	7.5		4.5	10.8	36	36	36	Ⅰb	灰黄(2.5Y7/2)	スス	スス		擦痕(縦位)	内外面:ケズリ
52	94	SK266			深鉢	体3	体								Ⅳ	褐灰(10YR4/1)	コゲ			結節羽状縄文(RL＋結節・LR)	
52	95	SK226	9H24,10H5	Vd	深鉢	有文6	口～体	34.5							Ⅰb	灰黄褐色(10YR6/2)	コゲ･スス	スス	先細	口:粘土紐接合痕　指頭圧痕文　体:斜縄文(0段多条LR)(縦位)	
52	96	SK170･232			深鉢	地文6	口～体								Ⅰa	灰黄褐(10YR4/2)	コゲ･スス		面取	羽状縄文(RL・0段多条LR)	
52	97	SK273･283	10I1	Vd･VIa1	深鉢	体3	体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR6/3)	スス			結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)	
52	98	SK273			深鉢	体4	体							12	Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)				網目状撚糸文(R)(縦位)	内面:ケズリ
52	99	SK190･191	10I6	Vd	浅鉢		底			9.0			36		Ⅲa	灰黄褐(10YR5/2)				無文	底面ケズリ→ミガキ
52	100	SK191･297			深鉢	地文1a	口～体	26.4							Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ･スス	スス	面取	口:結節回転文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
52	101	SK190･221･227			深鉢	地文4	口～体	(32.7)				9		9	Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/4)	コゲ･スス	コゲ･スス	先細	口:無文帯　体:結節斜縄文(RL＋結節)	口:地文磨消
52	102	SK191･297			深鉢	地文6	口～体								Ⅰb	黒褐(10YR3/1)	コゲ･スス	スス	面取	斜縄文(LR)	
52	103	SK192			深鉢	体3	体							12	Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	スス	コゲ･スス		結節斜縄文(0段多条LR＋結節)	
53	104	SK230	10I5	Vlb	深鉢	地文1b	口～体								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ	スス	面取	口:結節回転文　体:斜縄文(LR)	内面:ケズリ　補修孔
53	105	SK182			深鉢	体3	体								Ⅰa	灰白(2.5Y8/2)				結節斜縄文(LR＋結節)	
53	106	SK183			深鉢	地文4	口～体								Ⅲa	浅黄(2.5Y7/3)			面取	口:無文帯　体:斜縄文(LR)	口:横ナデ
53	107	SK183･193	10I10	Vlb	深鉢	地文6	口～体	15.2			(21.3)	18		18	Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス	スス	先細	網目状撚糸文(R)	
53	108	SK229			深鉢	地文4	口～体	(30.3)			(24.6)	6		9	Ⅰb	黄褐(2.5Y5/3)	コゲ･スス	コゲ･スス	先細	口:無文帯　体:結節羽状縄文(0段多条RL＋結節・LR＋結節)	
53	109	SK1･247			深鉢	地文3	口～体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/3)	コゲ	スス		口:端:無文　口:端内面:指頭圧痕　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
53	110	SK4			深鉢	地文5	口～体				(27.9)				Ⅱa	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス		面取	口:網目状撚糸文(R)　体:網目状撚糸文(R)(縦位)	
53	111	SK4			深鉢	地文3	口～体					9		6	Ⅰa	灰黄(2.5Y7/2)			先細	口:端：無文　口:結節回転文　体:網目状撚糸文(R)(縦位)	
54	112	SK2			深鉢	体4	体								Ⅰa	灰黄(2.5Y7/2)		スス		網目状撚糸文(R)(縦位)	
54	113	SK321			深鉢	体4	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y7/2)	コゲ･スス	コゲ･スス		網目状撚糸文(R)(縦位)	
54	114	SK321			深鉢	体4	体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/4)	スス			斜縄文(LR)	
54	115	SK321			深鉢	体4	体								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	スス	スス		斜縄文(LR)(縦位)	
54	116	SK293			深鉢	体4	体								Ⅱa	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ	スス		斜縄文(RL)	
54	117	SK295			深鉢	有文2a	口～体								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	スス		内削	口:端:キザミ　口:二溝間円形刺突列　体:羽状縄文(LR・RL)	
54	118	SX5		Vd	深鉢	地文2b	口～体	(25.5)				6		12	Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	スス	スス	突出	口:無文帯　体:結節羽状縄文(L＋結節・R＋結節)　擦痕	縦ケズリ→地文　内面:ケズリ
54	119	SX5		Vd	深鉢	地文2a	口～体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	スス	スス	内削	口:無文帯　結節回転文帯　体:結節羽状縄文(0段多条LR＋結節・RL)	
54	120	SX5		Vd	深鉢	体1	口～体								Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)		スス		口:平行沈線文　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
54	121	土器集中111		Vd	深鉢	地文1a	口～体	(24.0)			(22.8)	12		12	Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)	スス	スス	内削	口:結節回転文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)(施文帯内縦位羽状)	内面:ケズリ
54	122	土器集中97		Vd	深鉢	地文3	口～体	(31.8)			(29.1)	12		12	Ⅲa	灰黄(2.5Y7/2)	コゲ･スス	スス	先細	口:端:無文　結節斜縄文(LR＋結節)	内面:ケズリ
54	123	土器集中80		Vd	深鉢	地文3	口								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	スス	スス		口:端:無文　結節斜縄文(前々段反撚RL)	
54	124	土器集中79		Vd	浅鉢	3	口～体								Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)			肥厚	口:頸:無文　体：隆帯・円形刺突列・平行沈線文	ミガキ
55	125	土器集中79		Vd	深鉢	地文2b	口～体								Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･スス		先細	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
55	126	土器集中79		Vd	深鉢	地文1a	口～体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	スス	スス	内削　突出	口:結節回転文帯　体:結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)	
55	127	土器集中79		Vd	深鉢	体3	体								Ⅲa	にぶい黄橙(10YR6/3)	スス	スス		結節羽状縄文(LR＋結節・R＋結節)	
55	128	土器集中79		Vd	深鉢	底	体～底			10.5			36		Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)		スス		集合沈線文(縦位)	底外面:横ナデ　底面:ケズリ
55	129	土器集中79･81		Vd	深鉢	地文3	口～体	(30.0)	33.2		(23.7)	12		12	Ⅱa	浅黄(2.5Y7/3)		スス	内削	結節斜縄文(L＋結節)	内面:ケズリ
55	130	土器集中81		Vd	深鉢	有文3a	口～体	16.8			(14.4)				Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	スス	ススコゲ	丸	口:端:小突起　口:平行沈線文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ　破断面スス付着
55	131	土器集中81		Vd	深鉢	地文2b	口～体	(21.3)			(16.5)	9		9	Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ･スス	スス	先細	口:無文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)(施文帯内縦位羽状)	口:横ナデ
55	132	土器集中81	9J21	Vd	深鉢	地文2b	口～体	(17.4)				9		9	Ⅲa	黒褐(2.5Y3/1)	コゲ･スス	スス	丸	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
55	133	土器集中81	9J18	Vd	深鉢	地文1a	口～体	34.8							Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス		先細	口:結節部回転文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	
55	134	土器集中81		Vd	深鉢	体3	体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR6/3)		スス		結節斜縄文(L＋結節)	地文→ナデ消し
55	135	土器集中81		Vd	深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR5/2)	スス			結節羽状縄文(R・LR)	
56	136	土器集中112	10I3	Vd	深鉢	地文2b	口～体	(30.3)				9		9	Ⅰb	灰白(2.5Y8/2)	コゲ･スス	スス	沈	口:無文帯　体:結節斜縄文（RL＋結節）	
56	137		100T(9F13)	Vc～Vd	鉢	1	口～体	16.5	21.0		(11.4)				Ⅱc	にぶい黄橙(10YR7/2)	コゲ	スス	沈	山形突起　口端:キザミ・沈線　体:三角連繋沈線文(２段)・連繋入組文・円形刺突列	内外面黒漆･赤彩　破断面スス
56	138		9F23･24	Vc,VIa1	鉢	2	口～体	18.9			(9.3)				Ⅰc	灰黄(2.5Y7/2)	スス	コゲ	沈	口:端:A突起・B突起　口:キザミ　頸:平行沈線＋縦スリット　体:結節斜縄文(LR＋結節)	頸:ミガキ
56	139		100T	Vc～Vd	浅鉢	2a i	口～底	(29.1)		7.5	(14.7)	6	18	12	Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)			肥厚	口:頸:無文　肩:メガネ状隆帯　体：縄文帯(LR)→三角連繋沈線文(三角形内磨消)	ミガキ
56	140		9F23	VIa1	浅鉢	2	肩								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)				肩:メガネ状隆帯	外面黒漆　ミガキ
56	141		9F17	VIa1	浅鉢	2b	体								Ⅱb	黒(10YR2/1)				三角連繋状沈線文	ミガキ
56	142		9F19	VIa1	浅鉢	2b i	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR5/2)				三角連繋沈線文	外面黒漆　ミガキ
57	143		9F23	VIa1	深鉢	有文5b	口～体								Ⅱb	灰黄褐(10YR6/2)	スス		先細	口:無文帯　　篦状刺突文　体:網目状撚糸文（R）（縦位）	口:横ナデ
57	144		100T	Vc～Vd	深鉢	地文1a	口～体								Ⅱb	灰黄(2.5Y6/2)			面取	口:結節回転文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
57	145		9F18	Vc	深鉢	地文1b	口～体								Ⅱa	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ･スス		内削	口:結節回転文　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口端:ミガキ
57	146		9F14	VIa1	深鉢	地文2a	口								Ⅰb	灰黄(2.5Y7/2)		スス	内削	口:無文帯　結節回転文帯	
57	147		9F23	VIa1	深鉢	地文2a	口～体	(18.9)				6		9	Ⅲb	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･スス		面取	口:無文帯　結節回転文　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	内面:ナデ
57	148		9F25	VIa1	深鉢	地文2a	口～体								Ⅲb	灰黄褐(10YR5/2)	スス	スス	先細	口:無文帯　結節回転文　体:結節斜縄文(LR＋結節)　擦痕	地文→縦ケズリ　内面:ケズリ
57	149		9F23	VIa1	深鉢	地文2b	口								Ⅲa	黒褐(2.5Y3/1)	スス		丸	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:横ナデ
57	150		9F18	VIa1	深鉢	地文3	口								Ⅲa	黒褐(10YR3/1)	スス	コゲ		結節斜縄文(LR＋結節)	
57	151		100T(9F20)	VIa1	深鉢	地文3	口～体								Ⅱa	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･スス	スス	内削	結節斜縄文(LR＋結節)	
57	152		100T	Vc～Vd	深鉢	地文3	口～体								Ⅰa	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス	スス	先細	口:端:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口端:横ナデ
57	153		9F14	VIa1	深鉢	地文4	口～体								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ･スス	スス	面取	口:無文帯　体:斜縄文(LR)	口:横ナデ
57	154		9F19,9J25	Vd･VIa1	深鉢	地文4	口～体	20.7				18		18	Ⅰb	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス	コゲ･スス	内削	口:無文帯　体:擦糸文(R)(縦位)	
57	155		9F17･18	VIa1	深鉢	地文4	口～体								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	コゲ･スス		先細	口:無文帯　体:擦糸文(R)(縦位)	
57	156		100T	Vc～Vd	深鉢	地文6	口								Ⅰc	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ			斜縄文(LR)	
57	157		9F18･23	VIa1	深鉢	体3	体								Ⅱa	にぶい黄橙(10YR7/2)		スス		結節斜縄文(0段多条RL＋結節)	

図版No.	報告No.	出土位置		層位	器種	分類	遺存部位	法量(cm)				遺存率(/36)			胎土分類	色調	付着炭化物		口縁端部	文様・施文	備考
		遺構	ｸﾞﾘｯﾄﾞ					口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体			外面	内面	形態		
57	158		9F13	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)		ススﾞ		結節斜縄文(0段多条RL＋結節)	
57	159		9F19	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ	ススﾞ		結節斜縄文(0段多条LR＋結節)	
57	160		9F19	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ			結節斜縄文(LR＋結節)	
57	161		9F24	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅲb	暗灰黄(2.5Y5/2)		ススﾞ		結節斜縄文(RL＋結節)	
57	162		9F23･24,10F1	Vla1	深鉢	体3	体							9	Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)		ススﾞ		結節斜縄文(LR＋結節)	
57	163		9F22	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)				結節羽状縄文(LR+結節・0段多条RL)	
57	164		9F18	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅲa	にぶい黄褐(10YR5/3)				結節羽状縄文(LR+結節・RL)	
57	165		9F13	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅱa	黒褐(10YR3/1)	コゲ			斜縄文(LR)	
57	166		9F22･23	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ	ススﾞ		撚糸文(R)(縦位)	
57	167		9F23	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y7/2)		ススﾞ		撚糸文(R)(縦位)	
57	168		9F23	Vla1	深鉢	底	体～底			9.2			36		Ⅰb	黄灰(2.5Y4/1)	ススﾞ	コゲ･ススﾞ		体:撚糸文(斜位)　擦痕　底:無文	体:斜位ケズリ→地文
57	169		9F18	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰb	暗灰黄(2.5Y5/2)	ススﾞ			網目状撚糸文(R)(縦位)	
57	170		9F22	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)	ススﾞ	コゲ(多)		網目状撚糸文(R)(縦位)	
57	171		9F19	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ			網目状撚糸文(R)(縦位)	
57	172		9F24	Vla1	深鉢	底	体～底			9.0			18		Ⅰb	浅黄(2.5Y8/3)	ススﾞ	コゲ･ススﾞ		体:結節斜縄文(LR＋結節)　底:無文	底外面:横ナデ
57	173		9F18	Vla1	深鉢	底	底			(7.0)			12		Ⅲa	にぶい黄褐(10YR4/3)				無文	
58	174		10F7･8	Vla1	浅鉢	1b	口～体								Ⅰb	黒褐(10YR3/1)			丸	口:無文　体:楕円状文(磨消縄文LR)	外面黒漆　ミガキ
58	175		10E15	Vla1	浅鉢		体								Ⅰa	灰白(2.5Y8/2)	ススﾞ			沈線文　無文	
58	176		10E10･15,10F6	Vla1	壺	1	口～体	13.8	22.8		(21.3)				Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)	ススﾞ		沈	口:無文　頸:刺突列　体上:地文→横長楕円形区画文　地文:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ケズリ→ミガキ
58	177		10F13	Vla1	壺	2	頸～体		24.9						Ⅲa	浅黄(2.5Y7/3)				頸:結節回転文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
58	178		10F7	Vla1	深鉢	地文1a	口～体								Ⅱa	浅黄(2.5Y7/3)			先細	口:結節回転文帯　体:斜縄文(RL)	
58	179		10E15,10F11	Vla1	深鉢	地文2a	口	25.8							Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	ススﾞ		先細	口：無文帯　結節回転文帯	
58	180		10E10	Vla1	深鉢	地文2b	口～体	(27.9)			(23.3)	6		6	Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	内削	口:無文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	口:横ナデ
58	181		10F17･18･23	Vla1	深鉢	地文2b	口～体	(21.6)				9		9	Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	丸	口:無文帯　体:結節斜縄文(L＋結節)	口:横ナデ
58	182		10F6	Vla1	深鉢	地文2b	口～体								Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･ススﾞ		丸	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	内面:ケズリ
58	183		10F3	Vc	深鉢	地文4	口～体	(24.6)				9		9	Ⅰc	灰黄(2.5Y7/2)		ススﾞ	内削	口:無文帯　体:結節羽状縄文(R・LR＋結節)	口:横ナデ
59	184		10F14	Vc	深鉢	地文4	口～体								Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/2)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	面取	口:無文帯　体:網目状撚糸文(R)(縦位)	
59	185		10F11･12	Vla1	深鉢	地文5	口～体	(29.7)				6		6	Ⅰb	にぶい黄橙(10YR7/2)	ススﾞ		先細	口:結節斜縄文(L＋結節)　体:結節斜縄文(L＋結節)(縦位)	
59	186		10E10･15	Vla1	深鉢	地文6	口～体	(21.6)				9		9	Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)	ススﾞ		内削	斜縄文(LR)	
59	187		10F3	Vd	深鉢	地文6	口～体	(26.1)				6		9	Ⅰa	灰黄(2.5Y7/2)			面取	結節斜縄文(RL＋結節)	
59	188		10E15	Vla1	深鉢	地文6	口～体	(30.6)				6		9	Ⅲa	灰黄(2.5Y7/2)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	丸	結節羽状縄文(0段多条RL＋結節・0段多条LR＋結節)	内面:ケズリ
59	189		10F8	Vla1	深鉢	地文6	口～体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)			内削	網目状撚糸文(R)	
59	190		10E15	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰa	にぶい黄(2.5Y6/4)	コゲ･ススﾞ			結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	
59	191		10E15,10F11	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰa	にぶい黄褐(10YR5/4)		ススﾞ		結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)	
59	192		10F12	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰb	褐灰(10YR4/1)	ススﾞ	ススﾞ		結節羽状縄文(LR・結節＋RL)	
59	193		10F13	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)	ススﾞ	ススﾞ		結節羽状縄文(RL・LR＋結節)	
59	194		10F1	Vc･Vla1	深鉢	体3	体								Ⅲa	灰黄褐(10YR5/2)				結節斜縄文(LR＋結節)	
59	195		51T		深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄(2.5Y6/3)	コゲ	コゲ･ススﾞ		結節斜縄文(RL＋結節)	
59	196		10F7	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅲa	灰黄(2.5Y6/2)		ススﾞ		結節斜縄文(LR＋結節)	
59	197		10F10	Vla1	深鉢	体3	体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR/2)		ススﾞ		結節斜縄文(LR＋結節)	
59	198		10E25	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ	コゲ(多)		斜縄文(LR)	
60	199		10F8	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)				羽状縄文(LR・RL)	
60	200		10F6	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)				斜縄文(L)　網目状撚糸文(R)	
60	201		10F7	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)		ススﾞ		網目状撚糸文(R)	
60	202		10F13	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)	ススﾞ			網目状撚糸文(R)	
60	203		10F7	Vla1	深鉢	体4	体								Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	ススﾞ			網目状撚糸文(R)(斜位)	
60	204		10F7･16	Vla1	深鉢	底	体～底			7.5			36		Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)	ススﾞ	コゲ･ススﾞ		体:斜縄文(LR)　底:無文	底外面:横ケズリ　底面:ケズリ
60	205		9G24	Vd	深鉢	有文3a	口～体								Ⅰa	黄灰(2.5Y5/1)	ススﾞ		面取	口:平行沈線文　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口:ミガキ
60	206		10G5	Vd	深鉢	地文4	口～体	(24.0)				3		4	Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ		先細	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)(縦位)	
60	207		9F23,10G2･3	Vd･Vla1	深鉢	地文5	口～体								Ⅰb	黄灰(2.5Y4/1)	ススﾞ	ススﾞ	丸	口:撚糸文(R)　体:撚糸文(R)(縦位)	
60	208		10G2	Vd	深鉢	地文4	口～体								Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)	コゲ･ススﾞ		面取	口端:無文帯　体:結節羽状縄文(0段多条RL＋結節・LR＋結節)	口端:ミガキ
60	209		9G25	Vd	深鉢	地文6	口～体								Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ		突出	斜縄文(LR)	口:横ナデ
60	210		10G2	Vd	深鉢	体3	体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ	ススﾞ		結節斜縄文(LR＋結節)	
60	211		10G3	Vd	深鉢	体3	体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)	ススﾞ			結節斜縄文(RL＋結節)	
60	212		10G13	Vd	深鉢	体4	体								Ⅰb	灰黄(2.5Y7/2)				網目状撚糸文(R)	
60	213		10H7	Vd	浅鉢	2･3	口								Ⅲa	黒褐(10YR3/1)			肥厚　沈	無文	ミガキ
60	214		10H4	Vd	深鉢	有文3a	口								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)	ススﾞ		内削	口:平行沈線文帯　体:結節回転文	口:ミガキ
60	215		10H1	Vla1	深鉢	有文6	口								Ⅱa	黒(10YR2/1)	ススﾞ	ススﾞ	丸	指頭圧痕文　平行沈線文	
60	216		10H10	Vd	深鉢	地文2a	口～体								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)	ススﾞ		内削	口:無文帯　結節回転文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	
60	217		10H5	Vd	深鉢	地文1b	口								Ⅰa	にぶい黄橙(2.5Y6/3)		ススﾞ	丸	口:結節回転文帯	
60	218		10H8	Vd	深鉢	地文2b	口								Ⅰa	黒褐(2.5Y3/1)	ススﾞ	コゲ･ススﾞ	内削	口:無文帯　結節斜縄文(LR＋結節)	口:横ナデ
60	219		10H10,10I22,2K-III-11	Vd	深鉢	地文3	口～体	30.3							Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	内削　突出	結節斜縄文(LR＋結節)	地文→ナデ
60	220		10H1	Vla1	深鉢	地文3	口～体								Ⅰa	にぶい黄(2.5Y6/3)	ススﾞ		内削　突出	結節斜縄文(LR＋結節)	内面:ケズリ
60	221		10H4	Vd	深鉢	地文4	口～体	(23.1)				5		5	Ⅰc	暗灰黄(2.5Y4/2)		ススﾞ		口端:小突起　口:無文帯　体:網目状撚糸文(R)	口:横ナデ
60	222		10H2	Vla1	深鉢	底	底			8.1			36		Ⅰa	灰黄(2.5Y6/2)				無文	外面:横ナデ　底面:ナデ
61	223		10I2	Vd	深鉢	有文3b	口～体								Ⅲa	黒褐(10YR3/1)			沈	口:端:小波状　口:平行沈線文帯　体:斜縄文(LR)	口:ミガキ
61	224		10I2	Vd	深鉢	地文1a	口～体								Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)			内削	口:結節回転文帯　体:結節羽状縄文(0段多条LR＋結節・RL＋結節)(施文帯内縦位羽状)	
61	225		9I22,10I2	Vd	深鉢	地文1a	口～体	25.8							Ⅰc	灰黄(2.5Y6/2)	ススﾞ		先細	口:結節回転文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	
61	226		10I3	Vd	深鉢	地文1a	口～体	21.9							Ⅰb	灰黄(2.5Y6/2)		ススﾞ	先細	口:結節回転文帯　体:結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	口端:横ナデ
61	227		9I24,9J18	Vd	深鉢	地文3	口～体								Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ		先細	口端:無文　体:結節斜縄文(L＋結節、LR＋結節)	口端:横ナデ
61	228		9I22,10I7	Vd	深鉢	体2	体								Ⅰc	灰黄褐(10YR6/2)				結節回転文帯	
61	229		10G4,9I18･23,10I9	Vc･Vd	深鉢	底	体～底			6.6			18	18	Ⅰa	灰黄褐(10YR6/2)	ススﾞ	ススﾞ		体:撚糸文(R)(縦位)　底:無文	
61	230		9I15,9J11	Vd	浅鉢	1aii	口～体	35.7						9	Ⅲb	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ	ススﾞ	沈	口:縁:沈線　口:刺突列　肩:円形刺突列　体：楕円状文(磨消縄文O段多条LR)	破断面スス付着
61	231		9G22,9J16,10J2	Vd,Vla1	浅鉢	2aii	口～体								Ⅲb	褐灰(10YR4/1)			肥厚	口:頸:無文　肩:メガネ状降帯　体：平行沈線文・縄文帯(LR)→三角連繋沈線文	外面黒漆・赤彩　ミガキ
61	232		9J17	Vd	浅鉢	2	体								Ⅲb	にぶい黄橙(10UR7/2)				三角状モチーフ(磨消縄文LR)	ミガキ
62	233		9J21･22	Vd	浅鉢	2bii	体								Ⅲb	黒褐(10YR3/1)		ススﾞ		頸:無文　肩:メガネ状降帯　体:三角連繋沈線文　平行沈線文帯	外面黒漆・赤彩　ミガキ
62	234		9J16	Vd	深鉢	有文1	口								Ⅲb	黒褐(10YR3/1)	ススﾞ	ススﾞ	内削	集合短沈線文・平行沈線文帯	ミガキ
62	235		10F2,9J11･16･22･23	Vd	深鉢	有文5a	口～体	31.5							Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)	ススﾞ	ススﾞ	内削	口:無文帯　沈線文　体:結節回転文　羽状縄文(施文帯内縦位羽状)	口:横ナデ　内面:ケズリ
62	236		9J17･21,10J1	Vd	深鉢	有文6	口～体	30.0							Ⅰa	褐灰(10YR6/1)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	丸	口:粘土紐接合痕　沈線文　指頭圧痕文　体:結節斜縄文(LR＋結節)	口内面:ケズリ→ナデ
62	237		9I19,9J11	Vd	深鉢	地文2a	口～体	20.4							Ⅰc	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ･ススﾞ	ススﾞ	肥厚	口端:肥厚　口:無文帯　結節回転文　体:結節斜縄文(O段多条LR＋結節)	口:横ケズリ→横ナデ
62	238		9J21･22	Vd	深鉢	地文3	口～体	(29.4)				6		6	Ⅰa	にぶい黄(2.5Y6/3)	コゲ･ススﾞ		内削	口端:無文帯　体:結節斜縄文(O段多条LR＋結節)	口端:横ナデ
62	239		9J22	Vd	深鉢	地文3	口～体	32.4							Ⅰc	灰黄(2.5Y7/2)	ススﾞ	ススﾞ	沈	口端:無文　結節斜縄文(LR＋結節)	
62	240		9J22	Vd	深鉢	体3	体							18	Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)				結節羽状縄文(R＋結節・LR＋結節)　縦位羽状縄文(LR・R)	
62	241		10J2	Vd	深鉢	地文1a	口								Ⅲa	黄灰(2.5Y4/1)			内削	口:結節回転文	口:ミガキ

図版№	報告№	出土位置		層位	器種	分類	遺存部位	法量(cm)				遺存率(/36)			胎土分類	色調	付着炭化物		口縁端部	文様・施文	備考
		遺構	ｸﾞﾘｯﾄﾞ					口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体			外面	内面	形態		
62	242		9J17	Ⅴd	深鉢	地文3	口								Ⅲa	浅黄(2.5Y7/3)			突出	口:結節回転文	
62	243		9J12	Ⅴd	深鉢	体4	体								Ⅱa	暗灰黄(10YR5/2)				綱目状撚糸文(R)(横位)(縦位)	内面:ナデ
62	244		10F8	Ⅵb	深鉢	有文5a	口								Ⅰa	にぶい黄橙(10YR7/2)	コゲ		沈	口端:刺突文　口:沈線文　体:斜縄文(RL)	
62	245		10F12	Ⅵa3	深鉢	体1	体								Ⅱa	灰黄(2.5Y7/2)				平行沈線文　結節斜縄文(LR＋結節)	
62	246		10F13	Ⅵa3	深鉢	体1	口～体								Ⅳ	灰黄褐(10YR5/2)	コゲ･ススス	ススス		沈線文　綱目状撚糸文(R)(縦位)	
62	247		10F24	Ⅵa3	深鉢	地文2b	口～体								Ⅱa	灰黄(2.5Y7/2)	ススス		内削	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
63	248		10F2･3	Ⅵa3	深鉢	地文2b	口～体	25.8							Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･ススス		沈　突出	口:無文帯　体:結節斜縄文(RL＋結節)	内面:ナデ
63	249		10F3	Ⅵb	深鉢	地文6	口～体								Ⅰc	浅黄(2.5Y7/3)			先細	結節斜縄文(LR＋結節)	
63	250		10F9	Ⅵa3	深鉢	体3	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ	ススス		結節斜縄文(L＋結節)	
63	251		10F12	Ⅵa3	深鉢	体3	体								Ⅰa	浅黄(2.5Y7/3)	ススス	ススス		結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)	
63	252		10F8	Ⅵa3	深鉢	体4	体								Ⅰa	灰黄褐色(10YR6/2)				綱目状撚糸文(R)(縦位)	
63	253		10G13	Ⅵb'	深鉢	地文2a	口～体	(32.1)			(23.7)	9		9	Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)	コゲ･ススス	コゲ･ススス	沈	口:無文帯　結節回転文帯　体:結節羽状縄文(LR＋結節・RL＋結節)(施文帯内縦位羽状)	
63	254		10G12	Ⅵb'	深鉢	地文1a	口								Ⅰa	灰黄褐色(10YR6/2)		ススス		口:結節回転文帯　体:斜縄文(RL)	
63	255		10G5	Ⅵb'	深鉢	地文4	口～体								Ⅱa	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･ススス		丸	口:無文帯　体:斜縄文(LR)	口:横ナデ
63	256		10G11	Ⅵa2,Ⅵb'	深鉢	地文4	口～体								Ⅳ	灰黄(2.5Y6/2)			内削	口:無文帯　体:綱目状撚糸文(R)	口:横ナデ
63	257		10G7	Ⅵb'	深鉢	地文6	口～体								Ⅲa	黒褐(2.5Y3/1)	コゲ･ススス	コゲ･ススス	面取	斜縄文(LR)	
63	258		9G14	Ⅵb'	深鉢	地文6	口～体								Ⅲa	灰黄褐(10YR5/2)	ススス	ススス	内削	斜縄文(RL)	
63	259		10G12	Ⅵb'	深鉢	底	底			6.6			36		Ⅰb	にぶい黄(2.5Y6/3)	ススス	コゲ･ススス		無文	外面:横ケズリ 底面:ケズリ
63	260		10G15	Ⅵb'	深鉢	底	体～底			9.0			36		Ⅲa	浅黄(2.5Y7/3)		ススス		体:綱目状撚糸文(R)　斜縄文(RL)　底:無文	底外面:横ナデ
63	261		10J6	Ⅵb	鉢	3	口～体								Ⅲb	黒褐(10YR3/1)	ススス	ススス	突出	口端:刺突文　頸:平行沈線文　体:斜縄文(LR)	口:ミガキ　破断面スス付着
63	262		10J8	Ⅵb	深鉢	地文1a	口								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	コゲ･ススス	コゲ	面取	口:結節回転文帯　体:斜縄文(LR)	
63	263		10I14	Ⅵb	深鉢	体5	体								Ⅰb	灰黄褐(10YR6/2)	ススス	ススス		無文　補修孔あり	外面:ナデ　破断面スス付着
63	264		10J16･17	Ⅵb	深鉢	地文2b	口～体	(20.4)				12		12	Ⅰb	淡黄(2.5Y8/3)			丸	口:無文帯　体:結節斜縄文(LR＋結節)	
63	265		10I9,10J11	Ⅵb	深鉢	地文6	口～体	(12.6)			(17.4)	6		6	Ⅰb	浅黄(2.5Y7/3)			内削　突出	斜縄文(LR)　綱目状撚糸文（R）　擦痕	口･底:横ナデ　内面:ケズリ
63	266		10I5	Ⅵb	深鉢	体3	体								Ⅰa	浅黄(2.5Y6/3)	ススス	ススス		結節羽状縄文(RL＋結節・LR＋結節)	

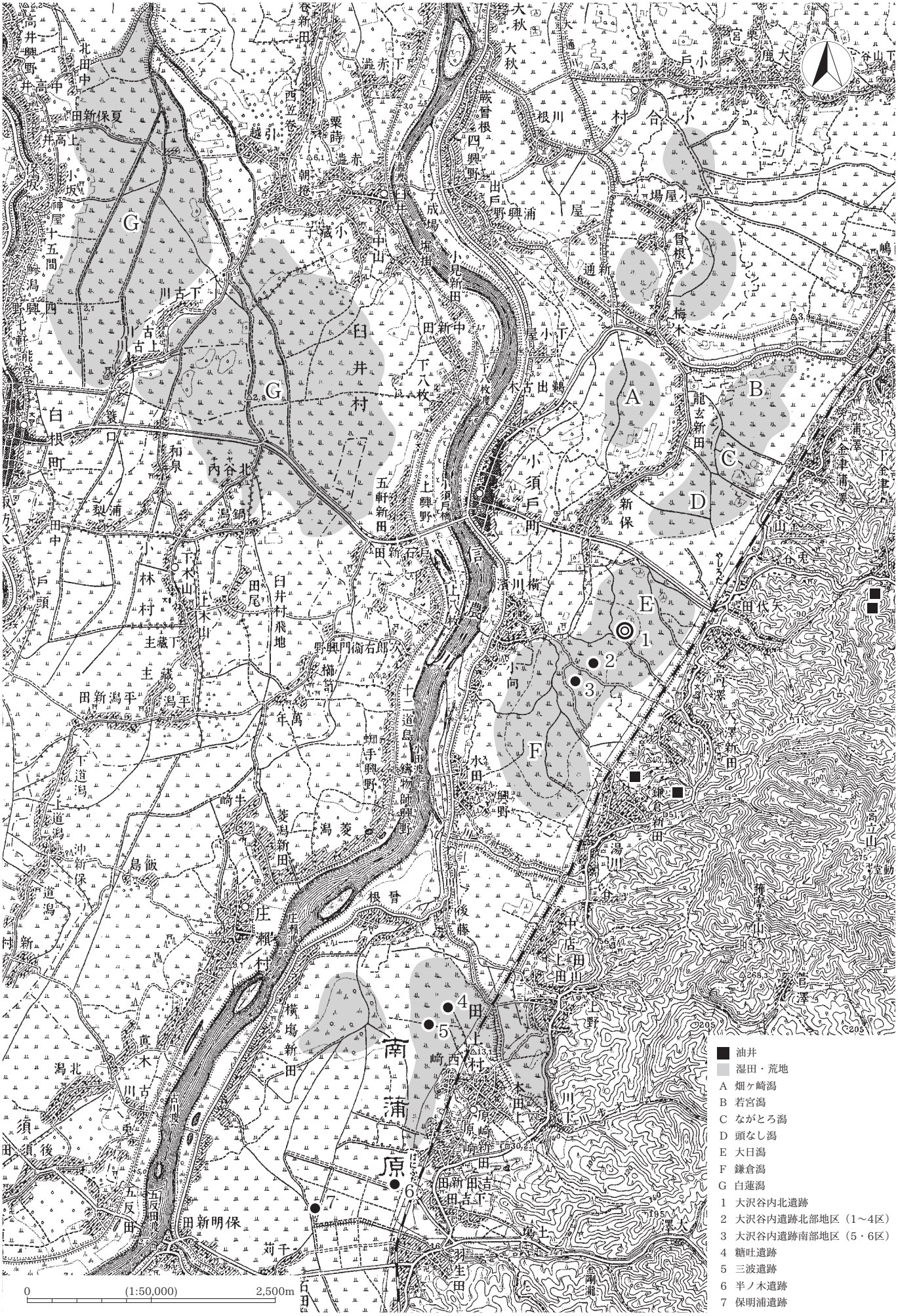
別表3　石器・礫観察表

図版No.	報告No.	出土位置		層位	種別	機種	分類	遺存状態	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
		遺構	ｸﾞﾘｯﾄﾞ							長	幅	厚		
64	1	—	1K-10F15	Ⅵa1	石器	石鏃	凸基有茎	完形	珪質頁岩	3.3	1.1	0.7	1.5	アスファルト付着
64	2	—	1K-10G16	Ⅴd	石器	石鏃	平基有茎	先端・基部欠損	珪質頁岩	2.9	1.7	0.6	2.5	アスファルト付着
64	3	—	1K-10E20	Ⅲd	石器	石鏃	凹基有茎	先端・基部欠損	流紋岩	2.0	1.2	0.5	1	
64	4	—	1K-10H6	Ⅴd	石器	石鏃未成品	凹基無茎	片側基部欠損	黒曜石	3.8	1.7	0.5	3.1	
64	5	SK64	1K-10F8	1	石器	剥片	—	完形	黒曜石	1.9	2.1	0.8	3.2	被熱有
64	6	SK220	1K-10I5	2	石器	磨石・敲石類	4類	完形	泥質砂岩	7.3	4.6	3.9	186.3	
64	7	—	1K-9H14	Ⅵb	石器	磨石・敲石類	2類	1/2欠損	黒雲母ホルンフェルス	8.6	6.3	4.4	318.4	
64	8	—	1K-10F7	Ⅵa1	石器	磨石・敲石類	1類	完形	黒雲母花崗岩	8.6	8.0	5.6	499	
64	9	—	1K-9J17	Ⅴd	石器	磨石・敲石類	4類	完形	ホルンフェルス	10.8	6.9	5.8	591.3	
64	10	—	1K-10H6	Ⅵa1	石器	磨石・敲石類	4類	完形	チャート	8.2	7.4	5.8	475.3	
64	11	—	1K-9F19	Ⅴc	石器	磨石・敲石類	3類	1/2欠損	流紋岩質凝灰岩	6.7	6.2	3.4	154.3	
64	12	—	2K-2G6	Ⅲd	石器	磨石・敲石類	3類	1/2欠損	泥岩	8.1	6.6	4.7	235.5	
64	13	SK182	1K-10I5	3	自然礫	—	4類	完形	輝石安山岩	11.9	11.1	3.2	637.1	
65	14	—	1K-10G18	Ⅵb	石器	石皿	2類	完形	砂岩	26.4	15.8	6.6	3802.0	
65	15	—	1K-10F14	Ⅵa3	石器	石皿	1類	完形	砂岩	23.2	13.4	6.0	3050.1	
65	16	SK235	1K-10F7	1	石器	石皿	2類	一部欠損	デイサイト	17.8	13.7	5.6	1733.6	接合
66	17	—	1K-9J24	Ⅴc	石器	石皿	2類	完形	角閃石黒雲母花崗岩	19.6	18.0	5.2	2761.4	
66	18	—	1K-9G24	Ⅵb	石器	石皿	2類	欠損	輝石安山岩	13.4	14.5	5.3	1105.9	
66	19	SK308	1K-10G8	1	石器	石皿	2類	欠損	輝石安山岩	15.5	9.7	5.8	970.7	被熱有
66	20	—	1K-10H2	Ⅴd	石器	石皿	2類	完形	角閃石安山岩	15.2	13.0	4.4	1085.6	
66	21	—	1K-9F14	Ⅵa1	石器	石皿	2類	欠損	輝石安山岩	16.4	14.5	6.0	1458.8	被熱有
67	22	SK268	1K-10H14	1	石器	石皿	2類	欠損	デイサイト	13.0	11.8	7.0	1157.5	被熱有
67	23	—	1K-10I7	Ⅵb	破損礫	—	1類	先端欠損	流紋岩質凝灰岩	11.1	6.0	3.8	245.4	
67	24	—	1K-10F4	Ⅵa1	破損礫	—	3類	1/2欠損	花崗閃緑斑岩	11.1	9.1	6.7	972.1	
67	25	—	1L-8A18	Ⅴd	破損礫	—	3類	剥片状欠損	砂岩	11.5	7.1	2.7	252.1	
67	26	—	1K-9J17	Ⅴd	破損礫	—	3類	剥片状欠損	流紋岩	7.3	3.7	2.2	52.9	
67	27	—	1K-10H4	Ⅵa1	破損礫	—	1類	一部欠損	輝石安山岩	9.2	5.4	1.5	95.0	
67	28	—	1K-10H5	Ⅴd	破損礫	—	1類	1/2欠損	ホルンフェルス	9.5	9.3	3.5	370.4	
67	29	—	1K-9J16	Ⅴd	破損礫	—	3類	3面欠損	砂岩	10.0	8.6	4.4	535.2	発掘時破損
67	30	—	1K-10F8	Ⅵa1	破損礫	—	1類	先端～側面欠損	シルト岩	21.6	6.9	7.1	1257.8	
68	31	—	1K-8J12	Ⅴd	破損礫	—	1類	一部欠損	珪質頁岩	14.6	12.1	7.7	2226.0	
68	32	SK18	1K-10G8	1	破損礫	—	2類	先端一部欠損	砂岩	21.0	9.5	7.2	2098.0	
68	33	—	1K-10G9	Ⅴd	破損礫	—	3類	2面欠損	砂岩	8.6	5.1	5.5	275.3	発掘時破損
68	34	—	1K-10J1	Ⅴd	破損礫	—	2類	3面欠損	かんらん石玄武岩	6.7	3.9	4.1	108.5	
68	35	—	1K-9G23	Ⅴc	破損礫	—	3類	2面欠損	輝石安山岩	14.9	10.0	7.5	906.6	
68	36	—	1K-10E24	Ⅵa1	自然礫	—	2類	完形	砂岩	12.3	6.2	7.2	787.3	自然半割
68	37	—	1K-9J11	Ⅴd	自然礫	—	2類	完形	砂岩	8.3	6.5	5.1	342.4	発掘時破損
68	38	—	1K-9J19	Ⅵb	自然礫	—	4類	完形	砂岩	13.0	6.9	2.9	311.0	発掘時破損
69	39	—	1K-10H7	Ⅵa1	自然礫	—	1類	完形	チャート	19.0	14.1	11.4	4278.0	
69	40	SK14	1K-10G7	1	自然礫	—	2類	完形	角閃石輝石デイサイト	12.0	11.2	8.0	1087.3	
69	41	—	1L-9A1	Ⅴd	自然礫	—	2類	完形	黒雲母流紋岩	10.7	9.7	5.7	767.7	
69	42	—	1K-10H7	Ⅵa1	自然礫	—	2類	完形	泥岩(チャート質)	9.2	9.1	6.2	630.8	
69	43	—	1K-9F23	Ⅴc	自然礫	—	2類	完形	チャート	12.5	10.2	8.5	1396.4	
69	44	—	1K-10I1	Ⅵa3	自然礫	—	4類	完形	流紋岩	12.5	11.9	4.0	937.5	
69	45	土器集中80	1K-9I24	Ⅴd	自然礫	—	3類	完形	泥岩(チャート質)	12.6	6.9	4.8	550.2	
69	46	—	1K-10F18	Ⅵa1	自然礫	—	3類	完形	泥岩(チャート質)	13.0	7.7	5.8	813.7	
69	47	—	1K-9J14	Ⅵb	自然礫	—	2類	完形	多孔質流紋岩	9.8	7.5	6.1	511.8	
69	48	—	2K-1E4	Ⅵa1	自然礫	—	5類	完形	カタクラサイト(チャート)	4.9	4.1	3.2	100.1	
69	49	—	1K-9J16	Ⅴd	自然礫	—	5類	完形	流紋岩質凝灰岩	4.5	3.0	1.6	14.4	
69	50	—	1K-10F9	Ⅵa3	自然礫	—	5類	完形	泥岩	3.3	2.0	1.7	6.9	
69	51	—	1K-10I7	Ⅵa3	自然礫	—	5類	完形	流紋岩質凝灰岩	3.0	1.9	1.2	8.9	
69	52	—	1K-10H5	Ⅴd	自然礫	—	5類	完形	チャート	4.3	2.4	2.2	29.5	
69	53	—	1K-10F3	Ⅴd	自然礫	—	5類	完形	シルト岩	4.2	2.6	1.9	17.8	
69	54	SK19	1K-10G8	2	自然礫	—	5類	完形	流紋岩	4.0	2.7	1.4	13.8	

別表4　木製品・漆製品観察表

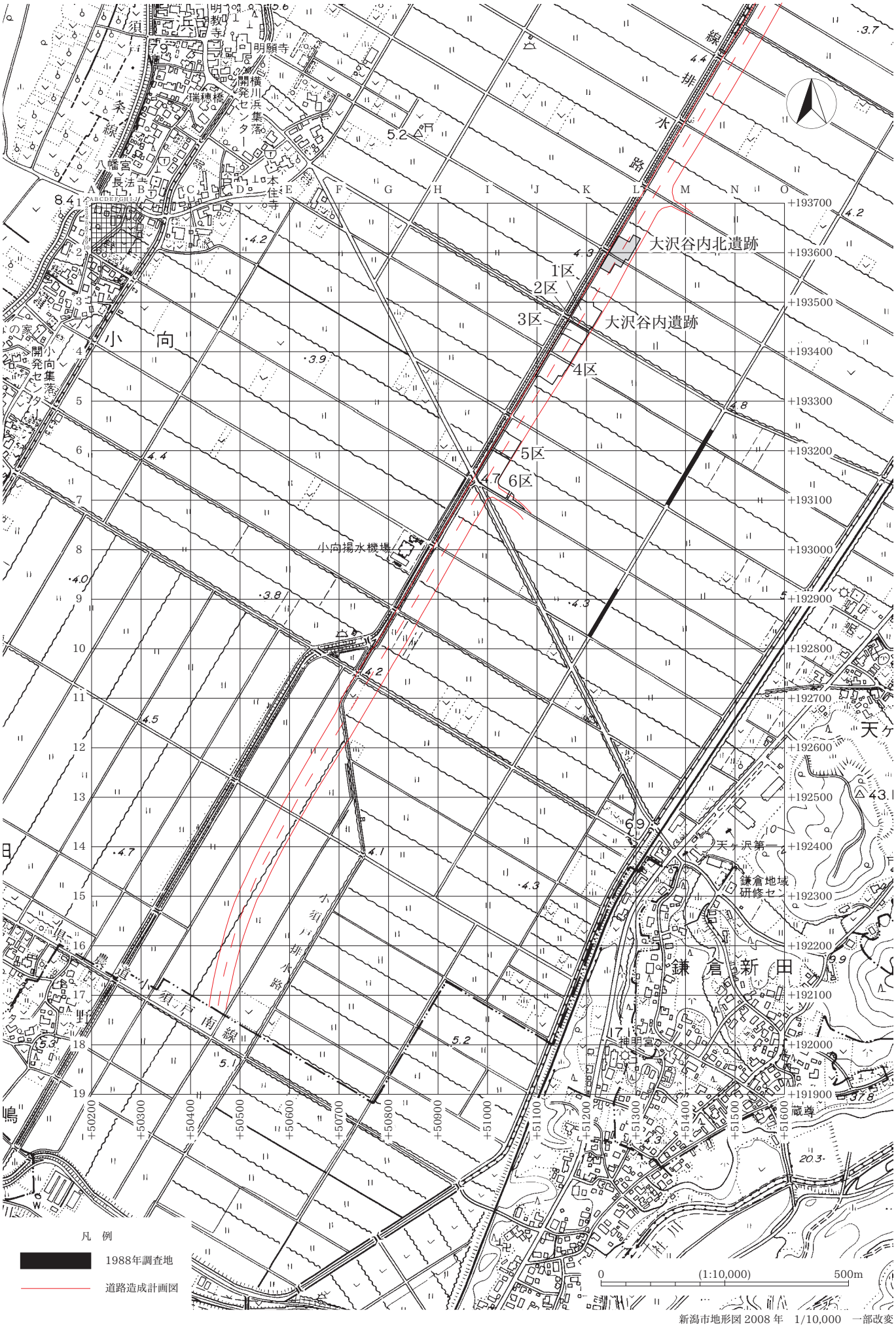
図版No.	報告No.	出土位置		層位	種別	分類	木取り	遺存状態	被熱	樹種	法量(cm)					備考
		遺構	グリッド								長	幅	厚	径	器高	
70	1		1K-10F9	Ⅴd	結歯式竪柵	—	—	歯材欠損	—	—	1.4	9.7	1.3	—	—	歯材孔18
70	2		1K-9F13	Ⅴc	結歯式竪柵	—	—	歯材欠損	—	—	1.8	8.1	0.7	—	—	歯材孔13
70	3		1K-10I3	Ⅵb	櫂	—	板目	先端欠損	—	ヤマグワ	72.7	14.4	3.5	—	—	先端破損面磨耗
71	4		1K-10F15	Ⅵa2	板材	—	板目	両端欠損	—	クリ	29.0	21.9	5.3	—	—	
71	5		1K-10J7･8	Ⅵb	板材	—	柾目	完形	—	クリ	30.3	15.8	4.2	—	—	石斧加工痕
72	6		1K-10I9	Ⅵb	角柱材	—	板目	両端欠損	—	カエデ属	40.0	4.8	4.2	—	—	
72	7		1K-9J19	Ⅵa2	板材	—	偏割	完形	—	—	15.7	9.3	4.1	—	—	石斧加工痕
72	8		1K-10H6	Ⅵb	伐採木	—	丸木	一端炭化	有	エノキ属	21.2	8.6	—	6.4	—	
72	9		1K-10I3	Ⅵb	角柱材	—	板目	両端炭化	有	—	21.2	5.2	4.2	—	—	
72	10		1K-10H3	Ⅵb	板材	—	板目	一端欠損・炭化	有	ヤマグワ	24.2	7.3	4.2	—	—	
72	11		1K-10I1	Ⅵb	板材	—	板目	一端欠損・炭化	有	—	21.5	6.9	3.6	—	—	
73	12		1K-9I18	Ⅵb	偏割材	—	偏割	完形	有	ヤマグワ	29.3	16.5	6.9	—	—	石斧加工痕
73	13		1K-10I7･8	Ⅵb	伐採木	—	丸木	一端炭化	有	—	29.2	13.7	—	6.4	—	石斧加工痕
74	14	Pit284	1K-9J9	Ⅵa1	杭	2類	丸木	一端欠損	—	ハンノキ属	85.8	—	—	18.0	—	樹皮付
74	15	Pit322	1K-10G21	Ⅵa2	杭	4類	丸木	一端欠損	—	トネリコ属	101.0	—	—	10.7	—	樹皮付・石斧加工痕
75	16	Pit300	1K-9I22	Ⅵb	杭	2類	丸木	一端欠損	—	ハンノキ属	74.6	—	—	15.5	—	樹皮付
75	17	Pit294	2K-2E16	Ⅵa2	杭	1類	丸木	一端欠損	—	トネリコ属	43.2	—	—	9.4	—	
76	18	Pit315	1K-10I6	Ⅵa2	杭	1類	丸木	一端欠損	—	ハンノキ属	111.5	—	—	7.8	—	樹皮付
76	19	Pit296	1K-10I1	Ⅵa2	杭	1類	丸木	一端欠損	—	ハンノキ属	105.3	—	—	14.2	—	
77	20	Pit189	1K-9I12	Ⅵa2	杭	1類	丸木	一端欠損	—	トネリコ属	89.3	—	—	13.1	—	
77	21	Pit186	1K-9I8	Ⅵb	杭	1類	丸木	一端欠損	—	トネリコ属	88.7	—	—	13.4	—	
78	22	Pit305	2K-2H17	Ⅵa2	杭	3類	丸木	一端欠損	—	ハンノキ属	85.3	—	—	7.8	—	樹皮付
78	23	Pit314	1K-10H6	Ⅵb	杭	3類	丸木	一端欠損	—	ハンノキ属	56.2	—	—	15.6	—	
78	24	Pit188	1K-9I3	Ⅵa2	杭	1類	丸木	一端欠損	—	トネリコ属	70.4	—	—	6.6	—	
78	25	SK1001	2K-3D20	2	漆器皿	—	横木	1/2欠損	—	—	—	—	—	9.0	1.1	

図　　版

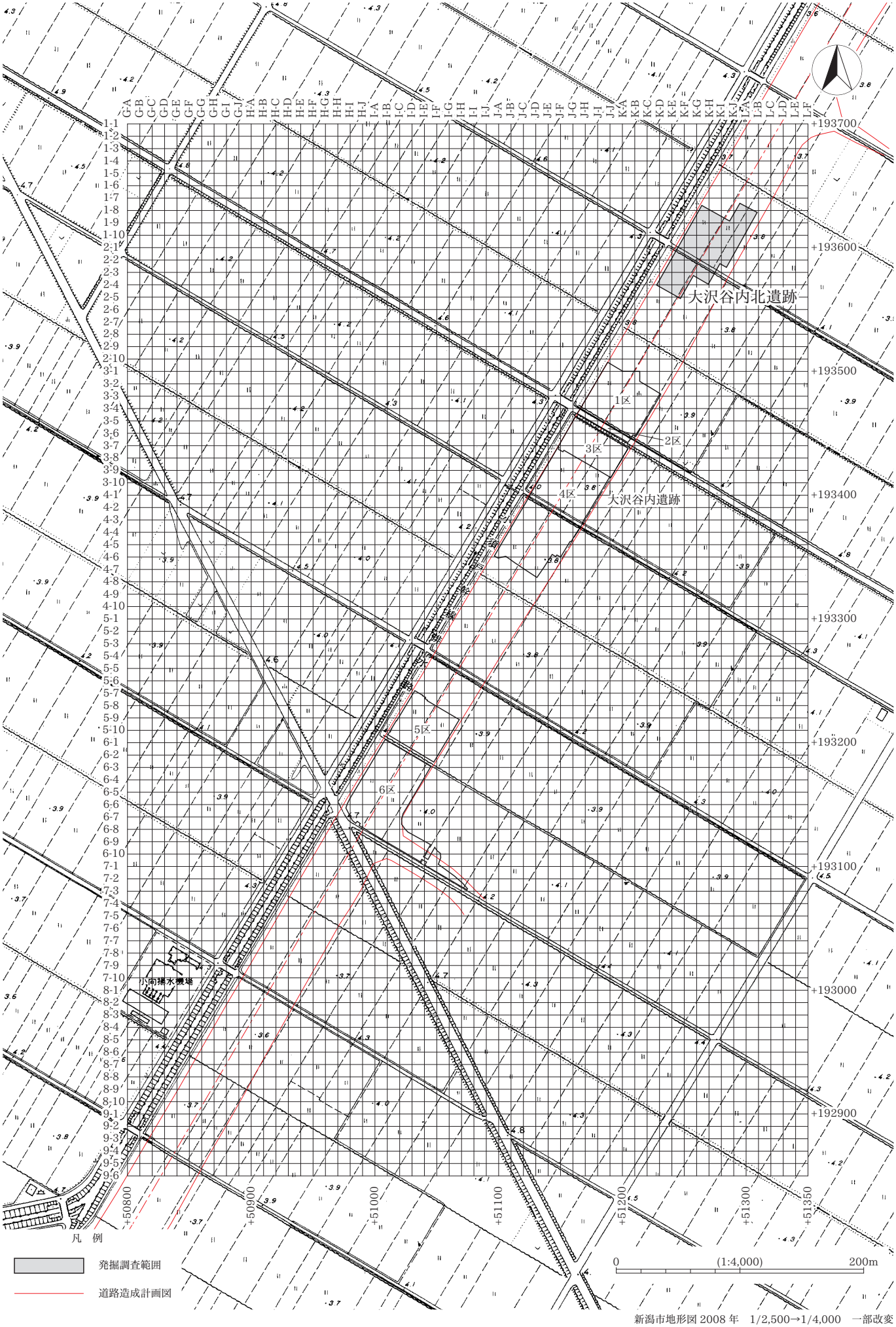


明治 44 年測図　大正 3 年 8 月大日本帝国陸地測量部発行「新津」1/50,000 を使用

グリッド設定図①（1/10,000）



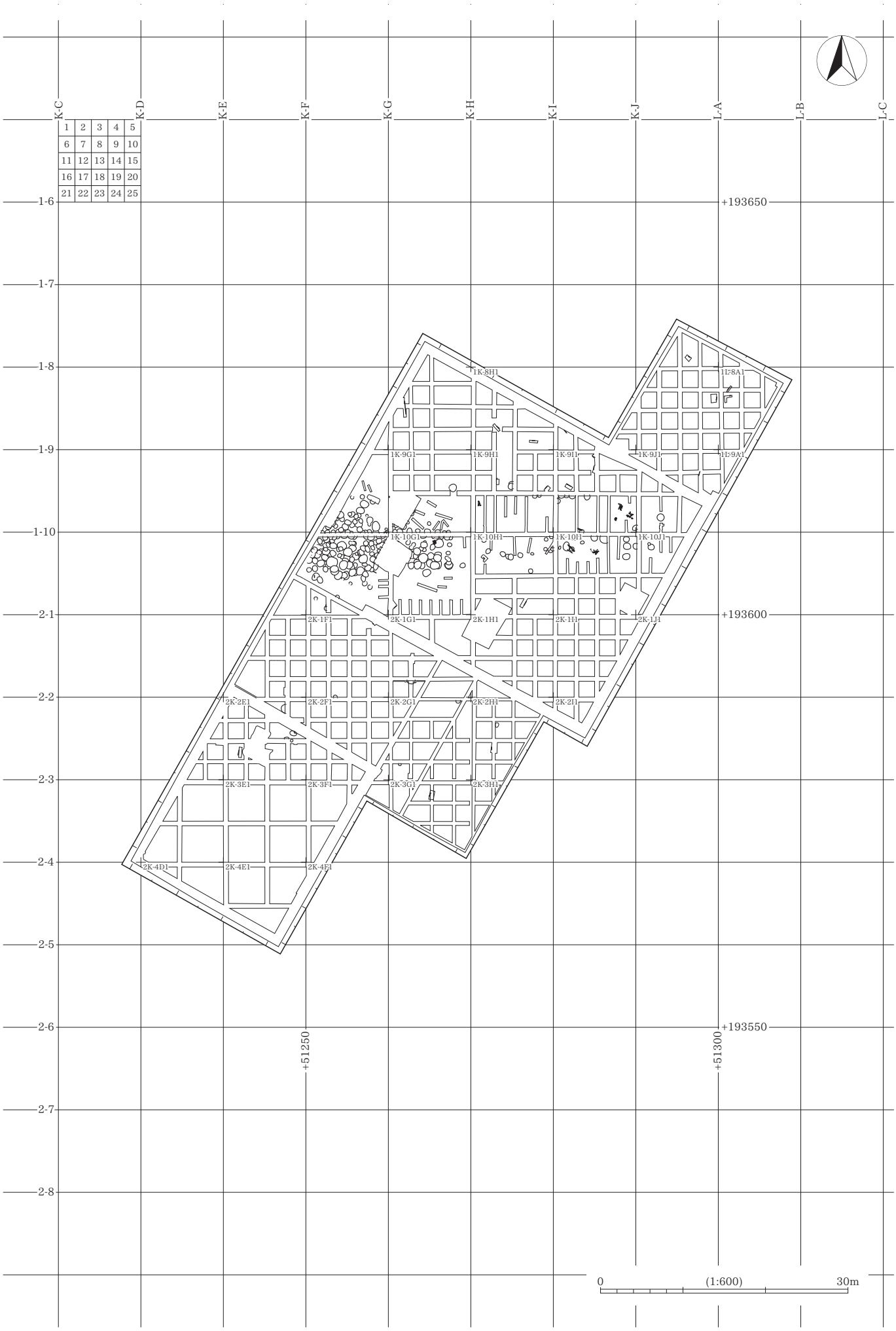
新潟市地形図 2008 年　1/10,000　一部改変

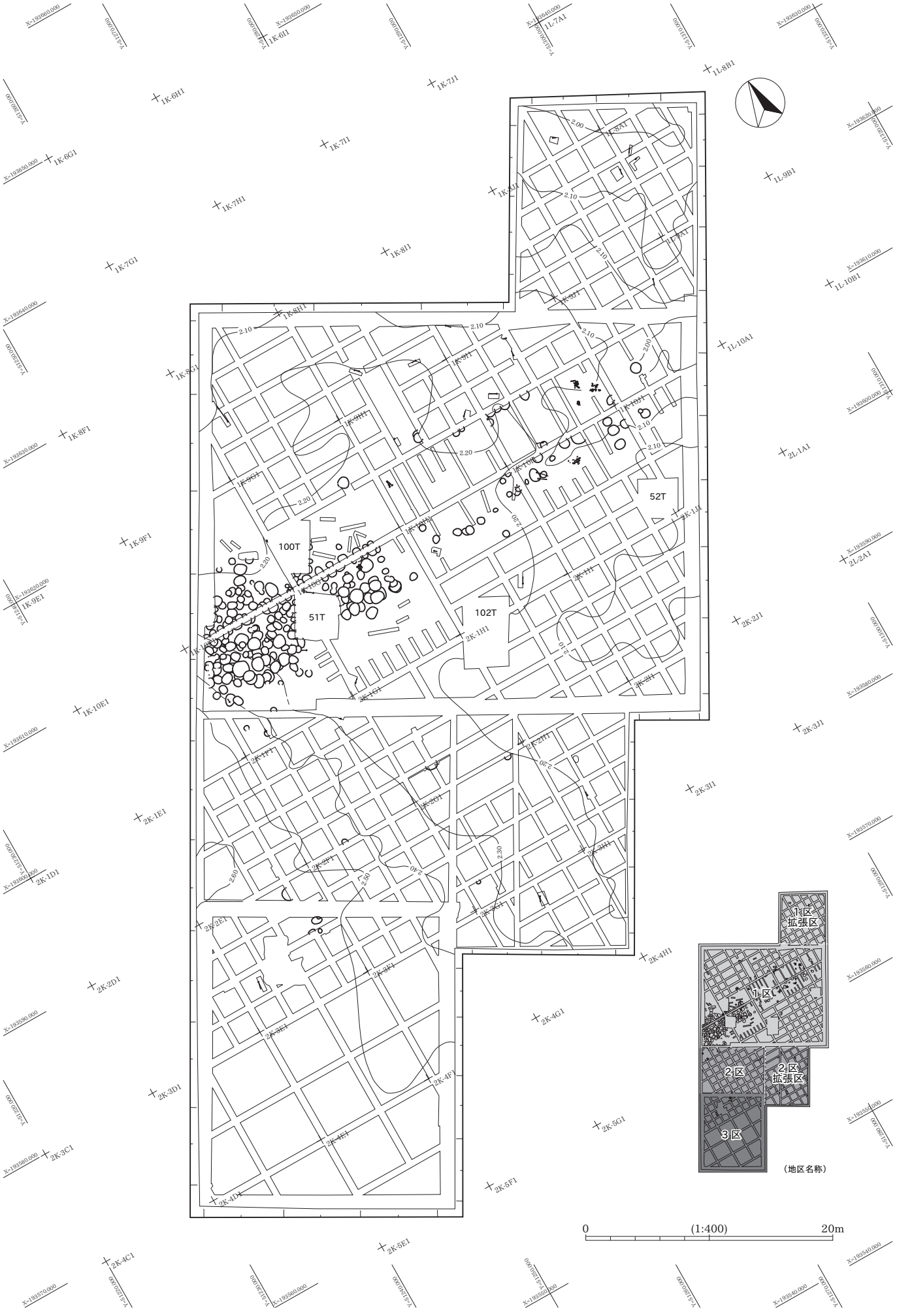


新潟市地形図 2008 年　1/2,500→1/4,000　一部改変

図版４

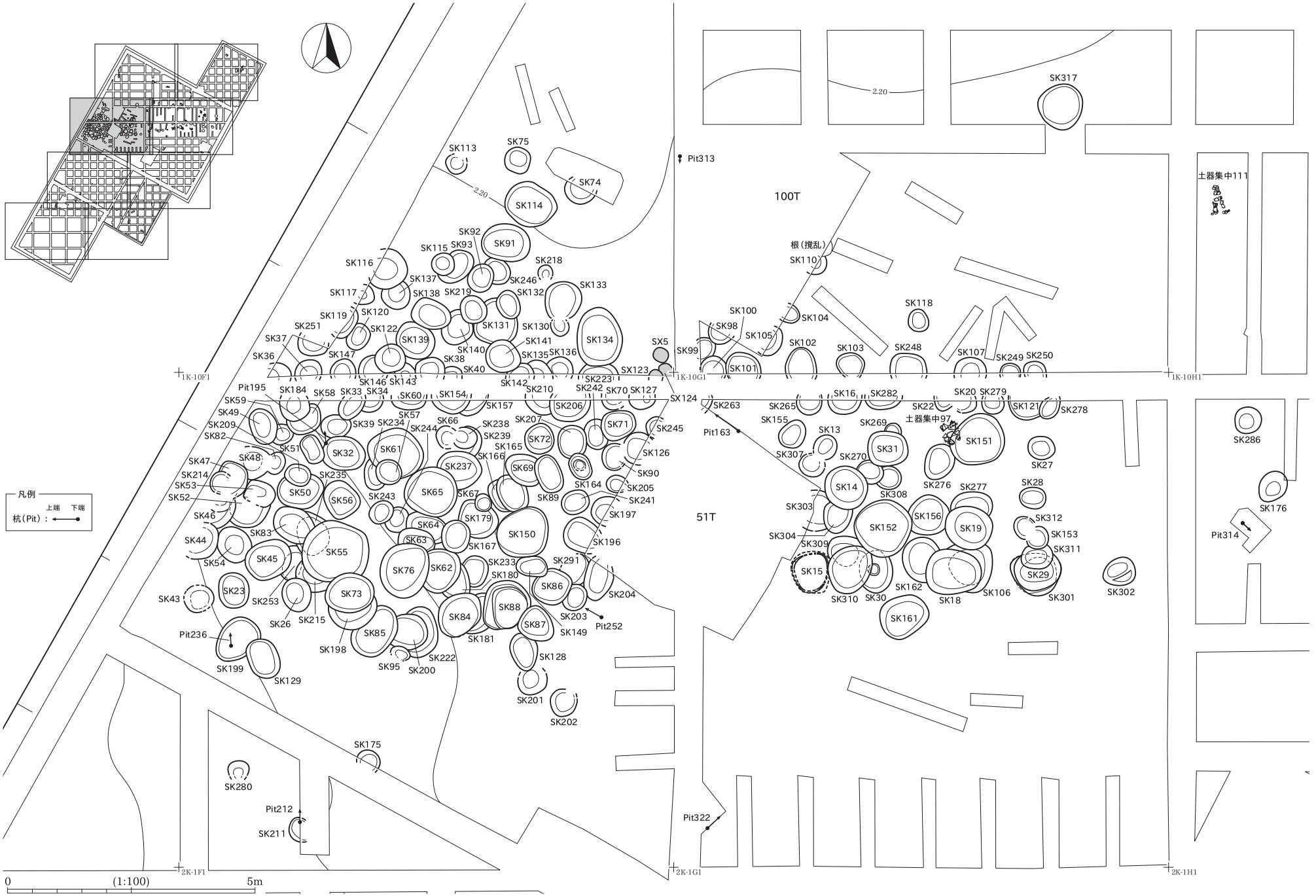
グリッド設定図③（1/600）

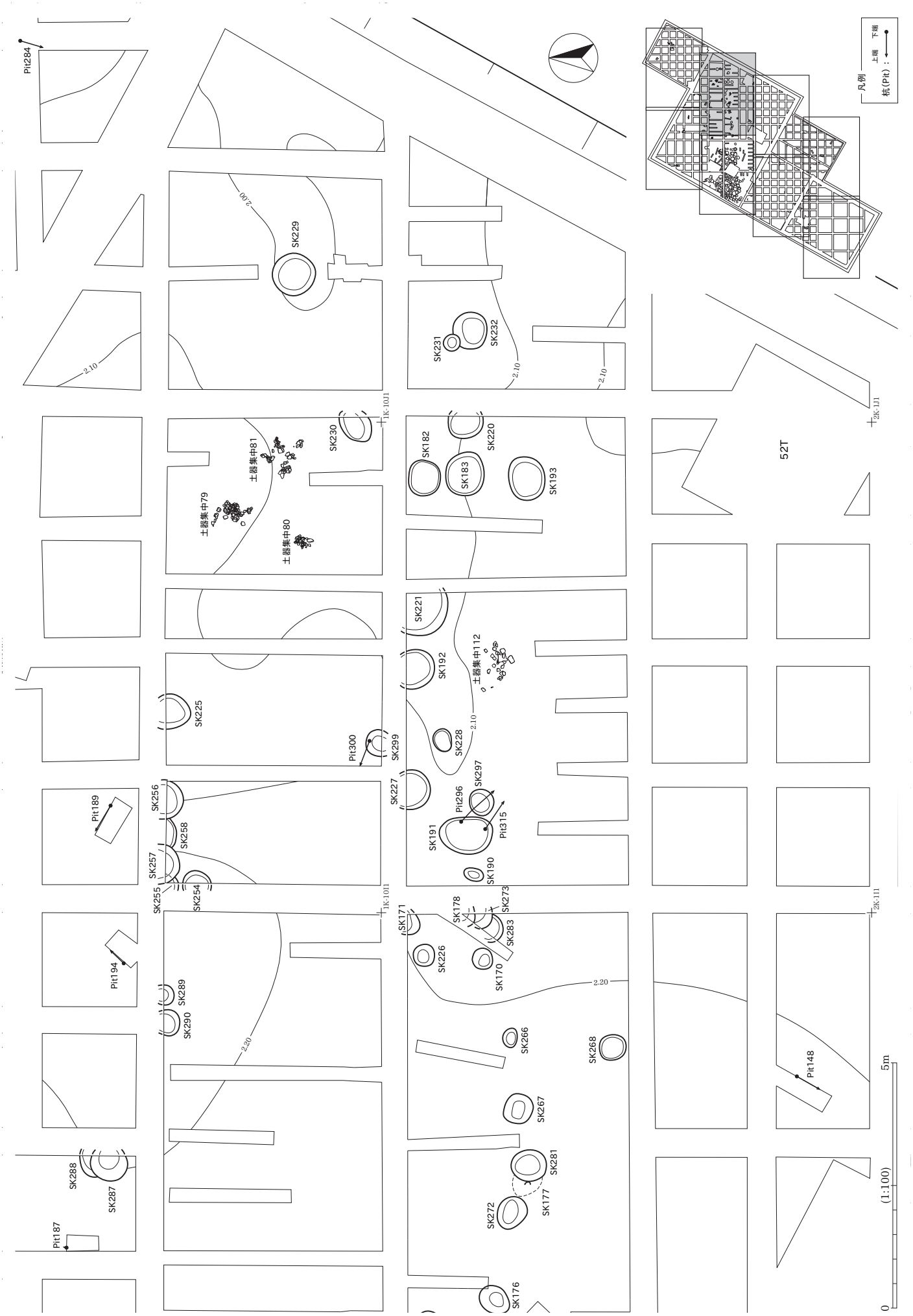



100T
51T
102T
52T
1区
拡張区
1区
2区
2区
拡張区
3区
（地区名称）
0
(1:400)
20m

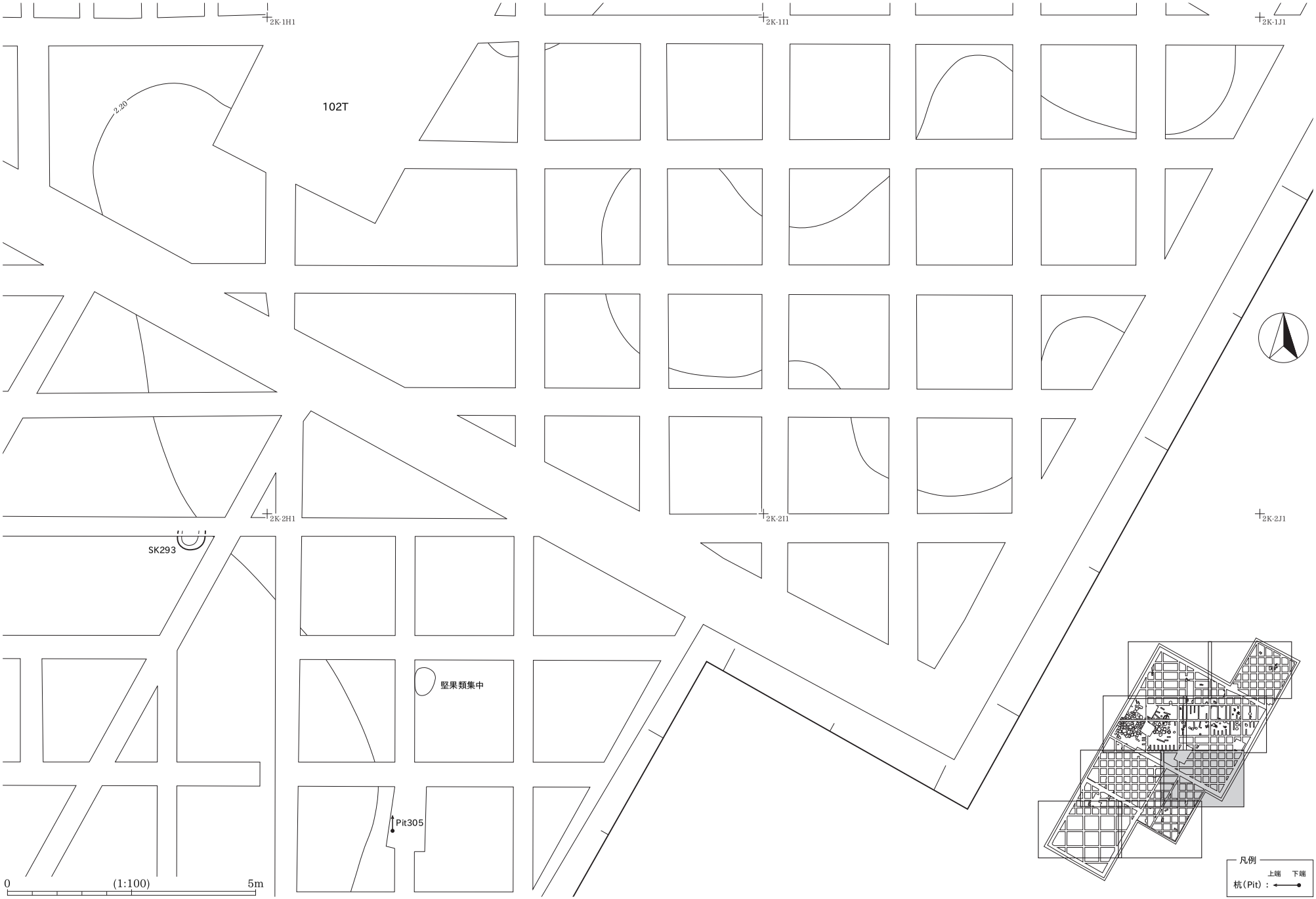
遺構平面分割図 1 （1/100）

凡例
上端　下端
杭(Pit)：
Pit145
Pit144
Pit319
Pit320
Pit284
Pit188
Pit186
Pit298
2.00
2.10
2.10
2.10
LL-8A1
LL-9A1
K-8J1
K-9J1
K-8I1
K-9I1
0
5m
(1:100)

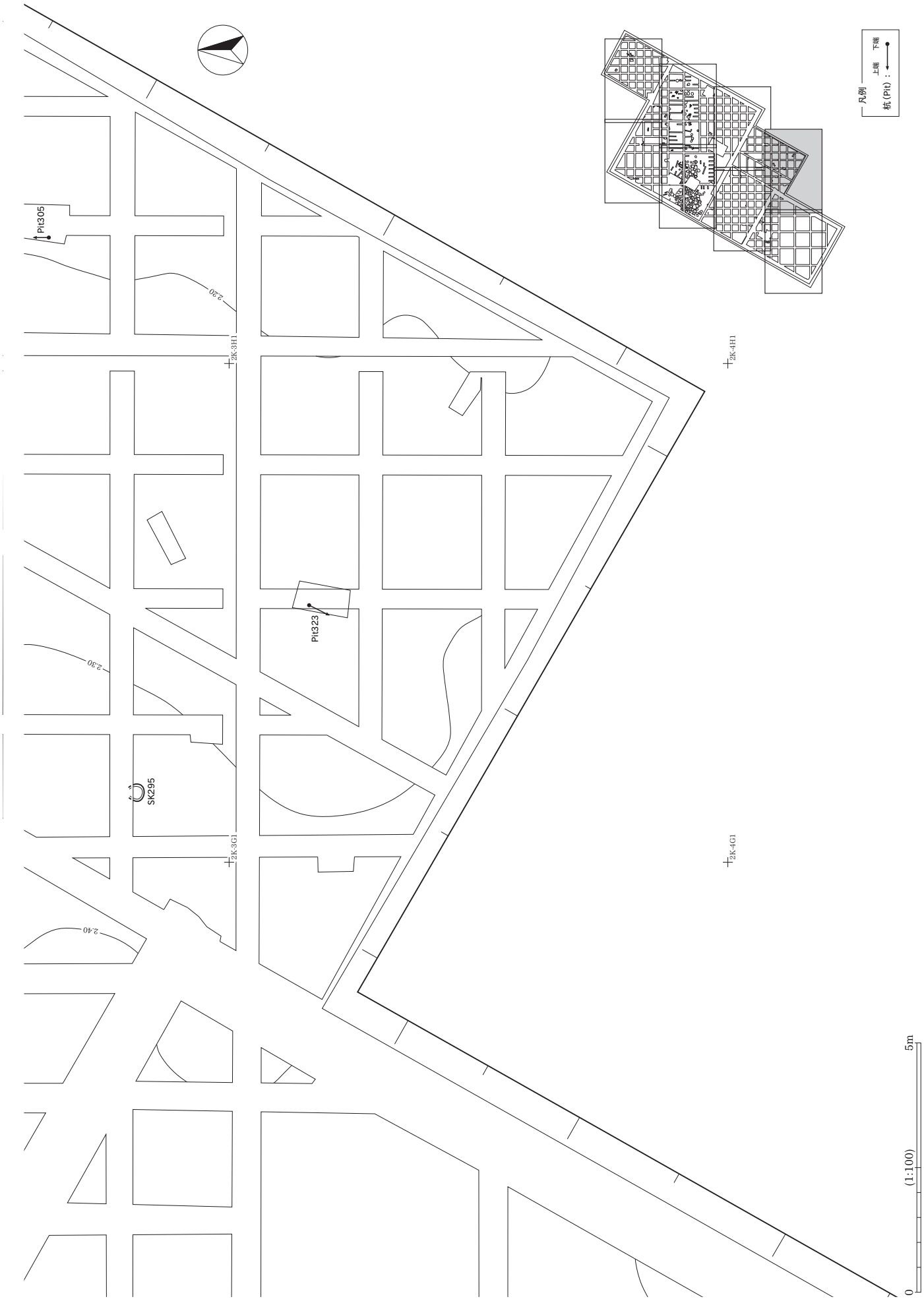

凡例
上端　下端
杭(Pit)：
0
(1:100)
5m
100T
51T
Pit313
Pit163
Pit314
Pit322
Pit236
Pit212
Pit252
Pit195
SK317
SK113
SK75
SK74
SK114
SK92
SK91
SK93
SK115
SK116
SK218
SK246
SK137
SK117
SK138
SK219
SK132
SK133
SK119
SK120
SK251
SK122
SK139
SK131
SK130
SK134
SK37
SK147
SK140
SK141
SK135
SK136
SK36
SK38
SK40
SX5
SX123
SX124
SK99
SK101
SK100
SK98
SK105
SK104
SK110
根(撹乱)
SK118
SK102
SK103
SK248
SK107
SK249
SK250
土器集中111
SK184
SK58
SK33
SK34
SK60
SK154
SK157
SK210
SK242
SK70
SK127
SK59
SK49
SK209
SK82
SK51
SK39
SK234
SK244
SK66
SK238
SK239
SK207
SK206
SK71
SK72
SK245
SK126
SK90
SK47
SK48
SK214
SK53
SK52
SK235
SK50
SK56
SK32
SK61
SK237
SK165
SK166
SK69
SK164
SK205
SK241
SK89
SK243
SK65
SK67
SK46
SK83
SK64
SK63
SK179
SK150
SK197
SK196
SK44
SK54
SK45
SK55
SK76
SK62
SK233
SK180
SK291
SK86
SK204
SK43
SK23
SK253
SK73
SK26
SK215
SK88
SK84
SK87
SK203
SK149
SK181
SK85
SK198
SK95
SK200
SK222
SK128
SK199
SK129
SK201
SK202
SK175
SK280
SK211
SK263
SK265
SK155
SK16
SK282
SK22
SK20
SK279
SK121
SK278
土器集中97
SK269
SK13
SK307
SK270
SK31
SK151
SK27
SK14
SK276
SK277
SK28
SK308
SK303
SK304
SK309
SK152
SK156
SK19
SK312
SK153
SK311
SK15
SK29
SK310
SK30
SK162
SK18
SK106
SK301
SK302
SK161
SK286
SK176
1K-10F1
1K-10G1
1K-10H1
2K-1F1
2K-1G1
2K-1H1
2.20


凡例
杭(Pit)：上端 下端
Pit284
SK229
SK231
SK232
SK230
SK182
SK220
SK183
SK193
土器集中81
土器集中79
土器集中80
52T
SK221
SK192
土器集中112
SK225
SK228
Pit300
SK299
SK227
SK297
Pit296
Pit315
SK191
SK190
SK256
SK258
SK257
SK255
SK254
Pit189
SK171
SK178
SK273
SK283
SK226
SK170
Pit194
SK289
SK290
SK266
SK268
SK267
Pit148
SK288
SK287
SK281
SK177
SK272
Pit187
SK176
2.00
2.10
2.20
1K-10J1
1K-10I1
2K-1J1
2K-1I1
0
(1:100)
5m

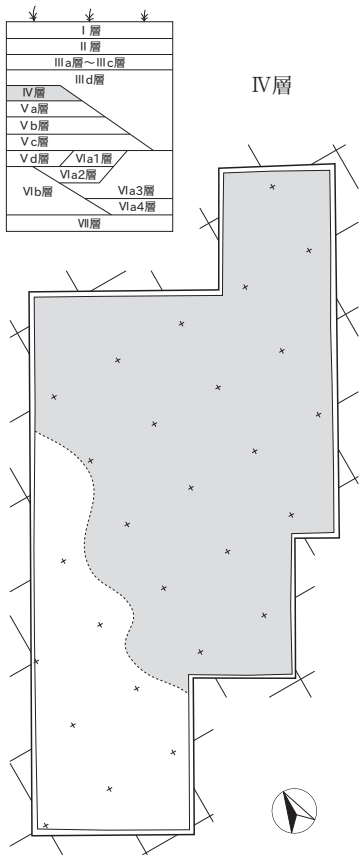
遺構平面分割図 5（1/100）

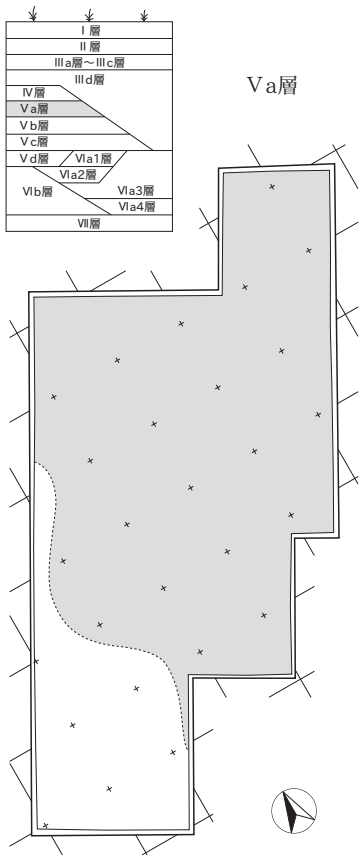

2K-1H1
2K-1I1
2K-1J1
2K-2H1
2K-2I1
2K-2J1
102T
2.20
SK293
堅果類集中
Pit305
0
(1:100)
5m
凡例
上端　下端
杭(Pit)：

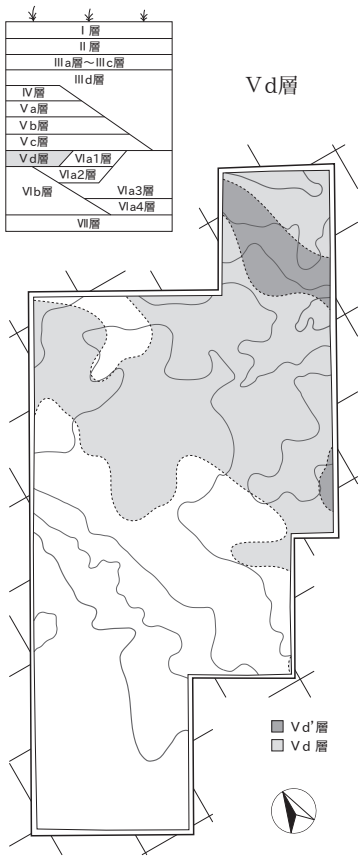
遺構平面分割図 7（1/100）

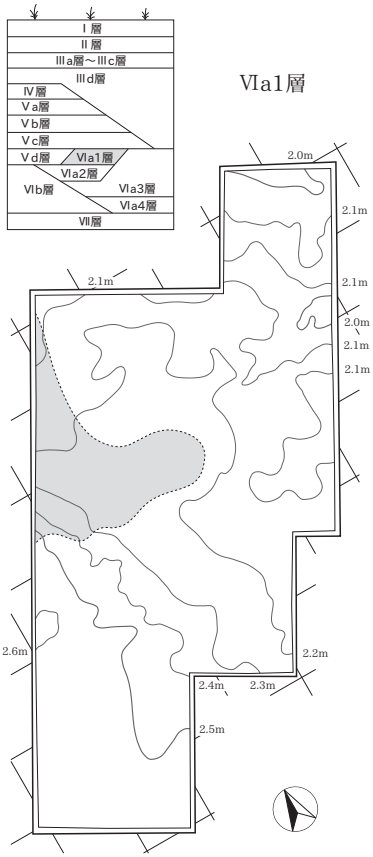

凡例
坑(Pit)：上幅 下幅
Pit305
Pit323
SK295
2K-3H1
2K-4H1
2K-3G1
2K-4G1
2.20
2.30
2.40
0
(1:100)
5m

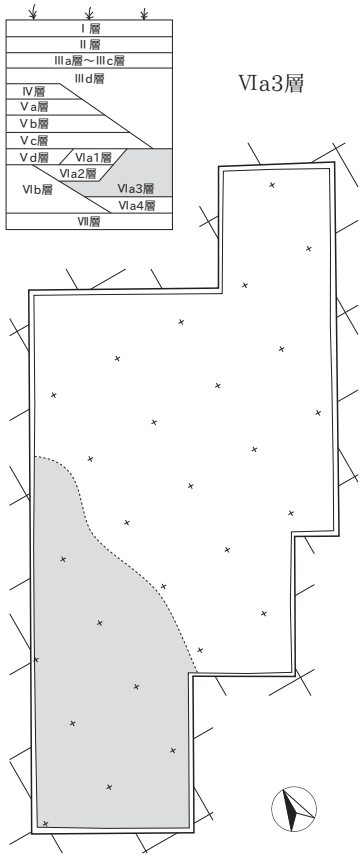
基本土層分布図（1/350）

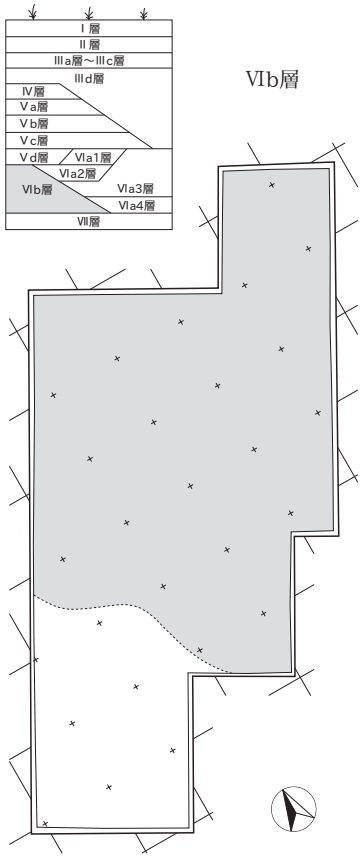


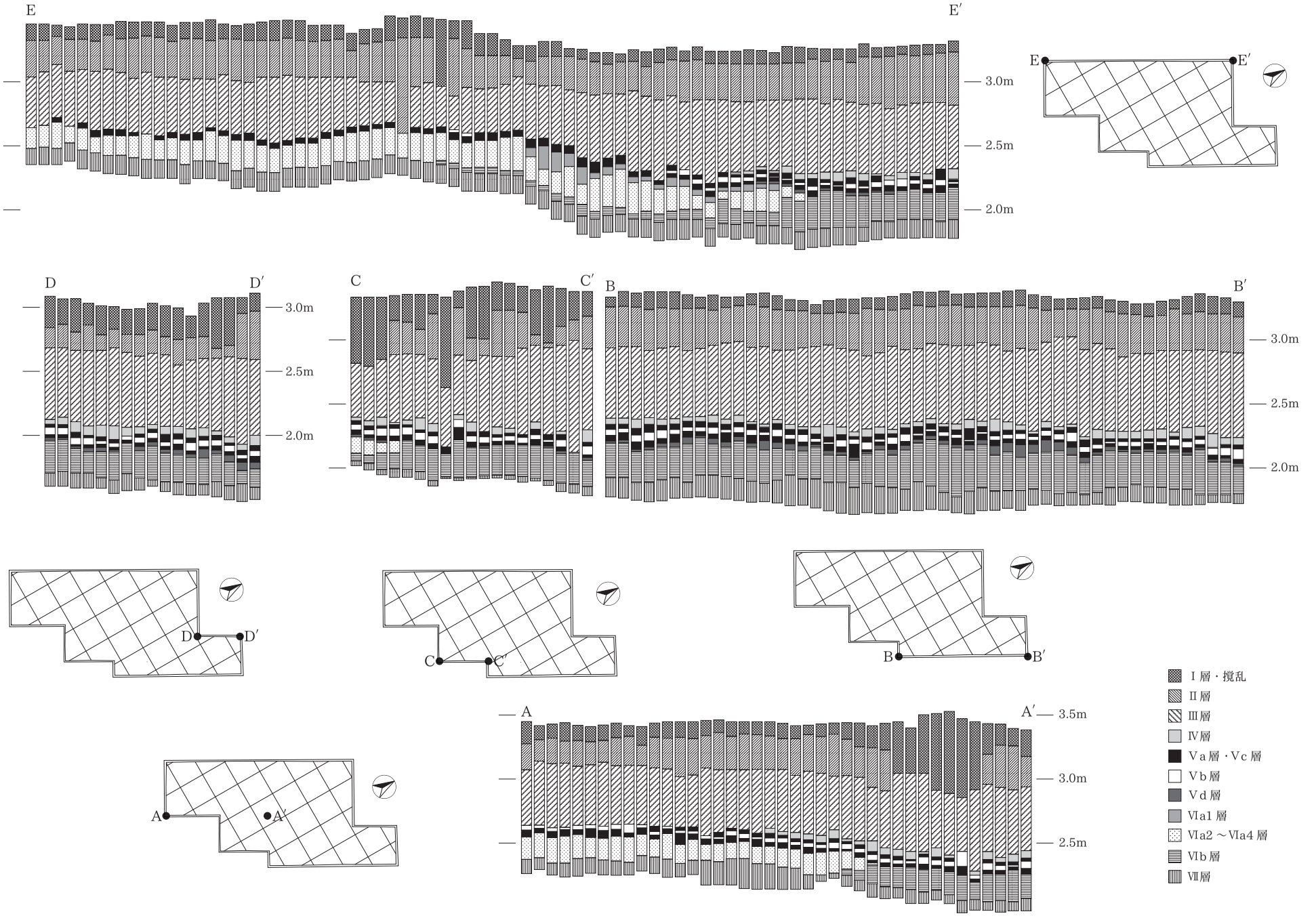


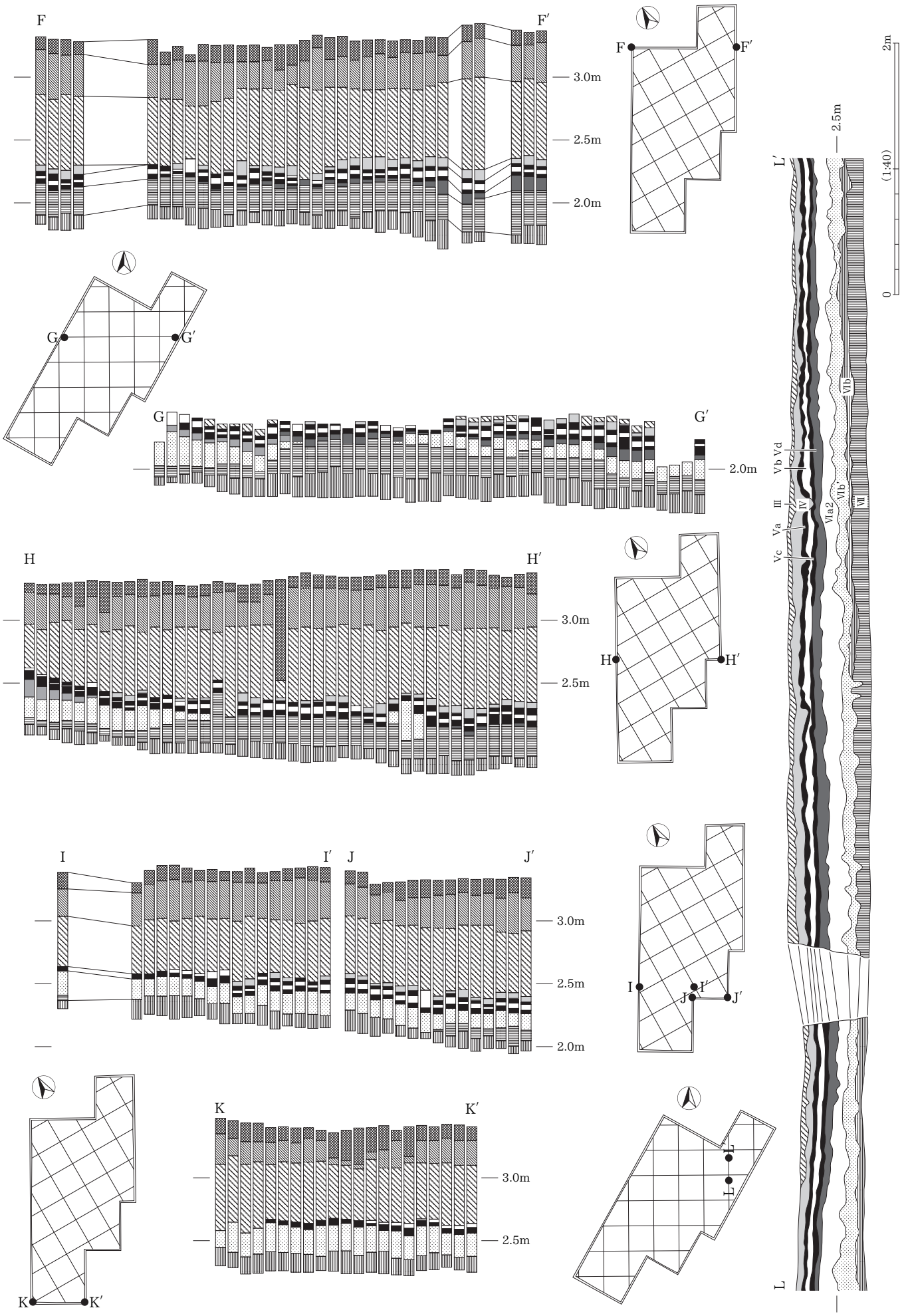


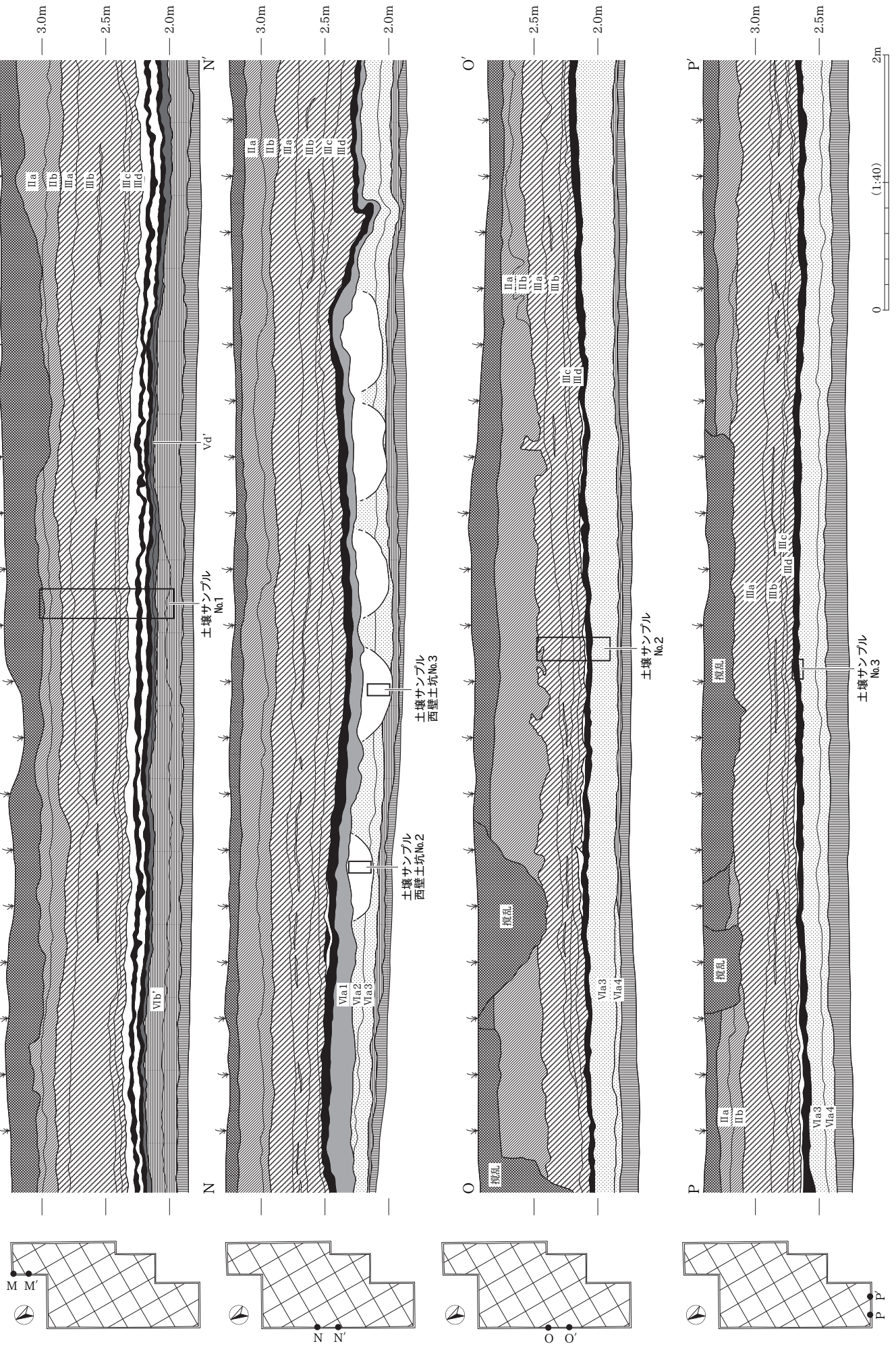


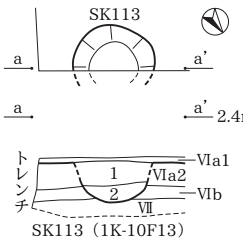





E
E′
3.0m
2.5m
2.0m
D
D′
C
C′
B
B′
A
A′
3.5m
Ⅰ層・撹乱
Ⅱ層
Ⅲ層
Ⅳ層
Ⅴa層・Ⅴc層
Ⅴb層
Ⅴd層
Ⅵa1層
Ⅵa2～Ⅵa4層
Ⅵb層
Ⅶ層

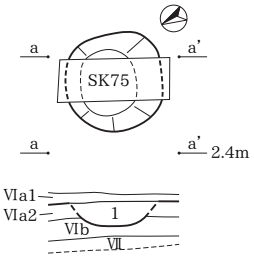

F
F′
3.0m
2.5m
2.0m
G
G′
H
H′
I
I′
J
J′
K
K′
L
L′
2.5m
2m
(1:40)
0
Vb Vd
Va
Vc
III
IV
VIa2
VIb
VII


M′
N′
O′
P′
3.0m
2.5m
2.0m
IIa
IIb
IIIa
IIIb
IIIc
IIId
Vd′
Vb′
土壌サンプル
No.1
土壌サンプル
西壁土坑No.3
土壌サンプル
西壁土坑No.2
土壌サンプル
No.2
土壌サンプル
No.3
VIa1
VIa2
VIa3
VIa4
撹乱
2m
(1:40)
0
M M′
N N′
O O′
P P′



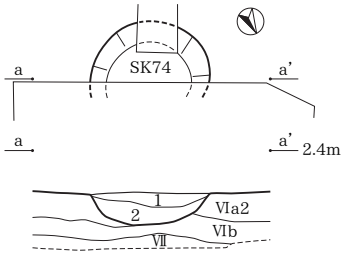
SK113（1K-10F13）

SK113
1 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり。
2 黒褐色粘土（2.5Y3/2）しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



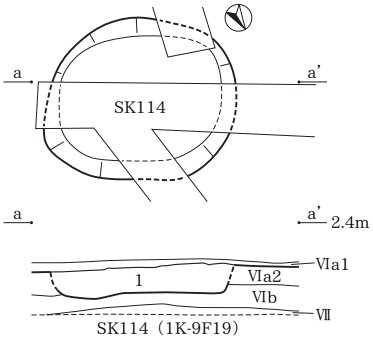
SK75（1K-9F14）

SK75
1 黒褐色粘土（2.5Y3/2）しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



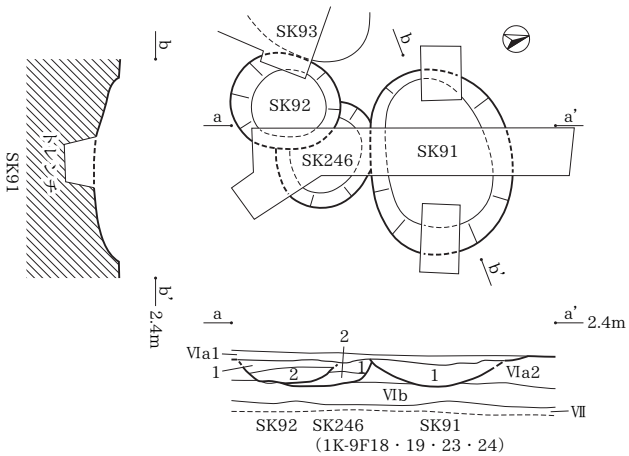
SK74（1K-9F19・20）

SK74
1 黄灰色粘質シルト（2.5Y4/1）しまりあり。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。



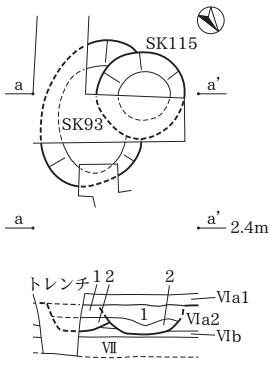
SK114（1K-9F19）

SK114
1 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を微量含む。



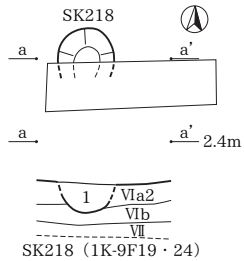
SK92　SK246　SK91
（1K-9F18・19・23・24）

SK91
1 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK92
1 暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）しまりあり。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり。
SK246
1 暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）しまりあり。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



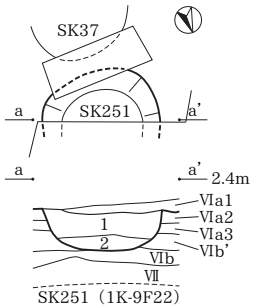
SK93　SK115
（1K-9F18・23）

SK93
1 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり。
2 褐色粘土（2.5Y3/2）しまりあり、径 20mm 程度の炭化物を少量含む。
SK115
1 暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）しまりあり。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり。



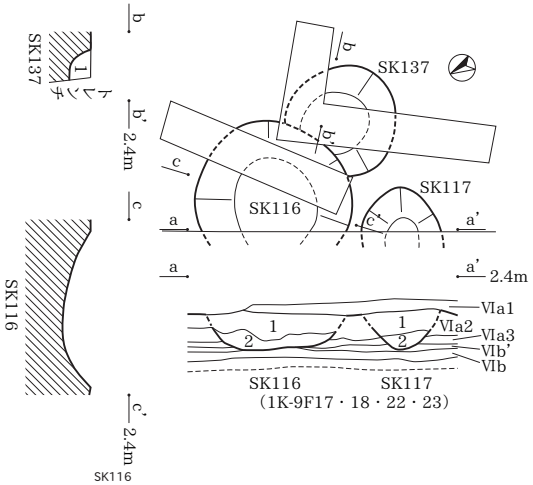
SK218（1K-9F19・24）

SK218
1 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり。



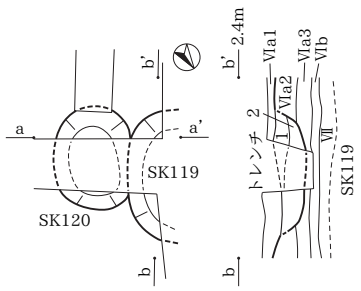
SK251（1K-9F22）

SK251
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）しまりあり。
2 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり。



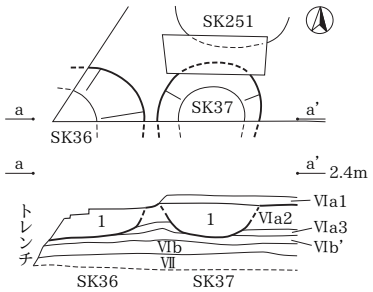
SK116　SK117
（1K-9F17・18・22・23）

SK116
1 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり。
2 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK117
1 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり。
2 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK137
1 暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



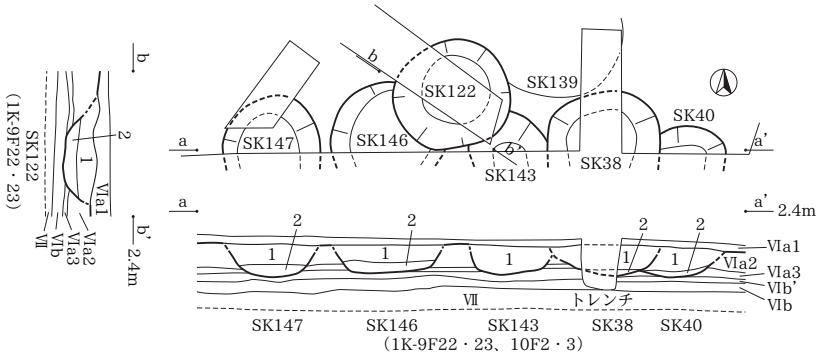
SK120 SK119
（1K-9F22）

SK119
1 黄灰色粘質シルト（2.5Y4/1）しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘土（2.5Y4/1）しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK120
1 黄灰色粘質シルト（2.5Y4/1）しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土（2.5Y3/2）しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。



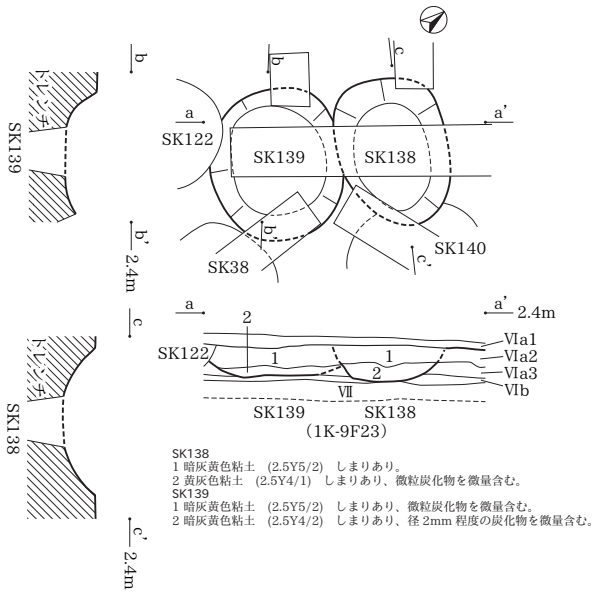
SK36　SK37
（1K-9F21・22、10F1・2）

SK36
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK37
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。

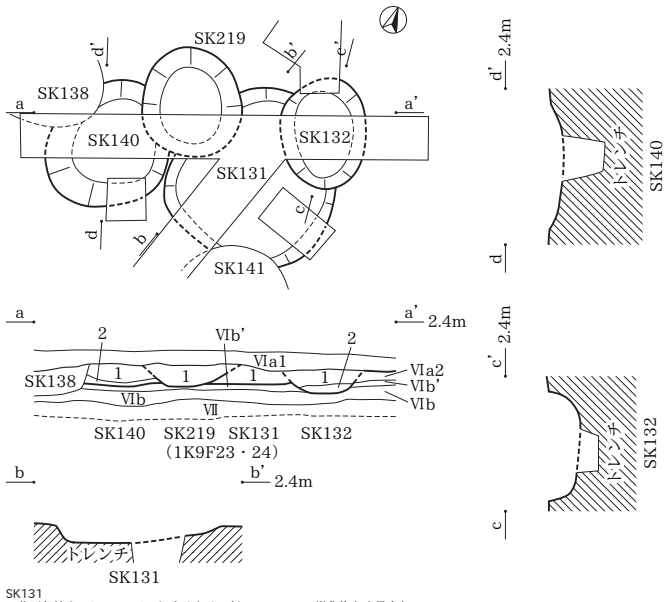


SK147　SK146　SK143　SK38　SK40
（1K-9F22・23、10F2・3）

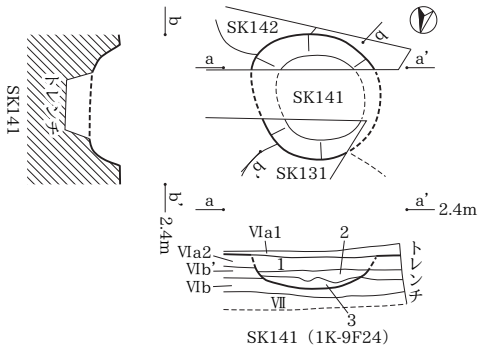
SK38
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）しまりあり。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり。
SK40
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK122
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）しまりあり。
2 黒褐色粘土（2.5Y3/2）しまりあり。
SK143
1 暗灰黄色粘質シルト （2.5Y5/2） しまりあり。
SK146
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK147
1 暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）しまりあり。
2 暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。



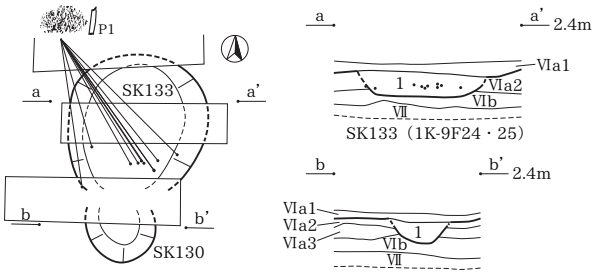
SK138
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK139
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。



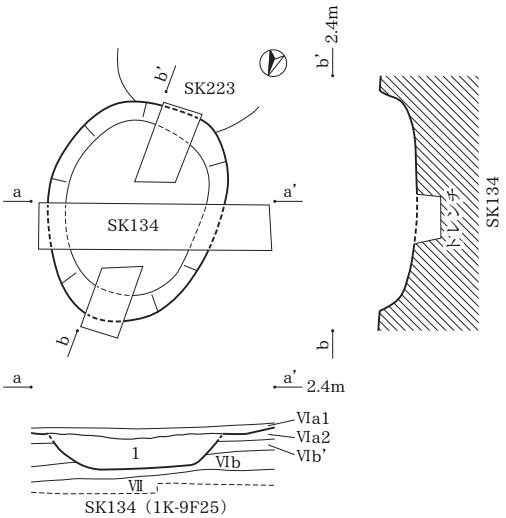
SK131
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK132
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK133
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を微量含む。
SK140
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK219
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む



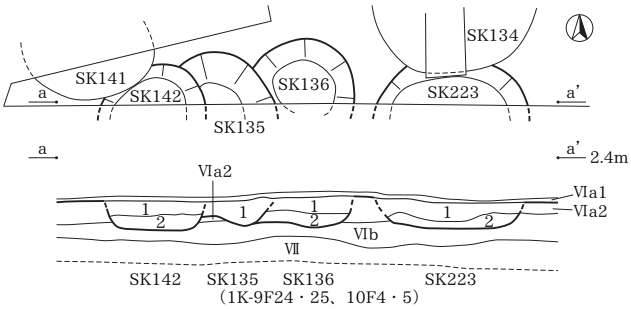
SK141
1 黄灰色粘土　(2.5Y5/1)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。



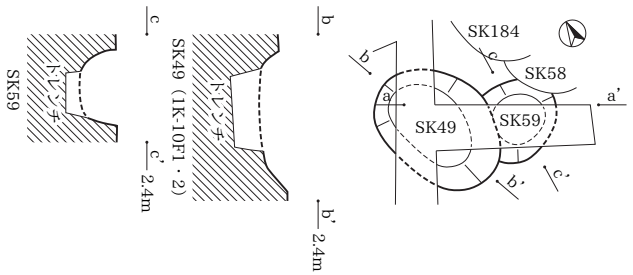
SK130
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3 ～ 7mm の炭化物を少量含む。
SK133
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を微量含む。



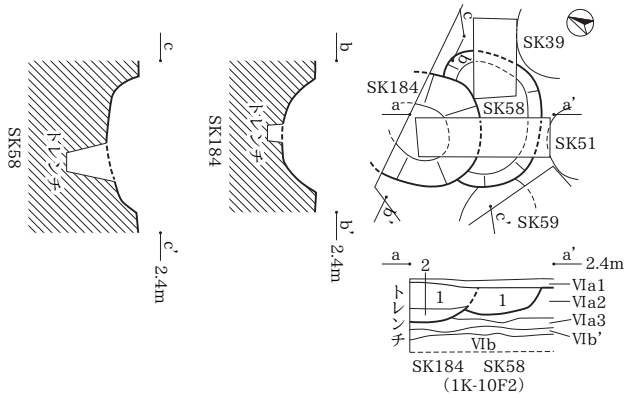
SK134
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物を少量含む。



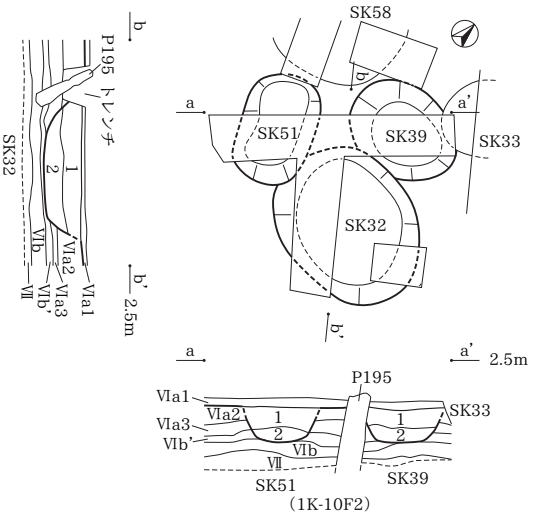
SK135
1 黄灰色粘土　(2.5Y5/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK136
1 黄灰色粘土　(2.5Y5/1)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y5/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK142
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
SK223
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。



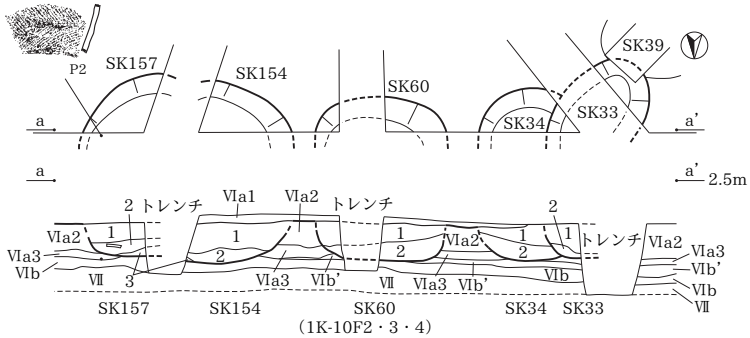
SK49
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 1 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK59
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。



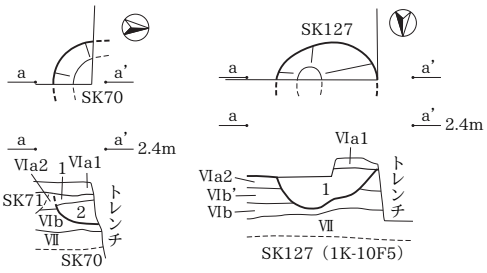
SK58
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
SK184
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



SK32
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
SK39
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3 ～ 20mm の炭化物を少量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。
SK51
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。

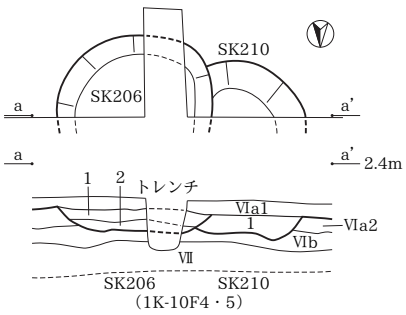


SK33
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK34
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK60
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK154
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 4 mm 程度の炭化物を微量含む。
SK157
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 4 mm 程度の炭化物を微量含む。

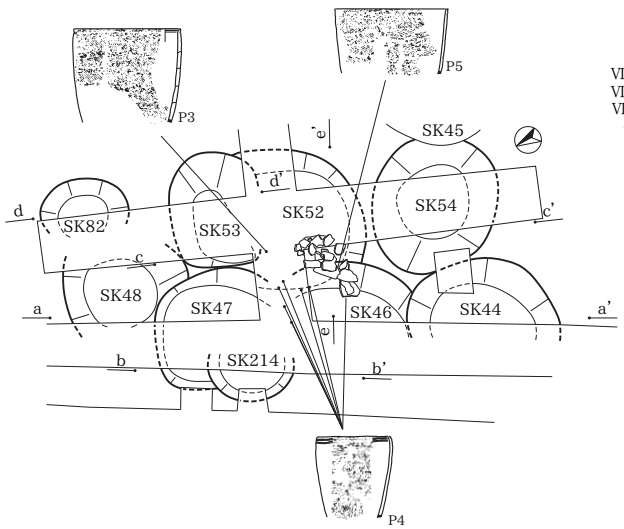


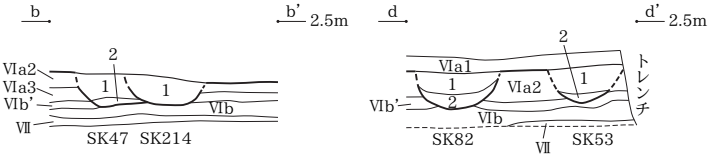
（1K-10F5・10）

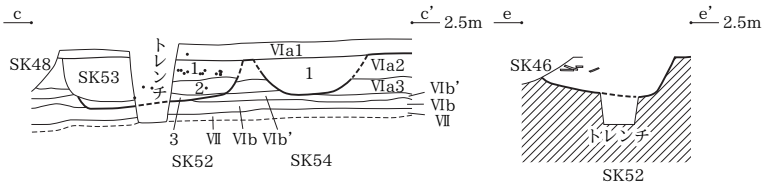
SK70
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を少量含む。
SK127
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。

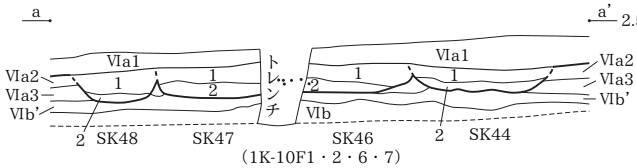


SK206
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
SK210
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。

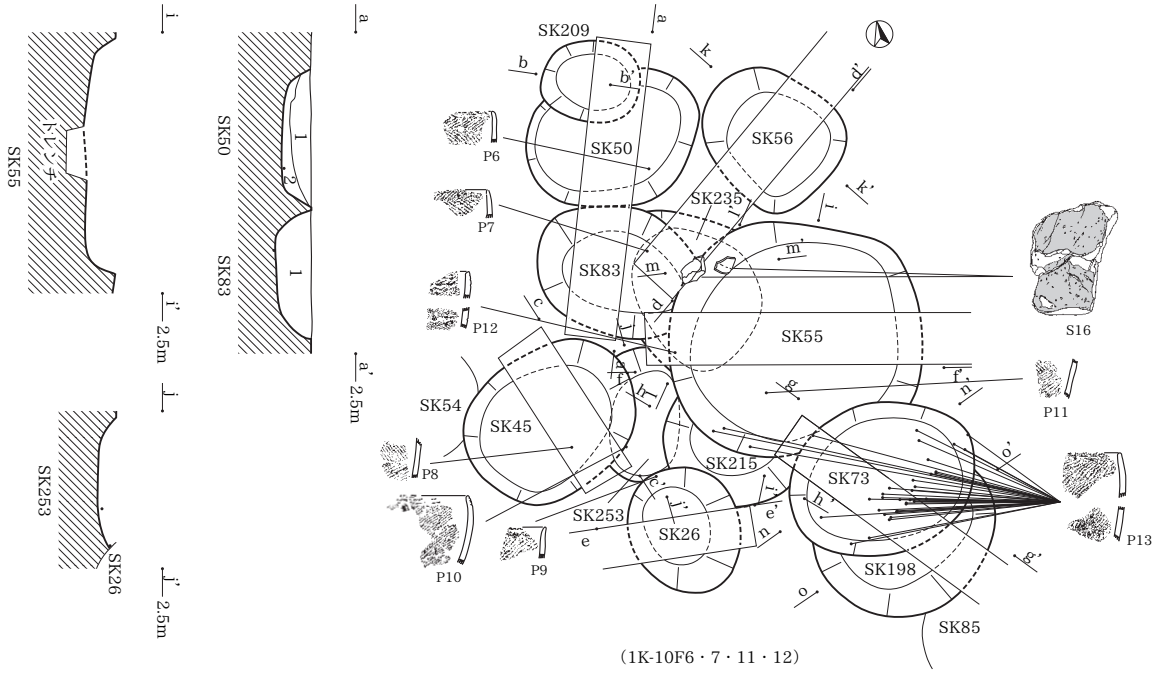




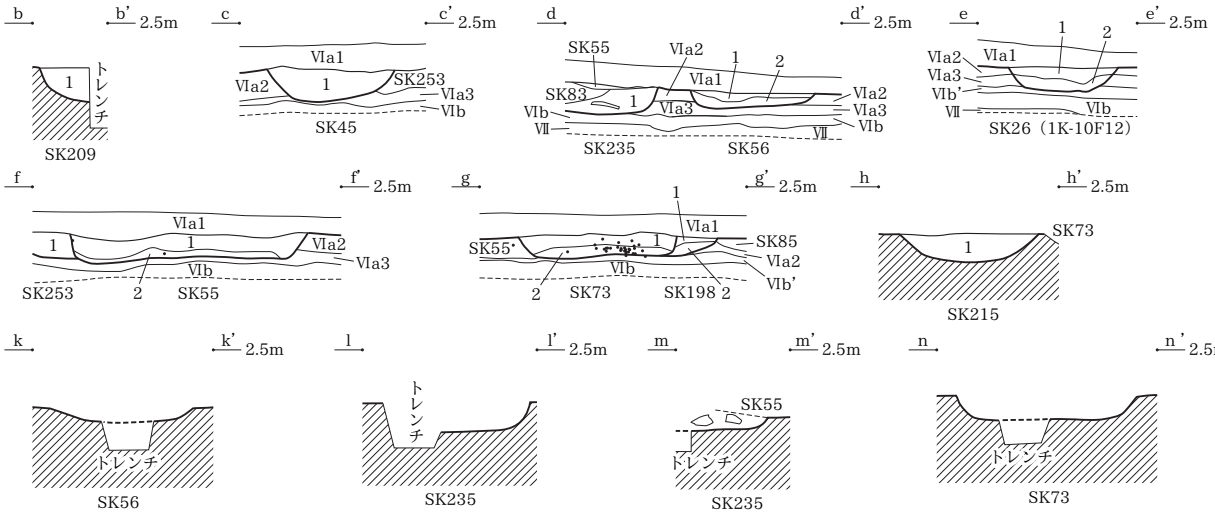




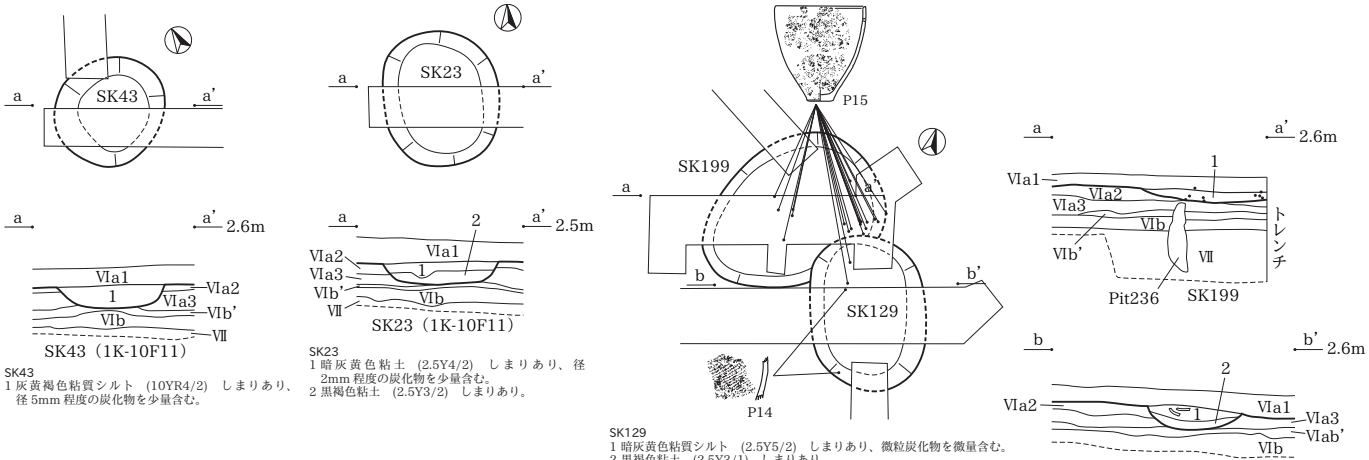
SK44
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK46
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 7mm 程度の炭化物を微量含む。
SK47
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 7mm の炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり。
SK48
1 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり。
SK52
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり。
SK53
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
SK54
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK82
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK214
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を少量含む。



（1K-10F6・7・11・12）



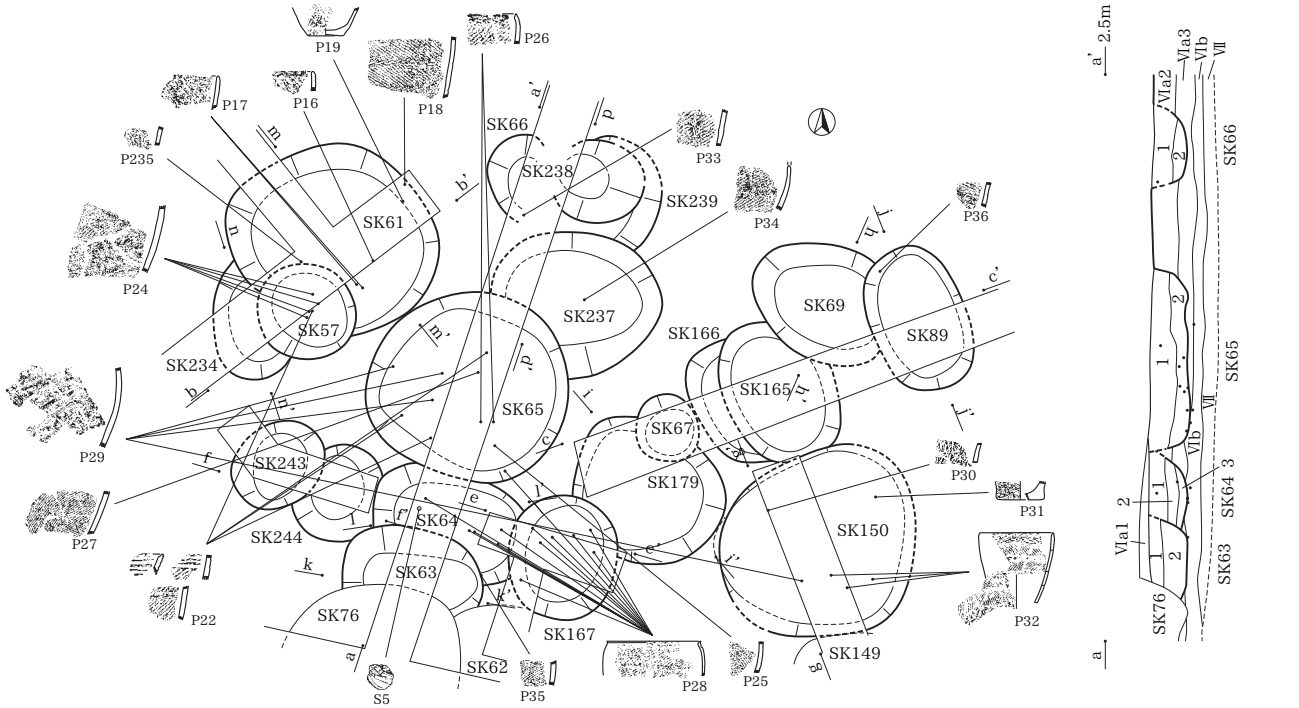
SK26
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
SK45
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK50
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 10mm 程度の炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 10mm 程度の炭化物を微量含む。
SK55
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK56
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径２～ 15mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径２～ 5mm の炭化物を微量含む。
SK73
1 灰色粘質シルト　(5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK83
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK198
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK209
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK215
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK235
1 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK253
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



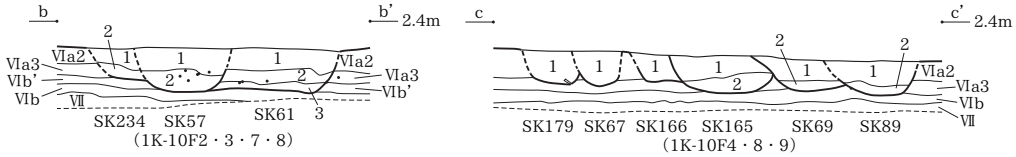
SK43
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。

SK23
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。

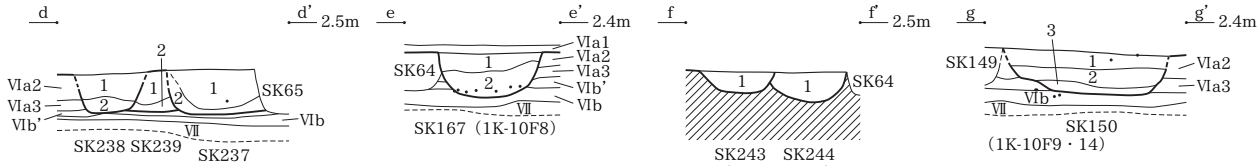
SK129
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり。
SK199
1 灰色粘質シルト　(5Y4/1)　しまりあり、径２～ 5mm の炭化物を少量含む。



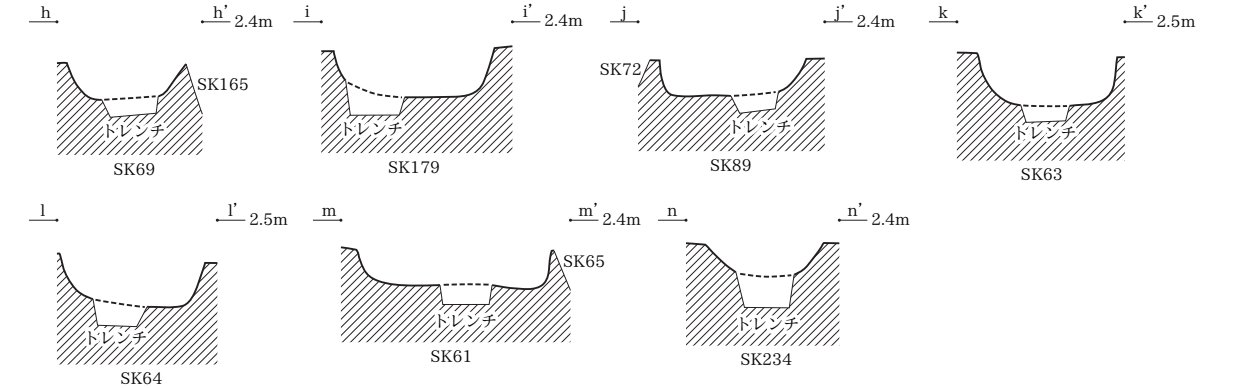
（1K-10F3・8）



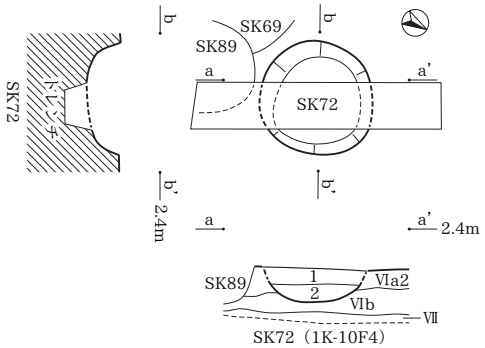
（1K-10F2・3・7・8）　（1K-10F4・8・9）



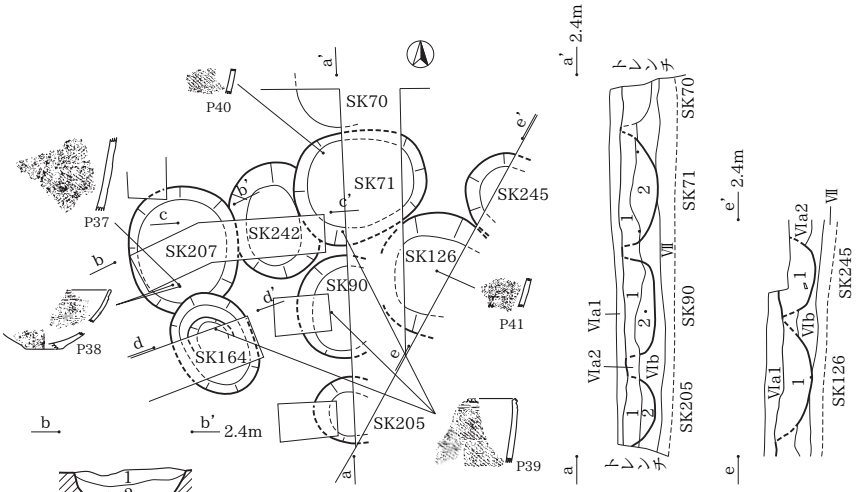
（1K-10F3・4・8・9）　SK167（1K-10F8）　SK243　SK244（1K-10F7・8）　（1K-10F9・14）



SK57
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
SK61
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を少量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を微量含む。
SK63
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK64
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK65
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK66
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK67
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
SK69
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり、径 5 ～ 15mm の炭化物を多量含む。
SK89
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
SK150
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK165
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK167
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK179
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm 程度の炭化物を少量含む。
SK234
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
SK237
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を微量含む。
SK238
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK239
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK243
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK244
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。

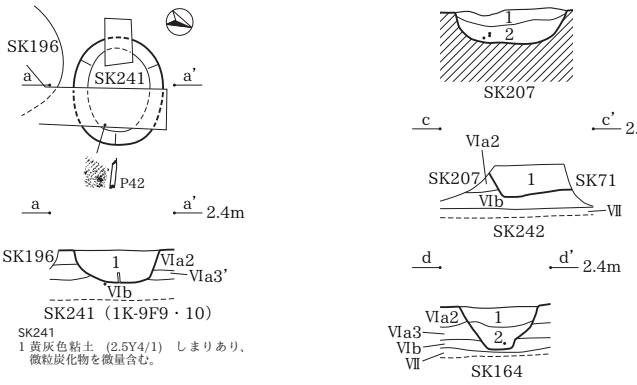


SK72
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 褐灰色粘土　(10YR4/1)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を少量含む。

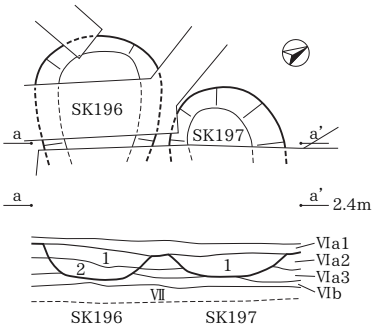


（1K-10F5・10）

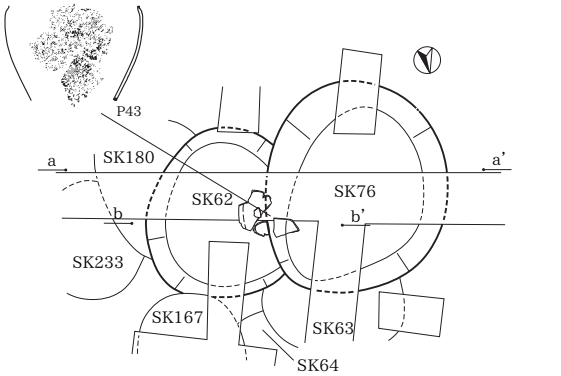
SK71
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
SK90
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を多量含む。
SK126
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
SK164
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
SK205
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
SK207
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物を微量含む。
SK242
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK245
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。

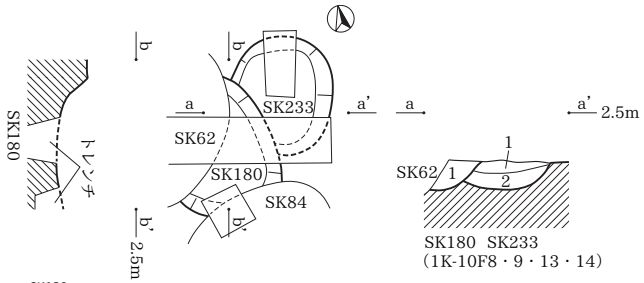


SK241
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。

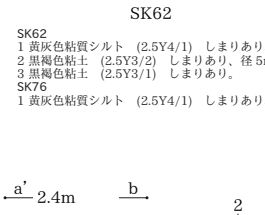


SK196
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK197
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 15mm の炭化物を少量含む。

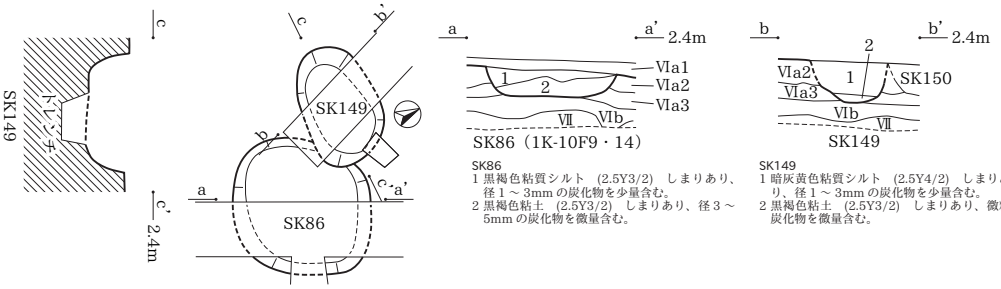




SK180
1 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK233
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。

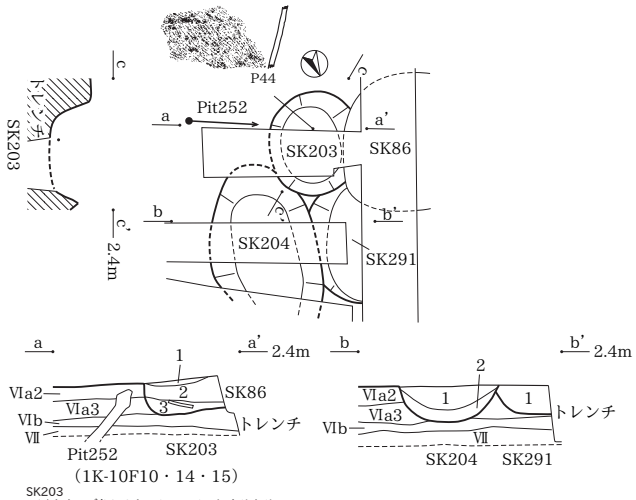


SK62
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　しまりあり。
SK76
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。



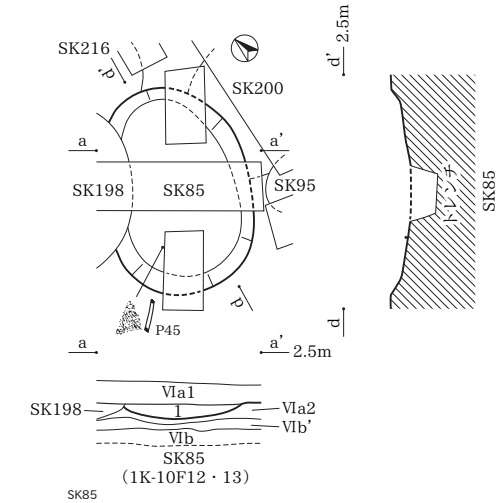
SK86
1 黒褐色粘質シルト　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を微量含む。

SK149
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 3mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



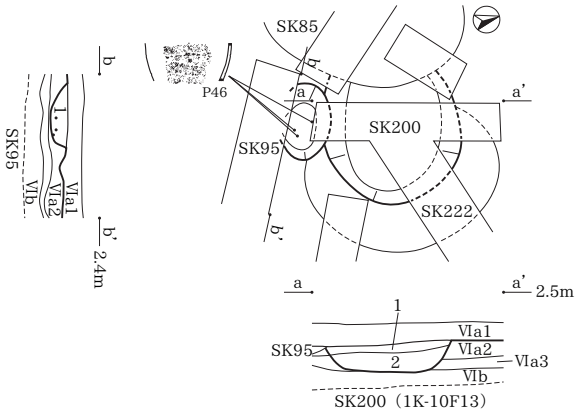
（1K-10F10・14・15）

SK203
1 灰オリーブ色シルト　(5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK204
1 灰オリーブ色粘質シルト　(5Y5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を微量含む。
SK291
1 灰オリーブ色粘質シルト　(5Y5/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。

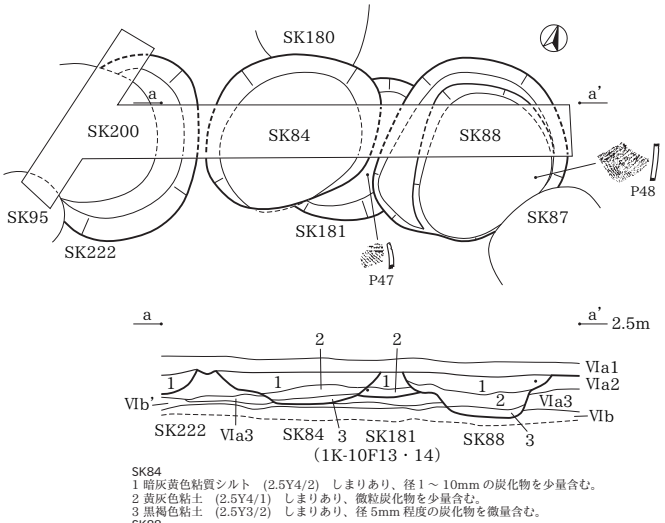


（1K-10F12・13）

SK85
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。

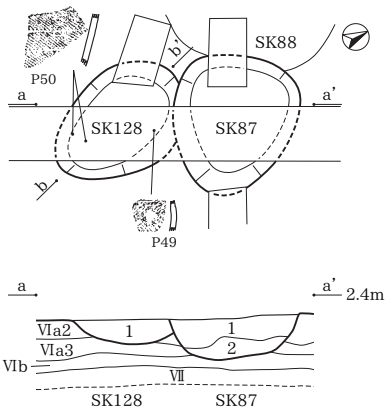


SK95
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK200
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。



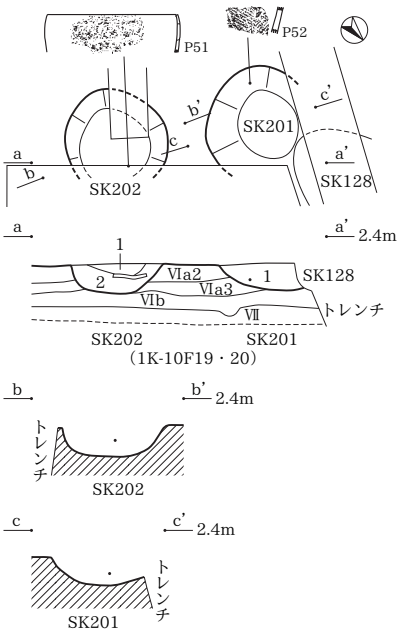
（1K-10F13・14）

SK84
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK88
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
2 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK181
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK222
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



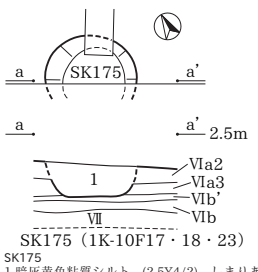
（1K-10F14・19）

SK87
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 3 ～ 5mm の炭化物を微量含む。
2 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK128
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



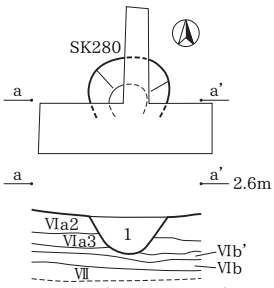
（1K-10F19・20）

SK201
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y5/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。
SK202
1 暗灰黄色シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり。



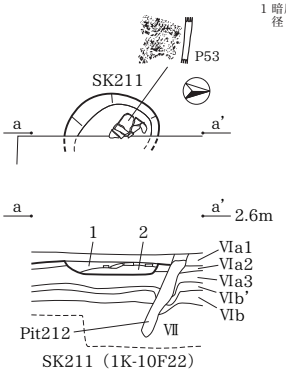
SK175（1K-10F17・18・23）

SK175
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



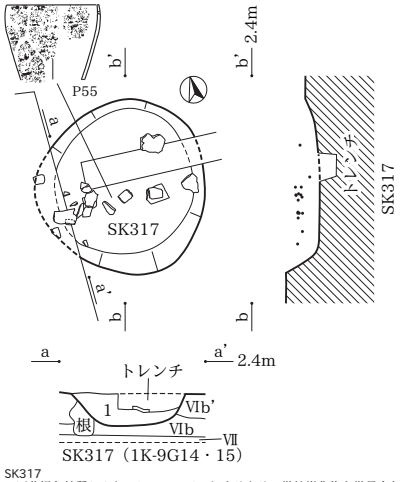
SK280（1K-10F16・21）

SK280
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 1 ～ 10mm の炭化物を少量含む。



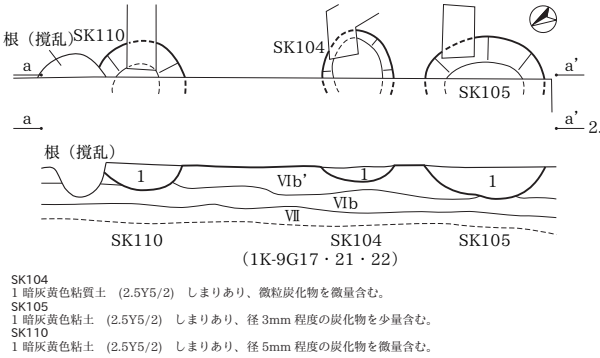
SK211（1K-10F22）

SK211
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。



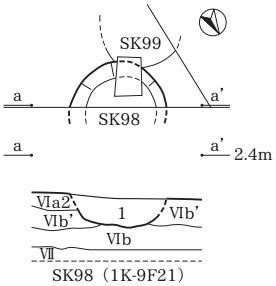
SK317（1K-9G14・15）

SK317
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



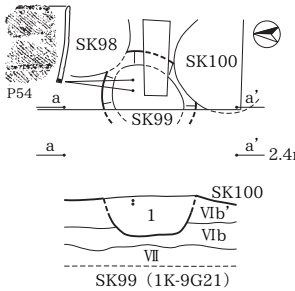
（1K-9G17・21・22）

SK104
1 暗灰黄色粘質土　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK105
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を少量含む。
SK110
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



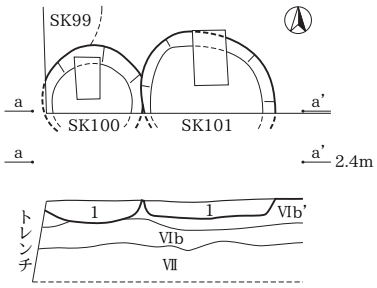
SK98（1K-9F21）

SK98
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径２～10mm の炭化物を少量含む。



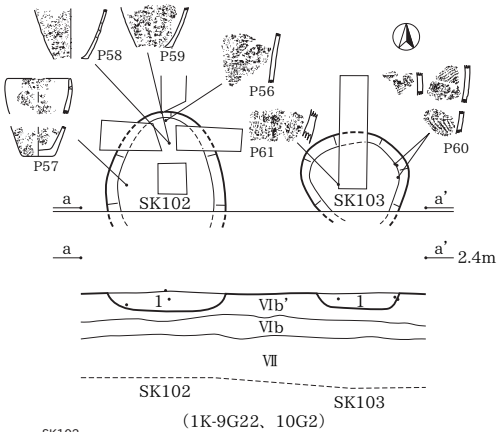
SK99（1K-9G21）

SK99
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径２～5mm の炭化物を少量含む。



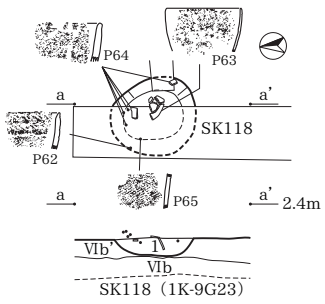
（1K-9G21、10G1）

SK100
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。
SK101
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径２～5mm の炭化物を微量含む。



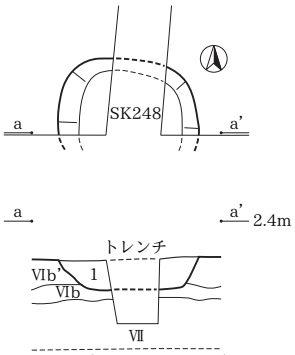
（1K-9G22、10G2）

SK102
1 暗オリーブ褐色粘土　(2.5Y3/3)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK103
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。



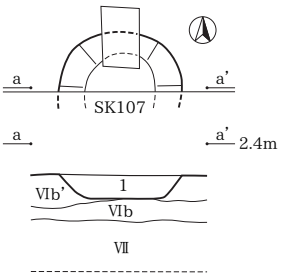
SK118（1K-9G23）

SK118
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。



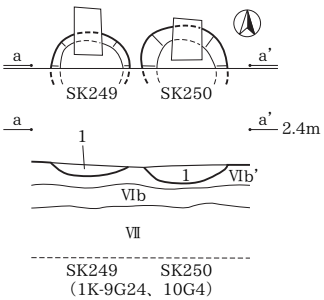
SK248（1K-9G23、10G3）

SK248
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



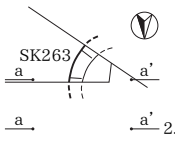
SK107（1K-9G23・24、10G3・4）

SK107
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



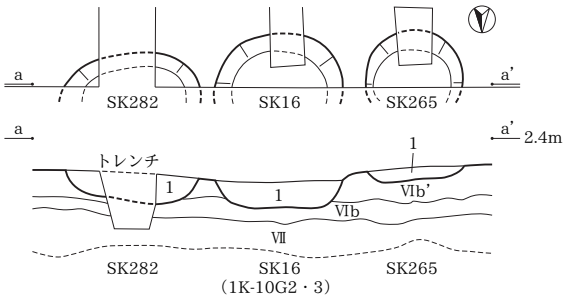
（1K-9G24、10G4）

SK249
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK250
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径２～5mm の炭化物を少量含む。



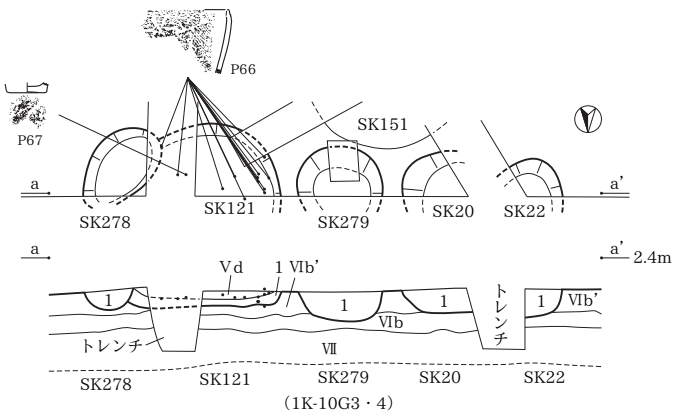
SK263（1K-10G1）

SK263
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。



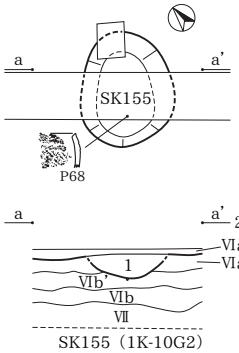
（1K-10G2・3）

SK16
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
SK265
1 灰黄褐色粘土　(10YR5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK282
1 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、径５～10mm の炭化物を少量含む。



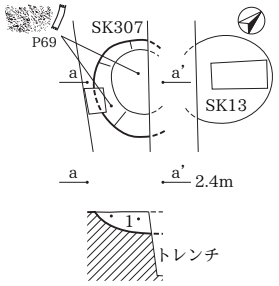
（1K-10G3・4）

SK20
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK22
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
SK121
1 灰黄褐色粘土　(10YR5/2)　しまりあり、径５～10mm の炭化物を少量含む。
SK278
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK279
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、植物遺体を中量含む。



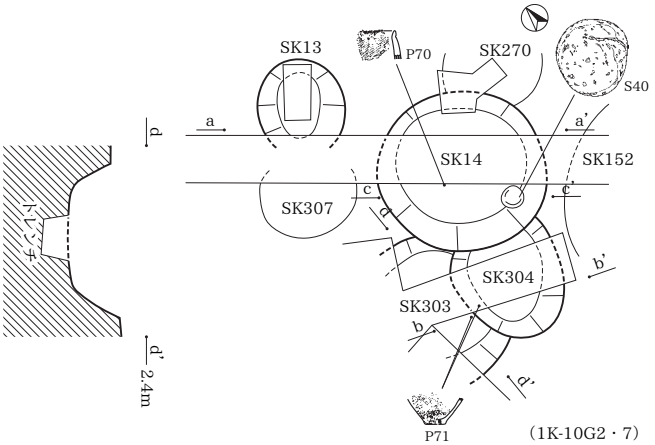
SK155（1K-10G2）

SK155
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、
径 2 ～ 5mm の炭化物を微量含む。

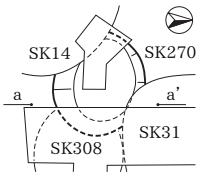


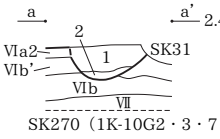
SK307（1K-10G2・7）

SK307
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、
径 5mm 程度の炭化物を微量含む。



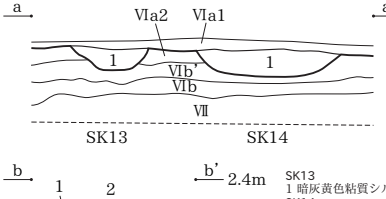
（1K-10G2・7）

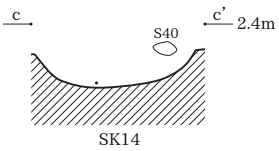


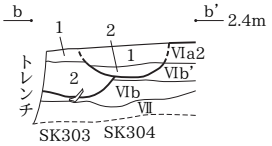


SK270（1K-10G2・3・7・8）

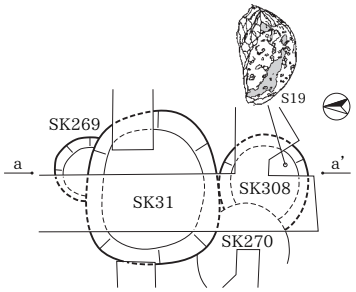
SK270
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。

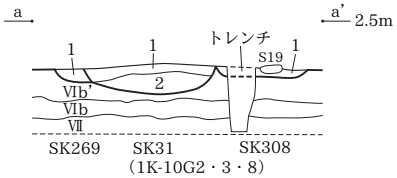






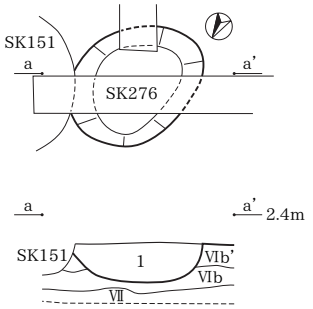
SK13
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
SK14
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK303
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
SK304
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を少量含む。





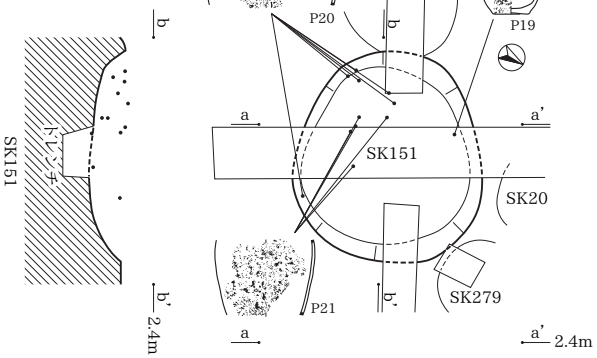
（1K-10G2・3・8）

SK31
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
SK269
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK308
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。



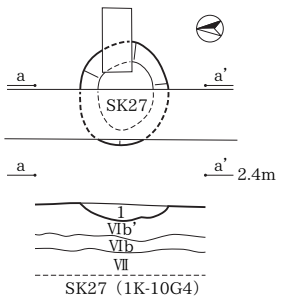
SK276（1K-10G3・8）

SK276
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。



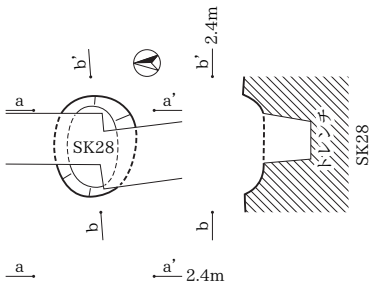
SK151（1K-10G3・4）

SK151
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物を微量含む。



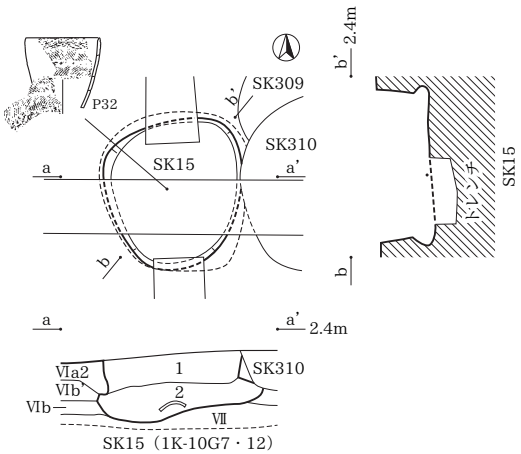
SK27（1K-10G4）

SK27
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、
径 5mm 程度の炭化物を少量含む。



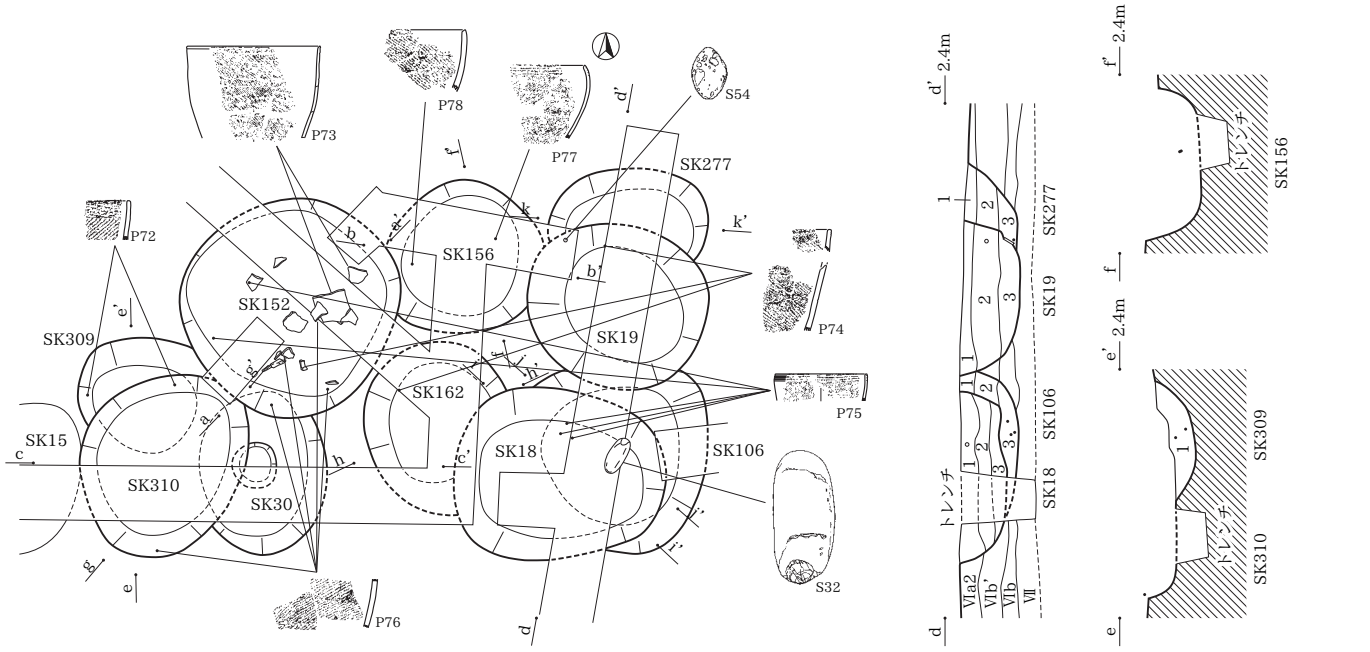
SK28（1K-10G9）

SK28
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を
微量含む。

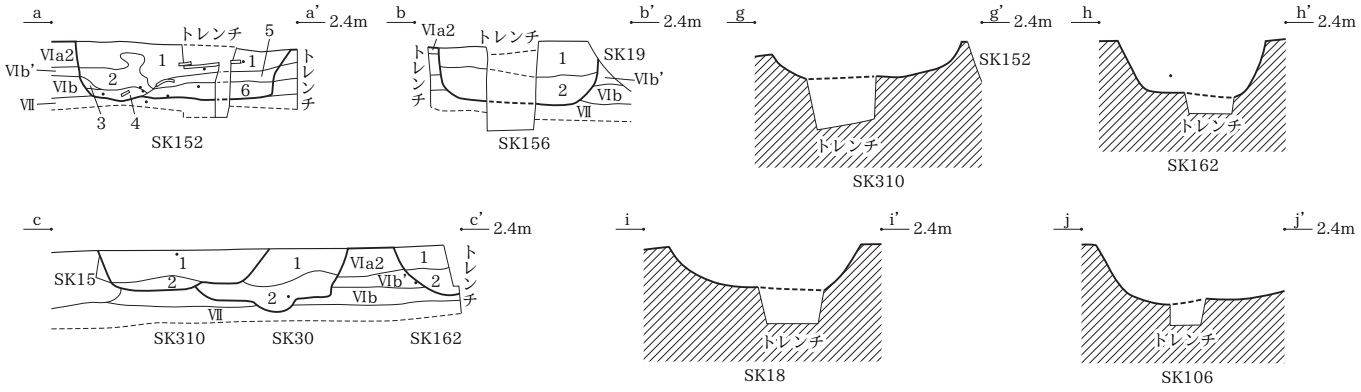


SK15（1K-10G7・12）

SK15
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、上位に径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり。



（1K-10G7・8・9・12・13・14）



SK18
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物を微量含む。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。

SK19
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒な炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。

SK30
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR5/2)　しまりあり。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。

SK106
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物を微量含む。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、Ⅵb 層に類似。

SK152
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2 ～ 10mm の炭化物が部分的に集中する。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量、植物遺体を多量含む。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
4 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、植物遺体を中量含む。
5 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
6 暗オリーブ褐色粘土　(2.5Y3/3)　しまりあり。

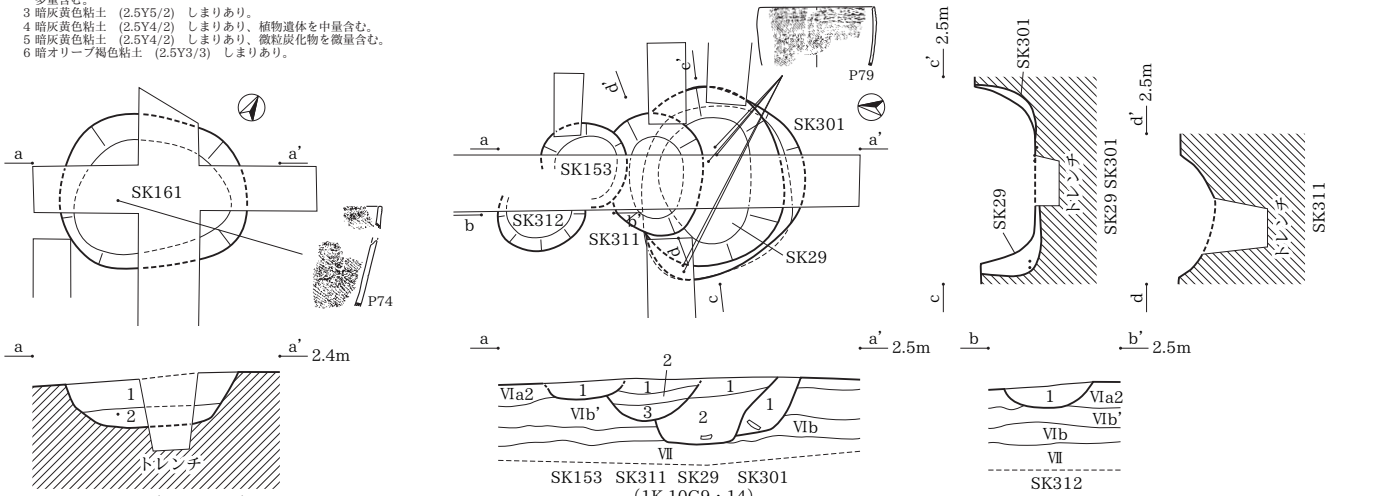
SK156
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 3mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 10mm 程度の炭化物を微量含む。

SK162
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、上位に径 5mm 程度の炭化物を少量含む。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、径 10 ～ 15mm の炭化物を少量含む。

SK277
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 3 ～ 10mm の炭化物を少量含む。
3 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、Ⅵb 層に類似。

SK309
1 灰黄色粘土　(2.5Y6/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。

SK310
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を微量含む。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。



SK161（1K-10G13）

SK153　SK311　SK29　SK301
（1K-10G9・14）

SK312

SK161
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。

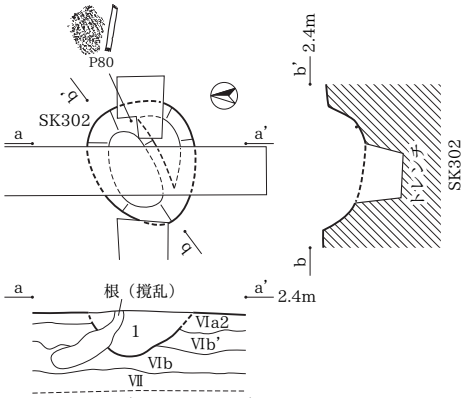
SK29
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり。

SK153
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 5 ～ 10mm の炭化物を少量含む。

SK301
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。

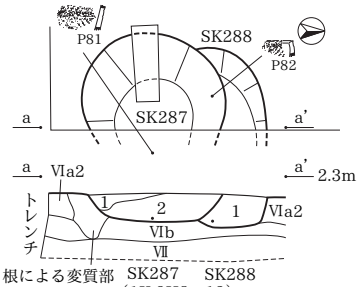
SK311
1 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘質シルト　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2 ～ 5mm の炭化物を微量含む。
3 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり。

SK312
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を混じる。



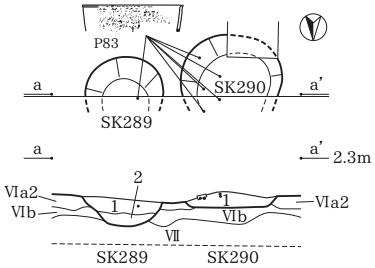
SK302（1K-10G10・15）

SK302
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。



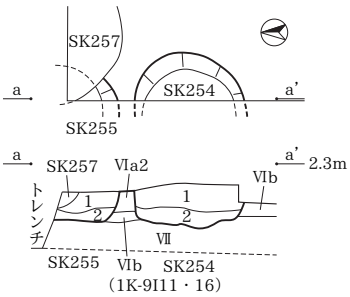
根による変質部　SK287　SK288
（1K-9H8・13）

SK287
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK288
1 オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/3)　しまりやや弱い。



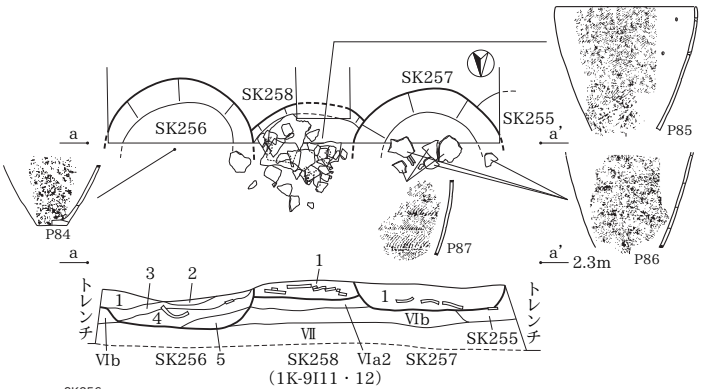
SK289　SK290
（1K-9H14・15）

SK289
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりやや弱い、微粒炭化物を微量含む。
2 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりやや弱い。
SK290
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。



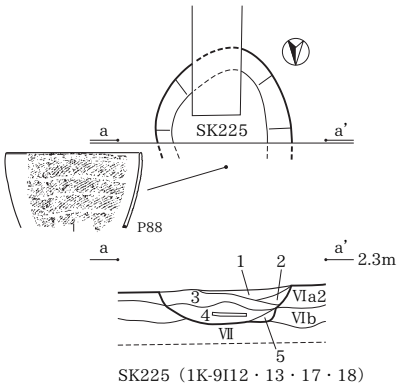
（1K-9I11・16）

SK254
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 暗褐色粘質シルト　(10YR3/3)　しまりあり。
SK255
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)　しまりあり。



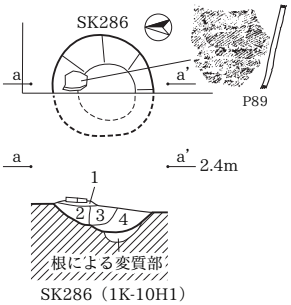
（1K-9I11・12）

SK256
1 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりやや弱い。
2 黒褐色粘質シルト　(2.5Y3/2)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりやや弱い。
4 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
5 黒褐色粘質シルト　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK257
1 オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y4/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK258
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。



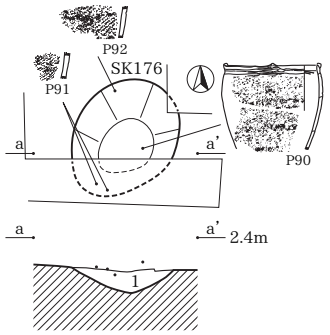
SK225（1K-9I12・13・17・18）

SK225
1 黄灰色粘土　(2.5Y5/1)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりやや弱い。
3 灰白色粘質シルト　(2.5Y8/2)　しまりあり。
4 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりやや弱い、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
5 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりやや弱い。



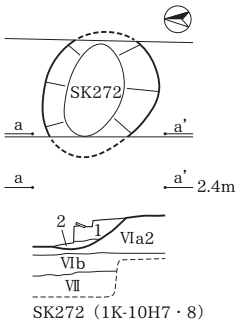
SK286（1K-10H1）

SK286
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり。
2 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりやや弱い。
3 にぶい黄褐色粘質シルト　(10YR4/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
4 暗褐色粘質シルト　(10YR3/3)　しまりあり。



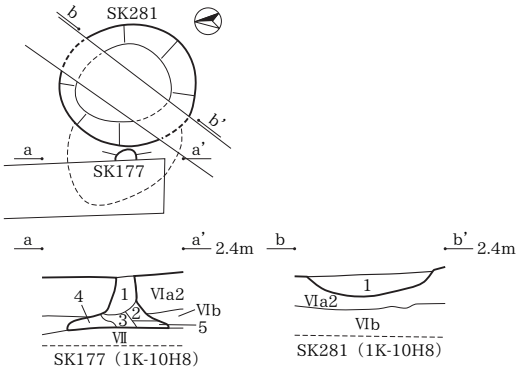
SK176（1K-10H6・7）

SK176
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。



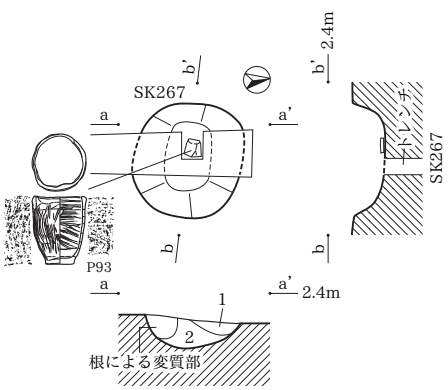
SK272（1K-10H7・8）

SK272
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりやや弱い。
2 暗褐色粘質シルト　(10YR3/3)　しまりあり。



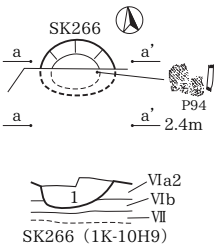
SK177（1K-10H8）　SK281（1K-10H8）

SK177
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり。
2 黒褐色粘質シルト　(10YR3/2)　しまりあり。
3 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
4 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)　しまりあり、径 5mm 程度の VI a 層ブロックが多量に混じる。
5 暗褐色粘質シルト　(10YR3/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む、径 5mm 程度の VI a 層ブロックが多量に混じる。
SK281
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



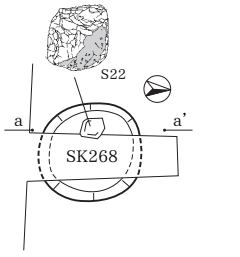
SK267（1K-10H8・9）

SK267
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。
2 オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y4/3)　しまりあり、微粒炭化物を少量含む。



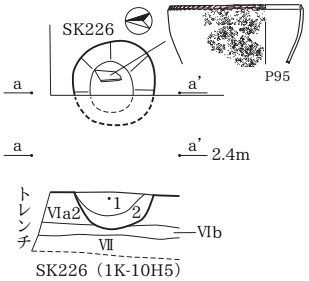
SK266（1K-10H9）

SK266
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



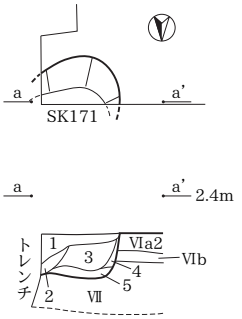
SK268（1K-10H14）

SK268
1 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)
　しまりあり。



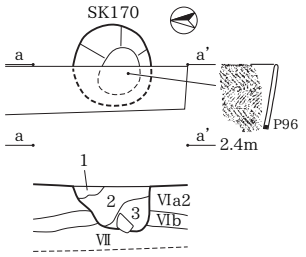
SK226（1K-10H5）

SK226
1 オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/3)　しまりあり。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり。



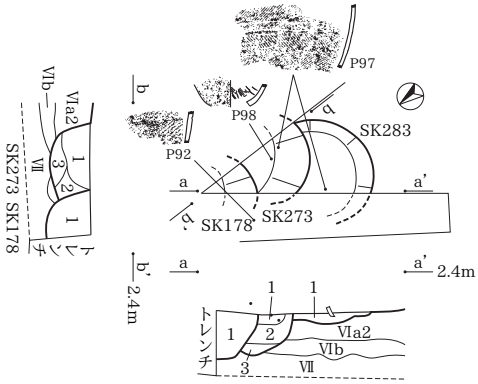
SK171（1K-10H5、10I1）

SK171
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
4 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりやや弱い。
5 黒褐色粘土　(10YR2/3)　しまりあり。



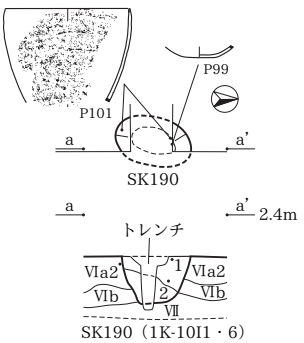
SK170（1K-10H5・10）

SK170
1 オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/3)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
3 暗オリーブ褐色粘土　(2.5Y3/3)　しまりあり、径 5mm 程度の暗灰黄色土ブロックが多量に混じる。



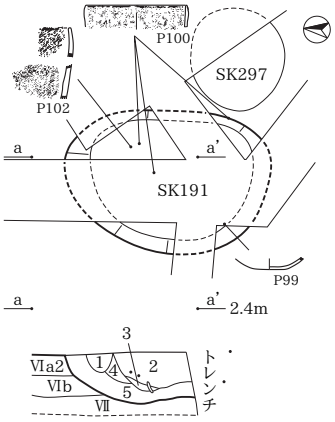
SK178 SK273 SK283
（1K-10H5・10、10I1）

SK178
1 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK273
1 にぶい黄褐色粘質シルト　(10YR4/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y4/3)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
3 オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y4/3)　しまりやや弱い、微粒炭化物を少量含む。
SK283
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



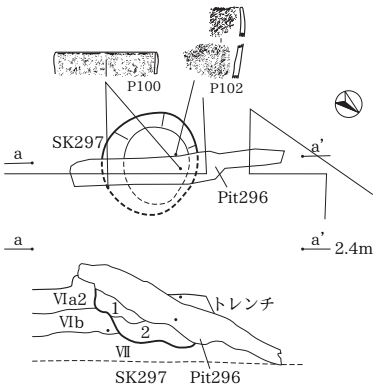
SK190（1K-10I1・6）

SK190
1 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



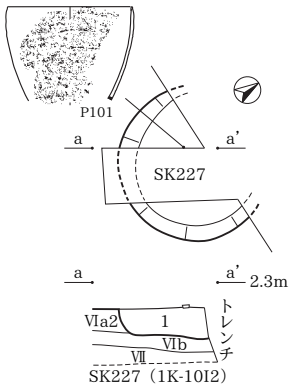
SK191（1K-10I1・6）

SK191
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり。
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
4 灰黄褐色粘土　(10YR5/2)　しまりあり。
5 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりやや弱い、径 5mm 程度の灰黄褐色土ブロックが多量に混じる。



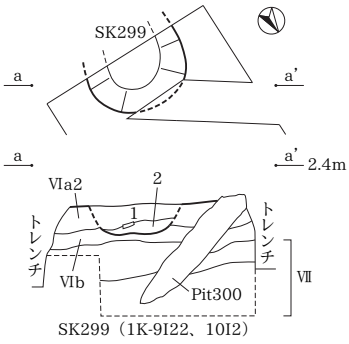
SK297　Pit296
（1K-10I1・2・6・7）

SK297
1 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)　しまりあり。
2 暗オリーブ褐色粘質シルト　(2.5Y3/3)　しまりあり、1 層より少し暗い。



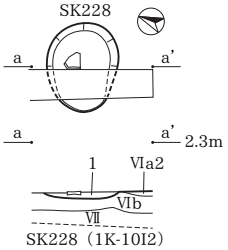
SK227（1K-10I2）

SK227
1 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



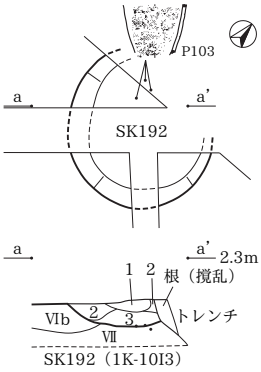
SK299（1K-9I22、10I2）

SK299
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 灰黄褐色粘質シルト　(10YR4/2)　微粒炭化物を微量含む。



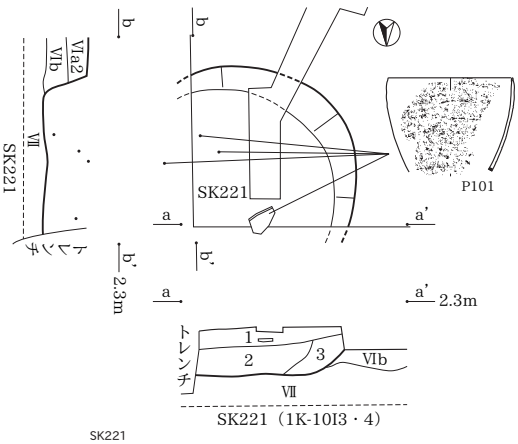
SK228（1K-10I2）

SK228
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりやや弱い。



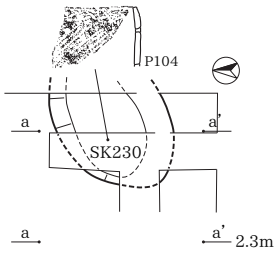
SK192（1K-10I3）

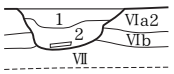
SK192
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 暗オリーブ褐色粘土　(2.5Y3/3)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりやや弱い。



SK221（1K-10I3・4）

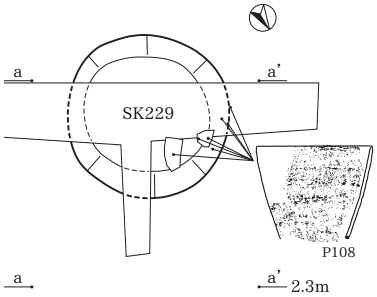
SK221
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。

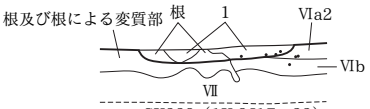




SK230（1K-9I25、9J21）

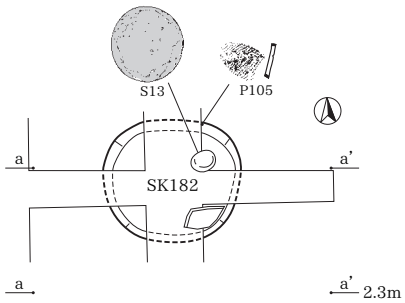
SK230
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。

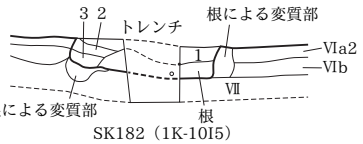




SK229（1K-9J17・22）

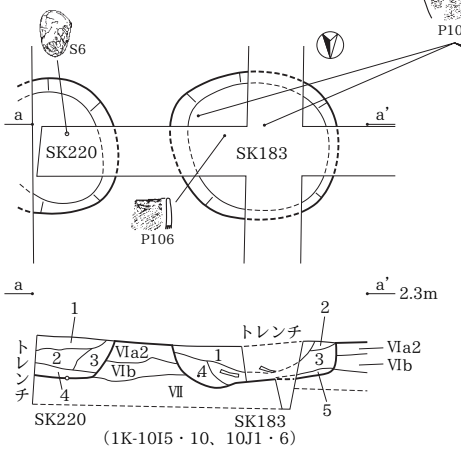
SK229
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。





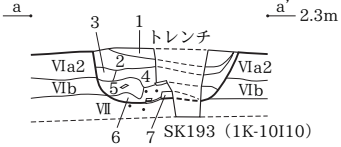
SK182（1K-10I5）

SK182
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 暗オリーブ褐色粘土　(2.5Y3/3)　しまりあり、大半は根の撹乱が入る。
3　暗オリーブ褐色粘土　(2.5Y3/3)　しまりあり、大半は根の撹乱が入る。



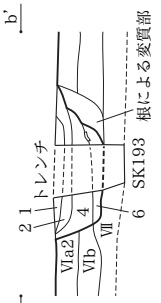
SK220　SK183
（1K-10I5・10、10J1・6）

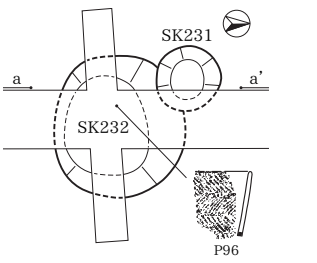
SK183
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
4 オリーブ褐色粘土　(2.5Y4/3)　しまりあり。
5 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
SK220
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
4 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　黒褐色に変色した酸化植物が中量混じる。

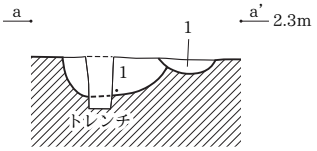


SK193（1K-10I10）

SK193
1 灰色粘土　(5Y4/1)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
3 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
4 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
5 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
6 黒褐色粘土　(2.5Y3/2)　しまりあり。
7 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。

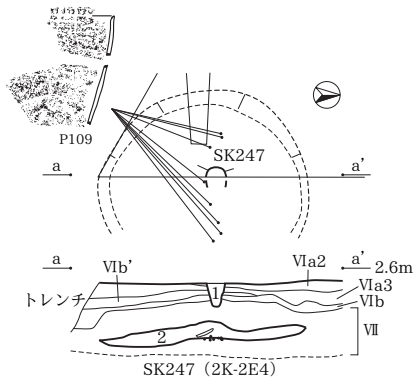






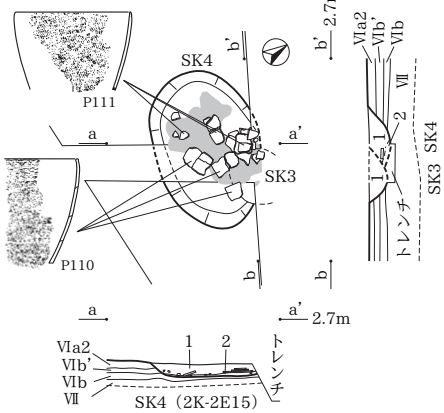
SK232　SK231
（1K-10J1・2・6・7）

SK231
1 黒褐色粘土　(10YR3/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
SK232
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。



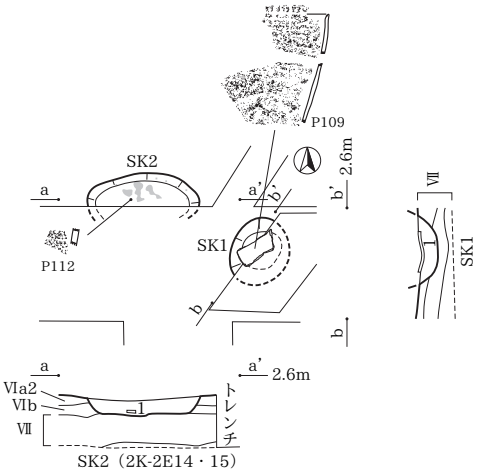
SK247（2K-2E4）

SK247
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を少量含む。



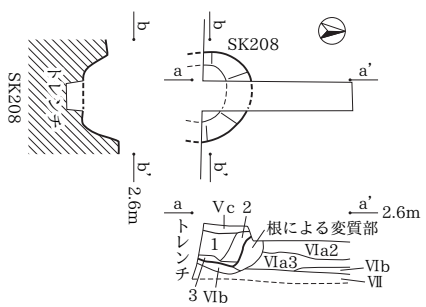
SK4（2K-2E15）

SK3
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。底面に径 2mm 程度の炭化物が分布する。
SK4
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量含む。
2 炭化物層　径 30 ～ 50mm の炭化物が主体。



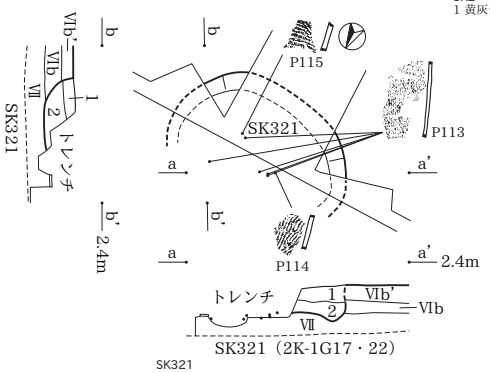
SK2（2K-2E14・15）

SK1
1 灰色粘土　(5Y5/1)　しまりあり。
SK2
1 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、径 10mm 程度の炭化物少量含む。



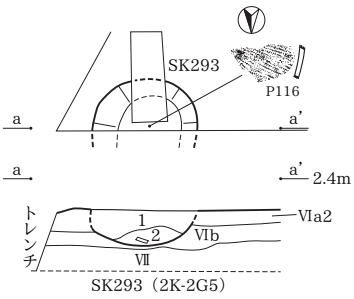
SK208（2K-1F22、2F2）

SK208
1 灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり、微粒炭化物を微量含む。
2 黄灰色粘土　(2.5Y4/1)　しまりあり。
3 径 5 ～ 10mm の炭化物主体層。

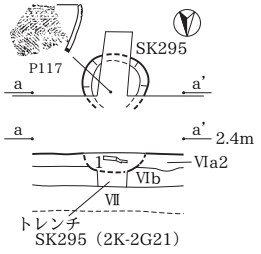


SK321（2K-1G17・22）

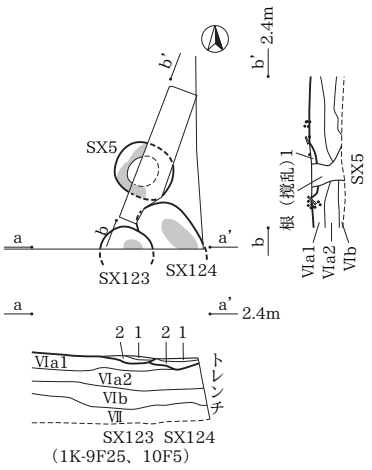
SK321
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y5/2)　しまりあり。
2 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり。



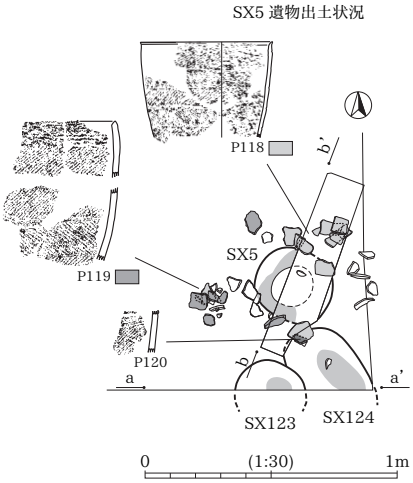
SK293
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。
2 灰黄褐色粘土　(10YR4/2)　しまりあり、植物遺体を少量含む。

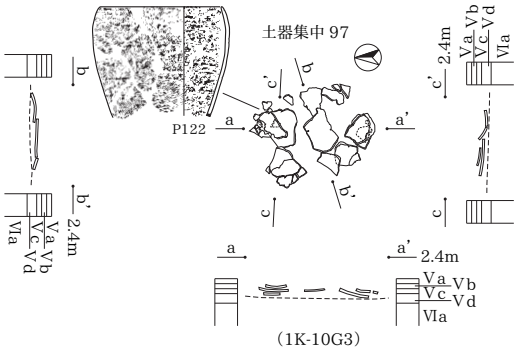


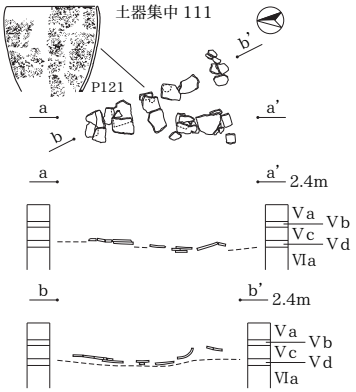
SK295
1 暗灰黄色粘土　(2.5Y4/2)　しまりあり、径 5mm 程度の炭化物を微量含む。

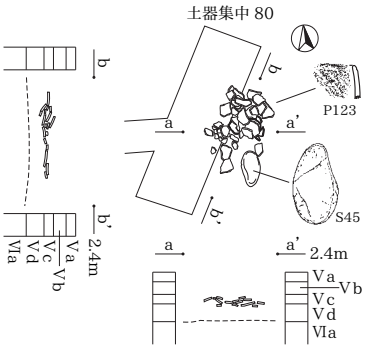


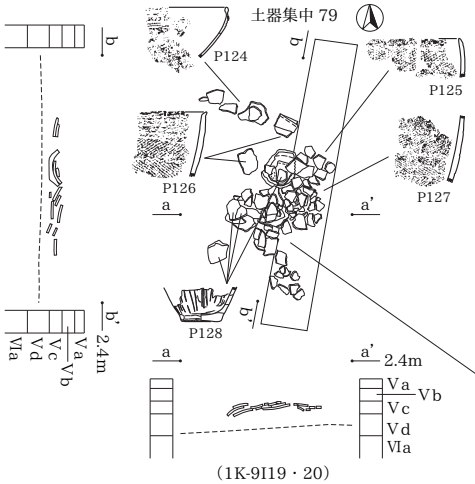
SX5
1 黒褐色粘質シルト　(10YR3/2)　しまりあり、径 1 ～ 5mm の炭化物を少量及び焼土粒・微粒炭化物を多量含む。
SX123
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、焼土粒・微粒炭化物を多量含む。
2 灰黄色粘質シルト　(2.5Y6/2)　しまりあり、熱硬化層、径 5 ～ 15mm の炭化物を少量含む。
SX124
1 暗灰黄色粘質シルト　(2.5Y5/2)　しまりあり、径 2mm 程度の炭化物を少量及び焼土粒・微粒炭化物を多量含む。
2 灰黄色粘質シルト　(2.5Y6/2)　しまりあり、熱硬化層、径 5 ～ 15mm の炭化物を少量含む。

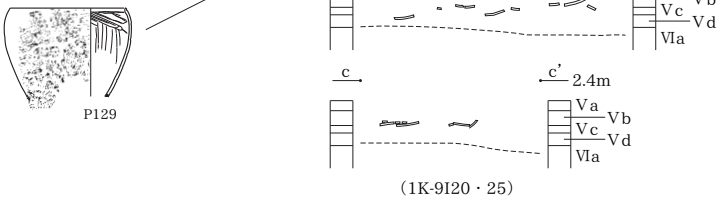


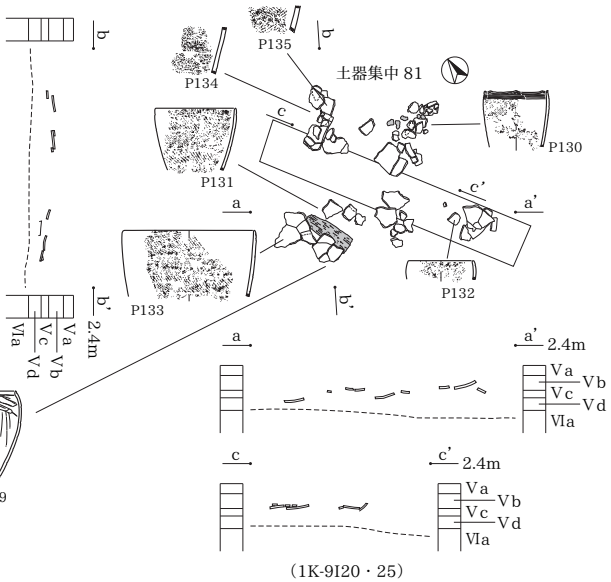




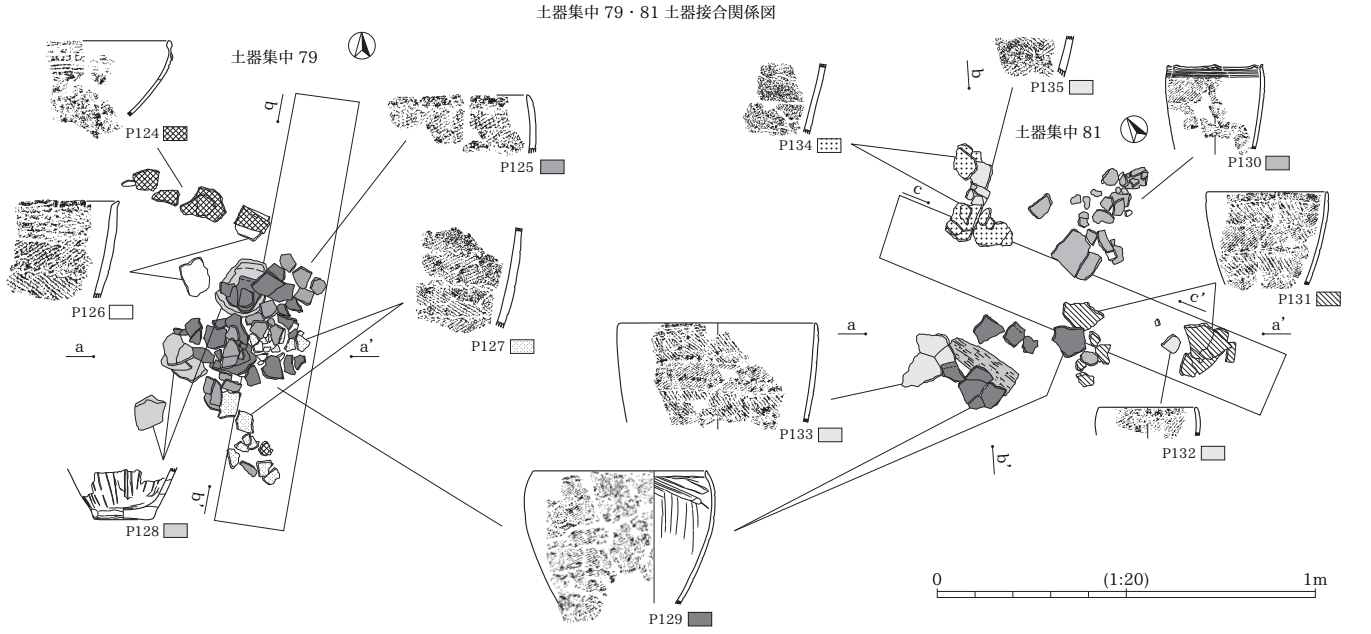


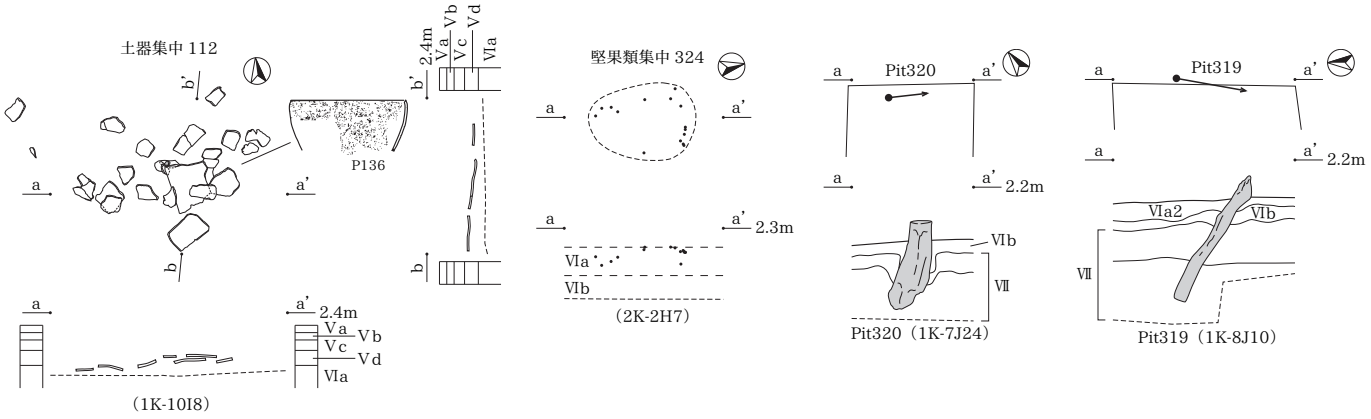


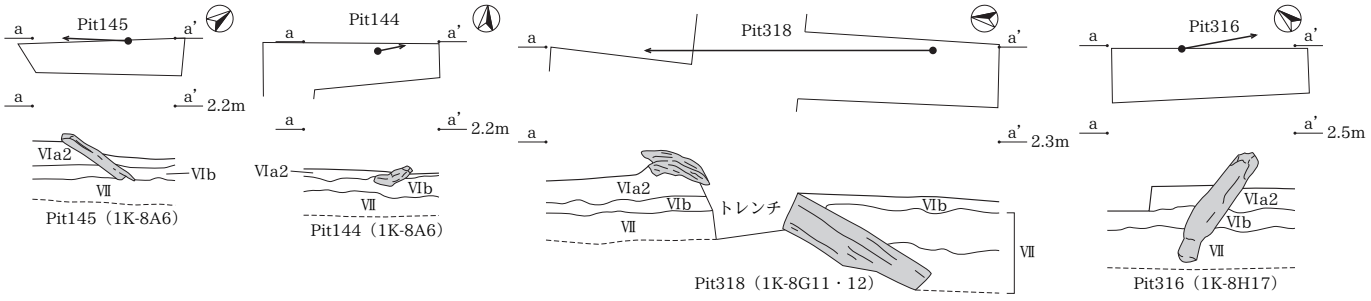


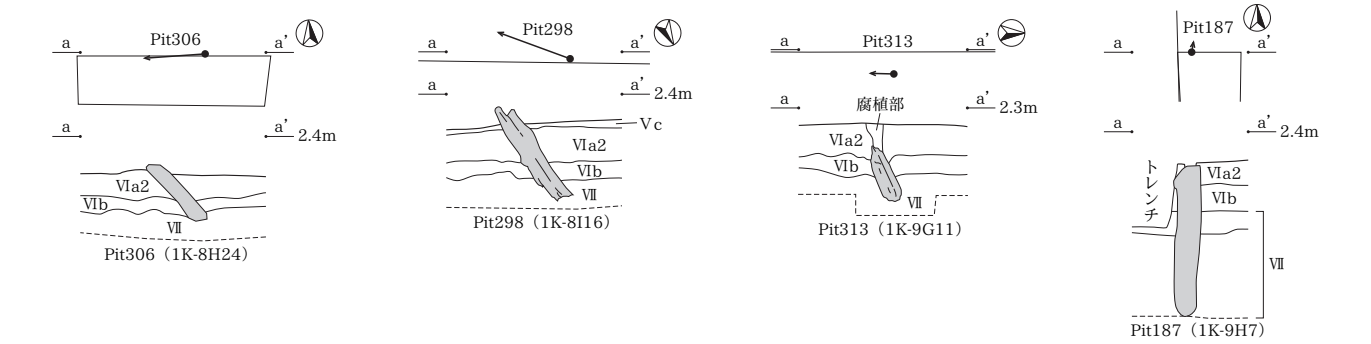


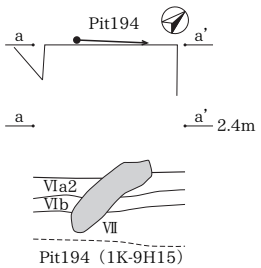
遺構個別実測図 15　土器集中（2）・杭（1）(1/40)



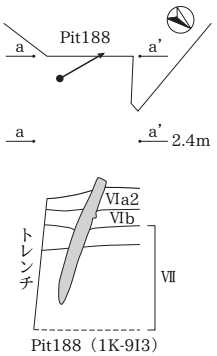




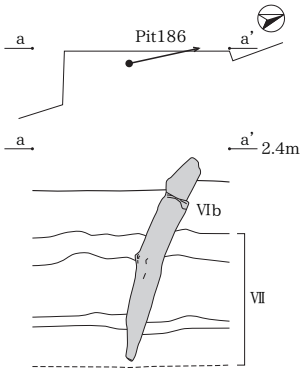




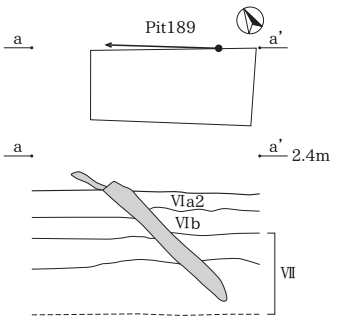
Pit194（1K-9H15）



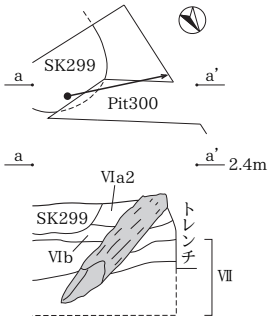
Pit188（1K-9I3）



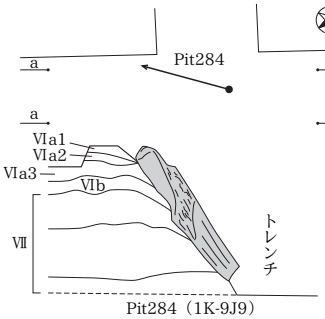
Pit186（1K-9I8）



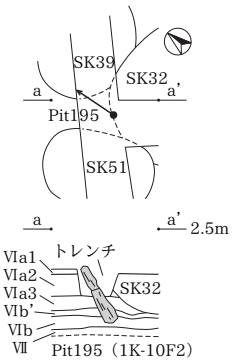
Pit189（1K-9I11・12）



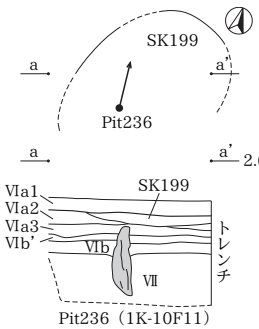
Pit300（1K-9I22）



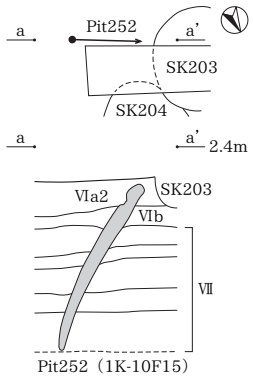
Pit284（1K-9J9）



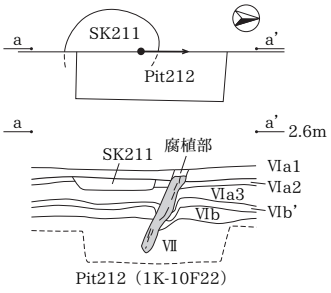
Pit195（1K-10F2）



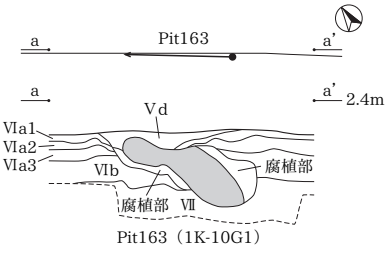
Pit236（1K-10F11）



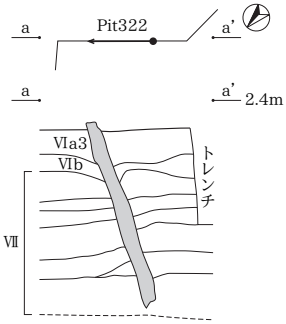
Pit252（1K-10F15）



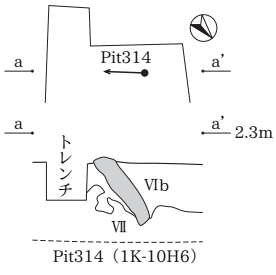
Pit212（1K-10F22）



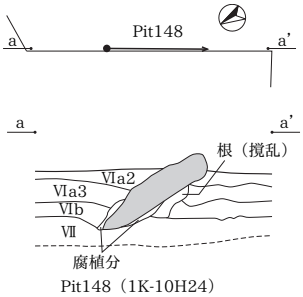
Pit163（1K-10G1）



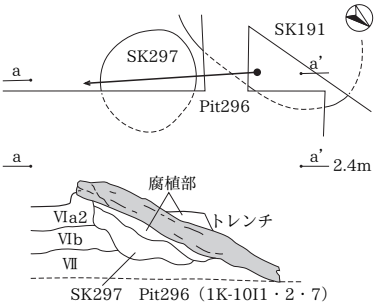
Pit322（1K-10G21）



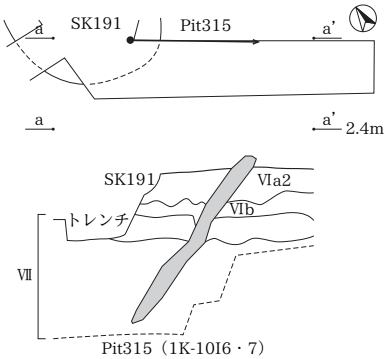
Pit314（1K-10H6）



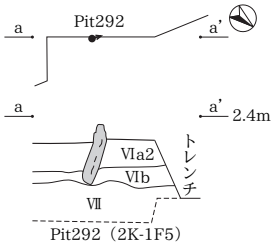
Pit148（1K-10H24）



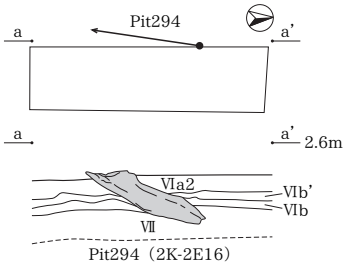
SK297　Pit296（1K-10I1・2・7）



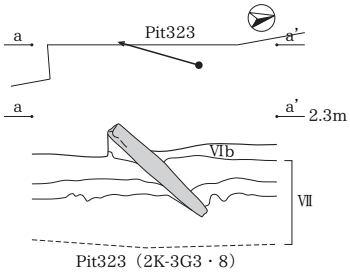
Pit315（1K-10I6・7）



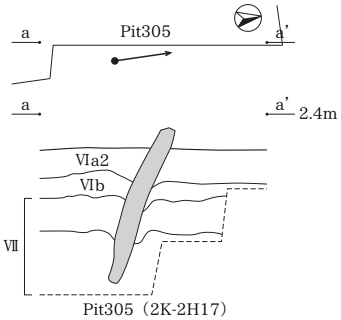
Pit292（2K-1F5）



Pit294（2K-2E16）



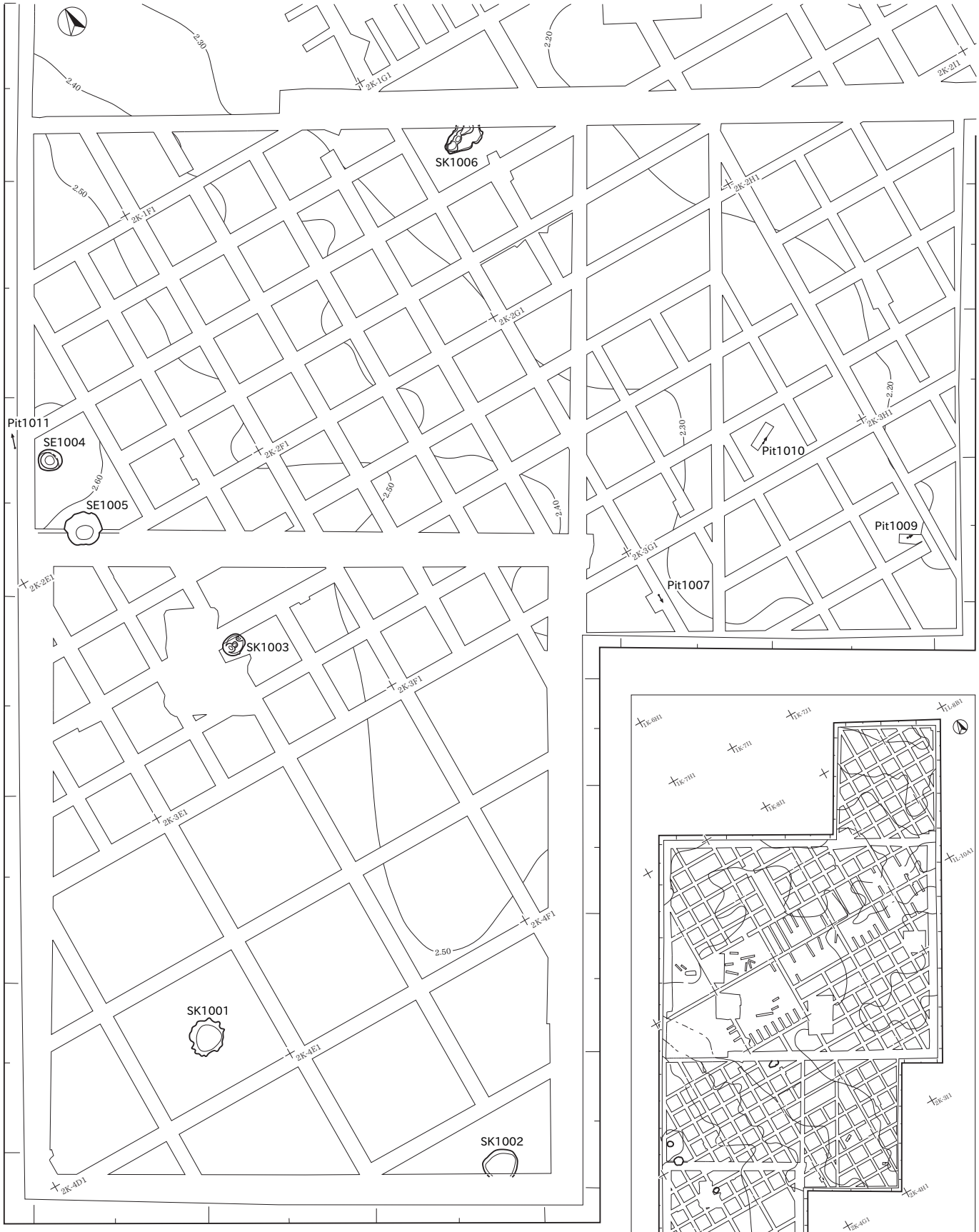
Pit323（2K-3G3・8）

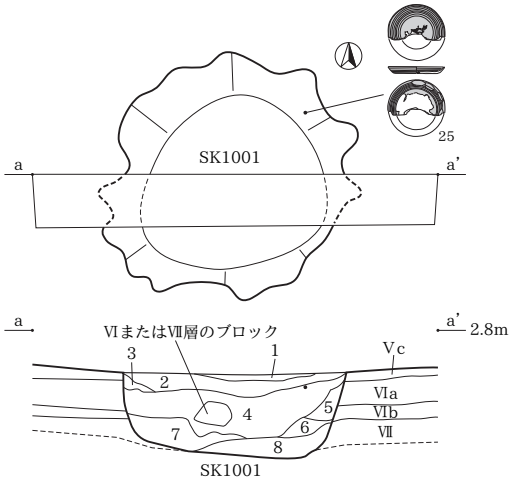


Pit305（2K-2H17）

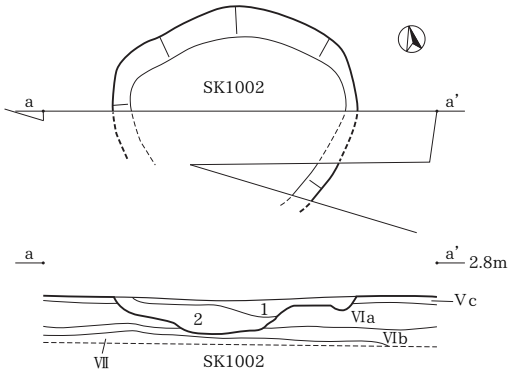
図版 34

上層遺構全体図（1/200、1/800）

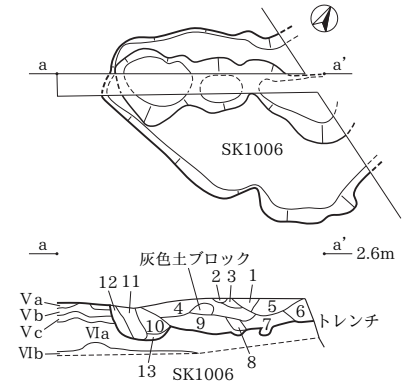




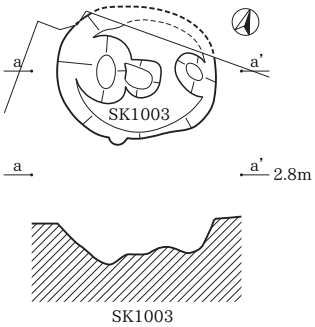
SK1001
1 植物遺体主体の黒色土　(2.5Y2/1)　粘性あり、しまりなし、径 10mm 程度の地山 (ⅥまたはⅦ層) ブロックが混じる。
2 植物遺体主体の黒色土　(5Y2/1)　粘性あり、しまりなし、最下位に薄く植物遺体層あり。
3 植物遺体主体の黒色土　(5Y2/1)　粘性あり、しまりなし、最下位に薄く植物遺体層あり、径 10 ～ 50mm の地山 (ⅥまたはⅦ層) ブロックが多量に混じる。
4 植物遺体主体の黒色土　(5Y2/1)　粘性あり、しまりなし。
5 植物遺体主体の黒色土　(2.5Y2/1)　粘性あり、しまりなし。
6 植物遺体主体のオリーブ黒色土　(5Y2/2)　粘性あり、しまりなし。
7 植物遺体主体のオリーブ黒色土　(5Y2/2)　粘性あり、しまりなし、径 50 ～ 150mm の地山ブロックが多量に混じる。
8 植物遺体主体のオリーブ黒色土　(5Y2/2)　粘性あり、しまりなし、径 50mm 程度の地山ブロックが多量に混じる。



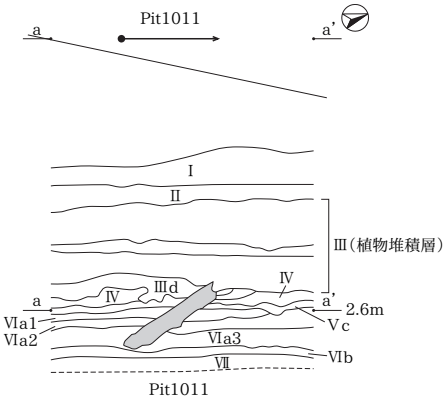
SK1002
1 黒褐色粘土　(10YR3/1)　しまりあり、黒色土 (Ⅴc 層) が多量に混じる。
2 褐灰色粘土　(10YR4/1)　しまりあり、黒色土 (Ⅴc 層) が多量に混じる。



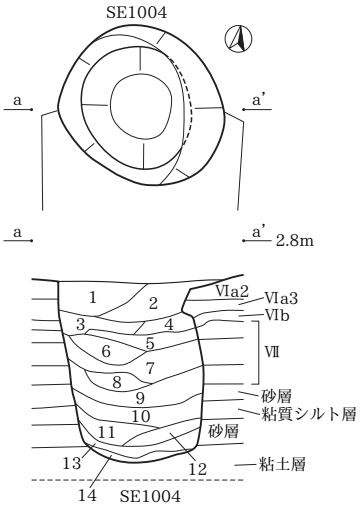
SK1006
1 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) と灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
2 灰色土 (Ⅵ層) ブロック主体　(5Y5/1)
3 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
4 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) と灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
5 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) と灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
6 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　径 10 ～ 15mm の黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) と灰色土 (Ⅵ層) のブロックが多量に混じる。
7 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　径 10mm 程度の黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) と径 20mm 程度の灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
8 灰色土 (Ⅵ層) ブロック主体　(5Y5/1)
9 黒褐色粘土　(2.5Y3/1)　灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
10 褐色粘土　(2.5Y3/1)　径 10 ～ 20mm の黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) と灰色土 (Ⅵ層) ブロックが多量に混じる。
11 10 層に類似　灰色土 (Ⅵ層) がより多く混じる。
12 10 層に類似　黒色土 (ⅤａまたはⅤｄ層) がより多く混じる。
13 10 層に類似　灰色土 (Ⅵ層) がより多く混じる。



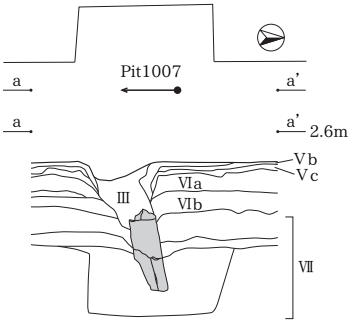
SK1003



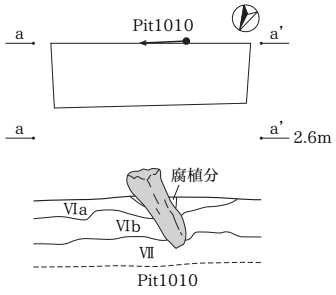
Pit1011



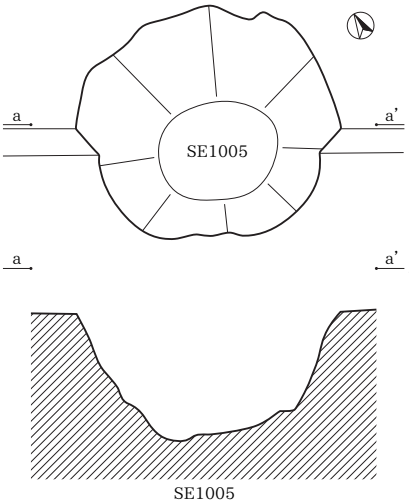
SE1004
1 植物遺体主体の黒色土　(10YR1.7/1)　粘性あり、しまりなし、径 10 ～ 20mm の地山ブロックが多量に混じる。
2 植物遺体主体の黒色土　(10YR1.7/1)　粘性あり、しまりなし、地山ブロックが少量混じる。
3 植物遺体主体の黒褐色土　(10YR2/2)　粘性あり、しまりなし、地山ブロックが少量混じる。
4 植物遺体主体の黒褐色土　(10YR2/2)　粘性あり、しまりなし、植物遺体を多量含む。
5 植物遺体主体の黒色土　(10YR1.7/1)　粘性あり、しまりなし。
6 植物遺体主体の黒色土　(10YR1.7/1)　粘性あり、しまりなし、径 20 ～ 30mm の地山ブロックが部分的に混じる。
7 黒色土　(10YR1.7/1)　やや土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし。
8 黒色土　(10YR1.7/2)　やや土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし。
9 黒色土　(10YR1.7/3)　やや土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし。
10 黒色土　(10YR1.7/4)　土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし、径 10 ～ 20mm の地山ブロックが微量混じる。
11 黒色土　(10YR1.7/1)　土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし。
12 黒色土　(10YR1.7/1)　土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし、径 50mm 程度の地山ブロックが部分的に混じる。
13 黒色土　(10YR1.7/1)　土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし、径 10 ～ 30mm の地山ブロックが微量混じる。
14 黒色土　(10YR1.7/1)　土壌化の進んだ植物遺体、しまりなし、地山ブロックが部分的に混じる。



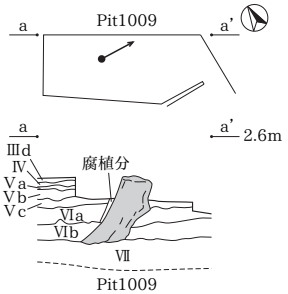
Pit1007



Pit1010

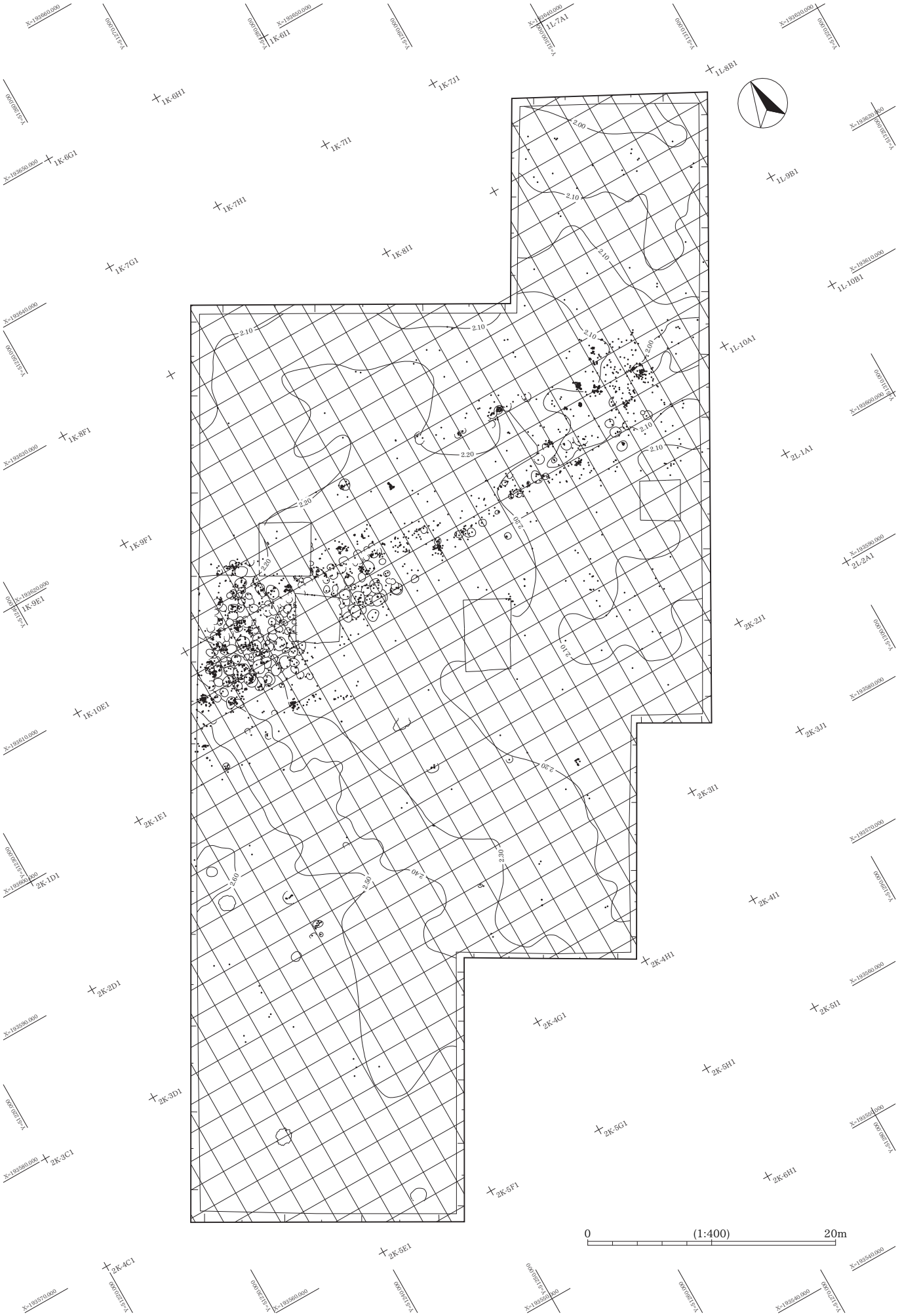


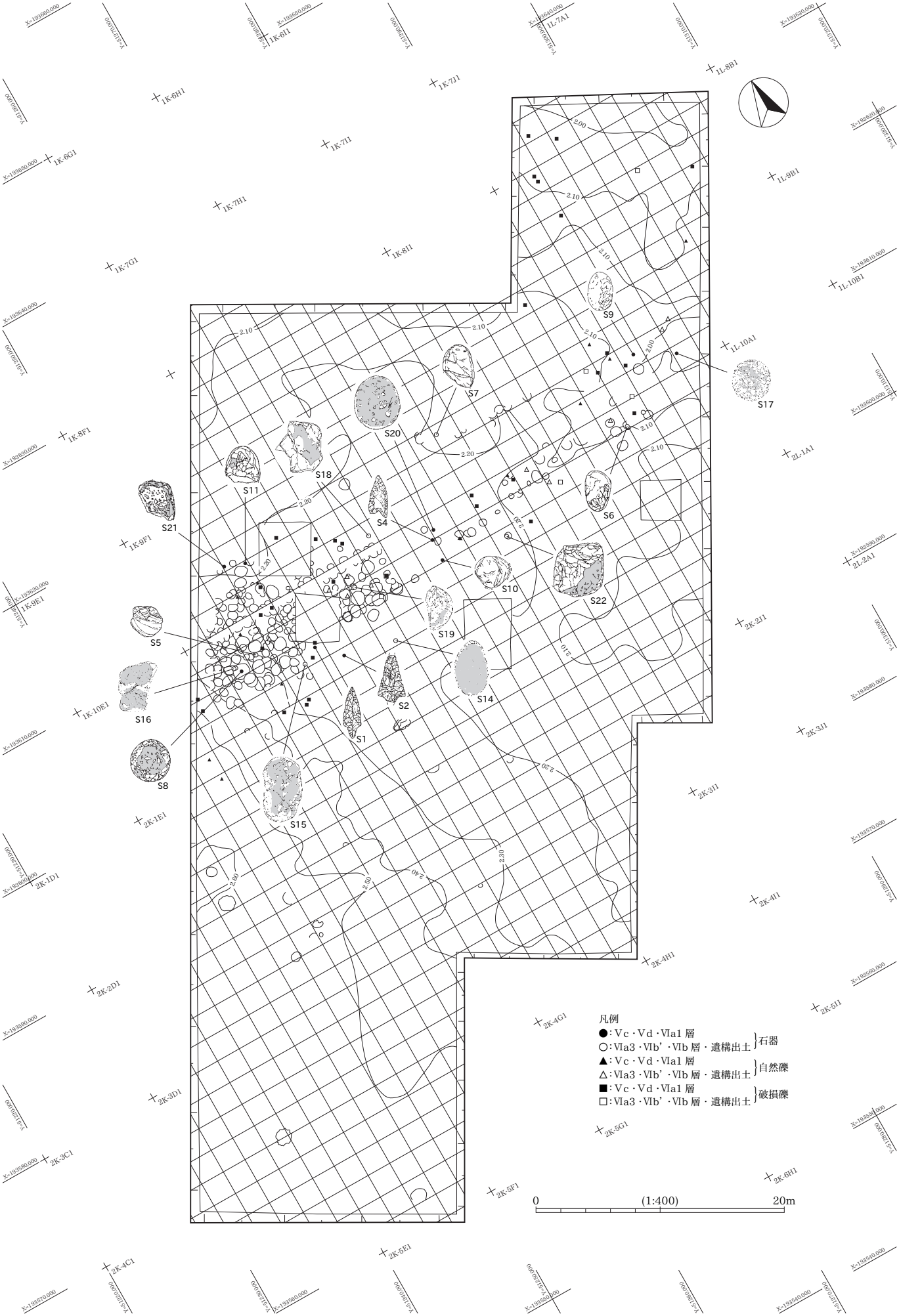
SE1005



Pit1009

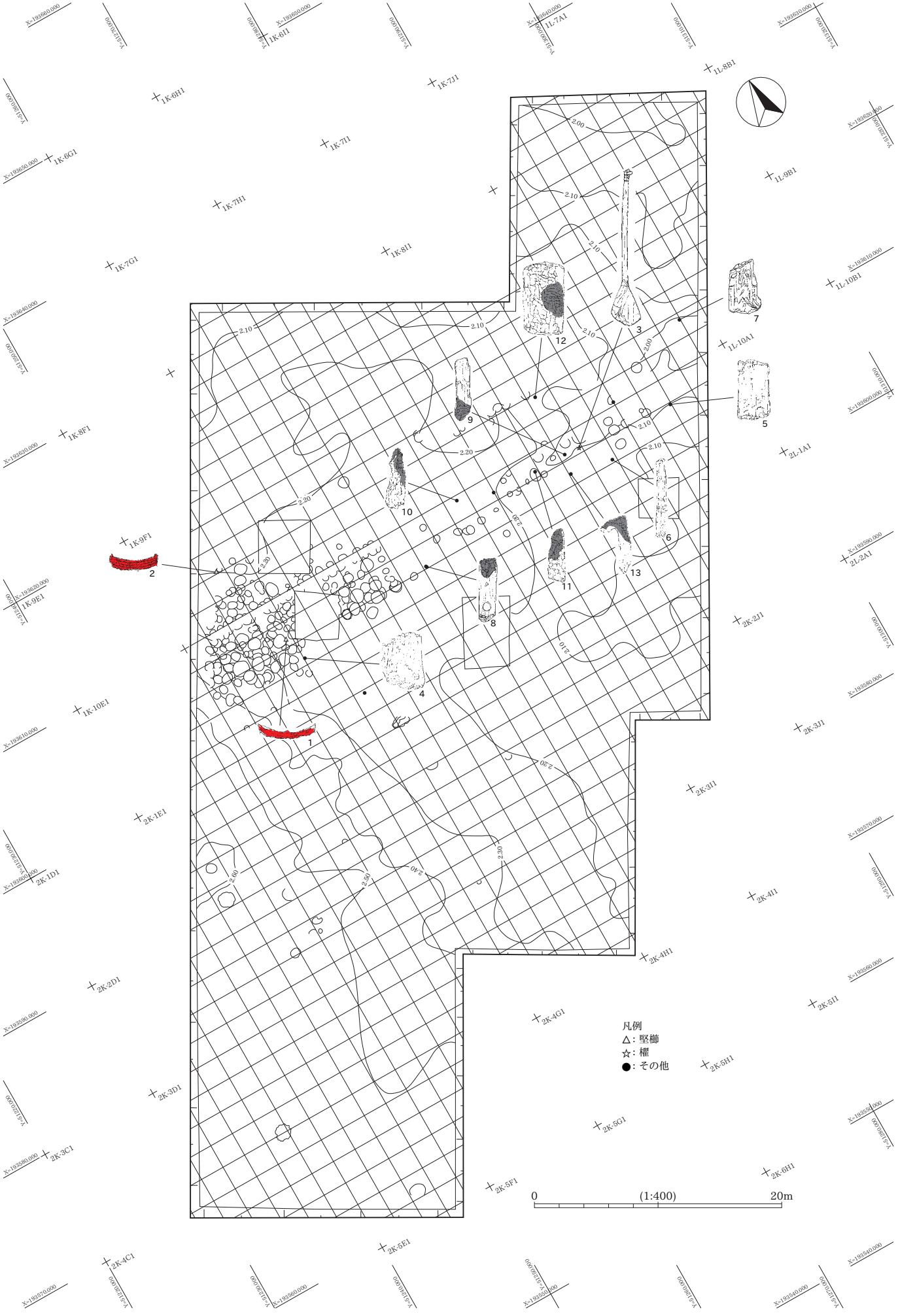
縄文土器出土分布図



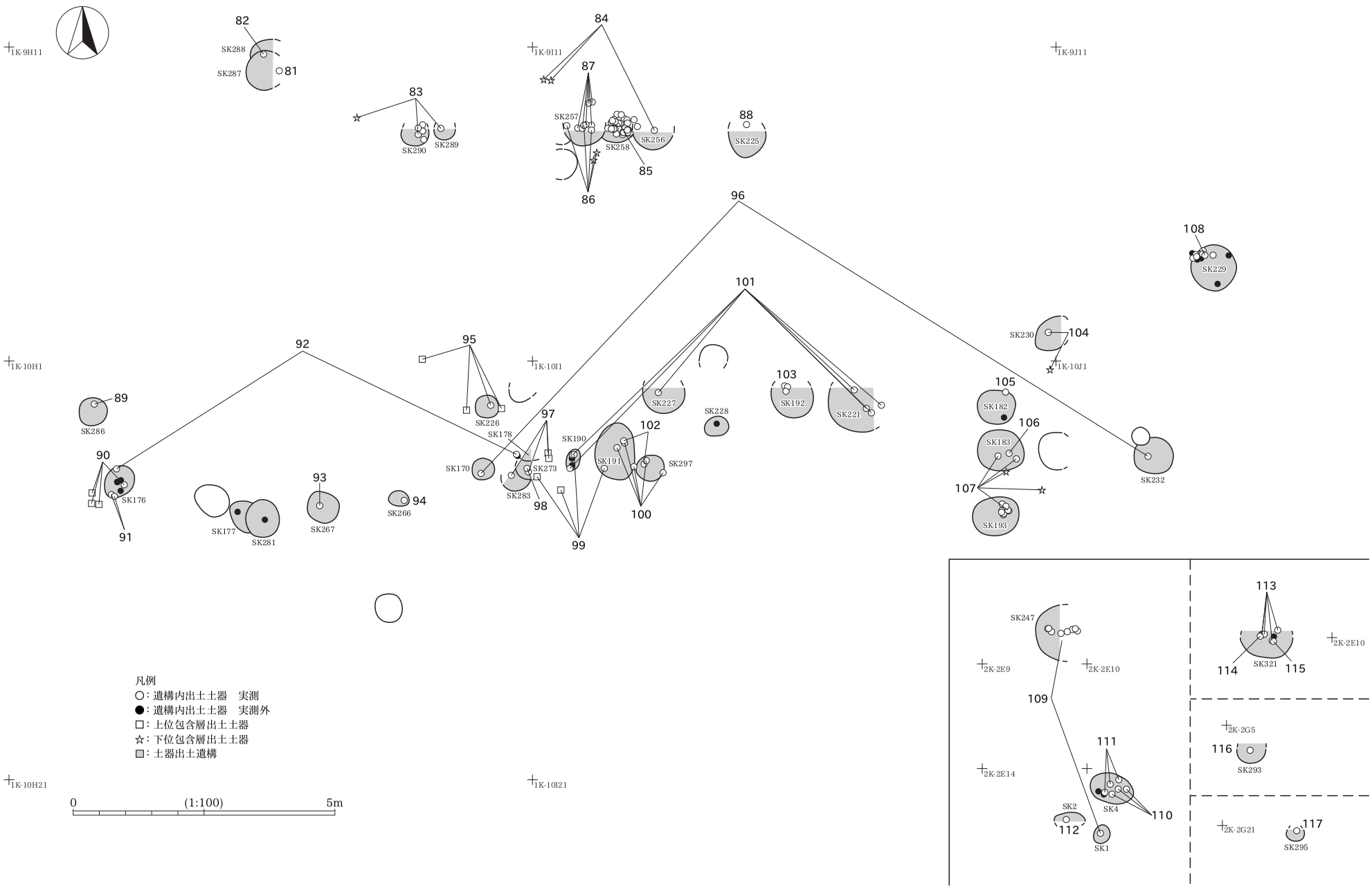

S1
S2
S4
S5
S6
S7
S8
S9
S10
S11
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
凡例
●：Vc・Vd・VIa1 層
○：VIa3・VIb'・VIb 層・遺構出土
▲：Vc・Vd・VIa1 層
△：VIa3・VIb'・VIb 層・遺構出土
■：Vc・Vd・VIa1 層
□：VIa3・VIb'・VIb 層・遺構出土
石器
自然礫
破損礫
0
(1:400)
20m

図版 38

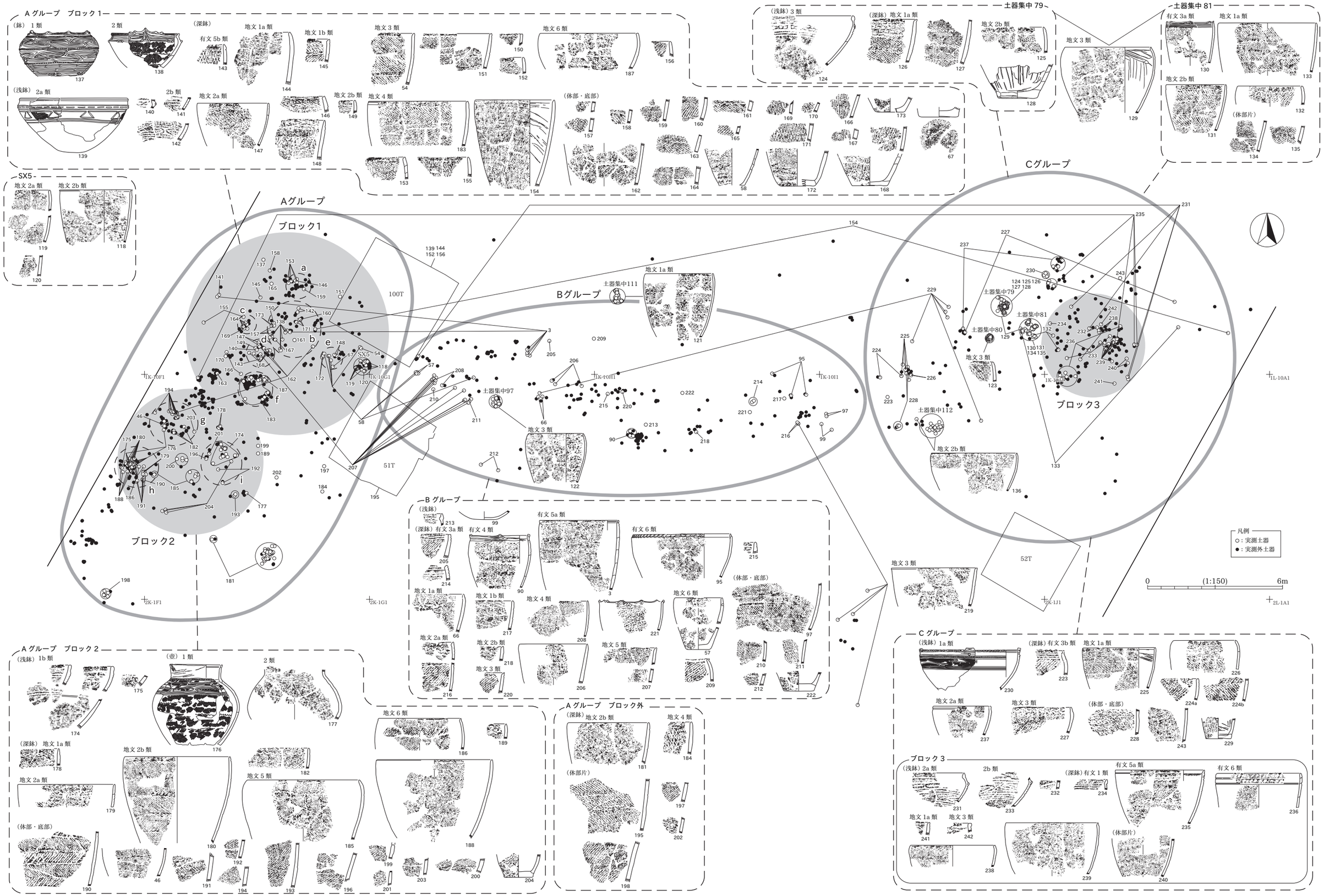
木製品・漆製品出土分布図



凡例
○：遺構内出土土器　実測
●：遺構内出土土器　実測外
□：上位包含層（Vc・Vd・VIa1 層）出土土器
☆：下位包含層（VIa2・VIa3・VIb'・VIb 層）出土土器
■：土器出土遺構
0
(1:100)
5m
100T
51T

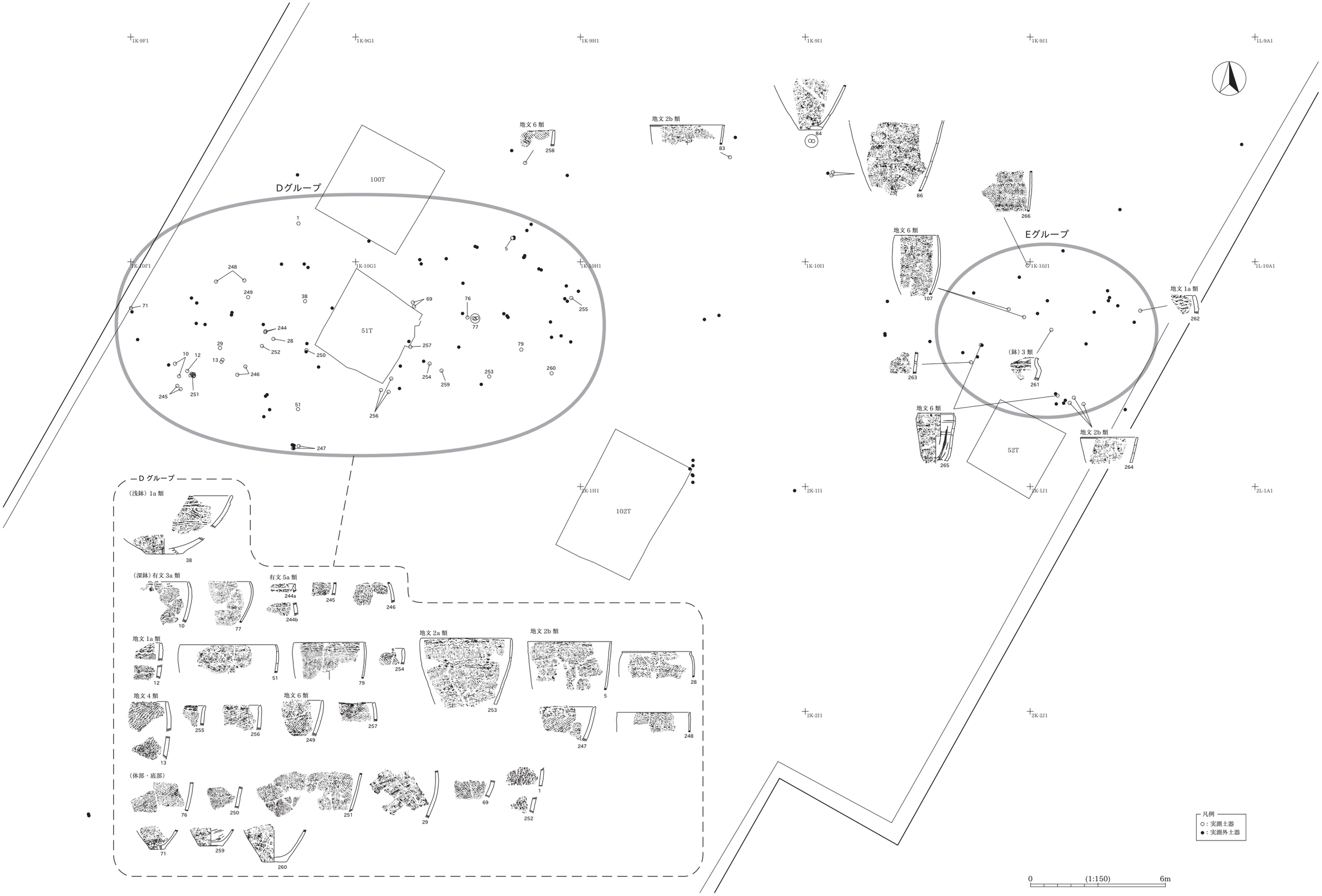


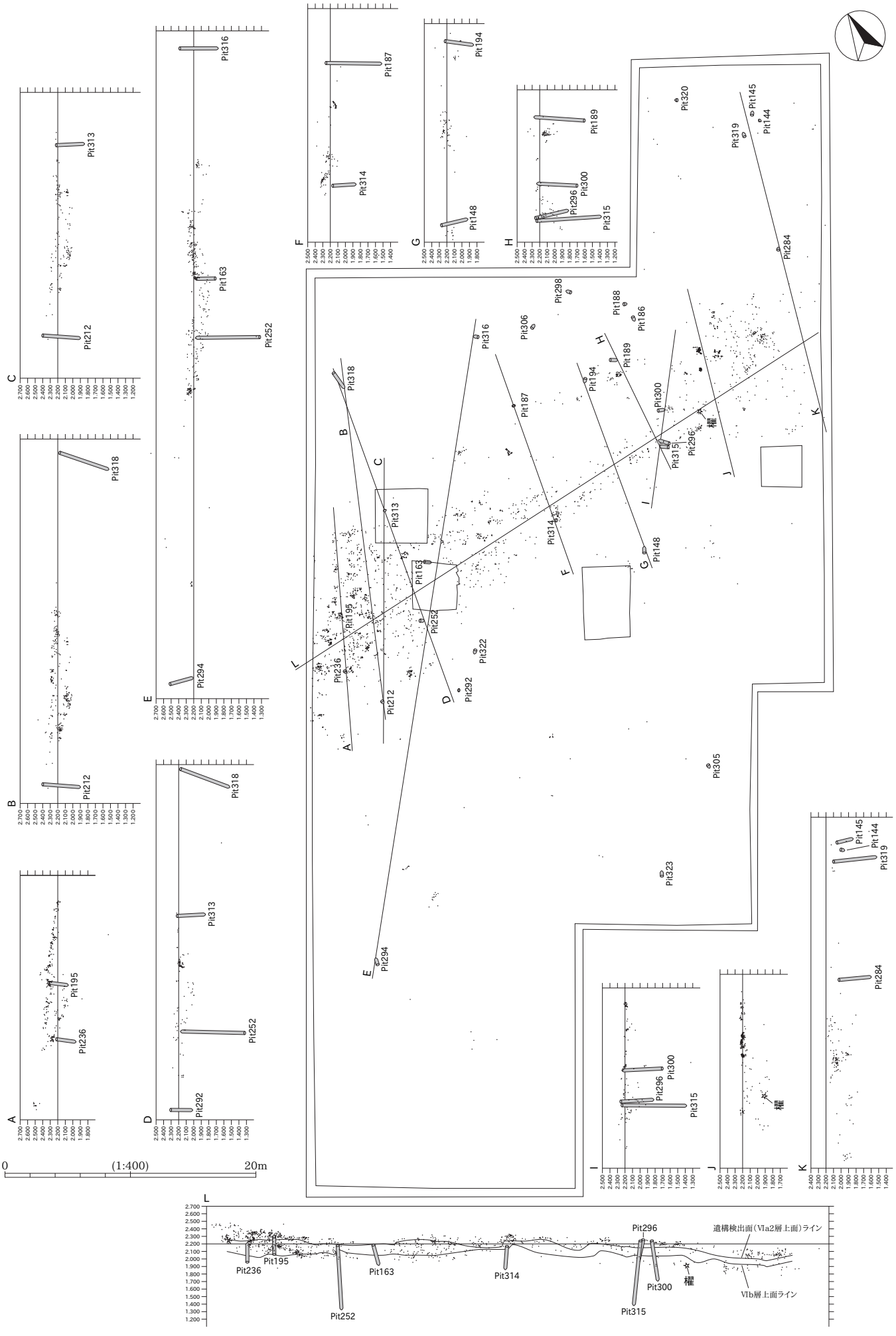
遺構内出土土器接合・同一個体関係図②


Aグループ　ブロック1
(鉢) 1類
2類
(深鉢)
有文5b類
地文1a類
地文1b類
地文3類
地文6類
(浅鉢) 2a類
2b類
地文2a類
地文2b類
地文4類
(体部・底部)
土器集中79
(浅鉢) 3類
(深鉢) 地文1a類
地文2b類
地文3類
土器集中81
有文3a類
地文1a類
地文2b類
(体部片)
SX5
地文2a類
地文2b類
Aグループ
ブロック1
100T
139 144
152 156
地文1a類
土器集中111
Bグループ
Cグループ
154
231
235
227
237
230
229
243
土器集中79
土器集中81
土器集中80
地文3類
ブロック3
224
225
226
223
228
土器集中112
地文2b類
133
136
IK-10F1
IK-10G1
IK-10H1
IK-10I1
IL-10A1
IK-10J1
ブロック2
198
181
2K-1F1
2K-1G1
2K-1J1
2L-1A1
52T
51T
地文3類
219
凡例
○：実測土器
●：実測外土器
0　(1:150)　6m
Bグループ
(浅鉢)
(深鉢) 有文3a類
有文4類
有文5a類
有文6類
地文1a類
地文1b類
地文4類
地文6類
(体部・底部)
地文2a類
地文2b類
地文5類
地文3類
Aグループ　ブロック2
(浅鉢) 1b類
(壺) 1類
2類
(深鉢) 地文1a類
地文2b類
地文6類
地文2a類
地文5類
(体部・底部)
Aグループ　ブロック外
(深鉢) 地文2b類
地文4類
(体部片)
Cグループ
(浅鉢) 1a類
(深鉢) 有文3b類
地文1a類
地文2a類
地文3類
(体部・底部)
ブロック3
(浅鉢) 2a類
2b類
(深鉢) 有文1類
有文5a類
有文6類
地文1a類
地文3類
(体部片)

下位包含層（Ⅵa2・Ⅵa3・Ⅵb’・Ⅵb層）出土土器接合・同一個体関係図

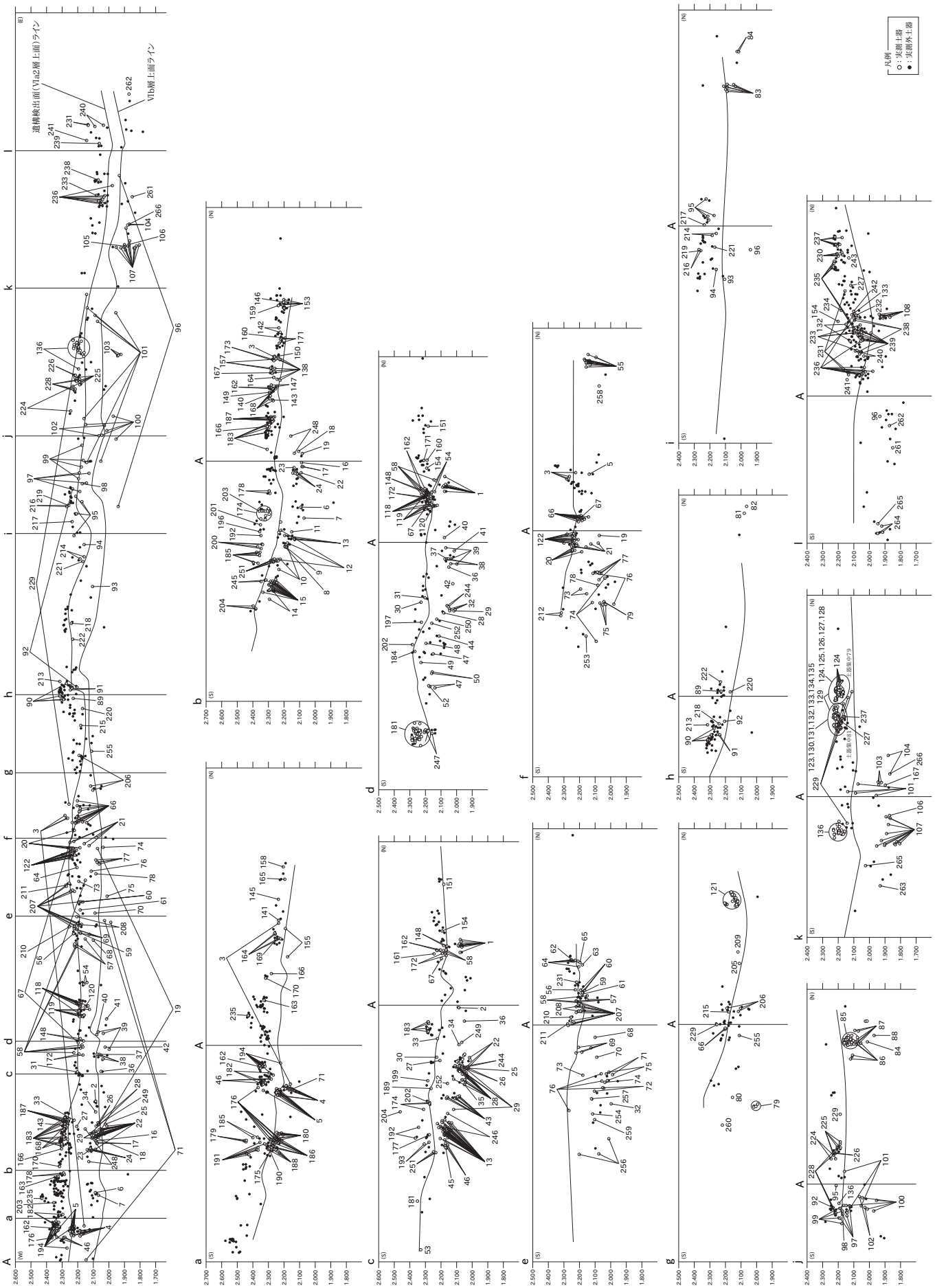
図版 42




0
(1:400)
20m
遺構検出面（VIa2層上面）ライン
VIb層上面ライン
Pit236
Pit195
Pit252
Pit163
Pit314
Pit296
Pit300
Pit315
Pit320
Pit319
Pit145
Pit144
Pit284
Pit305
Pit323
Pit322
Pit292
Pit294
Pit318
Pit212
Pit313
Pit316
Pit187
Pit194
Pit148
Pit189
Pit188
Pit186
Pit298
Pit306
櫂

図版 44

垂直分布からみた土器出土状況と接合・同一個体関係図



SK133(1)

1
(1K-9F24)+1K-9F24　Vlb

SK157(2)

2
1K-10F4

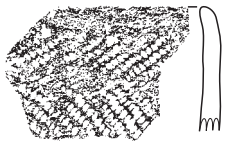
SK46･52(3～5)

3
SK52(1K-10F6)
+
1K-9F17･24､1K-9G24　Vd･Vla1

4
SK46+52(1K-10F6)

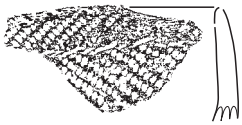
5
SK52(1K-10F6)+1K-9G24　Vlb'

SK50(6)



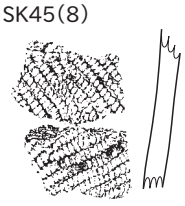
6
1K-10F7

SK83(7)



7
1K-10F7

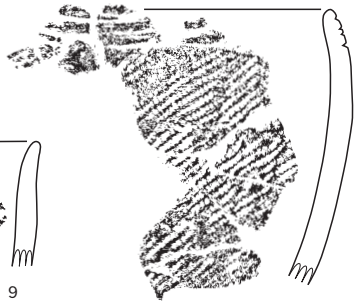
SK45(8)



8
1K-10F6

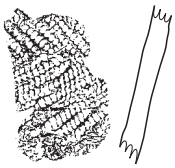
SK253(9･10)

9
1K-10F12



10
SK253(1K-10F12)
+
1K-10F11･12　Vlb'

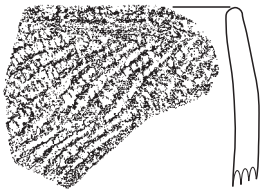
SK55･73･215(11～13)



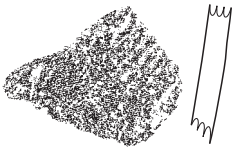
11
SK55　1K-10F7

12a

12b
SK55(1K-10F7)+
SK215(1K-10F12)+
1K-10F12　Vla2

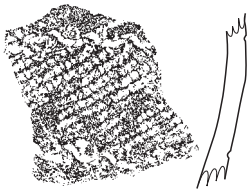


13a



13b
SK73(1K-10F12)+
SK215(1K-10F12)+
1K-10F13　Vla2

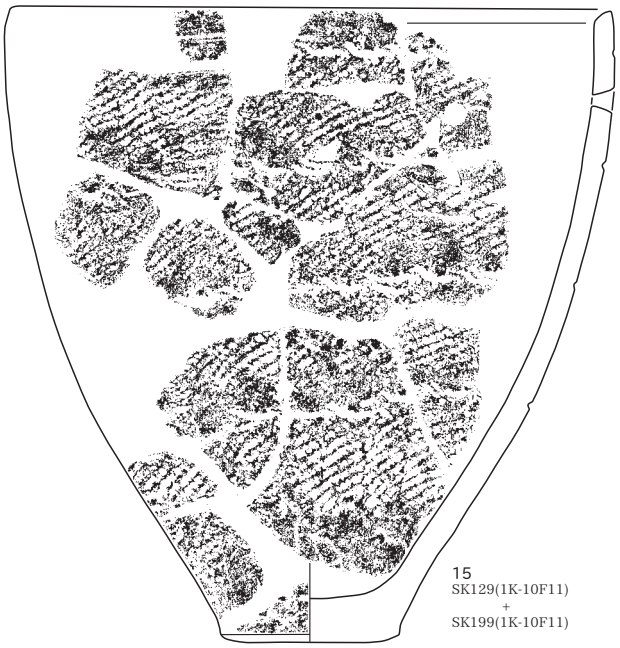
SK129(14)



14
1K-10F11･16

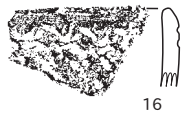
0　10cm　(1 : 3)

SK129・199(15)



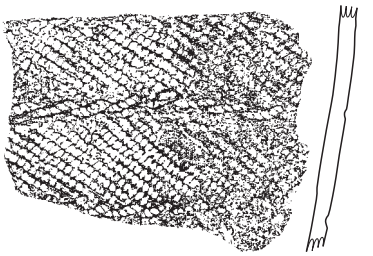
15
SK129(1K-10F11)
+
SK199(1K-10F11)

SK61・151(16～21)

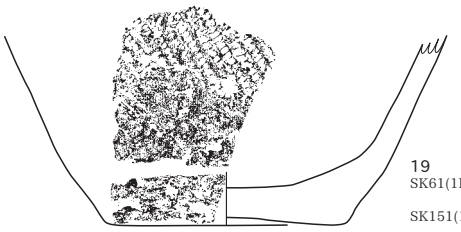


16
SK61(1K-10F3)

17
SK61(1K-10F3)

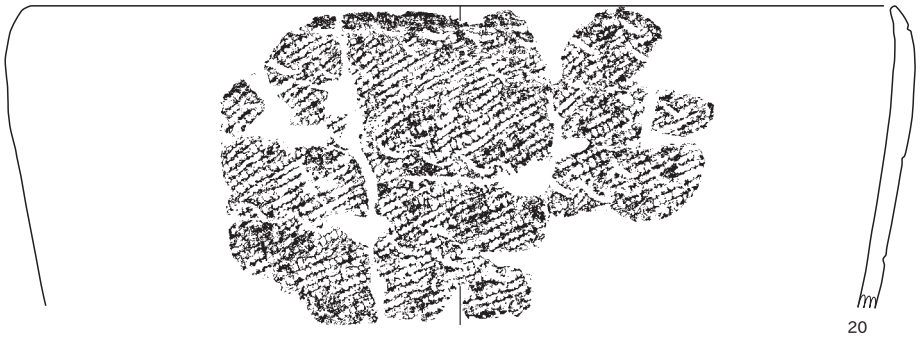


18
SK61(1K-10F3)

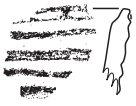


19
SK61(1K-10F3)
+
SK151(1K-10G3)

SK15・57・64・65・150・167(22～32)

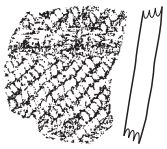


20
SK151(1K-10G3・4)

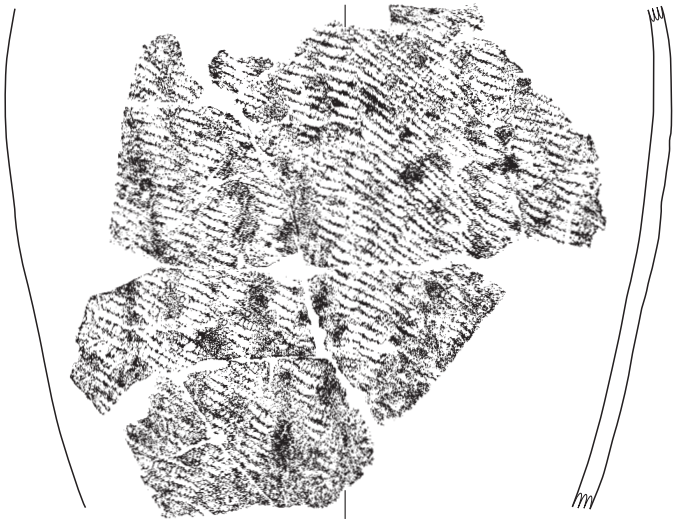


22a

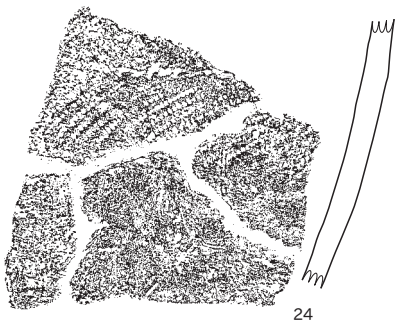
22b



22c
SK57+65(1K-10F8)

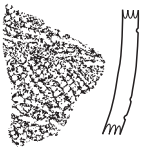


21
SK151(1K-10G3・4)

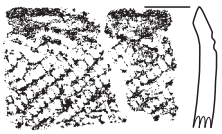


24
SK57(1K-10F3・8)

23
SK57(1K-10F3)

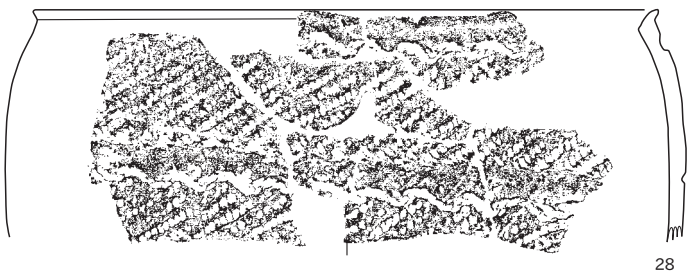


25
SK65(1K-10F8)

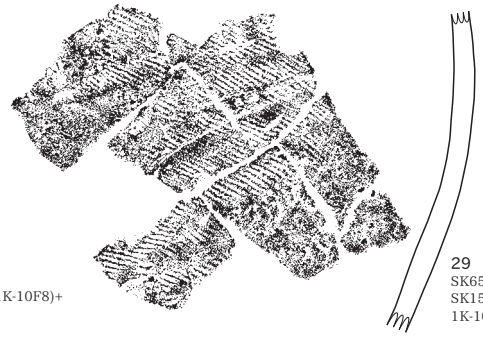


26
SK65(1K-10F8)

27
SK65(1K-10F8)

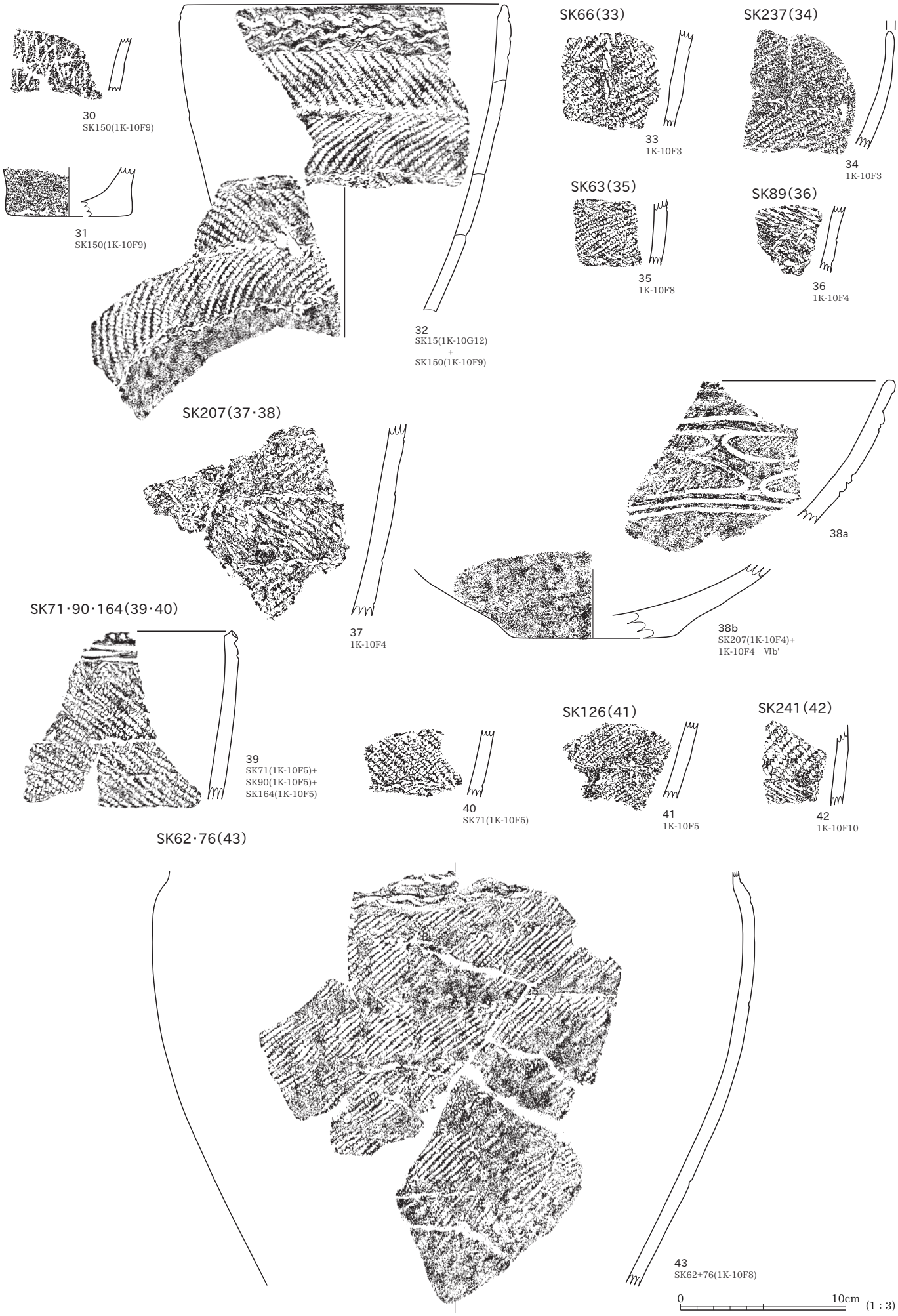


28
SK64+65+167(1K-10F8)+
1K-10F9　VIa3



29
SK65(1K-10F8)+
SK150(1K-10F9)+
1K-10F7　VIa3

0　10cm　(1 : 3)


30
SK150(1K-10F9)
31
SK150(1K-10F9)
32
SK15(1K-10G12)
+
SK150(1K-10F9)
SK66(33)
33
1K-10F3
SK237(34)
34
1K-10F3
SK63(35)
35
1K-10F8
SK89(36)
36
1K-10F4
SK207(37・38)
37
1K-10F4
38a
38b
SK207(1K-10F4)+
1K-10F4 Ⅵb'
SK71・90・164(39・40)
39
SK71(1K-10F5)+
SK90(1K-10F5)+
SK164(1K-10F5)
40
SK71(1K-10F5)
SK126(41)
41
1K-10F5
SK241(42)
42
1K-10F10
SK62・76(43)
43
SK62+76(1K-10F8)
0
10cm
(1 : 3)

SK203(44)

44
1K-10F14

SK85(45)

45
1K-10F12

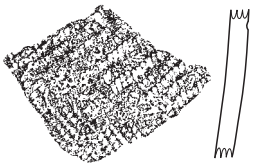
SK95(46)

46
SK95(1K-10F13)
+
1K-10F6　VIa1

SK181(47)

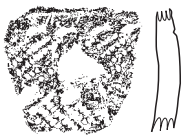
47
1K-10F14

SK88(48)

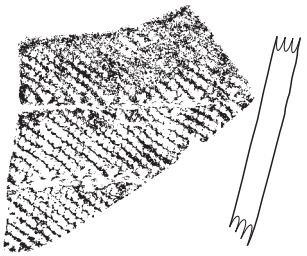


48
1K-10F14

SK128(49･50)

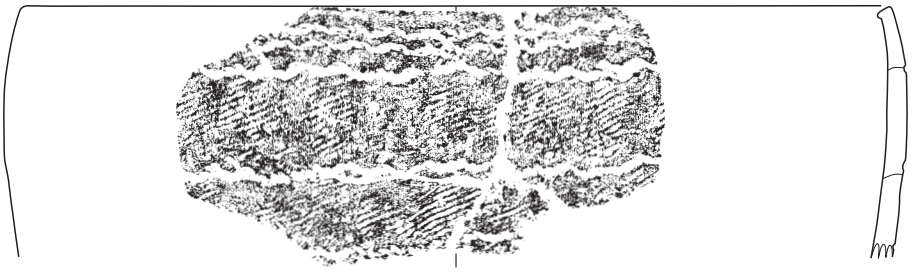


49
1K-10F14



50
1K-10F14

SK202(51)



51
SK202(1K-10F19)
+
1K-10F19　VIa3

SK201(52)

52
1K-10F19

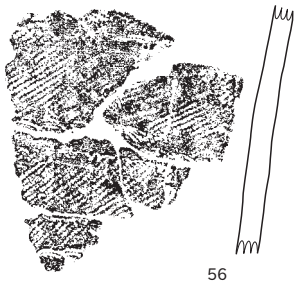
SK211(53)

53
1K-10F22

SK317(55)

55
1K-9G14･15

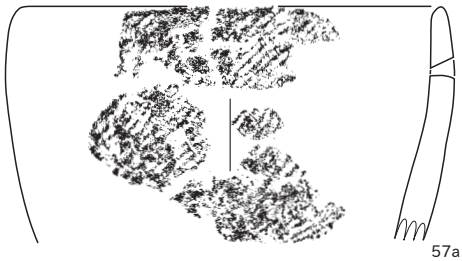
SK102(56～59)



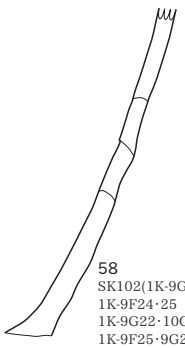
56
1K-9G22

SK99(54)

54
SK99(1K-9G21)
+
1K-9F25　Vc

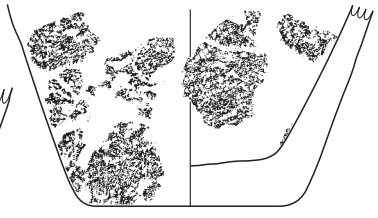


57a



58
SK102(1K-9G22)+
1K-9F24･25　Vc+
1K-9G22･10G3　Vd+
1K-9F25･9G22　VIa1

59
1K-9G22



57b
SK102(1K9G22)
+
1K-9G22　Vd

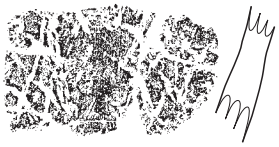
0　10cm　(1 : 3)

SK103(60･61)

60a

60b

60c
1K-9G22



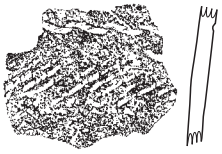
61
1K-9G22

SK118(62～65)

62
1K-9G23

63
1K-9G23

64
1K-9G23



65
1K-9G23

SK121(66･67)

66
SK121(1K-10G4)
+
1K-10G4　Vd

67
SK121(1K-10G4)
+
1K-9F25　Ⅵa1

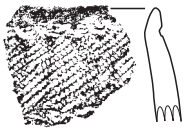
SK155(68)

68
1K-10G2

SK307(69)

69
SK307(1K-10G2･7)
+
1K-10G2　Ⅵb'

SK14(70)



70
1K-10G7

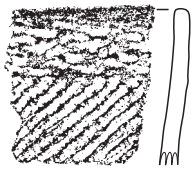
SK303･304(71)

71
SK303+304(1K-10G7)
+
1K-10F6　Ⅵa3

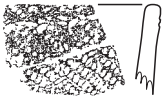
SK19･30･106･152･161･162･310(73～76)

73
SK152(1K-10G8)

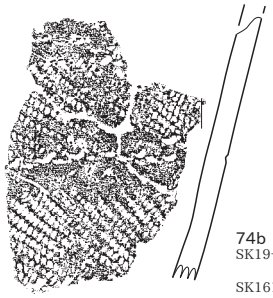
SK309(72)



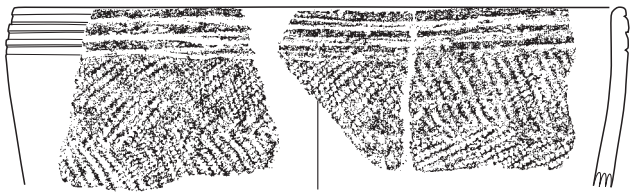
72
1K-10G7



74a



74b
SK19+152+162(1K-10G8)
+
SK161(1K-10G13)



75
SK106(1K-10G8)
+
SK152(1K-10G7･8)

76
SK30+152(1K-10G8)
+
SK310(1K-10G12)
+
1K-10G8　Ⅵb'

0　10cm　(1 : 3)

SK156(77･78)

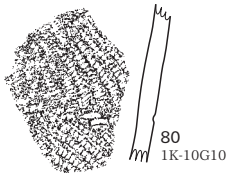
77
SK156(1K-10G8)
+
1K-10G8　Vlb'

78
1K-10G8

SK29･301(79)

79
SK29(1K-10G9･14)
+
SK301(1K-10G9)
+
1K-10G9　Vlb

SK302(80)



80
1K-10G10

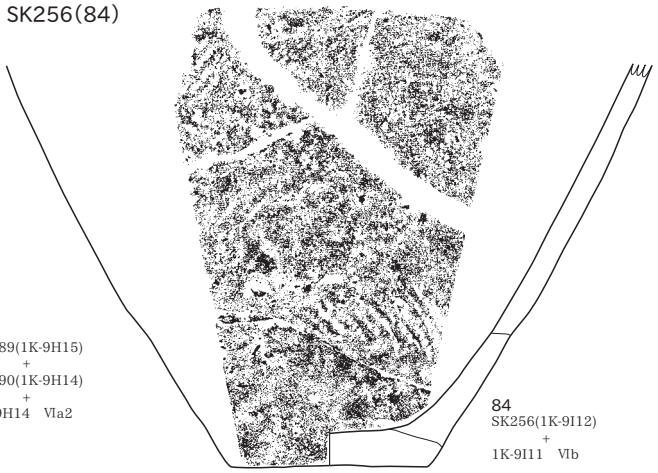
SK287(81)

81
1K-9H13

SK288(82)

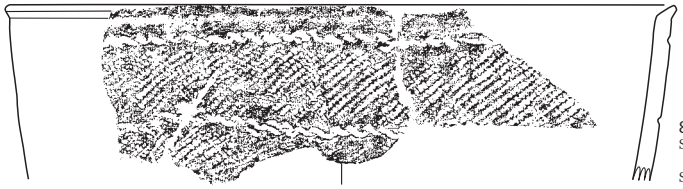
82
1K-9H13

SK256(84)



84
SK256(1K-9I12)
+
1K-9I11　Vlb

SK289･290(83)



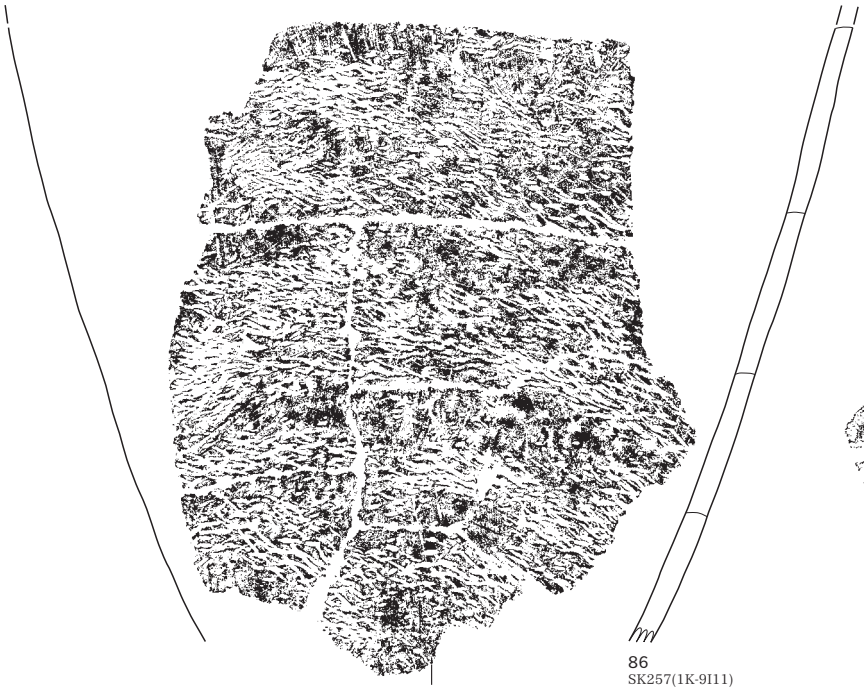
83
SK289(1K-9H15)
+
SK290(1K-9H14)
+
1K-9H14　Vla2

SK258(85)

85
1K-9I11

0　10cm　(1 : 3)

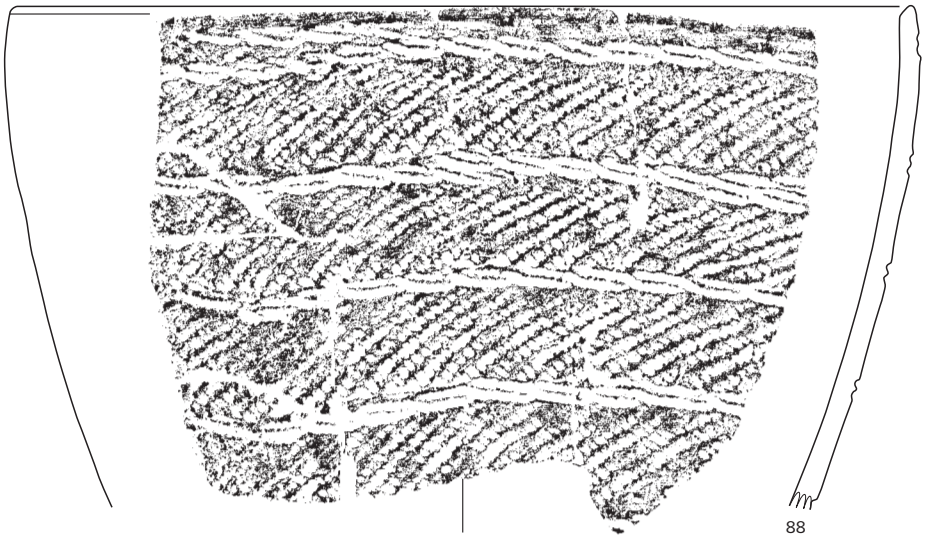
SK257(86･87)



86
SK257(1K-9I11)
+
1K-9I16　VIa2

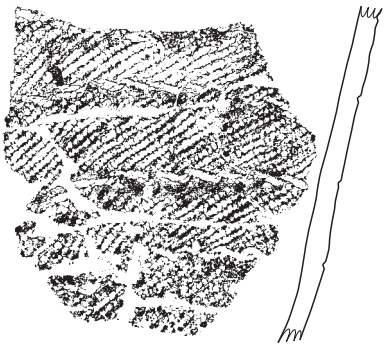
87
1K-9I11

SK225(88)



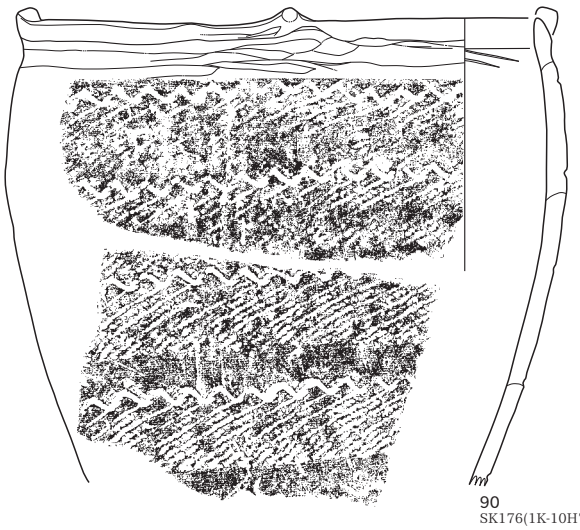
88
1K-9I13

SK286(89)



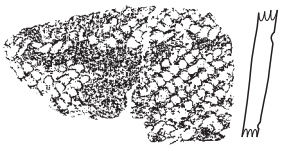
89
1K-10H1

SK176･178(90～92)



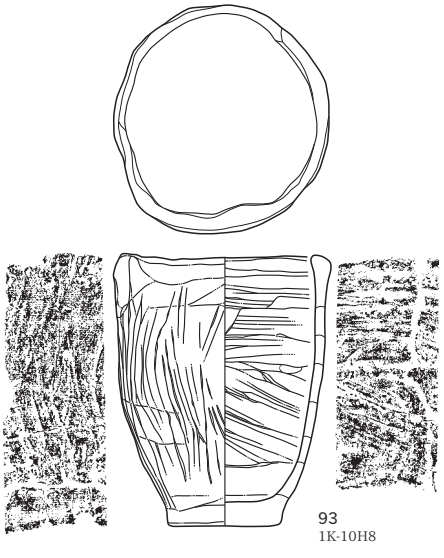
90
SK176(1K-10H7)
+
1K-10H6　Vd

91
SK176(1K-10H6･7)



92
SK176(1K-10H7)
+
SK178(1K-10H5)

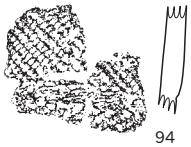
SK267(93)



93
1K-10H8

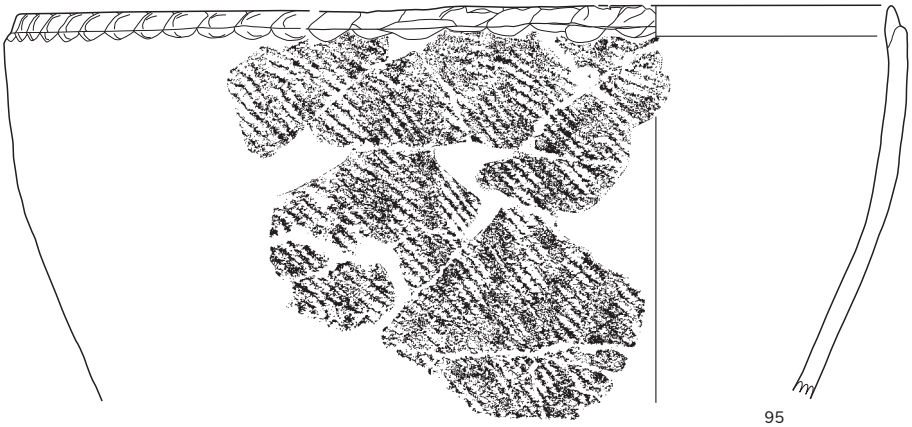
0　10cm　(1：3)

SK266(94)



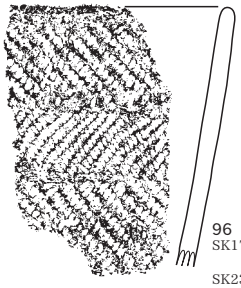
94
1K-10H9

SK226(95)



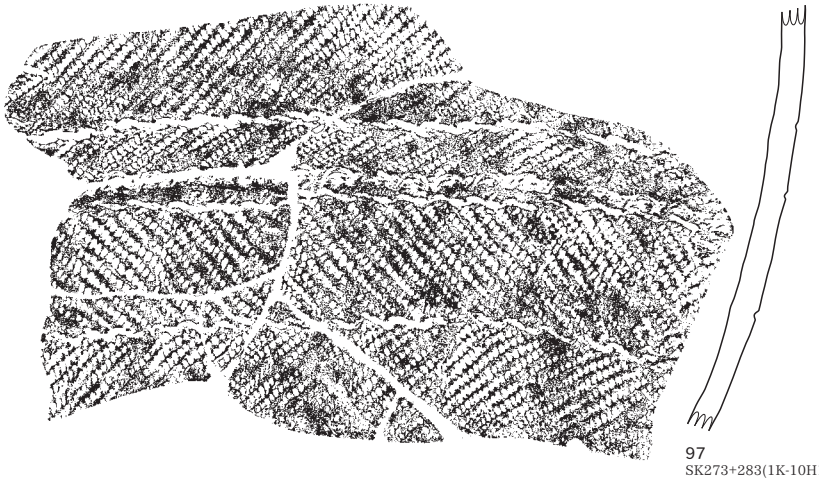
95
SK226(1K-10H5)
+
1K-9H24･10H5　Vd

SK170･232(96)

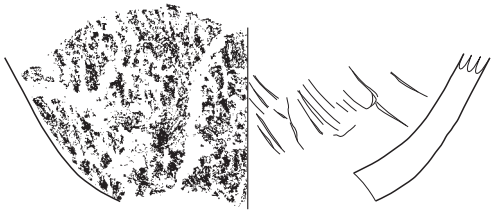


96
SK170(1K-10H10)
+
SK232(1K-10J1)

SK273･283(97･98)



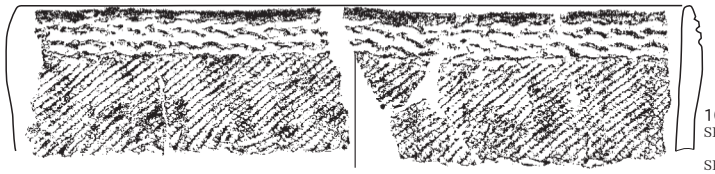
97
SK273+283(1K-10H10)
+
1K-10I1　Vd･VIa1



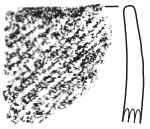
98
SK273(1K-10H10)

99
SK190(1K-10I1)
+
SK191(1K-10I6)
+
1K-10I6　Vd

SK190･191･221･227･297(99～102)

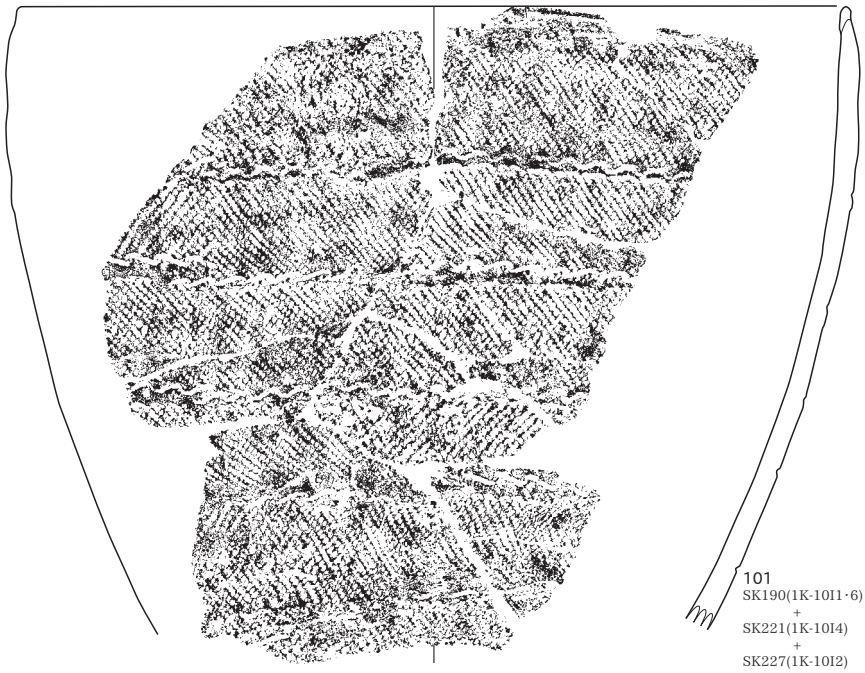


100
SK191(1K-10I1)
+
SK297(1K-10I2)



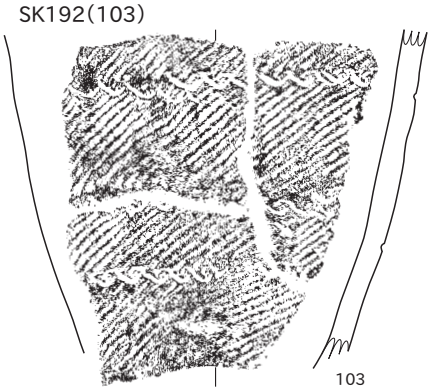
102a

102b
SK191(1K-10I1)
+
SK297(1K-10I2)



101
SK190(1K-10I1･6)
+
SK221(1K-10I4)
+
SK227(1K-10I2)

SK192(103)



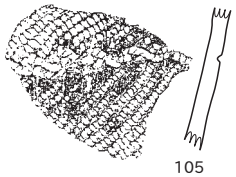
103
1K-10I3

0　10cm　(1 : 3)

SK230(104)

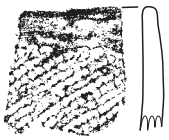
104
SK230(1K-9I25)
+
1K-10I5　VIb

SK182(105)

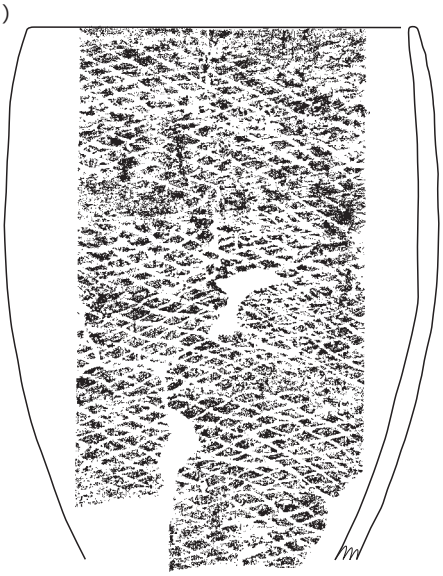


105
1K-10I5

SK183･193(106･107)

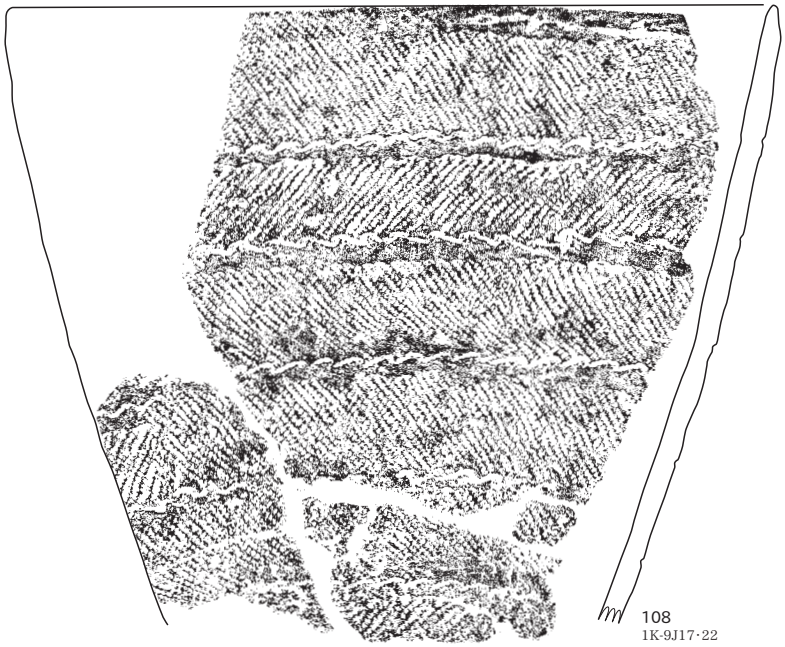


106
SK183(1K-10I5)



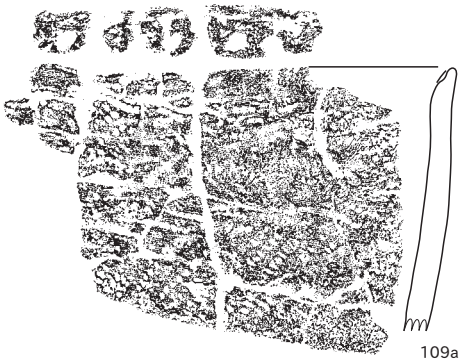
107
SK183(1K-10I5)+
SK193(1K-10I10)+
1K-10I10　VIb

SK229(108)

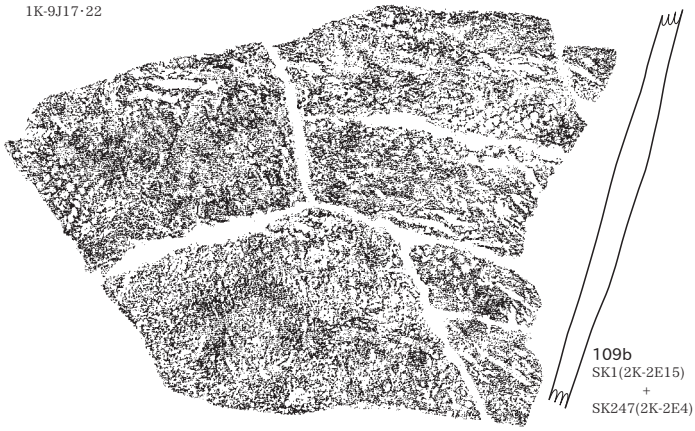


108
1K-9J17･22

SK1･247(109)

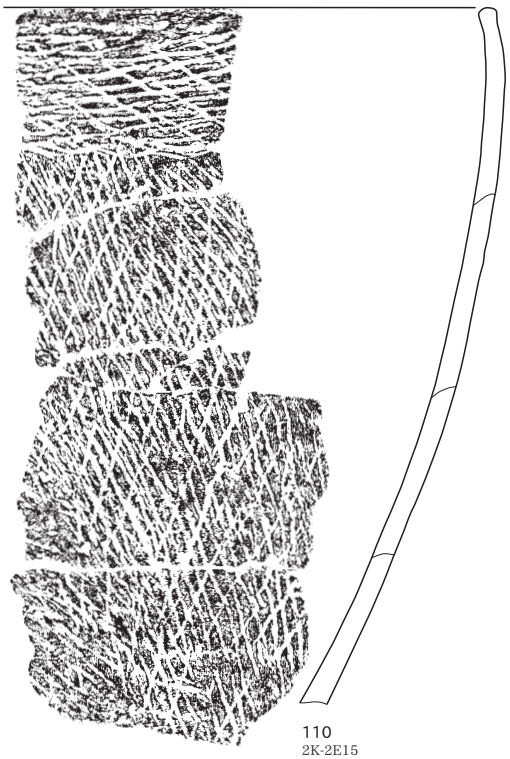


109a



109b
SK1(2K-2E15)
+
SK247(2K-2E4)

SK4(110･111)

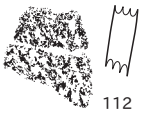


110
2K-2E15

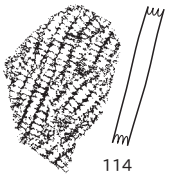
111
2K-2E15

0　10cm　(1 : 3)

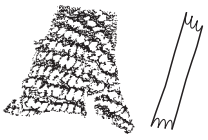
SK2(112)



112
2K-2E14

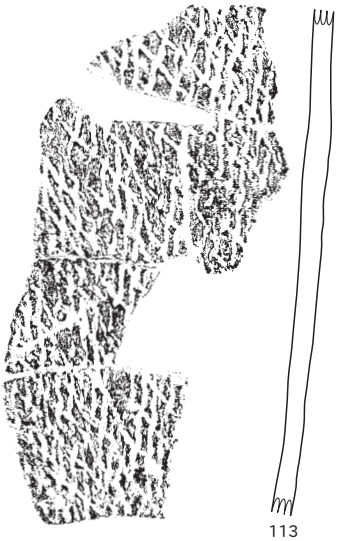


114
2K-1G17



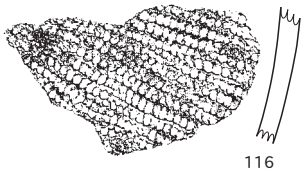
115
2K-1G22

SK321(113～115)



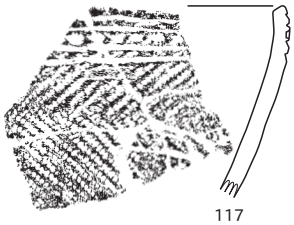
113
2K-1G17･22

SK293(116)



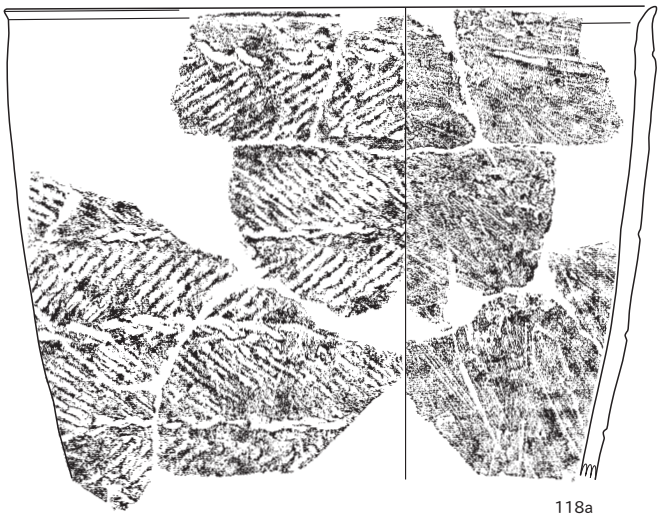
116
2K-2G5

SK295(117)



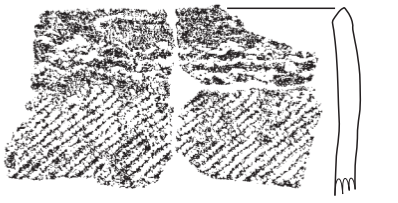
117
2K-2G21

SX5(118～120)



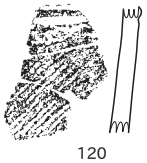
118a
1K-9F25　Vd

118b
1K-9F25　Vd



119a

119b
1K-9F25　Vd

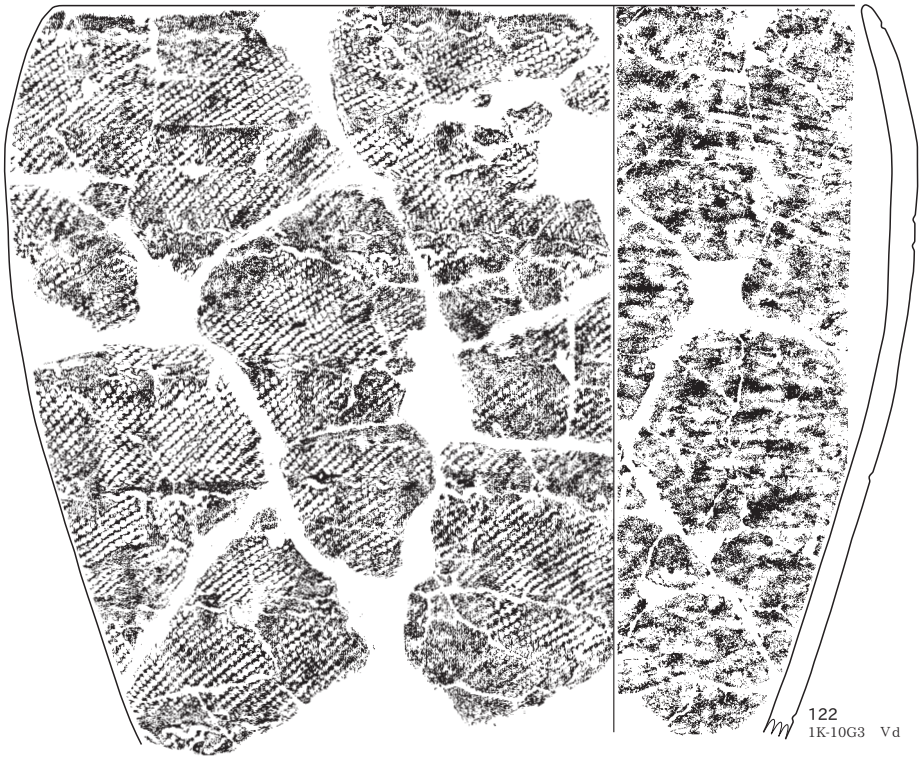


120
1K-9F25　Vd

土器集中111(121)

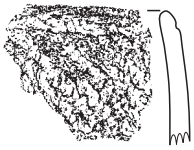
121
1K-9H16　Vd

土器集中97(122)



122
1K-10G3　Vd

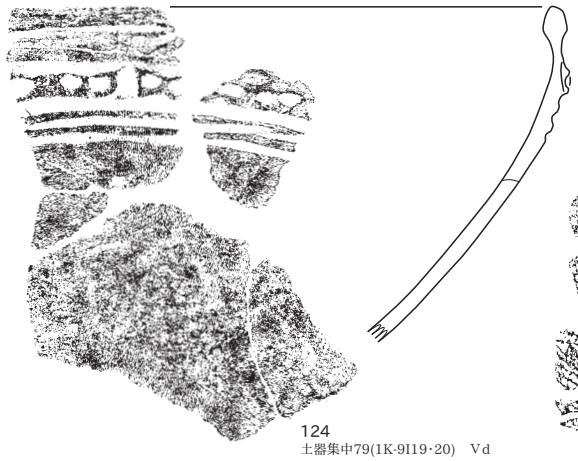
土器集中80(123)



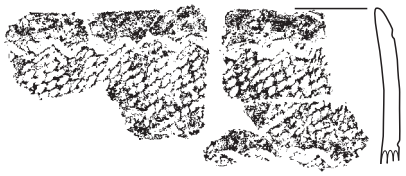
123
1K-9I24　Vd

0　10cm　(1 : 3)

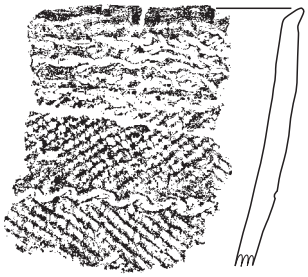
土器集中79･81(124～135)



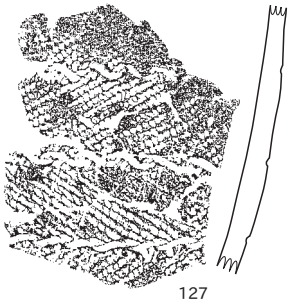
124
土器集中79(1K-9I19･20)　Vd



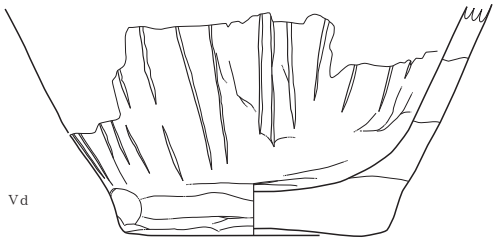
125
土器集中79(1K-9I20)　Vd



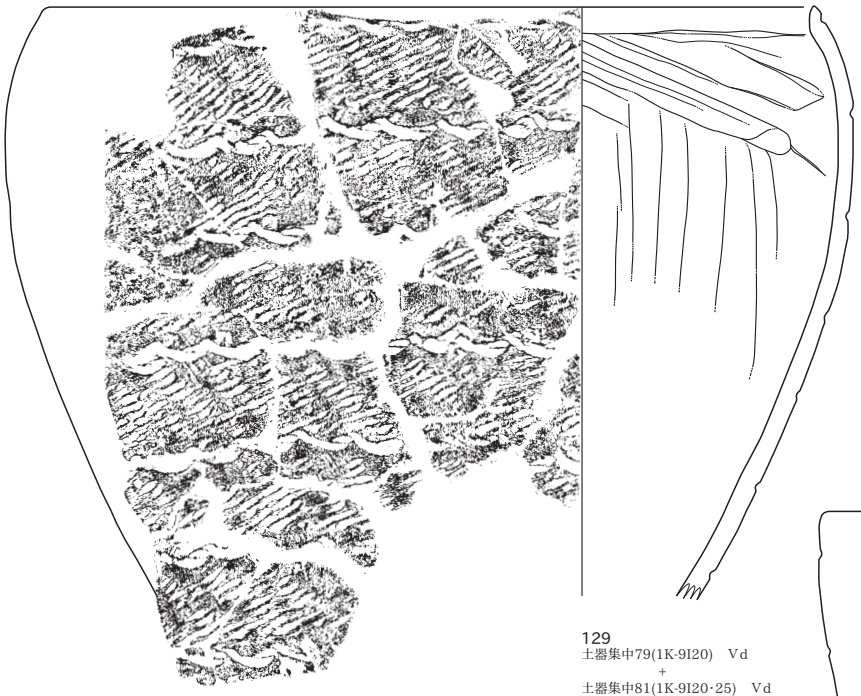
126
土器集中79(1K-9I20)　Vd



127
土器集中79(1K-9I20)　Vd



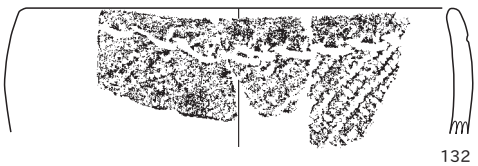
128
土器集中79(1K-9I19･20)　Vd



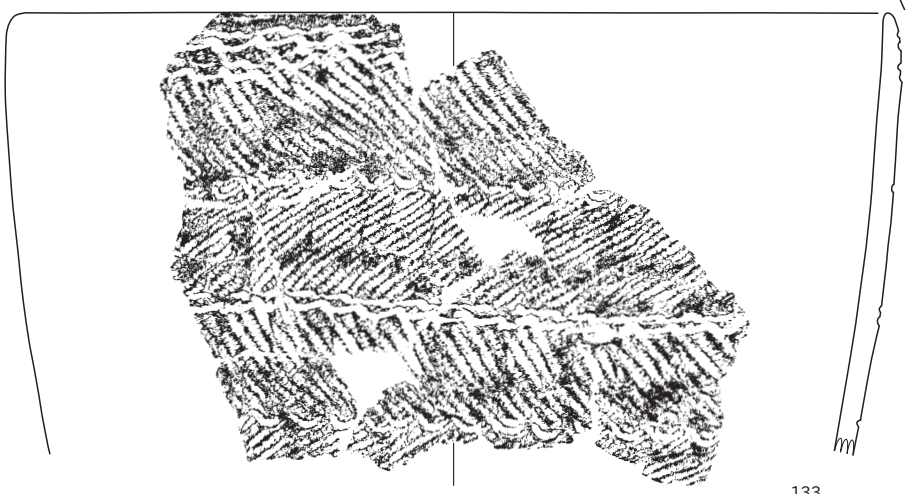
129
土器集中79(1K-9I20)　Vd
+
土器集中81(1K-9I20･25)　Vd

130
土器集中81(1K-9I20･25)　Vd

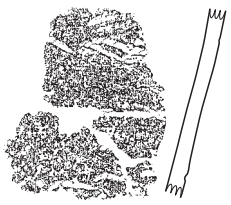
131
土器集中81(1K-9I20･25)　Vd



132
土器集中81(1K-9I25)+1K-9J21　Vd



133
土器集中81(1K-9I20)+1K-9J18　Vd



134
土器集中81(1K-9I20)　Vd

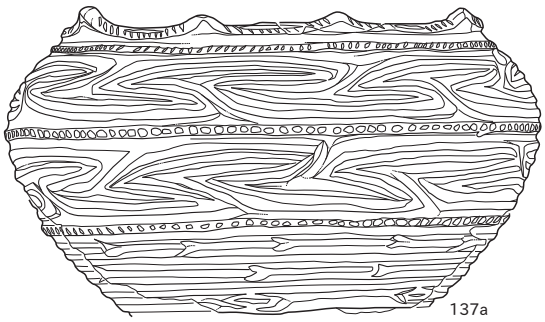
135
土器集中81(1K-9I20)　Vd

0　10cm　(1：3)

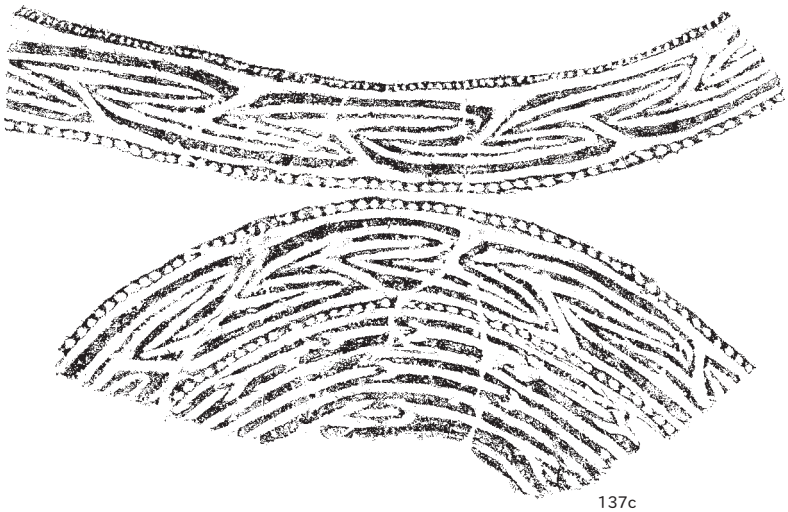
土器集中112(136)

136
土器集中112(1K-10I8)+1K-10I3　Vd

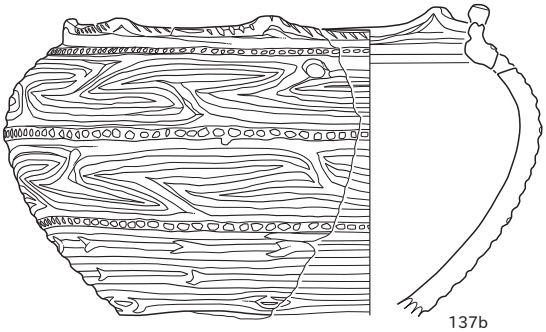
上位包含層（Vc・Vd・VIa1)(137～243)
1K-9F(137～173)



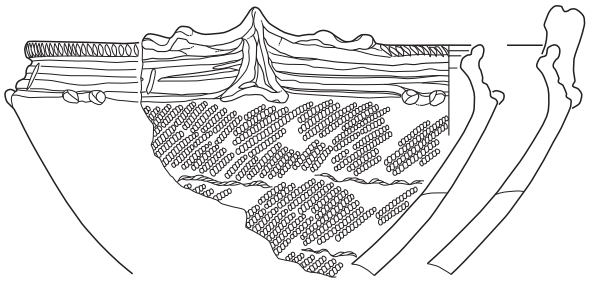
137a



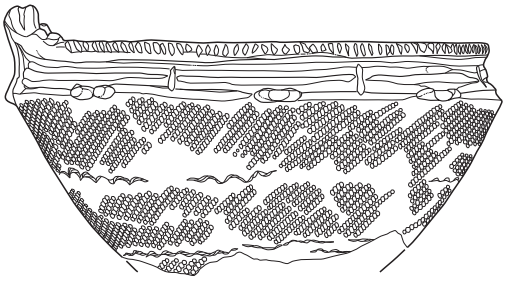
137c
1K-9F13(100T)　Vc～Vd



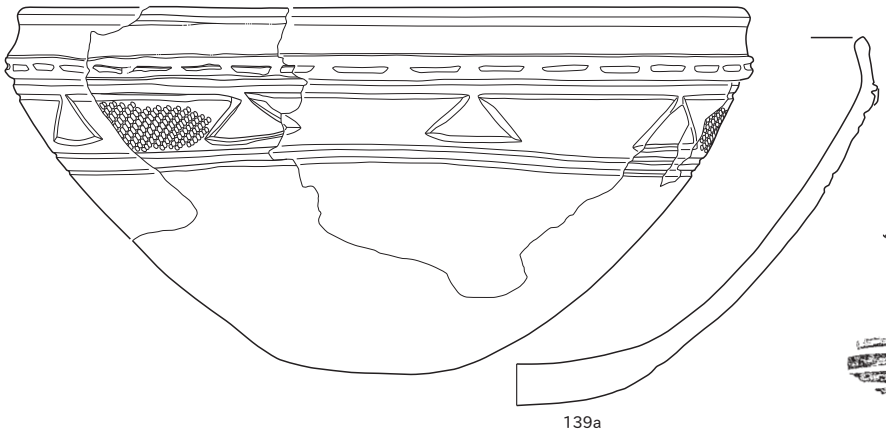
137b



138a



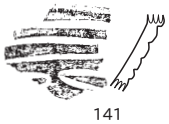
138b
1K-9F23・24　Vc・VIa1



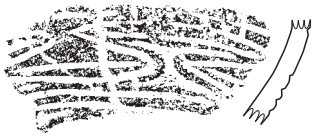
139a
100T　Vc～Vd

139b

140
1K-9F23　VIa1

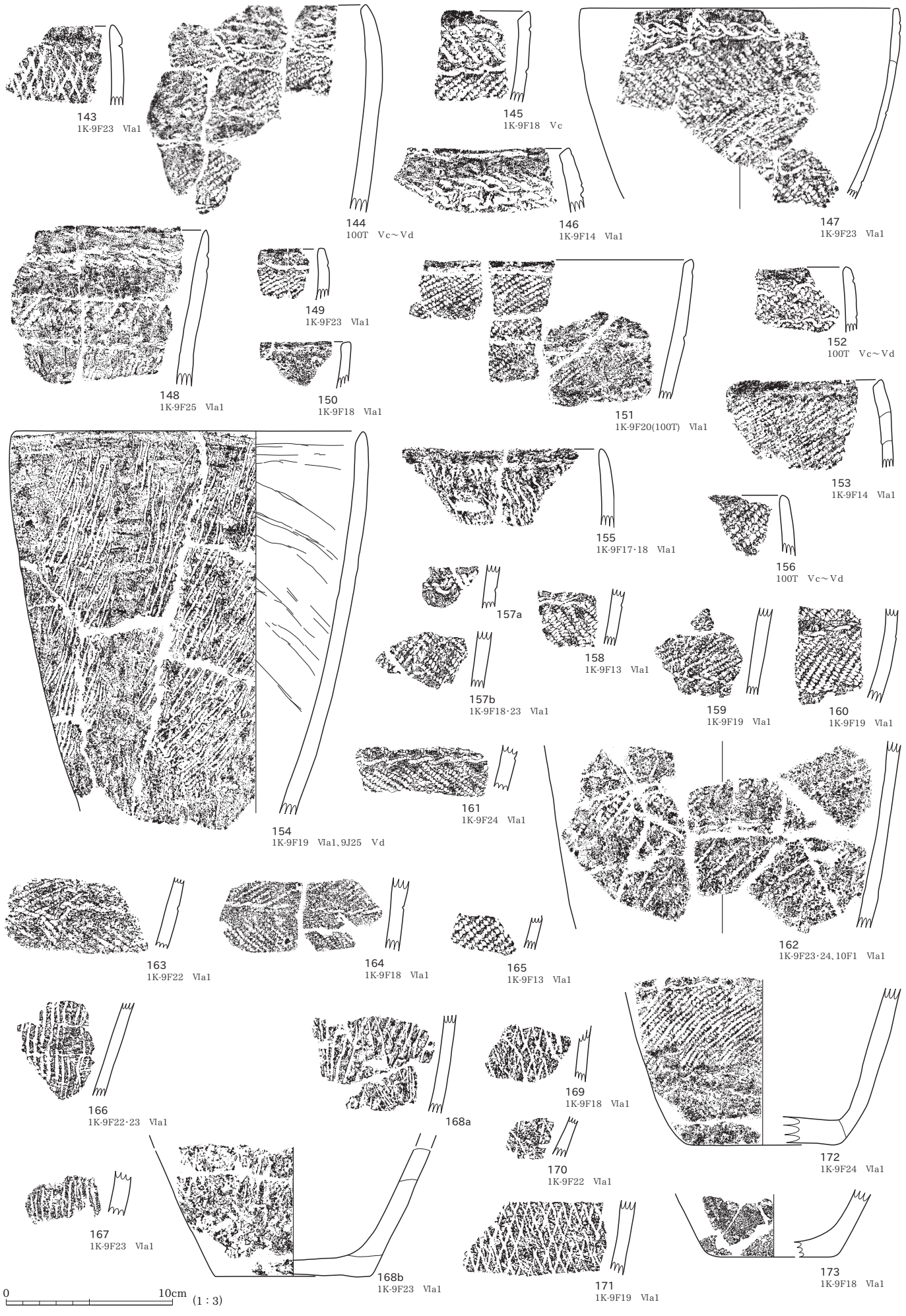


141
1K-9F17　VIa1

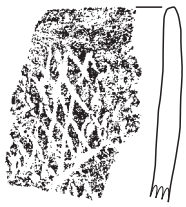


142
1K-9F19　VIa1

0　10cm　(1 : 3)


143
1K-9F23　VIa1
144
100T　Vc～Vd
145
1K-9F18　Vc
146
1K-9F14　VIa1
147
1K-9F23　VIa1
148
1K-9F25　VIa1
149
1K-9F23　VIa1
150
1K-9F18　VIa1
151
1K-9F20(100T)　VIa1
152
100T　Vc～Vd
153
1K-9F14　VIa1
154
1K-9F19　VIa1、9J25　Vd
155
1K-9F17･18　VIa1
156
100T　Vc～Vd
157a
157b
1K-9F18･23　VIa1
158
1K-9F13　VIa1
159
1K-9F19　VIa1
160
1K-9F19　VIa1
161
1K-9F24　VIa1
162
1K-9F23･24、10F1　VIa1
163
1K-9F22　VIa1
164
1K-9F18　VIa1
165
1K-9F13　VIa1
166
1K-9F22･23　VIa1
167
1K-9F23　VIa1
168a
168b
1K-9F23　VIa1
169
1K-9F18　VIa1
170
1K-9F22　VIa1
171
1K-9F19　VIa1
172
1K-9F24　VIa1
173
1K-9F18　VIa1
0
10cm
(1 : 3)

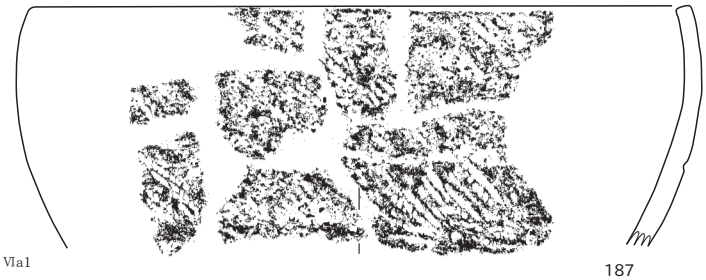
1K-10E･F(174～204)



184
1K-10F14　Vc

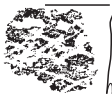
185
1K-10F11･12　VIa1

186
1K-10E10･15　VIa1



187
1K-10F3　Vd

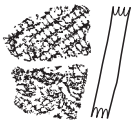
188
1K-10E15　VIa1



189
1K-10F8

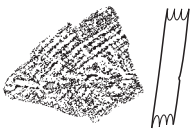
190
1K-10E15　VIa1

191
1K-10E15、10F11　VIa1



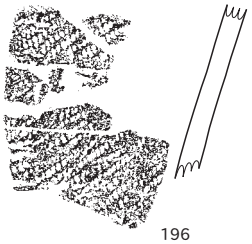
192
1K-10F12　VIa1

193
1K-10F13　VIa1

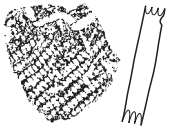


194
1K-10F1　Vc･VIa1

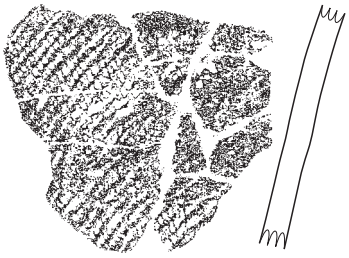
195
51T



196
1K-10F7　VIa1

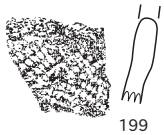


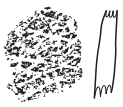
197
1K-10F10　VIa1

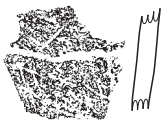


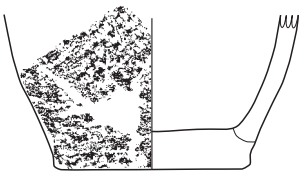
198
1K-10E25　VIa1

0　10cm　(1 : 3)

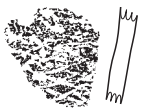

199
1K-10F8　Vla1


201
1K-10F7　Vla1

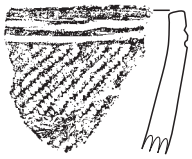

203
1K-10F7　Vla1

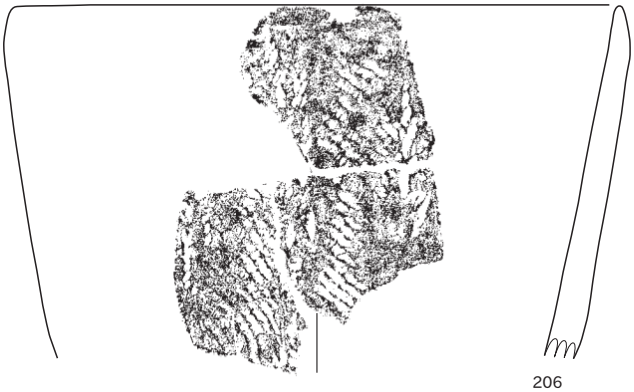

204
1K-10F7･16　Vla1

200
1K-10F6　Vla1

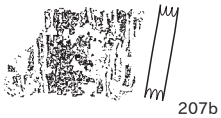

202
1K-10F13　Vla1

1K-9･10G(205～212)

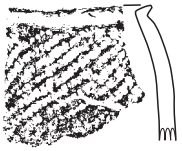

205
1K-9G24　Vd

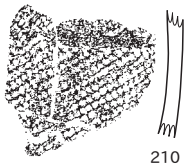

206
1K-10G5　Vd

207a


207b
1K-9F23　Vla1、10G2･3　Vd

208
1K-10G2　Vd


209
1K-9G25　Vd


210
1K-10G2　Vd

212
1K-10G13　Vd

211
1K-10G3　Vd

1K-10H(213～222)

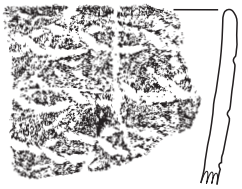
213
1K-10H7　Vd

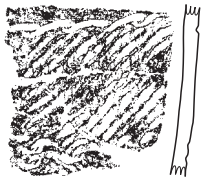
214
1K-10H4　Vd

215
1K-10H1　Vla1

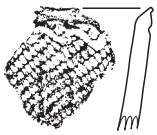
219
1K-10H10･10I22、2K-1I1･11　Vd

216a

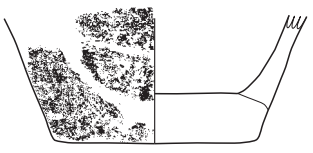

217
1K-10H5　Vd


216b
1K-10H10　Vd

218
1K-10H8　Vd

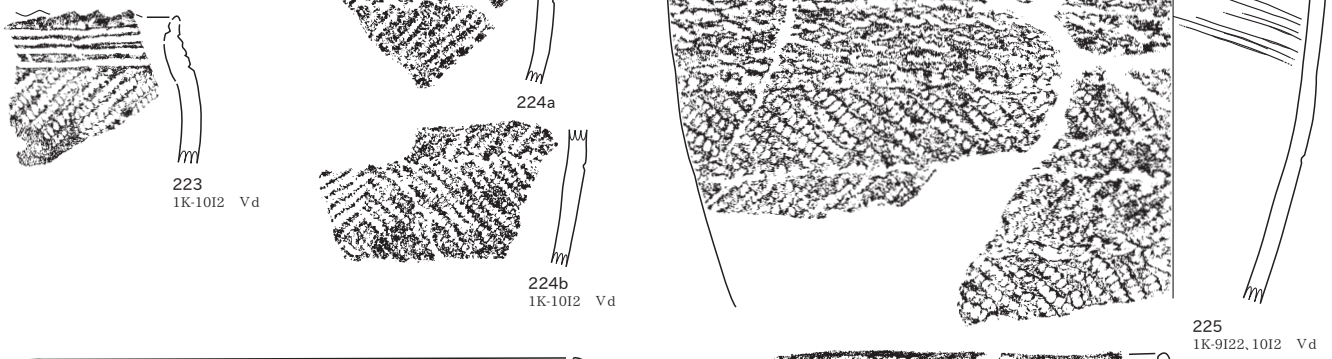

220
1K-10H1　Vla1

221
1K-10H4　Vd


222
1K-10H2　Vla1

0　10cm　(1 : 3)

1K-9・10I(223～229)

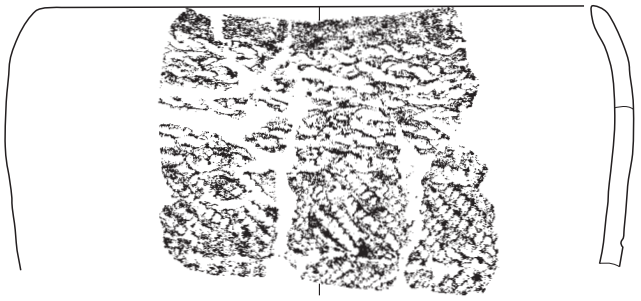


223
1K-10I2　Vd

224a

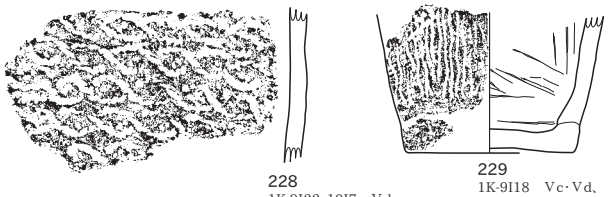
224b
1K-10I2　Vd

225
1K-9I22、10I2　Vd



226
1K-10I3　Vd

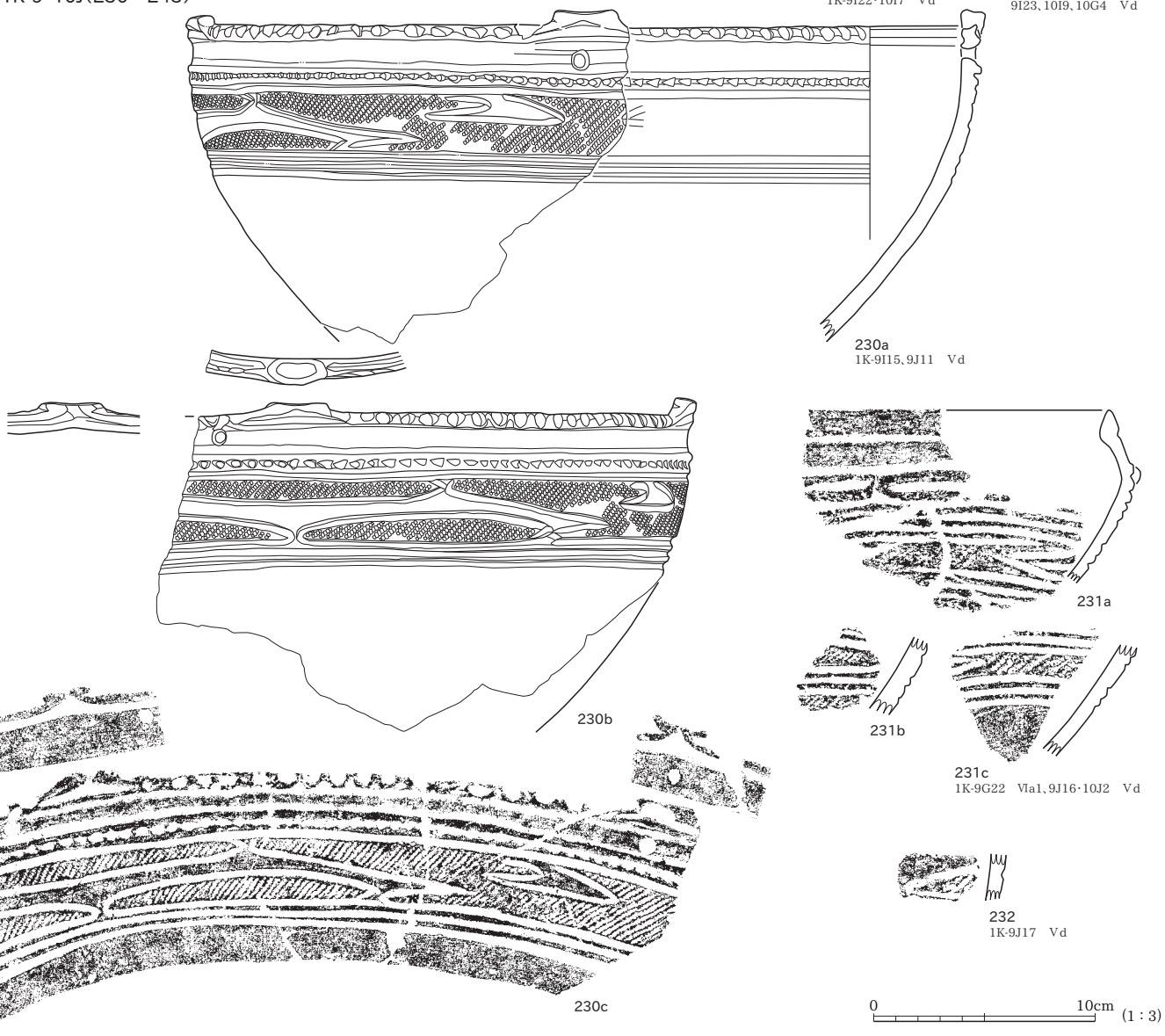
227
1K-9I24・9J18　Vd



228
1K-9I22・10I7　Vd

229
1K-9I18　Vc・Vd、
9I23、10I9、10G4　Vd

1K-9・10J(230～243)



230a
1K-9I15、9J11　Vd

230b

231a

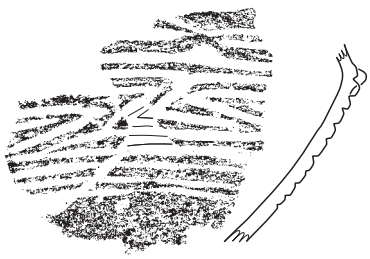
231b

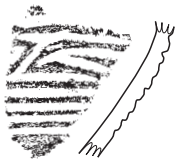
231c
1K-9G22　VIa1、9J16・10J2　Vd

232
1K-9J17　Vd

230c

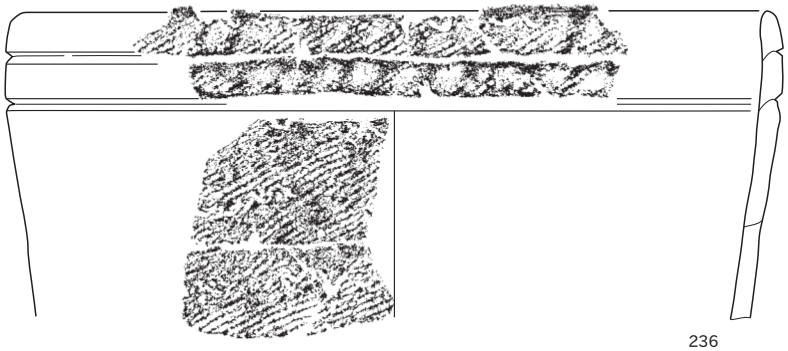
0　10cm　(1 : 3)


233a

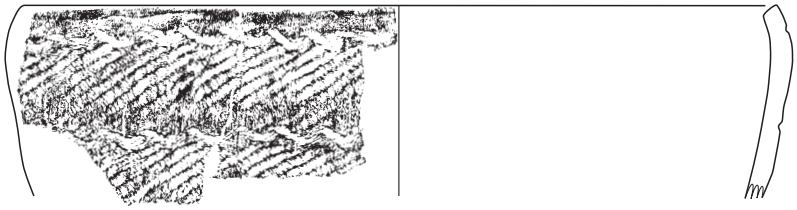

233b
1K-9J21·22　Vd

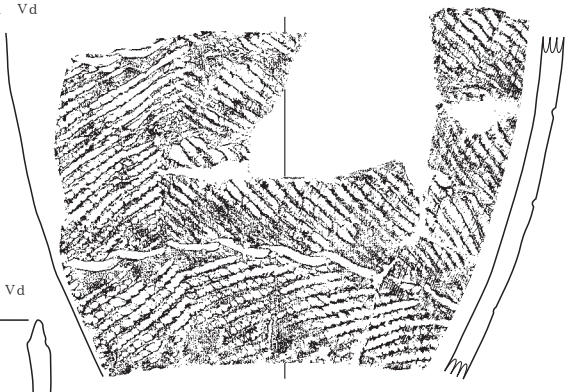
234
1K-9J16　Vd

235
1K-9J11·16·22·23、10F2　Vd


236
1K-9J17·21、10J1　Vd

237
1K-9I19、9J11　Vd

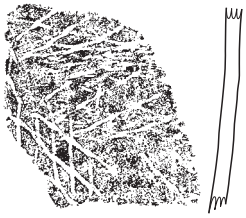

238
1K-9J21·22　Vd


240
1K-9J22　Vd

239
1K-9J22　Vd

241
1K-10J2　Vd

242
1K-9J17　Vd


243
1K-9J12　Vd

下位包含層（Vla2·Vla3·Vlb'·Vlb）（244～266）
1K-10F（244～252）

244a

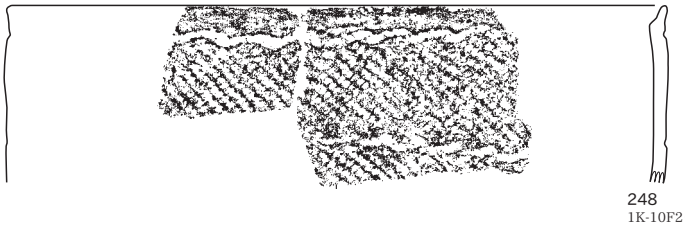
244b
1K-10F8　Vlb

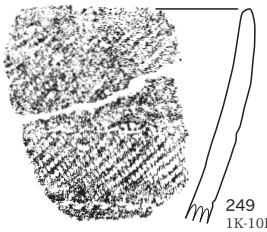
245
1K-10F12　Vla3

246
1K-10F13　Vla3

247
1K-10F24　Vla3

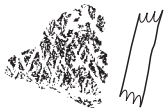
0　10cm　(1 : 3)


248
1K-10F2·3　VIa3

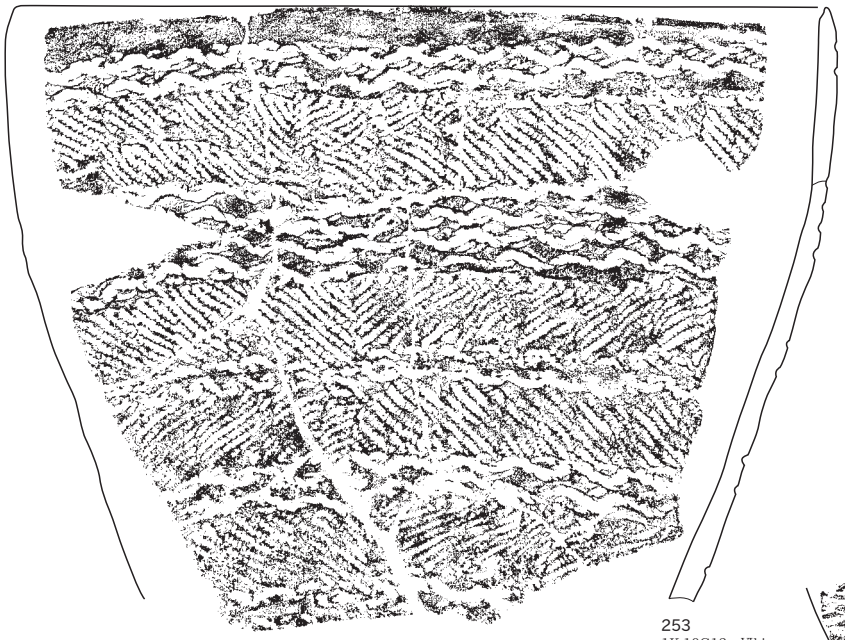

249
1K-10F3　VIb

250
1K-10F9　VIa3

251
1K-10F12　VIa3


252
1K-10F8　VIa3

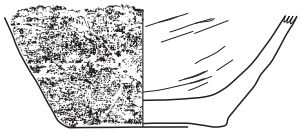
1K-9·10G(253～260)

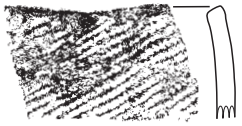

253
1K-10G13　VIb'

254
1K-10G12　VIb'

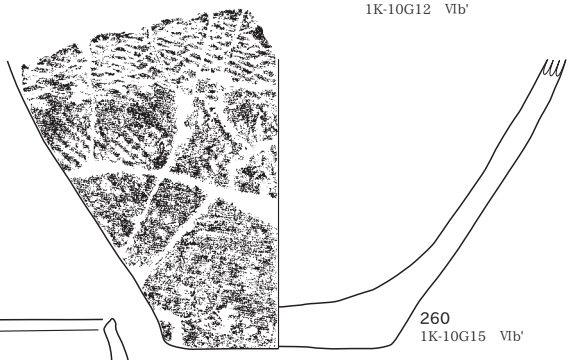
255
1K-10G5　VIb'

256
1K-10G11　VIa2·VIb'


259
1K-10G12　VIb'

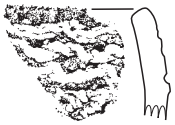

257
1K-10G7　VIb'

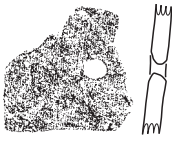
258
1K-9G14　VIb'

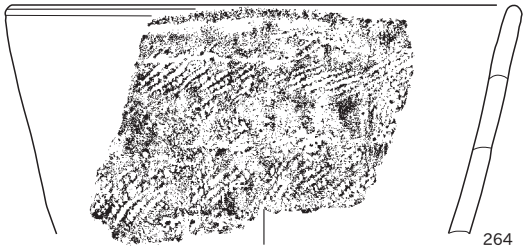

260
1K-10G15　VIb'

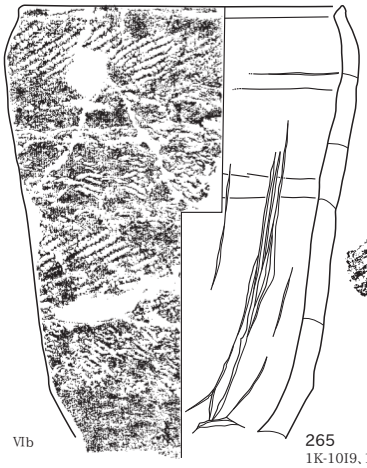
1K-10I·J(261～266)

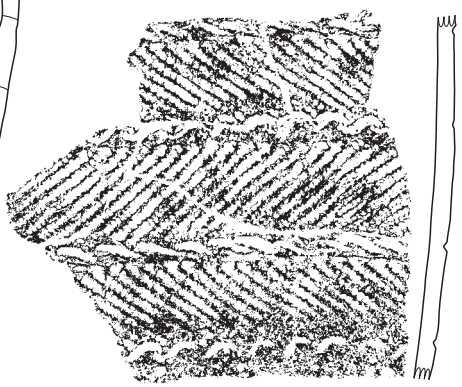
261
1K-10J6　VIb


262
1K-10J8　VIb

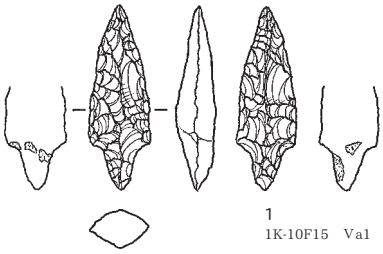

263
1K-10I14　VIb


264
1K-10J16·17　VIb

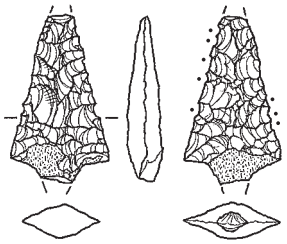

265
1K-10I9、10J11　VIb


266
1K-10I5　VIb

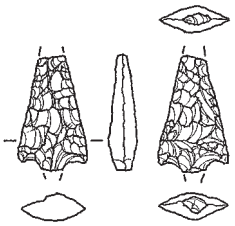
0　10cm　(1 : 3)



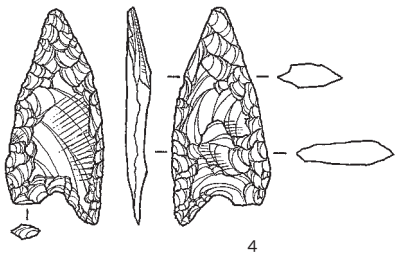
1
1K-10F15　Va1



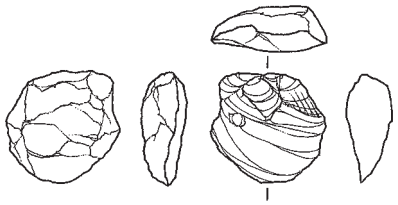
2
1K-10G16　Vd



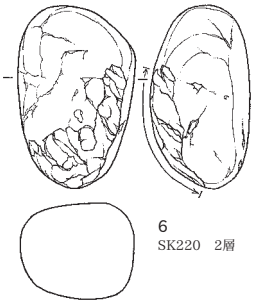
3
1K-10E20　Ⅲd



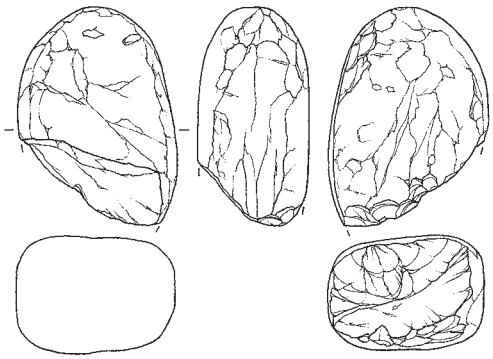
4
1K-10H6　Vd



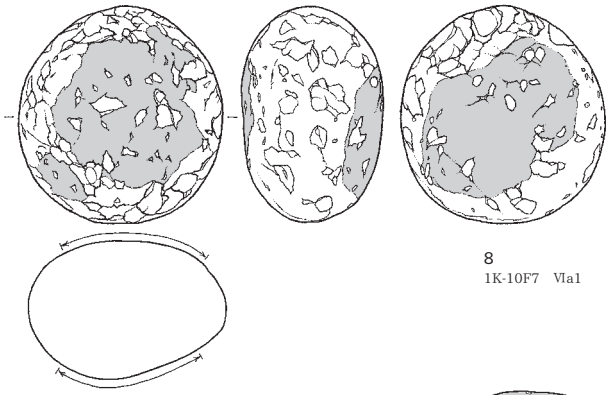
5
SK64　1層



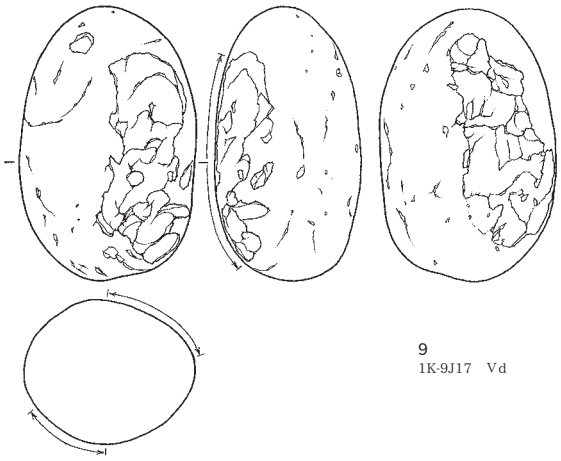
6
SK220　2層



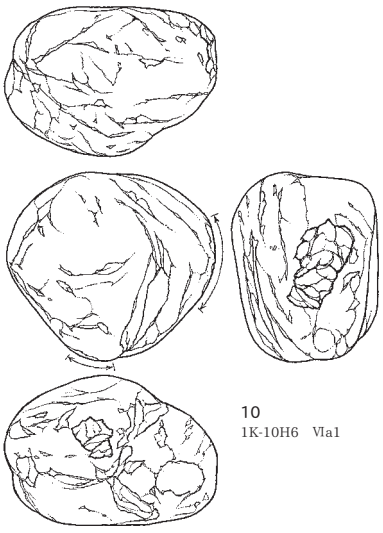
7
1K-9H14　Vlb



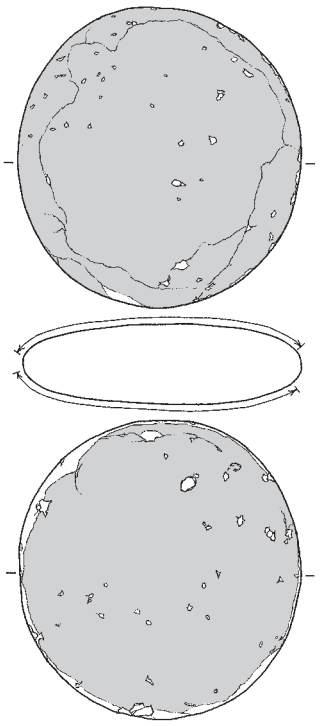
8
1K-10F7　Vla1



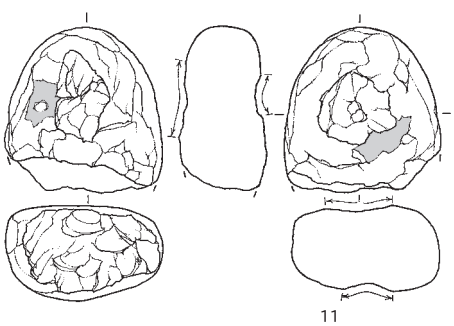
9
1K-9J17　Vd



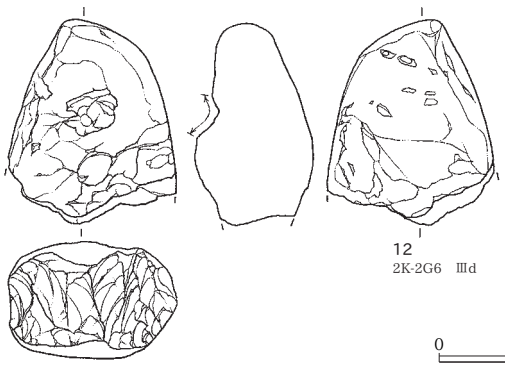
10
1K-10H6　Vla1



13
SK182　3層



11
1K-9F19　Vc

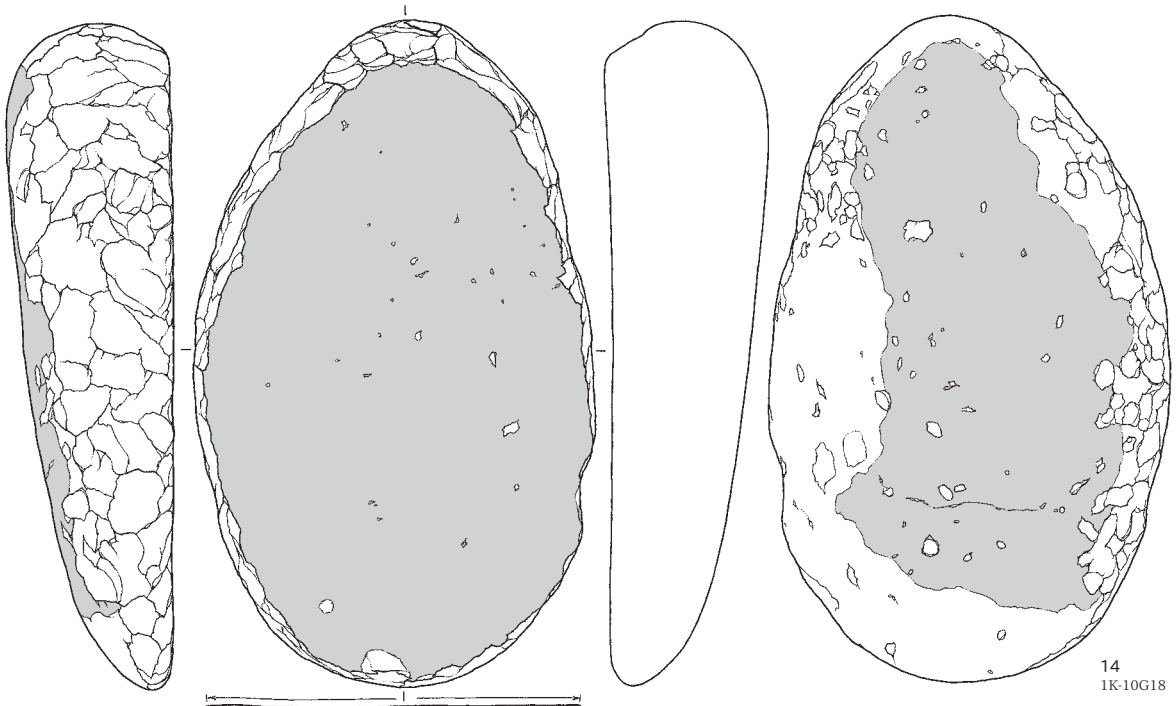


12
2K-2G6　Ⅲd

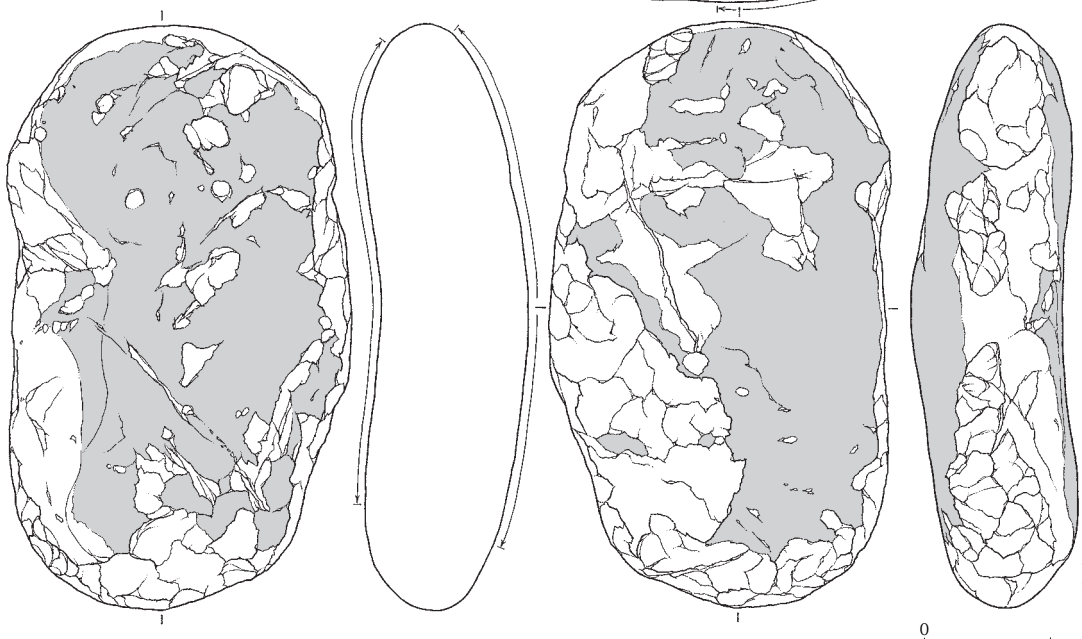
0　(6～13)　10cm　(1 : 3)

0　(1～5)　6cm　(3 : 4)

出土遺物実測図 21　石器・礫（２）

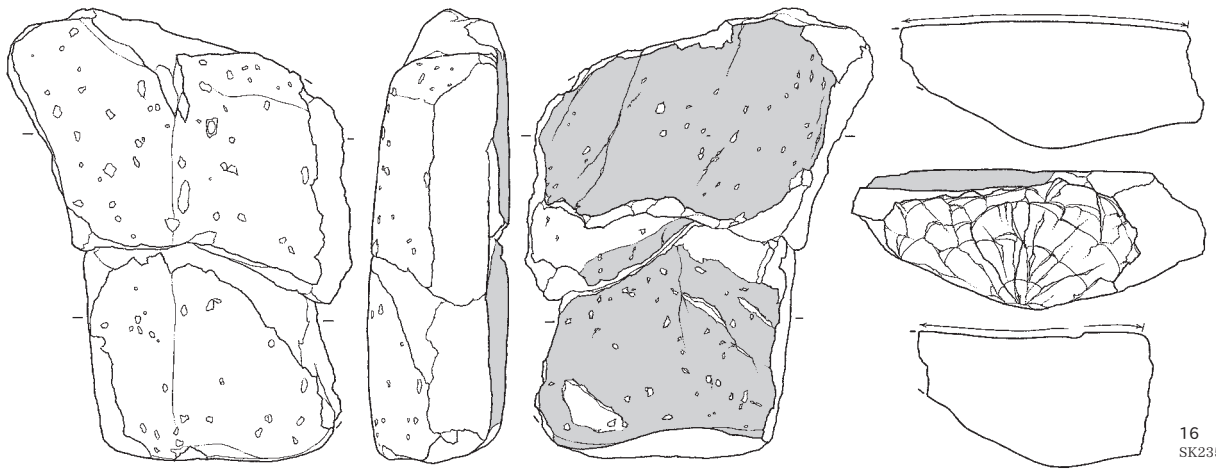


14
1K-10G18　Ⅵb

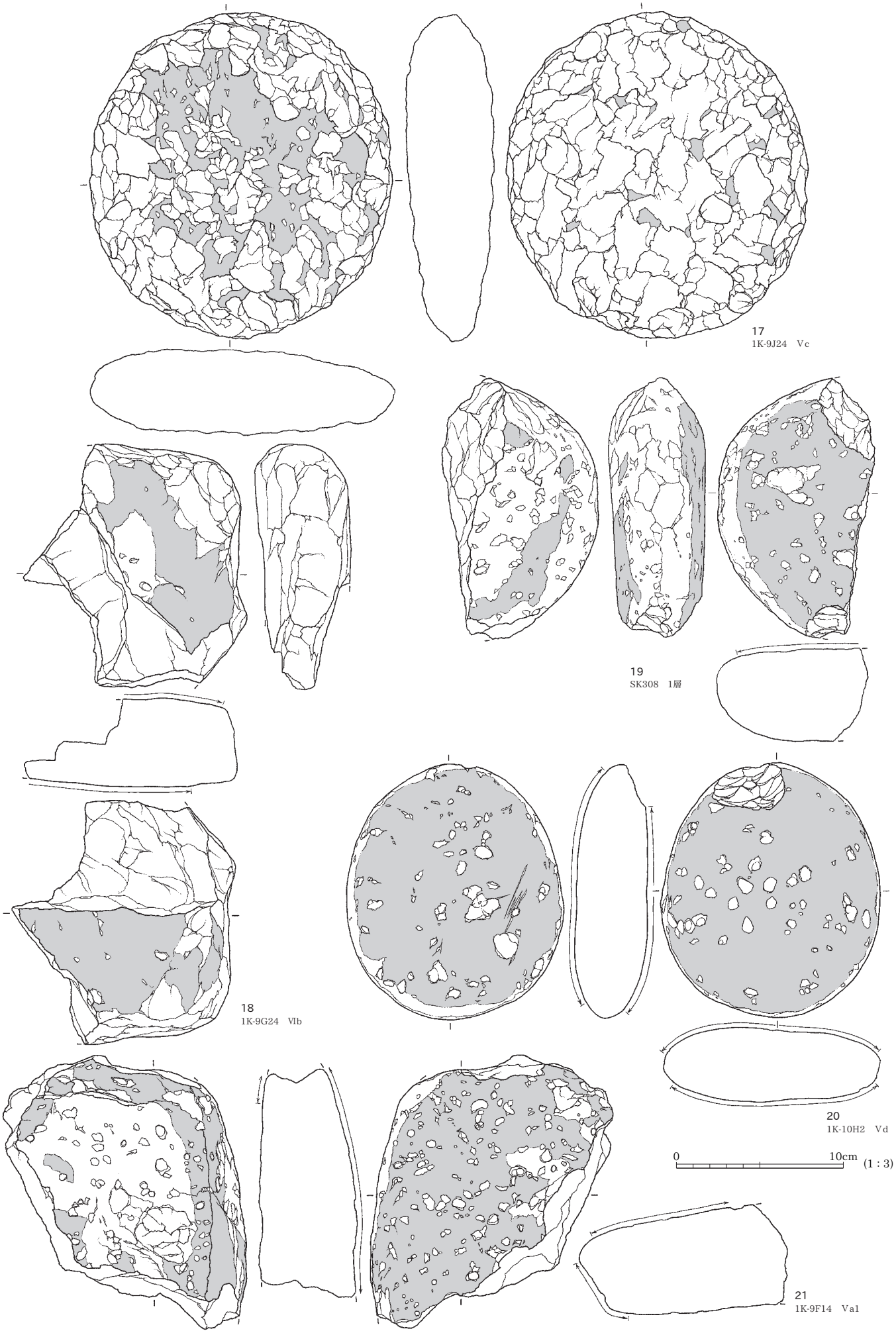


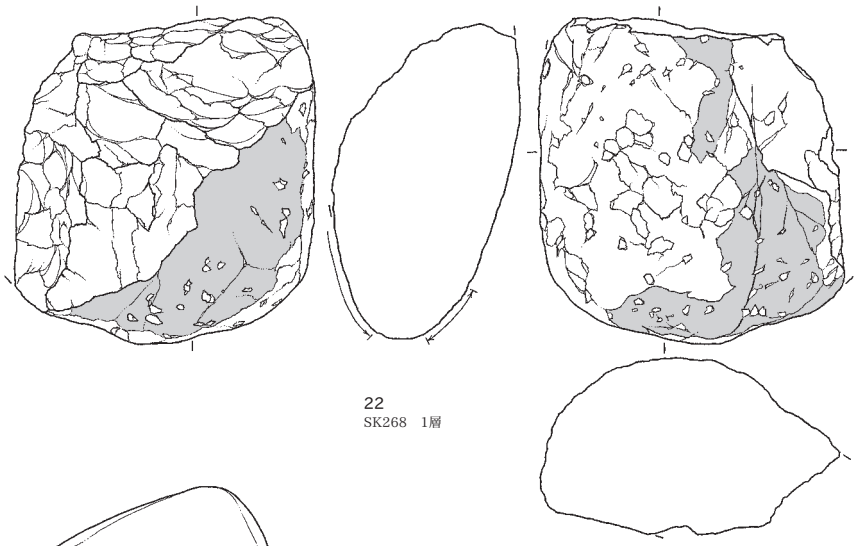
15
1K-10F14　Ⅵa3

0　10cm　(1 : 3)

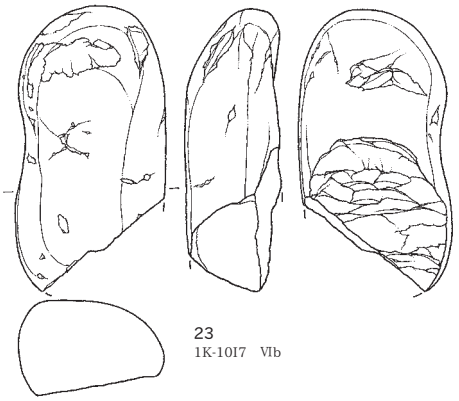


16
SK235　1層

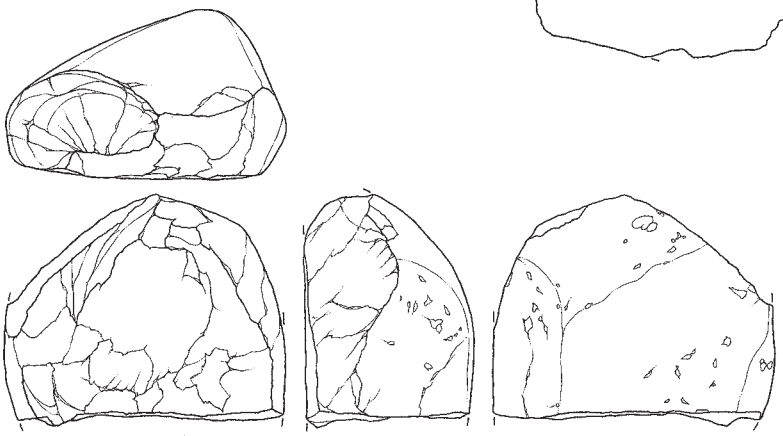

17
1K-9J24　Vc
19
SK308　1層
18
1K-9G24　Vlb
20
1K-10H2　Vd
0
10cm
(1 : 3)
21
1K-9F14　Va1



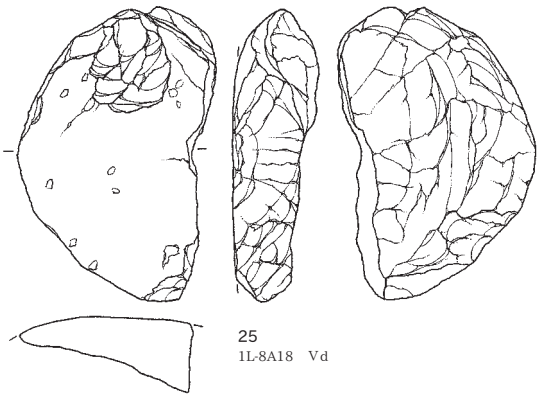
22
SK268　1層



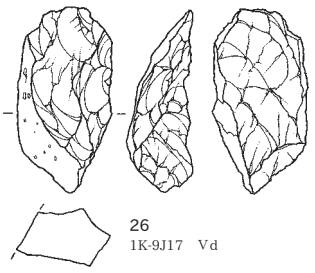
23
1K-10I7　Ⅵb



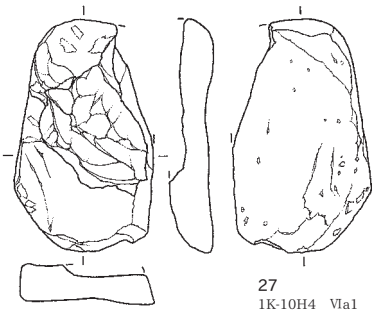
24
1K-10F4　Va1



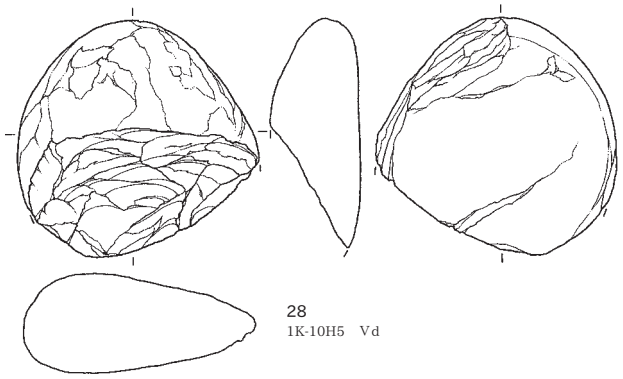
25
1L-8A18　Vd



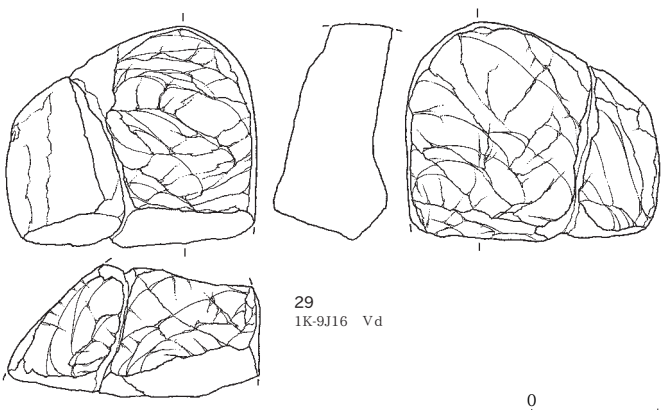
26
1K-9J17　Vd



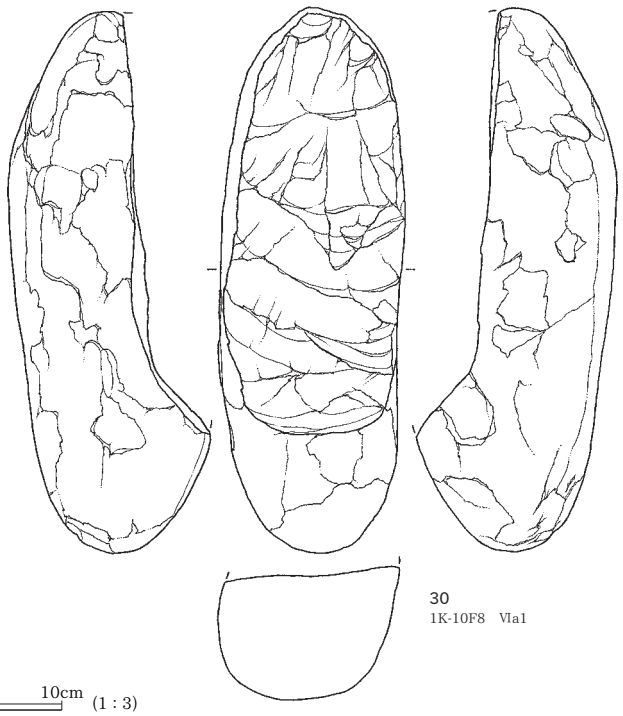
27
1K-10H4　Ⅵa1



28
1K-10H5　Vd

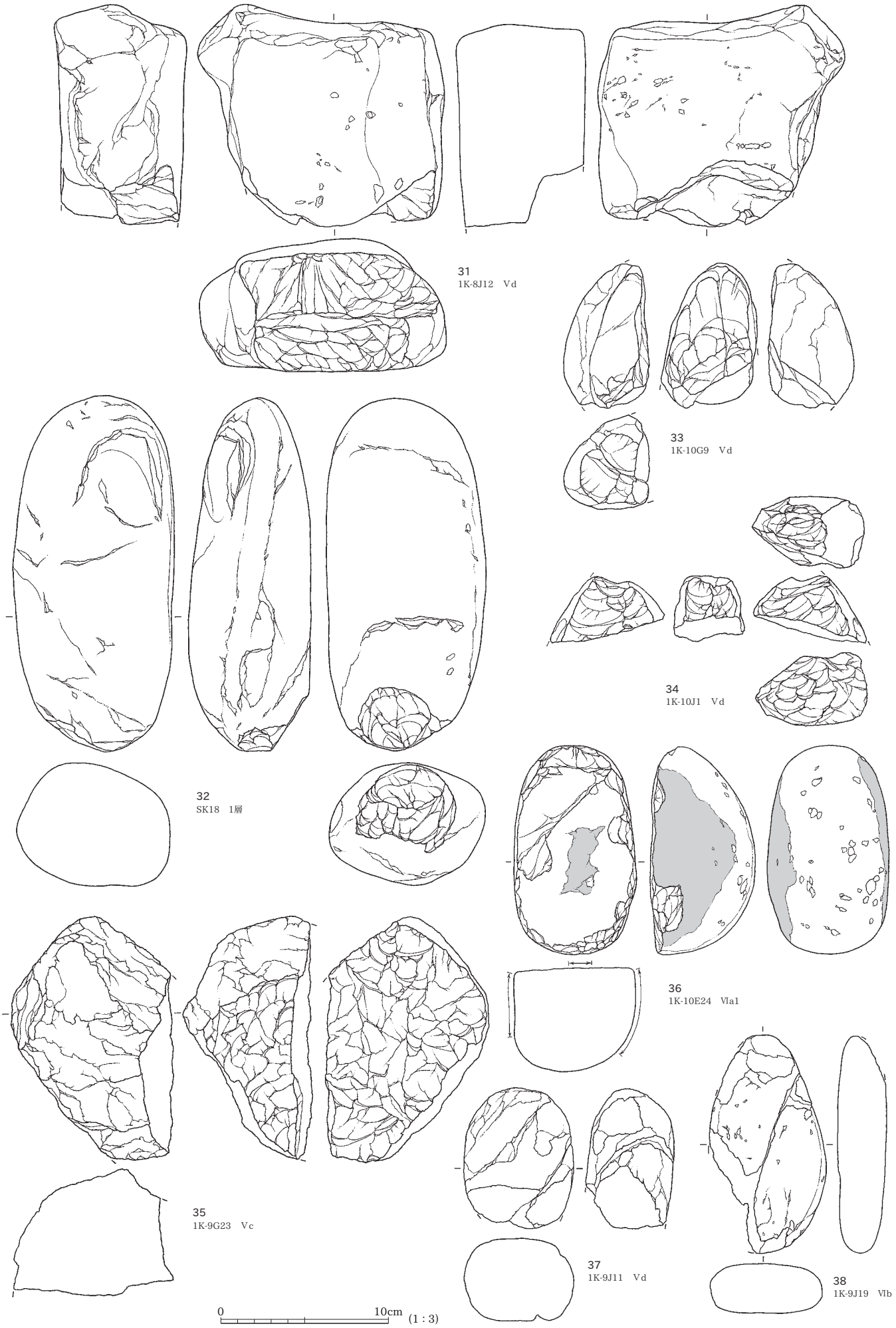


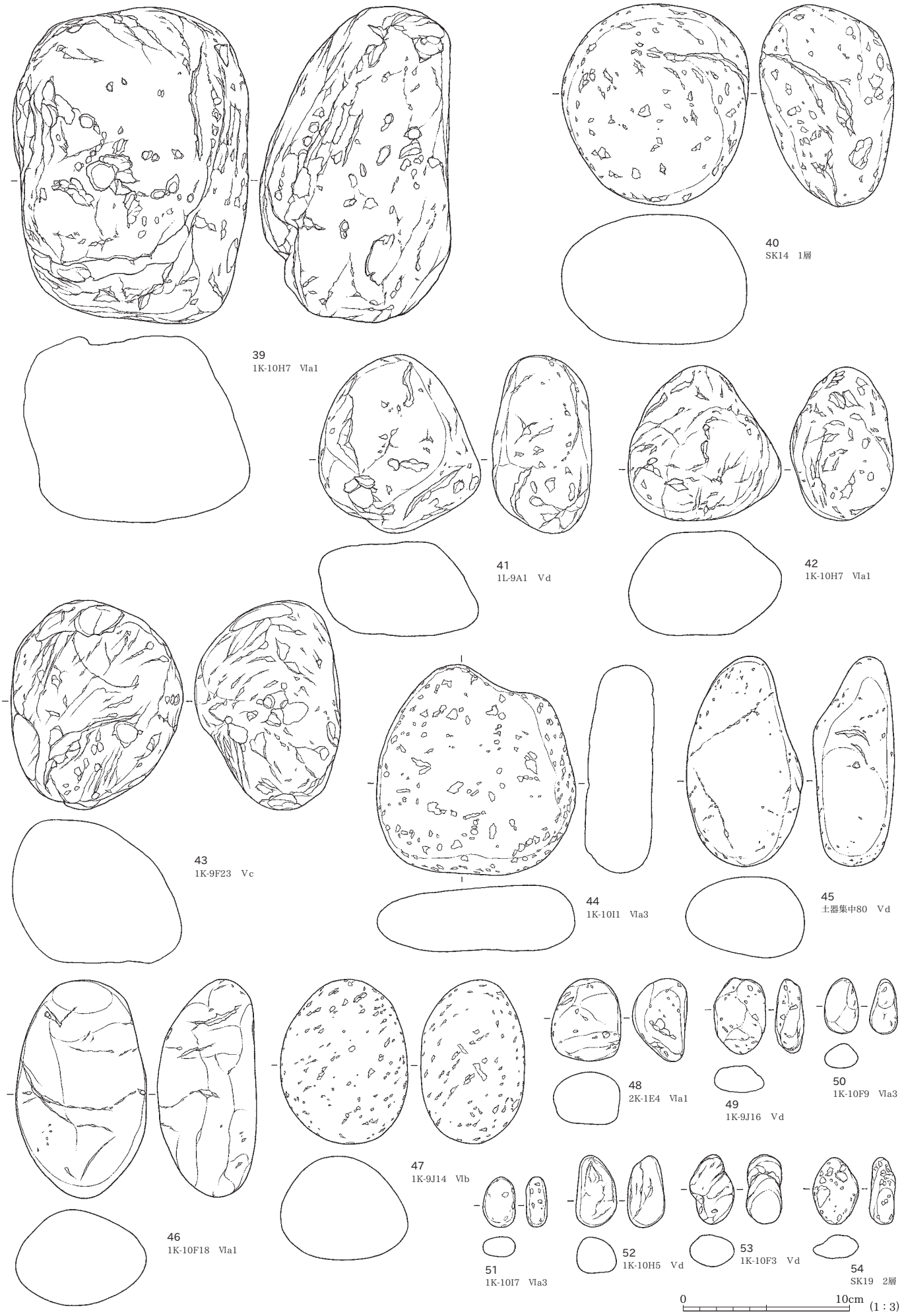
29
1K-9J16　Vd

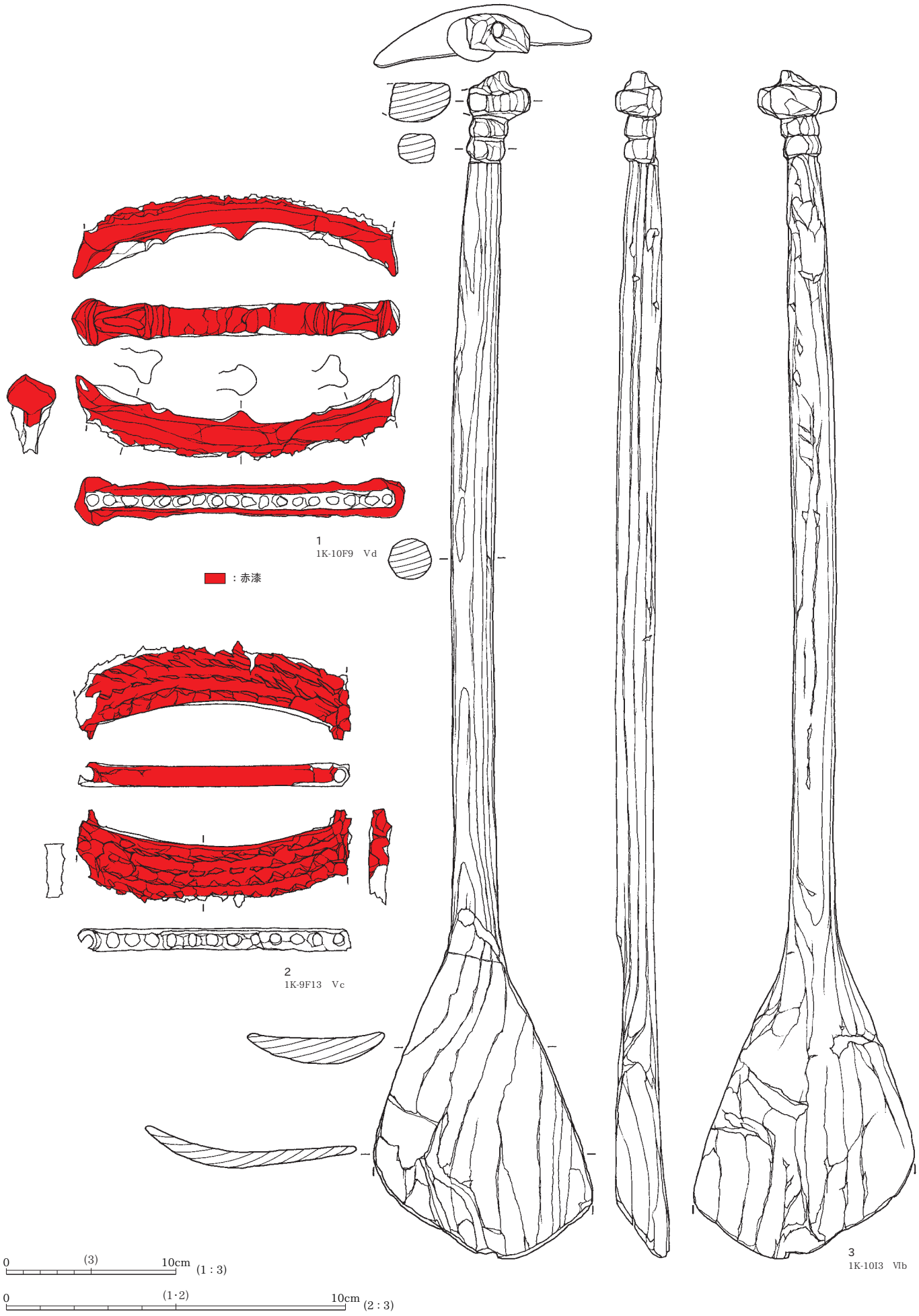


30
1K-10F8　Ⅵa1

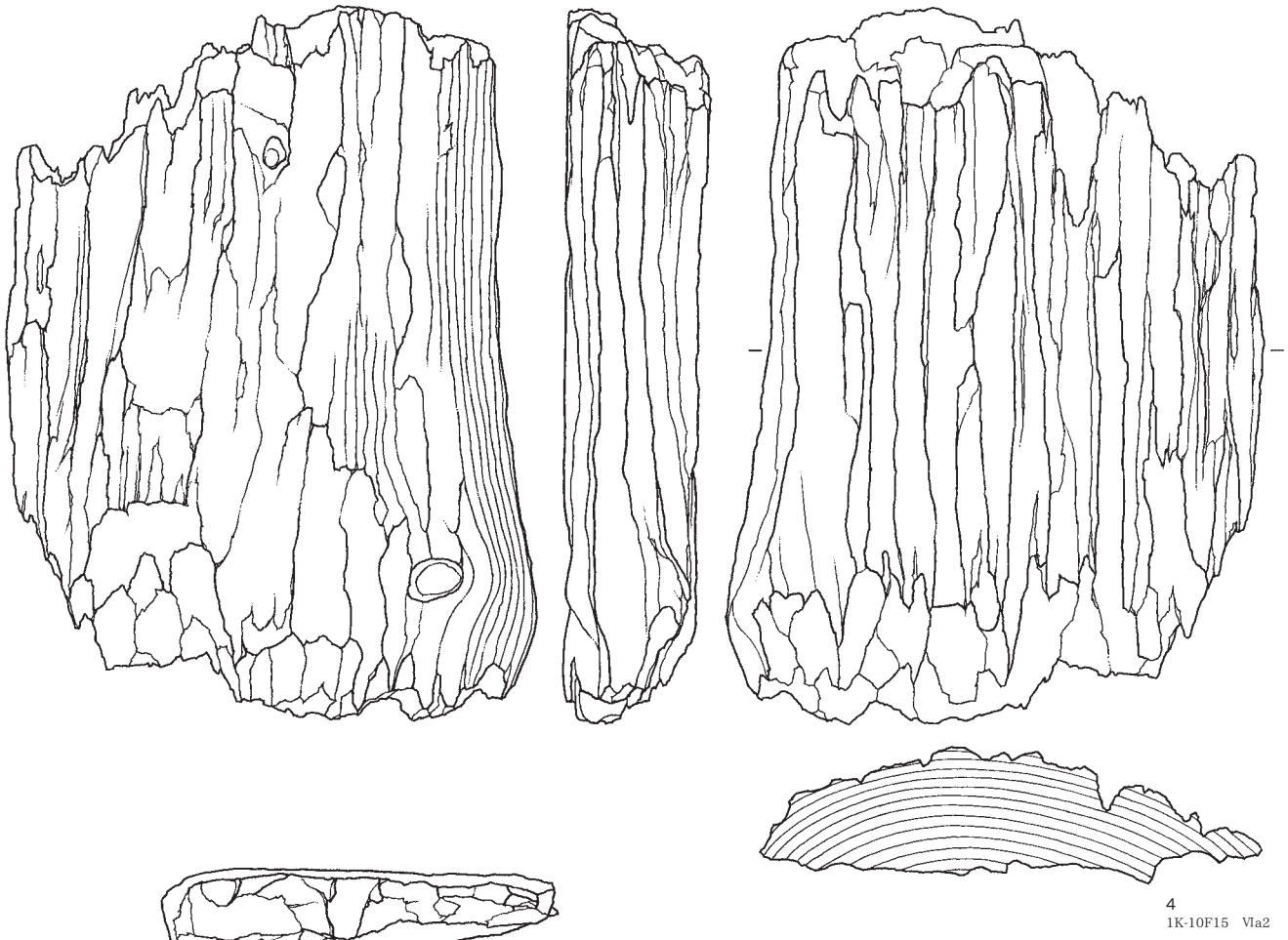
0　10cm　(1 : 3)


31
1K-8J12　Vd
33
1K-10G9　Vd
34
1K-10J1　Vd
32
SK18　1層
36
1K-10E24　VIa1
35
1K-9G23　Vc
37
1K-9J11　Vd
38
1K-9J19　VIb
0
10cm
(1 : 3)

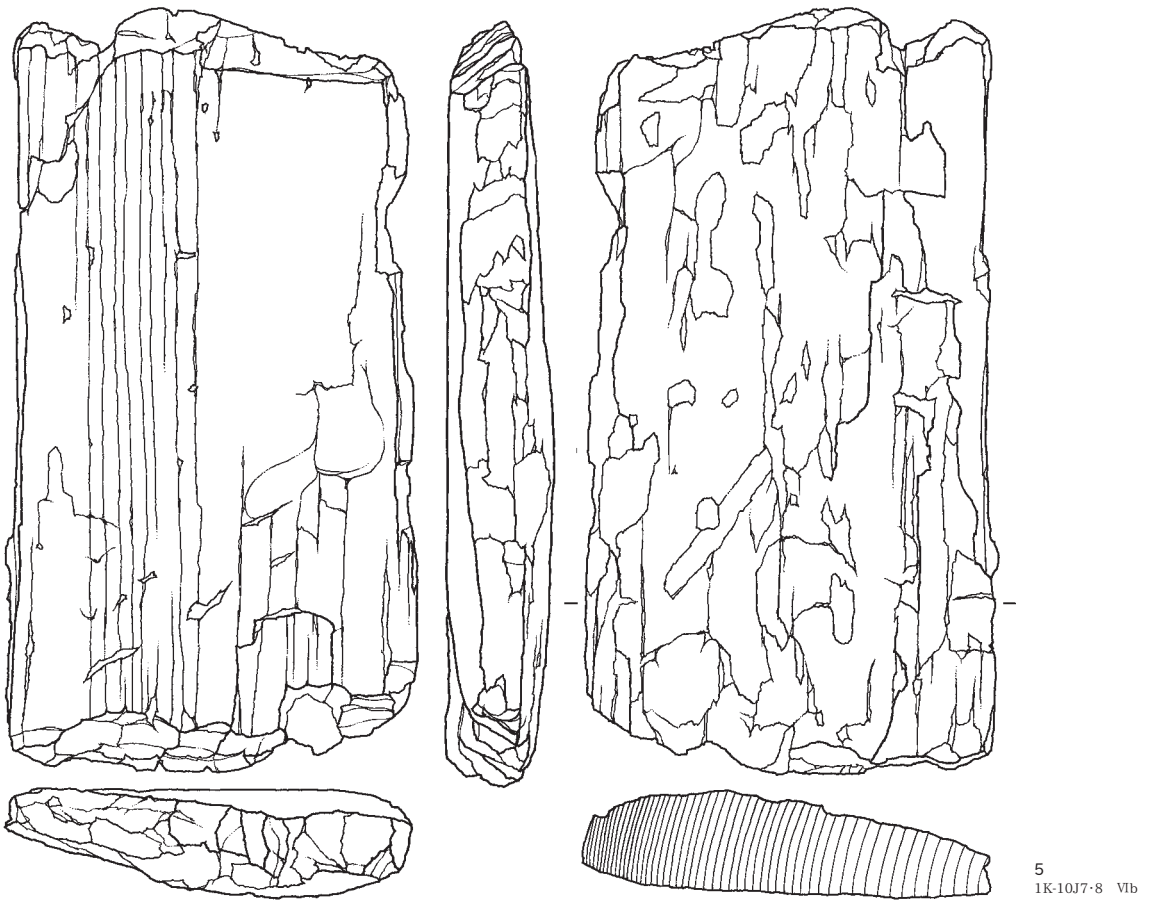

39
1K-10H7　VIa1
40
SK14　1層
41
1L-9A1　Vd
42
1K-10H7　VIa1
43
1K-9F23　Vc
44
1K-10I1　VIa3
45
土器集中80　Vd
46
1K-10F18　VIa1
47
1K-9J14　VIb
48
2K-1E4　VIa1
49
1K-9J16　Vd
50
1K-10F9　VIa3
51
1K-10I7　VIa3
52
1K-10H5　Vd
53
1K-10F3　Vd
54
SK19　2層
0
10cm
(1 : 3)


1
1K-10F9　Vd
：赤漆
2
1K-9F13　Vc
3
1K-10I3　VIb
0　(3)　10cm　(1 : 3)
0　(1・2)　10cm　(2 : 3)

出土遺物実測図 27　木製品（2）

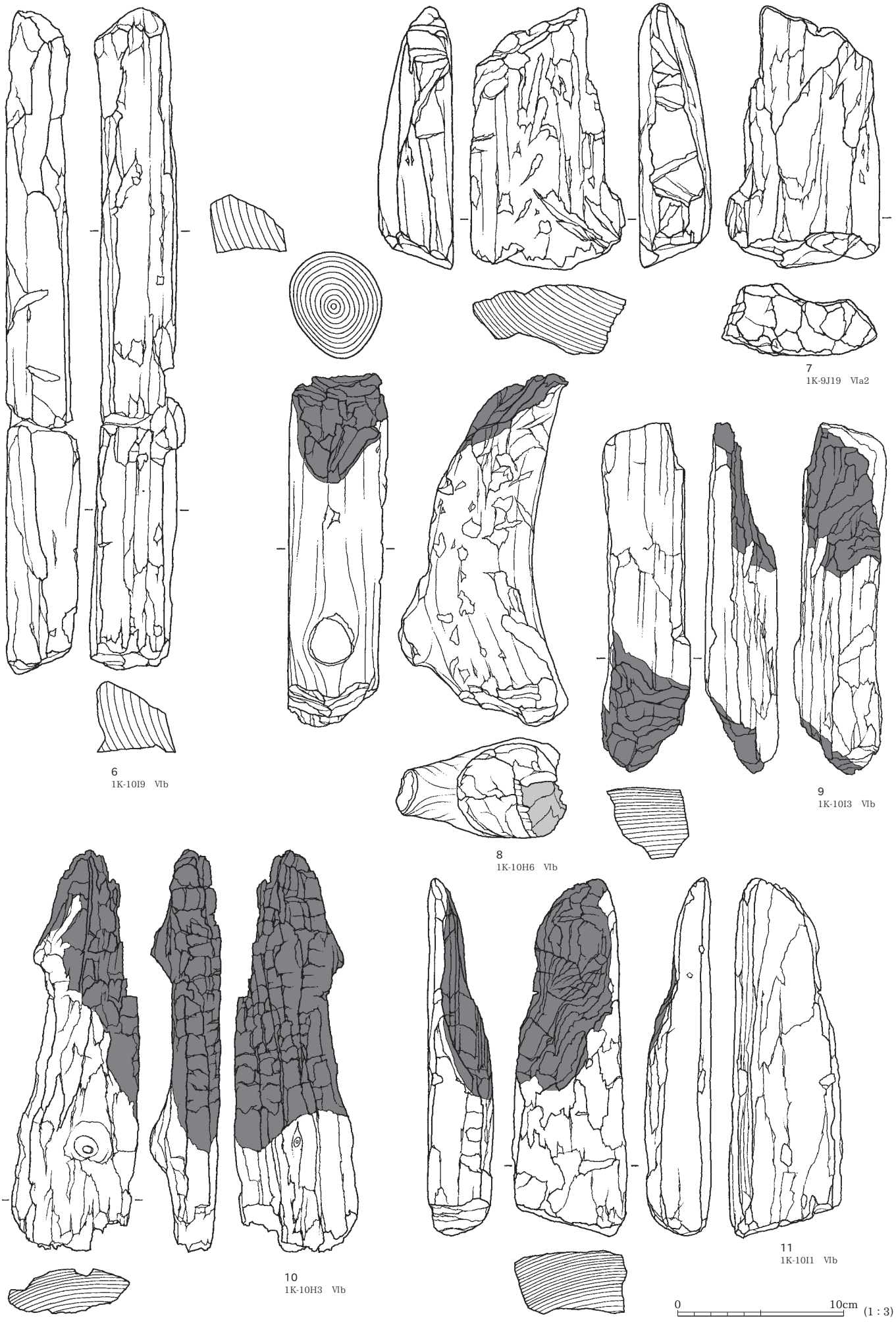


4
1K-10F15　VIa2



5
1K-10J7･8　VIb

0　10cm　(1 : 3)



6
1K-10I9　VIb

7
1K-9J19　VIa2

8
1K-10H6　VIb

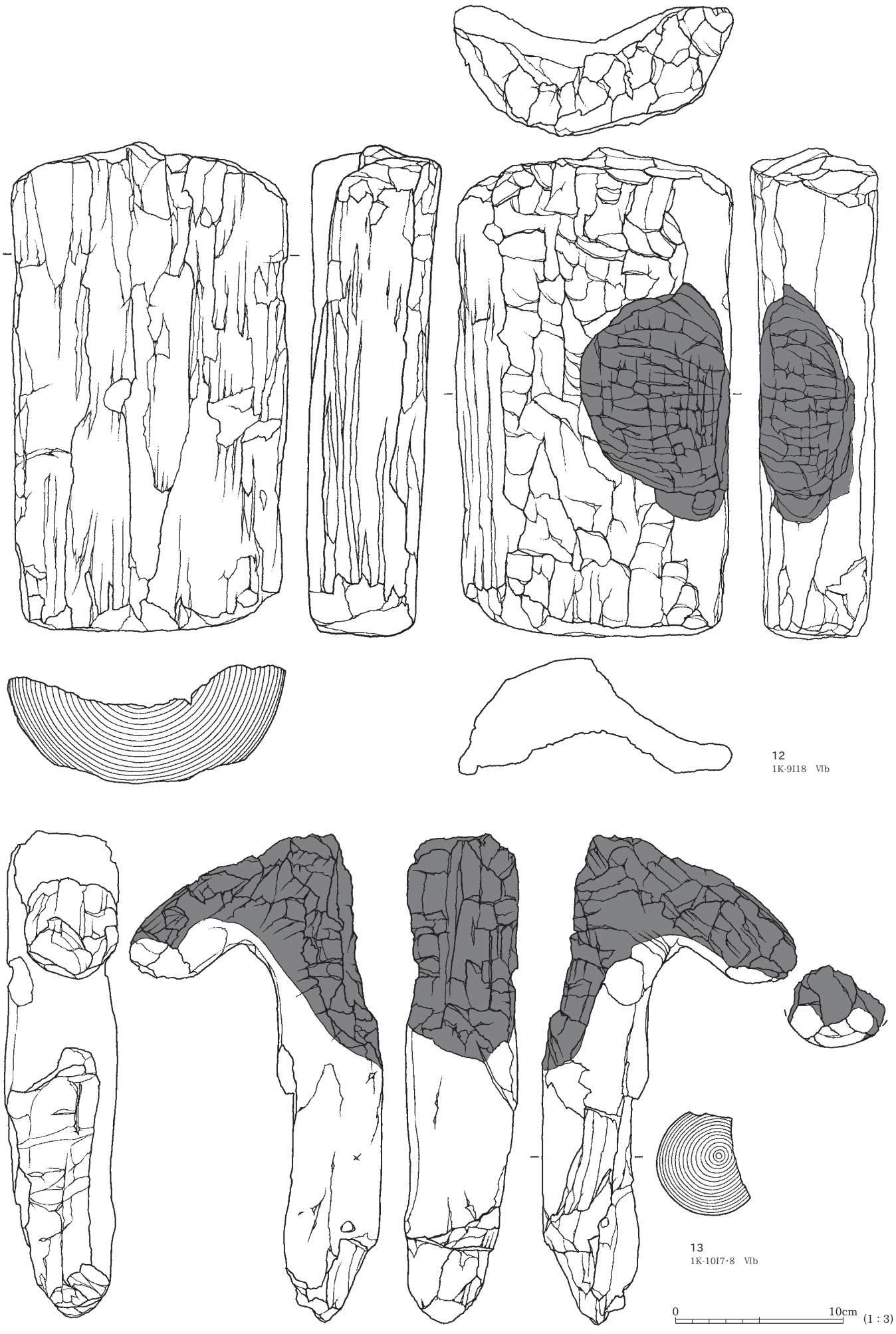
9
1K-10I3　VIb

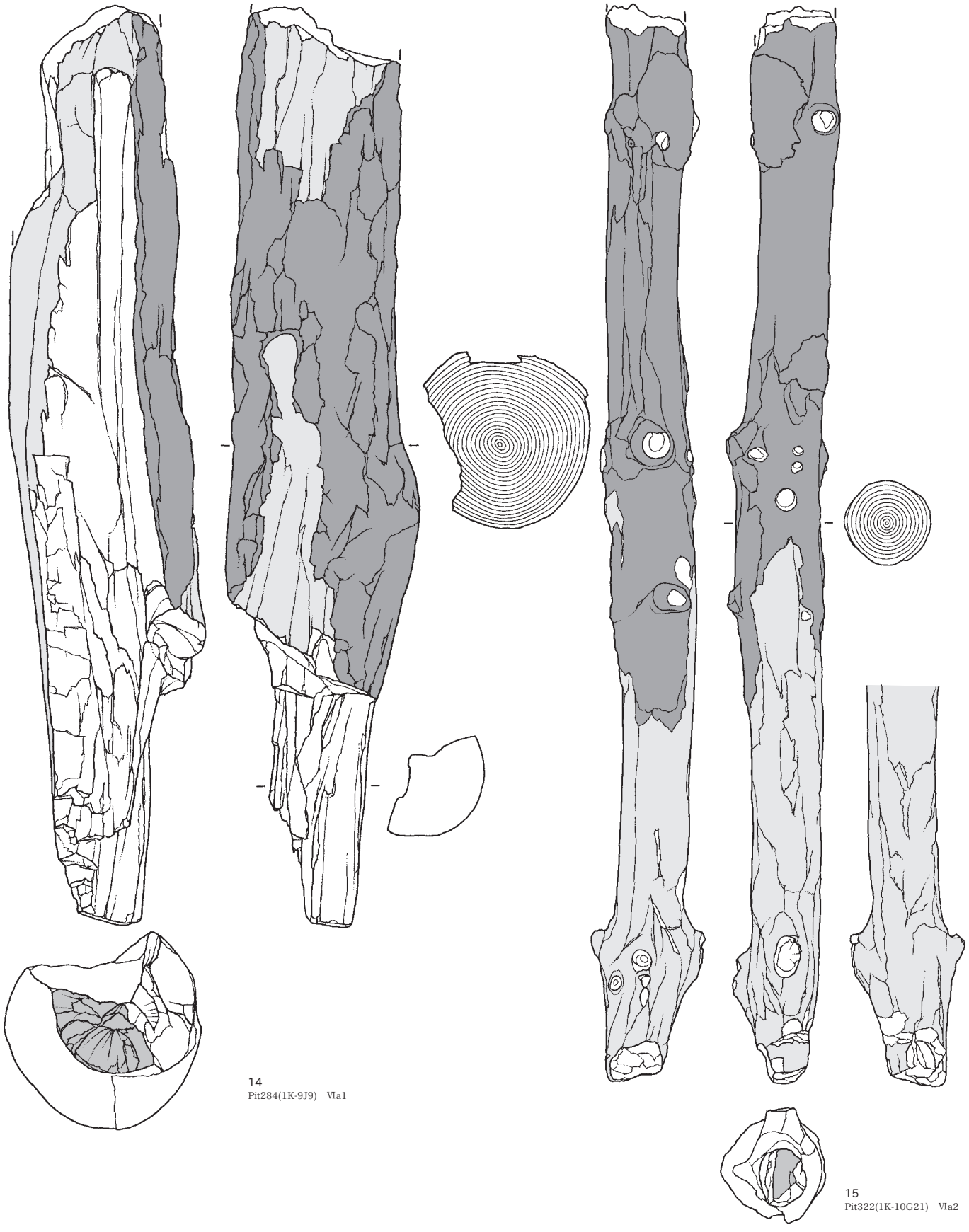
10
1K-10H3　VIb

11
1K-10I1　VIb

0　10cm　(1 : 3)

出土遺物実測図 29　木製品（4）



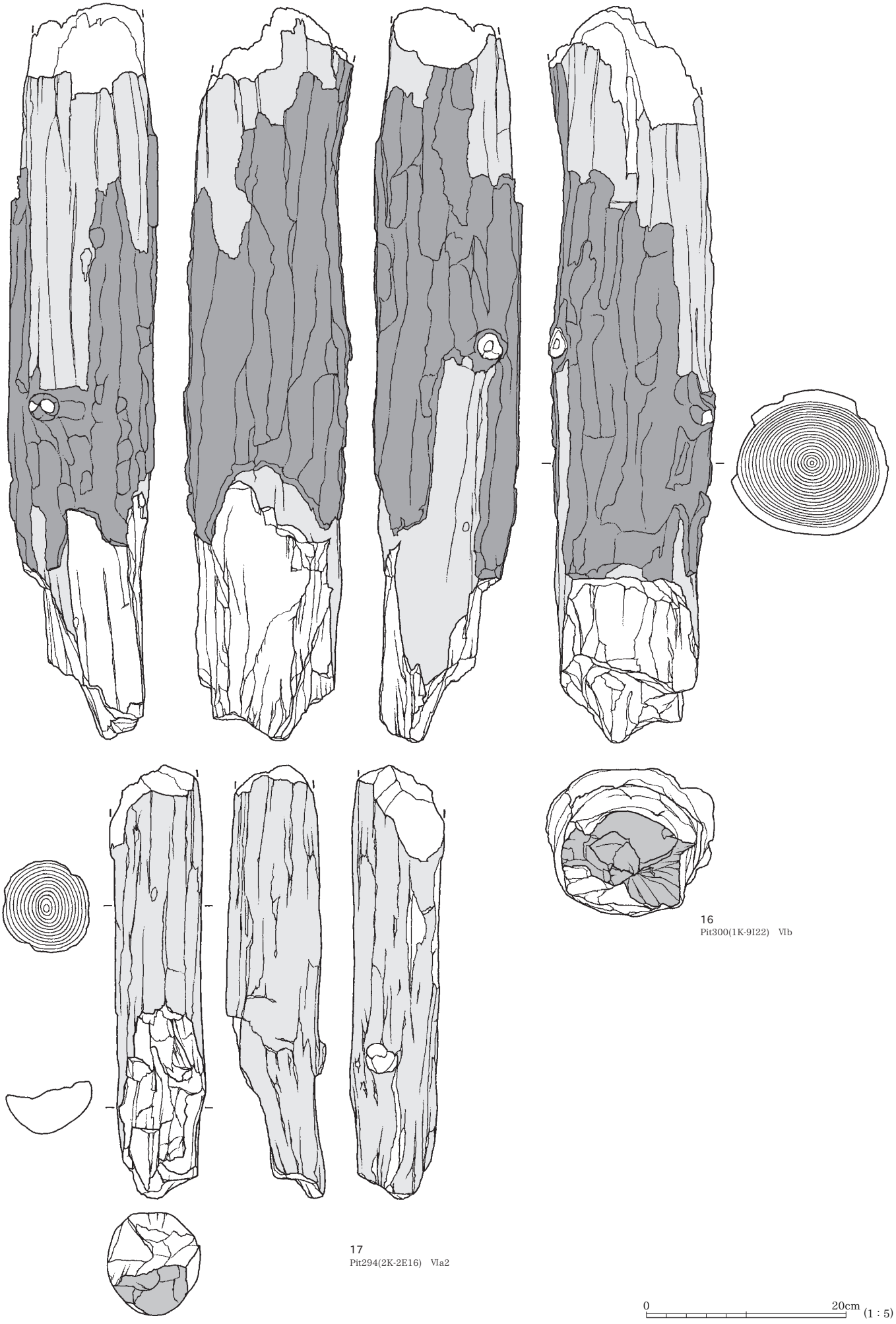


14
Pit284(1K-9J9)　VIa1

15
Pit322(1K-10G21)　VIa2

0　20cm　(1 : 5)

出土遺物実測図 31　木製品（6）



16
Pit300(1K-9I22)　VIb

17
Pit294(2K-2E16)　VIa2

0　20cm　(1：5)

18
Pit315(1K-10I6)　VIa2

19
Pit296(1K-10I1)　VIa2

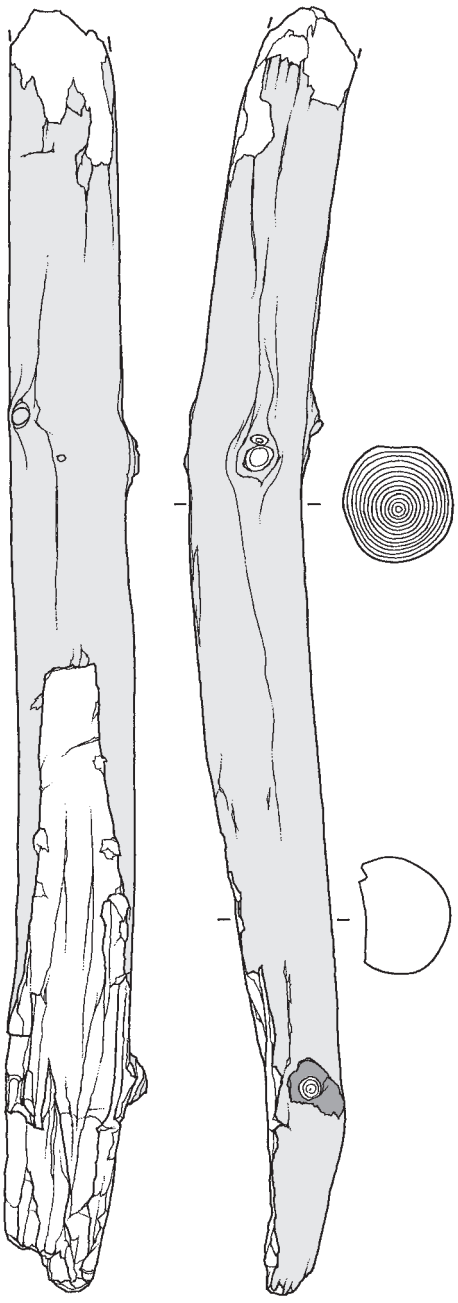
0　20cm　(1 : 5)

出土遺物実測図 33　木製品（8）

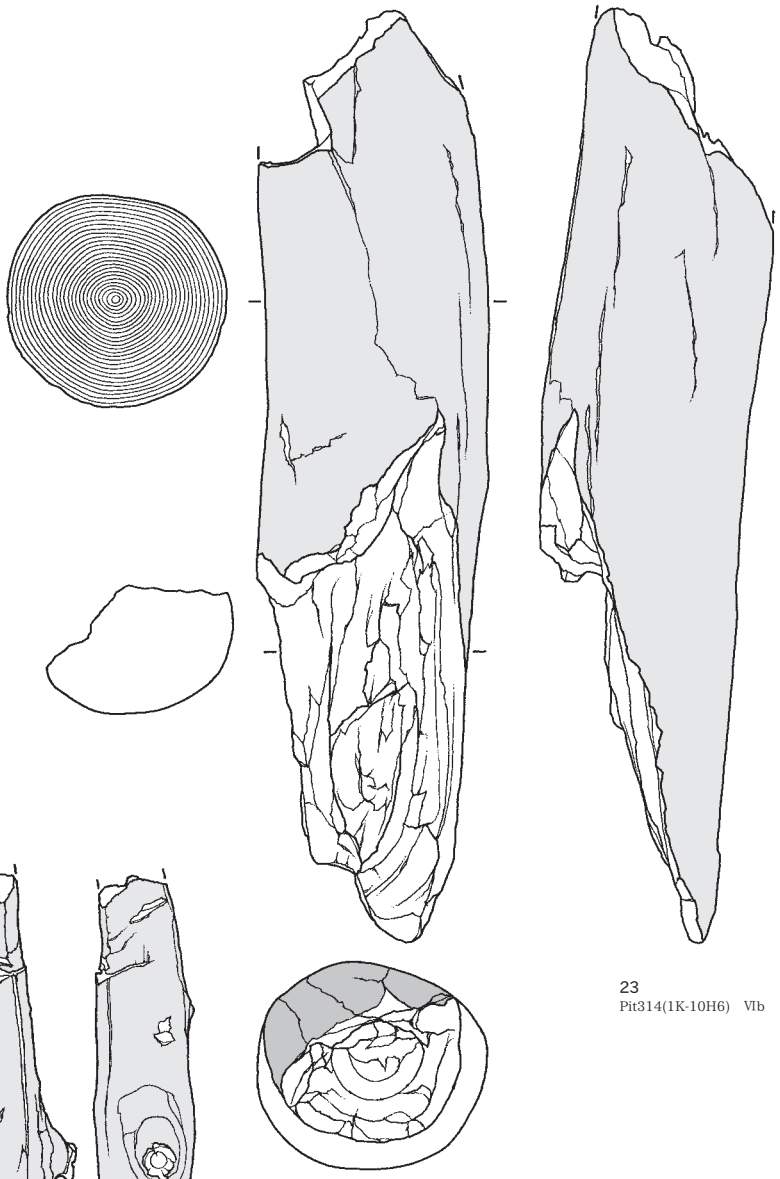
20
Pit189(1K-9I12)　VIa2

21
Pit186(1K-9I8)　VIb

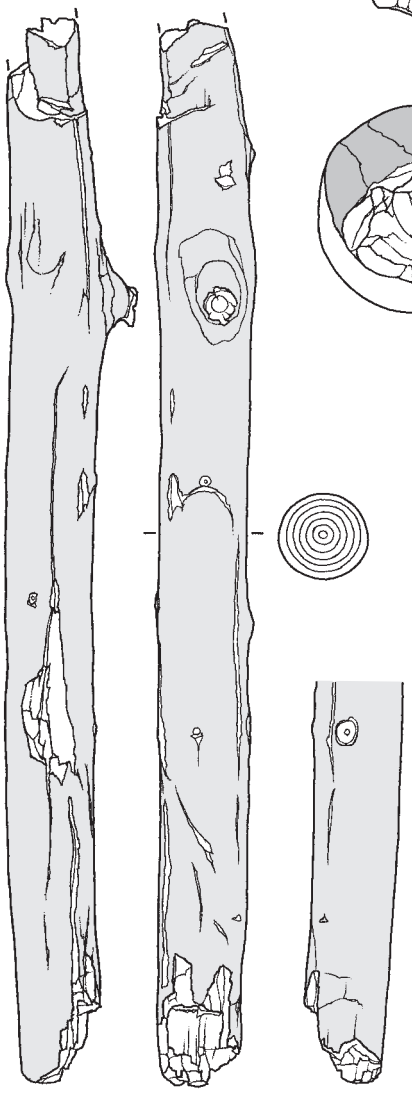
0　20cm　(1 : 5)



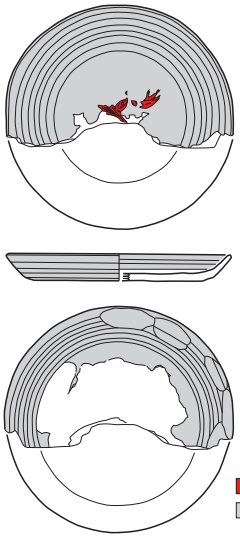
22
Pit305(2K-2H17)　VIa2



23
Pit314(1K-10H6)　VIb



24
Pit188(1K-9I3)　VIa2



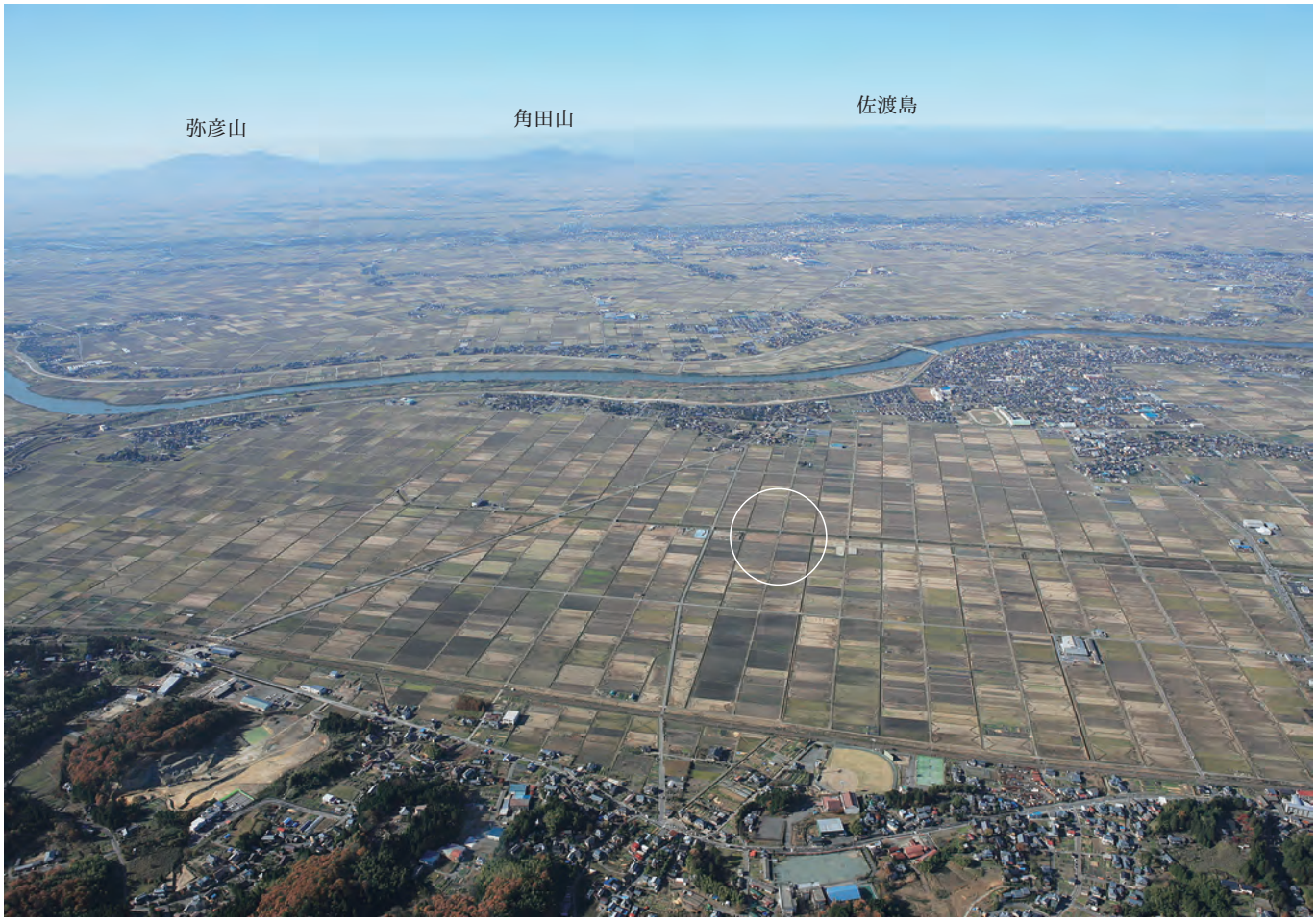
25
SK1001(2K-3D20)　2層

0　(22～24)　20cm　(1 : 5)

0　(25)　10cm　(1 : 3)

写 真 図 版

大沢谷内北遺跡周辺空中写真 1　　米軍撮影　昭和 22（1947）年 9 月 24 日



大沢谷内北遺跡周辺空中写真 2（南西→北東）

大沢谷内北遺跡周辺空中写真 3（南東→北西）

大沢谷内北遺跡全景空中写真１（南西→北東）

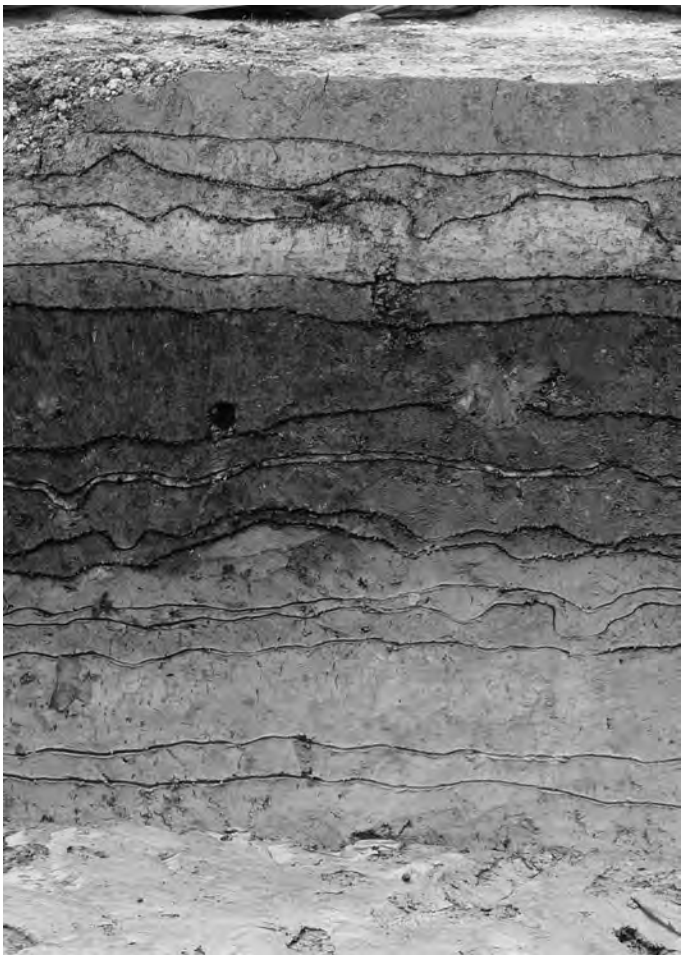
大沢谷内北遺跡全景空中写真２（北西→南東）

大沢谷内北遺跡全景空中写真３（左が北）

杭の配置と土坑群集部（東→西）（ポールは杭の位置を示す）

基本層序①（1区拡張区西壁 1K-8J）

基本層序②（1区西壁 1K-10F）



基本層序③（3区西壁 2K-3D）

SK154・157 土層断面（北→南）

SK154・157 完掘状況（北→南）

SK48・52・53 土層断面（東→西）

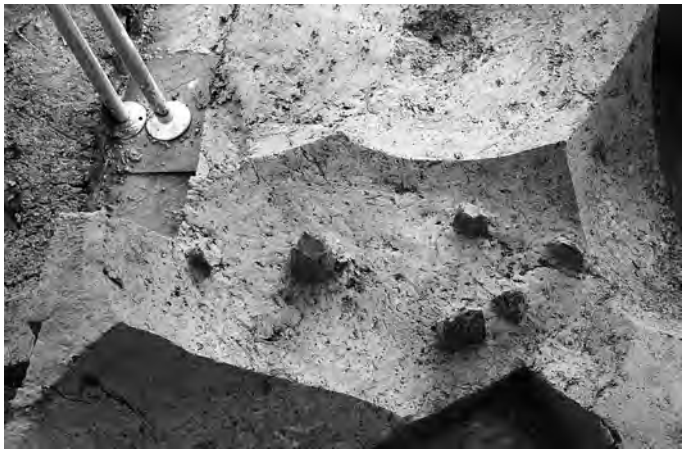
SK52 遺物出土状況（西→東）

SK50 土層断面（西→東）

SK50 遺物出土状況（北→南）

SK45・253 土層断面（西→東）

SK45 遺物出土状況（南→北）



SK253 遺物出土状況（西→東）

SK73 土層断面（南西→北東）

SK73 遺物出土状況（南西→北東）

SK129 土層断面（南→北）

SK129 遺物出土状況（西→東）

SK199・Pit236 土層断面（南→北）

SK199 遺物出土状況（南東→北西）

SK57・61 土層断面（北西→南東）

SK57 遺物出土状況（北西→南東）

SK61 遺物出土状況（南西→北東）

SK63 ～ 65・76 土層断面（東→西）

SK63・64 遺物出土状況（西→東）

SK64 遺物出土状況（西→東）

SK65 遺物出土状況（北→南）

SK149・150 土層断面（東→西）

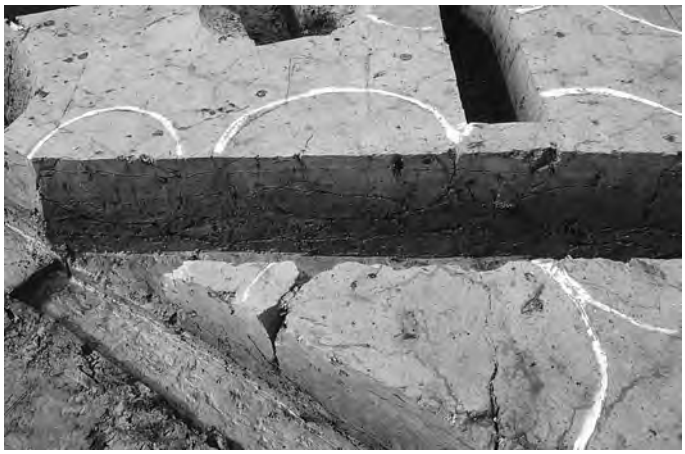
SK150 遺物出土状況（南→北）

SK167 土層断面（南→北）

SK167 遺物出土状況（南→北）

SK207・242 土層断面（南→北）

SK207 遺物出土状況（東→西）



SK71・90・205 土層断面（東→西）

SK205 完掘（東→西）

SK90 遺物出土状況（東→西）

SK71 遺物出土状況（北→南）

SK70 完掘（北→南）

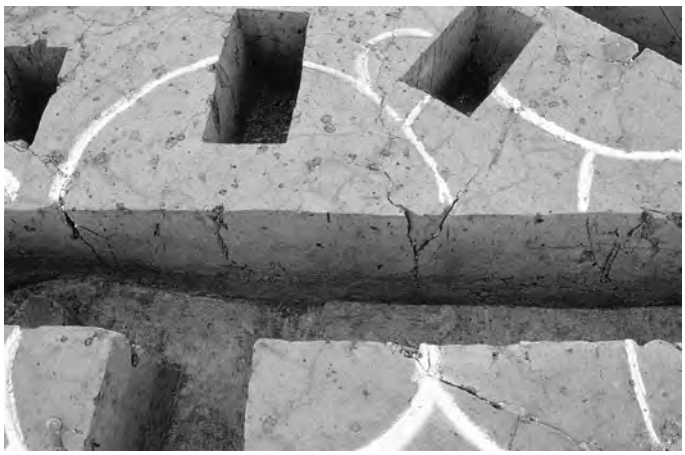
SK126・245 土層断面（南東→北西）

SK126 遺物出土状況（南東→北西）

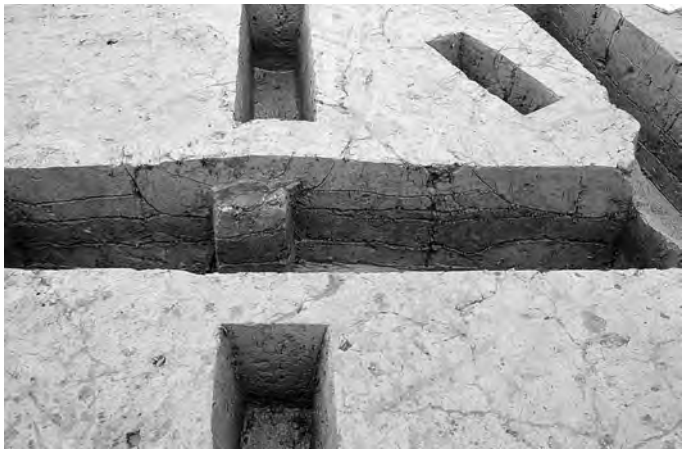
SK245 遺物出土状況（南東→北西）

SK62 土層断面（南→北）

SK62 遺物出土状況（東→西）


SK76 土層断面（北→南）

SK76 遺物出土状況（西→東）



SK201・202 土層断面（北東→南西）

SK201 遺物出土状況（北東→南西）

SK202 遺物出土状況（北東→南西）

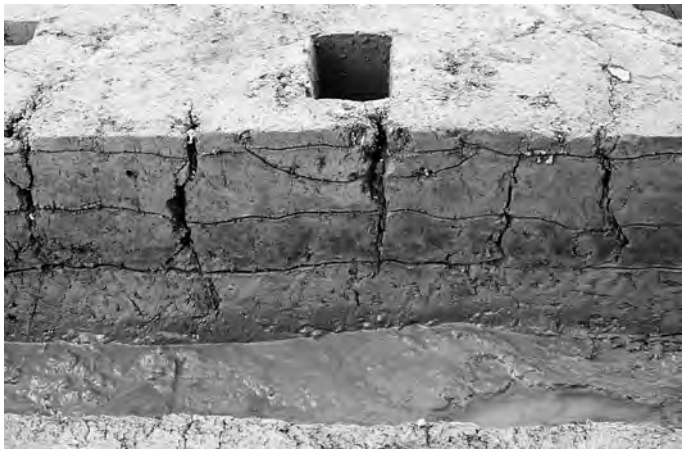
SK211 遺物出土状況（東→西）

SK317 土層断面（西→東）

SK317 遺物出土状況（南→北）

SK102 土層断面（南→北）

SK102 遺物出土状況（南→北）



SK103 土層断面（南→北）

SK103 遺物出土状況（北→南）

SK118 土層断面（西→東）

SK118 遺物出土状況（西→東）

SK121・278 土層断面（北→南）

SK121 遺物出土状況（北→南）

SK13・14 土層断面（南西→北東）

SK14 遺物出土状況（北西→南東）

SK151 土層断面（東→西）

SK151 遺物出土状況 1 （東→西）

SK151 遺物出土状況 2 （南→北）

SK15 土層断面（南→北）

SK15 遺物出土状況（南→北）

SK152 土層断面（南西→北東）

SK152 遺物出土状況（南西→北東）

SK152 完掘（南西→北東）

SK29・153・301・311 土層断面（西→東）

SK153 完掘（西→東）

SK311 完掘（南→北）

SK29 遺物出土状況（北→南）

SK301 遺物出土状況（北東→南西）

SK287・288 土層断面（東→西）

SK287 遺物出土状況（東→西）

SK288 遺物出土状況（東→西）

SK289 土層断面（北→南）

SK289 遺物出土状況（北→南）

SK290 土層断面（北→南）

SK290 遺物出土状況（北西→南東）

SK256 土層断面（北→南）

SK256 遺物出土状況（北→南）

SK258 土層断面（北→南）

SK258 遺物出土状況（北→南）

SK257 土層断面（北→南）

SK257 遺物出土状況（北→南）

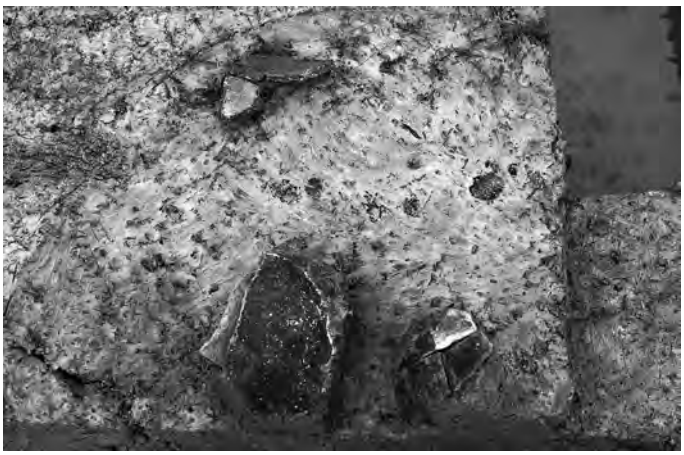
SK225 土層断面（北→南）

SK225 遺物出土状況（北→南）

SK286 土層断面（西→東）

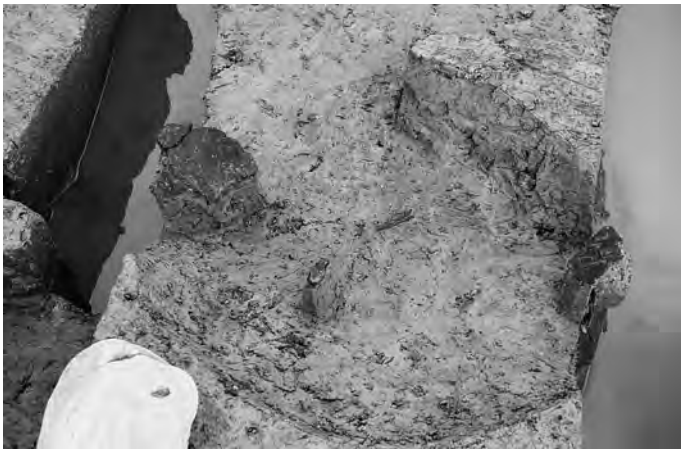
SK286 完掘（西→東）

SK176 土層断面（南→北）



SK176 遺物出土状況（南→北）

SK272 土層断面（西→東）



SK272 遺物出土状況（南→北）

SK267 土層断面（東→西）

SK267 遺物出土状況（南→北）

SK170 土層断面（西→東）

SK170 遺物出土状況（北西→南東）

SK190 土層断面（東→西）

SK190 遺物出土状況（南東→北西）

SK190 完掘（南東→北西）

SK191 土層断面（西→東）

SK191 遺物出土状況（南西→北東）

SK191 完掘（北→南）

SK227 土層断面（南東→北西）

SK227 完掘（北→南）

SK221 土層断面（東→西）

SK221 遺物出土状況（北東→南西）

SK221 完掘（北東→南西）

SK182 土層断面（南→北）

SK182 遺物出土状況（西→東）

SK182 完掘（西→東）

SK193 土層断面（西→東）

SK193 遺物出土状況（南西→北東）

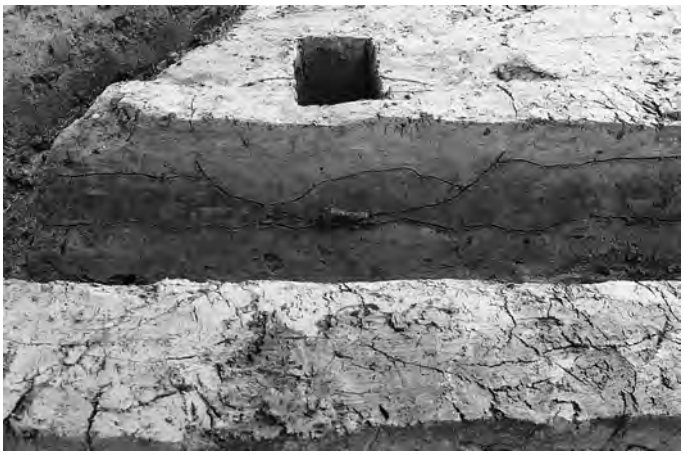
SK4 土層断面（南東→北西）

SK4 遺物出土状況 1（北東→南西）

SK4 遺物出土状況 2（北→南）

SK4 炭化物層検出状況（北→南）

SK4 完掘（北→南）



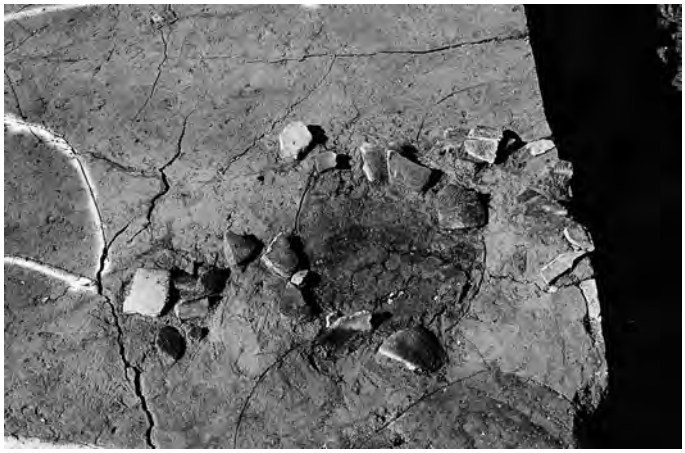
SK293 土層断面（北→南）

SK293 遺物出土状況（北→南）

SK295 土層断面（北→南）

SK295 遺物出土状況（北→南）

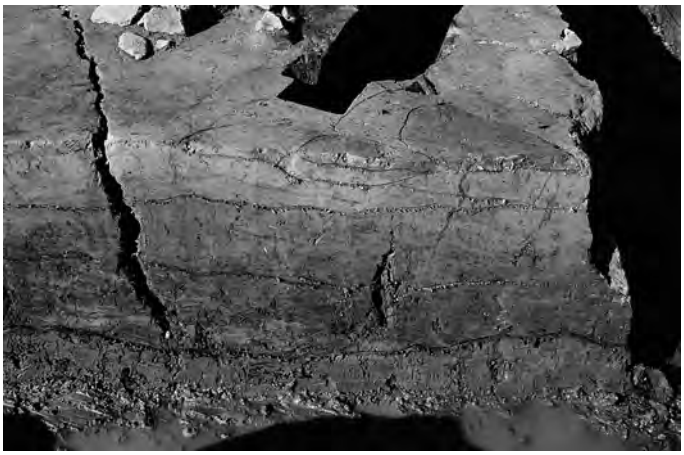
SK295 完掘（北→南）



SX5 検出・遺物出土状況（南→北）

SX5 土層断面（東→西）

SX123・124 検出状況（北→南）



SX123・124 土層断面（南→北）

竪櫛（図版 70- 1 ）出土状況（東→西）

竪櫛（図版 70- 2 ）出土状況（西→東）

櫂（図版 70- 3 ）出土状況（南西→北東）

壷形土器（図版 58-176）出土状況（西→東）

1 区北東隅（1K-9J グリッド）遺物出土状況（南東→北西）

1 区北東部（1K-10I・J グリッド）遺物出土状況（東→西）

1 区北東部（1K-10I・J グリッド）遺物出土状況（南→北）

土器集中 97 検出状況（北→南）

土器集中 111 検出状況（西→東）

土器集中 80 検出状況（東→西）

土器集中 80 下面遺物出土状況（東→西）

土器集中 79 検出状況（東→西）

土器集中 79 下面遺物出土状況（北→南）

土器集中 81 検出状況（西→東）

土器集中 112 検出状況（北東→南西）

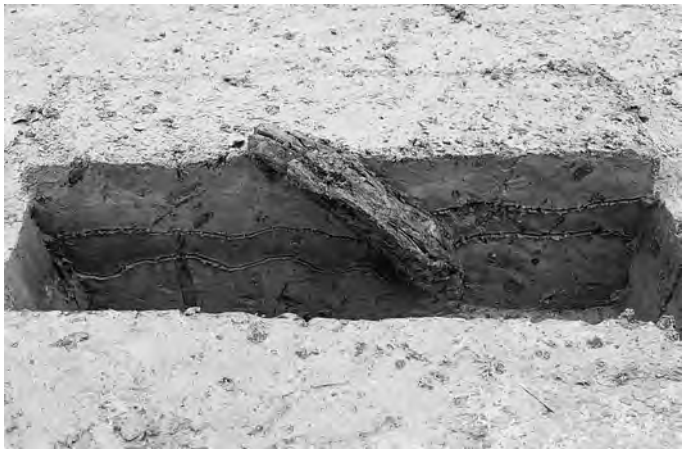
Pit320 土層断面（南西→北東）

Pit319 土層断面（西→東）

Pit145 土層断面（南東→北西）

Pit144 土層断面（南→北）

Pit316 土層断面（南西→北東）



Pit306 土層断面（南→北）

Pit298 土層断面（北東→南西）

Pit313 土層断面（東→西）

Pit187 土層断面（南→北）

Pit194 土層断面（南東→北西）

Pit188 土層断面（北東→南西）

Pit186 土層断面（東→西）

Pit189 土層断面（南西→北東）

SK299・Pit300 土層断面（北東→南西）

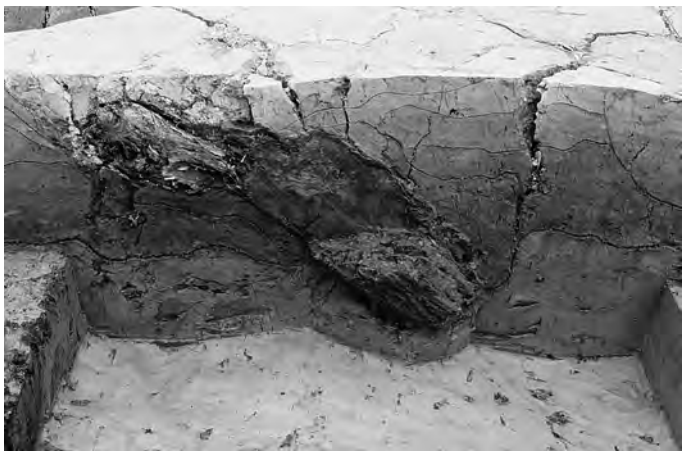
Pit284 土層断面（東→西）

Pit195 土層断面（南東→北西）

Pit236 土層断面（南→北）

Pit252 土層断面（北東→南西）

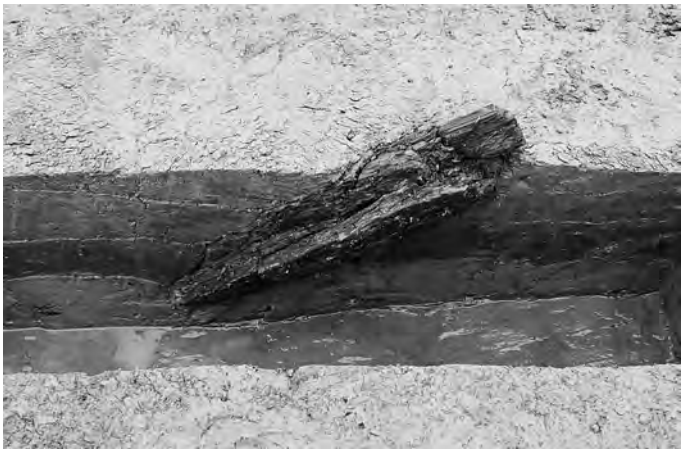
SK211 遺物出土状況、Pit212 土層断面（東→西）



Pit163 土層断面（南東→北西）

Pit322 土層断面（北西→南東）

Pit314 土層断面（北東→南西）



Pit148 土層断面（北西→南東）

SK297・Pit296 土層断面（北東→南西）

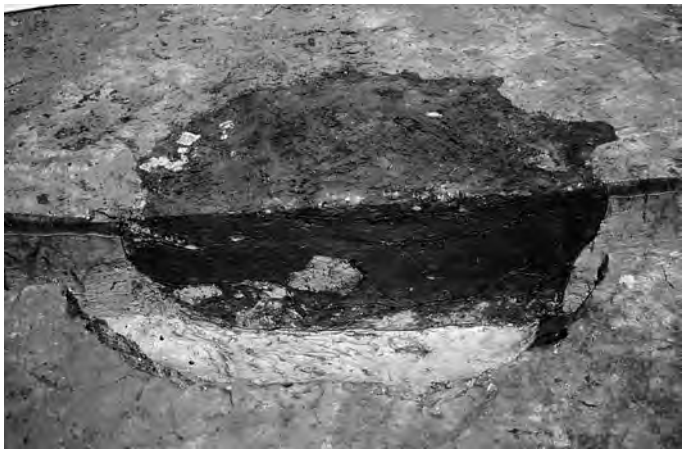
Pit315 土層断面（南西→北東）

Pit292 土層断面（北東→南西）

Pit294 土層断面（東→西）

Pit323 土層断面（東→西）

Pit305 土層断面（東→西）



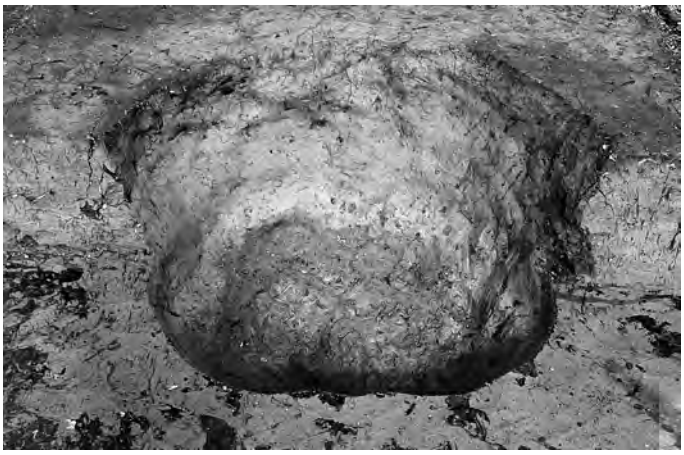
SK1001 土層断面（南→北）

SK1001 完掘状況（南→北）

SK1003 完掘状況（北→南）

SK1006 土層断面（南→北）

SE1004 土層断面（南→北）

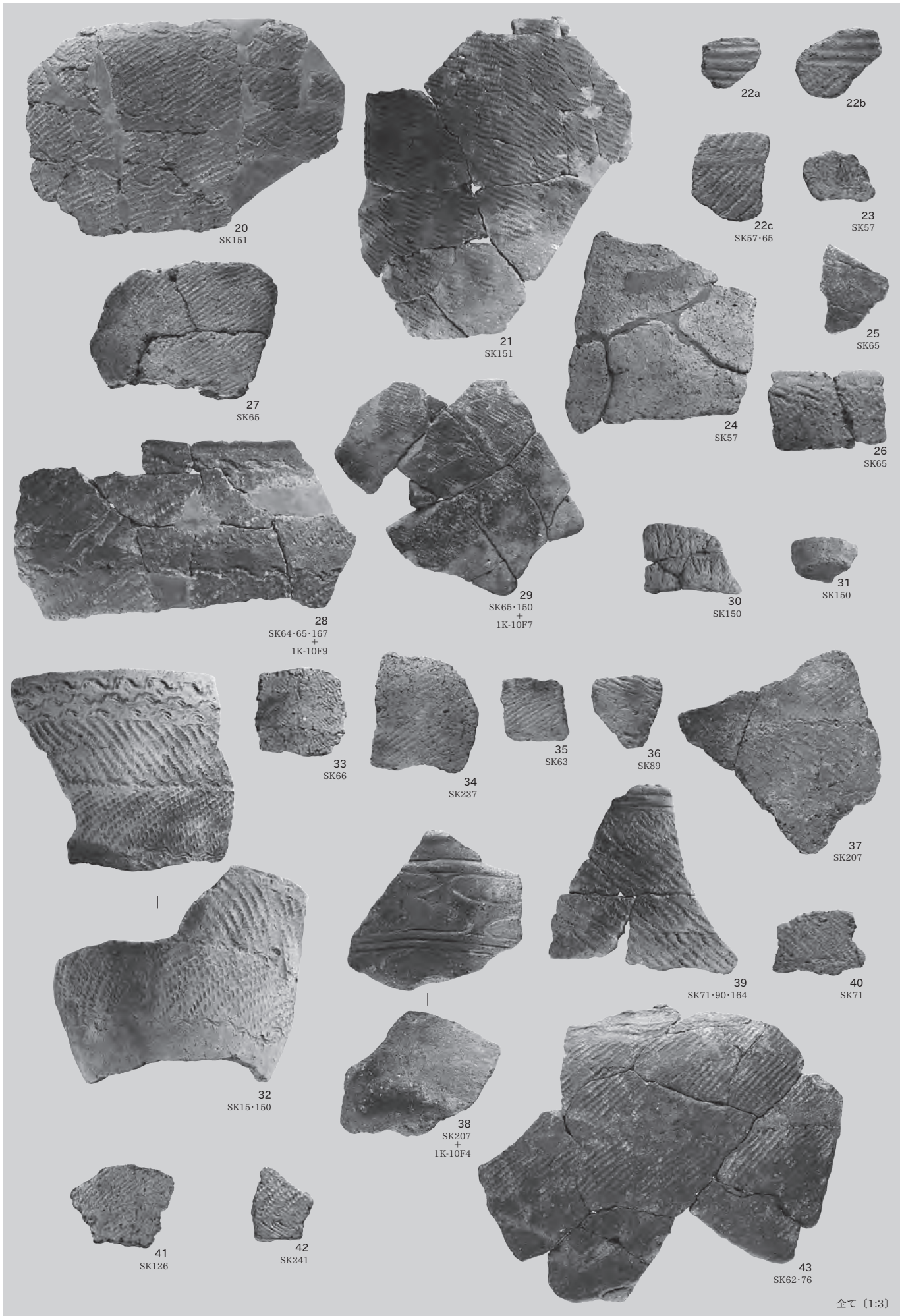


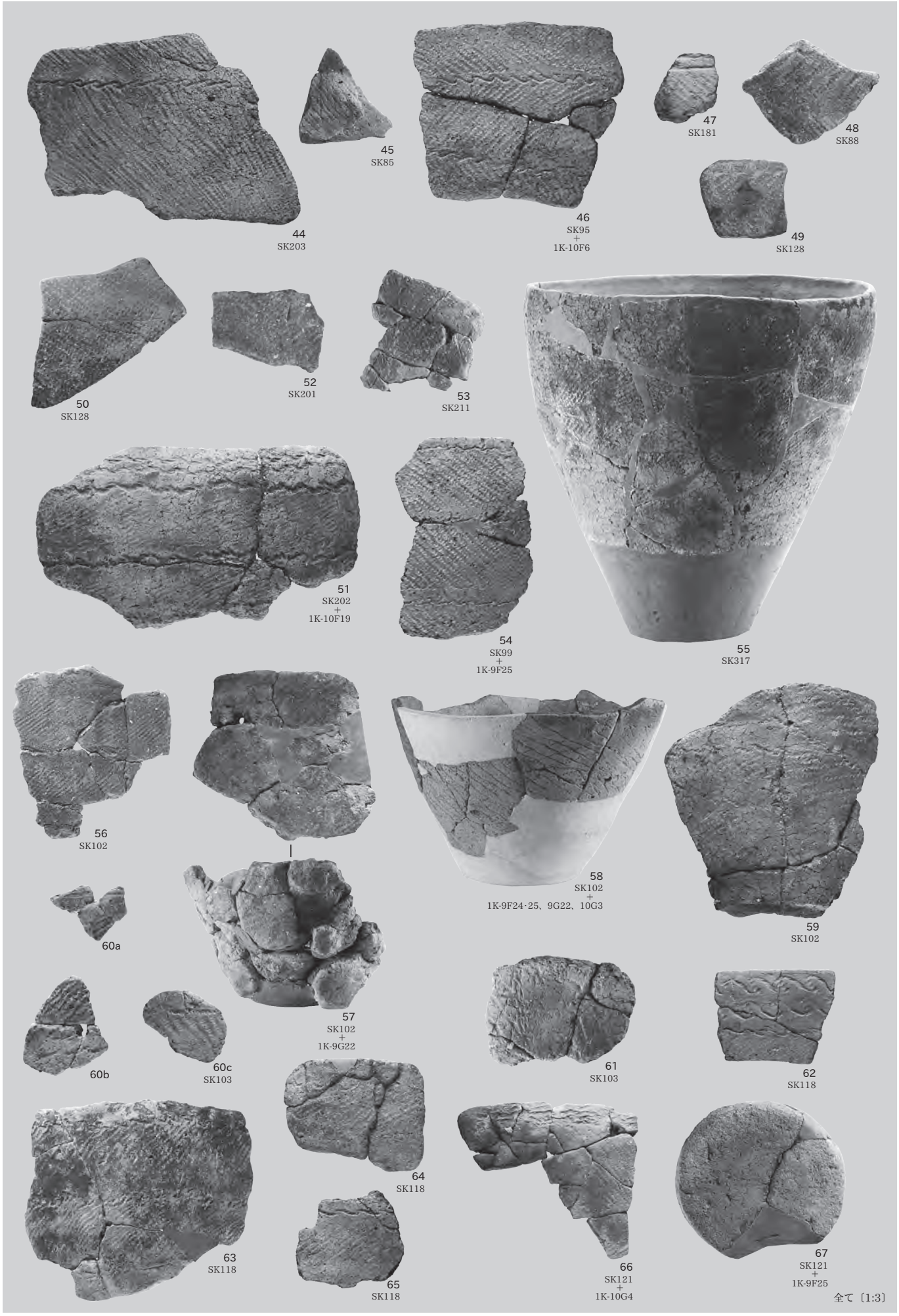
SE1005 完掘状況（南→北）

Pit1007 土層断面（東→西）

Pit1011 土層断面（東→西）

1
SK133
+
1K-9F24
2
SK157
3
SK52
+
1K-9F17·24、9G24
4
SK46·52
5
SK52
+
1K-9G24
6
SK50
7
SK83
8
SK45
9
SK253
10
SK253
+
1K-10F11·12
11
SK55
12
SK55·215
+
1K-10F12
13
SK73·215
+
1K-10F13
14
SK129
15
SK129·199
16
SK61
17
SK61
18
SK61
19
SK61·151
全て〔1:3〕


20
SK151
21
SK151
22a
22b
22c
SK57·65
23
SK57
24
SK57
25
SK65
26
SK65
27
SK65
28
SK64·65·167
+
1K-10F9
29
SK65·150
+
1K-10F7
30
SK150
31
SK150
32
SK15·150
33
SK66
34
SK237
35
SK63
36
SK89
37
SK207
38
SK207
+
1K-10F4
39
SK71·90·164
40
SK71
41
SK126
42
SK241
43
SK62·76
全て〔1:3〕

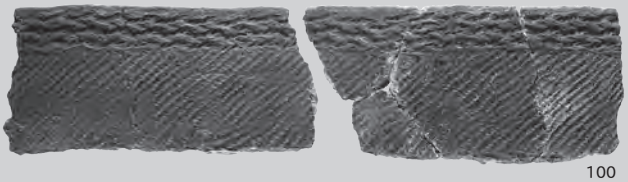

44
SK203
45
SK85
46
SK95
+
1K-10F6
47
SK181
48
SK88
49
SK128
50
SK128
52
SK201
53
SK211
51
SK202
+
1K-10F19
54
SK99
+
1K-9F25
55
SK317
56
SK102
58
SK102
+
1K-9F24·25、9G22、10G3
59
SK102
60a
57
SK102
+
1K-9G22
60b
60c
SK103
61
SK103
62
SK118
63
SK118
64
SK118
65
SK118
66
SK121
+
1K-10G4
67
SK121
+
1K-9F25

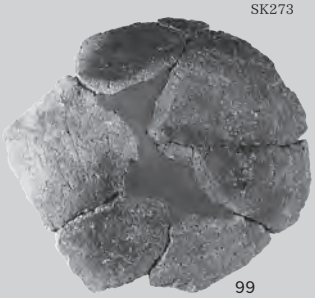
全て〔1:3〕

68
SK155
69
SK307
+
1K-10G2
70
SK14
71
SK303·304
+
1K-10F6
72
SK309
74
SK19·152·161·162
75
SK106·152
73
SK152
76
SK30·152·310
+
1K-10G8
77
SK156
+
1K-10G8
78
SK156
80
SK302
81
SK287
82
SK288
79
SK29·301
+
1K-10G9
83
SK289·290
+
1K-9H14
84
SK256
+
1K-9I11
85
SK258
全て〔1:3〕

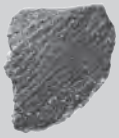
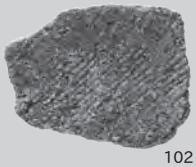
86
SK257
+
1K-9I16
88
SK225
89
SK286
87
SK257
90
SK176
+
1K-10H6
91
SK176
92
SK176·178
95
SK226
+
1K-9H24·10H5
93
SK267
96
SK170·232
97
SK273·283
+
1K-10I1
94
SK266
全て〔1:3〕

98
SK273


100
SK191·297

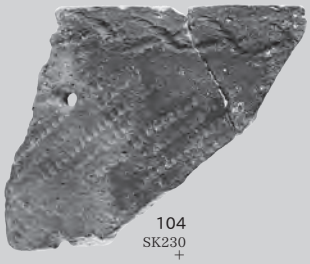

99
SK190·191
+
1K-10I6

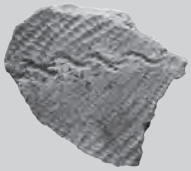
101
SK190·221·227

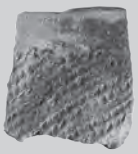


102
SK191·297

107
SK183·193
+
1K-10I10

103
SK192


104
SK230
+
1K-10I5

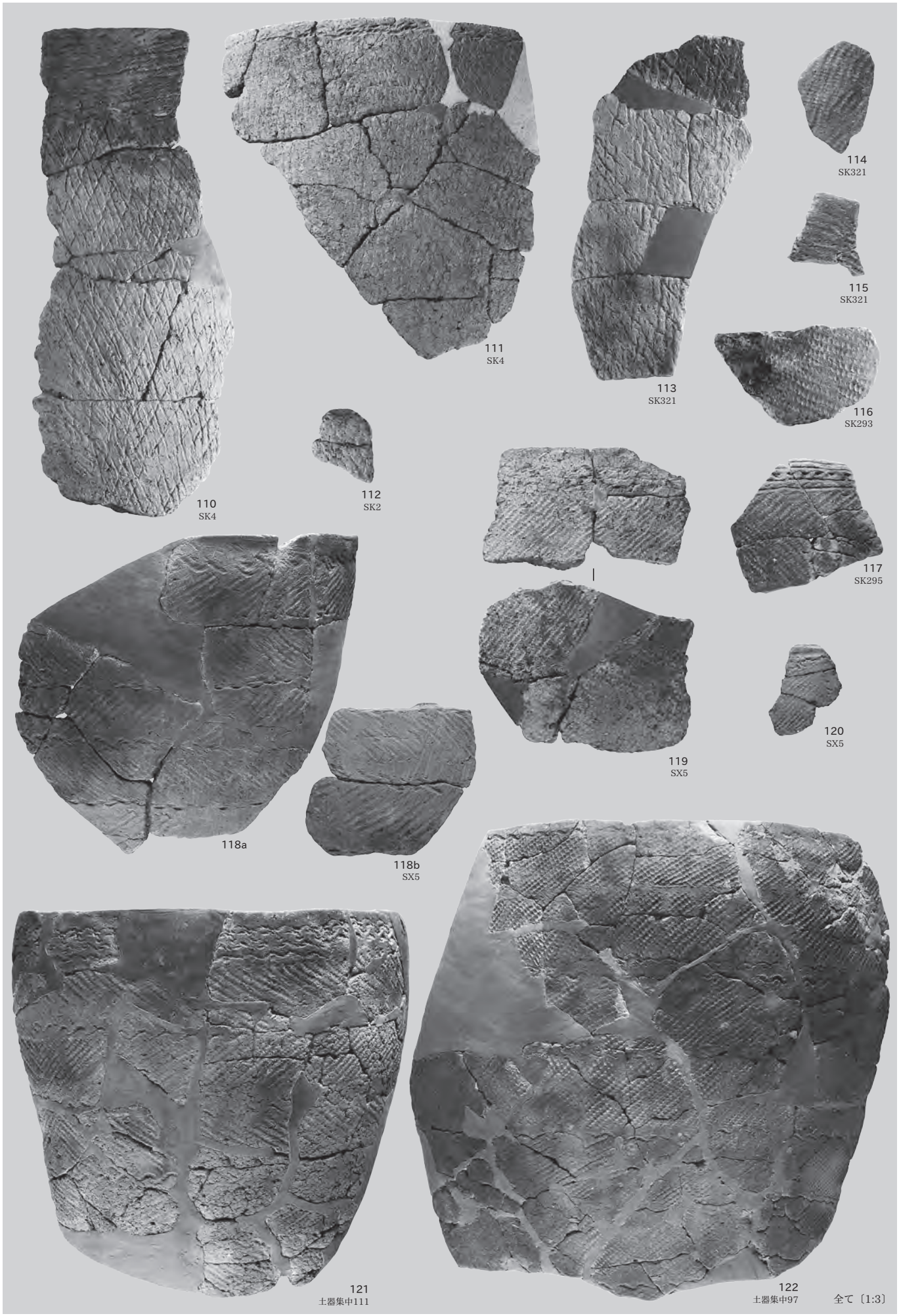

105
SK182

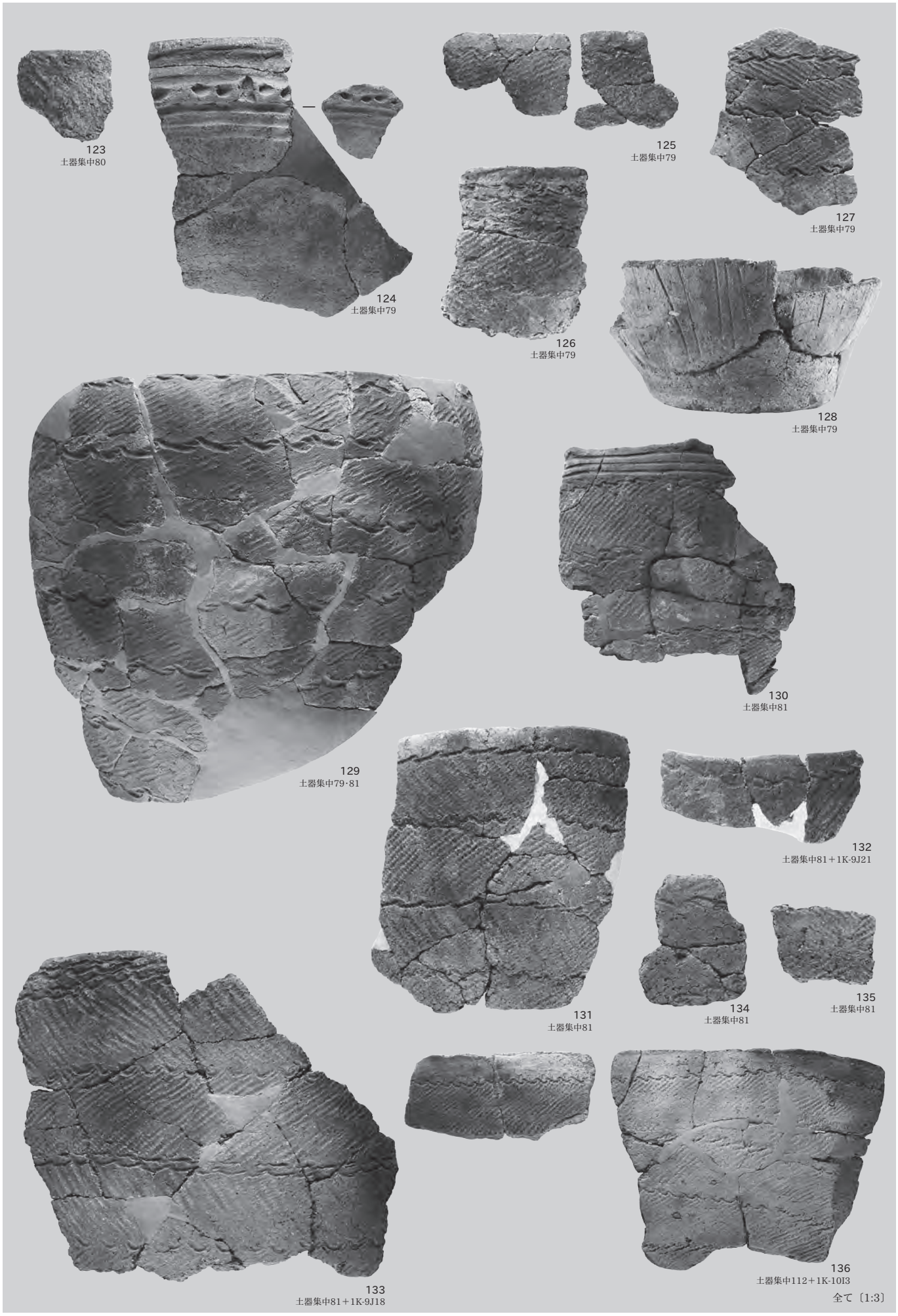

106
SK183

108
SK229

109
SK1·247

全て〔1:3〕


110
SK4
111
SK4
112
SK2
113
SK321
114
SK321
115
SK321
116
SK293
117
SK295
118a
118b
SX5
119
SX5
120
SX5
121
土器集中111
122
土器集中97
全て〔1:3〕



123
土器集中80

124
土器集中79

125
土器集中79

127
土器集中79

126
土器集中79

128
土器集中79

129
土器集中79·81

130
土器集中81

131
土器集中81

132
土器集中81＋1K-9J21

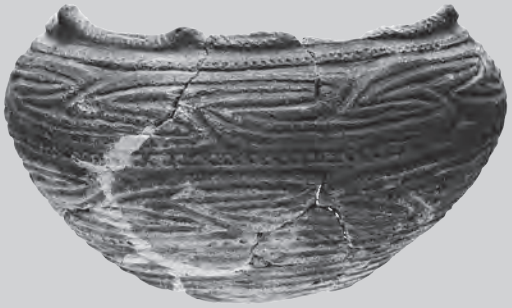
134
土器集中81

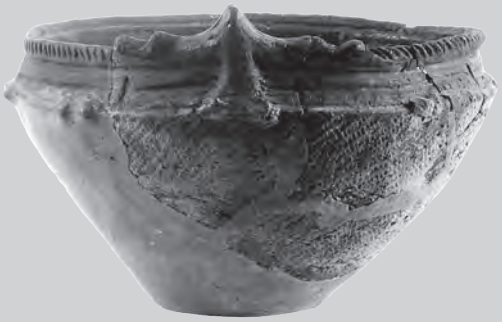
135
土器集中81

133
土器集中81＋1K-9J18

136
土器集中112＋1K-10I3

全て〔1:3〕

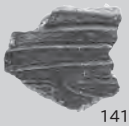

137
100T(1K-9F13)



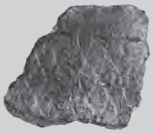
138
1K-9F23･24

140
1K-9F23

139
100T

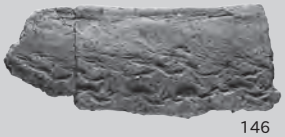

141
1K-9F17

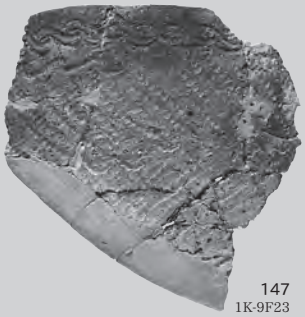
142
1K-9F19


143
1K-9F23

144
100T

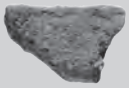
145
1K-9F18

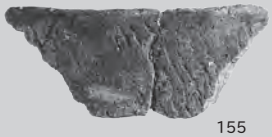

146
1K-9F14

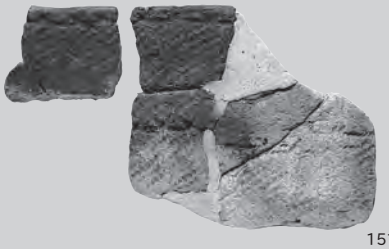

147
1K-9F23

148
1K-9F25

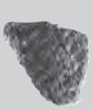
149
1K-9F23


150
1K-9F18

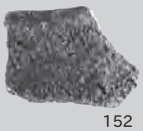

155
1K-9F17･18

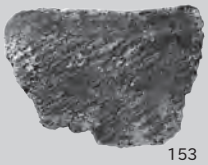

151
100T(1K-9F20)

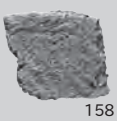
154
1K-9F19、9J25


156
100T

157
1K-9F18･23

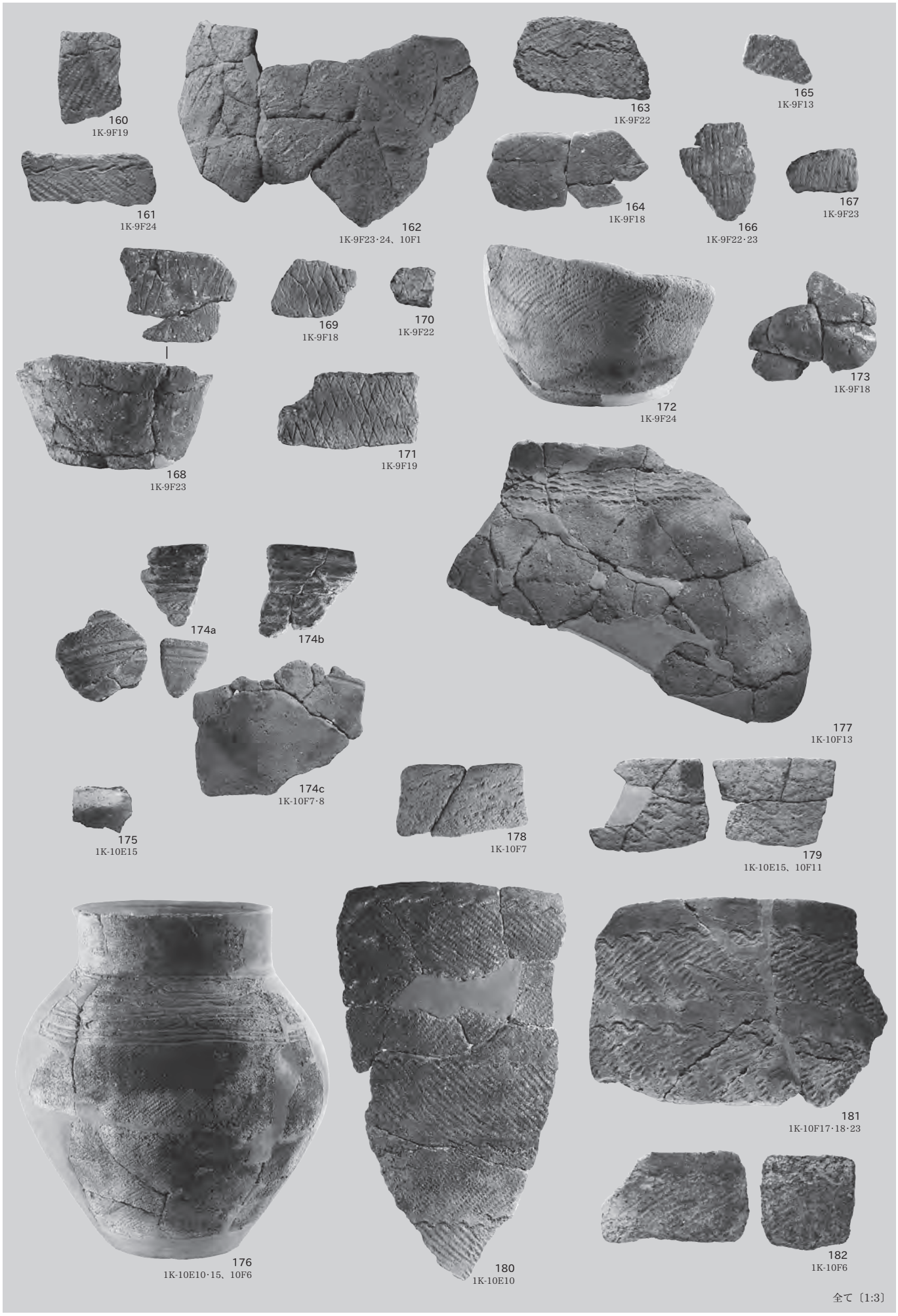

152
100T


153
1K-9F14

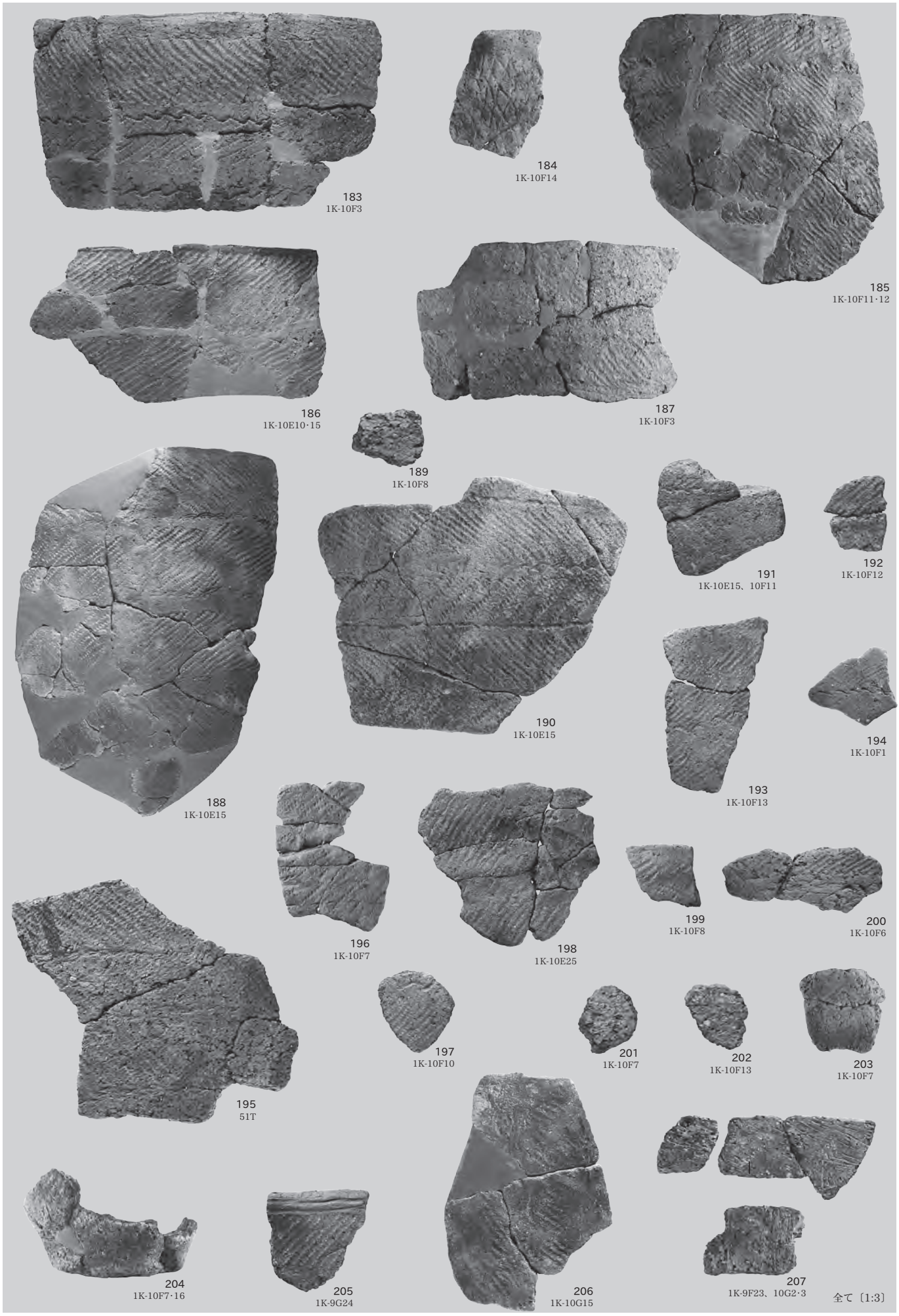

158
1K-9F13

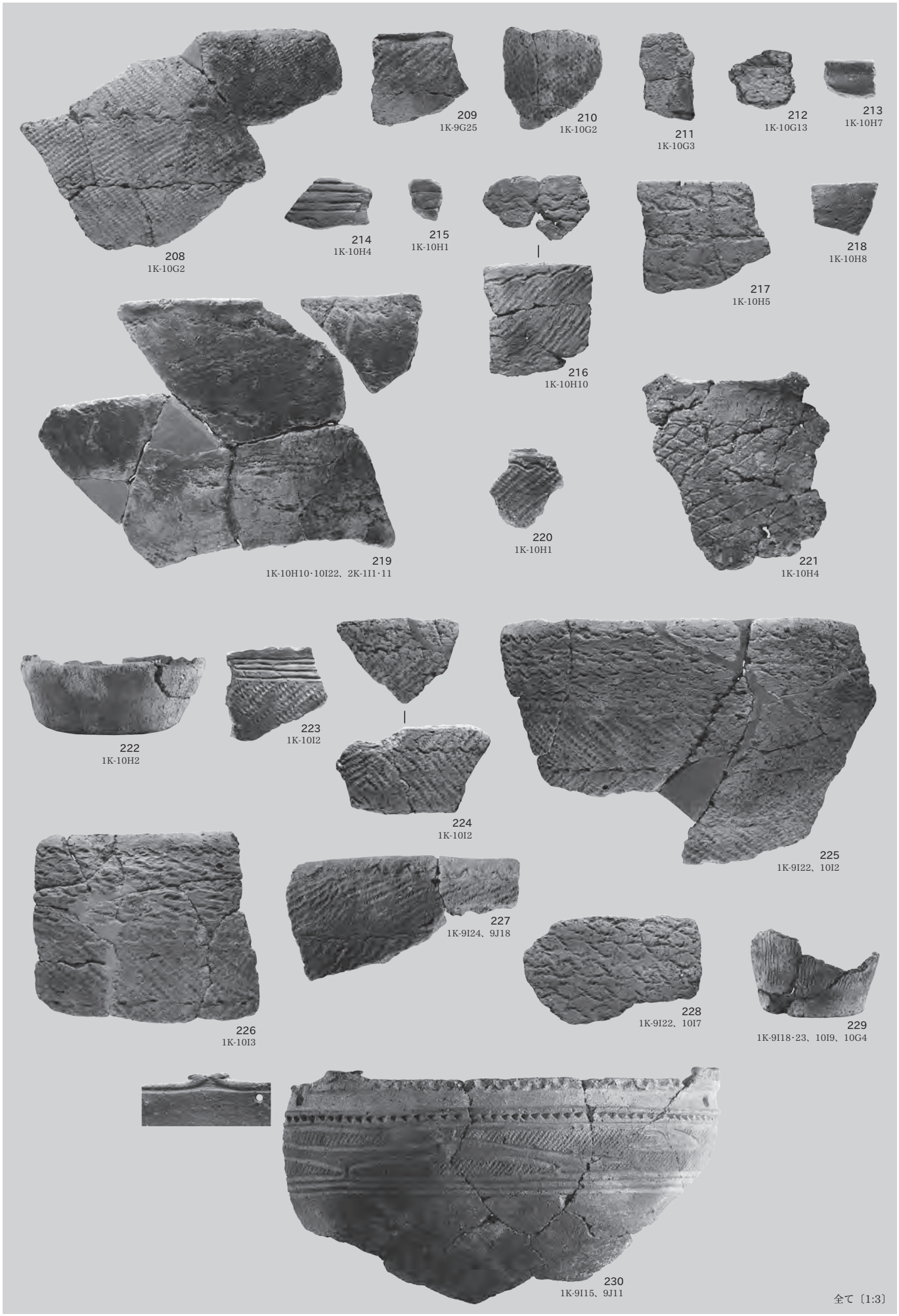
159
1K-9F19

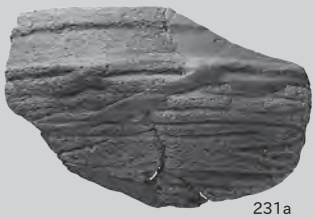
全て〔1:3〕


160
1K-9F19
161
1K-9F24
162
1K-9F23・24、10F1
163
1K-9F22
165
1K-9F13
164
1K-9F18
166
1K-9F22・23
167
1K-9F23
169
1K-9F18
170
1K-9F22
168
1K-9F23
171
1K-9F19
172
1K-9F24
173
1K-9F18
174a
174b
174c
1K-10F7・8
175
1K-10E15
177
1K-10F13
178
1K-10F7
179
1K-10E15、10F11
176
1K-10E10・15、10F6
180
1K-10E10
181
1K-10F17・18・23
182
1K-10F6

全て〔1:3〕

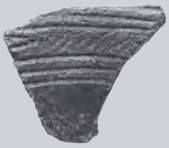

183
1K-10F3
184
1K-10F14
185
1K-10F11·12
186
1K-10E10·15
187
1K-10F3
189
1K-10F8
188
1K-10E15
190
1K-10E15
191
1K-10E15、10F11
192
1K-10F12
193
1K-10F13
194
1K-10F1
196
1K-10F7
198
1K-10E25
199
1K-10F8
200
1K-10F6
195
51T
197
1K-10F10
201
1K-10F7
202
1K-10F13
203
1K-10F7
204
1K-10F7·16
205
1K-9G24
206
1K-10G15
207
1K-9F23、10G2·3
全て〔1:3〕

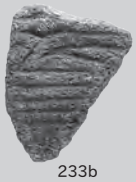

208
1K-10G2
209
1K-9G25
210
1K-10G2
211
1K-10G3
212
1K-10G13
213
1K-10H7
214
1K-10H4
215
1K-10H1
216
1K-10H10
217
1K-10H5
218
1K-10H8
219
1K-10H10・10I22、2K-1I1・11
220
1K-10H1
221
1K-10H4
222
1K-10H2
223
1K-10I2
224
1K-10I2
225
1K-9I22、10I2
226
1K-10I3
227
1K-9I24、9J18
228
1K-9I22、10I7
229
1K-9I18・23、10I9、10G4
230
1K-9I15、9J11
全て〔1:3〕

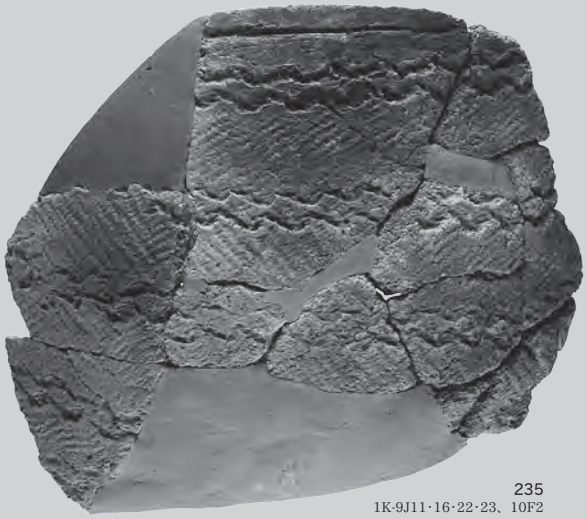

231a

233a

231b


231c
1K-9G22、9J16、10J2

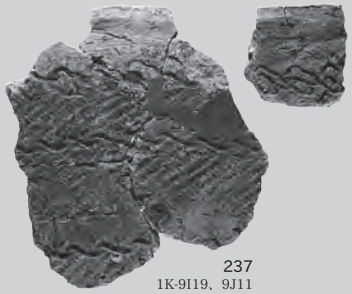

233b
1K-9J21·22

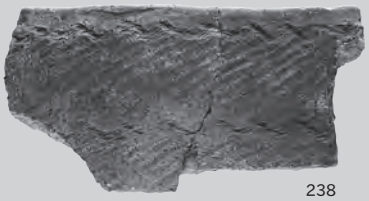

235
1K-9J11·16·22·23、10F2

232
1K-9J17

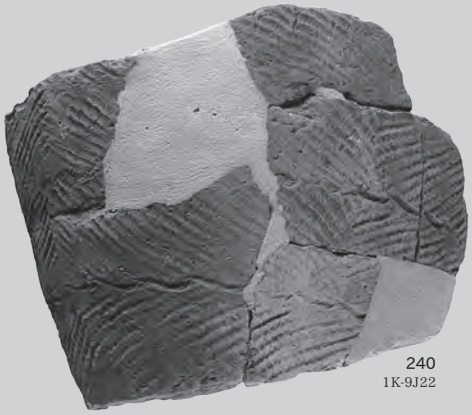
234
1K-9J16

236
1K-9J17·21、10J1

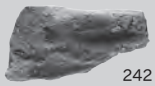

237
1K-9I19、9J11

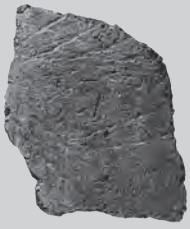

238
1K-9J21・22

239
1K-9J22


240
1K-9J22

241
1K-10J2

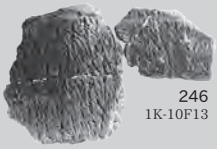

242
1K-9J17

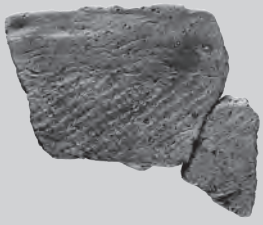

243
1K-9J12

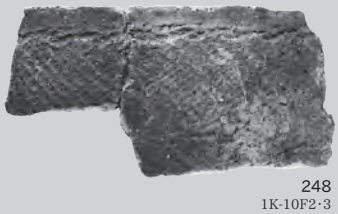
244a

244b
1K-10F8

245
1K-10F12


246
1K-10F13


247
1K-10F24


248
1K-10F2·3

全て〔1:3〕

249
1K-10F3
250
1K-10F9
252
1K-10F8
251
1K-10F12
253
1K-10G13
254
1K-10G12
255
1K-10G5
256
1K-10G11
257
1K-10G7
258
1K-9G14
259
1K-10G12
260
1K-10G15
261
1K-10J6
262
1K-10J8
263
1K-10I14
264
1K-10J16·17
265
1K-10I9、10J11
266
1K-10I5

全て〔1:3〕

胎土Ⅰa類（P176）

胎土Ⅰa類（P19）

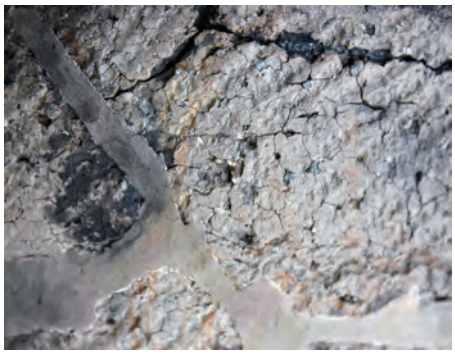
胎土Ⅰa類（P55）

胎土Ⅰb類（P108）

胎土Ⅰb類（P139）

胎土Ⅰb類（P93）

胎土Ⅰc類（P107）


胎土Ⅰc類（P138）

胎土Ⅱa類（P145）

胎土Ⅱb類（P143）

胎土Ⅱc類（P137）

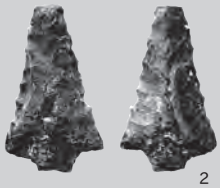
胎土Ⅲa類（P177）

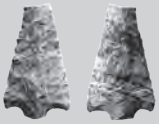
胎土Ⅲa類（P4）

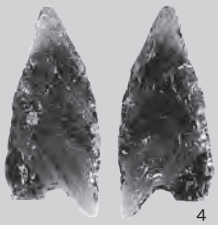
胎土Ⅲb類（P66）

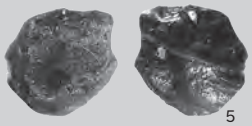
胎土Ⅳ類（P13）

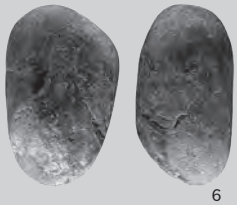
1
1K-10F15

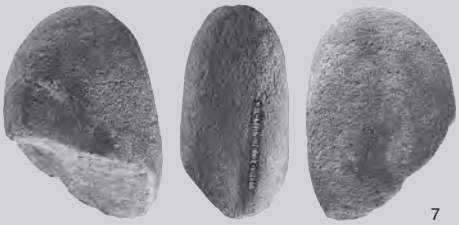

2
1K-10G16


3
1K-10E20

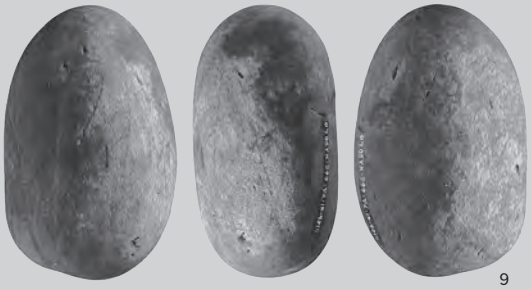

4
1K-10H6

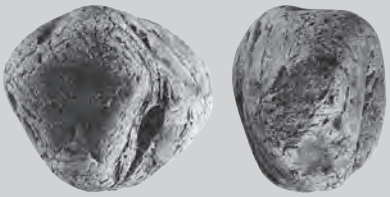

5
SK64

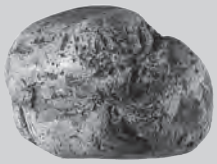

6
SK220

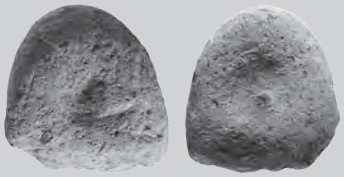

7
1K-9H14

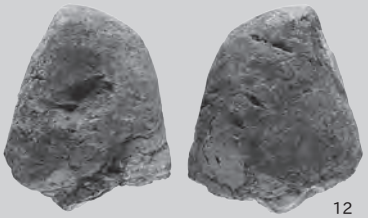
8
1K-10F7


9
1K-9J17

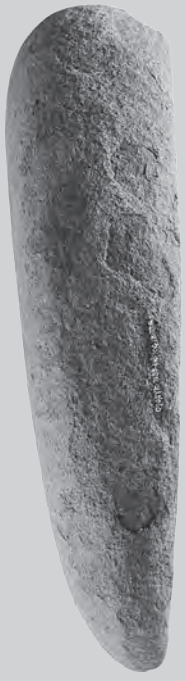

10
1K-10H6




11
1K-9F19


12
2K-2G6

13
SK182



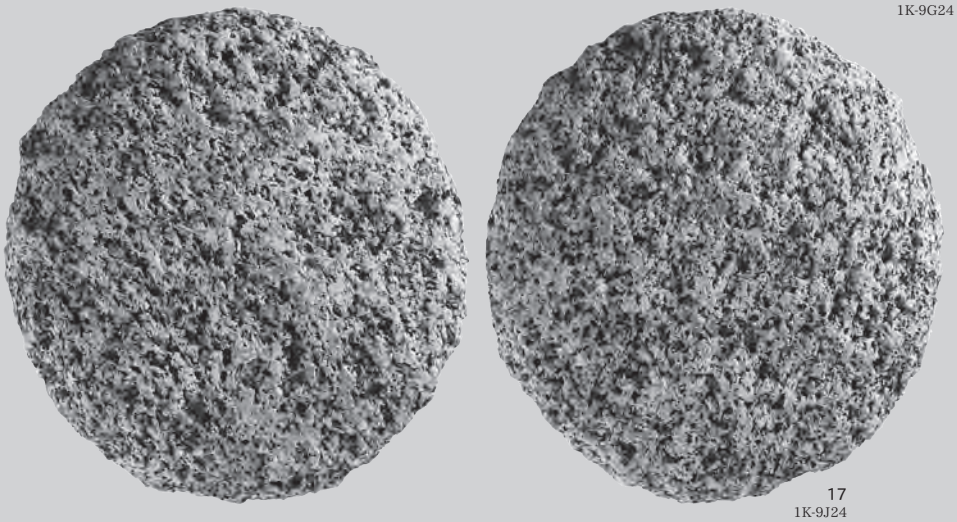
14
1K-10G18

1～5〔3:4〕
6～14〔1:3〕

15
1K-10F14

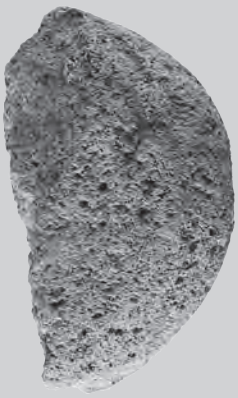
16
SK235

18
1K-9G24

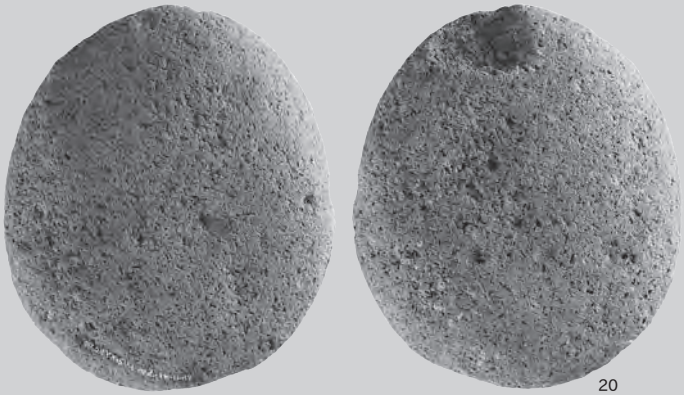


17
1K-9J24

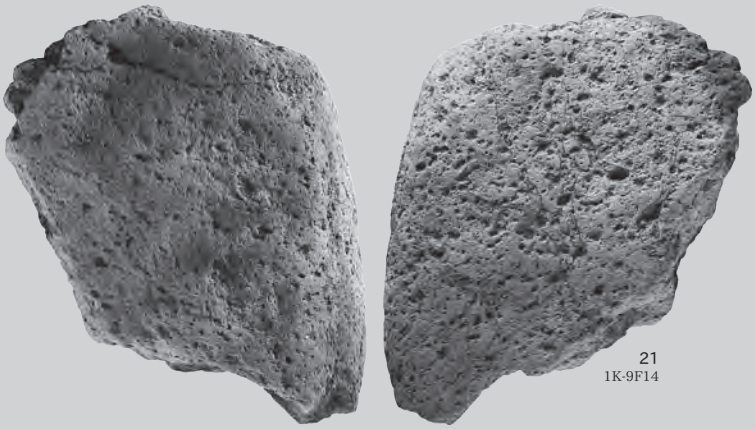
全て〔1:3〕



19
SK308

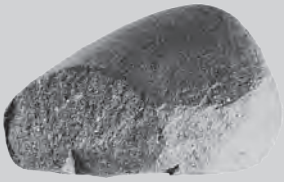


20
1K-10H2

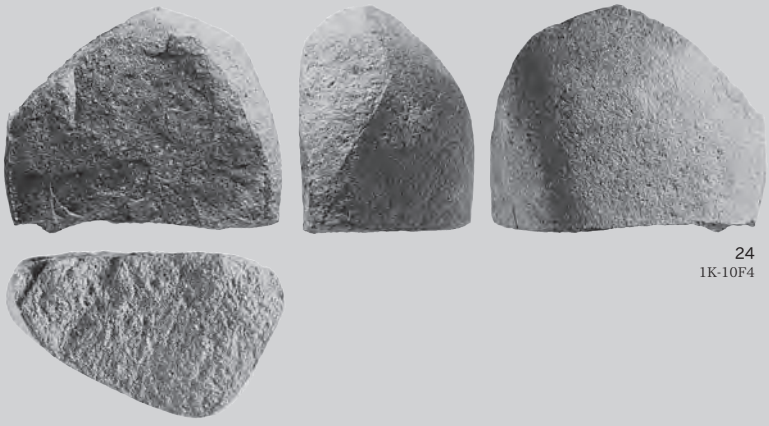


21
1K-9F14

22
SK268

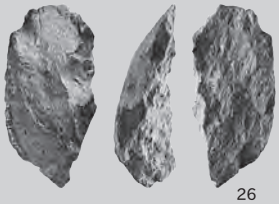


23
1K-10I7



24
1K-10F4

25
1L-8A18



26
1K-9J17

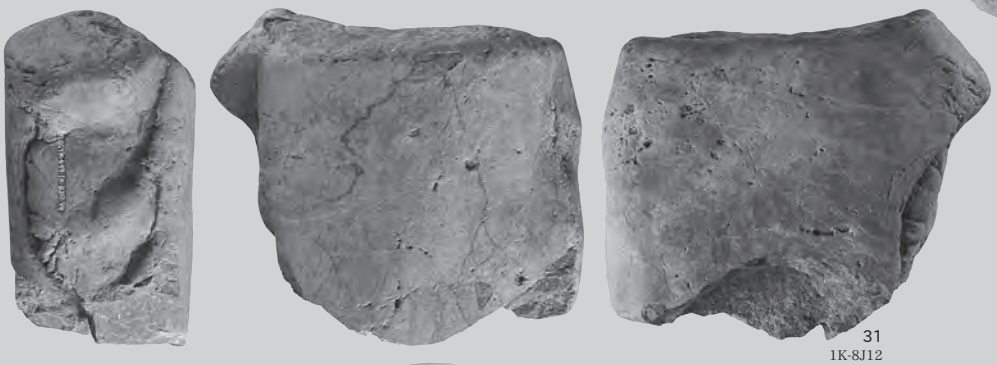
27
1K-10H4

全て〔1:3〕

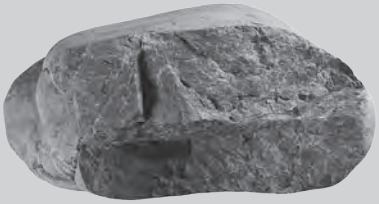
28
1K-10H5

29
1K-9J16

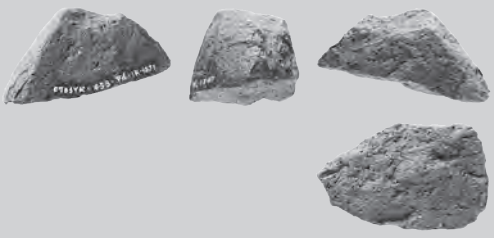
30
1K-10F8



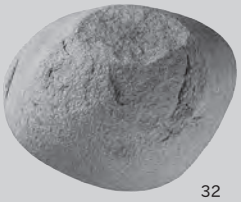
31
1K-8J12



33
1K-10G9

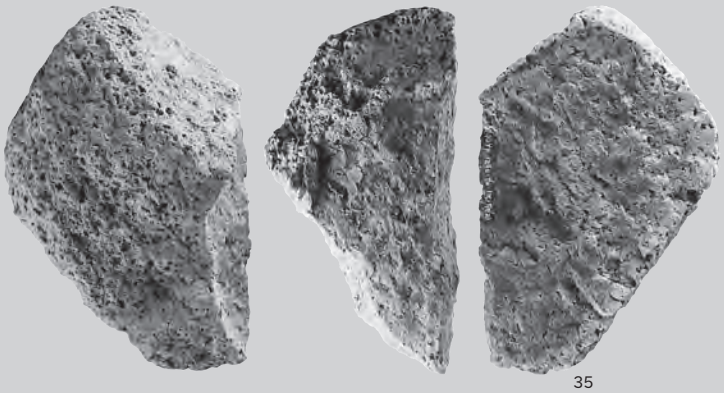


34
1K-10J1



32
SK18

全て〔1:3〕

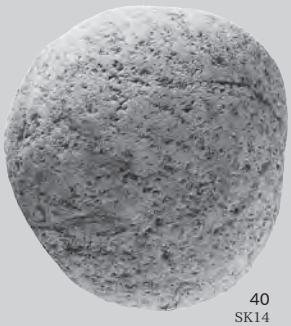

35
1K-9G23

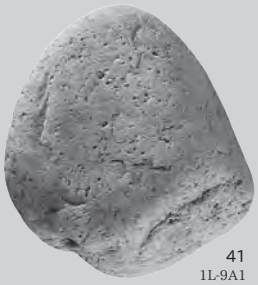
37
1K-9J11

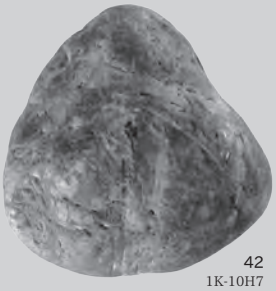
38
1K-9J19

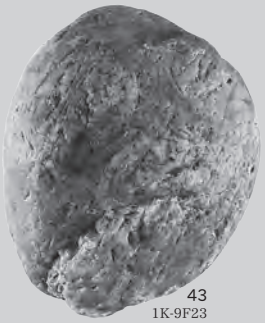
36
1K-10E24

39
1K-10H7

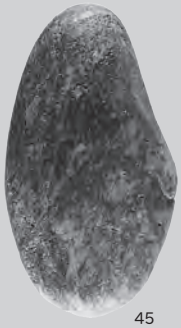

40
SK14


41
1L-9A1


42
1K-10H7


43
1K-9F23

44
1K-10I1


45
土器集中80

46
1K-10F18

47
1K-9J14

48
2K-1E4

49
1K-9J16

50
1K-10F9

51
1K-10I7

52
1K-10H5

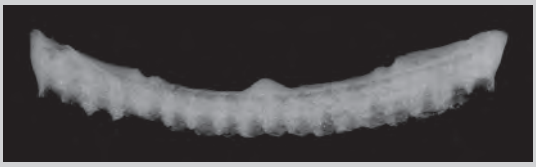
53
1K-10F3

54
SK19

全て〔1:3〕

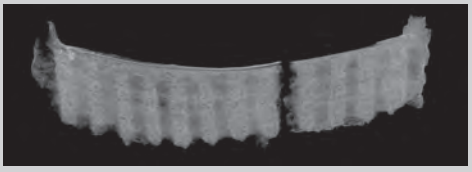
1
1K-10F9

（X線写真）

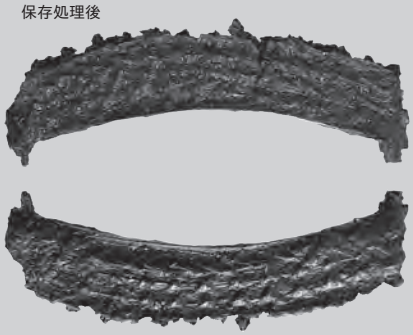


2
1K-9F13

（X線写真）



保存処理後



3
1K-10I3

1・2〔2:3〕
3〔1:3〕

4
1K-10F15

5
1K-10J7･8

全て〔1:3〕

6
1K-10I9

7
1K-9J19

8
1K-10H6

9
1K-10I3

10
1K-10H3

11
1K-10I1

全て〔1:3〕

12
1K-9I8

13
1K-10I7・8

全て〔1:3〕

14
Pit284

15
Pit322

16
Pit300

17
Pit294

全て〔1:5〕

18
Pit315

19
Pit296

20
Pit189

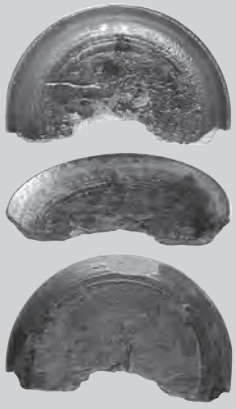
全て〔1:5〕

21
Pit186

22
Pit305

23
Pit314

24
Pit188



25
SK1001

21～24〔1:5〕
25〔1:3〕

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおさわやちきたいせき　だいさんじちょうさ
書　　名	大沢谷内北遺跡　第３次調査
副 書 名	（仮称）国道 403 号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内北遺跡第3次発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編 著 者 名	前山精明・伊比博和・折井　敦・パリノ･サーヴェイ株式会社・木村勝彦・法位光輝・荒川隆史
編 集 機 関	新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター
所 在 地	〒950-3101　新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地　TEL 025-255-2006
発 行 年 月 日	西暦　2010 年3月 26 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおさわやちきたいせき 大沢谷内北遺跡	にいがたけんにいがたし 新潟県新潟市 あきはくよこがわはま 秋葉区横川浜 88 番 1 ほか	15105	358	37° 44′ 36″	139° 04′ 54″	20070608 ～ 20071228	3,038.9	国道 403 号小須戸田上バイパス整備工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大沢谷内北遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期	土坑　239 基 焼土遺構　3 基 土器集中　6 基 杭　30 本	縄文土器・石器・ 木製品・漆器	櫂状木製品 竪櫛
		中世	土坑　4 基 井戸　2 基 杭　4 本		

要　　約

大沢谷内北遺跡は、新津丘陵の山裾から西約1km の沖積地にある。地表面の標高は 3.3mである。遺跡は近世まで存在した「大日潟」の潟底に埋没し、潟底堆積物の直下に中世の上層遺跡、下部に堆積する粘土～シルト層に縄文時代晩期の下層遺跡が形成されていた。遺跡形成当時の地形は北東に向かって緩やかに傾斜し、下層遺跡上面の標高は 2.6m～ 1.9mを測る。発掘区の北東部には水域が広がり、ハンノキなどの湿地林が周辺に存在したと推定される。遺跡の中心は下層にある。所属時期は晩期中葉後半の短期間に限定される。遺構は土坑・焼土・土器集中・杭列からなり、多くは 20m ほどの幅をもって発掘区を横断するように分布する。遺構の分布域には 150 個体ほどの土器が廃棄されていた。大多数を占めるのは粗製深鉢で、これに伴い少量の石器・木製品・搬入礫・食料残渣が出土した。特筆すべき遺物に竪櫛と櫂がある。生産的な要素が希薄なこの遺跡の性格を考えるうえで重要な遺物であり、内水面交通や交易活動の実態に迫りうる資料となる可能性がある。

大沢谷内北遺跡　第３次調査
（仮称）国道 403 号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内北遺跡第3次発掘調査報告書

2010 年　3 月 15 日印刷
2010 年　3 月 26 日発行

編　　集　新潟市埋蔵文化財センター
新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地
〒950-3101　TEL 025(255)2006
発　　行　新潟市教育委員会
新潟県新潟市中央区学校町通一番町 602 番地1
〒951-8550　TEL 025(228)1000
印　　刷　株式会社　第一印刷所
新潟県新潟市中央区和合町2丁目4番 18 号
〒950-8724　TEL 025(285)7161